
愛を教えて

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を教えて

【Nコード】

N1881I

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

“愛を知らない”卓巳と“愛を諦めた”万里子……偽りの結婚を真実にするまでの切ないラブストーリー。国内最大コンツェルンの社長である卓巳は、已むに已まれぬ事情で結婚することになった。そしてその相手に、ただ一度会っただけの万里子を選ぶ。卓巳は、父親思いの万里子の優しさや弱味につけ込み、結婚を強要するが……。本編完結済。

ノサイトでもご覧いただけます。（第8章ラブストームの回が若干違います。こちらにはない番外編もあります）

第一章 婚約 (1) 標的

都心……自社ビルの最上階にオフィスがあつた。窓からは首都東京が一望できる。最高の景観、最高の地位、望むものは何でも手に入れられる。そんな場所に、藤原卓巳ふじわらたくみは立っていた。

「判った……現場での判断は君に任せる」

卓巳はそう言つて携帯を切る。離れた位置から窓に映るのは黒い影だけだ。彼は窓際に立ち、眠らない街の灯りを黒い瞳に映した。しかし、その光は卓巳の心まで照らしてはくれない。少しネクタイを緩めると、彼は無表情に秘書の宗行臣そうぎゆきおみを振り返つた。

「調査は終わったのか？」

「はい。概ね完了しました。時間がございませんでしたので、未確認の部分もあります」

「かまわん、報告しろ」

「はい。千早万里子ちばり二十二歳、聖マリア女子大学四回生、父親は千早物産社長で」

間もなく三十歳の卓巳より、秘書の宗は四歳年上だ。しかし、同じ年齢か逆に見られることが多い。宗は優秀な男だ。言われたことを百パーセント遂行する。だが、それ以上のことが出来ない欠点もあつた。早い話が融通が利かないのだ。元々目標としていた官僚のほうで、彼には似合ひだったのかも知れない。

卓巳はため息を一つ吐くと宗の言葉を遮つた。

「おい。時間は有効に使え。報告は私の知らないことだけにしてくれ」

「失礼致しました。千早物産は生き残りに必死ですが、傾いて

はいません。千早社長は人望も厚く、ステイタスや目先の利益で娘を売ることはしない人物だと思われます。娘の万里子も質素で地味な女性ですね。渡航歴を探っても、同行者は父親のみです。私生活でも羽目を外すことはなく、宝石やブランド品を買い漁る趣味もありません。調査中は見事なほど、大学と家の往復でした」

宗は報告書を読み上げながら軽く手を上げて見せた。

「お前がお手上げとは情けないな。無ければ作れ！ 銀行に手を回せば、傾けることは可能だろう。父一人子一人……孝行娘なら尚のこと、父の窮状を知れば黙って従うだろう。だが、もう一押しいるな」

「色仕掛けはどうですか？ 社長が、愛を囁いてベッドに連れ込めば、翌朝にはサインしますよ」

軽口を叩きながらにこやかに笑う。仕事では融通が利かないが、プライベートではかなりの遣り繰り上手だと聞いている。主に女性関係だが……卓巳には興味のない話であった。

「宗 君はそんなに暇なのか？」

デスクに置かれた万里子の写真に視線を落としながら……いよいよ卓巳は不愉快を露にする。宗は咳払いをして表情を引き締めた。

「いえ、真面目に報告します。千早万里子ですが、女は判りませんね。見るからに清純無垢な処女に見えますが……彼女は四年前、高校三年生の秋に千葉市内の産婦人科に二〜三度通院しています。病院の看護婦に握らせたところ、妊娠中絶の手術を受けていたことが判りました。カルテは無理でしたが、中絶同意書のコピーを入手致しました」

その報告に、一瞬、卓巳の表情が曇った。それは不思議なことに、宗の目には絶望とも安堵とも映る。

卓巳は、新たに手にした報告書に目を通しながら、

「この男が相手か？ 何者だ」

「香田俊介、千早家で働く家政婦、香田忍の息子です」

「家政婦の息子だと！？ 何でそんな男と……」

「俊介は大学を出るまで、母と一緒に千早家に住み込んでいたよう
です。ミッシヨン系女子校育ちの彼女には、数少ない身近な男性だ
ったのではないでしょうか？ しかし、俊介はその年の三月に結婚
しています。中絶の時期から、夏以降に関係があったとすれば、当
然不倫の関係ですね。俊介は中学教師ですから、そのことが公にな
れば免職でしょう。それと、父親は中絶に事実を知らないようです。
その辺りを突けば、クビを縦に振るのでは？」

「こんな切り札があるなら早く言え、と思いつつ。卓巳は、妙に胸
がざわめくのを抑えきれない。」

「そうだな。ところで、二人の関係は続いているのか？」

「それは大きな問題だった。事と次第によっては、卓巳の計画も変
更せざるを得ない。」

「いえ。現在、万里子の周辺に男の影は見当たりません。よほど上
手く立ち回れば別ですが」

「きっぱりとした宗の返答に、卓巳は深く息を吐く。しかし、次に
彼の胸に込み上げてきたものは、万里子に対する憤りであった。」

「お嬢様のひと夏のアバンチュール、か……結果がコレとはお粗末
な話だ。愚かな女の典型だな。だが、そういった女のほうが扱いや
すい。取引先の銀行に手を回せ。それで承知しない時は、この一
件がジョーカーになるな。よし、話を進める。お前も上手くやって
くれ」

「はい。通常業務とは些か毛色の変わった仕事ですが……」

「卓巳の命令で、ライバル企業に裏工作を仕掛けることはある。だ
が、何の利害関係もない女性を……言い方は悪いが、畏に嵌めるの
だ。良識なり良心なり持ち合わせている人間であれば、胸を痛めて
当然であろう。」

「茶番は承知だ。だが、しくじれば全て失う。祖母上の考えは判らんが、これ以上の裏はないだろう。私は、千早万里子を妻にする」

株式会社F総合企画。そんなプレートがドアの外に光っていた。

実際の業務は少ないため、社員は少数だ。しかも今は深夜〇時である。この時間になれば、残っているのは社長である卓巳と個人秘書の宗、二人だけであった。

だが、卓巳の肩書きはそれだけではない。今や、国内最大規模のコンツェルン、藤原グループの若き総帥。今の彼に敵はいない

“今の”彼には、である。

卓巳は、コンクリートジャングルの片隅に身を潜める獲物を見つけ、密かに射程に捕えたのであった。

第一章 婚約 (1) 標的(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

ロマンスのような、そうでないような…… (苦笑)

最初に書いた恋愛小説なので、あちこち穴はあるかも知れませんが
(汗)

修正しつつ、進めたいと思います。

ラブエッチまでは少々遠いですが、よろしければお付き合いください
ませm)——(m

第一章 婚約 (2) 万里子

渋谷区にある聖マリア女子大学、千早万里子は同じ系列の女学院
初等科から在籍している。教育学科の初等教育を専攻し、幼稚園・
小学校の教諭となるべく勉強中であつた。

「だから、折角のチャンスなのよ。卒業まで半年もないのに、万里
子さんはこのまま学生生活が終わっても後悔しないの？」

「それに、これはただの遊びじゃないの。相手は未来のお医者さま
よ。何処に出会いが転がっているか判らないわ。万里子さんも、一
度くらいは出てみてもいいんじゃないかしら？」

聖マリア女子大学は世間一般にお嬢様大学と言われている。

実際のところは中産階級のご令嬢方がほとんどである。当たり前
だが、「ごきげんよう」と挨拶するような“ご学友”は学内では見
かけない。

父親はある程度の資産家で中小企業の社長、母方は旧家に繋がる
万里子のような血統の持ち主は、初等・中等科から通うごく一
部であつた。

だが女子大のブランドイメージはかなり上位ランクに属している。
合コンとなると人気が高く、当然のように、多くの学生が将来性の
ある恋人探しに精を出していた。

「ええ、でも今日は本当に都合が悪くて……ごめんなさい、皆さん
で行ってらして」

数人の友人に囲まれ、控え目に話す女性が万里子だ。柔らかな髪
が風に靡き、背中の中ほどで揺れていた。染めているわけでもない
のに生まれつき色が薄い。そのせいか射し込む秋の木漏れ日に、万
里子の頭上はティアラをつけたように煌いた。

ただ……九月の終わり、周囲のほとんどがまだ半袖である。にも拘らず、万里子はクリーム色の長袖ブラウスを着ていた。第一ボタンまでキツチリ留め、襟首のリボンを左右均等に結び、長さまで揃えている。この辺りは、性格の几帳面さを窺わせた。

万里子自身は、友人と集まるのは嫌いではない。これと言ってクラブ活動はしていないが、誘われたら可能な限り出席する。でも、合コンとなると……必ず男子がいて、彼らの目的が判らないほど少女ではない。万里子はいつも、アレコレと理由をつけては断わっているのであった。

「でも、やっと国家試験も終わったところでしょう？ 少しくらい自由になさっても、お父様もお叱りにはならないんじゃないかしら」

万里子は四歳のときに母を亡くしていた。

第二子妊娠中に前置胎盤で大量出血、そのままお腹の子供とともに還らぬ人となったのだ。その後、父は再婚もせず、男手ひとつで万里子を育ててくれた。

そのため、万里子も誰より父を優先する。友人の間では、万里子の“ファザコン”はかなり有名なのだ。

「いえ、父のことではなく、十一月には小学校の教員採用試験もありますので……」

小さい声で付け足すように万里子は言った。

万里子の目標は幼稚園教諭のほうで、すでに試験は終わっており結果待ちである。多くの幼稚園にボランティアに出向き経験を重ねたが、公立はかなり厳しいだろう。それに……。

「何も万里子さんがムキになって仕事を探されなくても……いずれお父様の御眼鏡おめがねに適った方を、お婿さんに迎えられますでしょう？」
こんな風に思われている。

私立は縁故採用が多い。推薦を頼みたくても、一人娘の万里子な

らすぐに結婚して辞めるに決まっている」と。

確かに、こうして万里子をコンパに誘う友人も、採用試験などは最初から諦めてるといふ。親が開業医という友人などは、実家の医院を事務で手伝いながら『聖マリア女子大卒』の肩書きで医者を狙うと宣言していた。今回の合コンも、相手は有名大学の医学部オンリーである。

だが、万里子には全く興味のないことだった。

大学を卒業したら生涯を通して心の糧となるべき仕事に就かなければならない。万里子は、かつて自分が犯した罪の償いに、幼児・初等教育に一生を捧げるつもりでいた。

「ねえ、あの方どこかで見ただことがあるんだけど……ご存知？」

「さあ……誰かの恋人じゃないの？」

相変わらず頑なな万里子の態度に、誘うのを諦めたようだ。彼女の意識は既に別のことに移っていた。

「ねえ、ちよつと万里子さん……こちらを見てらっしゃる方、お知り合いかしら？」

友人の質問に万里子も視線をそっちに向ける。

正門を出て直ぐの道路脇であった。普段からこの場所は、誰かの恋人や家族が待っていることが多い。そこに、どうみてもオーダーメイドのスーツに身を固め、最高級のBMWにもたれ掛かり、人待ち風情の男性がいた。

その男性は、確かに万里子たちの方向を見ている。たまに、友人の紹介を自称する男子学生が万里子らに話しかけてくることはあったが……。

端正な顔立ちに社会的地位を漂わせる身のこなし、およそ、エリート或いはホワイトカラーと呼ばれる立場の人間だろうと、万里子

は思った。

その瞬間、男性の射る様な眼差しが万里子を捉えた。

そのまま数十秒が経過する。だが、視線を逸らせようとはしない。そして、あるうことか、一歩ずつゆっくり……無言で万里子に近づいて来るではないか。

万里子は男性の瞳を凝視したまま棒立ちになっていた。

「千早物産のご令嬢、千早万里子さんですね」

それは万里子が想像したより硬質な声であった。女に媚びる様な感じはまるでなく、あくまで事務的だ。

「はい、そうですが……あの、あなたは？」

「私は……東西銀行頭取の友人で……こういうものです」

渡された名刺には『弁護士 藤原卓巳』と書かれていた。

第一章 婚約 (3) 予感

卓巳が嘘をついてるわけではない。

彼は六年前に司法修習を済ませ、弁護士会にも登録されたれつきとした弁護士だ。ただ、弁護士として働いた経験は無い。引き出しの隅に眠っていたバッジを引っ張り出し、数枚の名刺を刷らせ……。

「ストレートに呼びつけて条件を突きつければよろしいのでは？」

或いは、社長の代わりに私が話し合いを済ませても構いませんが」

秘書の宗は、妙な小細工をしようとする卓巳を見て、不思議そうに首を捻っていた。

だが、卓巳は何としても、もう一度直接会っておきたかったのだ。あからさまに芝居と判る女を、祖母の前に連れて行くわけには行かない。旧華族出身の祖母が気に入りそうな女……良血で教養の高い楚々とした女性に決まっている。その女性像を卓巳が思い描いた時、万里子の姿が浮かんだのであった。

しかし、妊娠中絶は卓巳にとつても予想外であった。いい取り引き材料にはなるだろうが、祖母や喧しい連中が知れば明らかにマイナスだ。

また、卓巳の初見が誤りであった可能性も捨てがたい。その場合は、計画そのものを中止する必要が出てくる。卓巳が素性を明らかにするのは、計画を続行すると決めてからで充分だと考えていた。

卓巳が万里子と出逢ったのは、半年近く前に一度きりである。正確には、卓巳が見掛けた、と言うだけのものだった。当然、言葉も交わしてはいない。

系列企業が所有する劇場の？^{レボ}落とし公演に卓巳が出席した時、その取引先の一社が千早物産であった。万里子は父親と共に招待され

ていたのだ。公演の後、場所を移して行われたパーティでも些細なトラブルから彼女に目を留めた。その時の万里子は、どう見ても不倫の挙げ句中絶するような女には……。

「あの……恐れ入りますが、弁護士先生がわたしに何か？」

万里子の不審そうな声に、卓巳の思考は一時中断した。

一番信用を得そうな肩書きなので、卓巳は“弁護士”を選んだ。だが、立ち居振る舞いがそれらしく見えてるかどうかは甚だ疑問だ。卓巳は咳払いをしながら、なるべく曖昧に話を進めた。

「突然伺いまして申し訳ありません。先ほども申し上げました東西銀行の渋江頭取から話を聞きまして……あらかじ予め、お嬢さんにもご確認頂きたいのでお迎えに上がりました」

「は？ それは……何のことでしょうか？」

「千早物産の経営状況と、あなたが今夜、頭取宅に招かれている理由です」

卓巳の言葉に、益々不安そうな顔をする万里子であった。

くくくくくくくくく

一時間後、万里子は千代田区にある一流ホテルの最上階レストランにいた。

そこはサロンと呼ばれる個室であった。窓からは迎賓館や明治神宮などが見渡せ、眺望は素晴らしいものだ。食事をしつつ、家族と共にゆったりとした時間を楽しめるなら、最高の場所であろう。

テーブルを挟んだ向かい側に、弁護士を名乗る不遜な態度の男性がいなければ。そして、目の前に置かれた書類が、万里子の父の窮状を告げるものでさえなければ……。

万里子は不必要なほど警戒心が強い。

卓巳が用意した肩書きや小道具では、父親のいない場所に万里子を引つ張り出すのは難しそうであった。そのため、卓巳が利用したのが、

「判りました。では、私の身分を渋谷頭取に証明していただきます」
そう言うなり、携帯電話で頭取と連絡を取ったのだ。「ご確認下さい」と携帯を差し出され、狐につままれたような顔で電話を受け取り、万里子は話した。

『お電話かわりました。千早と申しますが……』

『ああ、万里子くんだね。渋谷だ。今日は招待に応じてくれてありがとう。藤原氏は息子の大学の先輩でね、今でも仲良くして貰ってるんだ。身元は確かな方だよ。私が保証するから、彼の話聞いて貰えないか？ よろしく頼む』

万里子にすれば、渋谷頭取の声はよく知っている。家族ぐるみ付き合いで、今夜も父と一緒に、頭取の還暦祝いのパーティに呼ばれていた。それに、東西銀行は千早物産のメインバンクだ。『頼む』と言われては、無下にも断われず……。

万里子は卓巳の車の後部座席に乗り込もうとした。だが、卓巳は助手席のドアを開け乗るように促す。どうして、と思いつつも、黙って従う万里子であった。

そして、着いた先は一流とは言えホテルである。当然のように、万里子は警戒を高めた。

「申し訳ありませんが、どれほど重大なお話かは存じませんが、こういった建物のお部屋に同行するわけにはいきません。帰らせていただきます」

車から降りるなり万里子は踵を返す。しかし、卓巳は咄嗟にその

腕を掴んだ。

「ここまで付いて来ながら？」

思いがけず嘲笑を含んだ声に、万里子は驚いて腕を振り払い、卓巳を睨んだ。

「頭取が……若いあなたに敬称を付けておられました。ただの弁護士さんではないのだと思い、頭取の顔を立てようと思っただけです。そんな風に言われるのは心外です！」

「ああ、これは失礼」

卓巳から発する嘲りを帯びた気配は、一瞬で鳴りを潜める。

「ご案内するのは客室ではありません。最上階のレストランに個室を予約してあります。どうぞ」

言いながらベルボーイに指示を出すと、支配人が飛んで来る。あつという間に、エレベーターまで誘導され……万里子にノーという時間を与えないのであった。

更には、沈黙のエレベーターが最上階に到着し、扉が開いた瞬間……なんと従業員が整列し、一斉に「いらっしやいませ」と頭を下げたのだ。

社長令嬢とはいえ、千早物産は大企業と言うわけではない。当然だが、万里子もこんな経験は初めてだ。

卓巳に言った通り、頭取の言葉から特別なものを感じていた万里子だったが……。それでも、信用して付いて来るべきではなかったのかも知れない。そんな風に、思い始めていたのだった。

第一章 婚約 (4) 求婚

万里子は、目の前に並べられた書類に戸惑いを隠せずいた。

千早物産のここ数年の売上高や純資産のグラフ、おまけに貸借対照表や損益計算書など……。とくに本年度のものは、誰でも簡単に手に入るものではないだろう。

加えて、その中の幾つかの数字が公表してあるものとは違っていたのだが。経理には不案内で素人の万里子には、全く判らないものであった。

「あの……これは」

「これは渋江頭取から預かったものです。あなたにはお判り頂けないかも知れませんが、正直に申し上げて、お父上の会社は倒産の危機ということですよ」

確かに、東西銀行は千早物産のメインバンクだ。資金繰りも頼んでいると聞いていた。だが、新規投資などの計画はなかったはずである。経営状態に応じた範囲内で、例年通りの借り入れだと万里子は思っていた。

それに、いくら弁護士とはいえ、なぜ頭取が他人にこういった重要書類を見せたのか……。万里子の中で、卓巳に対する疑問が膨らんだ。

「お言葉ですが……わたしは父から、そんな話は聞いておりません」
「お嬢さんには話し難かったのでしょうか」

卓巳は万里子のほうを見ることもなく答える。

「父は個人の利益の追求より、社員のために、会社の存続を第一に考える人です。人材や設備に投資はしても、目先の利益のために、ハイリスクな新規事業に投資したりはしません」

万里子は事業計画書に目を通すと、それをスツと卓巳のほうに押

しやった。

一方、卓巳は目を細めつつ、万里子の怒りに満ちた視線を受け止めていた。そのまま無言で立ち上がり、窓際まで歩み寄る。舌打ちしたい表情を隠すためだったが……いかに鋭い万里子でも、卓巳の心情までは見抜けなかったようだ。

「お話がそれだけなら、わたしはこれで失礼致します」

「二ヶ月前、空木グループ副社長との縁談を断わられてますね
立ち上がるうとした万里子の動きが止まった。

「それが何か？」

「副社長は三十五歳で再婚……条件は悪いが、千早物産にとっての条件は、すこぶる良いものだったと聞いています」

縁談はあつた。だが、条件がなんであれ、万里子に受けるつもりなどない。それに、あの縁談は父のほうに「相手が悪い、早すぎる」と率先して断わった記憶がある。

「あれは……お話があつただけで、父も反対しておりました。それがいつたい」

「お父上のお人柄をご存知でしょう？ どれほどの窮地に立たされようと、あなたに頼まれるようなことはなさないはずだ。違いますか？」

万里子の返事を遮るように卓巳の声が被さつた。その言葉に、初めて万里子の心が揺れる。

卓巳はそれを素早く見抜き、

「百年に一度の不況と言われる現在 優良企業と呼ばれる会社がどれほど倒産しているか、お嬢さんは判っておられるのだろうか？」
万里子に芽生えた不安の火種を、卓巳は見事に煽り立てる。万里子は、再びストンと椅子に腰を下ろしてしまふ。

「今日のパーティ、渋江家で行われる頭取の還暦祝いですが……。
あなたを招いた見合いだと言うのは、知っておられますか？」

「それは……はい。聞いております。しかし、形式だけだと、父は
申しておりました」

万里子は即座に答える。渋江頭取には娘が二人、息子が一人いた。
娘二人はすでに結婚しており、合計三人の孫がいたはずだ。一人息
子の弘樹は現在二十六歳。国立大学を卒業して、今は地方の銀行に
勤めている。

その弘樹が、先日の万里子の縁談を聞き、慌てて名乗りを挙げた
のだと言う。「二人ともまだ若い。気が合うようなら婚約して、四
〜五年先に結婚を考えてはどうか」と頭取から打診されたのだった。
この話には、万里子の父も闇雲に反対とは言わなかった。だが、
娘を溺愛する父が、嫌がる万里子に無理強いするわけがない。

万里子の父が正式に断わった結果、形式だけでも、となった。後
日、“渋江家側から”断わられる予定である。万里子も、頭取や後
継者である弘樹の面子を潰すつもりは毛頭ない。

「残念ながら、今夜の見合いは形式ではありません。あなたが結婚
を承諾しなければ、あなたのお父上の会社はたちまち危うくなる」
「そんなっ！ 頭取はそんな方ではありません。ご息子の弘樹さん
も……子供の頃から存じております。藤原さんと言われましたね。
あなたのほうが誤解なさっております」

むきになつて否定する万里子をやんわりと宥めつつ、卓巳は話を
本題へと進めた。

「いえ、誤解してるのはあなたです。見合いの相手は弘樹君ではな
い」

「え？ あの……」

卓巳は一呼吸置くと、万里子にとって、とんでもない内容の台詞
を一気に言い放つ。

「相手はこの僕です。僕があなたを指名しました。あなたには僕の妻になってももらいます。断わった場合、千早物産は明日には倒産。自宅も差し押さえられ、あなたとお父上は住む家もなくなるでしょう」

それは、あまりにも突然で意味不明な　プロポーズであった。

第一章 婚約 (5) 運命

「……仰る意味が判りません……」
卓巳にしたら万里子と会うのは二度目だ。だが、万里子にとっては違う。

初対面の相手になんという言い草であろう……最初は呆気に取られた万里子であったが、次第に怒りがこみ上げてくる。

「随分、理不尽は仰りようですね。頭取が身分を保証された方ですから、きつと弁護士より立派な肩書きをお持ちなんでしょう。ですが、父の会社の経営状態を述べた上で、結婚を口にされるなんて……。どんな条件でもお断りします。わたしの心は売り物ではありません！」

今度こそ席を立つと、「失礼します」と言い添えて、万里子は部屋を出ようとした。しかし、その背中に投げつけられたのは更に辛辣な言葉であった。

「別に、君の心を買おうなどと思ってはいない。僕が欲しいのは身体だ」

「!?!」

口調が微妙に変化した。内容に似つかわしく横柄さが漂い始めたと言つべきか。だが、問題はその内容である。万里子は当然のように誤解し、瞬く間に耳まで赤く染めた。

「ああ、失礼。身体というより、名前だろうか？ 僕は、千早万里子を妻に得たいと思っている。きわめて形式的な“愛する妻”に」
時折、言葉の端々に万里子を見下すようなニュアンスが混じる。それが、どれほどルックスが洗練されていても、万里子が卓巳を信用する気になれない一因であった。

「尚更判りません。これは何かの冗談ですか？ それとも、わたし

を試してるんですか？」

万里子の言葉に卓巳は内ポケットから煙草を取り出した。余程我慢していたのだろうか？ 万里子がそう思ったのは、苛々する仕草で口に啞えたからだ。だがライターを取り出し火をつける寸前

「いいかな？」

「……どうぞ」

妙なところで律儀な人だ。万里子は変な風に関心したのだった。

卓巳のおかしな行動はある意味、万里子のせいでもある。

この年齢の女性には珍しく、万里子は注意力が高い。わざわざこんな場所に連れてきたのも、卓巳の作戦の一つであった。いや、正確に言えば、宗が立てた作戦ではあったが。浮き足立たせた状態で捏造した資料を見せ、立て続けに衝撃を与え、精神的に追い込む。

ところが、だ。万里子が動揺を見せたのは一瞬だった。すぐに怒りを抑え、冷静さを取り戻している。これではなし崩しに話を進めることは不可能だろう。

滅多に吸わない煙草に火をつけたのは、卓巳にとって時間稼ぎに過ぎない。

この時、万里子はなんとなく出て行くきっかけを外してしまう。

そして、煙草を手にした卓巳の視線に気付いた。しかし、テーブルの上に灰皿はない。

どうするのだろうか、と見つめる万里子の目の前で、卓巳が取った行動は最悪だった。なんと、水の入ったグラスに煙草を投げ入れたのである。あまりの無作法に、万里子は先ほどの感心を取り消したほどだ。

「判らないはずはない。君は僕の妻になる。そして僕は父上の会社に惜しみなく融資をする。表面上は、愛する妻の実家のため、

に。僕は、愛する女性と幸せな結婚をしなければならない。しかも
早急に。余計な詮索をせず、君は妻を演じればいい。簡単なことだ
らう?」

万里子は首を左右に振り、わざと冷たく言った。

「残念ながらお芝居などしたことがあります。芸能プロダクシヨ
ンに行かれてはどうですか? もっと少ない金額で、見事に演じて
くれる女性がたくさんいらっしやると思いますよ」

「渋谷頭取から千早物産の窮状を聞き、役に立てればと思っただけ
だ。女優を雇うわけにはいかない。なぜなら、僕と君以外の人間は
この結婚が茶番だとは知らない。お父上にも、僕らは今夜のパーテ
ィで……初めて逢い、急速に惹かれ合って来月にも結婚する。それ
がシナリオなんだ。お父上はどれほど困っても、自分の口から君に
頼むことは無いだろう。もしこの条件を知れば……彼は会社を倒産
させても、君を守るはずだ」

卓巳の口調に、万里子もようやく彼が本気であることを悟る。

「お話は判りました。でも、私は女優じゃありません。父や周囲の
人たちを騙すことなんて出来ないと思います。ましてや、愛しても
いない人に愛してるなんて」

「それは同じだ。事情があって、どうしても結婚しなければならな
いが……。愛する女性以外は抱きたくない」

「なら、そうなさったらよろしいのに……」

万里子の言葉に微かに卓巳の瞳が曇った。

「だから事情があると言っている。結婚するだけなら、こんな面倒
な手段を取ったりはしない。本当の妻が欲しいわけではないんだ。
僕の言う意味は判るな?」

「……」

万里子はきよとんとしたままだ。卓巳は苦笑しつつ……。

「僕は君に指一本触れない。いや、体面上、人前では肩や腰に手を

やるくらいはするが……ベッドは別だ。期間は約二年。二年経てば君は自由だ」

身体云々と言われた時は直ぐに反応を見せた万里子だったが……。どうやら、夫婦生活までは思い浮かばなかったらしい。

「そ、それは……そんなことは」

「君は藤原姓となり戸籍は汚れる。その代償として、数十億単位の金を無担保で差し出すのだから、充分だろう。だが、父親が疑えば融資を断わる可能性もある。君にとっても、芝居は必須になるはずだ」

万里子は一旦目を閉じ、深呼吸する。そして、正面から卓巳を見据え、最大の疑問を投げかけたのだ。

「あなたは弁護士ではありませんね。あなたは誰ですか？ 何者なの？」

「弁護士は嘘ではない。このバッジも本物だ。だが このホテルをはじめ藤原グループを統括する、F総合企画の社長でもある」

それはあまりに巨大なグループ名であった。万里子はろくな返事も出来ず、その場に立ち尽くした。

これは運命の出逢いだった。

それぞれに縛られた過去の鎖から、お互いを解き放つための……。しかし、それに気付くには、まだしばらくの時間が必要だったのである。

第一章 婚約 (6) 決心

「お久しぶりです。おじさま……昼間は失礼致しました」

東西銀行の渋江頭取宅は横浜市内にある。万里子は、父親と共に世田谷区の自宅から車で来ていた。

基本的に万里子はパーティの類は苦手だ。スカートを穿き、ある程度肌を見せなければならぬのが苦痛なのである。だが、今夜はそんなことを気にしている余裕はない。

万里子は別れ際に卓巳が言ったことを思い出していた。

「今夜は記念すべき出逢いになる。それまでに、覚悟を決めておくことだ」

卓巳の目は 拒否は認めない、そう言っていた。

藤原グループを統括する会社の社長。万里子は当初、その言葉を信用してはいなかった。

グループの総売上は、開発途上国の国家予算を遥かに上回る。そんな巨大コンツェルンのトップが、見るからに三十代前半の男性だと誰が思うだろう。

しかし、自宅に戻りパソコンを開き、ネットに繋いだ直後……万里子の顔は一瞬で青褪めた。

藤原卓巳はまだ二十九歳。六年前に先代社長・藤原高徳ふじわら たかのりが亡くなり、孫の卓巳が跡を継いだ。当時司法修習中と書いてあったので、弁護士かための肩書きに嘘はないようだ。そのことに、なぜか万里子はホツとした。

先代はかなりワンマンで強引な経営者だったようだ。ネットの記事には、要を失い崩壊寸前のグループを、弱冠二十三歳の卓巳が見事に立て直した とある。祖父譲りのカリスマ性を持つ“冷静・

冷酷・冷酷”な『氷のプリンス』と卓巳を呼び、祖父のコピーと皮肉で括っていた。どうやら、マスコミには嫌われてるらしい。

とんでもない男と関わってしまった。それが万里子の正直な感想である。

何らかの事情で結婚を急ぐ彼は、頭取経由で千早物産の窮状を知ったのだ。卓巳は渡りに舟と、万里子の白羽の矢を立てたのであるう。

父の前で昼間のことを口には出来ない。

親しげに話しかけてくる頭取の息子・弘樹に、万里子は笑顔で答えながら……。パーティの主演に、次々と挨拶に赴くお客たちをジツと見つめていた。頭取が一人になった時がチャンスだ。もちろん、父に気付かれぬように、ソツと近づかねばならない。

この時、まだ渋谷邸に卓巳の姿はなかった。

還暦の祝いとはいえ、誕生日は年明けである。渋谷は来年の三月で社長を退き、そのまま名誉職の会長にスライドすることが決まっていた。経済界に持つコネクションを、自分の力が及ぶうちに、息子に継がせたいと必死なのだ。そんな噂は万里子の耳にまで届いていた。

「や、やあ。万里子くん。あれ、一人かい？ 珍しいね」

恰幅の良い頭取は、普段は鷹揚に構え、見るからにどっしりとした人物だ。生粋の銀行家であるせいか、些か計算高いのが玉に瑕だと父は言うが……。それ以外は、かなり信頼しているようである。万里子にしても、渋谷家との間で悪い思い出などなかった。

その頭取だが、今夜は様子がおかしい。まるで、万里子から逃げようとしているみたいだ。

「おじさま……例の方から伺いました。父が新規事業を計画していて、資金繰りに困っているというのは本当ですか？」

「うん、まあ、そうだな。私の口から詳しいことは言えんのだが……。とにかく、万里子くん。藤原氏に任せておけばいい。彼なら決して君らを悪いようにはせんよ」

頭取は、万里子と一度も視線を合わそうとしない。

「待って下さい。そんな……任せるなんて。あの方がわたしに何を仰ったか、おじさまはご存知なのですか？」

「………………。まあ、あれだ。息子とは縁がなかったんだ。いやあ、良かったじゃないか。玉の輿と言う奴だよ。藤原家はうちなんぞとは桁外れだ。悪いことは言わん……千早社長のためにも、いいね」

万里子は、本当は弘樹との縁談を断わったことを、頭取は酷く怒っているのではないかと考えていた。そのせいでいつも通りの融資すら断わった……。もしそうなら、頭取に土下座をしてでもお願いするつもりで、万里子は来ていたのだ。

だが……頭取の表情は万里子の思惑とは逆であった。どちらかと言えば、心苦しそうな顔をしている。

ひよっとすれば、卓巳に万里子の存在を教えたのは頭取ではないか、とすら思い始めていた。

万里子は肩を落としてフロアに戻った。父は普段と変わらぬ笑顔で、東西銀行の副頭取と話している。とても、会社が窮地にあるとは思えない穏やかな顔だ。

もしそれが万里子のためであるなら、自分に何が出来るか……そんなことを考え出していた。

二年、たった二年だとあの男は言った。

二年我慢すれば、でも、果たしてそんなことが出来るだろうか、と万里子は悩む。それに卓巳は、ベッドは別、万里子には一切触れ

ないと言っていたが……。それが守られる保証など無いも同じだ。入籍を済ませ戸籍上の妻となれば、夫婦生活はあつて当然であろう。

面差しに影を落とし廊下を歩く万里子に、トンと人が当たった。

「おっと、失礼」

すれ違い様、見知らぬ男性と肩が触れただけである。だが 万里子は咄嗟に身を竦め、廊下の端まで飛び退いた。そして壁に張り付き、剥き出しの肘から下を、震える指で抱え込む。万里子はそのまま逃げるようにテラスを抜け、中庭に飛び出したのだった。

（やっぱり無理よ。絶対に無理だわ）

万里子の胸にその言葉がグルグル回った。

もし父の会社が倒産した時は、大学を辞めて働こう。人生は長い、教師になる機会はこの先もきつとある。家を手放すことになっても、父と一緒に頑張れるはずだ。

偽装結婚の話は断ろう。そう心に決めた時、卓巳が万里子の視界に入ったのだった。

第一章 婚約 (7) 切り札

卓巳は邸内から降り注ぐライトを背に、逆光の中佇んでいた。昼間に比べ、上品かつ華やかな装いだ。下ろしていた前髪も、きつちり後ろに流している。

卓巳の隣には弘樹も立っていた。彼もエリートで出世頭のはずだが、そんな弘樹が霞むほどの威厳を卓巳は漂わせている。万里子の脳裏にネットで見かけた『氷のプリンス』の異名が思い浮かんだ。

少しずつ、卓巳は万里子に近づいた。昼間と違い、今は落ち着いた気持ちで卓巳を見ていた。そして不意に気付いたのだ。卓巳の瞳はとても綺麗だ、と。金で妻を買おうとするような男には到底見えない。万里子がボランテアをしている幼稚園の園児たちと同じくらい透き通っている。それが、万里子には不思議でならず……。

「……ちゃん……マリちゃん？」

「え？ あ、あの」

弘樹に大きな声で呼ばれるまで、万里子は卓巳の姿に見惚れていたらしい。

「はじめまして。千早万里子さんですね。僕の顔に何か付いてますか？」

「い、いえ。あの……は、はじめまして」

卓巳は万里子に手を差し出し、昼間の話が嘘のように優しく微笑んだ。

キツパリとした態度に出るつもりが、なんとさえばいいのか

万里子が出鼻を挫かれた形だ。

「大学時代の先輩なんだ。藤原卓巳さんと仰ってね、あの藤原グループの総帥なんだよ。マリちゃんも名前くらいは聞いたことがあるだろ？」

「え、ええ、それは……」

「弘樹君の大学時代の友人で、藤原といいます。実は……僕にとっては“はじめまして”じゃないんですよ」

突然何を言い出すつもりだろう？ 万里子には卓巳の真意が

判らず、何も答えられない。

「そうそう、春に日比谷のほうで劇場のオープニングセレモニーがあったんだって？ 藤原先輩はそのパーティで君に会ったそうだよ。父親の頭取と違って、おそらく弘樹は何も知らないであろう。屈託ない笑顔で卓巳の代わりに説明してくれる。」

だが、万里子には何の記憶もないことであった。それが事実なら、どうして卓巳が昼間に話さなかったのか判らない。

「わたしには……ちょっと」

「もちろん僕のご存知ではないでしょう。挨拶をする前に、スカートが汚れて、あなたは帰ってしまったわね」

「え？ 見てらしたんですか？」

？ 落とし公演終了後のパーティは盛大だった。招待客が十人あまりという渋江邸のパーティとは訳が違う。数百人が集う中、パーティが始まって直ぐ、ウエイトレスがよるけて、トレイごとシャンパングラスを落としたのだ。

それは万里子を中心に、近くにいた数人の客にも掛かり 立腹して大騒ぎする女性客まで出る始末だった。確かに、これから言う時に衣装を汚されては怒りたくもなるだろう。

ウエイトレスは歳も若く、見るからに経験の浅い学生アルバイトに思えた。

そんな中、万里子は怒るでもなく、逆にオタオタする会場係に指示して、片付けまで手伝ったのである。万里子は終始、自分と歳の変わらないウエイトレスを気遣い、笑顔を絶やさなかった。

卓巳はその一部始終を見ていた。

とくに何か感慨があつた訳ではない。ただ……目が離せなかつただけなのだ。珍しいものを見たから、半年経つても忘れられなかつた。本当にそれだけだと、本人は強く思っている。秘書の宗などは、万里子に拘る卓巳の本心を訝^{いぶか}しんではいるが……。あえてボスを怒らせる必要はない、と沈黙を守っていた。

だが万里子にすれば、あのウエイトレスには怒るところか感謝すらしていた。

なぜなら、ウエイトレスがシャンパンを掛けてくれたおかげで、さつさと家に帰れたのだから……。シルクのドレスは一枚台無しになつたが、まさに不幸中の幸いというものである。

「少しあちらで話ませんか？」

卓巳はかるうじて光が射し込む程度の、ウッドデッキに置かれた木製のベンチを指差した。

「……はい」

一瞬迷つた万里子だが、返事を伝えなくては……そう思ったのである。

この時、弘樹はようやく卓巳が万里子を攫うつもりであることに気がついた。弘樹は婚約の申し込みが既に断わられていることも、渋江頭取と卓巳の間で交わされた密約も知らない。卓巳にはそれとなく「将来を考えている女性」であることを話し、万里子を紹介したつもりだったが……。

引き止めようとした瞬間、卓巳の視線が弘樹を捉えた。

二人の年齢差は僅か三歳。しかし、年齢以上に卓巳には遠く及ばないことを弘樹は数秒で思い知る。彼は無言で身を引いたのだった。

くくくくくくく

「これで二人つきりだ……返事を聞かせて貰おうか」

途端に口調が変わる。万里子は呆れるのを通り越して感心していた。大企業のトップともなれば、これくらいの芝居は当然なのだろう。改めて、やはり住む世界が違つと万里子は思った。

「すみません。やはり無理です。帰つて父と相談して……最悪の場合、家売り、私は大学を辞めて働きます。父も判つてくれると信じています」

万里子は卓巳の瞳を見つめてキツパリと言い切る。あまりの潔さに卓巳も言葉を失つた。

「それでは、失礼致します」

すぐにベンチから立ち上がり、万里子は頭を下げてその場から立ち去ろうとした。

万里子を見つめる卓巳の目に不思議な光が揺らめく。だが、それは一瞬で消え去ってしまう。

卓巳が目を閉じ再び開いた時、万里子が見惚れた透明な煌きは消え失せた。代わつて浮かんだのは 煮え滾るたぎような怒りと憎悪。

そして……ウッドデッキから庭に下りようとする万里子に、信じられない言葉を投げつけたのだ。

「それは残念だ。お父上もさぞかし嘆かれるだろう……娘が既に男を知り、子供まで墮ろしていると知れば」

第一章 婚約 (8) 脅迫

万里子は驚愕の表情で卓巳を見つめていた。

「な、何のことを仰っているのか……わ、判りません」

万里子の動揺は明らかだ。声は震え、目は泳ぎ、顔面は蒼白である。これでは、肯定しているのも同然だ。

そんな万里子に向かって、卓巳は容赦なく言い募った。

「忘れたのなら思い出させてやろう。君は高校生でありながら男に足を開いたんだ。その結果、妊娠した。だが君は、体内に授かった命を 我が子を殺した。渋谷頭取は君のことを褒めていたよ、今時珍しく清純な娘だ、と。それに、弘樹は君を天使のようだと言っていた。 とんだ墮天使だな」

それはあまりに辛辣であった。卓巳は女性が傷つく言葉を選び、万里子にぶつけたのだ。血の気が失せていく万里子の顔を見ながら、卓巳は宗の調査に手違いがなかったことを確信する。

(結局、彼女もこの程度だ。相手の男にも従順な顔で媚びたのだから。一時の快樂に身を委ね、子供など平気で殺す。それが女だ)

卓巳の胸に、長い時間燻り続けた燠火あきびがあった。万里子に対する感情が、それに風を吹き込み、次第に炎が立ち始める。

「僕がなぜ君を選んだのか、教えてやろうか？ 君がふしだらで汚れた女だからだ。僕は結婚する気はないし、子供を持つ気もない。だが、弘樹が言うような天使が隣で寝ていれば……過ちを犯す可能性もある」

俯き、頂垂つくだれたままの万里子を、更に苛烈な言葉で卓巳は追い詰める。

「だが僕は君の本性を知っている。汚い女には触れたくない。僕が君を抱くことは、あり得ないんだ。だから君を妻にする。それに君

は演技派だ。頭取や弘樹だけでなく父親まで騙し、無垢なフリを続けているんだからな」

卓巳の台詞は苛虐かきやくに満ちていた。とても結婚を申し込んだ相手に話す言葉ではない。万里子は精神的に立ち直る時間を与えられず、侮蔑と嘲笑の嵐に翻弄された。

卓巳は、獲物を自分のテリトリーに少しずつ追い込んだ。そして首に縄を掛け、一気に引き絞る。万里子は反論すら出来ず、息も絶え絶えであった。

「君に断る自由はない。答えはイエスだ」

「……」

卓巳の決め付けに、万里子は虚ろな瞳のまま首を縦に振った。

それを見届け、万里子の横をすり抜けるように卓巳はウッドデッキから下りる。

「ああ、そうだ。帰りの挨拶の時、僕は君に明日のデートを申し込む。君はそれを受ければいい。続きは明日だ」

この時の卓巳には、万里子の全身に走った緊張など気付くはずもなく……。生け捕った獲物に満足しながら、パーティで華やぐリビングに戻って行ったのだった。

夏の名残を思わせる風が、ワンピースの裾を揺らした。卓巳はもう少しその場において、万里子の頬を伝う涙を見るべきだったのかも知れない。

くくくくくくくく

渋江頭取が散会の挨拶を終え、それぞれ引き上げ始める。

万里子は玄関口で待つ父の元に、ゆっくり歩いて行った。化粧は直したが、手の震えは治まらない。そのせいで、万里子は何度も口紅を塗り直したのだった。

「今日は父のために来てくれてありがとう。久しぶりに会えて嬉しかったよ。それで……おじさんから話を聞いてると思うんだけど……」
弘樹は諦め切れないようだ。果敢に万里子に話を切り出すが……。

「万里子さん。明日のご予定は？ 大学に行かれるのですか？」

姿が見えないと思っていたら、玄関の外から卓巳の声が聞こえた。弘樹は完璧に無視である。万里子は白いパーティバックのチェーンを握り締め、必死で平静を装った。

「いえ……明日は土曜ですから」

「では、朝九時にお迎えに上がります。千早社長、明日、お嬢さんをお借り致します」

万里子の父・千早隆太郎ちはやりゆうたろうにとっては、寝耳に水の話であろう。

「は？ え、あの……それはいつたいどういう意味でしょう？」

「昨今の待機児童の問題から、社員向けの保育施設を検討しています。貴重な戦力である女性社員を確保するために、実現可能かどうか……現場ではどんな問題が発生しているのか、万里子さんにお話を伺いたいと思ひまして。僕の身近にはそういったことに詳しい女性がいまませんので」

実に堂に入った芝居である。俳優になればオスカー間違いなしだろう……万里子はボンヤリした頭でそんなことを考えていた。

万里子は心の隅で、父が強固に反対してくれることを祈ったが、「そういうことなら。万里子がなんと言うか……私が決めることではありませんので。万里子？」

どうやら父は、卓巳の舌先三寸の言い訳を信じてしまったようだ。

(ここで断ればこの人の鼻は明かせる。でも、すぐに反撃してくるだろう……彼は、私の息の根を止める十字架を持っている)

万里子は誰にも気付かれぬように奥歯を噛み締めた。

「……はい。お待ちしております」

笑顔らしきものを作り、万里子は漸おそう答える。

そんな万里子に対して卓巳は、

「それは良かった。どうもありがとう」

弱味を握り脅した相手に、一点の曇りもない笑顔を見せたのであった。

第一章 婚約 (8) 脅迫(後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

そろそろ卓巳も本領発揮？ してきました(苦笑)

でも、ハッピーエンドです！ それは宣言しておきます！

結構なが〜い道のりなので、どうかお怒りにならずにご覧頂きます

よう、お願い申し上げますm()m

第一章 婚約 (9) 不安

帰りの車内、万里子の父は非常に不機嫌であった。

「いったい藤原社長は何をお考えなのだろうか？ 万里子、お前は彼と何を話したんだ？ ……万里子？ ……万里子！」

「は、はい！ 何か仰いました？」

「どうしたんだ！ 今日はおかしいぞ。いつものお前なら断わっただろうに……。なぜお受けしたんだ？」

卓巳と違つて、あんなにスルスル作り話は出て来ない。万里子は余計なことは言わないように、父の問いに何も返事をしなかった。

「藤原社長は女性関係で悪い噂を聞いたことはないが……。うちのような中堅企業とは格が違う。何を思つてお前を誘われたのか知らないが、出来る限り関わらないほうが無難だ。明日は、おそらく運転手でも迎えに寄越すだろう。急に具合が悪くなった、とでも言つてお断りなさい。いいね」

そんな理由で断られるものなら断りたいが、不可能だろう。それほどの会社の社長が本気で牙を剥いたのだ。万里子に逃げ場はないと見ていい。

ただ、この時の万里子は事態の急展開について行けず、呆然と流されているだけであった。

「でも、一旦お受けしてから断るのは失礼ですから」

「万里子 藤原社長は確かに魅力的だ。だが彼には大企業の社長令嬢といった縁談が、山のようにあるはずだ。うちなんかとは住む世界が違うんだよ。何かあつてからでは遅いんだ。父さんの言つてゐることは判るだろう？」

(だったらもう手遅れだわ……)

万里子はそんなことを思いながらため息をついた。

「どうやら万里子の父は、妙な誤解をしてしまったようだ。これまで男性関係にはまるで縁の無い初うぶな娘が、一目で大企業の社長に恋をしてしまったのだ、と。それを社長に勘付かれ、付け込まれて弄ばれるのではないか……そんな心配をしているのであった。

そして、万里子の深いため息に気付き、余計にその思いを濃くする。

「母さんと約束したんだ。万里子のことは世界一幸せにする。そして、将来その気持ちを受け継いでくれる男にお前を託すつもりだ。

今度は世界一幸せな花嫁になり、暖かな家庭を築いて行って欲しい」

「……お父様……」

「お前が教師になりたいと言うなら反対はせんさ。なあに、心配するな。孫が生まれたら、父さんが早々に引退して、面倒を見てやるからな。渋江の息子も悪く無いと思ったんだが……いや、急ぐ必要はない。孫も欲しいが、お前にはまだまだ娘でいて欲しいからな」

万里子は父の想いに胸が熱くなった。

父親は何も知らないのだ。万里子に結婚するつもりも、家庭を築くつもりもない、ということ。万里子のためにも藤原社長には近づいて欲しくない……父はそんなことをブツブツ言い続けている。

その優しさに責め立てられる気分になり、万里子は感情を殺して正面を向いた。対向車のライトが万里子の顔を照らし……彼女はギョツと目を瞑ったのだった。

くくくくくくくく

「いいな。必ず断わるんだぞ」

何度も念を押して、万里子の父は朝八時に自宅を出た。思えば、去年の株価下落以降、千早物産の社長である父は、ほとんどの土日も仕事だった。月に休みは二三日といったところか。それはやはり、経営の厳しさを表しているのかも知れない。不況なのに忙しいなんて会社が上手く行ってる証拠だ、と思っていた自分を恥じる万里子であった。

九時ちょうどに“氷のプリンス”藤原卓巳のBMWが、万里子の自宅前に停まった。父の予想は外れたようだ。本人を前に、具合が悪いなど言い訳のしようもない。

ただ、昨夜の脅迫が悪夢ではなかったということに、本当に具合が悪くなりそうな万里子ではあったが……。

「一つ聞いていいですか？ 昨夜のお話が事実なら、あなたが父の会社に融資をしてくれる理由が判りません」

車の中の空気は重苦しく、息が詰まりそうである。それを打開するために、万里子は思いついたことを口にしてみた。

脅迫によつて万里子を卓巳の言いなりにするなら、わざわざ億単位の金を融資する必要はないように思える。罪悪感を覚えるような良心があれば、そもそも人の弱味につけ込んだりはしないであろう。

だが、卓巳の返答は極めて短いものだった。

「それは僕の理由で君には関係ない」

取り付く島もない、とはこのことだろう。

「では、あなたがそんな結婚をしなければならぬ理由も、説明はなしですか？」

「藤原グループを守るためだ。その条件に“結婚”の文字が加えられた。結婚する気はない、でもしななければならない。それだけだ」

再び、ニコリともせず卓巳は答える。万里子には全く意味が判らない。それは、万里子に理解力がないのではなく、卓巳に説明する

意思がないのだ。

万里子は話し掛けるのを止め、沈黙の重さに耐える道を選んだのであった。

卓巳は万里子を連れて、先日と同じホテルのエントランスに車を滑り込ませた。

三三〇一号室　そこはオーナーズ・スイートと呼ばれる卓巳専用の部屋である。彼は、週の半分はそこに泊まり込み、仕事をしてきた。

足を踏み入れた万里子は一瞬躊躇し、驚いた顔で卓巳を見上げた。なぜなら、そこには既に一人の青年が居たからである。人懐こい笑顔で万里子に微笑みかけ、社長秘書です、と名刺を差し出した。そこには宗行臣と書かれてあった。

第一章 婚約 (10) 契約書

宗の存在に、万里子は明らかに怪訝そうな顔をした。

自分たち以外には誰も知らない。卓巳はそう言ったのだ。宗のことを尋ねたかったが……迂闊なことは口に出来ない。そんな思いを籠めて、万里子は無言で卓巳を見上げたのだった。

「宗は僕たち以外で偽装結婚を知る唯一の人物だ。では、これより契約書を交わそう」

「契約書って そんなものがあるんですか!? その前に、この結婚が偽装だと知ってるのは、わたしたちだけだって仰ったじゃないませんか?」

万里子の責める口調がさっぱり理解出来ない、とばかり、卓巳は肩を竦めた。

「宗は私の個人秘書だ。君に関する様々な件も……彼が調査した」
卓巳は淡々と口にする。だがそれは、万里子にとっては恐ろしい内容だった。この見知らぬ男性も万里子の過去を知っているのだ。そう思うだけで膝が震え始める。

卓巳はそんな万里子に、褪めた視線を^{そそ}灌ぎつつ、
「心配は無用だ。宗は守秘義務を心得ている……君がこの契約書を守る限りは、だが」

相変わらず毒を含んだ台詞を吐く。反論しようとする万里子を軽く往^いなすと、玄関の奥にある内扉を開け、卓巳はリビングに足を進めた。万里子も宗に促され、渋々だが室内に入ったのだった。

そこは、これまで万里子が訪れたことのない空間であった。

正面の壁一面に窓があり、眼下には皇居の緑が広がっていた。先

日の、最上階レストランの一室とは逆向きであることが判る。フロアに敷かれたカーペットはグレーで統一されており、糸屑すら落ちてはいなかった。

室内には、どこには座ればいいのか迷うほど、多くのソファやテーブルが点在している。

その中央に置かれた一際大きなテーブルに、卓巳はバサツと書類を投げ落とす。そして、徐おもむろに一人掛け用に腰を下ろし、足を組んだ。「どうぞ、こちらへ」

万里子は宗に言われるまま、卓巳の正面に座ったのだった。

「籍を入れるということは、お互いに様々な義務を負うことになる。しかし、必要以上に負うつもりはない。お互いの果たすべき責任を明確に書き記す、その上で要求できる権利と、君が受け取る報酬も決めておきたい。離婚についてもそうだ」

あまりにもビジネスライクな卓巳の態度に、万里子は開いた口が塞がらない。だが、秘書の宗が語った内容は更に驚くべきものであった。

まず、万里子が背負うべき義務が言い上げられ

一、婚姻中は藤原本邸で同室による同居、寝室も同じ（ベッドは別）。

二、婚姻中は如何なる場合も夫に従い、家族・従業員を問わず、人前では仲の良い夫婦でいること 等々。

延々十数項目に渡り細かに書かれてあった。

それに引き替え、卓巳が背負うべき義務は 『千早物産が必要とされる融資は、銀行を通じて制限なく行われるように取り計らうこと』と『婚姻中は万里子を妻として尊重し、一定水準以上での生活の維持と学費の提供には上限を設けないこと』の二点だけと言っても良いくらいだ。

その上、別項として『万里子は卓巳の交遊関係に一切不満を唱える権利を持たない』など、契約書は不公平極まりないものであった。

「以上が契約条項です、ご納得いただけましたらサインと捺印をお願いします。ああ、拇印で結構です」

仏頂面で座り続ける卓巳とは違い、宗は営業スマイルが板についていた。だが、メガネの奥の瞳は笑っておらず……。まだストレートに表情を変える卓巳のほうが、万里子には信用出来る気がした。

だが良く考えれば、その卓巳が万里子を脅し、偽装結婚を承諾させたのだ。脅迫と信頼は間違ってもイコールで結べるものではない。万里子は理性を取り戻しつつ、キツと目尻を吊り上げ、表情を引き締めた。

「こんな……一方的な条件はないと思います。あなたの許可なしに実家にも帰れないなんて。しかも門限が八時だなんて、わたしは中学生じゃありません」

「大学の送り迎えはうちの車で行う。君は藤原グループの社長夫人になるんだ、当然のことだろう。それとも……人妻が授業の後に、コンパにでも出るつもりなのか？ 君は恥を知らない女性だからね。厳しく管理させてもらう。婚姻中に、他の男の子供でも身籠られては大変だ」

万里子は真っ赤になって息を呑む。だが同時に……タバ投げつけられた暴言の数々を思い出し、今度は怒りがこみ上げて来る。

「それに、この別項はなんですか？ 私には男性と口も聞くなとおっしゃって、ご自分は遊び放題だなんて。これで仲の良い夫婦だと、周りは思うでしょうか？ 二年後に離婚した時は、あなたが非難的になると思いますけど」

「無論、頃合を見てそんな噂を流すつもりだ。社長のご乱行とでも週刊誌に書かせれば、二年後の離婚もすんなり行くだろう」

マスコミは利用するだけで一切媚びない男だ　万里子はそんな文章を思い出していた。世間の評判など、まるで気にしないといった風情である。

「別項は他にもありますね。二年の契約期間より以前に、あなたが他の女性との結婚を望まれた時　わたしは問答無用で追い出されるんじゃないですか？」

別項の三に書いてあったのは『契約の早期解除を求める権利は卓巳側にある』であった。おまけに、万里子が不貞を働いた場合は、即刻契約は解除となるのだ。当然、千早物産への融資は打ち切られ、慰謝料まで払わなくてはならない。しかも、その“不貞”の判断が曖昧なのである。

「この契約書に書かれた、わたしの不貞と言うのはあなたが判断されるのでしょうか？　例えば、そちらの宗さんとこの部屋に居ただけでも、あなたが不貞だと決め付ければ済むことですよね」

矢継ぎ早の質問に、卓巳だけでなく宗も言葉を失うのであった。

第一章 婚約 (11) 攻防(前書き)

更新が遅くなりすみませんでしたm()m
引き続きよろしくお願い致します。

第一章 婚約 (11) 攻防

だが、万里子にとって一番許せなかったのは別項の二に書かれた一文であった。

卓巳が口頭で約束したように、卓巳から一切の性的交渉は要求しない、とあったが 『万里子が卓巳との性交渉を希望した場合、卓巳が応じてても契約違反にはあたらない』と書かれてあるのだ。

「この……別項の二なんて誰が証明するんですか！？ あなたに何をされても、全てわたしから求めたと言われたら……あなたのペナルティを記載した条項なんてまるで意味がなくなるじゃありませんか！」

その瞬間、万里子の背後から口笛が聞こえた。秘書の宗である。

「なかなかどうして、一筋縄ではいかない、お利口なお嬢さんだ」
彼にしたら本気で感心した台詞だが、他人から見たらいかにも小馬鹿にした口調であった。当然、万里子もそう思ったが……。彼女が宗に向かって反論する前に卓巳が口を開いた。

「言つたはずだ、僕が君に何をすると云うんだ。十七・八で男と寝て子供を堕ろすような女だ。夫の義務だと言われても君を抱く気はない。だからと言って、欲求不満で他の男に走られても困る。理由はそれだけだ。全て君の不徳だろう。違うのか？」

ここまで、中絶の件を持ち出されては黙り込んで来た万里子であったが……とうとう反撃に出た。

どれほどの恥ずべき罪であったとしても、脅迫者にこれ以上、口汚く罵られる覚えはない。

「それは、わたしがあなたを誘惑するということですか？」

万里子はさっきの宗の言葉は無視し、真っ直ぐに卓巳を睨み言い返した。

「僕は君をそういう女だと思っている。汚れたふしだらな女だ。不満かな？」

「では、あなたはわたしに触れるのも嫌だと言いながら、わたしの誘惑に負けると仰るんですね」

「馬鹿を言うなっ！　僕が君の誘惑に堕ちる訳がないだろう！？」

これまでとは違い、妙に冷静で大人びた表情の万里子に卓巳は声を荒げた。

そんな卓巳の様子に宗は目を丸くする。怒りが大きいほど、声と態度に冷やかさが増し、凍てつくようなボスしか目にしたことがなかったからだ。

確かに、年齢不相応に万里子は頭の回転が早いようだ。しかし、たかが女子大生である。見え見えの挑発に、三十近い卓巳がこうもあつさり乗るとは、誰も思わないだろう。

むきになって言い返す卓巳に、万里子は更に言い募った。

「何があってもそういうことにはならない。どんな事態にも、ご自分を見失われることはない。　そう仰るのなら、なぜ別項の二が必要なんですか？　これは……自分からは望まないけどわたしから求めて欲しい、そんな風にも受け取れますよね」

「宗、別項の二を外せ。あと、別項の三に追記だ、『婚姻継続予定期間内は、契約書に記載された義務を藤原卓巳は継続して履行する』以上だ」

「お待ち下さい、社長……」

「なんだ、お前も私がこの女の誘いに乗ると思っているのか！」

「いえ、社長はいかなる場合も沈着な方です。しかし、同じ部屋で夜を共にされる訳ですから、男と女の仲はいつどうなるか」

「別項の二は消してかまわない。私はそんな意志の弱い男ではない。こんな女に惑わされはしない」

「……判りました。　こちらを変更します。では、サインを」

斜線の上に捺印をされた契約書を見下ろしながら、万里子は張り詰めた声で言った。

「もうひとつ、あります」

そんな万里子の返答に卓巳は大きな溜息をつく。ソファに深く腰掛けなおし、些か投げやりだ。

「まだ、あるのか？ 一体なんだ」

「わたしは確かに男性経験があります。……中絶の経験もあります。何もなかった顔をして、見合いの席につくのは恥知らずかも知れません。でも、援助交際とか……そういった形で男性と遊んだかのような……そんな風に仰るのは止めて下さい。わたしは、ふしだらな行いはしておりません！ 訂正して下さい。訂正して下さいまでサインは致しません！」

それは、いかにも几帳面で潔癖な性格の万里子らしい拘りようだった。

(何処からこんな力が出てくるんだ……)

卓巳は、追いつめた獲物の反撃に啞然としていた。弱々しい子猫のようだった万里子が、一瞬で光り輝き、それは、神々しいほどの眩しさだ。卓巳の感情は彼女の姿に見惚れ、理性がそれを怒りに変換する。

「では、なんのために男に抱かれた？」

「……それは……」

「いや、どんな尤もらしい理屈をつけても、結婚の約束もせず男に身体を許す女を、世間ではふしだらと言っただ。君は……君の母親に恥ずかしくないのか？ 君の母親は子供を産むために命を懸けたんだらう？」

「は、母のことは関係ありません！」

「そんな母上がふしだらで無責任な娘の行状を見て、どう思ってお

られるだろうな？ 父上もそうだ。育て方を間違ったと、ご自身を責められるだろう」

父親で効き目が薄くなれば、次は母親を持ち出すことは当初からの予定である。

相手の最も嫌がる点を見抜き、そこを突いて交渉を有利に持ち込む。相手の傷口に塩を塗り、土足で踏みにじるようなやり方。それが、卓巳の得意な交渉術だ。

だが それでは女性の心は動かないと、卓巳は初めて思い知るのだった。

第一章 婚約 (12) “尤もらしい理屈”

卓巳は内心ほくそ笑んだ。昨晚同様、完膚無きまでに叩きのめしたはずである。万里子の返事など聞くまでもない。

そんなことを考えながら 膝の前で組んだ万里子の両手が、小刻みに震えるのをジッと見つめていた。

「……そうですね。そんな私がこれ以上、身体だけでなく戸籍まで汚して、お金のために偽装結婚の罪まで犯したとなれば。父だけでなく、母にも合わす顔がありません。どんなに“尤もらしい理屈”をつけても、自らの利益のために人を騙すのは事実ですから！」

無機質でやたら広いオーナーズ・スイートに、たつぷり十秒は沈黙の時間が流れた。

宗はこの時、青褪める卓巳を初めて目にしたのである。入社以来……いや、司法研修所で知り合ってから以来の出来事ではなかるうか。

しかも、女子大生の小娘に論破されたのだ。フォローの仕様も無く、宗は卓巳の返事を待った。

しかし、興奮状態にある万里子には徒ならぬ宗の様子に気付くはずもなく。万里子は怒りに任せて、更に卓巳の非を責め立てた。

「どんな理由か存じませんが、偽装結婚をするために、人の弱味を握って何かを強要することは犯罪です。そんな汚いことを考える方に、ふしだらだと非難される覚えはありません！」

「僕を怒らせるのは結構だが、その後のことは考えてるんだろっな。君の行状は白日の元に晒され、千早物産は倒産。君たちは家を出てアパート暮らしか……」

「覚悟は出来てます」

万里子の答えに卓巳は立ち上がった。腹立ち紛れに大股で万里子に歩み寄る。そして、そのまま万里子の左腕を掴み、立たせようとしたのだ。

「ほう、どれほどの覚悟かな？ 金に困ったことなど一度もないんだろ。どんな仕事をする気だ。それこそ身体でも売るつもりか？ ならばいつそ、この場で脱いでみたらどうだ。隣にはちようどダブルベッドもある、僕らで可愛がってやろう。朝まで付き合えば、家を借りるくらいの金は出してや」

パシッ！

万里子の右手が卓巳の左頬を打っていた。

そしてそれは、怒りに目が眩んだ卓巳の意識を、現実を引き戻してくれたのだ。誰のために、何のために万里子を得ようとしたのか…… 祖母が納得するのに、これ以上ない女性だと判断したからであった。最早卓巳の中に、かりそめの花嫁は万里子以外に存在しない。その万里子の瞳に、卓巳を燃やし尽くさんばかりの怒りの炎が映っている。直後、炎は揺らめき波となり零れ落ちた。

(なんてことだ……)

卓巳は眩暈がした。的を射られたショックで過剰に反応したのだ。万里子の過去の行いを論まげつたのではなく、思い込みで決め付け侮辱した。それはどうにも後味の悪い行為であった。

「社長……」

宗の声に、卓巳は万里子の腕を掴んだままなことに気付き、慌て離れた。そして、呼吸を整える。

「すまない。さっきの言葉は訂正する。私たちが君をどうこうするつもりは全くない。感情的になって申し訳なかった」

卓巳は脅迫を諦め、方向転換を決めた。

「判った。ふしだらだと言った僕の言葉を訂正する。そして、僕の置かれた状況を説明させて欲しい。その上で君も理解して、納得し

て欲しいんだ……頼む」

そう言つて卓巳の話し始めた内容は、かなり複雑なものであった。

卓巳の父・卓哉^{たくや}は先代社長の正妻・皐月^{さつき}が産んだ一人息子であった。卓巳も父にとつて一人息子である。

卓哉には腹違いの妹が二人いるが、非嫡出子だから相続権は卓哉の半分。祖父の遺産の半分は祖母の皐月が、四分の一を父の代襲相続で卓巳が、八分の一ずつを叔母二人が相続する。叔母たちは祖母の養子ではないので祖母の財産は行かない。

最終的に祖父の遺産の四分の三は卓巳の名義になるのが法律である。

ところが、祖母がひと月前に、突然相続に条件を付けたのだ。

「『自分は心臓病で余命一年。自分の死までに結婚し、その後一年間は結婚生活を継続すること。どうしても結婚出来ないと言うなら、自分の遺産は国に寄付する』そう言い出した。僕には僕の信念もあり、祖母とは結婚に対する考え方が違う。だが、祖母が純粹に僕の結婚による幸せを望み、止むを得ず、このような手段を選んだのだとしたら……余命一年なら、たった一人の血の繋がった孫の幸せな結婚生活を見せてやってもいいんじゃないか、と思つてね」

万里子をソファに座らせ、適度な距離を保つて卓巳は隣に腰掛けた。そして、つい先ほどまでの攻撃的な口調を魔法のように消し去り、真摯な態度で言葉を紡ぎ始める。

卓巳は祖母への気遣いだけでなく、会社……とくに社員に対する誠意を示したのだ。

いくらかは法的手段で押えられるが、相当国に取られることになる。そうなれば、グループの中から非効率部門は撤退を余儀なくされるだろう、と。規模が縮小されればリストラも当然となり、藤原グループ全体で二十万を超える社員がいた。

「社員には家族もいる、僕も君と同じだ。会社をバラバラにしないため、藤原の家を守り抜くため、戸籍に妻の名を残す決意をしたんだ。君が父上のために、人生における最も重要な二年間を僕に捧げてくれるなら……それに相応しい代価は用意する。千早物産は僕が守るよ。どうか信じて欲しい」

脅したり^{すか}賺したりで忙しいことだ、と普通なら思うであろう。だが、万里子は卓巳の言葉を信じ、契約書にサインしたのである。

第一章 婚約 (13) 自戒の念

「さすが社長。飴あめと鞭むちですね」
帰りは宗の運転で社用のベンツを走らせ、万里子を自宅前まで送り届けた。

万里子を泣き顔で帰すわけには行かず……ある程度時間を取ったため、陽はだいぶ西に傾いていた。この時期、日に日に太陽は急いで姿を隠そうとする。まるで真夏に罪を犯して逃げているようだ。それとも、決して同時に天空に存在出来ない誰かを追いかけているか……。

(万里子のようだな)

卓巳は窓から西日を窺いつつ、愚にも付かない事を考えていた。そんな後部座席の卓巳には気付かず、宗はまんまとサインに持ち込んだ社長の手腕を称えて笑顔を浮かべる。宗の戯言たわごとが耳には入っていたが……卓巳はとても笑う気になれない。

帰り際、車が自宅に着く直前、万里子は言ったのだ。

「藤原さんもやっぱり社長さんなんですね。父と同じでホツとしました。会社のためなら、わたしも協力させて頂きます。おばあ様を騙すのは心苦しいですけど……でも、幸せな姿を見せてあげたいですものね」

卓巳の訂正と謝罪を受け入れ、万里子は完璧に卓巳を信用して笑顔を見せる。そして、

「ただ、ひとつ気がかりが……。藤原さんにお付き合いされてる方はいらっしゃらないんですか？ 結婚には否定的でも、そういった方がいらっしゃるなら……」

「いない。そういった女性は、今は……いない。君はどうなん

だ？ 例え君に中絶させた男でも、愛していたんだらう？ それか、誤解されて困るような新しい恋人はいないのか？」

微かに万里子の瞳が翳ったが、傷ついた様子はなかった。

「いません。信じてくださらないかも知れませんが、男性経験は四年前の一度きりです。それ以前も、それ以降も……。当然、結婚するつもりもありません……。あつ！ あなたと別れた後のことですけど。ですから、わたしも父に花嫁姿を見せてあげたいんです。……。それだけです」

先ほどの激昂ぶりとは違い、今は口元に笑みを湛えて万里子は過去を口にした。それを、理由は判らないが卓巳は不愉快な気分で聞いていた。まるで首にロープを掛け、渾身の力で締め上げられる気分だ。

「余程……。好きだったんだな。子供の父親のことが」

「さあ、どうでしょうか……。ただ、消せない過去です。生涯、背負うべき罪だと思っています」

万里子は、胸に掛けた大きめのペンダントを握り締め、そう呟いた。

卓巳の胸に、再び彼女を泣かせ激怒させたい感情が渦巻いた。だがそれは、この半日の努力を全て無にしてしまう行為だ。かろうじて打ち消し……。わざとらしく取り出した書類に目を落とす卓巳であった。

（彼女は、ただ一度、不貞を犯したことを罪だと感じているのか……。それとも、愛する男の子供を墮ろしたことを、悔やんでいるのか……。）

卓巳の中で万里子に対する疑問が膨らんだ時、今度は少し苛立った宗の声が耳に届いた。

「社長っ！」

「あ、ああ、済まない。どうした？」

「例の英国進出の件ですが、国の監査を担当するライカー社との折衝はどうしましょう。社長が出向かれますか？ それとも、ロンドン支社長に一任ということでもよろしいですか？」

「ああ、ロンドン支社に専門のチームが組まれていただろう。彼らのリーダーに任せよう。入籍が済むまで、こつちが最優先事項だ。仕事は出来る限り削っていい。中澤くんにもそう伝えてくれ」

宗は個人秘書、中澤はF総合企画に籍を置く、第一秘書だった。

一瞬、返答に悩んだ宗であったが、敢えて言葉にはしないことを選ぶ。そして、意識的に質問ではぐらかそうとした。

「はい。しかし社長、本当によかつたんですか？」

「何がだ？」

「“別項の二”です。社長の精神力の強さは認めていますし、禁欲的な性質も理解してはいますが……。私としましては、今でも“別項の四”を加えたかっただと思っています」

四とは『夫婦の間に性交渉があり、子供が誕生した場合、産まれた子供の親権・監護権は卓巳が所有し、子供は藤原家で育てられるものとする』というものだった。

「必要ない。どちらもだ」

くくくくくくくく

卓巳は社長室で契約書に目を通しながら苦笑する。

（宗は、自分なら、と想定して作ったみたいだな）

万里子が不満を唱えた別項の一『万里子は卓巳の交遊関係に一切不満を唱える権利を持たない』というのも、卓巳は不要だと考えて

いた。

秘書の中澤に、宗から伝えるようにと告げたことにも含みがある。それとなく、二人の関係を知っていると伝えたかったのだ。無論、宗に女が中澤一人でないことも……。

卓巳はデスクに腰掛けながら考える。なぜ、女がそれほど必要なのか、と。セックスに溺れて、身を持ち崩す人間のなんと多いことか……。

卓巳は未だに夢に見ることがある。男の上に跨り、腰を振り、奇声を上げる母の姿を……。なんと無様で汚らしい姿であろう。

(万里子もそうしたのか？ あんな優しい顔で温かな声で……あの母のように。足を開き、男に貫かれ、快楽に溺れて罪を犯したのか……あの、万里子も)

卓巳はふと、契約書を握り締める自分に気付く。肩の力を抜こうと、軽く頭を振った。そして、自嘲気味に笑うと、女は皆同じだ、そう思い直す。

「今更、後悔しても遅い。不倫の末、妊娠した女になんぞ、死んでも触れるものか」

それは卓巳が自分に向けた戒めであった。

第一章 婚約 (14) 秘書の情事(前書き)

*最初と最後に性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。
R15でお願いします。

第一章 婚約 (14) 秘書の情事

常夜灯のみが点った薄暗い室内。窓はあるが固く閉じられたままだ。ベッドの他にはスロットマシンが一個。その横には色々収まった小型の自販機が置かれていた。

他に目立つ家具はソファセットとテレビくらいか……いや、ソファの横には小型の冷蔵庫もある。おそらくはそこから取り出したのであろう、ソファのガラステーブルの上に缶ビールが二本、半分ほど残った状態で生温くなっていた。

室内は適温に保たれてはいるものの……どこか息苦しい。部屋中に漂う艶かしさのせいか。それを助長するように、この部屋はわずかに三種類の音で満たされていた。

男の浅く忙しい呼吸音、スプリングの壊れかけたベッドがリズムカルに軋む音……そして。

「あつ！ もつともつと、そこよ……ああつ！」

女の口からは絶え間なく淫声が発せられる。よほど溜まっていたのか、男に指示を出すだけじゃ足りず、自らも必死で突き上げていた。

「そこよあつ！ ああん……もつと突いてっ！」

その度にベッドが大きく傾ぎ……スプリングが悲鳴をあげる。原因の半分は女の腰使いであった。

(一々うるさい女だ。これがなけりやいい女なんだが……)

無言で女の命令に従いながら、心の中で悪態を吐く。

男は卓巳の秘書、宗行臣だ。彼が組み敷いて、今まさにクライマックスを迎えようという女性。中澤朝美。二人は結婚を前提とせず快樂のみを分け合う関係、所謂セックスフレンドであった。

「それって本当？ 本当に好きな女性が出来たの？ あの社長に？」
「ああ、話しかけてもボーツとしてる。彼女のことになるとムキになるしな」

二回戦を終え、ようやく身体の火照りが治まったのか、朝美は宗の体を自由にくれた。

先日、卓巳と万里子が別の意味で一戦交えた千代田区のホテルとは、格も金額も桁違いのホテルである。隣の新宿区に移動するだけで、掃いて捨てるほどあるラブホテルの一つであった。

中澤朝美はF総合企画に所属する社長付きの第一秘書だ。主に社長 卓巳のスケジュール管理と交遊面でのサポートを担当する。当然、個人秘書の宗とは顔を合わす機会も多く……。

二人は約二年前から、週に一回程度ホテルで会う関係だ。そして朝美と卓巳の関係は……謎であった。

卓巳が会社にいきなり社長として呼び戻されたのと同じ時期、朝美は入社した。そのせいか当初は卓巳も気を許し、新人の朝美を社長秘書に抜擢したくらいである。当然やつかみ半分で、社長は自分の女を秘書にしてオフィスでお楽しみ、などと言う噂もあったほどだ。だが実際は……。

それでも朝美が出過ぎないうちは、何の問題も起きなかった。

ところが二年半前、海外出張先のマレーシアのホテルでダブルブッキングが発生。二人はやむなくダブルベッドの置かれた部屋で一晩過ごすことになり……。当たり前だが、朝美は噂が真実になることを期待した。

しかし卓巳は紳士的にベッドを朝美に譲り、自分はソファを選んだのである。

それに、とうとう朝美が焦れた。全裸で卓巳に迫り……彼は無言で部屋を出て行くのだった。

帰国後、朝美は系列会社に移動の内示が出る。左遷同然であった。朝美はそれを周囲に「社長に遊ばれたのよ。恋人にして欲しいと頼んだから飛ばされたの」と言い訳したのだ。

その後、卓巳がF総合企画を立ち上げた時、朝美は引き抜かれた女としてはともかく、秘書としては優秀だと卓巳が認めたからだ。

だが朝美の嘘も含めて、あの夜のこと是一切触れてはならない“地雷”である。

朝美も判っているから、宗からいくら社長との関係を尋ねられても「言えないのよ。余計なことを言ったら今度はクビが飛ぶわ」と誤魔化し続けているのであった。

一方、宗からすれば 朝美は仕事も出来て容姿も問題ない。学歴も私立ではトップクラスの大学を卒業している。頭の回転が良いので会話も楽しめ、それでいて甘え上手で程よく男の自尊心を守らせてくれる。セックスになると注文がうるさいのと、好色で簡単には満足してくれないのが難点と言えば難点だが……。

セックスに淡泊な卓巳の好みに合わなかったのだろう。その程度しか宗には理解が及ばなかった。

「ねえ、どんな女なの？ 顔は？ 歳は？ 学校はどこを出てるの？ 仕事は？ 私と比べてどう？ ちよつと早く教えてよ！」

どうやら朝美はまだ卓巳を諦めてない様子だ。宗に対して質問攻めである。

「ちよつと待てよ。えーつと、顔はまあ……美人かな。学校は幼稚園から大学まで聖マリアでピカピカのお嬢様って感じ。大学四年の二十二歳。父親は中堅企業の社長だよ」

「何それ！ ねえユキ、それって本当に恋愛なの？ 例の相続の件で、結婚相手に条件ピッタリなのを選んだだけなんじゃないのっ」

卓巳の祖母、現会長が出した相続の条件は社の上層部では公然の秘密となっている。ユキと呼ばれた、宗は苦笑しながら、裏工作に精を出すことにした。

「さあどうかな？ でもせっせとデートに誘ってるし……どうせ結婚するなら理想のタイプで決めようと思ったんじゃないの」

「もう寝たの？ 社長はその女と……」

（そうそう、そこに喰いついてくれ）

宗は女の嫉妬心に辟易しながら、とりあえず話題がセックスに移ったことで安堵する。

「さあ、どうかな。社長が手が早いかなんて……俺に聞くより、君のほうがよく知ってるだろ」

「……どう、だったかしら……」

卓巳との関係に話が及ぶと、途端に朝美は無口になる。

「ただ……例のオーナーズ・スイートには通してたな。ベッドルームに二人で籠もって何をしてるかまでは、俺にも判ないけどね」
「思わせぶりに言っただけで宗は微笑んだ。朝美は『オーナーズ・スイート』の台詞に頬を引き攣らせる。

卓巳は取引相手以外の女性を自分専用の部屋オーナーズ・スイートに招き入れたことは一度もない。それは、第一秘書の朝美ですら同様であった。その上、ベッドルームとなれば……。

朝美は完全に信じたようだ。

これで数日中には系列会社の女性社員を中心に、卓巳がスイートに女を連れ込んだ、と広まるだろう。本当にやっつけてしまえば簡単なのに、と宗には思えた。だが、卓巳は意地でも関係は結ばないつもりらしい。

（もし二年間、彼女のベッドに潜り込まずに社長が過ごせたとしたら……それは男をやめてるな）

万里子は香水の類は一切つけてなかった。柔らかそうな髪から、微かに漂うシャンプーの香り……。

「ねえ……今度写真見せ……あつ！ い、一度会って……みた……はあん」

宗は万里子の身体に指を這わすことを想像しながら、朝美の下半身に手を伸ばす。太腿の内側を伝い、秘めやかな部分に指を押し込みながら、朝美の脚の間に自分の体を滑り込ませた。

朝美の中はそれなりに心地良い。だが、墮胎経験があるとはいえ、あの万里子の様子なら処女同然だろう。

（社長との契約が終わったら、口説いてみてもいいかも知れない）
不謹慎だとは思いつつ、窮屈な万里子の身体を想像しながら、宗は朝美を突き上げるのだった。

第一章 婚約 (14) 秘書の情事(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

主役二人が病的にストイックなもので、秘書に頑張ってもらいました

(違う?)

契約書にサインして偽装婚約が整ったこの辺りで第一章は終わりです。

明日からは第二章に進みます。

偽装を隠すためのデートを重ね……まあ、そういった感じでお話は進みます(笑)

引き続き、何卒よろしくお願い致しますm() m

第二章 恋 (1) 正しいデート

「あの……わたしたちは何処に向かっているんでしょうか？」

それは万里子のごく自然な疑問だった。

卓巳の運転する車は、最初に万里子の前に現れた時に乗っていたBMWのシリーズでは最高級グレードである。とくに車が好きなわけでも詳しいわけでもなく、勧められるままに乗っているのだという。

だがこの場合、車の性能も好き嫌いも問題ではなかった。

万里子は普段あまり出歩かない。当然のことながら、デートなど全くの未経験だ。そんな彼女にも、今の状況が異常であると理解出来た。

車は延々、首都高速 号線と書かれた道路を走り続けている。あの程度進んでは別の首都高に乗っているようだ…… 中の数字が変わる。汐留JCT、江戸橋JCTと書かれたプレートを、何度くぐったか忘れてしまったくらいだ。

「……ドライブをしているんだ」

卓巳は仏頂面で答える。行く先などあるはずがなかった。当初回ろうと考えていた環状七号線や八号線はかなりの渋滞が予想されるという。料金は掛かるがその分首都高の方が空いていると聞き……ただ走っているだけであった。

万里子が世間一般のデートの経験がないように、実は卓巳にとってもその方面は不案内である。

婚約しました、といきなり自宅に連れ帰っても怪しまれるだけであろう。周囲から祖母の耳に入り、連れて来なさい、と言われるのが最も望ましい形である。それを目論み、わざわざ宗を使って嗜好

きな女子社員に行き渡るようにしたのだ。しかし、そのためには実際の『デート』という既成事実も必要であった。

「うーん。ドライブ辺りが無難ではないですか？」

宗のアドバイスを素直に受け入れ、卓巳はドライブを実行している。

「わたしはドライブデートの経験はありませんが……首都高は目的を持って使うものでは？」

「目的がデートでは不都合か？」

「……い、いえ。不都合じゃありませんけど」

先日もそうであったが、車の運転をする時だけ卓巳は眼鏡を掛けている。おそらくは、普通に東名高速を走り続けていけば、名古屋に着くくらいの時間は運転しているだろう。

「何を見ている？」

卓巳に、少し上ずった声で尋ねられ……万里子の返事も微妙に震えてしまった。

「いえ……別に……あの、お疲れじゃないかと。慣れない眼鏡を掛けて、運転されているんじゃないかと思って……」

「次は、運転手を連れて来よう」

至極真面目な表情で卓巳は答える。一瞬、啞然とする万里子だったが……堪え切れずに吹き出してしまった。

万里子にすれば、まさか本当にデートをするとは全く思わなかったのである。どう考えても、卓巳は多忙を極める立場なはずだ。デートとは名ばかりで、先日契約書を交わした部屋にでも押し込められて、卓巳は顔も見せないのではないか　そう思ってやって来たのだ。

卓巳のこの言動に、七歳も年上の男性と二人きりになるという不安は霧消してしまった。思えば、男性とは距離を置きたがる万里子のテリトリーに、卓巳は無遠慮なほどズカズカと踏み込んでくる。

おそらくは……数時間も連れ回し、「喉が乾いたであろう。お腹が空いたのではないか」などは考えてもいないのだろう。普通の女性であれば怒って帰ってしまうかも知れない。

しかし万里子には、肩書きとは違う卓巳のあまりに朴訥な対応が、逆に好ましく思えてしまったのだった。

そして卓巳も、助手席で笑い転げる万里子に不思議な感情を抱き始める。

卓巳自身、この状況が“正しいドライブデート”ではないと気が付き始めていた。卓巳と二人きりになった女性は大概、気分を害して次の約束をせずに別れることが多い。女に媚びることを罪悪と考える卓巳にとって、取引相手以外の女性は気遣いの対象ではなかった。だが、万里子はそうはいかない。一先ず、その方面に明るい宗に指示を仰いだが……具体的なドライブコースまでは教授されなかった。

苛々と車を走らせる卓巳の横で、なぜか万里子は笑う。

(何が可笑しいんだ?)

聞いてみたいが、それ以上に……そのまま万里子に笑顔でいて欲しいと思えたのだ。

この日、首都高に設置されたETCを数十回潜り抜けた意味不明なBMWがあった。車内に張り詰めた緊張は時間が経つ毎に解れ、次第に笑みがこぼれる。結果的に二人は“ドライブデート”を楽しんだのだった。

くくくくくくくくくく

三回目のデートは、首都高を走った時に万里子が目にして声を上げたテーマパークであった。東京の冠を持ちながら都内にはない某巨大遊園地である。

「よく来るのか？」

首都高を巡る車内で、歓声を上げる万里子に卓巳は尋ねた。

「いえ、中学と高校の頃に数回来ました。懐かしくて……。卓巳さんは来られたことはありませんか？」

「いや……」

このテーマパークには系列企業が出資しているはずだ。卓巳は書類では目にするが、訪れたことは一度もない。

「次はここに来てみるか？」

「え？ あ、はい！」

何気なく言った一言に、万里子は驚きながらもすぐに満面の笑みを返す。

（万里子に媚びるわけじゃない。計画を円満に進めるためだ……。それだけだ）

万里子の機嫌を伺うかのような自分の言動に、慌てて理由を付ける卓巳なのだった。

第二章 恋 (1) 正しいデート(後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

「恋」いいですねえ。相手の何もかもが素敵に思える時間ですよねえ。

ちなみに「恋」の中では「片想い」が一番幸せな時間だと思っています。

カップルになると、相手は理想の人から人間になるわけで…思い描いた通りには動いてくれませんか。

だからこそ、余計にピツタリはまった場合は盛り上がるもんなんですけどね…見てて痛いほどに(苦笑)

十一年前の感情を引っ張り出しつつ、頑張って書き上げたいと思っています(恥)

第二章よろしくお願い致しますm() m

第二章 恋 (2) 二本の傘

その日は平日で、朝から小雨が降っていた。

テーマパーク内には傘の花が咲いている。そのおかげと言うべきか、人は少なめでアトラクションはどれも待ち時間が短かった。

しかし、それはひと口に“幸運”とは言えず……。

付き合いの深いカップルなら、雨は二人の距離をより縮めるだろう。しかし、紙の上で婚約しただけの二人には、それぞれの傘が壁となってしまうた。

万里子の前にグレーの傘が立ちはだかる。男物の傘は大きく、威圧感を持って万里子を阻む。ドライブで少しずつ見え始めた卓巳の素顔が、また少し遠のき……。それは、間もなく夫になるはずの男性と、会話も儘ままならない隔たりを生んだ。

そして……感情の変化に敏い万里子は、卓巳の微妙な視線に気がついてしまったのだ。

パーク内には、平日とはいえ多くの家族連れが訪れていた。比較的幼い子供を連れた、若いカップルが多い。卓巳と同年代の父親もたくさん見かけた。だが、なぜか子供を連れた若い女性……おそらくは母親の姿を見るたびに瞳が曇る。しかも時折、凄じ眼差して母親を睨むのだ。

その姿は尋常なものではない。万里子は驚き、口を開きかけるが……理由を聞いてはいけない……なぜか、卓巳の全身がそう語っていた。

(この人も、触れられたくない傷を抱えているのかも知れない……)傘越しに、卓巳の横顔を見つめる万里子であった。

ロマンティックな名前の付く城の前を、傘の触れない距離を保って二人は歩く。

万里子がこっそりと卓巳の表情を窺っていたように、卓巳もまた、万里子の顔が凍りつく一瞬を目の端に捉えていた。

そんな時決まって万里子の視線の先には、三丁四歳くらいの女の子がいる。

(後悔するくらいなら産めばよかったんだ。それを……)

男には妻と別れさせ、自分との結婚を要求すればいい。相手は公立中学の教師だと報告書に書いてあったが……たとえ免職くわくになったとしても、自業自得というものだろう。卓巳は理路整然とそんなことを考える。

卓巳の中に理屈で説明できない感情は存在しなかった。

いや、存在を認めていない、というだけだ。その為、万里子に対する言動にも、一々理屈で自分を納得させようとする。女性に対する正体不明の感情に振り回され、誘惑に屈することを何より恐れているからだ。

それが愚かな人生の手本となった父と、罪悪の根源たる女の見本となった母によるものであったのだが……。

相手を気遣い胸に納める万里子とは違い、卓巳はついつい、

「子供は……女の子だったのか？」

「……忘れました」

振り絞るような声で万里子は答える。

さすがの卓巳も、聞くべきでなかった、と悔やんだ。だが、後悔は反省にはならず……。

「なら、そんな目で子供を見るのは止すんだな。自分で殺しておいて……今更と言うものだろう」

「わたしは別に」

「別に何も見てない、か。さっきからあの年頃の女の子ばかり目で

追っている。仮にもデートの最中だ。鬱陶しい顔をするのは止めてくれ」

「……申し訳ありません」

言いたい言葉は他にあつた。

子供を墮ろさせるような男のことをいつまで考えるな。君は僕の妻になるんだ、僕の方だけ見ていれればいい

だが、その言葉を口にする理由がどうしても思い当たらない。

「ごめんなさい……あの、卓巳さん。もう、帰りましようか？」

俯く万里子と同じように、彼女の差す傘の先端も下を向き……涙のように雫が数滴落ちた。

「まだ早い。約束通り、時間までは付き合ってもらうぞ」

「……はい」

ひたすら傘が邪魔であつた。万里子の表情がまるで見えない。思いは言葉にならず、行動を抑えるためにきつく冷たい台詞ばかりが口を衝いて出る。

その日はついに、卓巳は万里子の笑顔を見ることが叶わなかつた。

女の機嫌を取るなど愚の骨頂だ。

卓巳の持論である。しかし翌日、卓巳は宗に尋ねた「幼い子供がおらず、女子大生が喜ぶデート場所は何処だ？」と。

く　　く　　く　　く　　く　　く

卓巳から意見を求められ、宗は絶句した。だが、ボスに忠実なのは彼の長所である。

ひたすら首都高を走ることをドライブとは言わず、人気のテーマ

パークに出掛けるのは、まるで中高生並だ、と伝え……。

「季節も良いので、軽井沢の別荘辺りで紅葉でもご覧になって来られてはいかがですか？ 天気しだいで、テニスやサイクリングに誘われるのもよろしいかと」

そして今、卓巳の車のサイドポケットには“軽井沢観光ガイド”と題されたガイドブックが収まっていた。

「嫌です」

それが万里子の第一声だった。

「……テニスが嫌なら無理にとは言わない。ただ、軽井沢には別荘もあって知人も多い。そこで君と逢っていた、と印象付ければ」

「軽井沢には行きません。どうしても仰るならデートはしません！ それが契約違反だと仰るなら、どうぞ訴えて下さい。わたしは……」

万里子のあまりの剣幕に、卓巳は戸惑うばかりだ。

優柔不断で曖昧に見える万里子だが、一旦言い出せば梃子てこでも譲らない。それは、先日の契約書の一件で経験済みである。理由など明確でなくても、譲歩しなければならぬのが男女の関係だと卓巳も学んだ。

それに、このままでは今にも泣き出しそうである。

ガイドブックまで熟読し、今日の日に備えたのは……万里子の涙を見るためではない。

「判った。判った……別に軽井沢に行く必要はないんだ。だったら君が決めてくれ。さあ、何処なら満足だ？」

聞き方は乱暴ではあるが、卓巳にすれば精一杯の譲歩である。そして、万里子が望んだのは……。

第二章 恋 (3) 無欲

「動物園だと？」

なんと万里子は、台東区にある動物園を名指ししたのだ。

そんな……テーマパーク以上に、未就学児童が集中して訪れる場所である。何が楽しくて行きたいというのか、卓巳にはさっぱり判らない。

いや、そもそも女の子の姿を見るだけで切なげな瞳をする万里子が、幼稚園教諭を指す気持ちも判らないが……。嫌なものに無理に近づく理由など、自虐趣味としか思えなかった。

「父と母と……三人で最後に行った場所なんです。母は妊娠五ヶ月で、とても元気でした。まだ四歳だったわたしには、あれから二ヶ月も経たずに母がいなくなるなんて思いもせず……。あれ以来、父は動物園にだけは連れて行ってくれませんでした。だから、もし叶うなら……卓巳さんが嫌でなければ、ですが」

嫌でなければ……と言われても、子供もない三十男が喜んで行く場所ではないだろう、と卓巳は考える。

これまで女性から、ホテルの部屋オーナーズ・スイートに入れて欲しいと懇願されたり、海外視察に連れて行って欲しいと身体を摺り寄せられることはあっても、だ。

軽井沢の別荘より、都内の動物園に連れて行って欲しいと言われたのは、卓巳にとっても初めての経験であった。半ば開いた口が塞がらない。しかし……。

「判った。動物園だろうが水族館だろうが付き合おう。それでいいいな？」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

その一瞬で、豪華なだけで無機質な車内に花が咲いた。 　　そん

な錯覚に囚われるほど、卓巳の心は動揺し、浮き足立つのだ。さほど遠くもなければ難しくもない、動物園への道のりを迷ってしまうほどに。

しかし、残念ながら、この日二人は動物園には辿り着けなかった。決して卓巳の運転が拙かったわけではなく……。卓巳に、緊急の商談が入ったのだった。取り引き先が交渉相手に卓巳を指名したのである。そんな宗からの電話に、二人は最初に会ったホテルに急ぎ戻ることとなってしまう。

「あの、卓巳さん？ お仕事でしたら、わたしはここで失礼致します。都内ですし、一人で帰れますから」

「イヤ、ダメだ！ 今日は夕食まで付き合ってもらおう予定だ。ホテル内のレストランを予約しておこう。フレンチ・イタリアン・チャイニーズ、君はどれが好きなんだ？」

まだ車で一時間足らずの間一緒にいただけである。卓巳は慌てて万里子を引きとめた。予約を入れてしまえば、その時間までは万里子を独占出来る。

（だが 何のために？）

卓巳は自分の行動に理由が見つからず、愕然とするのだった。

「どれも好きですが、出来れば和食があれば……」

一方、万里子にすれば、この日の卓巳はそれまでになく優しくかった。偽りとはいえ、二年間を一緒に過ごす約束をしたのだ。それに、万里子が微笑めば卓巳も笑みらしきものを返してくれる。それは、恐ろしくぎこちないものでギクシャクとしていたが……。

「あ……ああ、それでいい。僕も和食は好きだ。板長に特別料理を頼んでおこう」

「はい。ありがとうございます」

今この瞬間も……卓巳は素っ気なく正面を向いたままだ。しかし、万里子が見つめる横顔は、眼鏡の奥の瞳に僅かな和らぎを感じて。それは、忘れかけた笑い方を思い出しつつあるかのよう……。万里子も気付かぬうちに、お互いの心を同じ温度に熱し始めていたのだった。

くくくくくくくく

「都内にいてくださって助かりました」

余程、急を要していたのだろう。ホテルの正面玄関に秘書の宗は立っていた。

万里子自身はいつもの部屋ではなく、藤原家がリザーブしているガーデンスイートと言われる部屋に案内された。

「しばらく掛かるかも知れませんが。ホテル内の施設でしたら何でもご利用可能です。万里子様のお名前を出して下さいれば、お食事もお買い物も……全てフリーパスになっておりますので、社長の仕事が終わるまで、ホテル内でお楽しみ下さい」

宗は卓巳の命令か、ホテルマンよろしく万里子を部屋まで案内した。館内の地図まで用意しており、まさに至れり尽くせりだ。

「フリーパスというのは……出入りが自由と言うことですか？」

確かに、このホテル内にはスパやジム、エステサロンまで充実している。ショッピングとなれば、デパートが一人入ったくらいの店舗数があるし、レストランも何軒もあって、果ては茶室や美術館まであるという。その辺りは会員制となっているだろうし、学生の万里子が訪れるような場所ではないはずだった。

「もちろん出入りは自由です。それからお支払いのほうも……お気になさらずお過ごし下さい。これは社長のご希望ですのでご安心を」

「わたしは必要なものは持つてますし、自分のお小遣いで買えない身分不相応なものは、欲しいとは思いません。それに……出歩く意味がありませんから、部屋で待たせて頂きます」

宗を見上げて万里子はキツパリと言い切った。

「お気に触りましたらご容赦下さい。ただ、会社の都合で万里子様
に、所在無い時間をお過ごし頂くわけですから……。そのことへのお詫びかと思われませす」

宗は慌てて訂正した。万里子に誤解を与えたと思ったのだろう。

「いえ、そうではなくて……。卓巳さんとデートするために来てるんです。一人では意味がないでしょう？」

それは、デートも婚約も偽装であることを忘れさせるような……

何の含みもない、万里子の笑顔であった。

第二章 恋 (4) 複雑な従妹

「夕食にはお邪魔しませんので……」
そんなことを口にしながら、宗は部屋の玄関まで万里子を送り、引き上げて行った。

万里子は一人になり、ガーデンスイートの室内を見回す。

最初に通された卓巳専用の部屋とは別の棟になる。あちらは、映画やドラマでしか見ることもない豪華な部屋だったが……。こちらは、玄関スペースとリビングの仕切りもなく、ソファとテーブルも一組だけ置かれていた。

ただ、棟の先端のせいか変則的なデザインをしている。そして、リビングとベッドルームの間がバス、レストルームになっていた。その通路に洗面台があり、二つの部屋の形は綺麗なシンメトリーであった。

サイズ的には、父との旅行で利用するくらいの大きさなので、卓巳の部屋よりは落ち着ける。何より、一人で過ごせることも大きな理由であった。

万里子は玄関、リビングとバスの境と、嚴重に鍵を掛けベッドルームに入る。

これくらいのホテル、しかもスイートとなればビデオ・オン・デマンドのサービスが当然用意されており……万里子は映画を観ながら、卓巳の仕事が終わるのを待つことにしたのだった。

契約書を交わして以来、結婚に向けての信憑性を高めるために、卓巳とのデートに応じている。

万里子にすれば、はじめは気が重く不安だった。好き合ってもいない二人が、『デートをしている』という体裁すら整えられるのだろうか？ と。

幼い頃に母が亡くなり、男手一つで娘を育てる父の苦労を見てきた。そのため万里子は、父にだけは心配を掛けまいと、精一杯気を配っている。卓巳や宗が驚くほど敏いのも、言い方は悪いが『周囲の大人の顔色を窺うクセ』がついているせいだろう。

卓巳に嫌々デートに來られたらどうしよう……それが一番の悩みだった。

だが、実際に逢う卓巳から、万里子に対する嫌悪感は今全く受け取れなかった。

それどころか 優しくしたいが出来ないもどかしさ、のようなものが感じられ……万里子は戸惑うばかりだ。自分は卓巳の妻となるが、あくまで形式だけのもの。卓巳に対する感情は、冷ややかなままで保っておかなければならない。もし、特別な想いを抱えてしまったら、後々辛いことになるのは目に見えているのだ。

それに……時折見せる卓巳の激しさにも、万里子は困惑が隠せない。

万里子の視線が子供に向けられた時を見計らい、卓巳は唐突に四年前のことを口にする。

「なぜ結婚しなかったんだ？ 十八なら可能だろう。それとも、公に出来ない相手ということか？」

「そんなのじゃありません……高校生で結婚なんて考えられないでしょう」

「ならセックスも考えるな」

急に蔑むような視線に変わり、低い声で吐き捨てるように言うのだ。

しかし、それで万里子の表情が曇ると、慌てて「すまなかった」と謝罪する。自分で自分を持って余すかのような卓巳の言動に、万里子自身振り回されつつあった。

くわくわくわくわく

バタンツ！

大きな音をたてドアが開いた。

ハツとして万里子は目を覚ます。どうやら、考え込むうちにうたた寝をしてしまったようだ。見晴らしの良い窓からは、既に西日の射し込む時間となっていた。

「……………」

リビングのほうから人の話し声が聞こえる。

卓巳の仕事が終わって迎えに来てくれたのかも知れない。そう思い、万里子は起き上がると手早く身なりを整え、リビングに向かった。

「…………ええそう、今日よ。今日中じゃないとダメ！ そう、三十分したら行くから、ちゃんと準備しておきなさい。いいわねっ！」

リビングでは一人の女性が携帯に向かって怒鳴っている。よほど気に入らないことがあったのか、イライラと命令口調だ。

なぜか判らないが、二十代半ばの女性が部屋に居た。万里子にも判るようなブランド品で身を固め、濃い化粧と赤い口紅…………派手な感じの美人であった。

その女性の名前は藤原静香^{ふじわらしずか}という。

卓巳の従妹だ。歴史ある私立大学を卒業後、英国留学を経て花嫁修業中の建前で遊び歩いている。

彼女には大勢の取り巻きもいて、深い付き合いの男性も多い。しかし、容姿・教養・学歴・肩書き・財産…………どれをとっても従兄の卓巳に勝る男性はいなかった。従兄妹同士なら結婚も可能だと、卓

巳をしつこく狙う一人なのである。

静香は煙草を啜えると、カチカチと数回ライターを動かした。中々火が点かず……四回目にはライターをソファに投げ捨て、煙草をゴミ箱に叩き込んだ。

彼女が万里子の存在に気がついたのは、その直後である。

「あなた誰!? なぜここにいるの! ここはうちのリザーブルムよ。あなた従業員? 勝手に入っていいと思ってるのっ!」

『うちの』という言葉に、万里子はこの女性が藤原家の人間であることを悟る。

「あ、あの……いえ、ここで待つように、と。たく……藤原さんにそう言われまして。ご気分を害して申し訳ありません」

万里子はそう言って頭を下げた。

そして同時に静香も何ごとか気付いたらしい。

「藤原? ふふーん、そう、そういうこと。わがイトコどのの新しい女って訳ね。まったく! 何度言ったら判るのかしら。ココは私も使ってるから女は連れ込まないでって言ってるのに……。知ってる? あの男が何人の女を弄んだか?」

思わせぶりの、そして予想外の静香の言葉に……息を呑む万里子であった。

第二章 恋 (5) 従兄弟違い

「あの……従妹の方ですか？ はじめまして、わたしは」

静香の台詞は俄に信じがたいものであった。だが、先々のこともある。万里子は気持ちを切り替えて、丁寧に挨拶をしようと思ったのだ。だが、

「ああ、いいわ。そんなの聞いてもどうせ覚えられないし……。ね、学校はドコ？ 学習院？ 双葉？」

「え？ あ、いえ……聖マリアですが。あの、それが何か？」

なぜいきなり学校名なのか……それを尋ねたいのだが、静香は聞き入れてはくれない。

「ああ、そんな感じね。生粋よね？ ずっと聖マリアでしょ。好きなのよねえアイツ。あなたみたいなお嬢様が。やめろって言っても、面倒そうなタイプばかり毒牙にかけるのよ。バージンキラーなんて自慢してるくらい。あ、ひょっとしてもう、ヤラレちゃった？」

万里子には訳が判らない。

(ど、毒牙？ バージンキラー？ そんな馬鹿な……)

どちらも卓巳のイメージからはほど遠い。

「メイドも可愛い子はあらかたお手つきなのよねえ。しよっちゅうココも利用してるみたいだけど……。私が見掛けるたびに女が変わってるわ。悪いことは言わないわ、サカリのついたオスみたいな奴だから、早めに」

「静香お嬢さん、どうしてここにいらっしやるんです!？」

静香の台詞を奪ったのは、卓巳の秘書、宗であった。

「え？ ちょっと、ユキ……宗さん、あなたここで何をしているの？」

「それはこっちの台詞ですよ。キーはここにあるのに……。ああ、

フロントが勘違いしてスペアを渡したのか……全く」

「ちよつとお！ まさか、藤原の名前であなたがこの子連れ込んだんじゃ」

「そんなバカな……何を仰るんです。私はただ」

部屋に入つて来たのが宗だと判るや否や、静香は宗の腕に自分の手を絡ませた。それは、明らかに知人以上の関係を思わせる仕草である。

だが今の万里子は、宗の女性関係に頭を回す余裕などない。二人の間に割り込むと、宗に向かって問いかけた。

「あ、あの、横から失礼します。こちらの方に伺つたんですが……藤原さんはいつも女性と一緒に、こちらにお泊りだとか……」

「え？ はあ？」

宗には意味が判らず……。それを万里子に詳しく聞こうとした瞬間、宗の腕に手を添えたまま静香が口を開いた。

「そうよ！ アイツにとって女は使い捨て。一回したらポイよ」

「ええっ？ いや、それは……いつたい誰のことを」

「しかも、なんで経験の少ないお嬢様狙いか分る？ 病気の可能性がないからだつて。アイツ、コンドームなしでやりたいから、そういう子ばかり引つ掛けるみたい。女の子妊娠させちゃ、お金でケリをつけてるみたいよ。鬼畜でしょう？ 我がイトコ殿は」

「待つてください、静香さん！ それは違います！ 勘違いです！」

イトコがホテルの部屋に女連れ込んだ。

このとき、静香は大きな誤解をしたのである。

静香のいうイトコは従弟で従兄ではない。早い話、彼女は伯母の息子にあたる、藤原太一郎ふじわらたいちろうを想像していたのだ。

だが、静香がそんな誤解をしても無理もないところであった。普段から、この部屋は太一郎か静香が使っていたからである。卓巳が

利用したことは一度も無い。彼はオーナーズ・スイートしか使わな
いはずであった。

さらに言えば、静香は以前もこの部屋で、太一郎の女と鉢合わせ
したことがあった。その時、静香が浮気相手と勘違いされ、女に喚
き立てられて辟易へきえきした記憶がある。

同じイトコでも、卓巳は難攻不落の堅物。静香自身、どれほど擦
り寄っても歯牙しがにも掛けて貰えない。その卓巳が女性を連れ込んだ
とは夢にも思わなくて当然なのだった。

静香の勘違いによる暴言に、万里子の顔が蒼白になる。

宗は慌てて訂正しようとするが、

「どこが違うのよ！ この間手を出したのが代議士のご令嬢で、あ
なただっていい加減にしてくれて言っただじゃない！」

「いや、ですから、それは従兄弟違いです。彼女は」

万里子の前でいい加減にしてくれ、と言った気分だ。

しかし、万里子のほうも宗の姿を見たことで一気に疑問が膨らん
だらしく……。

「そうなんですか？ そんな方だったんですか？ わたし、そんな」

「違います、万里子様。社長はそんな方ではありません。ですから

これは従兄弟違いで」

「宗、ドアを開けたまま何をやってる。私は彼女を連れて来いと…

…静香、こんなところで何をしてるんだ？」

そこに、開いたままドアから卓巳が入ってきたのだった。

「卓巳さん！？ あなたこそ、この部屋に来られるなんてどうした
の？」

卓巳の姿に、静香は宗の隣から飛び退いた。静香の腹が見え見え
で、宗も呆れ果てるが……ある意味お互い様と言っ奴である。

「申し訳ありません、社長。どうも、静香お嬢さんと、万里子様がこの部屋で鉢合わせされました……」

「ねえちよつと待って。ちよつとあなた！ 藤原って、卓巳さんのことなの？ 太一郎じゃなくて？ 嘘でしょ……」

静香はようやく宗の「従兄弟違い」という意味に気がつき、万里子に噛み付かんばかりの形相となる。だが、万里子は卓巳から、父親に異母妹がいることは聞いた記憶があつたが、イトコの話など聞いたことがなく…… 太一郎という名前を聞いてもピンとは来ない。

「あの…… 卓巳さん。お聞きしたいことがあるのですが」

「何でも答えますよ。だが、万里子さん、そろそろ予約の時間だ。話は食事の後で……では、行きましょう」

卓巳は静香の目があるせいか、万里子に対して微妙に親しげに振舞った。そして、これまで自宅でも見せたことのない、笑顔らしきものも見せ…… 卓巳は静香に向き直った。

「彼女は近いうち家に連れて行く。私から話すから、誰にも言うな……いや、言わないでくれ。この部屋はもう使わないから、好きにしている。 宗、後は頼むぞ」

「……はい。お疲れ様でした」

（どうやら静香との関係も社長に知られたようだ……）

そんなことを考えつつ、咄嗟の事態にも芸の細かい卓巳に、感嘆のため息を漏らす宗なのであった。

第二章 恋 (6) 予感

「ちょっと、ちょっと！ アレ何、あの子って？ まさか、卓巳の女なの？ あの堅物がホテルに女……」

静香はパニックを起こしていた。それも無理はないだろう。静香も卓巳を落とそうと必死な口である。これまで何度も色仕掛けで迫っているが 全て失敗。

将を射んとすれば……の目的で宗の誘いに乗ったのは明らかだ。宗自身、自分が馬であることをよく判っている。だが、馬には馬の都合があり……。

「お付き合いされてますよ。今日は急な仕事で、デート中のところお呼び立て致しました。いつものお部屋を商談に使っていたため、彼女にはこちらでお待ちいただいたんです。それを……鬼畜とか言われるんで、焦りましたよ」

「ねえ、ここはもういいって……今夜は上の部屋でってこと？ ええっ！ 卓巳ってセックス出来るの？ あの女ともうヤツたの？」

卓巳の前では比較的言葉遣いも気を配るが、宗の前では言いたい放題の静香である。

「お部屋では何度か二人つきりでお過ごしですが……今のところ、お泊りではありませんね。彼女の門限が十時だそうで……。どこまでの関係かは存じません。ベッドルームまでは一緒しませんので、それとなく伝えるが、どうやら嫉妬心のほうが勝り、宗の言葉がよく耳に入っていないようだ。

「なんなのよ、アレ！？ 聖マリアって言ってたわよ！ 結局、イトコ揃ってウブなお嬢様が好みってわけ？」

「太一郎さんと好みの違う男は少ないと思いますよ」

藤原太一郎は両親、とくに母親から甘やかされて育った典型的な放蕩息子である。一人っ子だったことも大きな要因だろう。今年二十四歳になるというのに、未だに大学に籍があり卒業できていない。卓巳の父は三十年前に家を出ていた。太一郎が生まれた時、先代社長である祖父は「藤原家の跡継ぎは太一郎だ」と言い、跡取りに相応しい名前をつけたという。本人もその気だったが……六年前に祖父・藤原高德が亡くなり状況が一変した。しかし本人は、中々現実を受け入れられないようだ。

確かに、下半身だけは先代社長譲りかも知れない　宗はそんなことを考え、苦笑した。

「卓巳って少数派だと思ってたんだけど……。それに『言わないでくれ』なんてはじめに聞いたわ。私には今まで、命令口調でしか話したことなかったくせに！」

宗は静香の背後に回りこみ、手っ取り早く怒りを静めさせようとする。

腰に手を回し、軽く抱き寄せた。宗に、卓巳の廃品回収をしているつもりはないが……女の裏を探るにはコレが最も有効な手段だ。

卓巳が、女性関係は棚上げにしても宗の手腕を買っているように。宗も経営者としての卓巳を高く評価していた。確かに、卓巳の女性に向ける潔癖さは病的に思わないこともない。だが、それを差し引いても余りある才能だ。今は不安定な卓巳に、何としても絶対権力を持つて貰わねばならない。そのためなら、宗は何でもする心積もりであった。

「知ってるだろ？ 例の件を。社長は本気だぜ。ばあさん好みの女を落とすのに、手段は選ばないんだろうな」

「じゃあ、本気なのね……本気であんな……あ」

『後は頼む』という卓巳の言葉に、宗は忠実に従った。もちろん、

彼の趣味の範囲内で……。

くわくわくわくわく

レストランやショッピング専用の棟に、その料亭があつた。

全個室の店で、本来なら前日までに予約しなければ入れないはずである。

突然のお客に、店は一番小さな部屋を用意した。小さいとはいえ黒壇五尺の座卓が置かれ、普段から二、三人で使用する部屋である。床の間には大きめの花器に季節の花が活けてあり、部屋全体に優しい空気を醸し出していた。

そんな中、座椅子の肘掛けにもたれ掛かり……なんと卓巳は大笑いしている。

万里子は呆れつつ、

「わたしは本気で心配したんですよ。イトコって仰るし、藤原さんって言つても否定されないし……。だから、もし卓巳さんが本当にそんな方だったらどうしようって」

「ああ、悪い悪い……確かにイトコには違いない。まあ、奴ならあの契約書は、間違いなく有名無実と成り果てるだろうな。太一郎の隣で寝て、一分と安全ではいらぬまい」

「そんな……」

「だが、良かったな。鉢合せしたのが静香のほうで。我がイトコ殿が来ていたら、今ごろ君は問答無用で押し倒されてベッドの中だ」

座卓の上にはお銚子が二本空になっていた。卓巳は二合弱でかなりご機嫌のようだ。それほど、酒に強いタイプではないらしい。

「卓巳さん……そういった冗談はやめて下さい！ 酔われてるんですか？」

「何を今更気取ってるんだ？ その手のことはよく知ってるだろう？ それとも、君はレイプのような乱暴なセックスが好みなのか？ だったら太一郎とはお似合いの……」
「イヤッ！ やめて……わたし、わたしは……嫌です。そんな方に近づきたくもありません！ 二度と言わないで！」

万里子は真つ青になり震えだした。あまりの反応に一気に酔いが醒め……卓巳は我に返る。

「……すまない。つい、気分が良かったんで、飲み過ぎたようだ。本当に、悪かった」

「そ、その方もお邸にお住まいなんですか？ わたしは……そ、そんな方と一緒に暮らすんでしょうか？」

震えの治まらない唇から発せられたのは、不安を孕んだ涙声であった。

万里子は今にも、「契約を白紙に戻したい」と言い出しそう……卓巳は慌てる。

「あ、いや……だけど、君が一緒なのは僕だ。従兄の妻にあたる訳だから、彼も何もしないだろう」

言ってる側から卓巳の胸にも不安が過ぎる。

(ほんとうに大丈夫だろうな……)

「でも……でも、あなたはお帰りが遅いんでしょう？ 出張とかあれば……わたしは一人きりに」

「鍵をつけよう！ もちろん今も付いてるが、更に頑丈な内鍵を取り付ける。寝室もバスもトイレもだ。大丈夫だ、奴には指一本触れさせはしない。なんなら、契約書に書き足してもいい」

卓巳は滑稽なほど必死になって、揺れ動く万里子の心を引き止めようとした。

「わかり……ました。あなたを信じます。……信じてもいいですか？」

「ああ、もちろんだ」

安堵のため息を吐きつつ、卓巳はこれまでにない優しい瞳で万里子を見つめるのだった。

第二章 恋 (6) 予感(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

さてさて、ここで訂正が入ります。

実はですね、スイートルームをスイートと記載しておりました…
このほうがゴージャス感があるかな〜とか思ってたんですが、どう
やら意味が違ってくるらしく(汗)

それって洒落にならないじゃん！ ということで、気付く範囲内で
訂正を行いました。

アホなだけでなく早とちりで粗忽者なんで…何卒、ご容赦下さい m
() m

わざわざブログまでお越し頂き、ご指摘下さったRさま！ どうも
ありがとうございました(礼)

では、引き続きよろしくお願い致します(平伏)

第二章 恋 (7) 一夜の設定

朝六時 万里子が立っているのは、なんと自宅前だった。

彼女の後方にはBMWが停まっており、ちょうど卓巳が降りてくるところだ。

「大丈夫か？」

「あ、はい。……たぶん」

「お父上には僕から話すから、心配は要らない」

「……はい」

隣に立つ卓巳の前髪が、朝のひんやりとした風に靡いている。十月も半ばを過ぎると、朝晩はかなり涼しい。あと半月もすれば、今度は冷え込んでくるだろう。

だが、今の卓巳には外気温などどうでもよい風情だ。

この日まで、卓巳との婚約はもちろん、デートを繰り返していることなど万里子の父は知らない。あのパーティの翌日に、卓巳の秘書も一緒に会っただけだ、という万里子の言葉を信じているはずだ。万里子は心苦しかったが……、

「今、融資の手続きが進んでいる。完了前に僕たちのことを知れば、彼は融資を断わってくるんじゃないかな？」

卓巳にそんな風に説得され、それがでっち上げであることを知らない万里子は素直に受け入れたのだった。

そして、万里子の父に報告する段取りとして、卓巳は“既成事実”を上げたのだった。

くくくくくくくくくく

昨夜、ホテルの部屋で二人は真剣な顔で話し合った。

「今夜、僕らはこの部屋で一夜を共にする。携帯には出るな、君から連絡することも駄目だ。その……愛し合うあまりつい夢中になって、最後の一線を越えてしまった」と言う設定だ」

卓巳の言葉に内容に、万里子は薄っすらと頬を染めた。

「その設定は……卓巳さんが考えられたんですか？」

「いや、僕はその方面は明るくない。宗に聞いたところ、男女の関係を強調すれば……父親というのは一瞬怒っても妥協するそつだ。

娘をキズモノにした責任を取れということだろうな」

そう言った卓巳の視線に、過去を責める言葉を覚悟して、万里子は身を竦めた。だが、この夜の卓巳はそれ以上、口にはせず……。

「でも……そんな緻密な設定を作っていたとしても……わたしの口からは、とてもそんなこと言えません」

「いや、それは僕が話す。君と深い関係になったことを父上に話し、結婚の許可を得る。藤原家の人間にも……まあ、おばあ様にも同様に話すことになるが」

「どうして？ そんな……それこそ、ふしだらな女に見られて、結婚なんか許してもらえないんじゃないやありませんか？」

「交渉事にはルールとタイミングがある。この方面は明るいので任せてくれて構わない」

「判りました。卓巳さんに全てお任せします」

静香が飛び込んで来たあの日から、数回デートを重ね……ようやく二桁に乗った辺りであろうか。

当初、全てが偽装なはずだった。二人は周囲の親しい人間を騙す相談をしているのである。それなのになぜか楽しく……万里子は卓巳と過ごす時間を心待ちにするようになっていた。

卓巳は、万里子の弱味を引っ張り出して結婚を強要した男、のはずだ。しかし、最初の印象とは違い、卓巳が恐ろしく真面目で不器

用な人物だと知ると……。元より中絶に関しては、万里子の中には後悔の念しかない。それが潔癖な卓巳には許せないのだ、万里子は責められても仕方ないとすら思える。

卓巳は女性に対して真摯だからこそ、タイムリミットを設けられたような結婚には応じられないのだろう。だが、人生の終焉が近づいた祖母のために、自らの信念を捨てるなんて……。といった、尊敬すら万里子は抱き始めていた。

卓巳の語った事情に、更に深い意味があるなど知るわけもなく……。

くわくわくわくわく

二人で食事を取り、部屋で映画を観て、好きな作品について語り合う。突然、卓巳に仕事の電話が入った場合でも、文句を言うこともない。万里子はごく自然に卓巳の生活に入ってきて、彼はその存在を心地良く思っていた。

やがて夜も更け……。万里子はベッドルームへと引き上げた。ベッドは二台ある。予行演習のためにもちょうどいい。そう思いながらも、卓巳は仕事を理由にリビングに残ったのだった。

万里子が奥のベッドルームに消えて、卓巳は大きなため息を吐いた。

明日の朝のこともある。万里子の父にとっては、娘が外泊し男を連れて戻るのでから一大事であろう。女性の親に結婚の了解を得る

まさか、自分の身に起こると思ってもみなかった。さすがの卓巳も動揺は隠せない。しかも、万里子の父に話すということは、いよいよ結婚に踏み切るということだ。

その万里子だが……卓巳は彼女と過ごす二人きりの時間に慣れ始めていた。だがそれは、卓巳にとって危険な感情に他ならないものである。

万里子の望んだ動物園にも二人で出向いたが……。彼女の母親が喜んだというパンダは既に亡くなっていた。そんな万里子のためにと卓巳は神戸の動物園のパンフレットを取り寄せたのだ。そこにはまだパンダがいる。万里子が少しでも喜んでくれたら……。

卓巳はこの時、自分の中に次々と湧き上がる感情に、身震いしたのだった。

(私は何のために女の機嫌を伺おうとしてるんだ?)

男が女の機嫌を取るのはただ一つ、セックスのためだろう。大概の男は、女性をベッドに連れ込むために、様々な手段を用いるのだ。そこまで考えて、卓巳は慌てて動物園のパンフレットを破り、ゴミ箱に叩き込んだ。

だが……今、卓巳の前には、清掃係に回収される直前に拾い上げた、二つに裂かれたパンフレットがあった。

第二章 恋 (8) 卓巳の傷

今なら、まだ間に合う 卓巳は自分の心に投げかけた。

馬鹿げた契約書など必要ない。茶番を終わりに……いや、真実にすればいい。婚姻後に関係を迫ることはルール違反になる。だが、今なら……。

卓巳と万里子が交わした契約書は入籍後に有効となるものであった。もちろん、万里子が望まないのに関係を強要することなど出来ない。それは契約書の問題ではなく、ただの犯罪だ。

だが、互いに独身で二十歳は越えており、幸か不幸か、結婚に向けての話も進んでいる。そのまま契約書を破り捨てゴールインするだけ、となるはずだ。万里子さえ同意すれば……卓巳は意気揚々とそこまで考え、ピタリと思考は止まった。

(拒否された場合はどうなるんだ？ 万里子は深い関係を迫った男と、偽りの結婚をしようとするだろうか？)

結婚を真実にしようとした相手と同じ部屋で 隣のベッドで眠ることになるのだ。卓巳にとっても苦痛だが、万里子にとっては恐怖だろう。その時は……契約を盾に強行するか、あるいは飴と鞭で強請るか。

そこに到って、卓巳は完全に万里子と性的関係を結ぶ気になつてる自分に驚く。だが……卓巳にはそれ以前の段階で、越えなければならぬハードルがある。

その時 オーナーズ・スイートに火災警報器のベルが鳴り響いた。

卓巳は咄嗟に受話器を掴むが……慌てて放り出し、万里子のいる

ベッドルームに向かう。ノブを回すが、そこはすっかり施錠されていた。

「おい、おい万里子！ 開ける！ 火災ならここは一番危険だ。早く開けるんだ！」

ドアを叩き卓巳は叫んだ。瞬間 全ての電源が落ちる。室内は真つ暗闇になった。

その直後にドアが開き、万里子が飛び出してきた。

「いやっ、怖い！ 卓巳さん！ 助けて！」

それは、素肌にバスローブを羽織っただけの姿であった。髪からは雫が滴り落ちている。手で押さえただけのバスローブの前は開きかけ、白い谷間も無数の水滴で覆われていた。……その姿で、卓巳の胸に万里子は飛び込んできたのだった。

くくくくくくくくく

火災警報機が鳴った瞬間、万里子はシャワー中だった。

卓巳のことは信頼している。だが……彼も男だ。不意にどんな気分になるか判らない。万里子は念のために、とドアに鍵を掛けたのだった。

鳴り響く警報ベルの中……万里子は真つ先に服を着ようとしたのだ。卓巳の前に全裸で出て行くことは出来ないし、したくない。

(どうしよう……時間はあるかしら?)

そんなことを考えながら、バスローブを羽織り洋服を集めている最中だった。ドアをぶち破りそんな勢いで卓巳がノックする。返事をするべきかどうか、迷った時、全ての電源が落ちたのだった。

「大丈夫。大丈夫だ、僕が居る」

卓巳はそう言いながら、万里子を身体を壊れ物のように引き寄せ、抱きしめてくれた。

直後、卓巳の携帯が鳴る。それは支配人からの電話で、コンピュータの誤作動……そんな言葉が万里子の耳にも入り、電話の最中に警報機は鳴り止んだ。

電気が戻るまではしばらく非常電源のみだ、と卓巳は口に出して言う。傷病人の出ないように各階を廻って、特にエレベーターの閉じ込みがなかったか気をつけるように、卓巳は携帯を通じてそんな指示を出す。

万里子はそんな卓巳を非常に頼もしく感じていた。卓巳の胸の中は安心できる。卓巳なら……。万里子は、尊敬と信頼の眼差しで一人の男性をみつめ続ける。

そしてそれは、すぐにも愛に変わることを示していた。

今、この時、二人の心はすぐ傍まで近づき……。卓巳の言った「愛し合うあまりつい夢中になって……」とつとつ最後の一線を越えてしまった」という事実は芝居ではなく、真実になりかけていた。

く*く*く*く*

しかし、そんな卓巳の前にハードルが立ちはだかる。

人並みに愛を得ようとした彼は、土壇場でそれを神に許されなかったのだった。

彼が愛を失くした原因、それは 母であった。

卓巳の母・響子きょうこは、五歳の卓巳を置いて家を出た。しかし、父・卓哉が亡くなり、その数年後、再婚して卓巳を引き取ったのである。だが、留守がちな長距離トラック運転手の夫の目を盗み、家に若い男を連れ込んでセックスに明け暮れた。思春期の卓巳の真横で行為に及んだのだ。挙げ句、年に一度は妊娠したと言い、夫に内緒で近くのうらぶれた産院で中絶を繰り返していた。

妊娠しやすい体質で何度墮ろしても出来る、お前は、資産家の御曹子の種だから産んだのに、こんなことなら、お前も墮ろせばよかった。そう、何度も罵られたのだった。

卓巳が女性の妊娠中絶に過敏に反応するのは仕方のないところだろう。

そしてセックスも……十五歳の少年が女性に抱く憧憬を、母は粉々に砕いた。彼は母という女を憎み、セックスを嫌悪した。それだけじゃない。母を女に変える男も、母のセックスに興奮した自分自身をも赦せなくなり……。

卓巳は持ち前の自制心を發揮して、強く自分を戒めた。だがこの時の彼に、愛と欲望の違いなど判るはずもなく。

十五歳の少年は、その人生から“愛”を消し去ったのである。

第二章 恋 (8) 卓巳の傷(後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

卓巳は鬼畜というより、天然に思えて来たんですが……どうでしょう？ (苦笑)

数回、卓巳と万里子の切ない過去が続きますが、引き続きよろしく
お願い致しますm () m

第二章 恋 (9) 障壁

だが、卓巳も十五の少年のままではない。

数年が経過し、彼を苦しめた母親も亡くなり……。大学生になった卓巳にも淡い思いを抱く女性が現れたのだ。

しかし、それは卓巳に新たな悩みを生むことになってしまった。セックスを嫌悪した彼は、自分を厳しく律するあまり……。ある時期を境に、肝心な部分がピクリとも反応しなくなったのである。

「勃起機能障害」　今から約十年前、卓巳が初めて訪れた病院で下された診断は、かなり重い心因性の性機能障害であった。生殖機能に問題はないものの、彼は性的事柄に関する全てを深層で拒否していたのだ。

薬で一時的な回復は見込めるが、若いのだから時間をかけて根本的に癒していくほうがいい　そう勧められたが……。彼はその治療を受けなかったのである。

卓巳はかなりの面で他人より優れていた。そんな自尊心が、男性機能に欠陥があることを認められなかったのだ。

その結果、彼は暴拳に出る。憧れの女性を口説き落とし、ベッドインまで漕ぎ着けたのだ。だが、誰も卓巳のような男が、二十歳過ぎまで未経験だと思っではない。焦り・もたつき・下着すら脱がせられず……。無論、六年近くも起き上がらなかったものが、焦燥感の只中で目覚めるわけもなく。

相手の女性からは嘲笑・罵倒され、卓巳は学部中の笑いものになった。それから十年……。卓巳が二度と女性に近づくことはなかったのである。

大学三年で司法試験に合格するほど頭脳明晰だった。二十三歳で巨大グループを率いるだけの才覚とカリスマ性を併せ持つ男。藤原

卓巳は数年のうちに、間違いなく日本を代表する経営者となるだろう。

いや、既にニューヨークタイムズ誌の表紙にも掲載され、最もセクシーな日本人企業家と言われる一人だ。その卓巳が三十歳まで女性経験がないとは誰も思わない。

結婚はしないのではなく、出来ない。

女性を愛さないのではなく愛せないのだ……心も体も。卓巳の中に“愛”は存在しなかった。

その卓巳が十年ぶりに、自らの男性自身を排泄行為以外の目的を持って触れた。

“愛”を見つけた気がしたからだ。万里子を抱きたいと思った。妻にしたい、ただそれだけだった。非常灯が点る薄暗い中、万里子に気づかれぬよう、それを繰り返す。

そして時間は過ぎ……彼の体はまるで思い通りにはならず。

卓巳の胸に絶望感が広がった。やはり、自分は一生誰も愛せない、愛してはいけない、人を愛する資格がない。その瞬間、煌々とした灯りが室内に甦った。同時に、卓巳の心を闇に墮としたのだった。

くくくくくくくく

一方、万里子はわずかバスローブ一枚の……全裸に近い状態で、卓巳に抱きつく自分に驚いていた。卓巳の体に触れ、鼓動が治まらない。恐怖や嫌悪ではなく、それは恋がもたらす“ときめき”であった。

そして、卓巳が自分自身と葛藤していたその時、彼女もまた、自らの過去と戦っていたのである。

万里子は四年前の夏、二人組の男に襲われた。

場所は、避暑に訪れた軽井沢の別荘である。父と家政婦の香田忍こうだしのぶと三人で行くはずだった。直前に仕事の関係で父の合流が遅れたりしなければ……。

だが、そこは毎年訪れる場所だった。とくに危険を感じることもなく、万里子は忍と二人で先乗りしたのである。事件はその最初の夜に起こった。どうやら二人組の犯人は、昏間に別荘が女二人であることを下見していたらしい。

深夜　ガラスの割れる音で飛び起き、忍と万里子は恐る恐る様子を見に一階へ下りて行った。道路に近い方のガラスが割れ、室内にはこぶし大の石が転がり……。ただの悪戯だろうと思ったところに、侵入者が姿を見せたのである。

犯人らは六十近い忍を殴り気を失わせた後、通報できないように縛り上げた。目的は明らかに万里子であった。万里子は二人の男に捕まり、下着を引き裂かれ、代わる代わる陵辱を受ける。強姦と言う形で彼女は処女を失った。

決して卓巳の言うような……「自ら男に身体を許した」のでも「ふしだらな女」でもない。

むしろ、それまでデートすらしたことがなく、キスはおろか、手を繋いだこともなかった。万里子は、淡い憧れ以上の恋愛をしたことがなかったのだ。

夜明け間近に忍は気付き、必死にロープを解いて万里子を探す。

そして、階段の踊り場で彼女を見つけ……。おそらく、その直前まで犯人らは万里子を放さなかったのだろう。両膝を立てた格好のまま、朦朧とした意識で天井を見上げていたのだった。

忍にとって万里子は娘同然であった。四歳の頃から母親代わりとなって大切に育ててきたのだ。忍は万里子を抱き締め、一頻り泣いた後、

「お嬢様……救急車を呼んで病院へ行きましょう。取り返しのつかないことになる前に、早く処置してもらいませんと」

「だめよっ！ お父様に知られてしまう。こんなこと……お父様には知られたくない！ 悲しまれるわ。仕事で遅れたご自分を責められるかも……。そうだったら、わたしはもう娘ではいられない！ お母様の傍に行くわっ！」

母代わりとはいえ家政婦に過ぎない忍には、半狂乱で泣き叫ぶ万里子を強制的に連れて行くことは出来ない。万里子は忍の忠告を振り切り二時間以上シャワーに籠もり、ボディソープが一本空になるまで身体を洗い続けたのだった。

十四年もの間、再婚もせず、母への愛情と約束を糧に万里子の成長を見守り続けてくれた父。小学生の頃、遊びに行く約束が守れず、親戚の一家に万里子を任せただけがあった。その時に万里子がほんの些細な怪我をして……父はいつまでも自分を責めていた。それとは比べ物にならないほど、この夜負った傷は深い。何としても父にだけは知られまいと、万里子は心に決めたのだった。

しかし 彼女の受ける傷はこの夜だけに留まらなかったのである。

第二章 恋 (10) 回り道

事件から一ヶ月が過ぎ、妊娠を心配する忍に「問題はなかった」と万里子は嘘をついた。

季節は、夏から秋へと移る。そして、その秋が深まる頃……忍は万里子の嘘に気付いたのだ。事件から既に、二ヶ月以上が過ぎていた。

忍は慌てて知り合いの産婦人科に万里子を連れて行く。そのとき、妊娠四ヶ月目……間もなく十五週と言われる。人工中絶の手術で比較的安全な時期は過ぎており、万里子には迷う時間すら残されていないのだった。

「お嬢様に万ーのことがあっては……旦那様に相談致しましょう。その上で」

「駄目よ。絶対に駄目。お願いだから言わないで。お願いだから……」

万里子は中絶を決め、忍はそれに従った。手術の同意書を用意してくれたのも忍だ。誰のサインがあるかなど、あの時の万里子には念頭にも浮かばなかった。

父に嘘を重ね、入院して手術を受け……いつまで苦しめばいいのか、と涙に暮れる頃、万里子は医者から絶望の淵に落とされたのだ。それは、妊娠中期に入っただけの中絶だったため母体に掛かる負担が大きく……将来妊娠は難しいと言われてしまったのである。

忍は責任を感じ他の病院を廻ったが、診断に何処も差はなく。ならば治療のために、と著名な病院を探そうとした時、万里子が忍を止めたのだった。

万里子は殺した我が子のことを考えていた。

手も足もあつた、心臓も動いていた。その心臓を自分は止めてしまったのだ、と。

悪魔に与えられた子供には違いない。例え産んでも愛することなど出来ないだろう。しかし、子供の母親は、紛れもなく万里子であつた。

父親は罪を犯した。だが、その罪を償うのはあの子ではないはずだ。思いは堂々巡りで、やがて万里子の中に自責の念を積もらせていく。

数年先には愛する人と出会い、結婚して、たった一人の男性に全てを捧げるつもりだつた。そうして生まれてくるはずの命。

卓巳に聞かれた通り、子供は女の子だつた。十二週を過ぎれば役所に死産届を出さなければならぬ。戸籍には載らなくても……せめて名前くらい、と『愛実』と名づけ葬つた。

万里子は何度も死のうと思つた。だが、父を残して逝くことは出来ない。万里子は、嘘を吐き続けた責任を取らなければならぬのだ。

そして……全ては子供を殺した罰だと思い、子供が望めない身体を受け入れ　恋も結婚も諦めたのだつた。

だが、卓巳との出会いは万里子の心に小さな灯りを点すことになる。

今この瞬間、嫌悪と恐怖しか感じなかつた男性に、万里子は抱きついていて。暗闇は、あの夜の恐怖を思い出し、多分一人ではパニックに陥っていただろう。万里子は卓巳が傍に居てくれたことに、心から安堵したのだつた。

そして万里子は、卓巳の心にも何らかの傷があることを感付く。

万里子の男性関係や妊娠中絶を口にするとき、卓巳が責めているのは万里子ではなく他の誰かのような。そしてそれは両刃の剣返す刀で自らを苦しめている。

卓巳は決して万里子にセックスを要求しない。どんな事情があるにせよ、契約書から削除するほどの自信で万里子を性的対象にしない男性。

奇しくも、卓巳を苦しめる原因が、万里子にとっては卓巳を信じる要因となっていた。

万里子は一瞬、卓巳に全てを……強姦されて妊娠したのだということをお話そうか、と思った。

卓巳のことだ、万里子に同情して労わってくれるだろう。しかし、事実には何も変わりはない。どんな形であれ万里子が子供を墮胎したことに違いはないのである。

ましてや、二度と子供が産めないとなれば……尚のこと、話してどうなるものでもない。

万里子はほんの僅か、卓巳との距離を取った。縋りつく指の力を緩めた程度ではあったが。その理由は……やはり自分は、人を愛してはいけない、人を愛する資格がない。

心に同じ思いを抱え、わずかに点った二つの灯りは、お互いを照らすことなく消えて行った。

だが、運命と、他人の悪意にのみ傷つけられた二つの魂に、神は試練とともに、チャンスを与えたのである。

くくくくくくくく

非常灯だけならともかく、明るいライトの下で、この体勢はお互

い恥ずかしいものである。

二人が本物の婚約者であるならいざ知らず……。今の二人は卵から孵かえったばかりの、ヨチヨチ歩きの雛ひな同然であった。

「卓巳さん……」

「大丈夫か、万里子？ 怪我はないか？ 身体が冷えたようだ、もう一度シャワーに……」

「あの、さつきから万里子って」

「これまで、卓巳は彼女のことを『君』と呼びかけるか、人前では『万里子さん』と呼んでいた。

「ああ、申し訳ない。つい……これからは注意しよう」

「いえ、構いません。だって、わたしはあなたの妻になるのですから……」

おずおずと、それでもハッキリと万里子は言い切った。そして慎重に言葉を選ぶ。

「実は……わたし、男性に失望することがあって……男の方は信じていませんでした。でも 卓巳さんは違う。あなたはこうして暗闇で支えていて下さったにも関わらず、決してわたしの身体に触れようとはされなかった。『穢れた身体だから』と言われるのは辛いです。……それでも約束を守ってくださいるあなたを、わたしは尊敬します。本当は今夜も、結婚後も、少し不安でした。でも今は、わたしはあなたのお役に立ちたいと思っています」

（……二年間で一生分を夫に尽くそう。そしてこの人を一生の思い出にしよう）

正直な想いを口には出来ないが、ほんの少しでも言葉にして伝えなかったのである。

そして、万里子の“少しの想い”は無駄にはならなかった。彼女の言葉は卓巳の心に、淡い灯りを残したのだ。

「僕にはどうしても君の行為は許せない。だが、若気の至りという言葉もある。今の君が、ふしだらで恥ずべき女性だとは思っていない」

卓巳はその先の言葉を口にするかどうか迷う。だが、

「形式上でも君は二年間僕の妻となる。何かあれば、妻のことは全力で守る。祭壇の前で神に愛は誓えないが……代わりに、君を失望させないことを誓おう。それでも尊敬してくれるか？」

「はい、もちろんです」

万里子の笑顔は卓巳の中に、不思議な想い抱かせた。

(役立たずの相棒に感謝しよう　こいつのおかげで間違いなく、神に生涯の貞節は誓える)

この夜二人は結ばれた。心は違うものを信じ、体の距離が縮まることはなかったが……。その魂が、お互いを生涯の伴侶と定めたのだ。

急がば回れ、とはよく言ったもので……。この夜に選んだ回り道が、二人の人生を長きに渡り重ねる道標みちしるべとなったのである。

第二章 恋 (11) 朝帰り

そして……朝帰りである。

卓巳とともに自宅に戻り、玄関のドアを開けた瞬間　万里子の父が立っていた。

「た、ただいま帰りました……あの、遅くなって……」

「……」
頭ごなしに怒鳴ったり、いきなり殴りかかったりはしない。だが父の顔は青褪め、頬は見るからに引き攣っている。玄関に微妙な沈黙が流れ、それは無言の圧力となり、万里子の隣に立つ卓巳に襲い掛かった。

とりあえず着替えて来ます、と万里子は独り言のように言い、逃げるように部屋に戻ったのである。

「お嬢様！　万里子お嬢様、どうしてご連絡されなかったんですか？　旦那様はずっとご心配で……朝になっても戻られなかったら警察に捜索願いを出そうと仰られて……。わたくしも心配致しました」
家政婦の忍が万里子に詰め寄った。

疲労の色が濃い。どうやら一睡もしなかったみたいだ。万里子はそれに気付くと本当に申し訳なく思った。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。でも、卓巳さんとずっと一緒だったの。それで……中々電話も出来なくて……」

ハッキリと言うわけにはいかず、万里子は言葉を濁す。

「お、お嬢様……。それは、あの、もしや」

「お願い、忍！　あのことは決して他言しないで。一生のお願いよ！」

忍の手を取って頼み込む。そんな万里子の変わり様に、忍は口を

ポカンと開いたままだ。ほんの数週間前の万里子からは想像も出来ない。

「そ、それはもう……わたくしの口からは何を申し上げるつもりもございません。で、ですが……藤原社長は何も仰られませんでしたか？ 何か気付かれて……」

「初めてでないことはお気づきだけど……高校時代の過ちで一度だけ、って話してあるの。手術のことは……何より、私の身体のことには絶対に言わないで！ お願い。卓巳さんに知られたくはないの。お願いだから」

「ええ。ええ、もちろんです！ あのことは口が裂けても申しません。わたくしが墓まで持って参ります。ですが……ご結婚となりますと」

その後続く言葉……万里子にも、その意味は良く判った。

万一、子供が出来なければ……巨大企業に後継ぎがいなければ、藤原家による経営体制を続けるのは不可能だろう。外部から社長なり役員を迎え、グループは間違いなく分割される。

妻に子供が出来なければ、卓巳は愛人を作るか、万里子と別れて再婚するのではないかと。どちらにせよ、万里子は傷つき悲しむことになる。忍はそれを心配していた。

「判っています。それでもいいの。お願い、卓巳さんは私を妻にと仰ってるの。ずっと、結婚は諦めてたけど……少しの間だけでも、わたしは彼の妻でいたいの！」

忍は万里子の手を継るように強く握り返した。

「お嬢様っ！ 判りました。わたくしはどんな協力も惜しみません！」

見る間に忍の両目が潤み、万里子以上に感極まった表情になる。

「良かった……本当にようございました。お体もそうですが、万里子お嬢様のお心の傷が……わたくしはそれだけを心配しております

た。それが……愛する殿方に望まれてお嫁になんて！ 大丈夫ですよ、きつとお体もよくなっておられます。直にお子様にも恵まれるに決まっております。お優しいお嬢様のことですもの、神様がとびつぎりの幸せを用意して下さっておりますよ」

はらはらと涙を落とし「本当に良かった」を忍は連呼する。万里子は忍に申し訳ないと思いつつ……愛されて嫁ぐのだと信じてくれたことに、救いを感じていたのだった。

くくくくくくくく

万里子の部屋は二階にある。

千早邸は豪邸とは言い難いが、建て売り住宅とも違う、しっかりと造りの洋風建築であった。万里子が生まれてすぐに建てられたので、建築年数は二十年程度だ。二階には、主寝室以外に洋室が三つもある。それは、万里子の弟妹のことを考えて設計されたものであった。

万里子は出来る限り早く着替えて一階に下りてきた。

リビングのソファセットには、卓巳と万里子の父・千早隆太郎が向かい合って座っている。そこには玄関を凌ぐほどの緊張感があった。万里子が一歩足を踏み入れた瞬間、息苦しくなったほどだ。

父親にすれば……卓巳は娘を朝帰りさせた男である。出来る限りの威厳を持って挑みたいところであろう。しかし、その相手は格の違う企業の社長でもあった。どこまで怒りを露にしているのか、そこは思案の仕所だ。

だが一方で、置かれた立場は卓巳のほうが甚だまずいのである。しかも……万里子がおらねば話が進まぬのに、帰宅するなり部屋の

戻られてしまい大弱りだ。

居心地が最悪な中、二人とも無言を貫き、ただ万里子を待っていたのだった。

そして、やって来た万里子は当たり前のように卓巳の隣に腰掛ける。まさかその仕草が、父親の神経を逆撫でしているとは思ってもせず……。

「十時までにはお送りする予定だったんですが……。こんな時間になつてしまい、本当に申し訳ありませんでした」

卓巳は、何はさておき、謝罪を口にするると深々と頭を下げた。万里子も慌てて追隨する。

「お父様ごめんなさい。わたしは……」

「万里子は黙ってなさい。藤原社長、私は大変驚きました。ここ最近、万里子の外出が増え、帰宅も遅くなっていた。だがまさかあなたと会っていたとは。娘は成人には達しているが、まだ学生です。あなたのような方に似合うとは思えないし、第一、周囲も思ってくれないでしょう。どのようなおつもりか存じませんが、今後、娘を連れ出すことはご遠慮願いたい」

万里子の謝罪も言い訳も遮り、父はひと息に卓巳に向かって言い放った。

しかし……。

「それは お約束できません」

卓巳の返事もまた、キツパリとしたものであった。

第二章 恋 (12) 誤解と嘘と真実

卓巳の言葉に、十五畳程度のリビングが少しだけ暑くなった。

抑え切れぬ怒りのためか、万里子の父は頬が紅潮し息が荒くなる。「そ、れは……どういう意味でしょうか？ 娘は、ご覧の通りまだまだ子供……二十歳をほんの少し過ぎた程度の女子大生です。あなたの方が相手にされるとも思いませんが。しかしこれでは、誤解されても仕方がないでしょう？ あなたと交際があった、などと世間に思われたら 万里子の将来にも関わります。その程度の配慮は、あつて然るべきではないですか？」

何がどうあつても父親の心情としては、万里子が卓巳と外泊したという事実から目を背けたいのだ。特別な事情があり、外泊せざるを得なかった 決して男女の関係などではない、と。

だが卓巳としても、いつまでも核心部分から逃げる訳にはいかない。本来の目的は“ソレ”なのである。気持ちに変化があつたとはいえ、忘れることは出来ない。ある意味『特別な事情』であつた。「仰る通りです。ですからこれは、正式なものとお受け取り下さい。

僕と万里子さんの結婚を、お許し願いたいと思っています」

上昇した室温が急速に下がる。

卓巳と万里子は思わず腰が浮いた。……急激に青褪めた万里子の父が、今にも倒れるんじゃないかと思つたからだ。

「お、お父様……ご気分が悪いなら横になつて……」

万里子は立ち上がり父の元に駆け寄つた。そして、ソファにクッションを置き、声を掛ける。だが父は、そんな万里子の手をいきなり掴んだのだ。

「横になんぞなれるかっ！ な、なにを……何をそんな突然……」

「急なことで驚かしてしまい、お詫びの言葉もありません」

「待てっ！ ちょっと待ってくれ！ そんな、つい先日出会ったばかりじゃないか？ それをそんな……」

「確かに、デートにお誘いしてひと月にもなりません。ですが……お会いしたのは半年前です。日比谷にある系列傘下の劇場がオープンセレモニー行ったのですが、覚えておいでですか？ その席で見かけして以来、心に留めておりました。実は、東西銀行の渋江頭取には僕からお願いしました。弘樹君をだしに使って申し訳ないことをしたと思っています」

万里子は、渋江頭取が何らかの条件で卓巳の言いなりになっていることは知っている。だが、父親にとっては寝耳に水の話であろう。

「そんな……ちょっと待って下さい。万里子、お前はどんなんだ？」

「藤原さんを……いえ、卓巳さんをお慕いしております。どうか、結婚を許して下さい！」

父親は万里子の手を掴んだまま放そうとはしない。どうやら、卓巳の隣に座らせるものか、という意図があるようだ。

だが、当の万里子から『結婚』の言葉を聞き………しだいに目が虚ろになる。

「なんで……いきなり、こんなことに……」

小さな声でしばらく呟いていたが、しだいに黙り込んでしまう。

だが、少しずつ冷静になったのか、

「とにかく！ 正式な婚約や結婚は、万里子が大学を卒業してから………ということにしましょう。それで、今日はもうお引取り……」

娘がその気であるなら父親に残された手段は、時間稼ぎ、しかあるまい。しかし、それは卓巳の事情が許さなかった。

「いえ 結婚は出来る限り急ぎたいと思います」

「なっ！ なぜそんな。まさか……」

この場合、親が想像することは一つであろう。腹部に父親の視線

を受け、万里子は慌てている。

「あ、いえ……そんな、そうではなくて……あの」

万里子はキツパリ否定して良いものかどうか、困惑の眼差しで卓巳を見つめた。

この誤解はわざと与えたものである。卓巳は咳払いを一つすると、「恥を承知で申し上げます。実は　昨夜、万里子さんを妻にしました。何も気を配るようなことはしませんでしたので、万一の可能性はあります。僕だけならかまいませんが、彼女に恥を搔かせたくはありません。順番が違わぬよう、来月中にも挙式・入籍と考えております」

とんでもないことを口にしながら、さすがの卓巳も薄っすらと頬を染めていた。

(宗が見たら、芸が細かい、とか言い出すんだろうな……)

そう考え、内心苦笑したが……万里子の頬がピンク色に変わるのを見ると、卓巳の気分も高ぶってくる。

「け、結婚の……了承も取らずに嫁入り前の娘に……」

高ぶるところで済まないのが父親の心境だ。

「待ってお父様！　卓巳さんのせいじゃないんです。わたしも……わたしもそう望みました。卓巳さんの妻になりたかったんです！

お願いです、許して」

「馬鹿者っ！　なんて軽はずみな真似をしたんだ！　藤原家には會長もおられる。中堅企業の娘なんぞ嫁には出来ん、と言われたらどうする気だ！」

千早隆太郎は怒り心頭の様子で立ち上がった。握り締めた拳はブルブル震えている。一瞬、卓巳の中に不安が過ぎった。まさか万里子を殴ることはあるまいが……。

その瞬間、機先を制するように卓巳は立ち上がる。そして、そのまま床に正座して頭を下げたのであった。

世界有数の巨大企業である藤原グループの社長が、なんと娘を娶るために土下座したのだ……万里子の父は怒りの矛先を失い、拳から力を抜くしかない。

「全ての責任は僕にあります。この通り、深くお詫び申し上げます。万里子さんに恋するあまりの暴走は、どうかお許し下さい。会長である祖母の了承を取り、一両日中にも結納の品をお届けにあがりません。もし、万に一つも会長の反対にあった時は……僕が藤原を捨てます。その時は、万里子さんと結婚して千早の家を継がせていただきます。腹は括ってあります。どうかお許し下さい、お願いします」

その真情溢れる卓巳の台詞は、見事、父親から一人娘を奪い取ったのであった。

第二章 恋 (13) 朝帰り 卓巳の場合

都内、大田区の高級住宅地　　ほぼ中央に藤原本家の本邸がある。
千坪は超える敷地だった。

「おかえりなさいませ、旦那様。……おはようございます」

自動開閉式の正門脇には警備員が常駐しており、そこを卓巳が通過すると、本邸に連絡が行くようになっていく。久しぶりに帰宅した若き主人・卓巳に挨拶をしながら近づいたのは浮島うきしま藤吉、藤原家の執事だ。もう五十年はこの屋敷にいるらしい。

一言で言えば、本音が読めず扱い辛い……卓巳にとって苦手な相手でもある。

「ああ。おはよう　祖母上はどちらに？」

「只今皆様とご一緒に食堂で朝食を取られておいでです」

浮島の答えに、卓巳は食堂に足を向け、挨拶だけ済まそうとした。そんな卓巳の背に浮島は声を掛ける。

「秘書の中澤様がお部屋でお待ちです。本日のご出勤が七時のご予定でしたとか……ご不在と、昨日からお戻りでないことをお伝えしておきました」

時計を見ると七時半。

週の半分は帰宅するはずの卓巳がここ数週間ほとんど戻っておらず、帰宅予定だった昨夜も連絡せずじまいであった。

(なるほど、朝帰りの嫌味か……この分だと叔母方にもチクチク言われそうだな)

卓巳はあからさまにうんざりした表情を見せ、ネクタイを少しだけ弛めながら浮島に答える。

「仕事だ。都内再開発の案件で、宗と各ブロックを視察に廻ってい

た」

「秘書の宗様も一緒に部屋でお待ちです」

「……朝の挨拶を済ませ、着替えたらすぐ出る」

会話を聞いていた、メイド二人のクスクス笑いが卓巳の背中に刺さる。卓巳は見取れる程度に頬を歪めたが……浮島のほうが一枚上らしく、まるで無表情であった。

あらためて、この執事は苦手だ、と心で呟く卓巳だった。

吹き抜けの玄関フロアを通り抜け、卓巳は食堂のアーチをくぐって中に入った。気乗りはしないが、祖母はこの家の主人だ。帰宅して挨拶もなしで出かける訳にいかない。ましてや昨夜は無断外泊となっている。この歳で……と思ったが、そうはいかないのが今の藤原家の事情であった。

卓巳の登場に一瞬で話し声が止んだ。

広く長いダイニングテーブルの上座、中央正面に祖母・藤原泉月ふじわらさつきが座っていた。現在は車椅子だ。長い白髪をあえて染めることはせず、いつも通り上品に結い上げていた。

金はあるても、所謂成り上がりいわずゆるの藤原家である。豪胆豪傑で鳴らした祖父・藤原高德ふじわらたかのりは、女好きではあったが経営者としては優秀だった。そんな彼が成功後に欲したのが身分である。すでに華族制度はなかったものの、やはりそれに繋がる血を求め、妻にしたのが泉月だった。

向かって左に、藤原敦ふじわらあつし・尚子なほこの姉叔母夫婦、右に藤原和子ふじわらかずこ・静香しずか・孝司たかしの妹叔母一家だ。孝司は十七歳で姉が出た有名私立の高等部三年である。

「ただいま帰りました。遅くなって申し訳ありません。おはようございます、おばあ様。またすぐ仕事に出ますので、ご挨拶だけ

伺いました」

叔母方は無視して祖母の元に行き、卓巳は頭を下げた。

「おはよう。ご帰宅の予定で戻られないから、心配していましたよ」「いやいや、卓巳くんも一人前の男ということ……それくらいでない」と話してたんだよ」

横から口を挟んだのが尚子の夫・敦だ。彼は祖父の選んだ入り婿である。祖父は能力より自分の思うとおりになる男を選んだようであった。今、敦がお追従を言うのは臯月だ。臯月の可愛がる卓巳にも逆らうことはしない。

「さあ、それはどうか判りませんわよ。お兄様の例がありますもの。どんなアバズレを連れてきて、藤原の家名に泥を塗ることになるやら……」

一方、妻の尚子はどんな時も嫌味を忘れない。実権を握る臯月に真っ向から逆らうことはしないが、正妻と愛人の娘である。仲が良はずがない、といったところか。

無論、父亡き後は役に立たない夫を軽んじているのも事実であった。

「そうですね。第一、正式に婚約なさったわけでもないのにホテルで同衾どうきんなんて……それだけでも、身持ちの悪い証拠だわ」

姉・尚子にほぼ言いなりなのが妹の和子であった。痩せて神経質そうな姉に比べ、本来は大様な性格おおやうなのでつぶりと太っている。夫がいないせいかも知れない。

十八で最初の結婚をして、三年後三歳の静香を連れて戻ってきた。その後、高德の命令で再婚。しかし、孝司が産まれた一年後、強制的に離婚され再び出戻って来る。それは、甚だ外聞はなはなを憚る理由のためであったが……。

敦は中年女性二人の言葉に圧倒され、余計なことは言わずせつせと朝食を取りはじめた。一番利口な手段である。

この席に、彼らの一人息子・太一郎たいちろうはいない。いつものことだ。朝は寝てるか、まだ帰っていないかであろう。高德や母・尚子が甘やかした結果であった。

予かねてから、尚子・和子叔母はどうか卓巳の弱点を探そうとやっきになっている。

当初は、何かと言えば水商売あがりの母のことを持ち出された。その母を結婚前に妊娠させ、祖父の逆鱗に触れ、家を勘当された父の不徳を卓巳が責められたのだ。

だが今、彼女らが必死なのは、昨年発覚した卓巳の下半身事情である。

藤原家の後継者問題にも関わると、朝夕問わず、顔を合わせれば嘔み付いてくる。病院に同行して検査を受け「勃起不全」の治療を証明しろ、と病院の予約まで取ってくる始末だ。

卓巳は仕事を理由に拒否し続けているが……本邸で休めば、叔母に金を掴まされたメイドがベッドにまで忍び込んでくることに、うんざりしていたのだった。

第二章 恋 (13) 朝帰り 卓巳の場合 (後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます！

一気に登場人物が増え、申し訳ありません(汗)

でも、この家に万里子は嫁ぐので、ここからはこちらのメンバーがメインとなります。

この章はもう少し続きます。

何卒、よろしくお願い致しますm()——() m

第二章 恋 (14) 集中攻撃

叔母の尚子は、台詞と共に視線を下方に移しつつ……。

「まあ、ほんとよねえ。あなたのお母様みたいに、妊娠を盾に屋敷に乗り込んで来られるつもりかも知れませんか。お兄様の時は幸か不幸かご自分のお子様でしたけど。卓巳さんは……どうかしらねえ？」

下半身ばかり凝視するのは止めてくれ　そんな怒鳴りたい気持ちを抑え、深呼吸すると卓巳は叔母に向かって答えた。

「お心遣い恐れ入ります。太一郎くんのように複数の女性に乗り込まれないように注意致します」

この程度の嫌味であれば許されるはずだと思ったが、叔母のほうは思わなかったらしい。

「まあっ！ 失礼ですわよ！ 若いのだから仕方ありませんわ。誰かさんのように、欠陥などない証拠ですわ！！」

(……矛盾だな。僕が不能なら、乗り込まれる心配など初めからないじゃないか)

「まあまあ、お姉さま。最近の女性は慎みを知りませんもの。若い男性は誘惑されてしまうのですわ。ましてや、藤原家は国内有数の名家ですもの。若い女性の的にされてしまうんですよ。太一郎さんに魅力がある証拠ですわ」

(慎み、か…… 十八で出来婚した上に夫以外の男の子供を産み、離縁された女の言葉とは思えんな)

「ええ、そうですよ。若いうちに女遊びをして、女性を見る目を

養って、三十前にはつり合いのとれたお嬢様と結婚を、と考えてますの」

(遊びにも限度があるだろう……何人孕ませれば気が済むんだ!)

「うちの孝司にも、太一郎さんを見習うようにと言ってますの。遊びも知らない殿方に大きな仕事は出来ませんわ」

反論は心の中だけに留め、卓巳は大きく息を吸い込んだ。

「それでは、おばあ様……たいしたことは出来ませんが、仕事がありますので失礼してよろしいでしょうか？」

「構いませんが……卓巳さん、お付き合いされている女性がいらっしやるなら、一度お連れなさい」

「承知しました。では、その件で……今夜お時間をいただけますか？」

「ええ。でも、あまり遅くならないように」

「はい」

祖母が、自ら卓巳の相手について口にしたことに半ば成功を感じつつ、一礼して食堂から退出しようとした。だがその時、敦が予想外の言葉を卓巳に投げ掛けたのだった。

「ああそうだ！ 卓巳くん、Nホテルの支配人から連絡があったよ。昨夜は大変お騒がせして申し訳ありませんでした、とね。警報機が鳴ったんだって？ 深夜に十分程度停電したそうじゃないか、災難だったね……折角の夜に」

「支配人は、同伴の女性の方にも心よりお詫び申し上げます、って言ってたらしいわ」

静香が思わせぶりに笑いながら、そう付け加える。

卓巳はその口調に違和感を覚えつつ……あっさりと肯定して見せたのだった。

「そうですね。わかりました、彼女には僕から詫びておきましょう。では、失礼します」

支配人がそんなことを口にする訳がない。鼻薬はなぐすりでも嗅がされてい
るなら別だが、そんな報告を受けた覚えはなかった。おそらくは、
情報源は静香が懇意にするホテル従業員である。スイートに女性
を泊めれば、一夜にして叔母たちの耳に入ることすくも計算済みである。
若くして頂点に立った卓巳に敵は多い。少しでも足元を掬われな
いため、人の動向に配慮は欠かせなかった。

「卓巳さんに女なんて…… 臯月様、よろしいの？ お兄様のように
なっても」

「水商売の女の血が流れてるんですもの、どんな女に入れあげるか
判りませんわよ。財産のためにそこまでするなんて、恐ろしい」

卓巳に欠陥があることを証明し、後継者を変えさせなければ自分
たちに未来はなくなる。臯月の寿命までは知らないが…… 彼女が追
加した相続の条件を知る卓巳の叔母二人は、愚かしいほど必死なの
であった。

く*く*く*く*

宗には別の指示を与え、卓巳は秘書の中澤朝美と同乗して出勤し
た。

朝美と並んでベンツの後部座席に座り、一日の予定を考える。祖
母の臯月は歳相応に夜が早い。八時には戻る必要があるだろう。そ
のためには様々な予定を組み替える必要があった。

まずは、朝九時に予定していた会議だ。卓巳の都合で十時にずれ
たが…… まあ、珍しいことではない。ただ、今朝のような理由で遅
らせたことは初めてだった。

立て続けに会議の資料に目を通す卓巳に、朝美は小声で話しかけた。

「宗さんに聞きましたわ。ご結婚を考えておられるとか。おめでとつございます」

「ああ　ありがとうございます」

卓巳は視線を上げずに答える。

「社長を射止めるなんて幸運な方だね。でも“例の件”以降、社長に縁談は降るほどございましたの……何処がお気に召しましたの？」

臯月が相続の条件に『結婚』を加えて以降、独身主義を公言していた卓巳に縁談を持ち込む輩は多かった。だが、それら全てを軽く一蹴してきたのだ。その卓巳がまさか自分で見つけてくるとは……朝美は想像もしてなかったのである。内心、困った卓巳が自分を頼りにしてくることを願っていた。

朝美の言葉の端々には、女の嫉妬心が滲み出ている。

「聞いてどうするんだ」

朝美の本心を知ってか知らずか、卓巳の声は冷ややかだ。

「同じ女として私に何が足りなかったのか……教えて頂きたいと思ってます。私は、社長のためならどんなことでもしましたの……」

「彼女は、私が命じるまで服は脱がない女性だ」

二年半前のホテルでの醜態を揶揄され、朝美は赤面した。

卓巳のセックスに対する嫌悪感が、女性に対してこういった態度を取らせる。しかし、これが周囲の女たちの悪意を万里子へ向かわせるとは……。この時は想像もしていない卓巳だった。

第二章 恋 (15) 祖母

夜の九時を少し過ぎた頃……。

裏庭に面した廊下を歩き、卓巳は目当ての部屋に辿り着く。

コンコンコン。

手の甲ではなく内側を扉に向け、軽く握った指の関節でノックする。そこは、藤原家の女主人・皐月の私室であった。

「どうぞ」

「失礼します」

卓巳は静かに扉を開き、中に滑り込んだ。室内には皐月と、彼女が呼んだ藤原家の顧問弁護士・沖倉修一郎おきくらしゅういちろうがいた。

沖倉弁護士はすでに還暦を迎えた初老の紳士だ。髪は大部分が白くなっている。以前は白い髭もたくわえていたが、孫に嫌われたとかで、今は綺麗に剃っていた。

「お帰りなさい。お仕事ご苦労様でした」

「ただいま戻りました。お待ちせして申し訳ありませんでした」

祖母の労いねぎらいを受け、卓巳は深々と頭を下げる。

ベッドサイドに立つ沖倉は、皐月からの信頼も厚い。彼は非常に厳格かつ平等な……かつての卓巳が理想とした弁護士であった。もちろん、今でも尊敬する人物である。ただ、彼自身が目指すものはかけ離れてしまったが……。

「沖倉先生も、お待たせ致しました」

卓巳は余計なことは何も口にせず、沖倉にも頭を下げる。すると、先に皐月のほうが口を開いた。

「ひよっとすれば……例の遺言に関わる事態かと思ひまして。沖倉先生をお呼びしておきました」

「お疲れ様。大変だね毎日。だが、大奥様から伺った話が事実なら……そう大変でもないのかな？」

沖倉の顔に和やかな笑みが浮かんだ。それは嘲笑ではなく、年若い卓巳を純粹にからかう口調だ。その証拠に声が温かい。

「そうですね。毎日が充実していて、周囲の声は気にはなりません」
卓巳も僅かだが口角を上げ、笑みらしきものを返した。彼の精一杯である。

「そう……。では、お話を伺いましょうか？」

ベッドに体を起こした状態で、皐月は話を切り出した。

卓巳は数回深呼吸を繰り返した。そして両手を前に組むと、何度もシミュレーションした台詞を話しはじめる。

「はい。お察しのお通り、付き合っている女性がいます。初めて会ったのは今年の春ですが、再会したのは先月です。すぐに交際を始めました。ご報告が遅くなり申し訳ありませんでした」

「聖マリア女子大の学生さんですってね。……色々と、教えてくださる方がいるのよ。わたくしの母校ですしね。親しみが沸くというものです」

そのために万里子を選んだのだ。卓巳にすれば、そんなことは計算ずくである。だが今は、その計算が後ろめたさを抱かせる。

卓巳は万里子のことをざっと説明した。おそらく皐月は卓巳の語る程度のことは承知しているだろう。しかし、四年前のことは知らないはずだ。調べても出て来ないように、卓巳が金で握りつぶしたのだった。

室内は薄暗く張り詰めた空気が漂っていた。卓巳の声以外は、空気清浄機が放つ微かな振動音だけだ。邸内の一番奥にあるこの部屋は騒音とは無縁の場所にあった。

卓巳の言葉に軽く肯きながら、皐月は口を挟む。

「一つだけ、確認しておきたいことがあります。わたくしはもちろんあなたを信じていますよ。そうでなければ、あんな条件は出しません。その……万里子さんとは、どういったご関係なの？」

ここで卓巳は万里子の父に話した内容を繰り返した。

「もちろん、彼女に責任はありません。僕の要求に従っただけのことです。ただ……万ーにも彼女を母のような立場にはしたくありません。来月早々にも入籍し、一刻も早く式を挙げたいと思っています。どうか、結婚をお許し下さい」

皐月は結婚を条件にしながら、自ら卓巳に花嫁候補を薦めることはなかった。それが卓巳には怖くもあり、祖母の思惑、というものが読めない理由でもある。

本当に結婚をさせたいのか……。それとも、一人息子を奪った女の血を引く卓巳に、相続させるのが嫌になったのか……。卓巳を探し出し、藤原を継ぐように説得したのはこの皐月である。祖父・高德は死の直前まで卓巳を認めようとしなかった。いや、きつと墓の中でも、この邸の主然と振舞う卓巳を苦々しく見ているの違いない。そうでなければ……。

卓巳の思考を遮るように、皐月はため息と共に口を開いた。

「それは困りましたね。この家はごく普通の家ではなく、あなたの置かれた立場も一般の会社員とは訳が違います。一度もこちらにお連れすることもなく、正式な婚約者とお披露目は出来ないでしょう。卓巳さん、わたくしはあなたにこの家を任せたいと思っています。そのためにも妻は必要です。ただ、その千早万里子さんが藤原家の嫁に相応しくないと判断した場合は、結婚を許すことは出来ません。彼女には相応の慰謝料をお支払いして、諦めて頂きます。それは、万ーの場合でも、です。よろしいですね」

皐月の言葉に卓巳は黙り込む。

異論があるわけでなく……万一の場合などありえないことに、少しばかりの動揺を覚えたせいだ。それに、藤原に逆らって家を出た父・卓哉の末路を知っている。

そんな卓巳の様子をどう受け取ったのか、皐月は言葉を付け足した。

「卓巳さん、どうかわたくしを失望させないで下さいな。わたくしにはもう、あなたしかいないのですから……」

「……はい、判りました」

皐月におもねる態度は見せず、卓巳は慚然と答えたのであった。

第二章 恋 (16) 妻に出来ない

「どう思われました？ 沖倉先生」

皐月は卓巳が部屋を出たのを見計らい、沖倉に声を掛ける。その声には苦渋の想いが籠もっていた。

「昔に比べて、随分腹芸が上手くなった。なかなか読ませませんね。皐月に比べ、沖倉は幾分軽い口調だ。適当にあしらっていると言う訳ではなく……深刻ぶる皐月を宥める意味もあるのだろう。」

「ですが……妻にした、というのは真実でしょうか？ もしそうなら、たとえどんな女性でも結婚させてやりたいと思います。」

「大奥様にはお気の毒ですが、あれは嘘でしょう。こちらが調査報告書です。」

そう言って、沖倉が差し出した書面には、卓巳にとって命取りのことが書かれてあった。

『藤原卓巳氏は母親の性的虐待を受け、心因性の性機能障害を発症。十年前に治療を拒否されたことにより、重症化の虞おそれがある。また、三十代からの精力減退に伴い、機能の回復は非常に困難と』

皐月は途中で目を通すのを止め、深くため息をついた。

「やはり……あの女の手元に残したのが間違いだったのです。わたくしさえしつかりしていれば……」

夫・高德は、正妻である皐月との間に産まれた息子・卓哉を幼い頃から疎んじた。容貌が母親似であったせいでと皐月は思っている。その拳げ句、卓哉を勘当した後、愛人に生ませた娘二人をこの邸に引き取った。そして、その孫たちを可愛がり続ける。卓哉亡き後も、決して卓巳を引き取るうとはしなかったのだ。結果、卓巳は母親の元で暮らし……心に拭いきれない傷を負った。

皐月にとって卓巳は唯一血の繋がった孫である。皐月は産後の経過が悪く、第二子は見込めないと医者に言われたのだった。そんな皐月に夫は、

「息子は一人いれば充分だ。だが、子供が産めんのなら、お前と過ごす必要はないな」

産褥熱で苦しむ皐月にそう吐き捨てた。

高德は、尚子の長男・太一郎が成人すれば、全ての財産を相続させるつもりで準備していたのだ。しかし、そうならなかったことは誰にとっても救いであろう。高德は商才はあったが、人を見る目はなかったと皐月は思っている。

「かなり慎重に病院を選んで、十分な口止めもしてますが……蛇の道は蛇へびと言いますからな。ただ、天敵である叔母上方の手には落ちないよう、万全を期しておきました」
「面倒を掛けましたね……でも、今月に入って再検査に行っていたなんて」

卓巳の女性に対する反応は、まるで厳肅主義とでも言わんばかりであった。

皐月は予てよりそれが気に掛かっており、昨年、その真因が発覚したのである。当の卓巳は「当時交際中の女性に失望した為に起った一時的な疾患」と説明したが……。

皐月は納得できず……この沖倉に頼んで当時の詳しい診断を担当医から聞き出して貰った。そして、母親による虐待が発覚したのである。

卓巳には何としても立ち直って、幸せな家庭を築いて欲しいそんな思いから、遺産相続の条件に「自分の生存中に結婚し、死亡後も一年は結婚生活を続けること」と加えた。女性から遠ざかるうとする卓巳に、自ら近づいて欲しかったのだ。

皐月の計画は成功したとも言えるが……。

「結婚後に配偶者間の人工授精で子供を持つことは可能だ、とあります。その確認ではないでしょうか？ 彼にとって問題は、性生活ではなく後継者を残せるかどうかでしょうから」

沖倉の返事に皐月は軽く首を振る。

「そうではなく。わたくしが知りたいのは、この相手の……千早万里子さんは、なぜこのような嘘を付き合うのか、ということですよ。まさか、とは思いますが……」

皐月の胸に息子・卓哉の一件が過ぎった。

妊娠させたのだから結婚する、と言った卓哉に、何が何でも反対すれば良かったのだ。優しくて人の好い息子であった。皐月が過保護に育てたせいもあり、およそ切れ者とはいいい難かったが……。

卓哉が駆け落ち同然に結婚して家を出た後も、夫の目を盗んで度々送金した。それも良くなかったのだろう。卓巳の両親はろくに働きもせず、皐月の仕送りに頼り切っていたのだ。それが更なる不幸を招いた。

しかし、卓巳に限って女で道を誤るとは思い難い。だが、万一のこともある。今度こそ見極めて、金目当ての女なら取り返しのつくうちに追い払おう。皐月は、そう心に決めていたのであった。

「言い方は悪いですが……“共犯”ということでしょうな」

「偽りでは意味がありません。やはり、結婚には反対せざるを得ないようですね」

くくくくくくくく

この静寂の中では、どれほど小さな声で話していても、廊下まで

臯月たちの声は漏れてくる。

扉の真横の壁にもたれ掛かり、卓巳は室内の話聞いていた。

あれほど固く口止めし、手を回したはずであるのに……。宗にも知らせず、卓巳自身で動いたのが尻尾を掴まれた原因かも知れない。或いは、沖倉のほうが一枚上ということか。通院記録や診断名、医師の所見まで知られているとなると……。

卓巳のついた嘘は全部バレているのだ。計画はご破算である。

万里子を妻には出来ない……。それだけが心残りの卓巳であった。

第二章 恋 (17) 哀しい月

卓巳が絶望を胸に抱き、佇む同じ頃……万里子は自室のベランダから空を見上げていた。

満月には少し足りない月が、万里子を見下ろしている。晩秋の夜風は冷たく、間もなく訪れる冬を肌で感じさせた。

月は嫌いだっただ、つい昨日まで。それは万里子に四年前の悪夢を思い出させるのだ。

階段の踊り場で、二人の男から代わる代わる陵辱を受けたあの夜……。やがて、万里子の瞳に映るのは、窓から覗く月だけになった。

(月は知っている……わたしの秘密を……わたし身に起こったことを、全て見ていたのだから……)

でも昨夜、停電でスイートルームの灯りが消えた時　あの大きな窓から月明かりが差し込んでいた。

卓巳は万里子を、硝子細工の壊れ物のように抱き締めた。不用意に身体が触れないように……二人の間に空気の壁が作ってくれた。あれは、半裸に近い万里子に対して、卓巳が見せた細かな心遣いだと思っっている。

朝帰りの謝罪と結婚の申し込みに卓巳が口にした言葉　「恋するあまり」の一言を、万里子は繰り返し思い出していたのだ。

(誇り高くて、潔くて……あんな素晴らしい方が現実にはいらっしやるなんて)

卓巳が時折見せる冷たさは、万里子の中絶という行為に対する非難だと諦めている。だからこそ、自分は偽りの妻に求められ、それ

ゆえに、愛されることはないのだ、と。

今、万里子が見上げる月に映るのは……昨夜、月明かりに見上げた卓巳の横顔。ただ、それだけだった。

もう十一時を過ぎている。卓巳は帰り際、「また電話する」と言っただが……今夜とは言わなかった。

卓巳の仕事は終わっただろうか……突然連絡しても邪魔にならないだろうか……。そんな思いを抱え、携帯電話を手に万里子は逡巡する。

卓巳の声が聞きたい。それは万里子の中に生まれた、初めての甘く切ない想いであつた。

くくくくくくくく

一方、今夜の卓巳は珍しく挫折を感じていた。

計画の頓挫を悟り、また、祖母の自分に向けられた哀憫あいびんの情まで知り……これで落ち込まなければ人ではないだろう。

（所詮、あの父と母から生まれた自分だ。父同様、自分の力では何一つ為し得ない……）

万里子と交わした契約書の一文を削除した時、宗はしつこく反対していた。それが卓巳の心をけしか刺したのだ。自分にも女性の誘惑に堕ちる可能性があるかも知れない、と。

宗にも内緒で病院を選び、検査を受けた。結果 投薬・外科手術の必要あり。自然治癒の可能性は限りなくゼロに近い。医者からは立て続けにそんな台詞を言われたのだった。

ゼロの言葉には確かにショックを受けた。だが反面、心が負けても肉体の欲望には堕ちないことを再確認し、ホツとしたのも事実だ。そうでなければ従妹の静香や秘書の朝美など、体が反応すれば迂闊にも応じかねない。嫌悪する女の身体に自らを埋め、精を放つなど死んでも御免である。

だが 万里子は違う。昨夜、卓巳は万里子の全てを知りたいと心から願った。契約書を破り捨て、万里子にくちづけ、震える身体を組み敷いて一つになりたい。嘘偽りのない夫婦になりたいと……。

卓巳は、寝室に置かれたサイドボードからブランデーを取り出した。琥珀色の液体が、グラスの三分の一ほど注ぎ込まれ、常夜灯の寂しげな灯りに揺れる。

徐にグラスを掴むと、卓巳は喉の奥に流し込む。本来、こんな飲み方をする酒ではない。ボトルのラベルには、ヘネシーのリシャールと書いてあった。

万里子は、高校時代のただ一度の過ちで墮胎の罪を背負い、苦しんでいる。幼子を見る眼差しからも、よほど産みたかったのだろう。そんな彼女を救うためには……結婚を真実にし、万里子を母にすることしかない。

卓巳は否定し続けてきた性行為を、初めて肯定したのだ。衝動の趣くまま、身を任そうとした。

だが……、
(算数レベルの問題だな……ゼロには何を掛けてもゼロにしかならない)

臯月に真実を話し白旗を振るべきだ。これ以上苦しめないで欲しい、と泣いて降参すれば、臯月は相続の条件から“結婚”の文字を消すだろう。と、卓巳の冷静なコンピューターが敗北を宣言す

る。

そして、万里子には契約の打ち切りを伝える。だが、千早物産に対する融資は銀行を通じて行う……その件が万里子にとっては何より重要だと、卓巳は信じていた。

もう一杯ブランデーを呷り、奥歯を噛み締めるようにして、卓巳は携帯の発信ボタンを押した。

万里子の携帯ナンバーが順に表示され、揃った瞬間　液晶画面が通話中に変わる。

いくらなんでも早過ぎる、コールもしてないのだ。エラーだと思っ
い一旦切ろうとした、その時だった。

『もしもし？ ……あの、もしもし？』

携帯電話から、微かな万里子の声が流れた。

『あの……あの……』

『ああ……僕だ、藤原だ。やけに早いな、携帯を手に使っていたのか？』

『卓巳さんですか？ 良かった。違う番号に掛けてしまったのかと思
いしました』

その言葉に、卓巳はあまりに早い着信の正体を知る。

『掛けた？ 君も掛けたのか……僕に』

わずかな間が空いた。

万里子の息を飲む気配が、電話越しに卓巳にも伝わる。

『卓巳さんも……掛けてくださっただんですか？ 不思議な偶然です
ね。同じタイミングで掛けるなんて』

万里子の声はさも嬉しげにトーンが跳ね上がった。その声はいと
も容易く、卓巳の脳裏に万里子の笑顔を映し出す。

そして、そんな幻にすら反射的に微笑みを返してしまい……卓巳
は愕然とするのであった。

第二章 恋 (18) 月夜の誓い

『……みさん？ 卓巳さん？』

一瞬、卓巳の中の時間が止まり 万里子の声に再び動き始めた。

『あ、ああ……聞こえてる』

『あの、何か御用だったんでしょ？』

『……いや。君の用件から聞こう』

『そんな……卓巳さんが先に話してください』

『僕は後でいい。何かあったのか？』

恥じらい、頬を染める万里子の姿が目映るようだ。卓巳は少しでも、万里子に偽装結婚の取り消しを告げることを後回しにしたかった。

『そんな……大したことじゃないんです。あの、窓の外をご覧になられますか？』

卓巳の思惑など想像もしてないのだろう。万里子の声は妙に華やいでいた。

『ああ、待ってくれ』

ベッドの端に腰掛けて話していた卓巳は立ち上がった。そのまま大股で部屋を横切り、カーテンを引く。直後、月明かりが卓巳の頬を優しく照らした。

『月がとても綺麗でしょう？ 昨夜のことを思い出したんです。大きな窓から差し込んだ月明かりが……忘れられなくて』

『ああ……綺麗だな』

その時、卓巳の瞳に映ったものは月の光ではなかった。

震えながら自分に縋る万里子の細い指。濡れた髪が張り付いた白い首筋。毛先から滴り落ちる雫は、透けるような肌を伝い、胸の谷間へと消えて行った。

卓巳にしがみ付きながら、決して自分の胸や肌が卓巳に触れぬように身体を支えていた。万里子は卓巳の気遣いを称えたが、卓巳には彼女の憤み深さに思えたのだ。

ただ一度の過ちも、おそらく男に責任があつたのだ、と。そして、もし自分であつたなら 何と引き替えにしても子供を産ませてやつたものを……。

(諦めきれない!)

昨夜、胸を照らした小さな灯火ともしびは、今夜の淡い月光を浴びて僅かながら輝き始めた。そして、“降参”して床を叩こうとした卓巳の手を止めたのである。

『万里子。今度の日曜は空いてるか?』

『はい、何も用事はありませんが』

『では、朝十時に迎えに行く。我が家でランチを一緒に取るう。祖母上に紹介したい』

『あの……では、話されたんですか?』

『ああ、昨夜の出来事を話して、すぐにも入籍したいと言った』

『昨夜の出来事って……あの、まさか、本当に?』

『なんだ、忘れたのか? “愛し合うあまりつい夢中になって、最後の一線を越えてしまった”はずだろう?』

『……………』

卓巳は置かれた状況も忘れ、可笑しそくに口にした。万里子はどうやら冗談だと思っていたらしく、絶句している。

『あの……おばあ様は何か仰っておられましたか? 結婚前に、とお叱りではありませんか?』

『祖母上より、問題は叔母方だな。実は、僕の口から言うまでもなく、昨夜女性をホテルの部屋に泊めたことは筒抜けでね。今朝、戻るなり冷やかされた。僕は、叔母……父の異母妹たちには疎まれて

いる。かなり酷いことを平気で言う方たちだから、君にも遠慮はしないだろう』

そうなのだ。卓巳にとって敵は祖母の臯月ではなく、叔母二人である。

彼女らの動向により、祖父の代から会社にいる古参の役員は、尚子の夫・敦か、長男・太一郎を時期社長に推しているのだ。

『叔母たちは、僕らがどういった関係なのか……その辺りをしつつこく訊ねると思う。だが、それに関する質問は無視して構わない。必要なら全て僕が答える。嫌な思いをするかもしれないが……出来る限り庇うつもりだ。ぜひ、来て欲しい』

『ええ、もちろんです。何を言われても私は平気ですから……』

『だが……おそらくは、君の想像以上の方たちだから。僕は』

ガタンッ！

ドアの向こう　居間兼書斎のほうから音が聞こえた。卓巳は携帯を抱えたまま、扉の前まで行き、一気に開け放った。

くわくわくわくわく

「ああ、君か」「申し訳ありません」「寝室には不要だ……書斎のほうに」

そんな声が電話の向こうから聞こえる。

『あの……卓巳さん？』

『ああ、すまない。メイドに夜食を頼んでいたんだ。これからまだ仕事でね』

『す、すみませんっ！ わたし、長々とお邪魔してしまっ……』

『気にする必要はない。掛けたのは僕だ。 じゃあ、日曜日に』

『はい、おやすみなさい』

『おやすみ』

万里子は電話の向こうに聞こえた女性の声に、驚くほど嫉妬していた。

(こんな遅くまで、メイドに仕事をさせるの？ それとも別の理由が……)

そして、契約書に書かれた別項が脳裏に浮かぶ 『万里子は卓

巳の交遊関係に一切不満を唱える権利を持たない』

結婚後は同じ部屋の隣のベッドで眠ることになる。もし、卓巳が隣のベッドで他の女性と愛し始めたら……万里子には、文句を言うことも逃げ出すことも出来ないのだ。

初めての恋は小さな喜びと大きな不安を、万里子にもたらしたのであった。

く*く*く*く*

「永瀬くん、私は君に夜食など頼んではないが……」

「尚子様のご命令です。遅くまでお仕事をされている卓巳様に、とマフィンとお紅茶をお持ち致しました。休憩でも取られてはいかがですか？」

「……」

尚子の部屋付きのメイド・永瀬あずさであった。二十六歳と若いですがすでにバツイチで、男の悦ばせ方を知り尽くしている女だ。彼女

は何度か太一郎と関係したらしい。それを捨てられたと大騒ぎし、今は、尚子からいくらかの手当てを貰っているという。

そのため、今夜のように何かと理由をつけて卓巳に近づいてくる。どうやら尚子の命令で、卓巳の欠陥を証明するのが目的らしい。数ヶ月前には、酔って帰宅した卓巳のベッドに潜り込んできたほどだ。

「そう睨まないで下さいませ。お夜食をお待ちしただけですわ。それに　どうぞ、あずさとお呼び下さい」

「永瀬くん。私は紅茶もマフィンも嫌いだ。叔母上のお心遣いだけ頂こう。　下がってくれ」

「卓巳様があのように情熱的な方だなんて……私、知りませんでしたわ。“氷のプリンス”と呼ばれていらっしやるのをご存知ですか？　羨ましいいわ……」愛し合うあまりつい夢中になって『どのように最後の一線を越えられたのか、私にも教えていただけませんか？』

あずさは、一旦テーブルに下ろした紅茶とマフィンを、下げるフリをしながら……卓巳の傍に跪ひざまずいた。そのまま、卓巳の太腿にそつと手を置き、悩ましげな表情でFカップの胸を彼の膝に押し付ける。

(全く！　女という生き物は……)

万里子との会話で浮き立った心に冷水を浴びせられた気分であった。

しかし、なぜか卓巳の周りにはこの手の女が多く群がる。いや、多くの女性に好意は持たれるのだが、決して彼から口説くことはない。結果、自ら言い寄るあずさのような女ばかりが残るのだ。

彼女らの存在が、卓巳の思春期に受けた精神的外傷トラウマに塩を塗り込み、悪化させる要因ともなっていた。

「君に教える義務はない。その汚い手を私の体からどけてくれ。不

愉快だ」

「そんな、ひ……ど」

見上げた卓巳の眼はあずさの胸元など欠片も映してはいなかった。なぜなら、ほとんどの男が豊かな胸の谷間に覚える欲望も、卓巳が感じるの吐き気だけだ。

いつになく不快を露にする卓巳に、諦めて立ち去ろうとしたあずさだが……出て行く寸前にとんでもない言葉を吐き捨てる。

「ああ、そう言えば……太一郎様がひどく気にされてましたわ。静香様から、卓巳様を射止めた女性が聖マリアのお嬢様だと聞いて、卓巳様のご結婚が楽しみだ、と。どどういう意味かしら？」

その瞬間、あずさの狡猾な笑みなど気にも留めず……卓巳は胸の中で牙を剥き出しにして毒づいた。

(あの下衆が！ 万里子は絶対に渡さない！)

第二章 恋 (18) 月夜の誓い (後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます！

第二章がここで終わります。

「ここからどうやってラブエッチに？」…あははは (苦笑) (笑
つて誤魔化す?)

そこまでの道のりは中々遠いです…が、万里子は恋に自覚しましたし、卓巳も…まあ頑張ってくれるでしょう (笑)

第三章はいよいよ『結婚』です。

引き続き、何卒よろしくお願い致します (平伏)

第三章 結婚 (1) 結婚宣言

日曜日はあるという間にやって来た。

卓巳は自ら万里子を迎えに行き 今、玄関前に降り立つ。

今日の主役となるはずの万里子は、淡いオレンジ色に近いベージュのワンピースに、シフォンジャケットを羽織っていた。アクセサリーは母親の形見である一粒パールのネックレスとイヤリングだけ。いたって地味な装いだ。

「どうした？」

「いえ、あまりにも立派なお屋敷で……気後れしてしまって。もう少し華やかな服を着て来たほうが良かったんじゃないかと」

正門を車で通過し、木立を迂回して作られたアスファルトの車道をゆっくりと進んだ。その辺りから、万里子の表情が固くなり……。ようやく目に入った本邸のエントランスホールに今度は圧倒されたようであった。

西洋建築の母屋は、基本的に二階建てである。だがとくに一階部分の天井が高く、実質三階建ての高さはあった。少し小さめの建物が右手奥にもあり、一階が渡り廊下で繋がれている。奥の建物には叔母姉妹が一家で住んでいる、と卓巳は説明した。

母屋に部屋があるのは卓巳と祖母の皐月のみ。今は皐月の身を案じて、執事の浮島と皐月付きのメイド根元千代子（ねもとちよこ）が、母屋内に個室を与えられていた。藤原家には二十名程度の住み込みの使用者がいる。彼らには使用人専用の棟が、敷地内に設けられていたのだった。

「おばあ様はそんなにお悪いんですか？」

「急にどうこうはないだろうが……。念のため、昼間は看護師も付けている。本格的に具合が悪いようなら、二十四時間体勢で医師も

呼ぶつもりだ」

そう語る卓巳の横顔を万里子はジッと見つめている。

見られている卓巳のほうが気恥ずかしくなり……、

「何かおかしなことを言っただかな？」

「いえ。卓巳さんは本当におばあ様を大事に思われてるんですね。

今回のことも、おばあ様のため、と仰られてましたし……」

嘘ではないが真実とも言い難い。そんな卓巳の言い訳を、万里子は丸々信用していた。後ろめたさはあるが……先のことを考え、卓巳は曖昧に苦笑した。

「万里子　我が祖母上殿は、中々手強い女性だ。なぜなら……この邸には鬼が棲んでいてね、人の心を容赦なく喰い荒らすんだ。祖母は半世紀も鬼に囲まれて生きてきた。僕なんか、その十分の一で音を上げそつだ。他人の痛みには無頓着で、平気で致命傷を与えるくせに……自分たちは、ほんの些細なすり傷ですら大騒ぎする。そんな連中ばかり」

途中で卓巳は口を噤んだ。言い過ぎて万里子を怯えさせたのでは話にならない。

しかし、それは卓巳の杞憂であった。

「それは……普通のことだと思います。誰も自分が可愛くて、辛いことから目を逸らしたり逃げたりするんだと思います。逃げずに立ち向かおうとする、卓巳さんが特別なだけです」

柔らかな笑みを湛え、万里子は卓巳を見上げた。

雲の隙間から射し込む陽射しが、万里子の頭上で煌き、髪に天使の輪を描く。卓巳は眩しくて……目を細めた。

「僕が　変わり者ということか？」

「いえ、そうではなく……。卓巳さんは強い精神力を持った誇り高い方ですから……中世の騎士のような。つつい、安易な方へ流れ

てしまうわたしなどには真似できません」

「僕が騎士ナイトか……なりたいものだな」

くくくくくくくく

挫折と絶望……それを上回る強烈な恋慕の情を初めて味わった翌朝、卓巳は朝食の席で皆に宣言していた。

「今週の日曜日に、結婚を前提に交際中の女性を家に招きました。皆様にも紹介したいので、ご都合がよろしければご在宅下さい」

「そう、御招きになったの。では、お会いしなくてはね。時間はいつです？」

あれほどハッキリと「反対する」と言いながら、皐月をそれをおくびにも出さない。卓巳もそんな皐月の茶番に応じる。

「ランチタイムにしました。ああ、浮島……日曜のランチは一人分多く頼むよ」

執事の浮島は丁寧に頭を下げ、「承知致しました」と答える。

「まあ、どんな女性かしら。楽しみですわね、お姉さま」

「楽しみ？ 不安の間違いでしょう？ 最近の女子大生なんて裏で何をしているか。水商売の女性より破廉恥なことをされている聞きましてよ」

幾分楽観的な和子の言葉に、姉の尚子は言葉を尖らせる。

「あら、尚子おば様……つい最近まで私も女子大生でしたのよ」

「ええ、そうですね。静香さん、あなたのこと色々聞いてますわよ。でも……いくら血が薄いとはいえ、従兄妹同士の結婚は感心しませんわね」

尚子は姪の静香が卓巳と一緒になることを快く思っていない。息

子・太一郎のためにも、卓巳は蹴落とさなければならぬのだ。静香が若奥様など、言語道断であろう。

「あら、私は藤原家のことを考えただけですわ。卓巳さんは女性には興味がないようでしたし……良くない噂も出ていたでしょう？社長である彼の体裁を整えようと思っただけですわ」

「静香さんは優しい方だから……」

卓巳が何も言わないのをいいことに、和子は呑気に笑っている。

内心 「母親に似て男なら誰でもいいんだろっ」と思ったが、口にする卓巳ではない。

「卓巳さんの興味を惹く女性は他にいらしたようね。残念でしたわね、和子さん」

ボンヤリした和子にも姉の嫌味が伝わったのだろっ。だが、真っ向から姉には逆らえない。そうなると矛先は卓巳に向かうのだ。

「交際中と仰られても……なんとも言えませんわ。そうだわ、卓巳さん！ ご結婚を考えておられるなら尚のこと、ハッキリさせたほうがよろしいのじゃなくて？ 夫婦生活が儘ならなくては、お子さんもねえ」

「何も問題がない、と仰るのであれば……正々堂々と検査を受けて証明されたらよろしいじゃありませんの。それとも……」

カチャン、と食器が鳴った。卓巳がわざと音を立てフォークを置いたせいだった。

「朝から話題にすべきことではありませんね」

そのまま席を立ち上がる。だが、そんな卓巳にしつこく追いつがった。

「では、お帰りになられたら……続きは夜に致しましょう」

「今日はこれから九州に出張します。帰宅は未定です。お話はまたの機会に……では、行って参ります」

卓巳はこの叔母たちを黙らせ、祖母の臯月をも丸め込まねばなら
ない。

藤原家を掌中に収めるための結婚だった。だが今は違う。万里子
との結婚そのものが、目的の一つとなっていたのである。

第三章 結婚 (2) 変化

「あのう……すみません。お車を、車庫にしまわして頂いてよろしいでしょうか？」

いつの間にか現れた運転手がおずおずと口を挟む……。

皐月の車を運転をしていた男だが、最近の仕事は 来客の車は専用の駐車場に、家人の車はそれぞれかしんの車庫に納めるのが役目となっていた。

この時二人は、万里子の「騎士」発言に動きを止め、自分たちが見詰め合ったままであることによく気付いたのだ。しかも車の横で……何秒ではなく、何分という時間が過ぎている。

卓巳は咳払いを一つすると、必死で万里子から視線を外した。

「あ……ああ、すまない。よろしく頼む」

普段通りを繕ったはずだが……どうにも棒読みで運転手もバツが悪そうだ。慌てて「失礼致しましたっ！」と叫ぶように立ち去る。

「す、すみません。わたし……卓巳さんに恥をかかせてしまって」「いや、お互い様だ。行こう」

正門からの連絡を受け、玄関フロアには使用人たちが集まっているはずである。彼らが今の二人を盗み見て『いる』ことと『なかった』ことに複雑な期待を寄せる卓巳であった。

くわくわくわくわく

両開きの大きな玄関扉、その片方を卓巳が押し開けた。さあ、どつぞ

万里子をエスコートする。

そこはまるで中世のお城のような、天井が遙か上に見える吹き抜けの玄関フロアであった。キラキラ光を放つ天窓のステンドグラスを万里子は眩しそうに見つめた。

「古く見えるが戦後に建てられた洋風建築だ。まあ、ステンドグラスなんかはアンティークを輸入したらしいが……」

「聖マリアの聖堂を思い出しました。でも……掃除が大変ですよね？」

「……君にはさせないから、そんな心配は要らない」

苦笑気味に答える卓巳に「別にそういう意味じゃ」と万里子は必死になつて言い訳する。

玄関の正面に、二階から下りて来る幅の広いオープン階段があった。その裾付近に十人以上の使用人が見事に整列している。年代は様々だが使用人のほとんどが女性だ。世間で流行しているメイド服は着ておらず、ホテルの客室係のようなグレーのワンピースに白い前掛けを着用していた。

そして、既に引退していても良さそうな執事の浮島が一步前に出る。妙にそわそわする若いメイドたちとは違い、彼は普段とまるで変わりはなかった。

「お帰りなさいませ、旦那様」

「ああ……彼女が千早万里子さんだ。全員、失礼のないように取り計らってください」

「はい。ようこそお越し下さいました。執事を務めます、浮島うきしまと申します。御用の際は遠慮なくお申し付け下さいませ」

相変わらずニコリともしないが、ぞんざいな態度でもない。しかし、間違つてもフレンドリーには見えない対応に、万里子の気後れが大きくなるのでは、と卓巳は懸念する。

「はじめまして……千早万里子と申します。本日は、よろしくお願
い致します」

そう言うと万里子は楚々として頭を下げた。そこに、誰よりも早
く現れたのが静香である。何を考えたのか、昼間から濃い化粧を施
し、パーティにでも出席しそうな出で立ちだ。

「お帰りなさい、卓巳さん。あら……」

万里子と静香の身長はさほど変わらないはずだ。しかし、肉感的
な静香のほづが一回り大きく感じる。そのせいか、ホテルの時とい
い、どうも静香が万里子を見下ろす形になっていた。

「従妹の静香さんですよ？ 先日は大変失礼致しました。急なこ
とでご挨拶も出来ず」

「ああ、いいのよ。私、堅苦しいことは苦手だから。それに……あ
なたと長いお付き合いをする訳じゃないんですもの。ね、卓巳さん」

静香は思わせぶりの視線を卓巳に送る。その仕草は誰の目にも、
万里子を追い出す気満々に映った。

「確かに。万里子と君はそう長い付き合いにはならないだろう。嫁
いだ後は実家ではなく、婚家の付き合いを大事にするといい」

卓巳の言葉に静香は一瞬で真っ赤になる。

さっさと嫁ぎ先を見つけて出て行け 卓巳はストレートにそう
言ったのだ。これまでの卓巳であれば、婉曲えんきよくな嫌味で返す程度だろ
う。あからさまに誘うとキッパリ拒絶されたが、ここまで辛辣なの
は初めてであった。

メイドたちは一様に目を見開き、さすがの浮島も言葉を失くすほ
どだ。

「静香さんにもご結婚のご予定がおりなんですか？」

卓巳の言葉を素直に受け、万里子はお祝いでも言わんばかりに弾
んだ声で話しかけた。

しかし、万里子の言葉は静香の逆鱗に触れたようだ。キツと睨みつける、一言叫ぶ。

「ないわっ！」

そのまま卓巳のほうを向き直り、

「卓巳さんっ！ 母や尚子伯母様がリビングでお待ちかねだわ！」

「お手柔らかに願いたいものだ。 祖母上は？」

卓巳の問いかけは浮島に向けたものだ。

「お部屋でございます。 昼食の用意が出来ましたら 　ご挨拶はその時に、と」

「おばあ様はあなたにお会いになりたくないようね。 なぜかしら？」
浮島の言葉を奪うように、静香は意味深な言葉を口にした。

(万里子に余計な事を……)

卓巳は表情を変えないまま、内心舌打ちする。 案の定、静香の言動は万里子の不安を煽ったようだ。

「あの……やはり、怒っておられるのでしょうか？ もし反対された時は、わたし、どうすれば……」

「怒ってるわけじゃない。 財産目当ての茶番だと思っておられるんだ。 心配はいらぬ、僕が説得する」

言うなり卓巳は万里子の手首を掴んだのだ。

咄嗟の出来事に、万里子は驚いて卓巳を見上げる。 しかし、同じだけ卓巳の表情にも動揺が浮かんでいた。

「やっぱり無理です」と言い出して逃げられるのではないか……そんな不安が卓巳を突き動かした。 だがホテルの前で万里子の腕を掴み、即座に振り解かれた経緯がある。 それをもし、使用人やこの静香の前でやられたら、卓巳は不味い立場に追い込まれるだろう。 その前に離すべきか、それとも問答無用で引っ張って行くか……た

だ、時間だけが過ぎる。

「わ、わかりました。あの、卓巳さん、手を離して下さい」

「本当に？ 帰るとは言わない？」

「はい。あの……皆さんが見てらっしゃるので、本当に離していた
だけたら……」

自ら振り解くことはせず、万里子は耳まで赤く染めて俯いた。

ハツとして振り返った卓巳の背後に、口を開いたままのメイドたちと浮島がいたのだった。

第三章 結婚 (3) 敵意

食事の前にと、万里子はリビングに案内される。

そこは、邸の大きさの割には小ぶりな部屋であった。中央にソファが、左手奥にはグランドピアノが置かれている。キャビネットやカップボード、コートハンガー、花台に至るまで同じメーカーのアンティークで揃えてあった。

そして、その中央のソファに悠然と腰掛けていたのは、対照的な容姿を持つ二人の中年女性……卓巳の叔母、尚子・和子姉妹であった。

「卓巳さん、お帰りなさい。そちらが、噂のお嬢さんかしら」

「ええ、紹介します。千早万里子さんです。こちらが叔母の和子さんだ。さつき会った静香くんの母上だよ」

なるほど、雰囲気は似ている……万里子はそう思った。静香があと二十年経ち、歳相応の貫禄が備わってきたらそっくりになるだろう、と。逆に言えば、若い頃はさぞや男性を魅了していたであろう容姿が、娘の姿から簡単に想像できた。

「はじめまして、千早万里子と申します。よろしくお願い致します」

「静香さんから色々聞いておりますわ。わたくしはね、中々良縁に恵まれなかつたんですのよ。ですから、子供二人を連れて実家の世話になっておりますの」

「それは……さぞかしご苦労なさつたことでしょう」

万里子の相槌に気を良くしたのか、しだいに和子の声は大きく、早口になる。

「ええ、ええ、苦労しましたわ！ お父様……先代はわたくしたち姉妹をとて可愛がって下さいました。わたくしが戻って来た時も、

快く迎えて下さいましたわ。わたくしの息子のことも、将来は二三の会社を任せたいとまで仰って！それが、あんなに早くお亡くなりになってしまって……とても悲しい思いをしましたのよ。だって、この家にわたくしたちの味方は、先代しかおられなかったのですもの」

万里子に向かって身を乗り出し、滔滔と語られても、それ以上どう答えればいいのか判らない。だが、その後の尚子の言葉によって、ようやく理由が見えてくるのだった。

「そうですね。先代が生きておられたら、卓巳さんなどはこの家に入ることも出来なかったわ。それが今では当主気取りなんですからね」

ソファに座っていた尚子は唐突に立ち上がった。そして、入り口近くに立つ万里子の傍まで、つかつかとやってくる。

妹に比べると神経質なのかも知れない。和子の半分　は大袈裟だが、かなりの痩身だ。あちこちから針金が飛び出ているような刺々しさを感じる。しかも、理由は判らないが、万里子に向かって敵意をむき出しにしていた。

「こちらが、和子さんのお姉さん、尚子さんだ」

「千早万里子です、どうぞよろし」

「卓巳さんにいくら積まれたの？　正直におっしゃいな！」

「は？」

初対面の挨拶すらすつ飛ばし、最初から万里子に食って掛かる。

「恋人のフリをして、結婚までする代償ですよ。一千万？　二千万？」

「叔母上、いきなりそんな突飛なことを言い出されて、彼女を困らせないで下さい」

卓巳はさりげなく万里子を庇うが、尚子は追求の手を弛めない。

「困らせる？ とんでもない！ あたくしは真実をお教えしたいだけですよ。先代は『我が子はあたくしたち姉妹だけ』と言われました。ねえ……和子さん」

「ええ、そうですね。卓巳さんのお父様、卓哉さんが亡くなられたと聞いても、涙も一つこぼされず、孫が……卓巳さんが施設に入られたと知っても、一円の援助もされなかつたくらいですもの」

「なぜだかお分かり？ 万里子さん」

不意に話を振られ、万里子にはどう答えたら良いのか検討もつかない。それよりも、「卓巳が施設に入れられた」その言葉が胸に響いていた。

「……いえ、せっかくですが、わたしには」

「先代は愛情のない結婚をされて……授かった一人息子は、水商売のアバズレ女を妊娠させ……家名に泥を塗りました。先代はお兄様を勘当されて、あたくしたちを呼び寄せられ……後を任せる、と」

「本当に……卓巳さんの母親は恐ろしい女でしたわ。やくざのような相手と再婚して、お兄様が受け取るべき財産は卓巳さんが継ぐはずだから先に寄越せ、なんて」

姉の尚子と同じように、妹の和子まで万里子に近づいてくる。

「でも、先代は卓哉さん……お兄様をすでに相続人から排除されましたの。その意味が判りかしら？ 先代は一円の財産もお兄様にはお譲りになられませんでしたわ。もちろん、孫の卓巳さんにも。遺留分すら廻らないように手配されて……ねえお姉様」

尚子は妹の言葉に強く肯きながら、

「ああ、せめてあの時、太一郎が成人していたら……。先代は、後継者は私の長男・太一郎だ、と古参の重役方に宣言しておられました。今はまだ大学生ですけど、来年には卒業して藤原グループに入り、すぐにも取締役となり、次の社長に……いずれは総帥になるのが決まっております。その時は、卓巳さんには太一郎の下に付いて

頂かなくては」

万里子は左右からスピーカーのように捲くし立てられた。それも、全く知らなかった卓巳の生い立ちを聞かされ、呆然となる。

「あら、全然ご存知なかったのかしら？ いけませんわよ、卓巳さん。あなたは皐月さまのお情けでグループに呼んでいただけで、こちらに住まわせて頂いてるだけじゃありませんか。繋ぎの雇われ社長というお立場じゃありませんの、それはお聞きかしら？」

「いえ、あの、そういったお話は……」

知っていた、と言うほうが卓巳の意に適うのか。それとも他に適当な返事があるのか。万里子は計り兼ねて、隣の卓巳を見上げた。

第三章 結婚 (4) 勝者

相変わらぬのマシガントークに卓巳は深いため息をつく。

この叔母二人の口を閉じさせることは、卓巳には不可能に思えた。しかし、困惑した表情で見上げる万里子に、卓巳も重い口を開かざるを得ない。

「わざわざご説明いただき恐れ入ります。彼女には話す必要のない事と思っておりますので、伝えてはおりません」

そんな卓巳の返答に、二人はここぞとばかりに言い募った。

「まあ、おかしいこと。妻になられる方に内緒にしておくだなんて！」

「そうですねよ、卓巳さん。藤原家の……当主の妻になれると思って、あなたの策略に加担されたのでしょうか？ でなければ……ねえ」

尚子は思わせぶりな言葉を口にした。そして、口角を吊り上げ、わざとらしい笑顔を作る。そんな姉に呼応するように、和子は更に具体的な言葉を使うのだった。

「愛情も夫婦生活もない結婚なんて、わたくしなら耐えられませんか。それなりの見返りがありませんと」

「万里子さん、でしたわね。よく知っておかれることね。卓巳さんは先代の遺産を一円も相続されてはおりません。貧しい生活を送り、大学も奨学金を受けて出られたのよ。会社の株主でもなく、不動産も卓巳さん名義のものは一つもありません。今はグループの社長でいらっしゃるから、当然お給料を頂いておいでだけど、微々たるものです。個人的財産と呼べるようなものは何もお持ちじゃないわ。この屋敷だって、皐月さま……卓巳さんのおばあ様に逆らったら、追い出されて終わりですもの」

「残念でしたわね。せつかく射止めた王子様が実は王子に化けた乞食のほうだなんて！ しかも、夫としても……」

フッフ……と二人の叔母は揃っていやらしい笑い声を立てる。

卓巳は、叔母の口を塞げないなら、如何に万里子をフォローするかを考えていた。

万里子には「最終的に祖父の遺産の四分の三は卓巳の名義になると、それが当然のことのように話してある。その祖父・高德には卓巳に譲るつもりが全くなかった、ということと話してないだけだ。

会社の存続や社員の解雇、それに祖母・臯月に対する気遣いも偽りではないだろう。

しかし……。

「あら、失礼。それはもうご存知でしたわね？ ホテルで一夜を共にされたんですもの。ああ……共にされるフリをしたのだったわね。卓巳さんに頼まれて。この上、後継者も作れない体だとハッキリすれば、さすがに臯月さまも見捨てられるでしょうねえ」

人工的な手段さえ使えば、後継者作りに問題がないことを尚子からは知らない。ただ、それを言ってしまうえば、下半身の問題を認めてしまうことになる。

卓巳のプライドがそれを許さなかった。

「これでお判りになったでしょう。そんな“フリ”をしてまで当家に乗り込んで来てても無駄ですよ。藤原家の次期当主と言われてお金に目が眩んだのでしょうか……。恥知らずな真似はやめて、さっさとお帰りなさいっ！」

尚子は金切り声で叫びながら、万里子に指を突きつける。その態度は目に余り、卓巳は二人の間に体を滑り込ませた。

「それだけ言えば充分でしょう。叔母上がご不満に思われているのは僕だけのはずです。両親のことで僕を責められるのは、どうぞご随

意に。但し、万里子に対する的外れな非難は、止めて頂きたい」

大体において、『冷酷・冷徹』と“冷”の字を使った単語を羅列され、マスコミに報道される卓巳だ。それは尚子らに対する態度も同じで、どれほど卑猥な言葉で侮辱されても、激昂することもなければ反論もしない。それはしだいに　傷つく素振りもないので面白くない、だが、安心して攻撃出来る　と尚子らの胸に染み付いて行く。

感情を上手く表現出来ないために、卓巳自身が尚子らを増長させていたのだ。

だがこの時、万里子と出逢ったことで、卓巳も少しずつだが変わろうとしていた。卓巳以上に冷静沈着な執事の表情すら変えるほどに。

「あら……。的外れてるかどうか、ご本人に聞けば判るんじゃないの?」

「静香、余計な所で口は挟まないで貰おう」

いつの間にかリビングに入ってきた静香が可笑しそうに横槍を入れてきた。

「ねえ、万里子さん。あなたは卓巳さんに利用されてるだけなのよ。だって、何も聞かされてなかったんでしょ?　可哀相に。……お母様も伯母様も、万里子さんを責めるのは見当違いじゃないかしら」
静香の言葉に、二人の叔母は示し合わせたように攻め口を変えてきた。

「ええ、確かにそうですわね。静香さんの仰るとおり、お気の毒ですわ。あなたはそんなにお若くて……お父様もそこその会社の社長さんとか。聖マリアのお嬢様が、卓巳さんの母親のような真似をするとは思えませんし、ねえ」

「わたくしもそう思いますわ。ごめんなさいね、あなたを疑ってしまつて。卓巳さんはあなたを庇つてらつしやるのじゃなくて、ご自分の立場を守りたいだけじゃないかしら。あなたが犠牲になることはなくつてよ。だって、女は愛する殿方と結ばれるのが一番の幸せですもの」

和子は夢見がちにそんな言葉を口にする。今年四十四歳だが、どうやら良縁の再婚口を真剣に望んでいるようだ。それさえ叶えてやれば、和子のほうは早々に追い出せるかも知れない。卓巳は脳裏でそんな計算をしていた。

ただ、先ほどから卓巳の袖を握り締め、一言も発しない万里子の胸の内も気に掛かる。祖母に会う前に「帰りたい」と言い出したら、どう説き伏せればいいのか。

だがその時、これまで黙っていた万里子が突然口を開いた。

「そうですね。仰る通りだと思います」

その言葉に、女狐たちの目が一瞬^き煌^めく。しかし、続く言葉に、彼女らの目は驚きに見開かれたのだった。

「わたしも、心からお慕いする方の妻になるのが、一番の幸せだと思つております。あらためて……卓巳さんのお傍にいたいと思ひました」

卓巳を見上げて満面の笑みを浮かべる。その万里子の瞳に射抜かれ、卓巳の心臓は早鐘を打ち始めるのだった。

第三章 結婚 (5) 恋の覚悟

一瞬、ここが何処かも忘れ、卓巳は万里子の笑顔に見惚れていた。尚子らは予想外の万里子の反応に慌てふためいている。

「あ……あなた……あたくしたちの言ってることが、本当に判つてらっしゃるの？ 卓巳さんには何もありませんのよ！」

「そ、そうですね。今のままでは、卓巳さんには臯月さまの遺産すら継ぐ資格がないの！ そのために、臯月さまの気に入れられそうな結婚相手を探してるだけですわ！ 卓巳さんは遺産欲しさにあなを騙して結婚しようとしてるのよ！」

畳み込むような言葉の応酬に、万里子も閉口したかに思われたが……。

「わたしは卓巳さんを信じております。ただ、妻にしていただけでした。」

万里子の返答に変わりは無く、それは揺るぎない毅然とした態度であった。

尚子・和子姉妹はまるで金魚のようだ、と心の中で卓巳は思った。パクパクと口を開け、どうやらこれ以上言葉が出ないらしい。

そして、万里子の言葉は卓巳の心にも追い風となる。

「叔母上、私の先行きを案じて下さってるようですが、心配には及びません。祖母上に反対された時は、藤原を出て千早の家を継ぎます。万里子には兄弟がいまないので……。最悪、あちらからも反対された時は、弁護士として妻子を養うくらいのことには出来ますよ。父のようにはなりませんので、ご心配なく。」

あまりの大胆宣言に、リビングにいる全員が瞬きもせず立ち尽くしている。

そんな中で、尚子が逸早く立ち直った。

「そ、それでは……藤原グループはどうするつもりです!? そんな娘のために、あなたは仕事を放り出すというの? 大の男が……社長ともあるうものが……そんなことでよろしいと思ってるのっ?」

(丸裸で放り出すと言ったのはそっちだろうに……)

卓巳はそう言い返したい気持ちを抑え、

「何を仰るんです叔母上。祖父が後継者と定めた、優秀な太一郎くんがいるじゃありませんか。私と違って、女性関係を中心に随分社会経験を積まれておいでのようだ。現当主であられる祖母上が彼を選ぶのであれば、私は喜んで身を引きます。社長の席をお返ししますよ」

「……!」

まさか……卓巳に藤原を捨てる覚悟があるとは誰も思っていなかった。

貧しい育ちの人間は、一度金を手にするとそこから逃れられないものだ。藤原家の嫡男に生まれながら、彼はその恩恵を全く受けることなく生きてきた。祖父の死により、ようやく手にした地位を守るため、卓巳もこの家にしがみつくに違いないと思っていたのだ。

先代亡き後、藤原グループの分裂を防いだのは “藤原卓巳”

その人であった。

彼は、クールでストイックなカリスマ性を遺憾無く発揮し、その申し分ない頭脳で巨大グループを纏め上げた。今、卓巳がグループから抜ければ倒壊は免れない。少なくとも、経営の中心から藤原一族が締め出されることは間違いない。尚子の夫・敦に人望は無く、長男・太一郎に至っては……。

とにかく、どれだけ甚振いたぶっても、卓巳に出て行かれて一番困るのは、藤原本家の人間なのである。

卓巳本人は彼の言う通りであろう。財閥の御曹子として真綿に包

まれ育った父親とは比べようがない。実務能力も適応力も桁違いだ。彼が困ることはありえない。

「旦那様、皆様、お食事の用意が整いました。食堂にお越し下さいませ」

浮島の呼びかけに、息詰まるリビングの攻防に一時ストップが掛かった。

「ああ、判った。万里子、こっちだ。案内しよう」

ごく自然に卓巳は万里子に腕を差し出す。

「はい」

万里子もまた、自然な動作で手を差し伸べ、卓巳の右肘辺りに触れた。そして、その万里子の手卓巳は左手を重ねる。一瞬、強張る指先がしだいに解れ……月夜の魔法が二人の胸に甦った。

『ただ、妻にしていたただきたいだけです』

万里子の言葉に確かな喜びを感じる。この想いに名前を付けるなら、おそらくは“恋”なのだろう、卓巳はそう思っていた。

嘗て、淡い想いを抱いた経験ならある。それは苦い体験となり、卓巳の見た目より繊細な心を谷底まで突き落とした。だが、その時の想いとは熱さが違う。

これがもし、万里子の本心であるなら……穏やかで温かな愛情に包まれ、満たされた人生が送れるのであろう。

卓巳の人生において、何度も望んでは諦めてきた。今度こそ、と藤原本家に入ったものの……そこは鬼の巢窟に過ぎなかった。息子を溺愛した祖母も、結果的には見殺しにし、子や孫より我が身を選んだのだ。臯月が卓巳に示す愛情に、利害がないとは思えずにいる。

愛されたい。

何の才もなくとも、受け継ぐ財産などなくとも。無条件の愛情を注がれる喜びを、ただ一度でいいから味わってみたい。卓巳の願いはそれだけである。

だが、万里子にそれを望むべくも無く。

なぜなら、妻になる代償に金を提示したのは卓巳自身であった。

万里子の秘密につけ込み、脅迫したのも……。

愛を乞う術も資格も持たない。そんな卓巳にも恋するのは自由だ。たとえ、期限付きの契約を交わした仲であっても……万里子を妻と呼び、独占したい。

そのためなら、卓巳は周囲の目を全て欺く覚悟は出来ていた。

くくくくくくくく

万里子にすれば、言われたことの半分以上は意味不明だ。しかし、卓巳の立場が非常に脆いものであることを知り驚いていた。

そして何より、この女性二人が卓巳に向ける悪意に、そこはかたない恐ろしさを覚える。卓巳の祖父を挟んで、祖母と愛人の間に確執はあったのだろう。だが、血の繋がった甥である。それも、卓巳自身が藤原家を出ると口にした時の驚きよう……決して追いつき出す目的ではなく、傷つけるためだけに罵声を浴びせているのだ。

だが何を聞かされても、卓巳に対する信頼に変わりはない。彼の父親が相続を排除されるような、どんな非行を繰り返したのか判らない。だが、卓巳自身に問題があるとは到底思えない。

ただ万里子が気になったのは、“何のために”財産を手に入れたのか、と言うことである。会社を傾けないため、社員のためと言うが、叔母二人の話を用意するなら、不遇な扱いを受けた父母の

ためであるのかも知れない。

万里子自身、最早、卓巳の共犯者であった。愛する父や忍を騙し、とうとう卓巳の家族まで騙すためにここにいる。

それは万里子にとっての一番が、卓巳に代わった証であったのだが……。

今はただ、寄り添う卓巳の温もりに、食堂が少しでも遠いことを願う万里子であった。

第三章 結婚 (6) 予感

標準家庭より少し大きめのリビングとは違い、食堂と呼ばれる場所は遥かに広かった。そこは邸のサイズに相応しく、万里子に初等科の講堂を思い出させたほどだ。

天窓からは冬の始まりを思わせる柔らかな日差しが射し込んでくる。

高い天井には、晚餐会を思わせる豪華なシャンデリアが幾つもあった。対面式に座る長いテーブルが部屋の中央に置かれ、真っ白いテーブルクロスの上にランチ用のセッティングが完了している。

そして、万里子らが食堂に入った時、すでに正面には車椅子の老婦人が着席していた。

卓巳から、祖母の皐月は万里子と同じ聖マリアの出身で、旧華族の生まれだと聞いている。なるほど、他人に媚びることを嫌悪する瞳だ。不必要なほど身構えた冷たい眼差しが、卓巳によく似ていた。だがそれは、どこか淋しそうな印象を万里子に与えたのだった。

「ようこそ。卓巳の祖母で皐月と言います。あなたに会えるのを楽しみにしてましたよ。卓巳さんが世話になっていきますね」

「いえ……はじめまして、千早万里子と申します。卓巳さんには……とても優しくして頂いております」

「まあそうですね。卓巳さんが女性に優しくするところなど、見たことも聞いたことありませんでした。この通りの毒舌家ですからね、きつい言葉で泣かされているではありませんか？」

皐月の言葉を聞いて万里子はホツとしていた。

さっきのリビングでのやり取りは、どう考えても常軌を逸している。卓巳の叔母たちは初対面の万里子にろくな挨拶もせず、財産の話に終始したのだ。もし、卓巳の祖母も同じであったらどうしようかと、万里子は内心不安であった。

「そんな……僕は毒舌家ではありませんよ。人より少し正直なだけです」

「卓巳さんは本当に正直な方なので……たまに哀しくなる時もあります。でも、すぐに訂正して謝って下さいますので……結局、優しいところしか覚えていないんです」

「まあ……」

皐月は鈴を転がすように澄んだ声で笑った。

万里子の笑顔につられたようだ。それは、虚飾と欺瞞ぎまんで彩られていた邸に、清楚で可憐な花が咲いたかのようだった。

リビングでの攻防が出鼻を挫かれた格好となり、卓巳の叔母二人は非常に静かであった。主に、万里子と皐月が話し、そこに卓巳が加わる形で和やかにランチタイムは過ぎて行く。

始めはダンマリを決め込んでいた敦だが、妻の尚子が異様に静かのため、恐る恐る卓巳らに会話に加わるようになる。

「いやあ……卓巳くんも隅におけないね。こんな可愛らしい女子大生とお付き合いされていたとは。どこで知り合っただい」

敦の質問に春の出来事を卓巳が答える。それは嘘偽りのない真実だ。

「ほおっ！ そりゃ運命の出会いだな」

笑顔で隣の妻を見た瞬間、敦の頬は引き攣った。尚子の顔は笑うなどと言わんばかりの形相だ。敦は見なかったことにしようと、すぐに皐月らに向き直るのだった。

「まあまあ、卓巳さんも奥手なこと。その時に、お声くらい掛ければよろしかったのに」

「もちろんそのつもりでしたよ。まさか、本当に帰ってしまうとは思わなかったんです。奥手とは心外な……」

祖母の孫をからかう口調に、卓巳は懔然とした表情を作るが、口

元は微妙に緩んでいる。

「それでも半年は掛け過ぎですよ。ねえ、万里子さん」

卓巳の様子が穏やかなので、自然に万里子も笑みが零れる。当然、皐月の問い掛けにも、万里子にはこやかに答えた。

「ああいった華やかな席は苦手で……舞台だけ観て、本当はすぐに帰るつもりだったんです」

「無論、彼女の素性を調べるのに半年も掛けてはいけませんよ。ただ、お逢いする伝つとを探しているうちに時間が経ってしまっただけです」
「まるでシンデレラですな。王子様よろしく、ガラスの靴を持って都内を廻られたわけですか」

敦は追従じみた言葉を平気で口にする。その都度、皐月の目に明らかな不快感が浮かんだ。そんな万里子にも判ることが、敦や尚子らには気付かぬようで……。

「いや……実際に廻ったのは私ではなく、宗ですが」

卓巳は皐月の変化に気付いているらしい。曖昧な表情で敦に返事をした。その時だ。

和やかな会話を断ち切るように、食堂に派手な音が響いた。

「申し訳ございませんっ！」

ちよつと、万里子の前から空いた皿を下げようとしたメイドが、その皿を落としたのであった。

「万里子。怪我は？」

「いえ、私は大丈夫です。大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

万里子は皿を片付けるメイドに声を掛ける。

「まあ！ どうしましょう……ドレスの裾を汚してしまいました。私どうしたら」

「そんな、大したものではありませんし、酷い汚れでもありませんので大丈夫です」

「でも、染みになってしまいます。軽く拭かせて頂きますので……化粧室にご案内致します。さあ、どうぞ」

「でも……あの」

卓巳の判断を仰ごうとしたが、万里子の正面に座る尚子が久しぶりに口を開いた。

「サツとでも落として来られたほうがよろしいわ。ご遠慮なさらないで」

妙に優しい猫な声に、卓巳の表情も一瞬曇る。だが、万里子には断わる理由もない。

「……はい。では、少し失礼致します」

万里子は席を立つと、皐月に軽く会釈して食堂を後にしたのであった。

「本当に申し訳ございません。とんだ粗相をいたしまして」

「いえ、本当に大したことではないので、気になさらないで下さい」

「……万里子様は、本当にお優しい方ですね」

「え……いえ……そんなこと、は」

洗面台でハンカチを濡らし、メイドは万里子の前に屈み込んだ。

そして、スカートの裾に付いた汚れを、軽く叩きながら落としていく。しかし、途中でいきなり口調が変わったのだ。その言葉に、とても手放して万里子を褒めるニュアンスはなく……。

その思わせぶりな表情で万里子を見上げる顔は 尚子の命令で

卓巳を狙う永瀬あずさであった。

第三章 結婚 (6) 予感(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます！

サブタイトルですが：1章に1回は入れて行きたいな、と思ってます(笑)(手抜きじゃないです！)

でも、サブタイ付けるのに30分くらい悩むことも…(苦笑)

連載開始から約1ヶ月半でPV20万に到達しました！

本当に皆さまありがとうございます(感涙)

どうかこの先も見捨てずに読んでやって下さいませm)——(m
何卒、よろしくお願い致します。

第三章 結婚 (7) 嫉妬

あずさの表情が一変し、途端に万里子に挑戦的な顔になる。

「お優しい万里子様ですもの、ご結婚されても私のことはお許しいただけますでしょうか？」

「それは……どういう……」

トクンと万里子の胸が鳴った。鼓動は少しずつ早くなり、嫌な予感が頭を擡もたげる。

「私、こちらにお勤めするようになって二年になります。卓巳様から特別なお手当てを頂くようになって、一年くらいでしょうか。卓巳様は大変お忙しい方ですから……男の方は、お疲れの時ほどアチラの欲求が高まると言いますでしょうか？ 夜中に奉仕させて頂くお手当てなんです。私など身分が違いますから、とても妻になどとは思ってませんけど」

万里子の中に電話を切った後の不安が蘇った。あの時に電話越しに聞こえた女性の声。卓巳はメイドに夜食を頼んでいた、と言った。まさか……。

「あの、ひよっとして……卓巳さんのお部屋に、夜食を持って行かれたりは……」

「まあ、夜食だなんて！ あの夜もお召しがあったから伺わせて頂きました。でも、一人で待ってるのが寂しくて……つい、万里子様とお電話を邪魔してしまっ。その後、卓巳様から叱られてしまったんです。本当に申し訳ありません」

まさか、という思いと、やはり、という思いが交錯し……万里子は混乱した。

だが、万里子に異を唱える権利はない。卓巳がこのメイドをベッドに引つ張り込み、毎夜楽しんだとしても、黙って耐える以外にな

いのである。

そう思っで見つめると、あずさのプロポーションは最高だった。制服のボタンが弾け飛びそうなほど、大きく整ったバスト。細く括くれたウエスト。男性の視線を惹き付け、女性なら誰もが憧れる素晴らしい体型である。それに比べて自分は……。

レストルームの大きな鏡に映るのは、あずさに比べればまるでボリュームのないスタイルだ。服もあずさが言うような“ドレス”などではない。色もデザインも地味なワンピースである。万里子はため息がこぼれた。

卓巳とベッドをとにもすることなどありえない。そう思いつつ……万里子は胸の奥がチリチリと焦げるような痛みを覚える。

「お願いでございます、万里子様。どうか、私が話したことは卓巳様に言わないで下さい！ 結婚後も私との関係は続ける、と言われたんですけど……やはり不安で。でも私、卓巳様から聞いてるんですよ。結婚は偽装だと。万里子様からの電話を切った後、ベッドの上で教えてくれたんです。そうでしょう？」

そう言ったあずさの瞳は、自信満々だった。これがハツタリだと、誰が思うだろう。

（卓巳さんは本当にこの人に話したの？ それもベッドの上でなんて……）

万里子の声は知らず知らずのうちに震えていた。

「ほ、ほんとうに？ 本当に……卓巳さんが、あなたにそう仰ったんですか？」

あずさはここぞとばかりに身を乗り出し……青褪める万里子の耳元に、ボソツと呟いた。

「ええ……私の身体を、何度も何度も突き上げながら……信じて欲しい、と。心から愛しているのはキミだけだ、と」

あずさの誘導尋問は尚子の差し金だった。

だが、それだけではない。あずさ自身も少なからず卓巳に恨みを抱いていたせいだ。

何度迫っても、氷のような視線しか返さない朴念仁。男なら誰もが涎を垂らして欲しがるこの胸を、卓巳の前に惜しげもなく晒したのに……。ベッドの上に全裸で脚を開き、腰をくねらせる。ここまですれば、ほとんどの男が自制心を失い、獣のように襲い掛かってくる。後はあずさの思いのままだ。

「うちはいつからストリップ嬢をメイドに雇ったんだ！ そんなもの見るに耐えない さつさと服を着ろっ！ 着たら出て行け！」あずさが迫った時、卓巳は罵声を浴びせた。しな垂れかかるあずさの腕を掴み、ドアの外に全裸の彼女を叩き出したのである。彼女にそんな仕打ちをした男は初めてだった。

卓巳を許せない。この男を虜にしてやろう。それが無理なら仕返しを……。あずさはそう決心した。

そのチャンスは意外と早く訪れる。尚子から、卓巳が『女を抱けない』可能性がある噂かされたのだ。それは、卓巳の弱味を握り、言いなりにする絶好の機会だった。上手くやれば妻の座も……。

あずさがほくそ笑んだ時、まるで降って湧いたように、万里子との結婚話が持ち上がったのである。

しかも相手はあずさと正反対の、見るからに初なお嬢様だ。卓巳までこんな女を選ぶのか、と思い……。怒りは万里子へと向かう。

それには、あずさを娼婦のように扱う太一郎の言葉も原因となっていた。

「お前とやっていると、風俗のオンナとやってるみたいだ。なんか、病気になるそう」

情事の後、衣類を身に付けるあずさに、太一郎は笑いながら言った。太一郎のような男に言われたのもショックで……。なんとしても卓巳を陥落させ、太一郎を見返してやりたい。あずさの中に、万里子に対する嫉妬と羨望が渦を巻いていた。

あずさは上から下まで万里子を舐めるように観察する。

おそらく、卓巳はこの女を抱いてはいない。卓巳の潔癖さは異常だ。それは男としての機能がないからだろう。

あずさは、この万里子からなら簡単に、卓巳の不能か偽装結婚の証拠を引き出せる、そう考えたのだった。

しかし、万里子は見かけと違い、百戦錬磨の卓巳や宗ですら舌を巻く交渉相手であった。

「わたし……わたしは、それでも卓巳さんが好きです。わたしのことも、妻として大事にして下さると仰いました。あなたとのことをどうするか……それは卓巳さんにお任せするつもりです。でも、ごめんなさい。わたしは自ら身を引くことは出来ません」

その答えに、あずさの怒りは増した。結果、彼女自身も想定外の言葉が、口を衝いて出てしまい……。

第三章 結婚 (8) 涙の理由

あずさには万里子の思考が理解できなかった。

普通なら、恋人に愛人がいると判ればヒステリックに怒るだろう。卓巳の意思など関係なく、相手の女に別れると迫るはずだ。結婚間近なら尚のこと。それが……好きだから？

「いえ……でも、私……卓巳様の子供を妊娠したかも……。その時は、認知はして下さいますか？」

そんなことを言うつもりはなかったのだ。だが、あまりに冷静な万里子に、つい口が滑ったのである。

だが、それが万里子の琴線に触れるなど、あずさに判るはずもなく……。

「そんな……そんな……」

明らかかな動揺を見せ、万里子は首を左右に振る。そして、

「いいえ！ 認知なんて。そんなことは絶対にダメです。その時は……あなたが卓巳さんと結婚するべきです。子供のためにも、絶対にそうするべきです！」

「あ、え？ あの……いえ……」

面食らったのはあずさの方だった。万里子の瞳に大粒の涙が浮かび……なんと、あずさの両手を握り締めたのだ。

「卓巳さんにはわたしから話します。赤ちゃんは大切に産んであげて下さい。わたしのことは……気になさらないで」

「……あ、あの、でも私はただのメイドで……」

両手を掴んだまま、真剣な表情であずさに語りかける。

「そんなこと関係ありません。父親として、卓巳さんは子供に責任を持つべきです。いいえ、彼は優しい方だから、きっとそうなさい

ます。卓巳さんの妻になりたかったけど……わたしは諦めます。ですから……」

とうとう、涙の雫が頬を伝い始め……万里子は今にもレストルームを飛び出しそうな勢いだ。

あずさは大慌てである。

「あ、あの、まだ……ハッキリ判ったわけじゃないんです。だから……その時は真っ先にご相談しますから。今はまだ、卓巳様には言わないで頂きたいのですけど」

「でも……もし、わたしとの結婚が決まってしまったら」

「い、いえ、ホントに……不順なほうなんで……その、卓巳様に……迷惑を掛けてもいけませんので」

それを言われたら万里子も引かざるを得ない。

卓巳は、恋人と呼べる女性はいない、最初に契約書を交わした時、そう言っていた。あずさとの関係を公に出来ない問題があるのだとしたら、部外者の万里子が口を挟むのは間違っているだろう。万里子は奥歯を噛み締め、喉の奥から必死で声押し出した。

「判りました。でも、なるべく早く……病院で確認していただいたほうがよろしいと思います。赤ちゃんのためにも……決して無理はなさらないで下さいね」

「は、はい、そうします。では、あの、失礼しますっ」

あずさは、転げるようにレストルームから逃げ出したのだった。

く　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ちよつと驚かせてやろう　その程度の悪戯心だった。なのに、みるみるうちに溢れ出す大粒の涙に、あずさの方がびっくり仰天だ。どうやら、万里子は本気であるの冷酷極まりない男に惚れてるらし

い。

(信じられない！ あの男のどこが『優しい方』なわけ？)

「なあに、ブツブツ言っただよ」

廊下を食堂とは逆の方向に歩いていった。そんなあずさに声を掛けたのは、卓巳の次に憎々しい男。

「太一郎……なんだ居たの？」

「お前なあ。太一郎様だろう？ クビにするぞ」

「やってみれば？ あんたなんか怖くないわよ」

所詮太一郎は、藤原の名を笠に着てやりたい放題の悪ガキに過ぎない。ただ、やり口は卑怯極まりなく、十二分に犯罪のレベルだ。

新入りの若いメイドはそのほとんどが、半ば強引にベッドに引き摺り込まれている。最初は怒っていても、毎月十数万の手当てが付くことを知れば我慢するメイドも多い。それでも訴えるという女には、尚子の雇った弁護士が示談に持ち込み、纏まった金を渡して屋敷から追い払った。

ただ、あずさは例外で自分からベッドに入った口である。

そして、メイド程度なら尚子がカタを付けるが、外の娘に手を出した時は厄介だ。

こんな男ではあるが見た目は悪くない。長身の卓巳より更に数センチ上背があり、スポーツマンで通る立派な体格だった。

着痩せする卓巳などは神経質な文系タイプに見える。祖母譲りのシャープな頬のラインが余計にそう見せるのかも知れない。

逆に、太一郎は祖父の血が色濃く出ていた。少年がそのまま大人になった、という印象である。

こういったイメージに弱いのが、得てして世間知らずのお嬢様である。

しかも、彼の出自や先代から後継者に指名されたが年齢で弾かれたことなど……悲運のプリンスといった要素は過分にあつた。加えて、マスコミは卓巳叩きに太一郎を持ち上げるような書き方をする。それにより、勘違いしたご令嬢方が何名も彼の毒牙に掛かつて行ったのだつた。

「聞いたわよ。婚約の決まつてた代議士のご令嬢に手を出したんですって？ さすがの卓巳様も随分怒つてたそうじゃない」

「ご令嬢のほうが本気になり、『婚約はしません！ 太一郎さんと結婚します！』と親に訴えたそうだ。太一郎の母親・尚子などは、そのご令嬢との縁組を本気で考えたようだが……」。

代議士になるほどの人物だ、その人間性はさておき人を見る目は確かであるう。太一郎に大事な娘をやれないとキツパリ言われたらしい。逆に、卓巳が代わつて責任を取るなら、と……。卓巳は丁重に断わり、藤原の名で多額の慰謝料を支払つたという。

「知るかよ。気に入つた女だから口説いただけだぜ、俺は。奴に比べて女にはうるさくないんでね。でなきゃ、お前みたいな女まで抱くかよ。お前つて下は緩いしさ……コレだけだよな」

太一郎は下品な言葉を吐きながら、声を立てて笑つた。手はあずさの胸に伸び、鷲つかみにする。その瞬間、あずさは顔を顰めた。太一郎から酒の匂いがしたせいだ。どうやら、朝から飲んでいる訳ではなく、昨夜のアルコールが抜けてないらしい。

パシッと太一郎の手を叩き落とし、立ち去ろうとしたあずさだったが……ふと、あることを思い付き立ち止まる。

「そうだ。いいこと教えてあげる……」

あずさの瞳は妖しい光を帯び、それは太一郎に向けられた。

第三章 結婚 (9) フラッシュバック

『卓巳様の子供を妊娠したかも……』

その一言は万里子の儚い夢を、見事に打ち砕いた。

悔しかった……例え本当の妻にして貰っても、万里子に卓巳の子供は産めない。卓巳は子供のためにも、あのメイドと結婚すべきだと思つた。

今日一日で様々なことを知った。だが、皐月は卓巳憎しで相続の条件に“結婚”をつけたのではなく……。おそらくは卓巳の言つた通り、結婚により彼が幸福になることを本気で願っているのだ。

そして、万里子にはその幸福を与えることは出来ない。でも……願わくばただ一度、花嫁衣裳を着てみたかつた。それも卓巳の隣で。

万里子は未練を断ち切るように、顔を洗い化粧を直した。

いい加減食堂に戻らなければならぬ。小走りに廊下に出た瞬間、正面の壁にもたれるようにして一人の男性が立っていたのだつた。

く　　く　　く　　く　　く　　く

「何だよ、いいことつて」

「あんた寝てて知らないんでしょ？　今、卓巳様が結婚したいって女をこの家に連れて来てるのよ」

そう言つた瞬間、太一郎は弾けるように笑つた。

「馬鹿言つんじゃないやねえよ。あの役立たずに結婚だつて？　どんな金目当ての女だよ」

「さあね。でも、普段あんたが相手にしてるのとは比べ物にならない

いくらい、完璧なお嬢様。幼稚園から大学まで、あなたの大好きな聖マリアですってよ。卓巳様のアソコが役立たずなら、あの子は間違いないく処女でしょうね」

あずさの言葉を聞いた途端、太一郎の目の色が変わった。

「ちよつと、挨拶してくつかな」

「挨拶したいんなら、そこを曲がった客用のレストルームにいるわ。くれぐれも挨拶だけにしておくのね。挨拶だけ、にね」

「あたりまえだろ？ こんな昼間っから……俺が何するってんだ」

太一郎は、いそいそと万里子のいるレストルームに向う。あずさはその背中を見ながら小声で悪態をついた。

「昼夜お構いなしにサカツてる、万年発情オトコがよく言うわ！」

卓巳と結婚したらこの邸で暮らすはずだ。太一郎とも一つ屋根の下で生活することになる。どうせ顔を合わせるのだから、それが多少早まっても問題はないだろう。そう、例え一対一で……レストルームで何が起こつても、それはあずさのせいではない。

「偽善よ。偽善……あんな女、メチャクチャになればいいんだわ。」

卓巳のような男に本気で惚れる訳がない。いい子ちゃんの仮面なんか引ッ剥がしてやる！」

く*く*く*く*

そんなあずさの思惑にまんまとハマリ、太一郎は万里子を食い入るように見つめた。

身体中を上から下まで、それこそ舐めるように、だ。すでに彼の瞳の裏には、全裸に剥かれた万里子が映っている。

万里子の姿を一目見た瞬間、

(この女を抱きたい！)

太一郎はそんな妄想に囚われる。それは抑えることが困難なほど、彼の欲望をかき立てた。

清純で無垢な魂を女性の形にしたような姿だ。あずさの言つとおり、彼に引つ掛かる程度の尻軽なお嬢様とは訳が違う。

しかも卓巳の女だと思えば尚のこと。

(奴から奪ってやる！)

太一郎は一瞬でそれを決めたのだった。

くくくくくくく

(怖い)

太一郎を見たとき、最初に胸に浮かんだ言葉だ。

その獣のような目が、万里子を傷つけ、未来を根こそぎ奪い取った二匹の狂犬を思い出させる。

「はじめまして、お嬢さん。卓巳さんの従弟の太一郎です。よろしく」

太一郎は、獰猛な獣の顔に屈託のない笑顔の仮面を被り、万里子に手を差し出す。

だが卓巳や静香から、目の前の男性が油断のならない相手だと聞かされている。笑顔で手を出しだされても、容易に握り返すことなど出来るはずがない。

しばらく迷ったが……万里子自身が何をされたと言っわけではない。初対面で握手を断るのも、失礼な話であろう。

そして、万里子が控えめに手を差し出した、その時。

太一郎は彼女の手首を掴んだのだ。

あまりに突然のことで万里子は声が出ない。

彼女の三倍はありそうな太い指が、ガツチリと手首に巻きついて
いる。そのまま、強い力で引つ張られ、万里子は太一郎の体に引き
寄せられたのだ。

一瞬にして全身が凍りつく。彼女の脳裏に、馬乗りになって服を
裂かれた四年前の恐怖が蘇った。

「そう、硬くなるなよ。挨拶しようぜ」

言うなり、顔を近づけてきたのだ。

万里子にキスの経験はない。彼女をレイプした男たちは、面倒な
ことは全て省いたからだ。必要な場所は下半身だけと言わんばかり
に、ただ挿入を繰り返した。幸か不幸か、唇だけは誰にも許しては
いない。

太一郎の指は手錠のように万里子の細い手首を締め付ける。それ
が女の力では決して解けないことを万里子は知っていた。

押し付けられた体から、汚らしい男の体臭がする。おまけに、近
づいてくる口元からはアルコールの匂いが……万里子は込み上げる
吐き気に、頭の中が真っ白になった。

「いや……いや……いやあつ！」

喉の奥から搾り出すような声だった。その瞬間、ありつたけの力
で太一郎を突き飛ばす。

万里子は一度も振り返らずに食堂を目指した。怖かったからだ。
後ろから迫る気配に必死で逃げた。あの時と同じ……捕まったら犯
される。

ここが何処か、何のためにここにいいのか、何もかもが彼女の脳

裏から消し飛んだ。偽装結婚の話も、卓巳の生い立ちも、メイドの話した衝撃の告白すら、である。それほどまでに、万里子はパニックに陥っていた。

扉を突き破る勢いで、万里子は食堂に飛び込む。そんな彼女の様子に全員がビククリだ。

卓巳は弾かれたように立ち上がると、万里子に駆け寄った。

「どうした！ 何があった！」

「……………い、え……………その……………」

言葉にならない。万里子の指は氷のように冷たくなり、震え始めた。

とにかく卓巳の傍まで行こう。崩れそうな膝をどうにか前に動かした時 彼女の背後に、太一郎が立ったのだった。

第三章 結婚 (9) フラッシュバック(後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

更新が遅くなって申し訳ありませんm(_____)m

敵だらけの藤原邸ですが：ホントにここに嫁いでも大丈夫なのか？

ヒーロー卓巳に頑張って頂きましょう(笑)

引き続きよろしくお願い致します。

第三章 結婚 (10) 卓巳の乱

食堂にいた全員の視線が太一郎に注がれた。

「そんなに驚くほどのことでもないだろ？ 挨拶だよ……ア・イ・サ・ツ」

真後ろに立つ太一郎に怯え万里子は固まった。胸の前でしっかりと手を組み、祈るように卓巳を見る。爪の先は力を入れ過ぎて、真っ白になっていた。

そんな万里子の様子に、何が起こったのか聞かずとも判ろつと言うものだ。卓巳は即座に万里子を背中に庇い、太一郎との間に割って入る。

「太一郎、どんな挨拶をしたんだ」

「そんな怖い顔すんなよ、卓巳さんの女なんだろ？ 何にもしやしないって」

「万里子が怯えてる。何をした？」

太一郎は肩をすくめ、おどけた声で卓巳の詰問をかわそうとしたが、それは逆効果だった。卓巳の声は冷ややかさを増し、同じ質問を繰り返す。

そこに、横から静香が口を挟んだ。

「どうせまたやったんでしょ？ あんたつてば、気に入った女の子を見るとすぐ『挨拶代わり』ってキスするのよねえ」

「うっせえな。挨拶だよ挨拶。こんなの手え出したうちに入んないよな」

太一郎の普段の行いを知っていれば、想像するのは造作ないことだった。静香に凶星を差され、あっさりとは肯定して開き直る。

そんな息子を叱るでも無し、尚子は、

「なあに、いやあねえ。そんなことで大騒ぎしてらしたの？ 何事

かと思うじゃない」

「そうですねえ。今時そんな……」

和子も同意し、姉妹は声を立てて笑おうとした。

しかし三秒後、その笑顔は見事に凍りついたのである。

卓巳が一步踏み出した時 太一郎は襟首を掴まれ、壁に叩きつけられていた。

壁に掛かったシャガールが揺れ、落ちそうなほど傾く。太一郎は振り解こうと必死だ。身長も体重も卓巳より太一郎のほうが一回りは大きい。体格差を考えたら不利なのは卓巳のほうだ。しかし、蜘蛛の巣に掛かった羽虫のように、太一郎はみつともなく足掻いている。逆に卓巳は凍てつく表情を浮かべ、片手で太一郎を押さえ込んでいた。

周囲は息を呑む。

「万里子に触れたのか？」

「ふ、触れたって……それは」

「万里子の唇に触れたのかっ？」

卓巳は腕に体重を掛けた。太一郎は首を圧迫され、ひき蛙のような声を上げる。

この時、卓巳の瞳の奥には絶えず白い煙が揺らめいていた。それは冷気ではなく熱気を帯びていて……まるでドライアイスのように、触れれば火傷しそうなほどだ。

その熱は卓巳自身をも溶かし始め……前髪が数本ほつれ視界が遮られる。その瞬間、卓巳の中に太一郎と変わらぬ凶悪な火が点った。

「ま、待てよ……してない。キスしてない。しようとしただけ……！」

「た、たくみくん。そんな、乱暴は……」

さすがに一人息子が心配になったのか、敦は遠慮がちに卓巳を止めようとする。

「ご心配なく、話し合いです」

卓巳は敦を一瞥すると、太一郎に顔を寄せ一語一語区切るように言った。

「いいか？ 私の妻に触れるな。……返事はひとつだ」

「……わ、わかった。わかったから、離してくれ……」
無駄な抵抗と悟ったのか、太一郎は全面降伏だった。

「たくみさん……もう、やめて」

卓巳は震える万里子の声を聞き、ようやく太一郎を放した。沈着な行動以外は取らないと思っていた卓巳の迫力に、太一郎は圧倒され茫然自失の態で壁際にズルズル座り込む。

「な、なんて乱暴なんでしょう。あ、あたくし……信じられませんわ。社長ともあろう方が、こんな……」

尚子は漸う口を開くが、いつもの嫌味を口走る前に卓巳の視線を受け、硬直してしまった。

「育ちがよくないもので、何卒ご容赦下さい。おばあ様、万里子に二階の自室を案内してきます。よろしいですか？」

「少し、お待ちなさい。太一郎さん、初対面の女性にすべき挨拶ではありませんよ。万里子さんに謝罪なさい。万里子さん、ごめんなさいね。悪い子ではないのだけれど……過ぎるようです」

ブスツとしたまま立ち上がった太一郎を、尚子は脇から「臈月様を怒らせるんじゃないやありません！」突き、渋々太一郎は謝罪した。

「悪かったな」

「いえ……」

万里子は卓巳の後ろに隠れたまま、ビクツとして首を左右に振る。

「今度は卓巳さんです。乱暴はよくありませんよ。太一郎さんに謝罪なさい」

「断ります。夫の義務として妻を守っただけです。もしまた同じようなことをしたなら、今度はこの程度では済まさない。では、失礼します」

卓巳の乱とも言うべきか。彼が祖母に向つて、ここまでキツパリと「ノー」を口にしたのは初めてのことであつた。

「あの……代わつて、私がお詫びします。申し訳ありませんでした」
「万里子！」

「やはり乱暴は間違つていると思います。あんな真似はもうなさらないで下さい。お願い致します」

それでも卓巳は、太一郎に一切の詫びは入れず……無言で万里子の肩を抱き、食堂を後にしたのだつた。

卓巳には気付いていたのだ、太一郎の視線が、終始万里子に注がれていたことを。

良からぬことを考えているのは明白であつた。そんな相手に謝罪などもつてのほかである。いざとなれば、この家から奴を放り出してでも万里子を守ろう。

万里子の肩を掴む腕に力を込め、卓巳は思案を巡らせていたのであつた。

第三章 結婚 (11) 見えない壁

万里子にとって、生まれて初めて入る男性の部屋であった。

浮き立つ心に、あずさの言葉が冷水を浴びせ掛ける。この部屋で……そう思うとどうにも落ち着かず。理由は違うのだろうが、先ほだから卓巳も苛々を隠せないでいた。

「謝る必要などなかったんだ！ 奴には気を許すな。あの男がそう簡単に、一度目を付けた女性を諦めるとは思えない」

「はい……すみません」

それでも卓巳の苛立ちは治まらず。突然万里子の前に立ち、なんと、彼女の頬に手を添え上を向かせた。

「キス、されたのか？」

それは懸命に感情を押し殺そうとする……それでいて、全く抑え切れていない声だ。

卓巳の手が頬に触れた瞬間、万里子の鼓動は跳ね上がった。彼の質問に慌てて首を左右に振る。万里子の答えに卓巳は安堵して大きく息を吐いた。

だがその後も卓巳は万里子から手を離そうとしない。二人は見つめあい、数秒、いや数十秒……ただただ只只、声も出さず互いの瞳を見ていた。

これが普通のカップルであるなら、とうの昔に唇を重ね合い、奥のベッドルームに飛び込んでいたはずだ。だが二人の溢れるほどの想いは、互いの心以外の場所を埋め尽くして行く。

トゥルルル……トゥルルル……

息苦しいほどの熱情に室内が満たされた時、不意に卓巳の携帯が鳴った。軽く舌打ちして、卓巳は万里子から離れていく。

卓巳に触れられた頬が、熱く痺れているようだ。万里子はそつと自分の頬に手を添えた。離れても鼓動は治まらない。つつい視線が電話中の卓巳に向けられ、同じように万里子を見る瞳とぶつかった。

今度は二人同時に顔をそむける。

少しは気持ちを落ち着かせなければ、気分を切り替えよう　万

里子はそう考え、部屋の中を見回した。

まるで落ち着かないのは卓巳も同じ、いや万里子以上であった。

電話は秘書の宗からで『午前中の会議報告と二、三確認を……』
携帯からそんな声が聞こえる。だが、実の所何も耳に入らない。顔を上げた瞬間、再び万里子の視線とぶつかり慌てて下を向く。

(何をやってるんだ、全く。中学生じゃあるまいし)

だが……万里子が部屋の隅に歩いて行くのを目の端に捉え、そつと彼女の背中を見つめた。

もし「キスされた」と答えたなら、自分はどうしたであろうと考える。再び、太郎を殴りに行ったことは間違いない。そして、自分も……。

『社長？　社長！？』

宗の声にハツと我に返る。

(何を馬鹿な。そんな真似は、決してしないと誓っただろう！)

それは万里子の信頼を損ねる行為だと自分を叱るが……。

その反面、万里子はすでにキスどころかセックスまで知っている。その事実が卓巳の胸に重く押し掛かっていた。

万里子の身体に触れた男がいる。この世で唯一人、万里子から愛

された男が……。それは卓巳ではなく、この先も彼にチャンスが回ってくることはない。祖母を始め多くの人間を騙して卓巳が手に入られるのは、わずか二年、万里子を妻と呼ぶ権利だ。

それは卓巳にとって眩暈を覚えるほど幸福なことに感じたが……
太一郎が全てをぶち壊した。

男と女の間には否が応でもセックスが存在する。卓巳には決して踏み込めない一步を、万里子は刺激し、そこまで進ませようとするのだ。

万里子を求める想いとその喜びは、卓巳にとって罪悪そのものであった。

拳げ句の果てに、太一郎を羨ましいと思うなど……愚の骨頂である。

万里子とは距離を置かなければならない 共に罪を犯せない苦しさが、卓巳から愛を遠ざける。

こっそりと万里子を見つめ……その時、卓巳はあることに気がついた。

万里子はゆっくりと暖炉の側まで歩いていく。

最近では擬似暖炉といって見せ掛けだけのものが多い。だが、卓巳の部屋にあるのは本物のようだ。玄関のステンドグラスはアンティークを輸入したと言っていた。おそらくは、これも欧州の古い邸宅で使われていたものだろう。

(外国の映画みたい……)

石造りの暖炉は手で触れると重厚感があった。内部には焦げ後も

あり、実際に使用されていたものに違いないと確信する。映画と違う所は、暖炉の上には何も置かれてなかったことだ。外国では自宅やオフィスなど、プライベートな空間に家族や友人の写真を飾るのはごく普通の習慣である。だが、日本ではあまり多くない。ただ、周囲を見渡しても何も無い。

あまりに殺風景で……私室と呼ぶには淋しい空間であることに、万里子はようやく気がついた。

その時、電話を終えて卓巳が万里子の傍に近づいてくる。

「さつきから気になってるんだが……右手首をどうかしたのか？」

卓巳に言われて初めて気が付く。万里子は自分でも無意識のうちに右の手首を撫でていた。確かに、少し違和感があり……。

「失礼」

「あ！ あのっ」

卓巳に手を取られブラウスの袖を捲られた。すると、手首にくつきり赤い痣が出来ている。それは、太一郎に掴まれた指の痕だった。

「太一郎だな……あの野郎……」

卓巳は怒りのあまり奥歯を軋ませた。その音が万里子の耳に届き、食堂での激昂ぶりを思い出させる。

「た、たいしたことないんです。気にしないで」

「痛むんじゃないのか？ すぐにも医者を呼ぼう」

「いえ、とんでもない！ 本当に大丈夫です。これくらい……すぐに消えますから」

「……すまない。本当にすまない。二度とこんな目には合わさない。約束する。結婚の話を白紙に戻すことだけはしないで欲しい」

「そんなこと……そのために、ここに來てるのですから……」

万里子の声が少しずつ小さくなった。あずさの姿が思い浮かんだからだ。

しかし、女性にとって子供のことは非常にデリケートな問題であ

った。そのことを万里子は痛いほど知っている。

それに、もし事実なら彼女は自ら卓巳に伝えたいだろう。万里子ならきつとそうだ。愛する人の子供であれば、他人の口からではなく自分で、必ず喜んでくれると信じて打ち明けたいと思う。

そして、太一郎のことがある。

卓巳の言うように、太一郎はあれ以上のことをしてくるつもりだろうか。もしそうなら、万里子はどうすればいいのだろう。

万里子の瞳を覗き込む卓巳の目に、幾つもの色が混在した。

近づいては遠ざかる、そんな卓巳の無器用な愛情表現に振り回されることになるとは……この時の万里子には、気付くことは出来なかった。

第三章 結婚 (12) 卓巳の選んだ女性

「あのっ！ 卓巳さん、もし、なんですけど……」

声が小さくなり俯き加減だった万里子が不意に顔を上げ、卓巳に質問を投げかける。

「ああ、なんだ？」

「もし……万が一、お付き合いされてる女性に……その……子供が出来たら、どうないますか？」

万里子は遠慮がちにおずおずと質問するが、瞬時に卓巳の表情が固まる。

しかしすぐに取り繕い、苦笑を浮かべつつ、卓巳は万里子から離れた。

「 やけに唐突だな。だが、それは……その女性の問題だ。僕が決めることではない」

「え？ だって、卓巳さんの子供なんですよ。その人と結婚して子供の父親になるうとは思われないんですか？」

「思わない」

あまりの即答ぶりに、驚きのあまり今度は万里子の動きが止まった。

更に、

「なぜだ？ なぜそんなことを聞く？ 君が……僕の子供を産んでくれるのか？」

続くその台詞に、万里子は心臓が止まるかと思った。彼女にとって何より衝撃を受ける言葉だったからだ。

「わたしは……わたしには……」

必死に理由を考える。あずさから聞かされたこと以外の理由を説明しなければならぬ。

そして万里子が口にしたのは、

「卓巳さんの……ご両親のことを考えたんです。お父様は子供のために結婚を決められたのではないかと」

「僕のために、二人は全てを捨てて結婚の道を選んだ、か。それは素晴らしい。最高の両親だ！」

大袈裟なほどの声を上げ、卓巳はさも愉快そうな声で笑う。しかし、その頬は引き攣り、実際に浮かんでいるのは自嘲気味の失笑に過ぎない。

そして、万里子が何も知らずに振り下ろした刃やじらは、彼女自身をも切り裂いた。

「どうやら君は四年前の自分の境遇と重ねて見ているようだ。何もかも捨てて、君と子供への愛に殉じて欲しかったのか、その男に。子供を産んで欲しい、結婚しよう。そう言って欲しかったのは君自身だろうか？」

「いえ、そんな……そういうわけでは」

口籠もる万里子に卓巳の邪推は止まらなくなった。太一郎が刺激した部分を、卓巳は自ら煽り立て炎上させてしまう。

「そんなつもりもないのに男と寝たのか？ 男は四年前の一度きりだと言ってたな。一生に一度のセックスはどうだったんだ？ 君の言葉を信じるなら、ただ一度で子供が授かるほど深く愛し合ったんだろう！？ 男を受け入れた瞬間は？ 君は声をあげたのか？ 腰を振って男を喜ばしてやったのか？ それほどまでに深く抱き合つて子供まで授かりながら、結婚も考えず墮ろしたのはなぜだっ！」

僕は、君だけは妊娠させない。させたくない。墮ろされるのが判ってるのに、作るのは馬鹿げてる」

次第に早口になり、卓巳の口調は万里子を責めるものにならなくなって行く。

思い通りにならない、自覚したばかりの恋情が、卓巳の胸で嵐を巻き起こした。それはコントロール不能のまま、万里子に襲い掛かる。ほんのわずか、距離を取るだけのつもりだったのだ。一歩下がらるはずが……卓巳は力一杯、万里子の心を突き飛ばしてしまっていた。

ハッと気付いた時には後の祭りである。万里子は悲しげな笑みを浮かべていた。

「そんな風に仰らなくても……もちろん判ってます。だって、わたしの身体に触れたくないし、触れるつもりもない、と。そういうことは一切ないというお約束で、わたしはサインしたんですから」
「……ああ……そうだったな。僕はどうも、両親のことを言われるとナーバスになるようだ。すまなかった」

万里子には何を言われてもナーバスになる。祖母に反対されると思った時より、卓巳はこの恋の困難さをあらためて知ったのだった。

く*く*く*く*

そんな室内の様子とは逆に、一階のキッチンの奥にあるメイドの控え室は信じられないほどの盛り上がりを見せていた。

そこに居たのは十代から二十代の若いメイド四人だ。以前はもっと多くの若いメイドがいたが、最近は年配の、それも五十代以上の女性を進んで採用している。

理由は言わずもがなだろう。これ以上、太一郎に問題を起こしてもらっては困る。両親だけでなく、それには皐月や卓巳の意見も一

致したのだった。

そして今、彼女らの話題の中心はプリンス卓巳の婚約者候補のことに尽きる。

「ま、あんなもんじゃない？ それなりに美人だし、若いから子供もいっぱい産めそうだしね」と、この中では最年長二十五歳の美和みわの子が言つと、

「え〜〜、なんか、ガキっぽくないですかあ？ 卓巳さまにはもつとお、大人の女性が似合うと思うなあ」と、最年少十八歳のかんなが答える。

「かんなは卓巳さまに天然系のロリ声で迫って、無視されたんだよね」二十歳の悠里ゆうりがかんなを茶化した。

だが少し違う。無視というより忌避されて、メイド頭に「二度と部屋付きにはするな」と卓巳から敵命が下ったらしい。

「卓巳さまのお、好みに合わなかっただけですよお」

かんなはわざとらしく頬を膨らませる。地味なグレーのコスチュームより、秋葉原でフリルの付いたエプロンとミニスカートのほうが似合いそうなタイプではあった。

その流れを断ち切るように、

「ねえ、卓巳ってホントにインポなの？」啞え煙草で呆気らかんと口にしたのが、二十二歳の雪音だ。

「和田ちゃんそれってNGよ。卓巳さまの前で言ったらクビだわ」美和子が青褪めて窘めるが……。

和田雪音わたゆきねそれが彼女のフルネームだ。

真っ黒いストレートの髪を肩の辺りでバツサリ切り揃え、常に一纏めに括っている。コンタクトが合わない体質なのでいつもメガネ

だ。メイクも必要最低限しかせず、先輩メイドから化粧の指導を受けたが、事実上の雇用主である卓巳がそれを却下した。

この雪音が今現在、卓巳の部屋付きであり、総勢十二人の中から卓巳自身が選んだ女性だった。

第三章 結婚 (13) ゴシップ・ルーム

卓巳の下半身事情……なんだかんだ言いつつ、彼女らにとっても気になる話題の一つだ。

「どうかなあ。あの卓巳さまに限ってえって、思うんだけどあ」

かんなの言葉を受け、悠里も口を挟む。

「微妙だと思っわ。第一、誰か卓巳さまに口説かれたことある？」

悠里の質問に、全員が首を横に振った。美和子は、

「一番可能性があるのが和田ちゃんでしょ？ 卓巳さまのお気に入りなんだから」

「ないわ。……太一郎なら逆でしょうけどね」

ボソツと呟いた雪音の言葉に、彼女以外の三人が横を向いた。

「あ、ゴメン」雪音は慌てて付け足すが、

「和田ちゃん……それもNGだって……」

泣くように言ったのが悠里だった。

彼女は今から二年前、勤めだしてすぐに太一郎の餌食になった。

泣いて親元に帰ろうとしたが、悠里の両親は借金のため蒸発しており、行く所も帰る場所もなかったのだ。結局、太一郎の母・尚子から親の残した借金五百万円を清算してもらい、悠里は全てを忘れることにしたのである。

他の二人も同じようなものだ。関係を強要され、金で丸め込まれる。それぞれに理由があり、尚子から貰える特別手当を必要としていたのだった。

雪音も最初の頃一度誘われた。しかし、化粧もほとんどしない上、煙草も吸う。完全に太一郎の好みとは違ったため、アッサリ引いたのだった。

そんな雪音に目を付けたのが卓巳だ。

部屋付きのメイドは、部屋のプライベートをかなりの部分で知ることが出来る。そんなポジションにあずさのような女に入り込まれては、卓巳はうかうかと眠ることすら出来ない。あずさほど積極的でないにせよ、尚子らの息の掛かった女はご免だ。

その点、雪音は卓巳に対して好意を示さず、必要以上に話しかけようともしない。余計な詮索をしない女性というのは、卓巳にかなり貴重な人材だった。

だが周囲はそう思わず……。特に卓巳の叔母二人が雪音に対して様々な交換条件を持ちかけた。言い方は悪いが、買収しようとしたのだ。しかし、雪音はその一部始終を卓巳に報告。卓巳は一時期、母屋内に雪音の個室を与え、ガードしたくらいだった。

そんな卓巳の行動に、「卓巳様がとうとうメイドに手を付けた!」と、邸内は一時騒然となる。

直に、淡々と仕事をこなす雪音を見て噂は沈静化。現在は、雪音の希望で使用人棟のほうに戻っていた。

当の雪音にしてみれば 高校中退で手に職を持たない彼女が、ようやく潜り込めた職場だ。簡単にクビになる訳にはいかなかった。そして、目先の利益で言えば尚子が提示したものは大きい。だが先々を考え、雪音は卓巳側についたのだった。

「そう言えば、静香さまが言ってなかった? もっと前に、万里子さん……彼女とホテルで会ったって」

「言ってたあ。卓巳さま専用スイートにい、毎日のようにカノジヨが泊まってるんだってえ」

「そう言えば、先週なんか二日しか帰られなかったものね」

美和子と悠里、かんなの三人は、静香が邸内で言いふらしたことを口にする。宗の裏工作の成果と言っべきか。

「まあ、ね。卓巳の怒りようからも、ただごとじゃないって感じはするよね」

「そうよねえ。てつきり感情がない人なんだって本気で思ってたわだって、尚子さまたちの嫌味って凄じくない。あんなこと言われたら、普通怒って席を立つでしょう？　それが……」

雪音の言葉に美和子が相槌を打つ。

「カツコ良かったあ〜。妻に触れるな！　って、あたしも言うて欲しいいい」

両手を胸の前で組み、かなは語尾が鼻に抜ける声を上げた。「はいはい」と周囲は軽く流しながら、悠里は思い出したように言う。「でも……あのまま部屋に籠もっちゃったんでしょう？　聖マリアのお嬢様なら『あんなケダモノと一緒に住めません！』とか、卓巳さまに泣きついてたりして」

「意外と……涙に暮れるお嬢様を前に、卓巳さまってオロオロしちゃう」

「やっだあ美和子センパイ、それってあり得るかもお」

三人は声を揃えて笑った。

「そうでもないんじゃない。ついさつき、クリーニング持って部屋に行ったら、リビングにはいなかったから……」

雪音の妙に冷静な『爆弾発言』に、一瞬で控え室の温度が上昇する。

「えっ？　それってどういうこと？　まだ、お帰りじゃないわよね？」

「当たり前じゃない。部屋に入ったつきり、一度も出て来てないはずよ」

「ちよつとお。おしえてよ和田センパイ」

雪音は少し考えたが、卓巳の狙いに検討がついたので、敢えてそのまま口にした。

「だから……寝室に鍵が掛かってて、中からクラシックの音楽が聞こえた。それだけよ」

「ちょっと、それって」

「中でヤツちやってる？　ってこと」

「そこまで知らないわ。ドアに耳をつけて聞いたわけじゃないし…音楽鑑賞って言われたらそれまでなんじゃない？　寢室の奥にあるウォークインクローゼットに行こうとしたら入れなかったのよ。だから鍵にも気付いたくらいだし」

「音楽つてアノ声を消すためじゃない！　ねえ？」

「うわぁショックウ……卓巳さまが、真昼の情事なんてえ」

「卓巳さまって、本当に出来るんだ」

雪音の言葉に一様に驚いてるらしい。

「でも、本邸の自室で昼間っからなんて！　大胆よねえ。こんなこと尚子さまたちに知れたら、またどんな嫌味を言われるか」

「いいんじゃないの？　逆に、男の証明をしているのかもよ」

「逆に怒り狂うかも、だわ。尚子さまのトコって、十年以上夫婦生活の気配がないんですって」

再び控え室に笑い声が上がった。

彼女らは、休憩時間を女性週刊誌のような話題に終始し……ドアの外の気配に、気付くことはないのだった。

第三章 結婚 (13) ゴシップ・ルーム(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます！

今回ムードが違いますねえ…なんか「家政婦は見た」って世界になつちやつてますね(苦笑)

第3章は意外と長く続きそうです。ざつと(20)は超える予定。

「結婚」ですからね、結婚しないと(^^;))

それでは、引き続きよろしくお願い致しますm()——() m

第三章 結婚 (14) カノン

その頃、噂の二人は雪音が話した通り、寝室に居たのだった。

会話が途切れ、気まずい沈黙が部屋全体に広がる。そして、口を開いたのは卓巳が先だった。

「少し、工作をしておこうか……万里子、こっちに来てくれ」

卓巳はそう言うと、寝室に繋がる真新しいドアを開け、万里子を誘った。

リビングと寝室の間にはホールが取っており、左手にはバルコニーに出られるドアがある。部屋で寛ぐことの少ない卓巳には、ほとんど使ったことのないドアであった。

右手側にあるアーチ型のドアをくぐると洗面所だ。トイレとバスルームがあり、そこは寝室からも直接出入りできるように作っている。

寝室に入ると真っ先に目につくのは、中央に置かれたダブルベッドである。ベッドの向こう、右手奥のドアは、六畳ほどもあるウォークインクローゼットに通じている。

卓巳はCDをセットすると、スーツのジャケットを脱ぎソファの背もたれに掛ける。次いでネクタイを緩めてシャツの第二ボタンまで外し、ダブルベッドにドサツと腰を下ろした。

直後、部屋にはパツヘルベルの“カノン”が静かに流れ始めた。音楽など聴いたこともなかった卓巳にとって、近頃のお気に入りである。

「あの、私は何をすれば……」

さっきのやり取りのせい、万里子の表情は硬いままだ。卓巳の一挙手一投足を気にしているらしい。彼女はその手に卓巳の脱ぎ捨

てたジャケットを持ち、部屋の隅で見つけたハンガーに掛けると壁際のフックに吊るしている。

ホテルの部屋でもそうだった。男の上着を扱う仕草が自然で、つい「慣れてるんだな」と、そんな嫌味を口にしたこともある。しかし、「父親もすぐに脱ぎ捨てるんです」そう言っただけで万里子は笑った。見当違いの見苦しい嫉妬心は、どうやら万里子には伝わってなかったようで、その時はホツとした卓巳であった。

「そうだな、まず、ここに来て横になつてもらおうか」

「え？ えっ……あの……あの」

卓巳は当然のようにベッド指差して言う。だが万里子は、青くなったり赤くなったりしながら動けずにいた。

「いや、そうじゃない。ジャケットはそこに掛けたらいい、シワになると不味いだろう。ワンピースは……脱ぐという訳にもいかないか」

「え？ 脱ぐんですか？」

「だから、そうじゃないと言ってるだろう。そうじゃなくて……」

一応、ベッドを使った形跡と、君の髪を二丁三本残しておきたいだけだ。掃除に来たメイドが、すぐに広めてくれるだろう」

卓巳の言葉は残酷に万里子の中に響いた。

メイドとはさっきの女性であろう。深い関係の女性に他の女性との情事を知らしめるなど……それは丸つきり相手の心を無視した振る舞いだ。

躊躇する万里子を卓巳はどう思ったのか……。

「参ったな。そんな脅えた目をしないでくれ。何度も言うようだが、僕は突然君に飛び掛ったりしない。それとも……襲って欲しいのか？」

卓巳は腰掛けていたベッドに横になると、右肘をつき、半身を起

こして万里子を見た。
「さあ、来るんだ」

“カノン”はしだいに速く大きくなる、何度も繰り返されるそのメロディに、万里子の鼓動は同調した。カーテンが閉まったままの寝室はかなり薄暗い。だが顔が見えないほどではない。卓巳の襟元から見える鎖骨はとても男性的で、万里子を戸惑いの中に落とした。恋は彼女から理性を奪う。さっきまでの憤りや絶望感など、あっさり胸の奥のクローゼットに押し込ませた。万里子の中に、一度は捨てたはずの感情が呼び覚まされ、それは卓巳へと向い……。

「ここにおいで、万里子」
「……はい」

万里子はルームシューズを脱いでベッドの上にあがった。

卓巳とは、ほんの三十センチ……定規一本分の距離である。おそらくは、どちらが手を伸ばしても互いに触れ合うことが可能な距離。しかし、互いにとって地球の裏側に行くより遠い距離であった。

「卓巳さんも“カノン”を聴かれるんですね」

「不似合いか？」

「……いえ……。あ、あのリビングから寝室に来るドアが新しいのは、ひよっとして」

万里子との約束かも知れない。彼女はそう思っていた。

鍵を付けると卓巳は言った。太一郎には指一本触れさせない、と「気付いたか。君は良く見てる。廊下に繋がるドアにはセンサーを付けた。不正な手段で開けられた時は警備室に連絡が行く。窓も全てそうだ。寝室に繋がる扉を二枚にして、そこにも鍵を付けた。この部屋に居る限り、さすがの太一郎でも君に手は出せない」

自慢そうに卓巳は胸を張る。まさか、改装までするとは万里子も想像してなかった。精々、内鍵を増やすくらいだろうと考えていた

のだ。

「卓巳さん……あの、ありがとうございます」

恋は理性を奪う。

それは万里子からだけでなく、卓巳からも奪っていった。

「い……いや。大したことじゃない。契約だから、だ」

横になった瞬間、万里子の髪がベッドに広がった。それは数本、卓巳側に越境していた。身体は三十センチ離れていても、数本の柔らかい髪が卓巳の指を撥るくすぐのだ。その髪に触れ、辿って行きたい衝動に駆られる。

卓巳は慌てて両手を頭の下で組み、上を向いて寝転がった。

“カノン”は万里子のために用意した曲なのだ。彼女が二人で行ったレストランで……「この曲が好きなんです」と嬉しそうに笑ったのである。

(……こんな真似をするんじゃない)

卓巳はベッドに万里子を誘ったことを後悔した。そんな必要などないのだ。適当にシーツを乱れさせ、万里子から数本の髪を貰えば済むことである。隠しカメラがあるわけでも、盗聴器があるわけでもない。もちろん、そんなものがあればこの程度の工作では済むはずもないが。

卓巳は先刻からの言葉とは裏腹な思いを抱え、それを持って余していた。

今、彼の脳裏に浮かぶのは……万里子の白い首筋に自分の唇を押し付け、赤い痕跡を残したい、という激しい感情だ。もし、万に一つでも、自分の分身がこの場で立ち上がり、性交渉が可能な身体に

なつたなら……嫌がる彼女を押さえつけてでも、彼女の中に押し込み一つになりたい。卓巳はそんな不埒ふしちなことさえ考えていたのである。

それが犯罪で、万里子の信頼を損ね、一生許されない罪だと判つていても……。卓巳の性衝動は限界に達していた。

第三章 結婚 (15) 生い立ち

「卓巳さん……あの、いつまで、こうしてればいいんでしょうか？」
“カノン”が余韻を残しつつ静かに終わる。

卓巳が上を向いたのと同時に、万里子は彼に背を向けた。卓巳の邪な思惑よこしまなど想像もしてないのだろう。その無防備な細い肩に、どうしても触れたいくなる。そうっと手を差し出した瞬間、スピーカーから軽快なメロディが流れ始めた。それは、パッヘルベルの“カノン”と対になる“ジーク”だ。

その音にビクツとして卓巳は慌てて手を引っ込める。

あまりの醜態に自分で自分が情けない。卓巳は理性を総動員して、己の体内を食い尽くすような獰猛な野生を叩きのめし、屈服させた。万里子に気付かれる前に、悟られる前に……その一念であった。

「身体を起こしてくれていい。……少し話そう」

そんな声と共に、メロディの合間にベッドの軋む音が聞こえ、唐突に静寂が訪れた。卓巳がCDを止めたのだ。それに気付き、万里子も慌てて身を起こす。

卓巳はベッドに戻ろうとした足を止め、そのままソファに座り込んだ。

「君用に、同じダブルベッドを作らせている。後二週間は掛かりそうだ」

「こんな大きくななくても充分です。一人で寝るんですから」

「広い部屋なんだ、ベッドのサイズを気にすることもないだろう。」

奥のウォークインクローゼットは現在改装中だ。君のスペースを作

らせた。他に何か希望はあるか？」

「花嫁道具はどうしましょう。父がきちんと揃えなくてはということですが……」

「足りないものを揃えればいい。だが、お父上にも夢や理想があるだろう。叶えてあげればどうだ。君にとってはそのための結婚でもあるんだろう」

「……はい……」

卓巳が万里子に近寄らない訳も、出逢った頃に戻ったかのような冷たい物言いも、卓巳の中に信じられないほどの変化を齎した結果だとは思ってもせず……。

万里子は額面通りに受け取り、落ち込んでいた。

食堂で太一郎から庇ってくれた、あの熱さは何処に行ってしまったんだろう。もちろん、人の目があるから芝居をしたのだ、ということは判っている。でも、卓巳の部屋に入ってから、あの熱い眼差しはいつたい……。

卓巳ほどの男性なら相手は選り取りみどりのはずだ。仮に、偽装であっても卓巳の妻に成りたがる女性は多いと思う。でも、妻となつた女性と関係してしまい子供でも授かれば、契約通りに別れることは難しいのだろう。叔母二人が語るよりもっと卓巳の立場は複雑で、財産も個人レベルの話ではないような気がする。

だから、万里子を選んだ。時々、恐ろしいほど熱い視線を卓巳から感じる。しかし、それに応えようと万里子が正面から彼を見た瞬間、氷に閉ざされるのだ。

卓巳は子供という言葉に過敏に反応する。きっと卓巳を苛む傷に關係することなのだ。隣のリビングで万里子が質問した時も、女性の問題だ、と彼はキツパリ答えた。卓巳は相手を試すつもりなのかもしれない。万里子のように、我が子を殺す鬼のような女、かどう

か。

どれだけ思っても、彼のために尽くしても、万里子が愛されることはない。そして、欠陥品である自分には愛を伝える資格すらなく……。

（六度目だ）

卓巳は万里子のため息を数えていた。

彼は自分の中に目覚めた情熱と、それに反比例する下半身との温度差に、胸が裂かれそうであった。万里子が卓巳を気にする以上に、彼女の言葉も態度も、その全てが気になる。そして太一郎の件があったから、一度も笑わない万里子が怖かった。

（結婚を止める気かもしれない……）

最悪の展開が頭を過ぎる。太一郎のせい、それとも、叔母たちに聞いた話の内容か。卓巳は、万里子のため息の理由が自分にあるなどと、欠片かけらも思っていない。

少しでも万里子の近くにいたい。だが、実らぬ恋は胸を突き刺すように苦しく、突き放してしまう。しかし、離れた瞬間、また万里子を求めるのだ。今の卓巳は初恋に翻弄される少年同然であった。ここはなんとしても、言葉を尽くして万里子を引き止めねばならない。それがたとえ同情であつたとしても。

「驚いただろう？ 僕が施設で育つたと聞いて」

「はい……こちらのお屋敷でお育ちになったんだとばかり思ってた」

「いいだろう。ついでだから、僕の置かれている状況を、君にも知っついて貰おう。聞いてくれるかな？」

「はい。もちろんです」

それは雑誌やインターネットで目にする、貴公子然とした卓巳の姿からは、とても考えられない生い立ちであった。

くくくくくくくくくく

皐月は一人息子の卓哉を非常に大事に育てた。結果、彼は典型的なマザコンのまま大人になってしまった。その卓哉が二十五歳の時、卓巳の母・響子と出会う。響子は三歳年上で、当時キャバクラ嬢をしていた。

そしてすぐに響子は妊娠。皐月は「優しくて人の好い息子」が女に騙されたと思っっているが、所詮、女にだらしない割に気弱で優柔不断な卓哉の不始末であった。

それが原因で、元々仲の良くなかった父・高德と衝突。彼はいきがって藤原の家を出る。卓哉は自分が父の会社に居てこそ、それなりの役職に就いていられたことを知らなかった。だがこの時、彼はまだ樂觀していたのだ。父にとって息子は自分しかない、父のほうから折れてくる、と。

皐月も同様だ。近いうちに響子と別れさせ、呼び戻せばいい。そんな考えから皐月はせつせと息子に金を送った。だが、二人の思惑とは逆に、なんと高德は愛人に産ませた二人の娘を本邸に引き入れたのだ。当時二十歳の尚子と十三歳の和子である。

そんな生活が数年続き、尚子の結婚が決まった直後、皐月の口座は凍結された。高德は別の後継者を得たことで、息子らへの一切の援助を断ったのだ。その頃、一家は皐月の仕送りのみで遊び暮していた。それがなくなり……響子は夫と子供を捨て、若い男と消えたのだ。

当時五歳の卓巳の背負った苦勞は、筆舌に尽くし難いものとなつて行く。

いよいよ生活に困窮し、卓哉は高德に泣きついた。土下座して家に戻して欲しいと頼んだのだ。だが、高德は父子を藤原家からあつさり追い出したのである。

卓哉は仕方なく工事現場やパチンコ店の住み込みで働いた。職がない時は、公園や駅のホーム・橋の下で寝起きすることもあった。だが、坊ちゃん育ちで繊細な卓哉に、そんな生活が長く続くわけもなく……。卓巳が十歳の時、父・卓哉は突然倒れて還らぬ人となった。

その後、卓巳は施設に保護され、それからの二年間、そこでの生活は彼にとつてまさに天国であった。

まず、屋根の下で寝起き出来る。一日三回の食事と二日に一度は風呂に入れる。そして、何にもまして嬉しかったのが、学校に通えることだった。

卓巳は義務教育にもかかわらず、ほとんど学校に通ったことがなかったのだ。当時、小学五年であるのに、自分の名前が漢字で書けなかった。しかし、彼のそんなハンデをあっという間に克服し、半年後には、学年トップの成績を修めるようになる。

だが、天国はすぐに地獄へと変わった。卓巳が中学に上がって間もなく、七年前に卓巳を捨てた母・響子が迎えに来たのだった。

実は、卓哉と響子は正式に離婚してなかったのだ。響子が再婚したくて離婚の申請をしたところ、卓哉の死を知った。そして、再婚予定の内縁の夫は、息子の卓巳には祖父の相続権が生じることを響子に吹き込んだのである。藤原家のほんのオコボレでも頂こうと、彼らは卓巳を探し出し、引き取ったのだった。

藤原高德は、家でも会社でも自分に反対するものは容赦なく切る、

暴君であつた。

芸者上がりの女に産ませた二人の娘を、家に引き込むこと事態、普通では考えられない話だ。

おそらくは、身分を鼻に掛けた臯月に対する報復だったのだろう。その妻に似た卓哉も卓巳も、高德は死ぬまで愛することはなかった。響子と内縁の夫が高徳に生前分与を申し入れた時、すでに卓哉は相続人として排除された後であつた。そして、代襲相続となる卓巳の権利すら取り上げようと画策。金にものを言わせれば、響子らが高德に敵うわけもなく……。

金目当てで正式に引き取ったものの、金は手に入らず卓巳はただのお荷物となる。

長距離トラックに乗る義父は週の半分は居なかつたが、家に居る時は卓巳に暴力を振るつた。母・響子はスナックでホステスをしており、夫の不在をいいことに度々若い男をアパートに引き込んだ。挙げ句の果ては……。響子は際限なく卓巳を苦しめたのである。

中学卒業後、卓巳は工事現場の作業員や新聞配達・宅配会社の仕分けなどで働き始める。母の紹介でスナックの厨房で皿洗いもするが、女性の多い仕事場は長くは続かなかつた。

次第に、不況から義父の仕事も減り、母は体の不調を訴え仕事は休みがちになり……。実質的に、家族三人の生活はわずか十六歳の卓巳が支えていたのだ。その後、母の病状は悪化し入院。と同時に、義父は若い女に走り、母は捨てられた。

諸悪の根源とも言える母・響子は、卓巳が十八歳の時に他界した。これにより、卓巳はようやく自由の身になれたのだつた。

卓巳は、再び勉強を始め当時の大検に合格。翌年には奨学金を受け、東京大学法学部に入学する。家庭教師や夜間の警備員などバイトで生活費を稼ぎ、二十三歳で卒業。同時に司法研修所に入り、修習に入つて間もなく、祖母・臯月から藤原グループの総帥候補とし

て呼び戻されたのだった。

第三章 結婚 (15) 生い立ち (後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

途中で切るわけにいかず……普段に倍くらいになってしまいました

(^ ^ ;)

同情作戦に出るヒーロー、なんか気の毒になってきた……orz

応援してやって下さい (苦笑)

引き続きよろしくお願い致しますm () () m

第三章 結婚 (16) 偽りの告白

億単位の金を右から左に動かせる、世界的に名が通っている日本を代表する企業の若き社長が。

小学生の頃、まるでホームレスのようなことをしていたなんて……万里子は口の中で呟いた。だが、卓巳にも聞こえていたようだ。

「のようなこと、をしていたんじゃない。ホームレスだったんだ。最低限のモラルで犯罪には走らなかつたが……。何度、店先からパンを盗みたいと思つたか知れやしない。自慢にはならないが、風邪はひいたことがないし、食中毒もない。健康というより、耐性が出来ているんだろうな」

「それは……その……良かったですね。何事も無駄じゃないっていうか」

万里子には何と答えれば良いのか判らない。それでも、良い点を探そうとする辺りが、彼女らしい見解であつた。

「僕はね、高校には行つてない。その頃は、朝から晩まで働いていた。工事現場で鉄骨を担ぎ、トラックターミナルでは荷物の積み下ろしをやつた。子供の頃から、いじめなんてレベルじゃないくらい叩きのめされてきたから……。だから今、叔母方に何を言われてもほとんど気にならない。体が大きいのが偉そうだ、とよくケンカもふっかけられた。助けってくれる人はいなかつたからね、自然に強くなった。太一郎なんかはガタイはいいが所詮坊ちゃんだ。力比べでも叩き伏せる自信はある」

淡々と語る様子を万里子は黙つて聞いていた。卓巳の声音はまるで自虐的だ。だが、彼の自信に満ちた態度の源を知り、それが彼のアイデンティティーになつてきているのだ、と悟る。

「呆れたらう？ アルマーニのスーツを着て、BMWに乗り、社長と呼ばれてる男のコレが正体さ。叔母の言った通り乞食こじきなんだ。こんな男の妻と呼ばれるのはイヤだらうな。だが、ここで君に逃げられたら僕はお手上げだ。君との関係が身体や愛情ではなく、契約書で繋がっていると知られてもアウトだ」

卓巳は両手を広げ、肩を竦めて見せた。

「でもっ！ 卓巳さんがいなくなったら、会社が困るんじゃないんですか？ 二十代で巨大グループを纏め上げた手腕とか、そのカリスマ性とか、あちこちにたくさん書いてあるのを読みました！」

万里子は必死になって言い募った。

「もちろん困るだらうな。ハッキリ言っただ一郎じゃ、三日で本丸が傾くだろう。愛着はあるさ、だが、残ってあの男の下で働くくらいなら……。僕はグループが倒壊して経営権が譲渡されてもここを出る。何もかも失うが、元々なかったんだ。また始めるさ」

卓巳は強いのだ。だから、平気で一から積み上げることが出来る。一つのこと執着もしない。卓巳の叔母たちが彼を甚振るのも、追いつくという魂胆ではなく、彼が怖いのだろう。

だが、卓巳はどんなに辛い過去を語っても、誰かを口汚く罵ることはなかった。それだけでも、万里子にとって卓巳は、尊敬に値する人物だと思えた。

「それは……。困ります。そうなったら父の会社に対する融資の話はどうなるんですか？ だから、卓巳さんには社長を辞めてもらったら困るんです」

万里子はベッドに座ったままふわつと微笑んだ。小首を傾げ、悪戯っぽく……。言葉を繋げる。

「だって、私たちは共犯なんですよ。周りの皆に嘘をついてしまいました。神を……。騙す覚悟も出来ています。絶対に負けないで下さ

い！ 従弟の太一郎さんにも、叔母様方にも、あなたが負けてしまつたら、私もアウトなんですからね」

「こんな男でも、まだ、尊敬して信じてくれるのか？」

万里子の笑顔につられたのか、卓巳もこれまでになく柔らかい笑顔になる。

その時、フツとあのメイドの存在を思い出した。更には、余計なことまで気になり始めてしまう。

「あつ！ 私の信用を失うようなこと、なさってるんですか？」

本当は……女性の方を泣かせていたり、恨まれるようなことを」

「……気になるかい？」

「それは……そ、それから、叔母様たちは、一体何が言いたいのでしょうか？」

和子が言った『愛情も夫婦生活もない結婚』というのが万里子には良く判らなかつた。お金目当てで愛情がなかつたとしても、夫婦生活までないとどうして判るのか……いや、断定出来るのか、だ。

「叔母上たちの言葉は信用しないでくれ。ちょうど君くらい頃、失恋のショックで一時期、女性と関係が持てなくなつたことがある。その当時のカルテを見つけて出してきて、僕が不能者だと言いついてるんだ。後継者を作れなければ、会社はともかく、この家を相続するには相応しくないと云うことらしい」

卓巳の額に浮かぶ汗、とか、声が少し上ずっていたこと、とか。ほんの些細な違和感が、この時の卓巳を包み込んでいた。

しかし、万里子に最も重要だったのは 卓巳にそこまで愛した女性がいた、と云うことだろう。俄かに嫉妬心（むね）が首を擡（もた）げ、万里子の胸はざわめいた。

「ああ、それで……。ホテルに泊まつたことを、ふしだらだと責め

られるのかと思っていたのですけど。それは嘘だ、フリだと言われるので不思議に思っていました」

「証拠を見せるといわれてもね。密室で叔母上相手に証明するわけにもいかないだろう？ 君にしつこく聞いてくるかもしれないが…

…」

「どう答えたらよろしいですか？」

「無視していい。或いは、そんな破廉恥な質問には答えられない、僕に聞け、と言ってくれてもいい」

「判りました。でも、卓巳さんに女性を愛せないなんて…：馬鹿げてますね。そんなことあるはずなのに」

ほんの何気ない一言だった。メイドの、あずさの話が頭を過ぎったせいかも知れない。

ホームレスであった、施設で暮らしていた、など、驚くことばかりだ。しかし、それで卓巳に対する気持ち揺らぐことはなかった。卓巳が万里子を信用して様々なことを話してくれた。そっこのほうが重要である。

それは四年前の出来事すら、すっかり忘れそうになるくらいで…。

「ああ、そんな馬鹿なことはあり得ない。僕は自分の意思で君を抱かないんだ。母は…：何度となく子供を墮胎していた。お前も墮ろせばよかったと、そう言われ続けた。それが…：僕が君を許せない大きな理由だ」

卓巳の虚勢に気付くはずもなく。万里子の愛を知る由もない。互いに傷を隠しながら 切ない笑みを交わす二人であった。

第三章 結婚 (17) 宣戦布告

「臯月さま！ 臯月さまっ！ お聞きになられましたかしらっ!?」
玄関ホールから階段下を抜け、廊下の突き当たりサンテラスがある。およそ十帖程度の、この邸のサイズから言えば小さなものだが、足腰の弱くなった臯月が、庭の見える場所で寛げるように、と作られたのだった。

万里子は帰る前に、臯月の元に立ち寄り挨拶をするはずだ。その時に、しっかり見極めねばならない。卓巳に対する想いが真実なのか。一点の曇りもない無垢な眼差しに、臯月自身が惑わされていないかどうか。

先ほどまで外は風が吹いていた。裏庭の木々も音を立て葉を散らした。その反面、陽射しは暖かく、テラスの中はまるで春の陽気だ。臯月付きのメイド根元千代子ねもとちよこが、紅茶をポットで臯月の元まで運び、丁寧にティーカップに注ぎ込む。臯月がお気に入りのエインズレイを手に取り、口元に運んだ瞬間、尚子が血相を変えてやってきたのだった。

「どうしたのです、尚子さん。そんなに慌てて……」

「どうもこうもありませんわっ！ 卓巳さんたら、あの娘を部屋に連れ込んだまま、一向に出て来ないと言っじゃありませんか!?!」

「しかも……しかも、ですわ。寝室に鍵を掛けて、二人で閉じ籠もったままなんて!」

「まあ、本当ですか？ お姉さま。まだこんな日の高いうちから……卓巳さんは何を考えておいでなのかしら?」

尚子の後ろから入ってきた和子も驚きの声を上げる。

「あの娘も可愛い顔をして、こんな恥ずかしい真似を……。先ほどの太一郎さんのことも、あの娘が誘ったのに違いありませんわ!」

よろしいんですのっ!? 臯月さまがお許しになる前に、こん

な勝手な真似をさせておいて！」

ゼイゼイと肩で息をする尚子から、皐月は紅茶に視線を落とす。ふうっ、とため息をつく、と、ティーカップをソーサーに戻した。

「判りました。千代子、卓巳さん呼んで来て下さいな。二人で来るように、と」

「かしこまりました」

メイド頭でもある千代子は、背筋を伸ばしたまま一同に軽く会釈し、サンテラスから出て行くのだった。

くわくわくわくわく

十分後、卓巳と万里子は皐月の前に揃って姿を現した。

「何事でしょう？ お急ぎと聞いて参りましたが」

卓巳はジャケットは着ていたが、ネクタイは緩めたままだ。外されたままの襟元のボタンが、普段の彼とは違ったムードを醸し出していた。

皐月は軽く咳払いをすると、

「もう二時間近くになりますよ。家族の住まいで、結婚前の男女が二人つきりで過ごすには長過ぎる時間です。万里子さんを大事に思うなら、卓巳さんが気を付けなくては」

「申し訳ありませんでした。私の配慮が欠けました。これからは充分に気をつけます」

卓巳の台詞はさりげなく“次”があることを匂わせていた。

「まあ、皐月さま、この程度でお済みになるおつもりですか？」

尚子がわざとらしく声を上げる、そして卓巳に向き直ると再び嫌味を言い始めた。

「あの冷静で女性問題など起こしたことの無い卓巳さんがねえ。これほどまでに夢中になれるなんて、虫も殺さぬお顔だけど、相当男心に通じてらっしゃるのね。恐ろしいこと」

「叔母上、言いがかりです。僕たちはただ、部屋で音楽を聴きながら、結婚後の話をしていただけですよ」

「これも卓巳の策略だ。結婚が決定事項とも言いたげな口ぶりであった。」

「話をされるだけなのに、ドアに鍵を掛けてカーテンまで閉められたのね。どんな用心深いお話かしら？」

「わざわざ寝室のドアの外まで確認に来られたのですか？ ご苦労様です」

卓巳に軽く往いなされ、尚子は怒りの矛先を万里子に向けた。

「先ほどは大騒ぎなさっておられましたわね？ でも、あなたから太一郎さんに色目を使ったんじゃない？ 将来の総帥は太一郎だと聞いて、乗り換えるおつもりかしら？」

「いえ、わたしは……」

「叔母上、これ以上私の妻を愚弄されるなら、私にも考えがありませんよ」

卓巳のトーンが一気に落ちる。そこまでのとぼけた口調が、鋭く研ぎ澄まされた刃へと姿を変え、尚子の喉元に突き付けられた。

一瞬で言葉を失う尚子に代わり、口を開いたのは皐月だった。

「幸か不幸か、まだ正式な妻ではありませんね。実際の関係はともかく……それだけで、妻同然に扱わねばならないなら、先代や太一郎さんには、軽く二桁の妻が存在してしまいます」

それは皐月の、まだ結婚を認めただけではない、という意味表明である。私欲や私怨で吼える輩やからとは、重みの違う台詞であろう。

しかし、これしきで引く卓巳ではない。

「私が妻と呼ぶ女性は、生涯一人だけです。他の方と同列に扱わな

いで頂きたい」

卓巳は臯月を見据えてキツパリ言い切った。そう、まるで宣戦布告のように。

そんな卓巳の横顔が、万里子には眩しかった。

寝室での告白を聞き、卓巳が万里子を通して見ていたのが母親だと知る。そして、中絶経験がある女そのものに嫌悪感を抱いていることも。いつか言っていた、卓巳が間違いを犯すかも知れない「清纯で天使のような娘」。彼が心から愛して妻にしたいのは、そう言った女性なのだろう。

そしてそれは、万里子がどんなに努力しても引き返せない場所に存在している。

今の万里子には、卓巳が口にする『台本のある台詞』に、涙がこぼれるほど嬉しかった。

「だから言ってるじゃありませんの？ あなたの妻だと仰るなら、ちゃんとした証拠を示してちょうだいな。あなたが、この藤原家の後継者として問題ないお体で、臯月さまが結婚をお認めになるなら、あたくしたちも了承しますわ！ 万一同にも、後継者が望めないなら、当主は太一郎さんにお譲り頂かないと」

「ですから……祖母上が太一郎くんを後継者に決められるなら、自分は黙ってこの家も会社も出る、と言ってるではありませんか。これ以上どうしろと？」

「では、お認めになるのね？ 検査を受けることが出来ないということは、肯定と同じですものね。よろしいわね、卓巳さん」

「……」

卓巳はなぜ、こうまで頑なに拒否するのだろう。誇りを傷つけられた気がして嫌なのだろうか？ 或いは……。万里子がそんなこと

を考えている最中だった。

尚子はとんでもない要求を、万里子の突きつける。

「それとも……万里子さんに証明していただくでしょうか？」

第三章 結婚 (18) 愛の証明

「あ、あの……わたしに何を？」

それはあまりに突然で……。万里子だけでなく、卓巳も、臯月にすら尚子の意図が判らない。

「あなた、卓巳さんが『妻だ』と仰るのに、ひとつも反論なさってませんわよね？ それは、すでに卓巳さんと男女の関係だとお認めになってるのと同じじゃありませんの。でしたらお伺いしますわ

あなた、卓巳さんとセックスなさったの？」

あまりに明け透けな質問に、万里子はトマトのように真っ赤になり俯いた。

「いい加減にして下さい！ お話なら私が伺います。万里子にそんな質問はしないで頂きたい！」

卓巳はついに尚子を怒鳴りつける。

しかし垣間見せた動揺に、卓巳に対する畏怖いふの念がわずかに削がれた。これまで黙らせてきた叔母たちの口を、今度は塞ぐことが出来ない。

「何を今更……初めて訪れた家で、二時間も男の寝室に籠もる様な女が、どんな恥を知っていると云うのです」

「わたくしもお姉さまの意見に賛成ですわ。卓巳さんがハツキリ言ったださらないなら、万里子さんに伺うしかありませんわね」

勝ち誇ったように笑う二人の叔母を見て、卓巳は舌打ちした。

卓巳自身は何を言われても構わない。慣れたものだ。だが、万里子にとっては違う。一刻も早く、この家から連れ出さなければならぬ。そのためなら。

「判りました。どうぞ、お好きに思って頂いて構いません。では、失礼致します」

卓巳は臯月に向つて一礼した。そして、万里子の腕を掴み、サンルームを出ようとした時、卓巳を引き止める小さな声が聞こえた。

「……は、い……」

万里子は顔を上げ正面を向いた。震える指で卓巳のスーツの袖を握り締めながら、驚きの言葉を口にしたのである。

「はい。わたしは、結婚前でありながら……卓巳さんの愛を受け入れました。申し訳ございません」

指だけでなく、声も身体も震えていた。衆人環視の中、卓巳との婚前交渉を認め、軽はずみな行いを謝罪したのだ。深々と頭を下げる万里子が目に映った。その時、卓巳を覆い隠す氷の鎧など瞬時に碎け散る。

「彼女のせいじゃない！ 僕が強引に関係を迫ったんだ。彼女に一切の責任はありません！ 万里子は何も知らなかった。それをいいことに付け込んだのは僕だ！」

卓巳の叫び声にサンムールにいた全員が呆気に取られる。彼は更に臯月に向き直ると、

「どうか、おばあ様、彼女を浮ついたふしだらな女だとは思わないで下さい。一時の感情や遊びなんかじゃない！ お互いを生涯の伴侶と思つての行為です。彼女は僕の母とは違ふし、僕も父とは違ふ！」

臯月は、ここまで必死に形振り構わず、まるで袂たもとに縋なりふるような卓巳を初めて見た。

「いえ……わたくしは、そんなこと……」

思つてはいませんよ、と言つてやりたいのだが、驚き過ぎて言葉が出ない。

しかし、この中で些か感覚が鈍いのか……或いは空気が読めないのか、和子がとんでもないことを言い出したのだ。

「では、万里子さんに検査を受けてもらいましょうよ。ねえ、お姉さま」

「万里子さんに？」

さすがの尚子も妹が何を言いたいのかわからない様子だ。

「ええ、万里子さんは何もご存じなかったんでしょう？ それが、卓巳さんによって無垢ではなくなった、と仰るなら病院で調べてもらえばよろしいのよ。そこまで仰って、万里子さんが無垢なお体なら……それは財産目当てに真つ赤な嘘をついておられると言つこと、違ひまして？」

これは完全に万里子を処女だと見越しての発言である。

おそらくは、卓巳もそう思っているはずだ、と。もし、予想に反して万里子が純潔でなければ、卓巳は彼女に愛想を尽かすのではないか？ 和子にしては珍しく、先々まで計算しての発言であった。

尚子は妹の発言に一瞬たじろいだが、

「え、ええ……まあ、そうですね。それではつきりするわ。ねえ、卓巳さんもそれでよろし」

「断る！ 万里子にそんな真似はさせられない。それくらいなら、僕を不能者だと呼んでくれ。すぐにもこの家を出て行く！」

「……検査を受けたら、卓巳さんとの結婚を認めていただけますか？」

「万里子っ！」

激昂する卓巳の横で万里子はとんでもないことを言い始めたのだ。

「ええ、あなたと卓巳さんが、すでにご夫婦同然の関係だと判ればね」

「判りました。検査を……受けます」

卓巳は眩暈を覚える。叔母も叔母だが、応じる万里子の考えもさ

っぱり判らない。

「万里子……君がそこまでしなくてもいいんだ。結婚を認めてもらうのは僕の役目だ。君は」

「あなたの傍にいたいんです！ あなたの妻になれるのなら……何でもします。どんな屈辱にも耐えられます。卓巳さん……わたしは、あなたを……愛しています」

万里子の瞳から数滴の雫がこぼれ落ち、頬を伝った。それはサンルームに射し込む光に反射して煌いた。

(……夢のようだ。頼む、出来る限り長く覚めないでくれ！)

卓巳は必死で、これは偽装だ、芝居なのだ、と自分に言い聞かせていた。

そうでなければ、泣きながら自分の袖を掴み「愛してるから何でもする」という万里子の手を取り、すぐさま教会に飛び込んでしまいたいような自分がいたからだ。

もし、万里子が検査を受けて純潔でないと判ればどうなる？ その後、卓巳の不能が明らかになれば恥どころでは済まない。ましてや、医者に手に掛かれれば墮胎の経験まで明かされてしまう可能性もある。それでは、万里子の未来を卓巳自身が潰すことになってしまう。

今の万里子は過去の恋に殉じるつもりのようなのだ。恋愛も結婚もしない、と言っているが……。いつ、心惹かれる男性が現れないとも限らない。彼女の穢れなき心や、春の陽射しにも似た柔らかな笑顔を理解できる男なら良いが……。上辺で判断する男ならどうだろう。万里子の過去を知れば、簡単に関係して捨てる 娼婦のように扱つかも知れない。

そんな辱めを彼女に与えるくらいなら、全てを告白しよう。たとえ、太一郎の下に付くことになるうとも、どれだけの屈辱を味わお

うと、万里子にだけは幸せになって欲しい。

卓巳がそう決意した瞬間

「それはあんまりですわ！　こんな若い娘さんに、なんて酷い仕打ちを……。大奥様、結婚前にお互いを知り合うことは、今時の若い方には当たり前のごさいます。私はそういったお方を何人も存じております。よろしければ、ここでお名前を挙げてもよろしいのですが……」

メイド頭の千代子は大きな声で、和子をチラチラ見ながらそう言ったのだった。

第三章 結婚 (19) 繋いだ手

千代子は勤続三十年を超えるベテランのメイドだ。

執事の浮島同様、この家のことは知り尽くしている。尚子と和子が藤原本邸に引き取られてすぐの頃、どんな行いをして来たか、最も良く知る人物の一人であった。

千代子自身は十代半ばに、交通事故で両親を亡くしていた。

それはあまりに突然の出来事だった。ランドセルを背負う三人の弟妹を養うため、彼女は高校を辞めて働きに出たのだ。それが藤原家であった。しかし生活が苦しくなり、彼女は大人の甘言に乗り、つつい高い高利貸しに手を出してしまう。そして、取り立て屋に水商売に売られそうになった時、助けてくれたのが皐月だった。皐月は借金を肩代わりして、千代子を救ってくれたのである。

その後は先代ではなく、皐月を女主人として崇拜し、結婚もせず仕えてきた。

そして六年前、皐月にとって血の繋がった唯一の孫である卓巳が、藤原家に入ってきた。当初、千代子は彼に酷く冷たかった。なぜなら、先代をはじめ藤原家の男たちは、例外なく、下半身に人格を持っていなかったからだ。目に余るほどの不遜な行いを、若い頃の千代子自身も受けていた。

しかし、卓巳は違った。使用人にも敬意を払い、乱れたところは一度も見せない。次第に、千代子は卓巳を主として認めるようになる。そしてそれは、敬愛する皐月によく似た風貌も、千代子の母性を引きつけた理由であった。今の千代子は、卓巳を我が子同様に思っていたのである。

それゆえに……『卓巳を会社に縛り利用したいが、藤原本家から

は追い出したい』そんな自分勝手に浅ましい尚子・和子姉妹とは、事ある毎に衝突していた。

「ちょっと千代子さん！ 使用人が口を挟むべきことではないわ。お黙りなさい！」

「私は藤原家のご当主、皐月さまの使用人でございます。主人の敵とも言うべき、妾めかけの娘に従う謂いわれはございません」

「なんですって！ もう一度言っくらんなさい。お前なんかクビにしてやるわ！」

尚子は頭から湯気が出そうなほど怒っている。

「およしなさい。千代子、言い過ぎですよ。謝りなさい」

「はい。……大変申し訳いございませんでした」

あくまで口だけ、という傲岸不遜しこうふそんを絵に描いたような謝罪の態度に、尚子の怒りは沸点に達したようだ。しかも、それを万里子に向けようとす。

「快く承諾して下さい嬉しいですわ、万里子さん！ 善は急げと言いますもの、早いほうがよろしいわね。明日にでも……」

「その必要はありません」

尚子の言葉を遮り、卓巳は言い返した。

「検査が必要なら私が受けます。万里子が証明すべきことではありません」

初めて卓巳に首を縦に振らせることが出来、叔母姉妹の顔は輝く。だが、それは長くは続かなかった。皐月が意外なことを言い出したからである。

「その必要こそありませんよ。検査結果が記載された報告書ならここにあります。卓巳さん、あなた今月初めに、大阪の大学病院に検査に行かれていますね。結婚に際してあなた自身が気がかりでも

あったのでしよう。女性不信でそういった経験があつて、男女間の問題には些か繊細である、と自覚もあるのでしょうね。沖倉先生にお願いして診断書を頂いて参りました。藤原本家の後継問題にも関わることですから……事後承諾になつて、許して頂戴」

皐月の手にソレがあることは承知していた。

万里子のことを皐月に話した夜、祖母と沖倉弁護士の会話を聞いたからだ。無論、そこに書かれてある内容も、重々承知している。

卓巳の背に冷たいものが伝つた。

(万里子の前で、全てを明らかにするつもりなのか……どうしても、破談にしたいのか)

グツと握り締めた拳が、突然温かいものに包まれた。

卓巳は驚いて下を向く。袖を握り締めていた万里子の指が、今は卓巳の手に添えられていたのだ。信じられない思いで、卓巳は万里子の顔を見た。

万里子は涙の跡が残つたままの顔で、卓巳を見て花が綻はらぶように微笑んだ。思わず微笑み返そうとして……卓巳は、自分が如何いかに緊張して、歯を食い縛つていたかに気付く。肩にも力が入り、全身がガチガチになつていた。

まずは息を吐き、それから吸い込んだ。そして……左手から力を抜いて、開いた指を万里子の指の間に差し込む。その折れそうなほど細い指に、しっかりと自分の指を絡め、握つた。

「まあ、皐月さま！ そういったものがあるなら、わたくしたちにも早く見せて下さればよろしいのに！」

「そうですね。……卓巳さんもお人が悪い。ご自身も気になさっているんじゃないませんか。人目を忍んで検査に行かれるなんて」

卓巳の緊張の度合いは、小さな仕草に表れるだけだった。表情は何も変わってはいない。

一方、叔母二人は獲物を見つけた肉食獣さながらである。獲物自体も肉食獣なのだが……手負いでは、獅子とて、死肉を漁るジャツカルの餌食となりつつあった。

「さ、お見せ下さいな、皐月さま。何も問題がないのなら構わないですわよね、卓巳さん？」

「……おばあ様」

卓巳は掠れた声で祖母を呼ぶ。それは、懇願であった。

「よろしいですよ。御覧なさい」

報告書が叔母たちの手に渡った瞬間　卓巳は目を閉じる。

万里子の手をそれまで以上にしっかりと握り締めた。その時、彼女の指にも力が加わり……二人は引き離されまいと、きつく手を繋ぐのだった。

第三章 結婚 (20) 愛に満ちた嘘

広大な庭はビッシリと芝生で埋められ、遠目には緑の絨毯に見えた。近づけば、それなりに黄色いものもチラホラとある。もうすぐ十一月だ、気温が下がれば仕方のないことであろう。

その、サンテラスから見えた裏庭を、卓巳と万里子は皐月の車椅子を押して散策していた。

「どうしました？ 卓巳さん」

「いえ……どうして、あの報告書をお持ちだったのかと思ひまして」「皆の前で言った通りです。沖倉先生にお願いして、貰ってきて頂いたのでですよ」

卓巳は再び口を閉じた。開きかけてはまた閉じる、を繰り返している。

そんな卓巳の様子に万里子も気付き、何度か気を利かして席を外そうとしたのだ。だがその度に、太一郎の影が頭をかすめ、万里子は、卓巳の傍から離れるタイミングを逃していた。

「ねえ、万里子さん」

「はい」

卓巳の様子を窺い、そわそわする万里子に気付いたのだろう。皐月から話しかけてきた。

「聞いておられるでしょうけど、わたくしの心臓はそう長くは持たないのです。おそらくは、あと一年も……」

「そんな風に仰らないで下さい！」

「そうですね。おばあ様にはもつと長生きしていただかないと」

車椅子を押す手を止め、卓巳も声をかける。

風がそよめき、万里子の柔らかい髪を靡なびかせた。サンルームは暖かかったが、外に出て風に当たると少し肌寒い。皐月の足からずり

落ちそうになるひざ掛けに気付き、万里子は慌てて手を差し伸べた。皐月は万里子に礼を言い、ゆっくりと話し始めたのだった。

「そのことはもう……。それより、あなたがたお二人に聞いて頂きたいことがあるのです」

「なんででしょうか？」

聞き返す卓巳の声に、先ほど叔母たちの前で見せた緊張の色はなく、いつもの彼に戻っていた。

「グループの総帥は、卓巳さんを置いていらつしやらないでしょう。卓巳さんにも、そのことは充分判っておられることだと思います。……卓巳さんのご苦労は、全てわたくしの責任なのです。わたくしが、夫の愛し方も、息子の愛し方も間違えたばかりに。卓巳さんに全てをお返しして、幸せになって頂きたくて、呼び戻したつもりでしたのに……。却^{かえ}って、針^{むし}の筵^{しん}に座らせてしまいました。だからこそ、この邸に卓巳さん一人残して逝くわけにはいきません」

皐月は万里子に向き直り、彼女の手を取った。

「どうか万里子さん、卓巳さんの傍に居て上げて下さい。離れたくない、妻になれるなら何でもする、そう言ったあなたに、わたくしは全てを託します。心から、卓巳さんを愛してくれているあなたに……」

それは、命を籠めた願いだった。皐月の手は驚くほど白いが、とても温かく万里子を包み込んだ。

契約書には、この皐月が亡くなって一年後に別れる、と書いてあった。万里子はあまりの申し訳なさに真実を口にした衝動に駆られる。だが、そんなことは口が裂けても言えない。皐月の心臓が持たないだろう。万里子は罪の意識を堪えるしかなかった。

だが……真実は言えないが、嘘も言うまいと心に決める。

「おばあ様、卓巳さんの近くには、素敵なお女性がたくさんいらっしゃいます。いつか、わたしなど必要なくなる日が来るかもしれません。でも、卓巳さんに望まれる限りお傍にいます。それは、お約束します」

万里子の言葉を受け、皐月も、然も^さありなん、と頷く。

「ええ、ええ。藤原家の男性は、揃って女性にだらしないのです。あなたという妻を得た途端、本性を出すやも知れませんか。充分に手綱^{たじな}を締めておかないと」

皐月はころころと涼やかな声で笑った。

「それは、あまりな言われようですね。僕は誠実な男です。神前の誓いを破ったりはしませんよ。何度も言うようですが、万里子は僕にとつて生涯ただ一人の妻です」

ごく自然な動作で、卓巳は万里子の肩に手を回し抱き寄せたのである。

万里子は、全身が心臓になったかのような鼓動に包まれた。でも、卓巳の顔を見上げた瞬間、笑みが零れ、二人はお互いの瞳をしばらく見つめ合っていた。

「あ、そうでしたわ。万里子さんにこれをお渡ししないと」

わざとらしく声を上げると、皐月は自分の指からエメラルドの指輪を外し万里子に渡した。

「これは、わたくしがこの家に嫁ぐ時、母から譲り受けたものです。娘に、と思っていました……恵まれませんでした。息子の嫁にはどうしても渡す気にはなれず。万里子さん、あなたに受け取って頂きたいの。……いつか、卓巳さんの娘に渡ることになれば」

悪気のない皐月の言葉に、万里子の心は軋むように痛んだ。奥歯を噛み締め、笑顔を作り続ける。

「卓巳さん。何をボンヤリなさってるの？ ちゃんと万里子さんの指にはめてお上げなさい」

「あ……あの」

「いいんだ、万里子。受け取って欲しい」

卓巳は万里子を真つ直ぐにみつめ、左手を取って薬指に指輪を押し込んだ。それは誂あつひえたようにピッタリだった。

その瞬間、万里子の瞳からハラハラと涙がこぼれ落ちる。

「万里子……どうした？」

「幸せで、あまりに幸せで、それだけです。……ごめんなさい」

嘘ではない。自分のものでない幸福に、万里子は「喜び」と「悲しみ」の涙が止まらないのであった。

くくくくくくくく

「大奥様、風が出て参りました。そろそろ中へ戻られませんか」

大きめの声を張り上げながら、離れた位置に立っていたメイドの千代子が駆け寄ってくる。

「そのようですね。では、万里子さん。お式はいろいろ相談して、十一月中がよろしいかしら。ただ、入籍は早めにお済ませなさい」

「まあまあ、お決まりですね！ おめでとうございます。ご結婚は早いほうがよろしいですね。花嫁さんのお腹が大きかったりしては、逆に文句を言い出しかねませんものね。あの方たちは」

尚子らの住まいがある裏の別棟に視線をやり、千代子は憎々しげに言った。よほど馬が合わないらしい。

「ああ、判ってるよ、千代子さん。心配は無用だ。……では、彼女を送って参ります」

「おはあ様、どうもありがとうございます。これからもよろしくお願い致します」

万里子は深く頭を下げた。そして、卓巳に促されて歩いて行く。

並んだ二人の背中を、皐月は万感の思いで眺めていた。

「ようございましたね。素敵なお嫁様が見つかった」

「本当に……」

「でも、大奥様もお人が悪い。あのような隠し玉をお持ちなら、さつさと出してお上げになればよらしいのに。苦虫を噛み潰したようなお顔で、部屋を出て行かれましたものね。私は清清せいせいしましたけど」「ええ。でも、卓巳さんに内緒で手に入れたものですからね。なるべくなら、人目に晒したくはなかったのよ」

皐月が用意した報告書には、

『藤原卓巳氏は十年前に心因性の性機能障害と診断されたが、現在は回復しており、男性機能ならびに生殖能力に全く問題は見られない』

そう記されていた。

第三章 結婚 (20) 愛に満ちた嘘(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

第三章 結婚 は明日でラストです。

では、引き続きよろしくお願い致します(平伏)

第三章 結婚 (21) 入籍

「本当によろしいんでしょうか？」

万里子は左手薬指にはまったエメラルドの指輪を見つめては、ため息と共に同じ台詞を呟いた。これで四度目である。

「構わないと言ってるだろう。それとも、今から祖母上の元に戻り、あれは茶番でした、と言うつもりか？ あんなに嬉しそうな祖母の顔を見たのは初めてだ。もう引き返せない。僕たちは結婚して、幸せな夫婦の姿を見せなければならぬんだ！」

卓巳も律儀に四度目の返事をした。そして、この次に万里子が言うセリフは、

「……あの」

「返す必要はない。君に渡したものだ。返してもらっても、どうせ渡す相手もない。結婚する気も子供を持つ気もない！ いいかい万里子、これで最後だ。君はもう口を開くな」

「……」

車内に気まずい沈黙が広がる。

一分が過ぎ、二分のなるつかという辺りが卓巳の限界だった。

「……悪かった」

「口を開いても構いませんか？」

万里子らしくない、尖った口ぶりだ。

「だから、謝ってるだろう。そんな言い方は君らしくない」

「じゃ、わたしらしいって……何ですか？」

「君は……笑ってればいいんだ」

「意味が判りません。口を開かずにニツコリ笑っている、と？ わたしはお人形じゃありません！」

卓巳にすれば、仕事以外で女性とこんなに長い時間一緒にいたの

は初めての経験だった。

万里子は笑顔が良く似合う。ずっと笑顔でいて欲しい。彼女の笑顔を守るためなら、どんな犠牲も厭わない。それが卓巳の本音だ。

(そんな齒の浮くような台詞が僕に言えるなら、苦労はしないさ)

本音を伝えることは諦め、卓巳は理詰めで説得することにする。

「だから、それをはめてニッコリ笑っていれば、お父上も安心するだろう？ 違うのか？」

「そ、それは……判っています。父も、母の遺影に向かって、無事に結婚出来るように、と祈ってるみたいですし……。この指輪を見せて、会長であるおばあ様から頂いた婚約指輪だと言えば」

そこまで話した時、万里子は何ごとか気付き、窓の外をジッとみつめた。

「あの……卓巳さん。わたしの家に送って下さるんですよね？ 道が違う気がするんですが」

「ああ、区役所に行く」

「何か御用ですか？ でも、もう五時を廻ってますけど……」

「心配はいらない。婚姻届は二十四時間、休日も関係なしに受理してくれる」

「え？ ええっ！ 今からですか？ そんなっ！」

「なるべく早く、と言われたらう？」

言ってるうちに車は区役所の地下駐車場に滑り込んだ。卓巳が取り出した婚姻届には、すでに彼の署名捺印がしてあり、全ての書類が整っていた。

後は万里子の署名だけだ。

混乱しつつも、サインしかけた万里子だったが……突如、手が止まる。あのメイドのことが頭に浮かんだからだ。卓巳の愛人を自称した、永瀬あずさのことだった。彼女は万里子に、妊娠の可能性を口にした。卓巳には言わないで、と口止めされたが、まさか今日入籍するつもりだとは、万里子も知らなかったのだ。

「どうした？ 何故サインしない」

「あの、ちょっと待ってください。あの……その前に確認しておきたいことが」

「この期に及んでなんだ？ まさか、止めるなんて言い出すつもりじゃないだろうな！？ そんなことは絶対に認めんぞ！」

卓巳の感情を露にした怒声に、万里子はビツクリした。

「そんなに僕の妻になるのは嫌か？ もちろん、進んでなりたくないではなかるうが……だが約束、いや、契約だ！ ここまで来て今更」

「あ、いえ、あの……子供が、出来たかもしれないと言われて」

卓巳の気迫に押され、小さな声で漏らした万里子の一言に……卓巳は見る間に表情を変え、熱^いり立った。

「誰の子だ！ 僕の妻になると約束しながら、誰とそんな真似を……万里子、言え。四年前の男か？ 僕に言ったことは嘘だったのか？ まだ切れてなかったのかっ！？」

「違います！ わたしじゃありません。どうして、わたしがそんなことを……」

肩で息をする卓巳だったが、万里子の否定に見当違いの憤りも治まってきたようだ。

万里子はここが役所ではなく、駐車場に停めた車内であったことに感謝した。人に聞かれたら、とてつもなく恥ずかしい会話である。

「嚇かすな。……なら、一体何の話だ？」

驚いたのは万里子のほうだ。だが、それは言わず、万里子は言葉を選んで話を進める。

「卓巳さんの家で、わたしを化粧室まで案内してくれたメイドさんのこと……覚えていらっしやいますか？」

「ああ、覚えている。彼女に何を聞いた？ あの女は君に何を吹き込んだ？」

「言われて困るような……お心当たりがおありですか？」

「ない。だが、どんなことを言い出すか判らない女だ。……え？

まさか」

卓巳は自分で口にしたことに何か思い当たったようである。

「卓巳さんから……お手当てを貰っている、と。それは、その、色々夜の相手を務める分だと」

「君は、そんな戯言を信じたのか？」

「だって、あなたの子供がお腹にいるかもって。生まれたら認知して欲しい、と言われて。もしそうなら彼女と結婚すべきです。子供に対しては、ちゃんと責任を持たなきゃだめです。そうでないとして、子供はあなた以上に辛く寂しい思いをすることになるわ。だから……」

その瞬間、卓巳は万里子の両腕を掴んだ。

卓巳の顔が至近距離まで近づき、万里子はキスされるのか、と一瞬身構える。でも、逃げたいと思っていない自分が、万里子は不思議だった。

だが予想に反して、十センチほど離れた位置で卓巳は静止し、真摯な瞳で万里子をジッと見つめる。

「万里子。君の目に、僕はメイドに金を渡して身体を求めるような……そんな男に見えるか？」

「いえ……」

「なら、信じてくれ。清廉潔白とは言わないが、金で女性の身体を弄ぶような、そんな不道德な真似は一度もしたことはない。無論、この先もしない」

「でも、契約書に……。結婚してから、隣のベッドであなたがそんなことを始めたら……。って。わたし、そんなのは見たくありません。絶対にイヤ！」

「契約書の別項のことを気にしてるのか？ あれは削除する。僕は婚姻中に、如何なる不貞行為も犯すつもりはない」

「……本当に？」

「ああ、約束する」

万里子はこの日、『藤原万里子』となったのだった。

第三章 結婚 (21) 入籍(後書き)

御堂です。ここまでご覧頂きまして、本当にありがとうございます。

第三章、タイトル通り入籍・結婚いたしました(超ソッコ)

第四章は「誓い」。

三歩進んで二歩下がる、といったカップルですが……ようやく、手が触れ合うくらいにはなつて来ております(^^)(

どうか見捨てずにお付き合いくださいませ。

よろしくお願い致します(平伏)

第四章 誓い (1) 幸福と不幸の種

「卓巳のヤツ、あの女と来週には結婚式ですつてよ」

あずさはベッドにうつ伏せに転がり、煙草を燻くゆらせた。不愉快極まりない声だ。

「しかも、もう“若奥様”だなんて！」

「フツ……まさか、自分が卓巳に選ばれると思ってた訳じゃないよな？」

あずさの横に転がっているのは太一郎であつた。なんだかんだ言つても、この二人はまだ切れてない。まさにセックスだけの関係……それは、卓巳がこの世で最も醜悪と捉え、嫌悪する関係であつた。

「そんなこと考えちゃいないわよ。ただ……」

万里子がただの偽善者だと良く判つた。入籍を済ませた翌日、わざわざあずさの元にやって来たのだ。急に決まったから、あずさのことを卓巳に話して確認を取つた。子供は絶対にならない、と言つた卓巳を信じようと思つている、と。

(何よっ！ そんなこと言われなくても判つてるわよっ！)

前夜、卓巳に初めて部屋に呼びつけられ、喜び勇んで出向けば……。今度、そんなデタラメを吹聴した時はクビだ、と宣告された。

イライラするあずさの身体に、太一郎の指が伸びる。彼女の自慢の胸を背後から鷲つかみにしながら、太一郎は鼻でせせら笑つた。

「んな、バカみたいな嘘つくからだろ？ 俺は早くこの家に入って欲しいけどな。……チャンスが増える」

「ふーん。まだ狙つてるんだ」

実は、太一郎は外でアプローチを試みたのだ。しかし、万里子の

傍には常に卓巳がいる。そうでない時は、大学の送り迎えにも個人秘書の宗を回すくらいであった。これでは、万里子に付け入る隙など皆無だ。

「いいわよ。力になってあげる。あの女、メチャクチャにしてやってよ」

「女はこえーな」

あずさは煙草を消すと、自分から太一郎に絡みついた。

「そうよ。女は化けるし、祟るのよ。あんたも覚えておくのね」

万里子と卓巳の結婚を邪魔しようと、メイドの控え室で立ち聞きした話を尚子に密告した。

案の定、皐月に言いつけたものの……倫理や道徳に厳しいはずの皐月ですら、孫は黙認である。逆に、急展開で結婚へと話が進み、その日のうちになんと入籍までしてしまったのだ。

おまけに、万里子は一流ホテルでの挙式披露宴を断わり、外出を制限されている皐月のために、ガーデンウエディングを提案した。今、その準備で藤原邸は大忙しなのである。

結婚は阻止出来なかったけど、離婚に迫りやることは出来る。

そんな思惑はあずさ一人のものではなく……。様々な思いを孕んで、契約結婚は前へと進み始めた。

くわくわくわくわく

十一月半ば、藤原本邸の広大な庭で、ガーデンウエディングが行われようとしていた。

簡易式のチャペルも用意され、当然、牧師も手配済みだ。

「万里子、用意はいいか？ もう、始まるぞ」

「あ！ 卓巳さん………どうですか？ 母のドレスを手直しして、昨日仕上がってきたんです」

そう言つて幸せそうに微笑む万里子は、純白のウエディングドレス姿でクルツと回つた。卓巳は息を飲んで立ち尽くす。そんな卓巳の背後には、今度からは夫婦の担当になるメイドの雪音が「だからお式の前に花嫁の控え室には入るな、と………」そんなことを呟きながら立っているのだつた。

卓巳は先ほどから度々やって来て、雪音に迷惑そうな眼差しを向けられている。式の前に顔を合わせたり、ドレス姿を見るのは縁起が悪い、という理由からではなく。単純に、仕度の邪魔になるからであつた。

「あの………似合つてませんか？」

黙り込む卓巳に、万里子は不安気な声で尋ねる。そして、卓巳が口を開く前に、

「まあ、とんでもありませんわ。世界一の花嫁様ですわ、万里子様
メイド頭の千代子が答えた。

「ええ、ええ、それはもう、お美しいです。本当にお嬢様がお幸せ
そつで………わたくしは感激で涙がとまりません」

千早家の家政婦、忍も答えながら目元を拭つた。

「あら、万里子様はもうお嬢様ではありませんわ。若奥様ですよ、
ねえ」

「そつでしたね。失礼致しました。もう、お小さいお嬢様ではない
のですね」

歳は一回りほども離れている千代子と忍だが、二人とも主人の幸福に呵呵大笑している。

しかし、そんな二人はまるで目に入らない様子で、卓巳は唯々、
ただただ

万里子を見つめていた。

「……奇麗だ。君の隣に立てて、僕は幸運だ」

「そんなこと……。少しでも大人っぽく見られたくて、髪もセットして頂きました。大人のあなたと、お似合いだと言って欲しいから。いつもは背中中で風に揺れている柔らかい髪が、今日はしっかり纏められ、結び上げられていた。大粒のダイヤで彩られたティアラは皐月のものだ。それを付けている万里子は、まさにプリンセスのようであった。

「ブルーはガーターベルトにされたんですね。卓巳様に見せて差し上げてはどうですか？」

雪音はからかうように万里子に言った。

「そ、そんな、それは」

万里子の頬は一瞬で薔薇色に染まる。

その万里子がドレスの裾をたくし上げ、太腿に巻いたガーターベルトを見せようとする……。そんな仕草を想像して、卓巳も同時に赤面した。

「やだ、卓巳様。何を想像なさってるんです？」

卓巳の表情に、雪音は思わず凶星の突っ込みを入れてしまう。

「い、いや、そうじゃない。君が余計なことを」

「あら、私はサムシングフォーをお伝えしたかっただけですよ。……でも、ガーターを外すのは式が終わってからにして下さいね」

「あ、当たり前だ。披露宴の最中に、僕が何をすると云うんだ！」

卓巳の言葉に、その場にいる全員が声を上げて笑ったのだった。

しかし 正直、二人の様子を見ながら、呆れている人間が約一名。卓巳の秘書、宗行臣であった。

第四章 誓い (2) 心の距離

宗は、当事者以外で契約書の存在を知る唯一の人間だ。

さぞや殺伐とした結婚式になるだろう、と心配していたが……ある意味、予想外なことになっている。

人前では仲の良い夫婦を演じる、というのは契約だった。しかし、人前でなくとも仲が良い、いや、これは良過ぎるというものだろう。入籍の準備はかなり早いうちから進められていた。そうでなければ、皐月から結婚の許可を得て即日入籍など無理というものだ。これにより、すでに相続の条件は満たしたはずだ。デートの芝居は必要なくなった、にも関わらず、入籍後も毎日二人は逢っていた。

宗が最も驚いたのが、本当にホテルの部屋に泊めるようになったことだ。同じ部屋で寝起きする前に陥落したのか？ というのが正直な感想である。宗は嫌味のつもりで卓巳に確認をとった。

「社長 ベッドサイドに避妊具を用意しておきましょうか？」

「……不要だ。言っただろう、私はそれほど意思の弱い男ではない。だが、まあ、そうだな……万一の場合でも特に必要ではない。彼女は私の妻だ」

卓巳の返事に宗は啞然とした。

そして駄目押しは、契約書の別項を完全に削除したことだった。

実際のところ、二人とも言葉にこそしていないが、お互いを伴侶として認め合っていた。

少しずつ縮まる距離が、二人の仲をより親密なものに変えていく。服の上からではあるが、卓巳は万里子の腕や肩、そして腰にまで触れるようになった。むろん、性的なものを感じさせるには至ってな

いが……それでも二人にとっては革新的な歩みであった。

同じものを見て、笑い、共有する時間。全てが新鮮で、どちらにとっても、寒々とした常冬の人生に、春の息吹きを感じさせてくれるのだ。

更には挙式数日前、卓巳は万里子の部屋に泊まった。もちろん無断ではなく……万里子の父が、二人を夫婦と認めての気遣いである。そして、それが切欠きっかけとなり、二人の親密さに拍車が掛かった。

結婚式では、誓いのくちづけを交わすことになる。

今夜から、二人の共有する時間に、“キス”が加わることはほぼ間違いないだろう。

宗にその辺の事情までは判らない。だが、グレーのフロックコートを着た卓巳は、万里子の耳元に口を寄せ何ごとか囁いている。同じ仕草を万里子も返し、二人は見つめ合い微笑むのだ。

“偽装結婚”の前二文字はこの二週間、いやひと月あまりで、消失してしまったらしい。誰が見ても新婚そのものの二人に「契約書は意味がなかったな」と呟く、宗であった。

くくくくくくくく

「おばあ様、そろそろ式が始まりますが……」

卓巳は臯月を私室まで迎えに来た。

心臓に持病を持つ臯月に、周囲は洋装で構わないと言ったのだが……本人の強い希望で、今日は黒の留袖を着ていた。五つ紋、鶴の模様が入ったそれは、三十年も昔、息子の佳き日を見越して設しえたものであった。

「まあ、卓巳さん。お嬢さんがこんな処にいてどうするのです。わたくしより、万里子さんを迎えにお行きなさい」

「ご心配には及びません。万里子のエスコートは、牧師様の前まではお父上の役目です」

卓巳は臯月の車椅子を押しながら、テラスに設置してある車椅子用のスロープを慎重に降りて行く。そして、庭に向かって歩き出した。

大奥様を迎えに行くのは、私の役目です！ という千代子を説き伏せ、卓巳が来たのには理由があった。

「すでにご存知だとは思いますが……私は後継者に相応しい人間では」

「卓巳さん。身体の繋がりなど、心の離れた二人には意味のないものですよ」

卓巳の告白を臯月は遮る。

「しかし……」

「藤原家の人間は、自分以外の人間を愛することを知りません。あなたもそうだと思い、財産を盾に試そうとしました。ごめんなさいね。でも、あなたの万里子さんを見つめる瞳で、すぐに気付きました。……先代は一度もわたくしを、あんな眼差しで見では下さらなかった」

ため息と共に臯月の言葉が途切れる。

庭は人で溢れ、遠目にも藤原家始まって以来の華やきを見せていた。その人垣の向こうにガゼボ……西洋風あずまの、八角形の屋根が見え 臯月は眩しそうに、目を細める。

「でもね、万里子さんを見ていて気付いたのです。果たしてわたくしも、あなたの妻になれるならどんなことでもします、と思ったこ

とがあつただらうか……と。答えは『否』でした。ねえ、卓巳さん……このままでは、この家には何一つ実らず、腐って朽ちてゆくのみです。他所そのよの土壌で、藤原の肥料は何一つ与えられず育つたあなただからこそ、立派に成長してくれました。何も恥じることはありませんよ。あなたは最高の男性です。あなたに愛されて、万里子さんは幸せね」

「そう、でしょうか？ 万里子は知りません。彼女には真実を伝えてないのです。出来ませんでした」

臯月は静かに首を振り、卓巳の手を取った。

「彼女はあなたを選んだのですよ。どうかそれを忘れずに……」

「はい。万里子を幸せにします。必ず」

万里子は多分気付いている。だが、何も言わないし、求めない。彼女といえる時は、卓巳にとって心の休まる時であつた。生まれて初めての安らぎと幸福、それは卓巳の中から、契約書の存在を忘れさせた。

戸籍上、万里子は妻だ。そして今日からは、社会的にも妻として認知されるだろう。そしていつか、事実上の妻に出来れば……車椅子を押す手に力が入る卓巳であつた。

第四章 誓い (3) 素敵なプレゼント

「新作の映画も揃えてある。それに、君が見たいと言っていた『ロマの休日』も。このまま、一緒に見ないか？」

「でも、もうすぐ十時です。映画だと二時間は掛かるでしょう？ 帰るのが〇時を廻ってしまいます」

「なら、無理に帰る必要はないだろう？ ベッドも二台あるんだ。越境はしないさ」

「でも……父が」

「無理にとは言わない。どうしても、イヤだと言つなら送って行く」

「イヤだなんて……。あの一つだけお願いがあります」

「なんだい？ 何でも言ってくれ」

「父に……卓巳さんから電話して下さいますか？」

「……判った」

と、言つような会話が、結婚前の二週間、毎晩のように繰り返されてきた。

大学の往復にも、必ず卓巳か宗がついて来るのだ。最初は万里子も、まだ自分の身持ちの悪さを疑われているのか、と落ち込んでいた。だが、それに気付いた宗が、

「社長夫人ともなりますと、色々危険があるんですよ。ご不自由かと思いますが……。拳式後は、外出中は常に、誰かがお傍に付くことになります。ご承知おき下さい」

そんな風に教えてくれたのだった。

万里子にすれば、出来れば卓巳に教えて欲しかった、と思つて当然であろう。しかし、当の卓巳はまるで気付かなかつた様子で……。

卓巳は誠実で真面目な人間であつた。

そして、とても判り難い優しさしか示すことが出来ず、世間の評判や洗練された容姿とは不釣合いな　　朴念仁でもあった。

何も贈り物をしていない、と気付いた時もそうである。万里子の持つ、数少ないブランド品の一つが、かなり使い古されたカルティエのポストンバッグだと知るやいなや、同ブランドの新作バッグを全て贈るというセンスのなさだ。

万里子は一瞬、首都高を連れ回された時のことを思い出して呆然とした。万里子にすれば、ポストンバッグは母の形見なのだ。どれほど傷んでも修理して使うつもりだ、と卓巳に告げたのだった。

次は花である。

結婚式の準備でたくさんの花に囲まれた時、

「花束を貰うと嬉しいですね。でも、薔薇よりかすみ草のほうがわたしは好きです」

その一言を聞いた卓巳は、万里子にかすみ草の花束を贈ったのだ。ほんの、トラック三台分ほど……。

それは、市場で買い占めたのか、と思うくらいのも量であった。万里子は家中に飾り、大学の友人や近所にも配り、更には、万里子のお世話になった幼稚園や保育園、小学校にまで持って行って飾った。卓巳は宗から、万里子が花の置き場に困り果てていると聞き、慌てて謝罪に駆けつけた時も、手にはかすみ草の花束を持っていた。

万里子は相好を崩して、卓巳を迎え入れ「ありがとうございます」と一言伝えたのである。

花の量ではなく、彼の気持ちに感謝して。

卓巳の行動は、一事が万事、その調子であった。

時折、苦々しげな顔をして横を向くことはあるが、万里子の希望は何でも叶えてくれようとする。そんな情熱的な側面に、万里子は時間が経つ毎に卓巳への愛を深めて行った。

そして、藤原邸で彼の叔母たちに聞かされた言葉も、万里子にとっては光明しやうめいに思えたのだ。

（あの時の卓巳さんの様子は普通ではなかった。わたしの手を握り締め、何かに怯える小さな子供のようだった。もし、あれが事実なら……）

卓巳は「結婚する気はないし、子供を持つ気もない」と言っていた。もし、そうであるなら……ずっと卓巳の傍にいられるかも知れない、と。

愛はなくても、卓巳は妻の万里子を大事にしてくれる。しかも、卓巳が他の女性を求めることはないのだ。万里子にとってこれ以上の幸せはない。愛する人の妻でいられて、身体を求められなくて済む。

本心は、万里子の身体が欲しくてたまらない卓巳とは裏腹に、万里子はそのことに安堵していた。

彼女が四年前に負った心の傷は深い。どれほど卓巳に恋い焦がれても、肌を見せることすら論外であろう。万里子はまだ、愛を受け入れる心と身体にはなっていなかったのである。

万里子にとって卓巳以外の男性とは、エレベーターに乗ることすら勇気がいるのだ。車で宗と二人きりになる時は、万里子は常に後部座席に座った。

一度、運転手付きの車で迎えに来られた時が大変だった。宗と後部座席に並んで乗ることになったのである。万里子の手は、常に口ツクに触れた状態をキープした。話しかけられるたびに、無理に開けて飛び出しそうになる気持ち在必死で抑えながら。

卓巳にはホテルのプールにも誘われている。でもそれは断わり続けていた。水に溺れたことがあって怖いから　そんな嘘を卓巳は信じたようだった。

万里子は今でも、あの夜に受けた激痛が全身を貫き、泣きながら目覚めることがある。卓巳にとって諸悪の根源と深層に刷り込まれた行為は、万里子にとって、苦痛と屈辱の忌むべき行為なのだ。

それでも万里子には卓巳と違う所があった。

彼女はそれが、誤った認識である、と判っていたのだ。愛し合う二人の間にあるソレは、快楽を伴う愛の行為なのだ、と。だが、頭で理解していても、心が受け付けてくれない。

卓巳を愛するがゆえに、彼とだけはあんな関係になりたくない、と強く願ってしまう。

(……これ以上、穢れるのはイヤ)

卓巳が散々万里子を侮辱したのは、自分自身を戒めるためだ。しかし、卓巳の劣情を知らない万里子にとって、それは魔女の呪文のように、彼女の傷口を少しずつ蝕んで行くのだった。

第四章 誓い (3) 素敵なプレゼント (後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

すみません、土日はUPが遅くて…m——(；)m

コレで、卓已って可愛い！となるか、信じられんほどアホと呼ばれるか…orz

拳式前の数日間がちょこつと続きます (笑)

引き続き、よろしくお願い致します。

第四章 誓い (4) 花嫁の父

ゆっくりと少しずつ、そして確実に、二人の心と身体は距離を縮めていた。

挙式二日前、卓巳は万里子の家に泊まった。

万里子は、戸籍上はすでに卓巳の妻である。だが、一人娘を嫁に出す父親としては、さぞや複雑だろう。その神経を逆撫でするかのように、卓巳は万里子をスイートから帰そうとしなかった。万里子もまた、卓巳の誘いが断わりがたく……。

さすがに、明後日が結婚式となれば、家に帰さない訳に行かない。卓巳は万里子を家まで送り、彼女の父・隆太郎に、非礼を詫びたのであった。

「いや、卓巳くん。確かにね、嫁にやるとは言いました。もう籍も入ってるんだから、誰に遠慮もいらんのでしよう。だが、妻の忘れ形見ですよ。二十二歳まで、大事に育ててきた宝物なんだ！」

いつぞや卓巳が土下座をしたりビングである。あの日と同じ、年季の入ったジャガード織りの布張りソファに、彼らは腰掛けていた。象嵌入りの天板にはウイスキーボトルが置かれ、グラスは二個、だが、飲んでいるのは圧倒的に隆太郎であろう。

「はい。仰る通りです。本当に申し訳ありません」

「もう、お父様ったら酔ってらっしゃるでしょう？ 卓巳さんに失礼です。やめて下さい」

アイスペールに氷を入れて、万里子はキッチンから戻って来る。

「なんだ。彼を庇うのか？ お前は私の娘なんだぞ。父親より卓巳くんを取るのか？ なんて薄情な娘なんだ」

最早、卓巳も苦笑するしかない状況だ。万里子は、本当に申し訳

なさそうに卓巳を見つめている。

その時、万里子の後ろからアイスピッチャーも持ってやって来た忍が、見かねて隆太郎に意見した。

「当たり前じゃありませんか、旦那様。万里子様は、もう卓巳様の奥様になられたわけですから」

「ついこの間まで、『お嫁には行かない、ずっとお父様の傍にいます』とか言っておいて、だ。卓巳くんに会った途端、朝帰りなんぞしおつてから！」

「お父様！ それはもう言わない約束でしょう？」

「いえ、お義父さん。本当に申し訳ないと思つています。でも、僕は親に縁のない人間です。二十年ぶりに、父と呼べる人に巡り会えました。万里子さんと一緒に、出来る限り、親孝行させていただけだと思つています」

卓巳の言葉は真に迫っている。万里子は、卓巳が自分の父を「お義父さん」と呼ぶだけで感動していた。

「卓巳くん！ 私のことなどどうでもいいんだ。万里子は……万里子だけは幸せにしてやってくれ。母親のいない寂しい思いをさせて来た。優しい万里子は私を気遣って、一度も辛いとも母が恋しいとも言わなかった。……万里子の幸せだけが私の望みなんだ」

酔った勢いもあったのだろう。半ば泣くように、隆太郎は卓巳に訴える。

「もちろん幸せにします。でも、お義父さんが幸せでないと彼女も幸せにはなれません。なるべく、寂しい思いをさせないように、僕が長期不在の時は、彼女がここに帰れるようにしておきますから」

万里子はその言葉にビツクリした。婚姻中は実家に泊まることも禁止、だと契約書に書いてあったのだ。思わず、卓巳も酔っているのだろうか、と不安になる。

「あの、でも、卓巳さん……」

「海外出張の時は一週間や十日、帰れないこともある。そんな時は実家に戻っていられるように手配しておくから」

卓巳の目は決して酔ってはいなかった。万里子はようやく、卓巳が契約書のことなど気にせず、本心から自分たちの将来を語ってしてくれることに気付いたのであった。

本人たちのたつての希望とはいえ、住む世界の違う卓巳に嫁がせたことを、隆太郎は少しだが後悔していた。しかも、相手はあの『藤原卓巳』である。彼の寸評にはいつも“冷”の字が付き纏っている。東西銀行の頭取をはじめ、周囲からは……「これで千早社長の会社は安泰だ。美しいお嬢さんを持たれて羨ましい」などと言われる始末だ。

しかし、隆太郎にとっては娘のために頑張ってきた会社である。会社存続のために娘を利用したのでは、それこそ本末転倒であろう。冷酷と噂される男に、娘をやって良いものかどうか……と悩む親の心配をよそに、挨拶から一週間も経ず、隆太郎は入籍の報告を聞いたのである。

だが、卓巳は寛大で、隆太郎に向けた眼差しにも偽りは見て取れない。切ないながら、娘の幸福を優先する優しい父なのだった。

「少々ベッドが狭いですけど、一晩くらいなら構いませんね」

忍が嬉々としてベッドメイクやパジャマの用意をしている。

そこは二階にある万里子の部屋だ。クローゼットは括りつけて、南側にはバルコニーに面した大きな窓がある。ベッドは北側の壁に付けられ、頭は東向きだ。東側にも窓が一つあり、昔ながらの学習机と本棚が設置されていた。

「ねえ、忍。やはり卓巳さんは隣の客間にお通ししたほうが……」

ここでは狭いし、それに同室なんて……。お父様は酔ってらっしやるのよ。目を覚ましたら、お怒りになるかも知れないわ」
父に比べたら酔ってるほどではないが、それでもアルコールの入った卓巳に車の運転はさせられない。自然と、泊まって行くように話が進んだのであったのだが……。

「何を仰います、万里子様！ 旦那様のご命令ですよ。こんなにご入籍を急がれたのは、片時も離れたくないからだろう、と。客間よりこちらのほうが旦那様のお部屋より遠いですし……。ほほほ……すでにご夫婦であられますのに、遠慮なさらないで下さいませ！」
忍は心得ております、といった風情で万里子に笑いかける。

だが、大きなベッドが二台あるオーナーズスイートとは訳が違うのだ。一人なら充分の広さ、仮に二人でも……。本当の夫婦であるなら、抱き合って眠ることは可能だろう。

もう一組布団を持ち出しては、酔って寝込んだ父はともかく、忍は不審に思うに違いない。

思案する万里子の頭上に、卓巳の声が響いた。

「ありがとうございます。ベッドは十分な広さですよ。お義父さんにお心遣い感謝します、とお伝え下さい」

「卓巳さん……」

第四章 誓い (5) 幸せの味

表向きには、何度となく夜を共にした仲である。

とはいえ、実際の関係は限りなくプラトニックに近い。

卓巳と泊まるホテルは、千早家のリビング・ダイニング・キッチンを合わせたような、巨大なスイートルームだ。藤原邸にしても、あの広大なお屋敷である。卓巳の寝室は、ダブルベッドを二台置いても充分に余裕のある部屋なのだ。それに比べれば万里子の私室など、卓巳の部屋のクローゼットよりまし、といった程度である。

「狭い部屋でごめんなさい。こんなところにお通しするなんて……。客間なら、もう少し広いんですけど」

「狭い？ 僕が大学時代に住んでいたアパートに比べたら……。軽く倍はあるよ」

軽い口調で言うと、卓巳は今までで一番柔らかい笑顔を見せてくれた。その瞬間、卓巳の前髪から数滴、雫が落ち……。

あつという間にシャワーを浴びて出て来たせいで、忍の準備が少し間に合わなかったのだ。お客様用の寝間着を持って行くはずが、それより早く、バスローブ姿のまま出て来てしまったのであった。

卓巳の髪は漆黒だ。濡れると余計に黒く艶めいて、男の色気を感じさせる。

普段ならお客様の相手は忍がしてくれるのだが、シャワーから出て来た卓巳を見た途端、気を遣って部屋から下がってしまったのだ。つた。

「そ、そんなに、小さなお部屋だったんですか？ お、お母様と暮らしていた時も？」

万里子は自分の声が裏返っているのに気付き、恥ずかしくなる。だが、卓巳は気にならなかったようだ。キョロキョロと部屋見回し

ながら、ごく普通に返事をした。

「母と一緒の時は、もう少し広かったかな。だが一人になると、きちんとした身元保証人が用意出来なかったからね。ちゃんとしたマンションは借りられなかったんだ。エアコンどころか、ストーブもない冬もあった」

部屋のほぼ中央に、楕円形の白いテーブルがある。脚は折りたたみ式だ。

卓巳は一頻り、壁に飾られている小学生絵画展佳作、書道展特選、中学生標語コンクール金賞などの賞状を見て回り、最後に学習机に置かれた『聖マリア幼稚園入園式』の写真立てを手に取った。そこには四歳の万里子が父と母に手を引かれ満面の笑みで写っている。写真立てを戻すと、彼は白いテーブルの横、合皮製の白いフロアソファにどっかと座り込んだ。

(まるで、ご自分の部屋のようだわ)

自室に卓巳と二人きり……どことなく落ち着かない万里子に比べ、卓巳の様子はあまりに自然で和やかだ。しかも、彼の表情は藤原邸に居るより寛いで見えた。

「実はね……ナイフやフォークの正式な使い方なんて、藤原家に入るまで知らなかった。スーツもリクルートスーツ一着しか持ってなかったし……。その頃かな、午餐会ごきんかいに招待され、正装でと言われて、燕尾服えんびふくを着て行き笑われたこともあった。叔母が用意してくれたものを真に受けて、疑いもしなかったんだ。僕は決して上流階級の人間じゃない。呆れたかい？」

万里子はストンと卓巳の隣に座ると、

「いいえ」

一言だけ答え、笑みを返す。

「こつ見えて料理も得意だ。フレンチやイタリアンは無理だけど、野菜炒めやチャーハン、魚もさばけるよ。今度、鰯を三枚におろしてみせようか？」

そんな卓巳の台詞に、二人で顔を見合わせ、声を立てて笑った。しかし次の瞬間、卓巳が真顔になり……心ではなく、体の距離が縮まるのを万里子は感じ、弾かれるように立ち上がったのだ。

「あつ……な、何か飲み物をお持ちします。お酒はもう、召し上げられませんか？」

「ああ、酔うといけないから、やめておこう。コーヒーでも貰えるかな？」

「はい。あの、髪を拭いて寝間着に着替えておいて下さい。わたし」
「判った。君の戻る前にすべて済ませておこう」

「お願いします。……じゃあ、コーヒーを入れてきますね」

(……ヤバイ……)

万里子が部屋を出ると同時に、卓巳は大きくため息をつく。右手で前髪をかき上げ、グシャグシャとする。

そのまま万里子を抱き寄せ、唇を重ねてしまいそうだった。卓巳は自己嫌悪の嵐だ。

実は、部屋の中を賞状や写真を見るフリをして歩き回ったのにも理由があった。万里子が恋い焦がれる、四年前の男の痕跡を見つけようとしたのだ。机には入園式以外の写真も飾られているが、そこに若い男の姿はなかった。

写真の中に、笑顔の万里子がたくさんいる。見てるほうも、思わず笑みが零れる幸せそうな顔だ。

卓巳には子供の頃の写真は一枚もない。動物園にも遊園地にも、一度も連れて行って貰ったことはなかった。子供にとって、いないほうがいいような親もいる、という生きた見本であろう。

「お待たせしました。昼間に焼いたマドレーヌもお持ちしたんですけど……お嫌いですか？」

「甘いものはあまりた……た、食べたことがないので、好きか嫌いか判らないんだ。もちろん、頂くよ」

あまり食べない、と言おうとして、慌てて訂正する。万里子の表情が一瞬で曇ったからだ。

卓巳は手作りのマドレーヌを口に運びながら、

「初めて食べる味だな……美味しいよ」

「あの……無理なさらないで下さいね。素人の手作りで、形もまちまちですし……」

「いや、本当に美味しい。手作りのお菓子なんて一度も食べたことがなかったからね。ケーキも作れる？」

「ええ、大好きです！ あ、作るのも、食べるのも」

甘い物が好きだと言う割に太ってはいない。そんなことを考えつつ、視線が万里子の胸や腰に移動するのは、悲しい男の性さがだろう。

卓巳は慌てて咳払いしつつ、

「僕は十二月が誕生日なんだ。リクエストしておくよ、イチゴのケーキがいいな」

「あ、はい！」

(我ながら……変われば変わるものだ)

万里子の嬉しそうな返事を聞きながら、胸のうちに苦笑する卓巳だった。

第四章 誓い (6) 愛しい

「頑張つて作りますね。でも、一度もつて……本当ですか？」
卓巳にとつてケーキとは、イチゴの乗ったクリスマスケーキだけだ。

二十年近く前、施設で食べたそれだけが、彼が思い浮かべることの出来る甘い思い出である。

「そう……だな。ケーキは施設で食べたことがある。だが手作りかどうかは覚えてない。ああ、そう言えば……小学校六年の時、隣のクラスの女子からクッキーを貰った」

藤原くんはあんまり食べられないでしょう？ 可哀想だからあげるね。

そんな言葉と共に渡された家庭科の授業で作られたクッキーを、卓巳は悔しさのあまり床にぶちまけたのだ。当然、女子は泣き出し、クラスメートからは責められ、教師にも叱られて散々だった。

「……それ以来、手作りは避けてきた。あの頃は、同情つてヤツが一番嫌でね。悔しくて、我慢出来なかつたんだ」

そんな卓巳の言葉を聞き、万里子はポツリと呟いた。

「それつて……同情じゃないと、思いますけど」

「じゃあ何なんだ？ 可哀相だから、と言われたんだぞ」

「好きだから、じゃないでしょうか？ 家庭科で作ったお菓子をあげるのは好きな人だけです。他に男の子もいて、恥ずかしくてそう言っただんじゃないですか？ 余ったから、とか言ったりしますよ」

目から鱗トウゴが落ちる、とはこのことだろうか。卓巳はニッコリ笑つて話す万里子を見つめ、呆然とした。そんな簡単な答えがあったとは……長年悩み続けたのが嘘のようだ。

だが、それと同時に、卓巳は一つの可能性に気付いた。

「……君も、そうなのか？ そんな風に、好きな男子に」

万里子は頬に手を当て、少し考えている。小学生のすることだ、深く考える必要はない。卓巳は自分にそう言い聞かすが、どうも落ち着かない。

やがて万里子が口を開き、

「わたしは……多分、家に持って帰ったと思います」

その返事にホツとする。だが、

「父に半分あげて、残りの半分は……俊介さんに」

卓巳の心は一瞬で凍りついた。

まさか、彼女の口からあの男の名を聞くとは……。万里子は辛い恋を忘れようとしている、そう思っていたのだ。

「家政婦の息子が……」

「え？ あ、はい。よくご存知ですね？ その頃、俊介さんは大学生で、勉強を教えてもらったりしました」

「……勉強だけじゃないだろう……」

卓巳は、胃に納まったコーヒーとマドレーヌが沸々と煮え滾る^{たぎ}感覚を味わっていた。万里子はそんな卓巳の様子に全く気付かず、ごく自然な口調で俊介のことを話し続ける。

「以前はこの家にも、よく遊びに来てくれてたんですけど……」

「最後に会ったのはいつだ」

「え？ そう、ですね。四年前だと思います。俊介さんの結婚式に出席したのが……確か、春で……」

（その後も会ってるだろう！ 少なくとも一度は、子供を作るような真似をしたはずだ！）

思いは喉元まで込み上げる。

「素敵な結婚式でした。豪華ではないけど、全て手作りで、温かいお式でしたね。わたしもいつか、こんな風に皆に祝福されて、大好きな人と結婚したいなって、その時は思っ……………」

笑顔で話していた万里子の瞳から、ふいに大粒の涙が零れ落ちた。「ごめんなさい……………あの後、色々あって……………今はもう、そんな夢は見ません。もう、そんなことは不可能だし……………幸せな結婚なんて」

万里子の気持ちに誰にあるにせよ、今、目の前にいるのは卓巳なのだ。そして二日後には彼の花嫁となる。そう思うと、幸せな結婚は出来ない、と泣く万里子をそのままにはしておけなかった。

卓巳は万里子の腕をとると、自分の胸元に引き寄せる。そして、想いの全てを籠めて、彼女を抱き締めたのだった。

「不可能じゃない。君は僕の花嫁になるんだ。誰よりも幸せな花嫁にしてやる……………だから、泣くな」

一瞬、万里子の身体が強張り、押し返されるのか、と思った。

しかし、卓巳の耳に届くかどうかの小さな声で、

「……………たくみ、さん……………」

万里子の手が卓巳の背中に回り、寝間着をギュッと掴んだ。

自分の胸に顔を埋め、小刻みに肩を震わせ泣いている。愛しい、際限なく膨らむ万里子に対する想いに、收拾がつかなくなる卓巳であった。

くくくくくくくくく

「僕は大丈夫だ。気にしなくていい」

そう言っただけ卓巳はフロアソファに横たわっている。
泣きじゃくる万里子が落ち着くまで抱き締めていてくれた。そして、万里子がお風呂から戻ってきた時には、部屋の電気は消え、卓巳はソファに横になっていたのだった。

万里子は、

「わたしがソファで寝ますから。卓巳さんはお客様なのだし、明日もお仕事でしょう？　ちゃんと睡眠を取って下さらないと」

そう言っただけ彼女のベッドに移動するよう頼んだ。しかし、一向に聞き入れて貰えない。ならば客間に、と勧めても、父や忍に嘘がばれると言っただけ断わるのだ。

とうとう困っただけ万里子は言っただけしまった。

「じゃあ……わたしの隣で休んで下さい」

「隣？」

「はい。隣で」

「同じベッドで休もうと言っただけなのか？」

「……はい」

「僕を誘っただけつもりかも知れないが……悪いが僕は」

卓巳の勘違いに気付き、万里子はカッとなる。

「違いますっ！　卓巳さんなら約束は守っただけさと思ってただけです。一つのベッドで寝ても、きつと……。もういいです。明後日が結婚式なんですから、風邪なんかひかないで下さいね。おやすみなさいっ！」

確かに、どれほど信頼していても、同じベッド眠るのは愚行であろう。仮に男が約束を破っても、隙がある、と非難されるケースだ。しかも、卓巳が誘われたと思うのは、それが彼自身の偽らざる本心であるなど、万里子は想像すらしていない。

万里子は一人でベッドに入り、壁のほうを向いて丸まった。

数分後、ベッドが傾いだ。

「隣で眠ってもいいんだな」

「……」

万里子の返事を待っているのか、卓巳はそのままの体勢で止まっている。

「……万里子、眠ったのか？」

「早く、入って下さい。寒いです」

卓巳は急いで中に滑り込む。

そしてどれくらいの間が過ぎただろう……まんじりとも出来ず、卓巳がソファに戻ろうとした時であった。夢の中にいる万里子が寝返りを打ち、卓巳に抱きついたのだ。

卓巳の腕の中は温かい、彼なら怖くないし、抱き締められるのも嫌じゃない。万里子は、生まれて初めて人肌を恋しいと思い、その温かさに包まれて眠った。

それが卓巳に、一睡も出来ぬほどの甘美な苦痛を与えているとも知らずに……。

第四章 誓い (7) キス

「神の前に二人を夫婦として認めます」

そんな牧師様の声を聞きながら、二人は誓いのキスを交わした。

今日のために、洋風あずまやは外壁を磨かれ、簡易チャペルに大変身していた。まるで、新築のような真っ白さだ。数百人の招待客の前で、当初茶番になるはずだった挙式に、二人は真剣な想いで挑む。

その結果……キスは頬か額に、と万里子にお願いされ、了承していたにも関わらず、卓巳は唇を重ねてしまったのだった。

いくら卓巳でもキスの経験くらいはある。だが、万里子は狂おしいほどの恋情を覚えた初めての女性だ。しかも、妻にするのだ、と思えば感激も一入ひとあだろう。緊張のあまり手足が震えるのを、周囲に何より万里子に悟られまいと必死であった。そして卓巳は、万感の思いを籠め、口づけたのである。

白い屋根のガゼボから、一斉に鳩が飛び立ち、二人の鳴らす鐘の音が晩秋の空に響き渡った。

くくくくくくくく

「頬か額に、とお約束でしたのに……」

「すまなかつた。でも、誓いのキスはやっぱり唇だろう?」

「あんな大勢の方の前でなんて……そんな」

簡易チャペルの横に設置された鐘を鳴らし、列席者からの祝福を

受けた後、万里子は控え室に駆け込んだ。そんな彼女の後を卓巳は慌てて追ってくる。そして、二人きりになった途端、万里子は真っ赤になって卓巳に抗議したのだった。

卓巳は謝罪しつつ、万里子のご機嫌を取ろうと必死だ。

「そんなに嫌だったのか？ 僕とキスするのが……」

卓巳は少し落ち込んだような声で呟く。すると、万里子も気が緩んだのか、とんでもないことを口にしてしまい……。

「そんな、そんなことは、ない、です。けど」

「けど？」

「初めてのキスだったのに……人前で、なんて」

「は、はじめてなんて……そんな訳がないだろう？ だ、だいいち君は四年前」

卓巳の声が上ずるなんて滅多にないことだ。それほど、あからさまな動揺を見せる。

「四年前は……キスは……だから、はじめてなんです。信じて下さらなくても、それでも」

「信じる」

「え？」

「信じると言ったんだ。人前でなければ、怒らなかつた？」

自分の口から零れる声も言葉も、卓巳自身別人じゃないかと思うくらいだ。

万里子に甘えるように、そして媚びるように、信じられないほど優しく穏やかになる。

この時、卓巳の視界は桜色に染まっていた。淡いピンクのルージュが塗られたふつくらとした唇。誓いのキスなどほんの一瞬だ。固く結んだ唇は緊張のためか少し冷たかった。その唇をもう一度味わいたい。いや、何度でも。少しでも開かせることが出来たら……万

里子の甘い吐息を、自分の唇で感じる事が出来たら……。

卓巳の手は万里子の頬に触れた。

そして、卓巳が一步、万里子に近づいた時、ウエディングドレスの裾がふわっと揺れる。万里子の母親が着たというドレスはAラインのシンプルなデザインだ。しかも、スタンドカラーの長袖……二十数年前に正式な教会で挙式したのだろうと容易に想像出来た。

「あの……卓巳さん」

「なんだい？」

左手が自然に万里子の腰に添えられ、卓巳は彼女の唇に視線を固定したまま答える。

「ふい打ちは、止めて下さいね」

「それは……事前に言えばOKってこと？」

「それは」

「キスしていいかい？」

「……」

午前中の挙式に合わせて、卓巳はフロックコートを着ている。その胸辺りに万里子の手が置かれた。そのまま……彼女は卓巳に身体を預け、微かに肯き目を閉じる。

二度目のキス。柔らかい唇が再び重なり……それはまるで、二人の人生が重なった証のようでもあった。

無味乾燥とした控え室が、一瞬で楽園の空気に満たされる。それは卓巳の人生そのものだろう。結婚式当日に初めて花嫁にキスをして、それが受け入れられた喜び。卓巳は、人生で初めて味わう極上の幸せに酔いしれていた。

ちなみに、控え室は裏庭の離れに用意された一室であった。今日は天気も良いので、窓は全開だ。そして、その横に佇む人影が……

秘書の宗である。

窓から見える光景は明らかで、彼はドアを叩くかどうか迷っていた。だが外には、ガーデンパーティの開始を待つ数百人のお客様がいる。

主役の二人が挙式後、控え室に籠もったまま出て来ない。

宗がこれを聞いたとき、ひと月前であれば喧嘩を想像しただろう。だが、今は別種の心配が必要であった。おそらくは周囲も同じ想像をして、呼びに行くのを躊躇っていたらしい。

予定では、挙式の衣装のまま卓巳の挨拶があり、乾杯をしてパーティが始まる、という段取りなのだ。

(……全く、困った社長だ)

宗は邪魔を承知でドアをノックした。

「お取り込み中失礼致します。パーティの開始時間を過ぎております。新郎新婦お揃いで出て来て頂かなくては困るのですが……」

その瞬間、万里子は慌てて卓巳から飛びのいた。頬を染め恥じらう仕草がどうにも可愛いらしい。卓巳は思わず、再び抱き寄せてしまいそうになる。

そんな卓巳の気配を察したのか、宗は咳払してもう一度ドアを叩いた。それはかなり強めで、「いい加減にしろ」とでも言いたげだ。「判った。……すぐに行く」

卓巳自身、スツと襟を直し背筋を正す。そして、万里子に向かって右手を差し出した。

「どうぞ、奥様」

万里子は最高に幸せそうな微笑みを返し……そして、しっかりと

手を繋いで二人は歩き始めたのだった。

第四章 誓い (7) キス(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

キスでここまで喜ぶヒーローも珍しい(笑)

でも……「ここがこの章のピークかも。」

というところで、引き続きよろしくお願い致します m () m

第四章 誓い (8) 幸福な花嫁

立食パーティにしたのが、間違いだったのかも知れない。

ため息と共に、万里子はそんなことを考えていた。普通、結婚披露宴の花嫁は金屏風の前に座り、笑顔で祝辞を聞いているものではないだろうか？ 万里子の知っている数少ない花嫁も、そうであった気がする。

(なんだかもう……よく判らないわ)

一体、何人の招待客に挨拶をしたのだろう。正直に言うと、ほとんど覚えていないのだ。

そして、万里子が頭の中を整理する間もなく、次の客を紹介したい、と卓巳に呼ばれるのだった。

「万里子。メイソンエンタープライズジャパンのCEO、朝倉氏だ」

「はじめまして。この度はご結婚おめでとうございます」

「はじめのお目に掛かります。この度はご出席頂きまして、本当にありがとうございます」

ここまでではいいのだ。

万里子も相手の顔と名前を覚えようと努力する。しかし、どうにも頭に入らない。なぜなら、

「先ほどは、熱烈なウエディングキスを拝見させていただきましたよ。僕も結婚したくなりました」

と、逢う人ごとに、そんな冷やかしを受ける。

万里子は最初、意味が判らなかつた。牧師さまの前で交わしたキスが、それほど熱烈だとは思えず……。しばらくして、西洋風あずまやとパーティ会場を繋ぐ通路から、控え室の様子が丸見えだった、

と聞かされたのである。

「もう、卓巳さんのせいだわ」

「ああ、そうだね。今度はちゃんと窓を閉めてからにしよう」

「恥ずかしさのあまり、青くなったり赤くなったりする万里子と違って、卓巳は愉快そうに笑う。

万里子はこの時、淡いピンクのドレスに着替えていた。既成のドレスに手を加え、裾を地面から二センチほど上げ、デコルテラインをオーガンジーで包み込んだ。だが、万里子にとっては久しぶりに二の腕を出すデザインだ。その代わり、肘まで隠れる手袋で着用していた。

「疲れただろう？ 少しお父上の傍で休んでいたらいい」

卓巳はそう言うと、万里子の手を取り父の元まで連れて行ってくれた。

「でも、卓巳さんは？」

「金融関係と、あと……政治業者にも挨拶がいるだろうな。少し回って来る」

政治家ではなく、“業者”と呼ぶ辺りに色々含みがあるらしい。

「わたしもお傍にいたほうが」

「いや。他人の花嫁を妙な目で見る輩に、君の挨拶は要らない。僕が戻るまでお父上の傍にいるんだ。いいね」

「……はい」

卓巳はその瞬間、ピンクの薔薇とかすみ草で飾った万里子の髪に軽くキスした。そして、父に「お願いします」と言い万里子から離れたのだった。

「外人でもあるまいに、所構わずイチヤイチャしおって……万里子、だいぶ疲れたんじゃないのか？ 最初からあまり無理するんじゃないな

いぞ」

花嫁の父の不満を愚痴りながら、それでも父・隆太郎は娘を気遣う。

「ええ、判っています。わたしは大丈夫ですから。それより、お父様のほうこそ大丈夫ですか？ 今夜から忍と二人ですけど」

「今夜からだど！？ 入籍してからは週の半分以上は戻って来なかったのは誰だ？ 全く、よく言えたものだ」

父の体を心配した言葉だったが、どうやらヤブヘビだったようだ。

「ゴメンなさい……でも、卓巳さんはずっとお一人だったんです。子供の頃から想像出来なくらいのご苦労をされてて、これ以上、寂しい思いはして欲しくなかったの。今まで、わたしのために、色んな犠牲を払って育てて下さったお父様には、本当に薄情な娘だと思つのですけど……」

健気なことを言い出す万里子に感極まったのか、隆太郎を鼻を噉りながら答えた。

「何を言うんだ！ 私は……何の犠牲も払ってないぞ！ お前のおかげで、父さんは本当に幸せだった。これが今生の別れでもあるまいに、そんな風に謝るんじゃない！ これまでも、これから、お前は私の自慢の娘だ！」

「お父様……」

父の言葉に思わず涙を浮かべ、満面の笑みを返す万里子だった。

「結婚おめでとう、マリちゃん！ あ、いや、万里子様」

そんな万里子と父の間に、ひたすら明るく喜びに溢れた声が響いた。

「俊介さん！ わざわざ来てくれたなんて、どうもありがとう！」

そこに立っていたのは忍の一人息子・香田俊介（こいつだしんすけ）であった。彼は今、静岡市内の公立中学校で教師をしている。急ながら、結婚の祝いに駆けつけてくれたのだ。

「本当に綺麗になったね！ 四年前はまだまだ、制服を着たマリちゃんって感じだったのに、今は“万里子様”なんだもんなあ」

十歳年上の俊介は、万里子にとって憧れのお兄さんだった。

忍が住み込みで働くようになった時、俊介も一緒に千早家にやって来たのだ。髪はいつも短く刈り上げて、色んなスポーツが得意だった。初等科の頃は、夏は海やプール、冬はスキーやスケートによく連れて行って貰ったことを覚えている。

そして、万里子が中等科に上がる時、俊介は就職が決まって千早家を出た。その時は悲しくて……万里子は初恋と失恋を同時に自覚したのだった。

「そうですよ。もう、お嬢様ではなく、藤原家の若奥様なのですから。あまり馴れ馴れしく呼ぶんじゃないやありません」

万里子には優しいが俊介には厳しい母だ。だが、万里子が父に感謝するのと同様に、俊介も女手一つで育ててくれた忍にとても感謝している。今年還暦を迎えた母親に、仕事が辛くなればいつでも自分たちと一緒に暮そうと言ってるそうだ。俊介は四年前に同じ中学教師と結婚して、この夏に二人目が産まれたばかりであった。

嫁が仕事に復帰するのに、子供の面倒を見る人間が欲しいだけだなどと忍は言うが、内心は喜んでいることを万里子は知っていた。

「どうもありがとう、俊介さん。もうっ！ 忍ったら、相変わらずうるさくって」

「お嬢様！ あ……失礼致しました」

四人は声を上げて笑った。

（こんなに幸せな結婚式が出来るなんて！ いいえ、結婚生活だったきつと）

この時の万里子に、気付くはずもない……“幸福な花嫁”の時間
が、あと僅かであることを。

第四章 誓い (9) 最悪の誤解

卓巳は腹芸が得意なほうではない。

感情的な性格を隠すため、冷酷な仮面を被り『氷のプリンス』などどマスコミに書かせているのではないか。

宗は、卓巳曰く“政治家”とのやり取りにヒヤヒヤしながら、そんなことを考えていた。

何しろ、仕事以外で卓巳がこういった席にいるのは初めてだろう。例え仕事であっても、よほど公式な席でなければ女性の同伴もしない。

そんな卓巳が女子大生と電撃結婚、しかも、あのキスシーンだ。

会話はいやでも下半身の方を向いてしまう。そして、話題は万里子のバストやヒップに及ぶと、てきめん卓巳の表情が曇り……。

「門から叩き出されるかと思いました」

「ああ、ヤツか。あの男なりに褒めてるつもりなのだろう。女性の美点をセックスから切り離せない愚か者だ。放っておけ」

「なんだかんだ言っても、どうやら今日の卓巳はご機嫌のようである。」

宗は、ちょうど良いと判断し、卓巳に提案をした。

「社長、もうよろしいではありませんか？」

「何がだ？」

「例の 契約書です。失礼ながら、社長と万里子様とのご関係は、普通の新婚カップルにしか見えません。ならば、偽装を疑われるようなモノは、さっさと処分されたほうがよろしいと思われます」

宗は、契約書・偽装といった言葉だけ、声を潜める。

「いや……まだ、だ。もし私が失脚した場合、あれがあったほうが

彼女に有利だろう」

「さあどうでしょうか？ 万里子様が本気であるなら、あまり意味のないものだと思います。それとも、奥様の気持ちが揺らぎそうなお心当たりでも？」

卓巳の視線の先に簡易チャペルがあつた。

挙式後、二人が鳴らした鐘に、今は若い女性が群がって記念写真を撮っている。どうやら、万里子の友人達らしい。卓巳は式のことを思い出しているのか、口元に笑みを湛えていた。しかし、それが妙に悲しげで……。

「宗、お前の言う通り、万里子は名実共に私の妻だ。彼女を幸せにしてやりたいが……私は幸せな家庭も、愛し合う夫婦も知らない。こんな私の傍にいて、彼女は幸せになれるのだろうか？ だからいつでも私から自由になれるように、そうしておいてやりたいんだよ」

卓巳の言葉を、信じられない思いで宗は聞いていた。

(この人は……不器用にも程がある)

「いや、しかし、万里子様ご自身が、もう社長から離れたくないと仰るのでは？ それに、愛に満ちた家庭で育つても、幸福になれぬ者は大勢いると思われませんが……」

「ならいいがな。契約を無視して彼女を口説き、妻にしてみました。これは私の罪だ」

「社長……」

宗はハツとして動きを止めた。

視線を披露宴会場に戻した瞬間、植え込みの向こうに万里子を見つけた。その傍らにいるのは……なんと四年前、『中絶同意書』に

署名した人物、香田俊介ではないか。

「社長、あちらに日銀総裁がお見えです。一言ご挨拶されたほうが
宗は慌てて平静を装い、卓巳の気を引こうとした。だが、すでに
卓巳は、万里子を視界に捉えている。しかも、その双眸は一瞬で炎
上した。恐らくは、嫉妬、という名の炎であろう。」

「いや、その前に、挨拶しておきたい人物がいる」

くくくくくくくく

(なぜだ！ なぜ万里子はある男を呼んだんだ！ 妻がいながら
自分を孕ませ、あげく無責任にも墮ろさせた男を)

「万里子！」

卓巳の呼びかけに、万里子は一瞬で振り返った。だが、予想外の
険しい表情に驚き、言葉が詰まる。

しかし、すぐに気を取り直して、万里子は卓巳に俊介を紹介した
のだった。

「あの、卓巳さん。この間話した、香田俊介さんです。忍の息子さ
んよ」

「はじめまして、香田です。このたびはご結婚おめでとつごぞいま
す」

差し出された手を、卓巳は冷ややかに無視する。

「ああ……。君のことは妻から聞いている。昔、随分と世話になっ
たらしいな」

「え？ いえ、そんな、千早社長には僕のほうが大変お世話になり

ました。マリちゃん……いえ、万里子様には、勉強とか……僕の知
つてることを色々教えただけで。ほんの遊び相手をしたくらいです」

俊介の言葉は、嫉妬の炎に大量の油を注ぎ込む。卓巳は怒りのあ
まり、表情を繕うことすら忘れた。

「今後、そんな遊び相手は無用だ。それに、妻の名を親しげに呼ば
れるのは不愉快極まりない！」

その、とんでもなく厳しい口調に俊介は仰天した。慌てて卓巳か
ら視線を逸らし、俯き加減で謝罪する。

「も、申し訳ありません。これからは気をつけます」

こちらも、驚きを隠せないのが万里子であった。

「あの……卓巳さん、どうなさったんですか？」

「万里子、彼はこれから度々君と会うつもりだよ。いつそ、
彼の妻にしてもらったらどうだ？」

「卓巳さん！？ 何を仰るんですか？ やめてください、そんな……
…そんなこと」

なぜ、自分の愛する男を責めるのか？ 卓巳の耳に万里子の
声がそんな風に響いた。

「……失礼」

卓巳は堪えきれず、逃げるように万里子と俊介の元から立ち去る
のであった。

くくくくくくくく

残った一堂は啞然である。

「どうしたんだ！ 万里子、卓巳くんと喧嘩でもしたのか！？」

「いいえ、まさか……」

当然であろう。卓巳が万里子を父に預けたのは、ついさっきのことだ。それ以降、万里子はずっとこの場にいた。笑顔で離れた二人が、どこで喧嘩をするというのだ。

「万里子、お前は俊介くんのことを話したと言っていたな。一体、何と話したんだ！」

「そ、それは……初等科の時に家庭科で作ったクッキーを持って帰り、お父様と俊介さんに半分ずつ差し上げたつて。そういえば、そのお話をした時も少し機嫌が悪くなったような。でも、十年以上昔のことなのよ」

そこに忍が口を挟んだ。

「いけませんよ、お嬢様。殿方は幾つになっても、些細な過去に腹を立てたり、ヤキモチを妬くやつかいな生き物なんです」

「でも、小学生のしたことよ……そんな」

「驚いたなあ、脚が震えたよ。でも、彼ほどの人物にライバル視されるとはね」

万里子は俊介に謝ろうとした。

だが、そこに父の叱責が飛ぶ。

「笑い事じゃない！ 万里子、卓巳くんとちゃんと話し合ってきたかい。誤解は早めに解くんか。彼がどれほどお前のことを思っているか……そんなことも判らないのか！」

最初こそブツブツ言っていた父だが、入籍後は卓巳に対してかなりの信頼を寄せている。

「判っています。じゃあ、わたしはこれで……。俊介さん、ゴメンなさい。どうぞ、忍と一緒に楽しんで行って下さいね」

それだけ言うと、万里子は足早に卓巳の後を追うのだった。

第四章 誓い (9) 最悪の誤解 (後書き)

第四章 誓い (10) 哀しき愛の行方

「卓巳さん……卓巳さん！ どうなさったの？ ねえ、卓巳さん、返事をしてください」

血相を変えて追ってくる万里子を、卓巳は例の控え室まで連れて行く。今度はちゃんと窓を閉め、入り口のドアにも鍵を掛けた。

「なぜ、あの男を呼んだんだ!？」

この時、お互いに相手の気持ちが見えなくなっていた。

万里子には怒り狂う卓巳の気持ちが。卓巳にも、平然と昔の男を夫に紹介する万里子の本心が。手を伸ばせば届く場所にいなながら、心は遙か遠くに離れてしまう。

「君は一体、どういう神経をしているんだ。私には全く判らない。

なんでこんな……君はまだ、あの男が好きなのか!？」

「そんなんっ！ 好きだなんて、そんなこと」

「だったらなぜ、奴と結婚しない……なぜ」

……子供を墮ろしたりしたんだ？

卓巳はその言葉を、唇を噛み締め飲み込んだ。

「昔、俊介さんに憧れていたことはありませんでした。でも……それだけです。わたしは今日、神様の前で誓ったんです。あなたの妻になる、と。なのに……どうしてそんなことを仰るんですか？」

目に涙をいっぱい溜めて、万里子は卓巳を見上げた。その潤んだ瞳を見ていると、愛しさのあまり胸が千切れそうになる。

そんな憧れだけで万里子はその男に抱かれた。若気の至り、愚かな行為かもしれない。だが、悪い男の手管てくだに乗せられたのだ。いかに貞淑な万里子でも、魔が差すこともあるだろう。卓巳は必死に、そう思い込もうとしていた。

「た、くみさん。何か、仰って……」

万里子の縋るような声に、卓巳の自制心など地球の裏側まで飛び去った。そのまま万里子の髪に触れ、一気に引き寄せる。そして唇を重ねた。

(奴にも許したのか、この唇を……この肌に奴の手が触れ、舌先でなぞり、最後にはあの男の！)

次の瞬間、固く閉じた唇が僅かに開き、万里子は卓巳の舌を受け入れたのだ。

上着を掴む指先、口元からは甘い吐息が零れ　それは次第に、薄暗いアパートに響く嬌声へと変わっていった。女の手が卓巳の腰の辺りで動く……錯覚だ、それが判っていても、十五年前の誘惑者が蛇のように鎌首かまくびを擡もたげ彼を見ている。

卓巳は、ハツとして万里子を突き放した。

「ダメだ……やはりダメだ。どうかしている。僕は……なぜ君のような女に口づけるんだ！」

「卓巳さん、わたしは」

「そんな目で見るなっ！　男を誘うような……物欲しげな目をするなっ！」

それはまるで白蟻のように、卓巳の心を奥深くまでボロボロに蝕ほしむんでいた。

男と女の、セックスと金に対する欲望ばかりを見せられ続けた。優しさも愛情も知らずに育った青年は、自分の感情でさえ自信が持てず、その区別が出来ない。

愛するがゆえの衝動も、欲望に変換され、卓巳の胸には過ちとしか映らない。

万里子の瞳に宿る、愛情や尊敬・信頼の光すら、卓巳の中では、

淫靡な誘惑、に誤変換されてしまったのだった。

（＊＼＊＼＊＼＊）

控え室に万里子は一人残された。

そして今日、一番幸せなはずの花嫁は、涙の海に今にも溺れそうだった。

（あんなに……優しくして下さったのに。どうして……）

万里子は今日、本当の花嫁になれたつもりだった。今夜にでも「契約書はなかったことにしよう」「そう言っただけで貰えろ」と信じていたのだ。

それが、キスの途中で突き飛ばされ「男を誘うな！」と罵倒された。

その言葉は、決して卓巳が口にしてはいけない言葉であった。万里子を追い詰め、ひび割れた心を砕いてしまう言葉。

『お前が誘ったんだ。その目で……犯してくれってな』

四年前の悪夢の夜、一人目の男が万里子の身体に押し込み、律動を始めながらそう言った。軽井沢のスーパで、男が落とした車のキーを万里子が拾ったのだという。そしてジツと目を見つめ、誘い掛けるように微笑んだのだ、と。

（誘ってなんかいない。わたしは、望んだりしてない！）

万里子は、ささやかな善意を犯罪の言い訳にされ、人と目を合わせるのが怖くなった。俯き、可能な限り、誰とも視線を合わさないようにした。

そんな万里子が生まれて初めて人を愛したのだ。その愛する人を瞳に焼き付けたくて、卓巳を見つめるようになる。次第に、目が合うと卓巳も微笑み返してくれ……。

だが、卓巳はあの悪魔と同じことを言った。万里子が誘った、と。キスは卓巳が望んだ訳ではなかったのだ。

万里子はずっと悩んでいた。

あんな目に遭ったのは自分のせいではないか、と。自分の行いに問題があつて、酷い目に遭わされたのかも知れない。

そんな万里子の苦悩に、卓巳の言葉は決定打となる。

(わたしは、気付かない内に男の人を誘っていたのね……何もかも、全てわたしのせいだったなんて)

「誰よりも幸せな花嫁にしてやる」

卓巳の言葉は、万里子の涙で一つずつ崩れて行く……砂の城であつた。

くくくくくくくく

万里子に背を向け、離れを飛び出したものの、すでに後悔が体中を占めていた。

すぐにも引き返し、万里子を抱き締め謝りたい。許してもらえらなら、跪いて詫びることも厭われない。そして、再び万里子に口づけたかった。

だがそれは、欲望に囚われ、屈することになる。

俊介に話しかける万里子の幸せそうな瞳を見た瞬間、胸の奥底にどす黒い怒りが沸き上がった。やり場のない想い、それが恋するあまりの嫉妬心とは欠片も思っていない。欲望に溺れた二人に対する怒りだと、卓巳は思い込んでいるのだ。

『私は幸せな家庭も、愛し合う夫婦も知らない。こんな私の傍にいて、彼女は幸せになれるのだろうか？』

どうやら、卓巳の不安は早くも的中してしまったようだ。

人を愛する、ということは、欲望のままに相手を求め、また、惜しげもなく相手に与えることだ。愛の伴った行為は、何の制限も受けない。本能のまま求め合うことは罪ではないのだ。

人は生まれてすぐ、母から無償で無限の愛を与えられる。泣くことで相手に伝え、欲求を満たされるのだ。

だが、卓巳の両親は育児放棄の一步手前であった。卓巳が二歳を過ぎた頃、彼一人をアパートに残し、それぞれ一週間も帰らなかつたのだ。妻が、夫が戻っていると思つた、そんな言い訳をして……。隣人が卓巳の気配に気付かなければ、餓死、或いは凍死していただろう。

日本経済界の寵児と称され、出来ないことなどないように思われる卓巳だが、愛することも愛されることも知らぬまま、人を愛してしまつた。

だが、卓巳が愛した女性は、彼の拙さを許せるほど大人ではなく……。寄り添っては突き放される不器用な愛情に、疲れ果てていたのだ。

もうこれ以上、愛することを止めてしまつほどこに。

第四章 誓い (10) 哀しき愛の行方 (後書き)

第四章 誓い (11) 拒絶

十一月第二週のガーデンウエディングから半月が過ぎ
。 暦は師走、十二月に入った。

藤原家のメインテーブルに席が一つ増え、卓巳も毎日本邸に戻り、夕食を取るようになった。そして夕食後は、新婚の二人は早々に部屋に引き上げる。

尚子や和子は声を揃えて、

「まあ、お熱いこと。この分ならすぐにも、跡継ぎがお生まれになるんでしょねえ」

と、嫌味の方を変えなければならぬくらいであった。

だが現実には……新婚カップルの寝室に甘いムードの欠片も存在しない。

結婚式当日、卓巳は離れで強引にキスした拳げ句、勝手な思い込みで万里子を突き放してしまった。あの時以来、二人の距離は開いたままである。

卓巳は結局、すぐに謝ることは出来なかった。あのまま、万里子を離れに放置したのだ。彼女に対する想いの強さに、尻込みして逃げ出してしまったのだった。

しかし、明らかに万里子の様子が変わったことに気付き、結婚式の夜……。

「すまない。本当に悪かった。反省している。どうか許して欲しい」

二人は本邸の自室で初夜を迎えた。

新婚旅行は、万里子の大学が冬休みに入ってから、と決めたせい

だ。卓巳は部屋に戻り、二人きりになるのを待ち構えて、大袈裟なくらい謝罪の言葉を口にしたのだった。

「いえ……わたしも悪かったです。結婚式に気分が高揚していました。皆のお祝いの言葉を、錯覚してしまつて。忘れていたんです……わたしたちが偽装結婚であることを。もう……あんな風にあなたを見ることはしませんから。卓巳さんも、私に触れたり口づけたりなさらないで下さい。もしお約束を守ってもらえない場合、わたしは契約書通り、すぐに実家に帰らせて頂きます」

その冷やかな万里子の口調に、卓巳は愕然とした。

「本気で言ってるのか？　　どれだけ謝つても許しては貰えないのか？」

「謝つて頂いても困ります。私は別に、怒つてなどいませんから。卓巳さんのことを信頼しております。何もしない、と仰つた言葉を信じて、あなたの妻になりました。それだけ……です」

卓巳は決して目を上げようとしない万里子に苛立ち、両腕を掴んだ。そして、口づけるようにその顔を覗き込む。その瞬間　　万里子は僅かに視線を逸らし、怯えた瞳で俯いた。

万里子とデートを重ねるようになってから、目を追つて卓巳に注がれる眼差しは温かくなつていった。それが、ものの見事に消え失せたのだ。万里子は逸らせた瞳すらもすぐに閉じ、卓巳が掴んだ腕は小刻みに震えている。

それは間違いなく、卓巳に対する『拒絶』であった。

何か手段はあるのかも知れない。だが、恋にも、女性の扱いにも不慣れな卓巳に、為す術は何もなかった。

「判つた。済まない……二度と触れない」

かろうじて口に出来たのはそれだけで、卓巳も目を逸らせてしまったのである。

夫婦の部屋とはいえ、二人で過ごすことはほとんどなかった。部屋に戻っても卓巳はリビングで仕事をし、万里子は寝室で勉強するか、本などを読んでそれぞれの時間を過ごしている。

卓巳は時折思い出していた。

ただ一度、彼女の了解を得て口づけた夢のような一瞬を。万里子の柔らかかな唇、力を籠めて卓巳の腕を掴んだ震える指先、キスの後のはにかんだ笑顔まで……それが彼の脳裏に何度も繰り返し返された。あの時、二人は確かに愛し合っていた。愛を誓い合って結ばれたカップルそのものだった。

（僕が……間違えたんだ）

「そんな目で見ると！ 男を誘うような……物欲しげな目をするなっ！」

言つべき言葉を間違えた。奴に……香田俊介に優しい目を向けるな、と言いたかっただけなのだ。その目は全部、自分に向けてくれ。卓巳以外の男を、憧れ眼差しなどで見て欲しくなかった。本当は笑顔も禁じたいくらいだ。万里子を閉じ込めて、自分だけのものにした。 「僕の妻だ！」と何度も叫びたいほどであった。

あの日から、万里子は卓巳を一切見ない。優しげな笑顔を向けてくれるのは、階下で、祖母の傍らにいる時だけだ。

万里子の心を手放した時、彼女の瞳は卓巳を映さなくなった。

だが、時々閉じこもった寝室から彼女の押し殺した泣き声が聞こえる。

新婚三日目、最初にその小さな声に気付いた時 万里子に何かあったのでは？ と心配になり、すぐに部屋に駆け込んだ。

「どうした、万里子！ 何があった？ 僕に出来ることなら何でもするから言ってくれ」

卓巳は名誉挽回のチャンスが欲しかった。もう一度、万里子の騎士になりたかったのだ。

だが、

「……離して。私に触らないで、離してっ！」

卓巳の手を振り解き、万里子は一瞬彼を見てすぐに目を伏せた。だがそれは、愛に満ちた眼差しとは程遠く……。

「なら、思わせぶりに泣かないでくれ。僕は君を攫^{さら}って来た訳じゃない。結局は、進んで妻になっただんじやないか！？ 何をいまさら」「ごめんなさい。……もう、泣きません」

卓巳は、自己嫌悪の嵐であった。

言いたい言葉が言えない。いつそ何もかも告白してすつきりしようか、と考えたこともある。だがもし万里子から、役立たずだと侮蔑の視線を向けられたら……それこそ、立ち直れないだろう。

必死で彼女の機嫌を伺う心と、それを墮落だと叱責する心。

おそらくは、万里子が抱けるなら乗り越えられたであろう壁が、二人の間に巨大な城砦^{しろ}となって立ちはだかるのであった。

第四章 誓い (11) 拒絶(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

らぶらぶの新婚生活を想像された読者さま……申し訳ありませんっ

m (——) m

ととう万里子を追い詰めて、籠城させてしまいました。強行突破
の手段を持たない卓巳に、陥落できるのか？ (いや、やってもら
わないと) (^ ^ ; ;)

しばし苦悩は続きますが、何卒よろしくお願い致します (平伏)

第四章 誓い (12) 閉ざされた心

苦悩と後悔の只中にいる卓巳と違い、万里子はひたすら自戒の念に囚われていた。

原因は卓巳の一言である。

やはり、あの悪魔たちを呼び寄せたのは自分自身であった。気付かぬうちに、男性を誘っていたのだ。だから、あんな目に遭った。卓巳に愛してもらえなかったのも、人を愛する資格がなくなつたのも、自業自得

万里子は一つの思いに引き摺り込まれて行く……決して男性の目を見てはいけない。そうでなければ、また同じような目に遭うだろう、と。

(だから、卓巳さんの目も、絶対に見てはダメ……)

卓巳に抱き締められた時、素直に嬉しいと思えた。

「誰よりも幸せな花嫁にしてやる」 あの言葉に万里子の心は震えたのだ。

結婚式の後、控え室でキスされて、万里子は本当に“幸せな花嫁”だった。あの僅かな時間、卓巳に心から愛されていると思えたのだ。

だが、全て勘違いであった。自分の愚かな行動を万里子は反省する。卓巳になら何を求められても大丈夫かもしれない、そんな思いで彼を見つめてしまったのだ。その淫らな想いが卓巳に伝わり……キスさせたのだろう。もうこれ以上、卓巳に軽蔑されたくはない。万里子は必死で恋心を抑えていた。

だが時折、我慢できないほど苦しくなるのだ。好きな気持ちから溢れ出し、胸が痛む。ふと気付くと、万里子はベッドの中で嗚咽を堪えるのに必死になっていた。隣のベッドで眠る卓巳が恋しい。

彼の寝息が聞こえる。初めて抱き締められ、一緒に眠ったあの夜と同じ……。恐ろしいだけの男性の腕が、心強く、温かいものだと教えてくれた。

もう一度、卓巳の腕の中で眠りたい。そんな思いが次々に湧き出してきて……。万里子は穢れた自分を思い知るのだ。

男を知っている。そんな女だから、そんな汚らわしいこと考えるのに違いない。

卓巳に知られたら軽蔑される。その胸の欲望を、卓巳にだけは知られたくない。万里子は、愛する人を求める心まで、自らに禁じた。彼女の精神は崩壊寸前であった。

くわくわくわくわく

嫁いで二週間、この広大な邸の中で、万里子が一番親しいのはメイドの和田雪音であった。

最初は、卓巳が選んだ愛人と聞かされ驚いたが、そうでないことは話をすればすぐに判る。万里子は雪音から邸内の事情や、尚子の命令で卓巳を誘惑し続けたメイド・永瀬あずさのことを聞いた。

「あの女がいるから、卓巳様も家に戻られなくなっただんですよねえ。太一郎様とはそれなりの関係だし、裏で雇われてたらクビには出来ないし……」

卓巳が酔って帰った時、あずさは全裸で彼のベッドに潜り込み誘惑しようとした。怒った卓巳にそのままの姿で廊下に叩き出された

とか……。そんなことがあって以来、卓巳は少しでも酔っていたら帰宅しなくなつたそうだ。

その話を聞き、万里子はあずさがなぜ自分が卓巳の愛人であるかのように言つたか、得心がいく。ちなみに今は裏……母屋の裏手にある尚子・和子名義の別館で雇われているらしい。卓巳に何度母屋に来るなと言われても、尚子の命令と言つて聞き入れないという。

「永瀬さんも、きっと卓巳さんのことが好きなんですね」

万里子はポツリと口にするが、雪音に一笑に付された。

「そんな殊勝なタマじゃないですよ。まあ、お金は好きかも知れませんがね」

この雪音をはじめ、数人のメイドと話して、万里子は驚いた。皆卓巳の笑顔など見たことがないと言ふのだ。だが万里子の知る卓巳は、きついことも言うがすぐに改めて優しい笑顔を見せてくれる男性であつた。なのに、自分のせいで……。

「でも、気がつかなくつたですねえ。この家にクリスマスツリーがないとは」

ふとした瞬間、落ち込みそうになる万里子の耳に雪音の声が聞こえた。

「そうですね。わたしもおばあ様に聞いた時、びっくりしました」

そう言いながら、万里子は大きなクリスマスツリーを飾りつけている最中であつた。十二月に入ればツリーを飾るのは習慣である。

この家ならさぞかし由緒正しいものがあるのだろう、と思つていたが、ツリーは毎年飾らないと言う。それを聞き、万里子は玄関の正面、階段下の壁際に大きなクリスマスツリーを置くことにしたのであつた。

「でも、こんな大きなものってはじめて見ましたけどね。デパート

に飾ってあるヤツみたい」

雪音の言うことも最もだ。

だが、吹き抜けのただっ広いエントランスに合わせると、このサイズになっちゃった。

「この家のサイズに合わせたつもりだったんだけど、大きかったかしら？」

「いいんじゃないですか？ 邪魔にはならないし大きいだけで寂しい家だったから。万里子様がいらして、家らしくなっちゃったって言うかそれは臯月にも言われた。」

卓巳に家という器ではなく、家庭を与えてくれてありがとう、と。心苦しいが、臯月が喜んでくれていることだけが、万里子にとって救いだった。

「前庭の並木にも電飾を付けるんでしょ？」

「ええ。せっかく正門から玄関前まで、綺麗な遊歩道があるのに。勿体ないと思って」

以前、車で卓巳に連れて来られた時は、木立を迂回する車道を通った。しかし、正門から一直線にも道は付いており、そこは遊歩道……並木道となっている。

藤原家にはちゃんと庭師もいて、前庭はトクにきちんと管理されていた。無論、季節ごとの剪定せんていや植え替えなどは専門の業者に任せられている。

万里子は臯月の許可を得て、その庭師・柊こひに頼みイルミネーションを設置することにしたのだった。

「ご自宅も飾られてたんですか？」

「ええ、凄いのよ。最近イルミネーションでサンタさんやトナカイも作れるんだから。でも、電気代が勿体ないかしら」

臯月の許可は得たが、卓巳には話していない。結婚以降、まともな話はしてなかった。

「ま、この時期だけだし、大奥様も喜んでいらっしやるんだからい

「いんじゃないですか？」

「ええ、そうね。卓巳さんも……叱ったりしないわよね」

そんな万里子の横顔を雪音はジッと見ていて、思い切ったように口を開いた。

「あの……万里子様、卓巳様と上手く行ってないんですか？」

第四章 誓い (13) 卓巳の浮気？

「え？ どうして……」

雪音の言葉に万里子はドキツとする。出来る限り幸せそうな新妻を演じているつもりだ。だが、卓巳から視線を逸らそうとしてるとに、気付かれたとしたら。

「そんなことはないわ。卓巳さんは相変わらず優しいし、夫婦仲も問題なしよ」

卓巳のように堂々と嘘を吐ければいいのだが……。万里子はわざとらしさを覚えつつ、そんな言葉を口にした。

「そう……ですか。まあ、そうですね。すみません、変なこと言っってしまった」

「どうかしたの？ 何か言われた？ おばあ様とか」

「いえ。何でもありません。気になさらないで下さい」

どうやら雪音も万里子と同じで、嘘の苦手なタイプらしい。二人して乾いた笑い声を上げ、そそくさと飾り付けを済ませようとした時である。

「何でもありませんって？ どうして本当のことを、教えて差し上げないのかしら」

口元に厭らしい笑みを浮かべて、階段の右手奥、尚子らの住まいに繋がる廊下から姿を見せたのは、話題の人物・あずさであった。

「本当のってどういうことですか？」

万里子の問いに、あずさは意地悪く答える。

「ほら雪音。若奥様がお尋ねよ」

「何でもないです。あずささん、母屋をウロウロしてたら、卓巳様に言いつけますよ」

「尚子様の命令よ。あんたうるさいのよ！ 何様のつもりっ？」

雪音はあずさの反論を軽く無視した。

「万里子様、粗方飾り終えましたし、お部屋に戻りましょうか？」
それは問い掛けではなく、うむを言わせぬ懇願であった。万里子は雪音に肯き、階段に向かう。だが、背を向けた二人にあずさはとんでもない言葉と嘲笑をぶつけたのだった。

「卓巳様ったら、最近秘書とお楽しみですってよ。万里子様は妻ですもの、当然ご存知よね？」

一瞬、何を言われているのか判らず、万里子は言葉に詰まる。

「あ、あの」

「単なる噂をさも事実のように口にするのは間違ってると思うわ。クビになりたくなきゃ、少しは慎んだら」

雪音は万里子を背後に庇い、あずさ相手に受けて立つ姿勢を見せた。

腰に手を当て、胸をグンと突き出して威嚇するあずさと、腕を前で組み、斜め視線であずさを睨む雪音。喧嘩となればどちらも、一歩も引かないタイプのようだ。細身の雪音のほうが体格では不利だが……まさか、殴り合いを始める訳ではないだろう。口達者なのはいい勝負と言ったところか。

「あら、やけに万里子様を庇うじゃない。卓巳様からいくら貰ってるの？ 取り入るのが上手い女ね」

「あなたには負けますよ。ろくな仕事もせずに、子守してて同じ給料なんだから」

「子守ですって？」

「ベッドで大きな坊やを寝かしつけるのが仕事でしょう？」

雪音はフンと鼻で笑う。あずさは怒るのかと思っただが、あっさり開き直った。

「だから何？ 案山子かかしみたいなあんたじゃ勃たないって、太一郎が言ってたわ。卓巳……様には、あんたくらいがちょうどいいのかもね」

「フン！ 淫売」

「他の連中も同じようなもんじゃない。伝えといてあげるわ、皆にもね」

住み込みのメイドは拘束時間が長い。加えて、現金や貴金属は金庫内だが、邸内には簡単に持ち運び出来る高価な調度品や美術品が多数ある。そのため、使用人の出入りには非常にチェックが厳しかった。

夜の十時を回ると外出は認められておらず、友人も呼べない。若いメイドたちには、いささか酷な環境であろう。だが、手段がないわけではないのだ。家人の外出までは制限されていないので、夜中に歩く太一郎や静香の車に同乗すれば、楽に出入り可能である。

だが、そのためには彼らの機嫌をとらねばならず……。

ちなみに、卓巳の辞書に「融通を利かせる」という言葉はないので、チャレンジャーは出ていない。

「でも、おかしいのよねえ。あんた、たまに外に遊びに出てるでしょ？ 一体どんな手を使ってるわけ？」

「……」

その質問に、雪音は答えるつもりがないようだ。

「ひよつとしたら、敦様の愛人だったりして」

「あんたと一緒にしないでよっ！」

吹き抜けの玄関ホールが、どんどん険悪な雰囲気きんぐうきに包まれる。

万里子が手にしたままの、ツリーの天辺てんぺんに飾られる天使が、困った顔で二人を見つめていた。

そこまでは呆気にとられ、傍観していた万里子だったが、
「ちよつと……ねえ、ちよつと待って。そうじゃなくって、卓巳さん
が秘書の方とどうかなさったの？ あの」

「まあ、その秘書って私のことかしら？」

二人のメイドを押さえようとした万里子の耳に女性の声が聞こえる。
それは卓巳の第一秘書、中澤朝美であった。

「あの……確か」

「社長秘書の中澤です。二週間前にご挨拶させて頂きましたが、お
忘れですか？」

「いえ、覚えています」

結婚式の直前、卓巳から優秀な秘書だと紹介された女性だった。

あの日の朝美は、フェミニンな黒のワンピースを着用し、白い大
きなコサージュを付けていた。今は、落ち着いた薄いブラウンのス
ーツ姿である。髪をキツチリ上に結び上げ、脚を揃えて立つ姿には
一分の隙もない。まさに、全身から鉄壁の自信を漂わせていた。

あの日、卓巳や宗が近くにいた時は、万里子にも慎み深い笑顔を
向けた朝美だが……。

「お母様が会長と同じ、やんごとなきお血筋なのですって？ お父
様は社長で、有名なお嬢様学校に通っておられて……羨ましいです
わ。私の実家などはごく普通の家庭……庶民ですもの」

傍に誰もいなくなった途端、朝美はそう口にした。

笑みは浮かべているのだが、目が笑っていない。それを感じた瞬
間、ゾクツとしたのを覚えている。しかし、あの時の万里子には卓
巳しか見えておらず……朝美の言葉に眠る悪意など、すぐに記憶の
底に消えてしまったのだった。

第四章 誓い (14) 空転

「ロンドンで行われるレセプションパーティに合わせて、ハネムーンの日程を組ませて頂きました。出発は……」

卓巳はデスクに座ったまま、手にした眼鏡を指で弄んでいた。

車の運転中もそうだが、仕事中は眼鏡を掛けていることが多い。視力が悪いのは確かだが、仕事に支障が出るほどではない。卓巳の上品で整った父譲りの顔は、ともすれば軽薄で頼りなく映る。交渉相手の信用を得るために、地味な色のスーツを選び、少しでも自分を年配に見せる努力をしていた。

「しかし、真冬のロンドンは寒いと思うんですが。どうせなら暖かい……社長？ 社長っ！」

「え？ ああ、ロンドンか。いいんだ、万里子が……行きたいと言ったんだ」

我ながら呆れ返るばかりだ。ここ数ヶ月、卓巳の中心は万里子だった。

美味しいと言われる店に案内されると、次は万里子も連れて来ようと思ひ、美しい景色を見れば、彼女にも見せたいと思う。宝石や洋服も同じ……万里子に似合うものは、と考えてばかりだ。

卓巳は観念した。

母という雪の女王によって、胸の奥深くに“氷の棘”を突き刺されてしまった。心を凍らされて、寒風吹き荒ぶ孤独すさの中で生きてきた。それが、万里子と出逢い、彼女への愛によって“氷の棘”は溶け始めたのだ。

しかし、その棘には毒があった。溶けることに過去の痛みを卓巳の中に呼び覚ます。苦しさのあまり、そして、己の傷を隠そうと、

万里子から離れるのだが……最早、その痛みは治まらなかつた。

彼は愚か者ではあつたが臆病者でも卑怯者でもない。どれほどの痛みを伴おうとも、今度ばかりは棘をすっかり抜き取るまで、止めるつもりはなかつた。

愛を取り戻す。

過ちを正して、彼女の愛を挽回したい。もう一度、万里子と向き合えるチャンスが欲しい。

それだけだつた。

「宗……本当にこれでいいんだろうな？」

「そう言われましても。ただ、私は万里子様の関心を惹くためでしたら、ヤキモチを妬いていただくのが手っ取り早いと思つただけです」

万里子を酷く怒らせてしまった、ろくに話も聞いてはくれない。

万里子の注意を引く方法はないか？ そう尋ねる卓巳に宗は言つたのだ。

「怒らせた理由にもよりますが……。ただ、女性が怒るのは信頼しているからです。心の底では愛されてると思うからこそ、確認のために怒るんですよ。相手の注意が自分に向いてないと知れば怒れませんし、どちらでも良い相手なら、そもそも怒りません」

と、自説を披露して、本当に卓巳が自分から離れていく不安を与えれば、何らかのリアクションが見込めると言つたのである。

卓巳はせめて、万里子の注意を惹きたいと思つた。

そのために、朝美をはじめ秘書室の数人を日替わりで食事に誘つたのである。宗を使って邸内で噂にさせ、大した用もないのに朝美を藤原邸に使いにやつた。宗曰く「おそらくあの性格なら、ひと騒

動起こしてくると思います」と言っていたが……。「あなたがそんな人だとは思わなかった」万里子にそう言われたら、「君にそう言っただけで、秘書を食事に誘った。でも、それだけだ。僕が愛してるのは君だけだ」今度こそ、ハッキリと「愛している」と告げて彼女の下す決断を待つ。

この時の卓巳は、まだ気付いていなかったのだ。

万里子を怒らせたのではなく、傷つけたのだということに。

く*く*く*く*

ところがその夜、卓巳を待ち構えていたのは、万里子ではなかった。

戻るなり、卓巳は皐月の部屋に呼び出される。そこには万里子もいた。

「こんなことは言いたくなかったのですけれど……卓巳さん、妙な噂が聞こえてきていますよ。式からわずか半月で、新婚旅行もまだですのに、もう浮気の虫ですか？」

(なんで、こうなるんだ)

卓巳は思わず頭を抱える。

「いえ……誤解です。おばあ様」

「誤解なら結構。でも万里子さん、あなたもきつちり言わないといけませんよ。黙っていても、殿方が付け上がるだけです。夫の起こす不祥事は、妻の責任と言われるのですから」

(不祥事? 一体、中澤は何をしでかしたんだ!)

宗の言葉を真に受けたことを悔やみながら、迂闊なことは言えず、卓巳は口を閉じていた。

「はい、ご心配お掛けして申し訳ありません。でも、わたしは卓巳さんを信じております。噂など、一切気にしてはおりません」

「まあ、仲が宜しいこと……それが一番ですよ」

万里子はいつも通りであった。ニツコリ微笑み、皐月の前で完璧な妻を演じている。後悔しつつも宗の言葉を信じるなら、万里子にとって自分は「どちらでも良い相手」なのだ、と落ち込む卓巳であった。

くくくくくくくく

数時間前。

「困ります。勝手に部屋に入られては！」

朝美はツカツカと卓巳の書斎に入り込み、デスクの辺りを触り始めた。

「ああ、申し訳ありません。奥様がいらしたんですわね。では、お願い致します。本日の会議に使う書類をお忘れになられたとか。薄い緑の封筒に入れて、いつもの場所に保管されてるそうです。お出し頂けますか？」

「……」

万里子にとって、卓巳の書斎に入るのは初めてであった。

自宅内とはいえ卓巳の仕事を邪魔するようで、遠慮していたのだが、我が物顔で闊歩^{かつぽ}する朝美を見過ごすことも出来ず。

とりあえず、デスクを中心に探してみる。しばらく時間を掛け、ようやく薄い緑の封筒を見つけたかと思ったら、なんと数十枚が束

になっていた。しかも、中身は全て似たような書類だ。

「『成田空港における国際線年間発着回数増枠に関する懸念ならびに取組み課題』ですね。土地開発と観光開発両部門の担当者から出されたものです」

もたもたする万里子の頭上を越え、朝美の手は戸棚の上段からスツと薄い緑の封筒を引き抜く。

「社長は、会議前の書類はいつもこちらに保管されるんです。ご自宅に持ち帰られるのは重要書類ではありませんので」

朝美は文字通り、上から万里子を見下ろして言ったのだった。

「見つかって良かったです。それじゃ」

「私も六年前に入社したんですよ。社長が会社に入られた同じ年に……」

早々に切り上げて、立ち去ろうとした万里子に朝美は唐突に話し始めた。

「そうですね。でも、会議に使うならお急ぎになられたほうが」

「社長には国内だけでなく、海外の出張にも同行しました。どちらにでも、私が御供^{お供}させて頂きました」

万里子を見据えながら、朝美は滔々^{うたうた}と話し続ける。それは結婚式の日、誰もいなくなった時に花嫁を睨んだ陰鬱な目に似ていた。

「あの……」

「社長からお聞きしましたの。あなたはご自分から服はお脱ぎにならないって。私は待ちきれずに脱いでしまうほうですから」

フツツと朝美の口元が歪んだ。

「昨日のお昼は、久しぶりにオーナーズスイートに呼んで頂きましたの。ご結婚なさって、奥様が入りすることはなくなつたから、と。ご安心下さいね。ご自宅以外では、私がしっかりサポート致しますから」

それは廊下で聞き耳を立てるメイドたちにも当然届き……結果、
皐月の呼び出しとなったのであった。

第四章 誓い (15) 暴走

卓巳には限界だった。

部屋に戻るなり、耐え切れず万里子に噛み付く。

「どうして何も言わない!? 中澤が何か言っただらろう? なぜ僕を問い詰めないんだ!」

「それは……わたしには、何を言う権利もありませんから」

「契約書のことを言ってるのか? あの別項は削除すると言っただろ?」

「もう、別にどちらでも構いません。でも、おばあ様にだけは、心配を掛けたくありません。どうかこれ以上、噂にならないようになさって下さい」

どちらでも構わない。

独り興奮する卓巳の胸に、十字架の杭が打ち込まれた瞬間だった。それにより、卓巳の心を理性の領域に押し止めてきたストッパーが外れてしまう。

(なぜ、万里子はこんなにも冷静なんだ?)

卓巳には万里子が憎らしく思えてならず……。

「噂に、か……そうだな。君に手が出せない分、適当にやってるよ。もうヤケクソである。自分で自分の首を絞めていることは承知の上だ。判っていても止まらない。」

「ああ、そうだ! メイドの中では雪音くんのことを気に入ってるんだ。今夜ベッドに呼んでも構わないだろう?」

「止めて下さい! 雪音さんは遊びでそんなことをされる方じゃありません。使用人だからと、そんな扱いをされるなら、あなたも太

「一郎さんと同じですね！」

万里子の言う通りであった。だが、それだけに卓巳の苛々は治まらず……。

「随分、生意気な口を聞くじゃないか。遊びだろうが本気だろうが、男と女のすることは一つだ！ そんなこと、君が一番良く知ってるじゃないか。それとも、四年前に自分がやったことを忘れたのか？ まさか、本気だったなんて言わないだろうな？ 本気なら、子供を墮ろしたりはしないはずだ。君は遊びで男と寝たんだ！ そうだろう！？」

万里子の瞳に後悔の色が走った。

「もつ……四年前のことは言わないで。お願い……判っています、全部わたしのせいだって。わたしが誘ったの……でも、知らなかったんです。あれが誘惑だなんて、あんなことをされるなんて……思わなかった。本当です」

万里子から誘った。

その言葉に、卓巳の暴言はいよいよ止まらなくなる。

「やっぱりそうか……僕はとんでもない女を妻にしたものだ！ 君も僕の母と同じだ。君は自分のやったことがわかってるのか？ 妻のいる男に迫って関係を持ったんだ。恥ずかしくはないのか？ 申し訳ないとは思わないのか！？」

万里子は不意に顔を上げ、卓巳を見つめた。

「ま、待って……お願い、待って下さい。妻って何のことですか？ わたしは……知りません。でも、どうして卓巳さんにそんなことが判るんです？」

「何が知らないだ。白々しいにも程がある。君は結婚式にも出たんだろう？ 妻の顔まで知りながら、よくそんな真似ができたものだとんだ恥知らずだな」

「何のこと……？ 一体、誰のことを言ってるんですか？」

万里子にもやっと、卓巳との会話が微妙にずれている、と気付いた。だが、卓巳が中絶同意書を手に行っていることも、それに俊介の名前が書かれてあったことも知らず……。

しかも、激昂している卓巳には、万里子の表情が変わったことから気付けない。

「しらばっくれるな。結婚式にまで呼んだのは何故だ？ 僕は君が彼に捨てられたんだと思っていた。だから、言うまいと。それをいいことに、過去に妻を妊娠させ子供まで墮ろさせた男から、結婚祝いの言葉を聞いて喜べると思うか？ 非常識にもほどがある！」

「ひよっとして……俊介さんのことを言ってるの？ 違いますっ！ 彼はそんな人じゃありません。誠実な人です」

「誠実が聞いて呆れる。中学教師が女子高生に手を出し、妊娠させた過去が明らかになればクビだな」

「馬鹿な事言わないで！ 違います、俊介さんはそんな人じゃないんです！ 妻がいながら、他の女性と関係するような人じゃない。

あなたとは違うわ！」

最後の一言に卓巳はカッときた。

大股で万里子に近づくと、いきなり腕を掴み、なんとカウチソファに押し倒したのだ。

「ああそうだった！ 僕と違って紳士だろうさ。同じ部屋の隣のベッドで寝起きしながら、指一本触れない僕とは大違いだ。僕も彼を見習うとしよう。どうせ、僕には出来ないと思ってるんだろう？ ……

…後悔させてやる！」

卓巳はそう言うと、万里子のブラウスの胸元を一気に引き裂く。

万里子が無抵抗なのをいいことに、彼女の首筋から胸元まで唇で

なぞり、遠慮なしに赤い刻印を捺して廻った。

「……めて、たすけて」

だがその時、興奮した卓巳の耳に、震える万里子の声が聞こえたのだ。

「お、ねがい……やめて……たすけて。なぐらないで……おねがい。いう、とおりにします……ころさないで」

それはあまりに小さく、消え入りそうな細かい声で、万里子は助けを求めていた。怯えた虚ろな目で中空を見たまま、全身が小刻みに震えている。

さすがの卓巳も、咄嗟に我に返った。

「す、すまない。申し訳ない。こんなつもりじゃなかったんだ。本当にすまない。万里子、許してくれ万里子……万里子？」

だが、万里子に耳に卓巳の声は届いてはいなかった。

「……たすけて。たすけて……いや、こわい。たすけて……おとうさま、おかあさま……たすけて」

「万里子、万里子どうした？ 僕だ、万里子っ!？」

万里子の目は卓巳を見ておらず、意識が混濁している。

卓巳は、そんな彼女の両肩を掴み揺さぶった。その直後、万里子はハッとして卓巳の顔を見つめ……しだいに焦点の合った瞳から、一気に大粒の涙が吹き出したのだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい。でも、わざとじゃないの。ずっと、あなたのことを見ないようにしていたのに……。誘うつもりじゃな

かったの、笑って挨拶しただけなのに……あんな、あんなことされ
たくなかった。でも……わたしのせいだから……きつと知らない間
に男の人を誘う目をしてるんだわ。多分、今もそうなの……卓巳さ
んのこと誘おうとしたのよ」

万里子は泣きながら卓巳に謝るのだ。しかし、卓巳には万里子の
言葉の意味がまるで判らない。

「ま、万里子。何を……言ってるんだ？ 君は」

「でも、わざとじゃないの。信じて……お願い、軽蔑しないで。も
う見ません。二度と……あなたの目を見つめたりしないから……赦
して」

「何を……いや、なぜ君が謝るんだ！ 悪いのは僕だ。僕が君を押
し倒して乱暴しようとしたんだぞ。それなのに、なぜ君が謝る？
それに、僕の目を見ないって」

卓巳はようやく思い出した。結婚式の日、深く考えもせず口に
した言葉を。

『そんな目で見るなっ！ 男を誘うような……物欲しげな目をする
なっ！』

（傷つけた？ まさか、こんなにも傷つけていたのか？ 僕はなん
て愚かなことを）

体を震わせ謝り続ける万里子を見つめ、卓巳は本当の過ちに気付
いたのである。

第四章 誓い (16) 愛の告白

万里子は固く目を瞑り、卓巳を見ようとはしなかった。
そんな万里子の頬に卓巳の手が触れる。

(また、キスされるの?)

卓巳が好きだと……万里子がどんなに隠しても、隠し切れない想いが、自分を貶めているのかも知れない。万里子はソファに横たわったまま唇を噛み締めた。だが、どれほどの時間が過ぎても、卓巳の唇の感触はない。その代わり、自分の涙とは別に、何かが頬に落ちるのを感じたのだ。

……万里子はそつと目を開けた。

自分を見つめる卓巳の瞳から涙が零れていた。

「すまない……すまない……こんなに傷つけていたなんて知らなかった。本当は違うんだ。あの男を見て欲しくなかった。君がどれだけ、子供のことで苦しんで後悔しているか、判っているつもりだ。だからもう、奴には近づいて欲しくなかったんだ。奴に笑顔を見せるな、優しくするな、と言いたかっただけだ。君には僕がいる、僕のことだけ見ていて欲しいと……それだけだったんだ」

卓巳は強く、そして、万里子が苦しくないように気を使いながら抱き締めた。そしてゆっくり、卓巳に引かれるように体を起こす。

「ごめん……君を愛してる。それが言いたくて言えなくて……でも、愛してる、君だけだ。ずっと妻でいて欲しい、愛してるんだ」

「嘘……信じない。嘘よ……どうして? どうしてそんなことを言うの? 私が、言わせてるの……あなたのこと誘ってるの?」

「違う！ そうじゃない。あれは嘘だ。誘っていたのは君じゃない、僕だ。入籍後も式までは父親の元にいたいのを判っていて、毎日無理を言った。何度も君を誘い、口説いてたのは僕のほうだ。初めて君を見たときから、ずっと気になっていた。祖母の話聞いたとき、真っ先に浮かんだのが君の顔だった。その時はまだ気付いてなかったけど……君に恋して、結婚を望んだのは僕の本心だ。僕にとってこの結婚は偽りじゃない！ 君は僕のため一人の妻だ。もし君が二年後に……いや、ルールを破つたのだからすぐにここを出て行っても、それでも僕の妻は生涯、万里子だけだ」

万里子の中の愛は枯れたはずだった。

芽生えたばかりの卓巳への愛を、当の本人に引き千切られ、踏み躪られたのだ。息も絶え絶えな万里子の心に、卓巳の堰を切つたような愛の告白が降り注いだ。
萎れて枯れかけた茎が再び頭を擡げるように、万里子の目は卓巳を見つめる。

扉が開き、光が射し込む。それは、あの夜の月光より、確かな陽の光であった。

「ほん……とうに？ 本当に、信じてもいいの？ もし、本気なわけないって言われたら……わたしはもう、生きる自信がない」

その万里子の声に“愛”を感じる。

卓巳はここぞとばかり、考え得る限りの言葉を紡いだ。

「信じてくれ。もし今度、僕が嫉妬に狂って馬鹿な事を言ったら、君は問答無用でこの家を出てくれて構わない。泣いて謝っても許さ

なくていいよ。二度とあんな愚かなことは言わないし、さっきのよ
うな真似もしない。君が好きなあまりにおかしくなつてたんだ」

「でも……あの、秘書の中澤さんが」

「ああ、それは中澤だけじゃない。秘書を片っ端から食事に誘つた。
でもそれは、君の気を惹きたいためだった。ランチを取つた、それ
だけの関係だ」

「雪音さんは？ 部屋に呼びたいって……」

卓巳は、何でこんなに余計なことを言つたんだ、と内心舌打ちし
たい気分だった。

後悔と反省を籠めて、一つずつ丁寧に弁解して行く以外に手段は
ない。

「雪音くんのごことは部屋係として信頼している。でもそれだけなん
だ。彼女にも、他のメイドにも邪よこしまな思いは抱いだいてないし、行動にも
出てない。太一郎と同じだとは思わないで欲しい」

卓巳にはまだ、告白して赦しを請う問題があった。

どうすべきか思い悩む卓巳の耳に、万里子の穏やかな声が広がる。
「嬉しい……嬉しいです。でも……わたしはあなたの妻になれるよ
うな女じゃないんです。穢れた女だから……もう、誰とも結婚なん
て」

俯き、ポツポツと呟く万里子を見て、さすがの卓巳も自分の間違
いが結婚式当日の失言だけでないことに気付き始めたのだ。

「万里子……君の相手は香田俊介じゃないのか？ 本当に違つのか
？ ……君はひよつとして」

「俊介さんじゃありません！ それだけは誤解しないで下さい。そ
れだけは……わたしはどんなに愛していても、その方に奥様がけれ
ば諦めます。もし、誘われたとしても、ついて行くような真似だけ
は致しません。信じてください、俊介さんじゃありません。でも…
…どうしてそんな」

万里子にとつたら寝耳に水の話であろう。何がどうなればそこに俊介の名前が出てくるのか、訳が判らない。困惑する万里子に、卓巳は順を追って説明した。

「子供を墮ろすのに中絶同意書が必要なのは知ってるね」

「……はい。子供の父親か、保護者の同意が必要だと」

「では、その同意書に名前と判があれば……その男が父親だと思つて当然だろう？」

「え？　じゃあ同意書に俊介さんの名前が書いてあつたんですか！？」

万里子の瞳孔が一瞬で開いた。本気で驚く万里子に、卓巳のほうがか戸惑う。

「おいおい、君が出したんじゃないのか？　一体どうなってるんだ」「あれは忍が……全て自分が手配するから心配は要らないと言つてくれて……。じゃあ、忍が俊介さんの名前を？　そんな、なんてことを！　こんなことが人に知れたら、俊介さんにご迷惑が掛かるのに」

卓巳はいよいよ自分の見当違いを悟つた。更には最悪の予感まで当たりそうである。

だが、もしそうなら　万里子に対する暴言の数々を思い出し、卓巳は身震いした。

「万里子……確認しておきたい。君が身体を許したのは、自分の意思だったのか？」

「……それは……」

第四章 誓い (17) 愛される資格

万里子は否定も肯定もしなかった。ただ、辛そうに歯を食い縛り横を向く。

卓巳の耳に「……おねがい。いう、とおりにします……ころさないで」万里子の苦しげな声が響いた。

(なんてことだ！ 知らなかったで済む話じゃない！)

万里子は裂かれたブラウスを必死で合わせ、胸元を隠そうとした。卓巳はそれによく気付き、慌ててスーツの上着を脱いで彼女に掛ける。

「いや、いいよ。もういい。無理に言葉にする必要はないんだ。

万里子、よく聞いてくれ。僕はこの先、四年前のことは二度と口にしない。約束する。それと、さっきのような真似もしない。キスも君の許可なく突然したりはしない。君を泣かすような、怯えさせるような真似は決してしない。時間はたっぷりある。ゆっくりでいいんだ、僕との結婚を無期限にするかどうか、検討して欲しい。

俊介くんのことはずまなかった。今度会った時にはちゃんと謝罪する」

卓巳の手は遠慮がちに万里子の頬に触れる。

万里子は両手で、そんな卓巳の手を包み込むようにして、そっと唇を寄せ囁いた。

「卓巳さん、ごめんなさい。わたし、今は言えない……言いたくないの。ごめんなさい」

「言えないことなら僕にもある。多分、君も察してるとは思う。でも、まだ、僕の口からは言えない。もう少し時間が欲しい」

万里子に、千早物産が危機にある、と嘘をついたことも詫びなければならぬ。

もちろん、皐月の見せた報告書が偽物で、可能性がゼロに近い、という現実も伝える必要があるだろう。だが、それだけでなく……卓巳がそこまで追い詰められた理由も、話す必要があった。

卓巳の沈黙をどう捉えたのか、万里子は不安そうに言葉にする。

「わたし……自信がありません。あなたを愛する資格も、あなたに愛される資格もないのに……」

「万里子、人を愛するのにどんな資格が必要なんだ。過去において一点の誤ちあやまちもない心と体、そして、行いが必要なのか？ マイナスは誰にでもある。例えどんな告白を受けても君への気持ちは変わらない。君が人を殺したと言われても、実は宇宙そらから来たと言われても、だ。月に戻るといふなら、僕も付いて行くよ。もう嘘はつけないし、つきたくない。愛してるんだ」

卓巳の言葉に、実に二週間ぶりに万里子の瞳に炎が点った。彼女の熱い眼差しを受け、卓巳の胸は高鳴る。左右対称の大きな瞳、黒目の比率が人より少し多いようだ。そのせいか、ジツと真つ直ぐに見つめられると、心の奥まで覗かれた気分である。それが突然ふわっと緩み、花が咲いたように笑った。その一瞬で、卓巳の心は薔薇色に染まる。

「わたしはかぐや姫じゃありません。こんなに、愛してるって仰ったら、卓巳さんのせいになりますよ。あなたがわたしを愛してるって言ったのに、って」

「ああ、いいよ。泣いて結婚してくれって迫られたから結婚してあげたのよ、ってみんなに言えばいい」

「……あなたのこと見つめてもいいですか？」

「いいけど、その度に僕のキスを受けることになるかも知れないよ」
「人前でなければ……」
「じゃ、この部屋ならOKだな」
卓巳がそう言った少し後、二人の影が重なった。その影はしばらく一つのままで、離れることはなかったのだった。

くわくわくわくわく

素敵な夢を見た。

目が覚めて、万里子は咄嗟にそう思った。卓巳から愛を告白されて、抱き締められ、結婚式のすぐ後のようなキスをする夢。

そのせいだろうか、この家に来て初めてグッスリ眠った気がする。

(愛してる　なんて、卓巳さんがわたしに言う訳ないのに……でも)

「……夢でも聞けたから、しあわせ」
「何を？」
「だから、愛してるって」
「愛してるよ……万里子」

ハツとした時、万里子の目の前に壁があった。一瞬、壁際に置かれた実家のベッドを思い出したが、卓巳の寝室は広くて、ベッドは真ん中に置かれている。壁に付いているのは頭のほうだけで……。

壁は触れると温かかった。万里子が耳をあてると、規則的なリズムが少しずつ早くなって行く。

「大胆なのは嬉しいが、早く起きないと君も学校じゃないのかい？」
「た、た、たくみ、さん？」

「おはよう」

「お、おはようございます」

卓巳がそこにいた。

それは万里子のベッドで、卓巳は横になり左肘をついて横向きで万里子を見つめている。信じられないほど、甘やかな眼差しであった。パジャマを着ていたが、胸元が少しはだけている。どうやら、万里子が体に触れて、そうしてしまったようだ。

「あの、どうしてこちらに？ それに、昨夜のことは……夢じゃなかったんですか？」

愛してると言われ、生涯妻でいて欲しいと言われた。そして、万里子の過去を察して、二度と聞かないと誓ってくれたのだ。万里子にすれば、一生分のクリスマスと誕生日のプレゼントを貰った気分である。

「夢かどうか、試してみればいい？」

「どうやって？」

「こうすれば判るんじゃないかな」

万里子の唇に掠めるように卓巳の唇が触れた。

あまりに一瞬で、万里子は目を瞑ることすら忘れていた。

「いやじゃなかったか？ もう少し長くても大丈夫？」

組み伏せられた状態なのにまるで重くない。体が直接触れないように、と卓巳の気遣いであった。

「昨日もキス……しました、よね？」

「そうだね。もう少し、長いのを……たくさん、した気がする」

卓巳の言葉が途切れるのは、小鳥が啄ばむような短いキスを繰り返しているからだった。

「万里子、早く返事をくれないと約束を破りそうだ」

「か、会社は構わないんですか？ 時間は？」

遮光カーテンに囲まれて外の様子は判らないが、今はもう朝だと卓巳が言ったのだ。最早、卒業を待つだけになった万里子の大学より、卓巳の仕事のほうが重要度は格段に上であろう。

「私を誰だと思ってるんだ？」

「たつ卓巳さん……ですけど」

真面目に答えた万里子に、卓巳は信じられないほど心を許した笑顔を見せる。

「これでも社長なんだ。だから、定時に出勤しなくてもクビにはならない」

「あの……卓巳さんのキスなら平気です。昨日より、少しなが」

……長くても大丈夫です。

そこまで言葉にする前に、二人は初めて新婚らしい朝を迎えたのであった。

第四章 誓い (17) 愛される資格(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

ブレイキの壊れた感がある卓已ですが…当分、馬鹿なことはい
でくれるでしょう(笑)

閲覧注意まではまだ遠いなあ…でも、頑張ってもらいましょう!

第4章で前半戦終了です、後2〜3話かな?

引き続きよろしくお願い致します(平伏)

第四章 誓い (18) 初めてなんだ

「ああん、もう……そんなに乱暴にしないで」

「強いほうがいいんじゃないのか？」

「最初はそうなんですけど……今は……もう少し優しくして下さい」

「私は初めてなんだ。多少やり方が乱暴なのは勘弁して欲しいんだが？」

そんな卓巳の言葉に、万里子の拗ねたように口を尖らせた。

「慣れてるって言ったくせに」

「言ってないよ」

……二人は視線を絡ませる。

「やだ、もう卓巳さん。そうじゃなくて、もっと……奥まで」

「こっつ？ ……これくらいかい？」

卓巳の大きな手に万里子は両手を添え、一緒に動かし始めた。

「そう……そうっと一番奥まで入れて、それからゆっくり回して下さい」

「中々、体力を使うもんだな。知らなかった」

「腕、痛くなったら途中で止めてもいいですよ」

「いや、最後までやる」

真剣な顔で答える卓巳に、万里子はクスクス笑う。

「辛くなったら代わりますから」

そう言っつて、大粒のいちごを水で洗い、丁寧に拭いた後、二つに切っていくのだった。

今、二人がいるのは藤原家の調理場だ。

そこは一般家庭の台所とは違い、まさに調理場と言うほど大きかった。普段は、住込みのコック一名と通いのコック二名がここで働いている。皿洗いや簡単な盛り付け、食堂まで運ぶのはメイドの役

目だった。

これまで、卓巳が藤原家の調理場に入ったことは一度もない。

コックたちはワクワク、いや、ハラハラしながら卓巳と万里子の様子を見ているのだった。

今日は卓巳の三十回目の誕生日である。

「イチゴのケーキがいい」

と言ったのは卓巳本人だ。その言葉通り、万里子は作り始めたわけだが……そこに卓巳が乱入してきた。

休日出勤の予定がありながら、宗が迎えに来るまで手伝うと言つて聞かない。そこで、万里子は腕の疲れる生クリームのホイップを任せたのであった。

「最初はゆつくりと、泡立ってきたら、そつと、空気を中に含ませるように混ぜて下さい」

そんな万里子の指示に、

「千切りもみじん切りも出来る。味噌汁もダシから取るし、玉子焼きもキレイに焼けるんだ。でも……泡立て器で生クリームを泡立てたことはない」

万里子から借りたピーターラビットのエプロンをつけ、ブツブツ言いながらも嬉しそうな卓巳であった。

く*く*く*く*

「あの程度で良かったのか？ もう少ししたほうが……」

時間です、と迎えに来た宗は、卓巳のエプロン姿を見て三十秒は固まっていた。

卓巳は渋々スーツに着替え、万里子はそのまま玄関まで見送る。

でも、どうやらホイップの状態が気になるらしい。

「八分立てくらいでいいんです。デコレーション直前に角が立つくらいに仕上げますから。お帰りは早いんですね？」

「ああ……夕方には戻る」

「じゃあ仕上げて、大きめの口ウソクを三本用意して待ってますから」

「ああ……」

卓巳は何か言いたげに万里子を見つめる。その瞳には微妙な煌きがあり……。

それはいつも、キスをねだる卓巳の表情だった。でもここには、万里子以外に数人のメイドと執事の浮島がいる。玄関のすぐ外には秘書の宗や、運転手も待っているのだ。

「卓巳さん、ダメです。皆いるんですから」

万里子は気配を察し、鞆を渡しながら卓巳の傍で囁いた。

ところが、チラッと見上げた卓巳の瞳は万里子ではなく別の方向を見ている。しかも、かなり真剣な眼差しだ。そして、怒ったような声を上げたのである。

「あの、ツリーはなんだ！」

「えっ？」

家庭サイズからはみ出してはいるが、普通のクリスマスツリーである。雪音と一緒に、万里子が飾りつけた。天辺には天使が微笑みを湛えて見下ろしている。卓巳の怒る理由が判らず、全員まじまじとツリーを見つめた。その時。

卓巳は素早く万里子の唇を奪った。

呆然と立ち尽くす万里子に、

「誰も見てない……だろ？」

そう言ってサッと離れて行く。

「ああ……気のせいだ。すまない。では、行って来る」
晴れやかな顔で出勤する卓巳の背中を、首を傾げて見送る一同であつた。万里子以外は……。

リムジンの後部座席に並んで座り、宗は躊躇いつつも卓巳に話しかけた。

「数日前とは随分状況が変わつたようですね。社長」

「ああ、そうだな」

不意に卓巳は声のトーンを落とし、宗に尋ねた。

「……例のもの、オリジナルは入手したか？」

「はい」

短く答え、宗は角形二号の茶封筒を卓巳に手渡す。中を確認し、無言で肯く卓巳であつた。

くろくろくろくろくろく

二人の心が再び重なつたあの日から、数日が経過していた。重役出勤とはいえ、今日は日曜日である。しかも卓巳は三十年の人生で初めて、自分の為だけにケーキを焼き、誕生日を祝って貰えるのだ。出来る限り早く万里子の元に戻りたいが……どうしても、ハッキリさせておくことがあつた。

この日、卓巳は仕事を終え、万里子の実家を訪れた。

「すまないね。日曜の、こんな時間に押しかけてしまって」

「いえ、とんでもございません」

千早家の家政婦・香田忍は、実に、にこやかな顔で卓巳を迎えて

くれた。

「もう少し遅くなりましたら、旦那様もゴルフから戻られると思うのですが。ああ、そうですね！ 卓巳様、万里子様から伺いました。お誕生日おめでとございます」

忍は象嵌入りの天板に、音を立てずソーサーに乗せたコーヒーカップを置いた。液体の表面が微かに揺れるのみである。藤原家の若いメイドに頼むと、ソーサーにまでコーヒを入れて客に出してくれるのだ。行儀見習いにも寄越そうか、と卓巳は一瞬本気で考えた。

「ありがとうございます。万里子とは、よく連絡を取っているのかい？」

「お父様のご心配なのでしょう、二日に一度はお電話を掛けて来られます。ここ数日はとても弾んだお声で。今日はケーキを焼かれると仰ってましたけど」

卓巳は自分も生クリームのホイップを手伝ったことなど、面白おかしく話した。そして話は新婚旅行に移り……。

「ヨーロッパに行かれるとか……。長く行かれるんですか？」

「仕事もあるからね。合わせて二週間程度かな」

「まあ、こんな時まで仕事だなんて！ 卓巳様も大変ですわね。でもその間、万里子様はお独りで？」

「いや、なるべく同行するつもりだ。レセプションやらがほとんどだからね」

万里子が独りで放って置かれることはない、と判り、忍は途端にホツとしたような笑顔になる。

「それはようございましたわ！ 勝手の判らぬ外国で、しかも新婚旅行中にお独りなんて……寂しいですものね」

話が途切れた瞬間、卓巳はテーブルの上に茶封筒から抜き出した一枚の紙を置いた。

「忍さん、これを見て欲しいんだが……」

「まあ、何でございましょう」

瞬時に忍の顔色が変わった。

それは四年前、万里子に代わって忍が準備したという、人工中絶手術の同意書であった。

第四章 誓い (18) 初めてなんだ(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

ちよつとドキツとして貰えました？(笑)

こういうの書くの大好きです！

ホツとするシーンを挟んで、話はシリアスに向かいます。

では、引き続きよろしくお願い致しますm()m

第四章 誓い (19) 予感

忍は顔面蒼白になり、今にも倒れそうだ。

「これは……どうして……どうしてこんなものが……あなた様の手に」

「藤原グループの社長夫人になるんだ。調査して当然だろう。」

女医は君の友人らしいな。決して情報を漏らそうとはしなかった。

だが……看護師までは徹底出来なかったようだ。君にはカルテより、こちらのほうが思い出しやすいと思ってるね」

卓巳は、カルテが手に入らなかったことは言わなかった。

だが最後の一言で、忍には「全て知っている」と聞こえた。いや、そう思わせたのである。

「いつから……ご存知だったのでしょうか？ どうして、今になってこんな、ご結婚されてから……」

次第に感情が高ぶり始め、忍の声は大きくなる。

「卓巳様っ！ これは全てわたくしの責任でございます。お嬢様には一点の非もございません！ それだけは、どうか……どうか」

「待ってくれ。落ち着くんだ、忍さん。私はそんなことを」

「いいえ、全てわたくしの責任なのです。どんな処分も甘んじてお受け致します。この、年寄りの命でよろしければ、引き換えに致しますもお詫び申し上げます！ ですから……どうか、お嬢様だけは……」

忍はそのままキッチンにでも駆け込み、包丁を掴んで来そうな勢いである。目は血走り、只ならぬ形相だ。万里子と和解する前の卓巳なら、そこまでして息子の不始末を隠したいのか？ 母親もグルだったのか……そう思うところであろう。

「私の話を聞くんだ！ 墮胎のことは結婚を申し込む前に知っていた。それでも、私は万里子を妻にしたかった。彼女を愛してる。」

私が聞きたいのは、同意書にサインされた名前だ。このせいですと誤解していた。万里子は高校生の身で、妻子ある君の息子と関係を持ったのか、と」

「違いますっ！ お嬢様はそんな不倫の罪を犯すような、ふしだらな女性ではございません！ 俊介と……あや、あやまち、など犯されておりません。お嬢様は……お嬢様は」

忍はリビングの床に膝をつき、泣き崩れた。卓巳は忍を支えるとソファに座らせ、背中を擦って落ち着かせようとする。

「判っている。その件は解決済みだ。万里子は、君の息子と誓って間違いは犯していないと言った。私はそれを信じているし、その確認に来た訳じゃない」

「では……では、何でございましょう。わたくしに何を」
「同意書に書かれた名前を聞いて、彼女は驚いていた。これは君の一存だね」

「はい……全てわたくしの責任でございます。申し訳ございません。忍はそう言つと両手を膝に置き、額が手の甲に付くまで深々と頭を下げた。

「いや、責任の所在はどうでもいいんだ。私は、なぜ息子の名前を書いたのか、と聞いている。式での様子を見る限りじゃ、彼はこのことを知らないはずだ。万一、この書類が公になれば、彼は仕事も家族も失いかねない。君はそれは判っているのか？」

卓巳の判らないのはそこだった。いくら大事なお嬢様のためとはいえ、一人息子の将来に禍根かこんを残してまでこんな書類を書いたのか……。忍自身、正確には“有印私文書偽造”という罪を犯したことになる。逆に言えば、忍が罪に問われなければ、俊介の潔白は証明されないだろう。

だが、忍は強く唇を噛み締め、口を開けば「わたくしの責任でございませう」と言い、ひれ伏すように謝るだけだ。これでは埒が明かない。

卓巳は少し迷ったが、自分から口にすることにした。

「結婚前、軽井沢の別荘に誘ったことがある。だが、万里子が酷く嫌がってね、僕も無理強いはしなかった」

軽井沢の言葉に、忍の全身に緊張が走る。卓巳は続けて、

「この間、些細なことで喧嘩をしたんだ。思わず、彼女の腕を掴んで押し倒した。途端に万里子の目は虚ろになり『言う通りにするから、殺さないで』そう言った。もちろん暴力など振るってはいない」
固く唇を結び俯く忍に、卓巳は畳み掛けるように言った。

「忍さん……僕はこれまで、見当違いなヤキモチで万里子を傷つけた。だが、妊娠が暴力によるものなら、彼女が罪の意識に苛まれる必要などないだろう？ 万里子は、自分を穢れた女だと言ってる。僕に愛される資格がないと言って泣くんだ。彼女を救いたい。万里子には決して言わない。事実を教えて欲しい」

卓巳の真剣な眼差しに、忍はついに、重い口を開いたのだった。

「四年前の、夏でございます。軽井沢の別荘に二人組の男が侵入してきました。わたくしをどうにかすればよいのに、こんな年寄りには目もくれず……。わたくしは殴り倒され、気を失いました。気が付いて、急いでお嬢様をお探し致しました。お嬢様は、階段の踊り場に横たわっておいでで……。痛々しいほどのご出血で……。すぐに救急車を呼ぼうとしたのですが、お嬢様が」

「万里子が拒否したのか？」

「お父様に知られたくない、と。万里子様の身に起きた事をお知りになれば、仕事で同行できなかつたご自分を責められる。お父様に合わす顔がない、と仰って……。朝までずっと、シャワーで清めら

れて……。わたくしが、わたくしさえしつかりしていれば。あの男
たちを殺してでも、食い止めていれば、と。そう申し上げると、『
もう大丈夫だから』と微笑まれました。お辛いでしょくに、気を遣
われて」

（ああ、そうだ。自分の苦しみより、人を気遣う女性なんだ、万里
子は）

忍の言葉に卓巳は胸が苦しくなる。

「墮胎の手術を受けたのは十月……随分遅くないか？ もっと早く
判るものじゃないのか？」

卓巳の問いに忍は涙を拭いながら答えた。

「九月に、お嬢様にお尋ね致しました。でも、大丈夫だとお答えで
……。あの話をするだけで、お辛そうで。とても、執拗に問い質す
ような真似は出来ませんでした。でも、わたくしがそうしていたら
……。そうすれば、お身体に傷が残ることもなかったはずでしたのに。
それが悔やまれません」

（……身体に傷？ 傷跡か？）

医者を抱き込めなかったせいで、カルテは手に入れられなかった。
そのため、万里子の後遺症は卓巳には初耳だ。聞いてはいけないこ
とのような気もした、だが……。卓巳は悪いと思いつつ、忍を誘導尋
問に掛けたのだった。

「あれは君のせいではない……後遺症は医者者の責任だ」

「いいえっ！ 墮胎可能なギリギリの週数でした。もっと大きな病
院で受ければよかったです。でも、急ぐあまり……。それが……
もう、お子様は望めないなんて」

第四章 誓い (19) 予感(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

明日で4章はラスト、ここで前半戦終了となります。

「まだ半分かいつ」という声が聞こえた気が…(苦笑)

ラブエッチに突入するまで頑張ります！ ということで、卓巳の復活(?)に応援よろしくお願い致しますm)——(m

第四章 誓い (20) 命の限り

卓巳はショックを押し殺した。

忍に「自分が卓巳にばらしてしまった」と悟られるわけにはいかない。コーヒーカップを手に取り、冷めた中身を一口流し込んでから声を出した。

「万里子は、なんと言っていた？」

「望んだ結果ではないにせよ、我が子を殺した罰だ、と。あれから四年間、お嬢様は夏でも長袖を羽織られ、泳ぎにも行かれなくなりました。軽井沢など……別荘の話題が上がるだけで怯えておられません。胸のペンダントに子供の遺灰を入れられ、幼い子を見るたび、隠れて涙をこぼされておいででした。誰も好きにはならない、結婚もしない、と。息子の結婚式に出られた時には……ご自分もウエディングドレスが着たいと、ケーキは自分で作りたいと仰って。子供も、旦那様が寂しくないように、孫はもういらなくなって言うまで産むつもりよって……嬉しそうに話しておいででしたのに」

ずっと胸に秘めていたのだらう……忍は堰を切ったように泣きながら語り続けた。

「何もご存じない旦那様が、将来のお話をされるたび、声を殺して泣いておいででした。あの時、殺されていればよかった、せめて、子供と一緒に死んでいれば罪を犯さずにすんだのに、と。……どうしてでしょう？ どうしてお嬢様がこんな目に遭わなければならぬのでしょうか！？ 何一つあやまちも犯さず、清く正しく生きて来られた万里子様がなぜ、こんな……」

忍は白いエプロンの裾を引き千切る勢いで握り締めた。必死で鳴

咽を堪えようとする。

卓巳は少し時間を空けてから、忍に尋ねた。

「なぜ、息子の名前を？ 偽名でもよかったですらう」

「失礼ながら、俊介はお嬢様にとって初恋の相手だと思えます。それに気付いて、大学卒業後は千早家を出るように言いつけました。万里子様は初等科を卒業されたばかりでしたが、数年後には美しく成長されるのが判っておりましてから。息子を信用しないではなかったのですが、どんな間違いが起らないとも限りません。私の知る限り、お嬢様が淡いお心を抱かれたのはそれきりでした。中学・高校と全く殿方のことなど口にもされず。恋する喜びも知らず、悪魔のような連中に……それだけでも、殺されるより辛いことなのです。なのに、神は非情にも、何の罪もないお嬢様に墮胎の苦しみを与えて、母になる喜びも奪ってしまわれた。手術を受けねばならないと知った時、お嬢様は半狂乱でございました。父親の名も知らずに逝くこの子が可哀想だ、と泣かれ……せめて、気休めにでもなれば、と俊介の名を書き込んでお見せ致しました。おそらく、覚えてはおられぬでしょう」

「息子の立場は考えなかったのか？」

普通なら、雇い主の娘より我が子を大事に思うはずだ。それを……。

卓巳の問いに、忍は静かに首を振った。目も鼻も真っ赤になり、頬に涙の跡は残っているが、達観したような表情だ。

「万に一つも、明らかになったときは、お嬢様は生きてはおられないかも知れません。その時は、わたくしが無断で息子の名を書いたと告白して、お供しようと思っております」

「なぜ、そこまで万里子のことを……」

「四つの時からずっと母代わりで面倒を見させていただきました。お腹を痛めた我が子同然でございます。その万里子様が……あんな

……わたくしさえ、あの連中と刺し違えていれば……」

忍は言葉にするだけで憎しみが滾るようだ。ギリギリと奥歯を噛み締める。

だが 突如床に座り込み、卓巳の膝に縋った。

「卓巳様！ 事件以来、どこか悟り切ったように生きて来られたお嬢様が、卓巳様とお戻りになられた朝だけは違いました。わたくしに、四年前のことは決して話さないで欲しい、と仰られました。少しの間でも妻になりたい、と。お願いでございます。どうかお嬢様にこれ以上の悲しみは……どうか」

忍は再び肩を震わせ、咽び泣いた。

「判っている。万里子のことは私が守る。生涯かけて、彼女の心の傷を癒して見せるよ」

そう言うと、卓巳は忍の横に膝をつき、テーブルの上に手を伸ばした。卓巳が掴んだのは、宗に命じて手に入れた同意書の原本だ。彼はそれをギュツと捻り、飾りに置かれた大理石のライターで火をつけた。薄い一枚の紙は、灰皿の上であっという間に燃え広がった。

「万里子の夫は私だけだ。例え過去においても、彼女の子供の父親は私だ。気休めでも、君の息子を彼女の人生に関わらせたくない。……くだらない嫉妬だな。それから、私は万里子が穢されたとは思っていないし、彼女には一つの傷もない。ただ……子供を失ったのは事実だ。仕方がなかった、で諦めきれるものではないと思っっている。彼女が墮ろしたのは私の子だ。罪は共に背負いたい。共に詫びて、二人で生きて行こうと思っている」

万里子の苦しみに全ての責任を感じ、一人息子の将来を脅かしてまで、偽造の罪を犯した忍。

罪の証は真っ黒に燃え尽き、灰となった。

忍が背負った十字架を、卓巳が引き受けたのである。それ以上に、

彼は万里子の十字架すら背負うつもりでいた。

父には「お前さえ出来なければ」と罵られ、母にすら「墮ろせばよかった」と言われた命である。万里子はそんな卓巳を『騎士のよくな強い精神力を持った誇り高い方』だと称してくれた。

それに、卓巳は寧ろホツとしていたのだ。万里子が子供を望めないなら、自分のような不能者でも許してもらえるかもしれない。もし、身体の傷が癒えた時は、彼女が望めば人工授精の方法もある。

今まで、人に弱みは見せずにいた。弱点を晒せば、そこを狙われ、喰い殺されるからだ。だが、卓巳はこのとき、万里子に全てを告白する決意を固めた。

「忍さん、私は万里子に、四年前のことは二度と口にしないと約束した。いつか、彼女の口から話してくれたら聞こうと思っている。

それまで、私は真実を知らない。だが、彼女を軽井沢には連れて行かないし、家族計画も口にはしない。もし、今日私が訪ねたことを彼女が知ったら、初恋相手に対抗心を燃やして帰ったとだけ話してくれ。いいね」

「はい。はい、判りました、ありがとうございます、卓巳様。このご恩は死んでも忘れません。どうか、どうかお嬢様をよろしくお願ひいたします」

万里子を幸せにする、と約束して、卓巳は千早邸を後にした。

何度も何度も頭を下げ、涙ながらに礼をいう忍を見て　母を亡くしても、母代わりの人にここまで愛される万里子を、羨ましくも誇りに思う卓巳だった。

第四章 誓い (20) 命の限り(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

卓巳っていいヤツだ…(泣)() 自分で言う??()

第4章はここで終了です。

明日・明後日とクリスマス番外編です。

甘くなるかどうかは…微妙…頑張ります(苦笑)()

では、引き続きよろしくお願い致しますm()——() m

番外編「プールサイドで愛を教えて（前編）」（前書き）

本編と繋がって見えますが、諸事情でフライングしております）
^^^；）

12月20日前後のお話かと……

番外編「プールサイドで愛を教えて（前編）」

藤原グループの所有するホテル……卓巳が結婚前に、毎夜、万里子連れ込んだホテルだ。

多少人聞きは悪いが、悪く聞こえるようにしたのは卓巳である。ホテルの従業員の中でも相当な噂であった。が、今回はそれを遙かに上回ることを卓巳はやってくれた。

「プールを、ですか？」

秘書の宗は絶句した。

「そつだ。それから、リストの物を全部用意しておいてくれ」

「いえ、でも……平日の昼間でも少し難しいかと。スクールもありますし、イベントで貸切にするケースはありますが、最低でも三カ月前には申請しませんと。社長、一般のプールとは違い、元々人も少なめです。とくに貸切にせずとも」

「ダメだ。貸切だ。何も客を追い出せとは言っていない。サウナでも営業は夜十時までだろう。その後でいい。プールサイドに人は不要だ。今週中に開けるように言っておけ」

宗は諦めながら、リストを持ち上げる。彼は首をひねった。

「あの、社長……これは？ いったい何をされるつもりなんでしょうか？」

「宗 私は必要な物を購入するのに、いつからお前の許可が必要になったんだ？」

「失礼致しました。すぐに用意させます」

（また、何を考え出したことやら……かすみ草の二の舞にならなきやいいが）

リストを眺めながら、ため息をつく宗であった。

くわくわくわくわく

クリスマス直前、いつもなら大掃除に忙しくしている時期だ。しかし、今年はその必要がなく……。万里子は目下、新婚旅行の順備に奔走していた。

そんなとき、不意に卓巳にデートに誘われたのである。

「スイートでお食事ですか？」

「それもいいが……。たまには店で食べてもいいだろう？ フレンチの個室を予約しておいた」

「でも……。クリスマスは先だし。どうして？」

「夫婦がデートするのに理由があるのかい？」

そう言っつて卓巳はご機嫌である。

万里子にはさっぱり判らなかつたが……

「いえ、卓巳さんと一緒なら、わたしは何処でもお供いたします」

ニコツと笑つて答える万里子を見て、更にご機嫌になる卓巳であった。

食事を終え、自宅には戻らずスイートで寛いでいると、ホテルの従業員がやつて来た。

「お待たせ致しました、藤原様。準備が整いました。いつでもお越し頂けますよう、案内役を申し付かつて参りました」

「ああ、けっこうだ。じゃあ、行こうか、万里子」

「……！？」

そして万里子が連れて行かれたのが、タワーの三階にある『スパ』であった。

さつき食事をした実質六階にあたるロビー階の三つ下だ。感覚的には、地下の印象である。トレーニングジムや温水プールにサウナ、なぜか上の四階は外になり、テニスコートやゴルフの練習場まであった。

結婚前、卓巳にこのスパに誘われた。でもその時、万里子は断わってしまふ。そして、卓巳も二度と誘うことはなく……。

「卓巳さん、わたし、プールはちょっと」

「心配はいらない」

「え？ あの」

「さあ、おいで」

ドアを開け、万里子は中に引つ張り込まれたのだった。

館内は静かだった。人の気配がない。

「あの、誰もいないんですか？」

「ああ。プールは九時半、サウナも十時で締まるんだ」

「もう十時回ってますよ、入ってきていいんですか？」

驚いて引き返そうとする万里子を卓巳は引き止めた。

「君と……泳ぎたい」

「あ、わたし、水着になるのは」

肩を出すのも結婚式では恥ずかしかった。それが水着となると……

…万里子は怖いのだ。

「それも問題ない。さあ、見てみなさい」

プールの横にある女性用の更衣室に入った瞬間、万里子は目を丸くした。

壁に掛かっていたのは水着だ。色もタイプも様々な、それでいて、サイズは全て万里子ピッタリに揃えてある。百着近くはあるうかという水着に、万里子は開いた口が塞がらない。

一番、万里子の目を惹いたのは、なんと、ダイビング用の青いウエットスーツである。もちろん、他にも見るからに競泳用と判る真っ黒のロングスータイプもあった。しかし、インパクトはウエットスーツの比じゃない。

この一流ホテルのスパで、ウエットスーツを着て泳ぐ人間など、過去一人もいなかったらう。そう思うと、万里子の中に違う種類の恥ずかしさが込み上げてくる。

「あの、卓巳さん、これって？」

「従業員も誰も来ない。僕たちだけの貸切だ。深夜の十二時まで借りられることになっている。万里子、僕は君の水着姿が見てみたい！」

「ウエットスーツでも構わないんですか？」

「ああ、構わない！ それで君と一緒に入ってくれるなら。だが、どうしてもイヤだと言うなら、無理強いはいしないよ」

と言いつつ、卓巳の瞳は一步も譲らない懇願モードだ。

「あの、これって……卓巳さんが用意されたんですか？」

「え？ ああ、そうだ。カタログを集めて僕が選んだ。だが、実際の注文は宗に頼んだ」

褒めてくれと言わんばかりの……少年のように屈託のない卓巳の笑顔だ。万里子はどうもそれに弱い。

迷いながらも恐る恐る尋ねてみる。

「ちなみに……参考までに、ですけど。卓巳さんが、一番気に入ってるのって、どれですか？」

万里子の気持ちが始きつつあるのに気付き、卓巳の声は跳ね上がった。

「それは……この白が基調のモノトーンビキニだ！ やはり、白は君にピッタリだと思うんだ。二段フリルも胸元のリボンも最高に可愛い！ 縁取りの黒がまたセクシーで……」

布地の量は、ウェットスーツの十分の一もないのではなかるうか？

困ったような万里子の表情に卓巳はハッと気付いた。

「す、すまない。そういつつもりじゃ」

「い、いえ……確かに素敵ですね。でも、他にはどれが」
話を変えるように、万里子は慌てて言った。

今度は、さすがの卓巳も反省したのか咳払いをして、落ち着いて話し始めた。……はずだったのだが。

「そうだな……君にはピンクも似合うと思う。この花柄のワンピースもキュートなんだが。やっぱりビキニだ！ 見てくれこの光沢！ ピンク一色のシンプルなデザインで、上下とも紐で結ぶタイプなんだ。フリルは一段なんだが、このひらひら感がなんと……」

どうやら卓巳は、ビキニとフリルが好きらしい……と言うことは良く判った。

頬を赤くして熱弁を振るっていた卓巳だが、万里子の反応に、今度は顔面蒼白になっている。

万里子は首が折れそうなほど俯き、そして、卓巳に言った。

「本当に、誰もいないんですね？」

「あ、ああ。誰もいない。僕だけだ。あ、いや、僕もないほうがいいとか言われたら……」

急にシヨボンとするので万里子は慌てて付け足した。

「そんなこと、言ってません。……判りました。どれを着るかは自分で決めていいですか？」

「ああ、もちろんだよ！ 僕は、君と泳げたらそれでいいんだ」

くくくくくくく

カタン、とドアが開き、スラリと伸びた足が見えた。

万里子は、茶色掛かった髪を一本の三つ編みにしている。そして、バスタオルで全身を包み込み、せっかくの水着姿を覆い隠していた。

「キレイな足だ」

「そんなこと……ないです」

「キスしていいかい？」

「ダメって言ったら、止めてくれますか？」

一歩ずつ近づく卓巳だが、もう、これ以上前に進めない位置まで来ていた。

卓巳は万里子を見下ろしながら答える。

「ああ、もちろんだ。でも、もう一度頼んでみるつもりだよ」

「じゃ、頼んでみてください……」

「キスしていい？」

「……はい」

二人の、唇の距離はゼロになり……。

番外編「プールサイドで愛を教えて（前編）」（後書き）

御堂です。ご覧頂きありがとうございます！

ここで問題です！万里子を選んだ水着はなんでしょう？

- (1) やっぱり卓巳のお気に入りで、モノトーンフリルビキニ！
- (2) これも卓巳オススメ、ピンクのフリル紐ビキニ！
- (3) ちょっと控えめ、ピンクの花柄ワンピース！
- (4) これならいいかな？競泳用の黒のロングスリーブタイプ！
- (5) 完璧ガード、ダイビング用青のウェットスーツ！
- (6) プールサイドで愛のレッスン？バスタオルの下は何もなし！

答えは明日の後編で（^^）ノ

この後も番外編で、「愛を待つ桜」の聡&夏海と共演です。（アンケート1・2記念と言つこと…）

では、引き続き、よろしくお願い致しますm（――）m

番外編「プールサイドで愛を教えて（後編）」

万里子のために、と極力照明を落してもらった。

有名なライトアップデザインナーによる間接照明は、ことさら、二人のキスを盛り上げてくれる。万里子を強く抱き締めすぎないように気遣い……強弱をつけて、何度も何度も唇を押し当て吸い上げる。そのまま頬に口づけ、左の耳までの道筋を舌でなぞった。そして、みみたぶ耳朶に噛み付きたい欲求を抑え、舌先で軽く舐め上げる。

「きゃ！ やあん」

万里子が身を竦め、腰を引いた瞬間……バスタオルが落ちたのだ。つた。

「……まりこ……」

卓巳の声が上ずっている。

「どうして……これを……」

「だって、卓巳さんが一番好きって言ったから」

万里子が身に付けていたのは、白いビキニであった。

卓巳のために、万里子がかつてないほど肌を露出している。官能的に見えてもおおかしくない水着であるのに、万里子が着るとまるで修道服のように清楚に思えた。

陽射しから隠すことが多いせいだろうか、万里子は象牙のように艶やかな肌をしている。折れそうなほど括れた腰が、惜しげもなく卓巳の目に晒された。しかも、独占状態だ。

卓巳は呼吸も忘れ、瞬きもせずに見つめた。

「卓巳さん……あんまり見ないでください」

「ああ、ダメだ、動かないでくれ……まだ目に焼き付けただけなん

だ。今、長期記憶に移動させてる。君の姿を死んでも忘れたくない」「だ、だめです。こ、これは嘘ですからっ!」「……………嘘?」

万里子は胸元を押さえながら恥ずかしそうに言った。

「わたし、こんな谷間なんて出来ません。その……………卓巳さんが優秀な水着を用意してくださったので、それだけなんです。だから……………」

「水着にも、優秀とそうでないのがあるのか?」「あ、あります。以前は下着が主にそうでしたけど、最近は水着も随分優秀みたいです」

「そうなのか……………万里子、触って確かめてみたい」「え!?!」

「い、いや、妙は意味ではなくて、どういう物なのか一度触ってみたい、というか……………」

卓巳はしどろもどろになりつつも、更なる期待を籠めて、万里子をジッと見つめる。

だが万里子は……………、

「た、たくみ、さん……………あの、いい加減泳ぎませんか?」

「およぐ?」

どうやら、卓巳はここが温水プールであることも、「一緒に泳ぎたい!」と万里子を誘ったことも、完全に忘れてるようだ。

海やプールに行けなくなった万里子の為に、彼女が心置きなく楽しめる場所を提供するつもりだった。その為に、万里子が着られる水着を探したはずなのだ。それが、気付けば目的が万里子の水着姿を見たいが為になっている。

反省した卓巳は万里子をプールに誘った。

くくくくくくく

水温は三十一、長さ十五メートル、幅五メートルほどで、距離を泳ぐことを目的として作られたプールではない。都会の中のオアシス、まさにそんな感じだ。

すぐ横には三十九 に設定されたジャグジーがあり、体を温めてから上がれるようになってる。

卓巳の場合、会社上の付き合いもあり、あちこちのジムやスパの会員となっていた。だが、ジムのほうは使うが、年に一度も泳ぐことはない人間だ。第一、卓巳の水着も宗が調達したものである。

「大人のデートをコンセプトに、社長の水着も決めておきました」と言われ……自分は何でも良かったのに、と思いつつ、用意されたモノを目にして啞然とする。

色は黒！ それもビキニタイプだ！

「私はホストでも芸能人でもないぞ」
そんな卓巳のクレームに、

「何を言うんです！ 社長ご自身が肌を隠されたら、万里子様も出し難いじゃないですか。まずはご自分が思い切るべきです！」

本気半分、冗談半分の宗の忠告を、卓巳は真に受けたのである。

（卓巳さんて……着痩せするほうなんだわ）

一方、万里子のほうも卓巳の裸に近い格好を目にして、驚いていた。

いきなり触りたいなどと言われて戸惑ったが……手を引かれ、プールの中に入った時は二人きりの空間と、微かに触れる卓巳の肌の温かさに安堵していた。

しかも、今日の卓巳は目のやり場に困る。

卓巳の体の様々な状況を考えた時、

(あんなに立派そうなのに……)

思わず胸に浮かんだ言葉を、慌てて打ち消す万里子であった。

「……りこ。万里子？ どうしたんだい？」

「い、いえ。なんでも」

「気分が悪いなら、上がるうか？」

まさか卓巳に見惚れて、とんでもない部分を想像していたとも言えず、万里子は黙り込む。

すると、卓巳は何を思ったのか、水中で万里子を横抱きにした。

「きゃっ！」

俗に言う“お姫様抱っこ”である。

「無理はダメだ。プールは随分久しぶりなんだろう？ 今日のもう上がるう」

「でも、まだ三十分も経ってませんよ」

「君が気に入ってくれたなら、いつでも貸切にする。なんなら、ロンドンからオーストラリアに直行してもいい。ゴールドコーストに別荘とプライベートビーチがある。来年の夏はエーゲ海に行こう。島をひとつ所有しているから、そこで泳げば誰にも見られない」

卓巳は嬉しそうに語りながら、プールサイドのチェアに万里子を座らせようとした。

プールを出ても、卓巳は少しも重い素振りを見せない。万里子は

そんな卓巳の首に思わず手を回して抱きついていた。

「卓巳さん……大好き」

「ま、りこ？」

万里子は卓巳の頬に軽くキスしたのだ。

それがチェアーに下ろそうとした瞬間だったので、卓巳は見事にバランスを崩した。

万里子からキスして貰えたのは初めてであった。

一瞬で、卓巳の脳内回線はショートし、煙が噴き出している。

「うわっ」

「きゃ」

チェアーに下ろすつもりが引つ掛かって、チェアーを倒し、二人ともプールサイドに転がった。

だが、卓巳はすっかり万里子を抱き締めたまま、放さない。

「万里子……今、僕にキスしたのか？」

「お嫌でした？ ごめんなさい、わたし、思わず」

「もう一度、お願い出来るかな？ あの、出来れば唇に」

「あの、でも重いでしょう？ すぐに下りますから」

「重くないっ！ このままにいるんだ。いや、いてくれ」

プールサイドに座り込んだ卓巳の上に、乗ったような体勢である。万里子は卓巳をお尻に敷いているようで、どうも居心地が悪い。だが、卓巳はやけに嬉しそうで、万里子を放そうとしない。

「卓巳さん……」

今度は唇にスツと触れた瞬間　卓巳は万里子を押し倒した。

「たっ、たくみ、さん？」

卓巳の髪から水滴が落ちてくる。万里子はそれが気になって、卓巳の髪に手を伸ばしたのだ。だがそれが、卓巳には万里子から抱きつき、キスをねだる仕草に思えて。

「万里子、愛してる！」

プールサイドの床に寝転がり、二人は初めてとも言つべき、唾液が絡むようなキスをした。

卓巳の本能がゴーサインを出し、万里子の薄い布切れの中に手を滑り込ませた

くくくくくくくく

パツ！！ と二人の上から全開になった直接照明が降り注ぐ。

万里子は驚いて卓巳の胸に顔を隠した。

「社長！ あなたは一体何を考えているんですか！？」

それは宗の声であった。一瞬、邪魔をするな、と叫びそうになった卓巳に、

「お忘れのようなのでお伝えしておきますが、ここは公共の場所で、安全管理のためビデオカメラが設置されています。プールサイドを人払いされても、全部筒抜けな上、防犯のため録画までされており、思いついていただけましたか？」

宗は、スパの管理事務所から「社長がとんでもないことをしている」と聞かされ、飛んできたのだった。

「あ………」

「じゃ、じゃあ……皆さんに見られていたんですね………」

卓巳の腕の中で万里子が呟いた。

「あ、いや、そんなつもりじゃなかったんだ」

「二人きりだつて仰つたくせに」

「ご、ごめん。済まない……じゃ、続きは部屋に戻つて」

そう言った瞬間、万里子の平手打ちが卓巳の左頬にヒットした。小気味悪い音がスパにこだまする。

「卓巳さんの無神経！ バカッ！ もう大嫌い！」

「ま、まりこ……。宗っ！ お前ももう少し遣り様があるだろう！」

宗は両手を上げ知らん顔だ。

「万里子！ 万里子待ってくれ、済まなかった。今度は必ず」

そんなことを叫びながら卓巳は万里子を追いかけて、更衣室に飛び込み。

宗の耳に再び派手な音が聞こえた。

「やれやれ」

深いため息をつく社長秘書であった。

番外編「プールサイドで愛を教えて（後編）」（後書き）

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

正解は（１）でした！

正解者多し！というか、バレバレ？（苦笑）でも、ほとんどの方が（６）を見たいって…おいおい（^^;）

若干、羽目を外した展開ですが…オチをつけてしまうのが私の性格なもので、すみません…orz

番外編はお遊びだと思ってください、本編とは設定も少しずれてます。

だってこの頃にはもう本編では…（笑）

ということ、明日は聡と夏海も登場して番外編が続きます。今日よりは真面目だと思います…多分。

では、引き続きよろしく願い致しますm（　　）m

番外編「君の心に咲いた花（前編）」（前書き）

アンケートにご協力いただきまして、ありがとうございます（礼）

1位2位に選んで頂きましたカップルで共演です。

聡&夏海も結婚丸三年を過ぎました。

少しでも楽しんでいただけたら嬉しいですm（）m

番外編「君の心に咲いた花（前編）」

「自由が丘ですか？」

「ああ、大学の先輩なんだ。企業法専門の弁護士でね。今、ロンドン支社が社運を賭けたプロジェクトを仕掛けている。その件で色々相談に乗ってもらってるんだ」

再び心が通い合って、二週間遅れの新婚生活をスタートさせた二人は、久しぶりに卓巳の運転でBMWを走らせている。助手席にはもちろん万里子に乗せて。

行き先は自由が丘にある弁護士先生のお宅だという。卓巳の実務修習で世話になった方で、ハーバードのロー・スクールLLMコースを首席で卒業した人物である。

「一条先生のおかげで企業法に興味を持った。彼はHBS……ハーバードのビジネススクールも出てる変わり者だね」

万里子は卓巳の嬉しそうな声に驚いている。そんな風に人のことを話すのは珍しいからだ。悪意に満ちた人間に囲まれ、卓巳は孤独に生きてきた。でも、彼にも親しい先輩がいたのだと、ホッとする万里子であった。

「でも……そんなに親しい方でしたら、結婚式に出て頂きたかったですね」

「ああ、招待はしたんだが、夫人の体調がすぐれないとかでね。未就学の子供が二人いると聞いている」

「まあ、それなのにお邪魔しても構わないんでしょうか？」

「もう大丈夫だと言っていた。第一、向こうからの招待なんだ。伺わないほうが失礼だろう？」

「でも、こんな格好で？」

「なぜかドレスコードがデニムになってるんだ……僕のせいじゃない」

卓巳はブラックデニムのジーンズだった。上はハイネックの黒いセーターと白いジャケット。ネクタイのない卓巳は珍しい。

一方、万里子もデニム地のロングスカートである。さりげなくお揃いのセーターを着ているので、少し恥ずかしいくらいだ。

でも卓巳が、

「一度、着てみたかったんだ」

そう言っただけで買ったのである。

嬉しそうに、期待を籠めて見つめる卓巳に断わることは出来ず……

……。万里子はパールツクを了承してしまったのだった。

今から行くご夫妻が、このことに気付きませんように。と祈る万里子であった。

くわくわくわくわく

「おいおい。藤原……お前、えらい変わり様だな。その歳でパールツクか」

万里子の願いは虚しく、一発で気付かれてしまった。

二人を出迎えてくれたのはこの家の主、一条聡である。卓巳から聞いた限りでは、四十代前半とのことだが……万里子の目には三代半ばと言ってもいいほど若々しく、笑顔の温かい男性だった。背は卓巳より高く、弁護士と言うよりアスリートのような体躯だ。インディゴブルーのジーンズに白いセーターがとても爽やかに映る。

「八年ほど前、僕が世話になった頃はもの凄い仕事をこなしていたが……。三年前に今の奥さんと結婚して、あの人も変わったよ」

来る途中、車の中で卓巳はそんな風に言っていた。今の、ということ、以前は別の女性と結婚されていたのかも知れない。万里子はそんな風に考えていた。

「はじめてお目に掛かります。この度はお招き頂きありがとうございます。ありがとうございました。ちは……いえ、藤原万里子と申します。その節は、たく……主人が大変お世話になりました」

藤原姓を名乗り、卓巳を“主人”と呼ぶことにまだ慣れてないの、かなり恥ずかしい。万里子は支えながら必死で挨拶をした。

「ようこそ、我が家へ。結婚おめでとう、式には出席出来なくて済まなかった。でも、色々聞いてるよ。熱烈なウエディングキスとか」

挙式直後、窓を全開のまま控え室でキスしていたのを大勢に見られたのだ。あの「氷のプリンス・藤原卓巳が!？」と列席者のみならず、経済界で話題になっているという。

でも、面と向かって言われると……万里子は赤面した。

「もう、あなただったら！ 男同士なら冗談でも、奥様には失礼よ。……申し訳ありません、ようこそお越し下さいました。一条の家内で夏海と申します。この度はご結婚おめでとうございます」

そう言っってニッコリと微笑み、軽く会釈しながら近づいてきたのは一条の妻・夏海だ。卓巳と近い年齢だと聞いている。アイボリーの大きめのセーターを着て、下は黒のスパッツを穿いていた。白いエプロンがどうやらデニム地らしい。そして、お腹の辺りがふっくらとしている。それは……。

「あの、お子さんですか？」

「ええ。六ヶ月目なの。悪阻が長引いて……今月に入ってようやく治まってくれたのよ」

「それは……おめでとうございます」

万里子の声がわざとらしく弾む。気持ちは一オクターブほど落ちて
ているのが明らかだった。

「一条先生。結婚三年……四年目で、新婚気分なのは判りますが、
今からだと還暦を過ぎてもお子さんは成人してないでしょう？ 行
き当たりばったりはいいい加減にして、少しはきちんと家族計画をさ
れたらいかがです？」

「た、卓巳さんっ！」

万里子は困惑した。卓巳の発言が万里子のためであろう、と見当
はついたが、それを説明することは出来ない。もし、ここで決裂す
るようなことになったら、卓巳の仕事にも影響が出るはずである。

だが一条も、毒舌家である卓巳の扱いは慣れてるようだ。

「判った、判った。お説は最もだが、お互いに嫁さんを困らせるの
は止そう。今日は息子の六歳の誕生日なんだ。良かったら、一
緒に祝ってやって欲しくてね」

卓巳を軽く往なし、一条は万里子に向かって話しかける。

「まあ、すみません。知らなかったもので、何もバースデープレゼ
ントを持って来ませんでした」

「そう思って伝えなかつたんだ。家内の教育方針でね、モノは必要
以上与えない、ということにしている。ありがたみの判らない人間に
はなつて欲しくないからね」

その時、奥から小学生かと思える少年と、まだまだあどけなく、
ミルクの匂いがしそうな少女が姿を見せた。二人は手を繋いだまま
駆けて来て、同時に一条に抱きついた。

「お父さん……お客様なの？」

「おとーたん……おかくさまなの？」

来春、小学校に入学するという長男・悠ちゆうと、ちよつどその頃には
三歳の誕生日を迎える長女・桜ひんだ、と紹介される。

「いらっしゃいませ」

「いらつさいませ！」

礼儀正しくおとなしそうな兄が会釈すると、妹もぴよこんと頭を下げた。何でも兄の真似をしたい歳頃なのだろう。二人とも、万里子が驚くほど父親に似ているのだった。

くくくくくくくくく

食事の後、万里子は子供たちに、お誕生日プレゼントの代わりに、それぞれ二冊ずつ絵本を読んで聞かせた。そして、四冊目が終ることには、二人ともウトウトし始める。

抱かかえ、二階の子供部屋に行こうとした妻に一条は、

「君はダメだ。万ーのことがあつたらどうするんだ。私が連れて上がるから」

「じゃあ、桜は私が……」

「ダメだと言ってる。藤原、フォークナーの件で見せたい書類がある。二階の書斎に来てくれないか？ ついでだ、子供を一人頼む」

「……はいはい」

卓巳はそう来るだろうと言わんばかりに、夏海の傍で眠る桜に近づいたが、

「待て 娘は私が連れて行く」

呆気にとられる卓巳の横から桜を抱かかえ、さつさと二階に上がってしまう。

夏海は「身内以外の男の人には、皆ああなのよ」、そう言って、苦笑いを浮かべるのであった。

「じゃあ、来年は先生にはなられないのね」

藤原社長の奥様に台所に立つてもらわなくて、と遠慮していた夏海だったが……。万里子にすれば、メイドやコックの居る生活のほうが不慣れというものだ。片付けの手伝いを申し出て、二人はキッチンにいた。

「教員免許は取ったんですが、採用試験に落ちてしまっ……。卒業論も書き終えてますし、卒業まですることがなくなっちゃってしまいました」

苦笑しつつ答える万里子に、

「立场上、就職は難しいでしょうね」

「はい。もう諦めています。大学まで出してくれた父には申し訳ないですけど。無駄にさせてしまっ」

「人生に無駄なことなんてないわ。遠回りだっただけ必要なことなんだろうし……。大学は四年間でしょう？ 私たちの人生はあと半世紀も残ってるのよ。学んで良かったって思う日が来るわ。……まあ、聡さんの場合、とっくに折り返し地点は過ぎてるんだけど」

夫には「あなた」と、子供たちの前では「お父さん」と呼んでいた。だが、時折お腹を気にしながら「聡さん」と呼ぶ声が一番嬉しそうだ。

万里子は一つの勘違いをしながら、それでも夏海が羨ましくて堪らないのだった。

番外編「君の心に咲いた花（前編）」（後書き）

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

クリスマスは「甘い」というより「面白い」になってしまいました
が…（^^;）

これはしつとり行きたいなあ…オチはつけるなよ私、と自分に言っ
ております。

では、明日もよろしくお願い致しますm（）m

番外編「君の心に咲いた花（後編）」

二十五畳ほどの書斎には、バーカウンターが付いていた。

一条は棚からクリスタルデキャンタの容器を取り出した。既に琥珀色の液体が入っており、それ自体が酒瓶になっているようだ。デキャンタは一目でバカラ製だと判る。

「……飲むか？」

「ミシエルカミュのロイヤルバカラですか？ 相変わらずXOが好きなんですネ」

ため息と共に卓巳は呟いた。

「悪かったな、安酒で……お前にはもうやらん」

「頂きますって」

「その辺のビールでも飲んでろ」

言いつつも、ちゃんとグラスは卓巳の前にも置かれた。

卓巳はカミュの注がれたブランデーグラスを、右手で抱え込むように持つ。少し回すと、体温で温められたブランデーはまるやかな香りを放ち始めた。そして、卓巳は少しだけ口に含む。

「まだ……あのままなのか？」

「まあ、そんなとこです」

「だが、結婚は本物なんだろう？ でなきゃ、パールツクは着らんぞ。普通」

「だから、弱ってます。こんなつもりじゃなかったのに……」

パールツクを茶化されているのだが、卓巳にはそれどころじゃない。

卓巳と知り合った時、一条はすぐに彼の秘密に気づいた。理由は

簡単で、女性に対して度を越した潔癖さは、自分自身と共通するものがあつたからだと言う。ただ、二人はそうなる原因において大幅な違いがあつた。一条は最初の結婚により、自信を喪失してのことだつた。だが、女性に対する愛情や憧憬を失つてはおらず……。何より一条はセックスに歓びがあることを知っていた。卓巳はそれらを知る前に失つたのだ。その差は大きい。

一条は卓巳の肩を叩きながら励ました。

「そう言うな。惚れた女を前にすれば、状況は変わつて来るさ」

「僕は、一条先生とは状況が違いますよ」

「諦めの早い奴だな。チャレンジしたことはあるのか？」

「ダメだつた時は取り返しがつきません」

「お前……まだ、美馬のことを怒つてるのか？」

「……」

(聞きたくない名だ)

同じ大学に通う学生の中に美馬藤臣みまいじうちのみという男がいた。学部が違い、学年も向こうが一つ上であつたが同じ年齢だつた。美馬グループの御曹子で、見かける度に違う女性を連れてくるような男だ。奴は、藤原の名前を持ち、嫡男でありながら奨学金を受けて大学に通う卓巳を、目の敵にしてくれた。

卓巳が初めて恋心を抱き、ホテルに連れ込んで玉砕した女性を、それを知つて横から掠め取つたのだ。しかも、その女性から寝物語で聞いた卓巳の醜態を、美馬は大学中に広めた。卓巳の傷口に塩を塗り、引き裂いてくれた張本人でもある。

後になって、真逆の立場であつたことを知つたが……その時にはもう、卓巳は彼の立場を凌いでいた。

「奴からも結婚式に招待されてたんだが……あつちは中止だと連絡

があつた。何かしでかしたらしい。知ってるか？」

一条が知らぬはずはない。本気で聞いている訳ではなく、卓巳の反応を探っている様子であつた。

卓巳の知る限り、美馬家のやり口は違法の領域に踏み入っていた。一条が弁護士として関わることは決してないと聞いている。しかも、卓巳には美馬がお家騒動を目論む気配すら察知していたのだ。

基本的に人が好く、面倒見の良い一条であるから、やたら目立つ厄介な後輩も気に掛けているのだろう。だが卓巳の目に、美馬がいずれ女で失敗するであろうことなど、自明の理であつた。

意趣返しのつもりはなかつたが……つい、要らぬことを口にしてしまう。

「いえ、美馬の家とは親交がありませんので。それに、奴は僕の彼女を奪つたんだ。あの時の悔しさは忘れられるものじゃない」

カタン。

卓巳の言葉と同時に、背後で音がした。

振り向いた卓巳の目に映つたのは、万里子であつた。

「ま、万里子……いや、あの……今の話を」

「あまり遅くなつてもなんですから……そろそろ失礼しませんか？ 車はわたしが運転しますので」

「今の話なんだが」

「何のことですか？ お仕事の話でしたら、日を改められたほうが」

「あ、ああ。そうしよう」

万里子是一条に軽く会釈して部屋を出て行く。

卓巳は不安な眼差しでそれを見送ることしか出来ず……。

「ドアを開けたままにしたのは失敗だったな」

「どうして閉めてくれなかったんですか！」

「呼びに来た時に判りやすいと思ったんだ。私を責める前に、自分の迂闊さを反省しろ」

「……」

くわくわくわくわく

卓巳の心に深い傷を負わせた女性がいる。

母親ではなく、大学時代に愛した女性。そのことを知ってはいたが、「忘れられるものじゃない」そう、卓巳は言っていた。万里子の耳にそれは、彼女への愛を忘れられない、と聞こえたのだった。

「今日のご馳走様でした。悠くんと桜ちゃんにも、今度は遊び

に来てね、とお伝え下さい」

駐車場は家の半地下にあり、一条夫妻は見送りに来てくれた。

万里子は、卓巳に対する複雑な想いを堪え、二人に笑顔を見せる。

「いえ、何のお構いも出来なくて……この人が、藤原社長に“幸福”を見せ付けてやりたいって。でも、それで新婚さんを招待しても……こつちがあてられるだけなのに、ね」

夏海は言いながら、幸福を絵に描いたような笑顔を見せる。

実は、万里子の誤解はついさっき解けたばかりであった。万里子是一条夫妻の長男が、夫の連れ子であろうと想像していたのだった。それを聞くと夏海は「よく言われるの」と笑って答えてくれた。

「でも、不倫とかじゃないのよ、誤解しないでね。聡さんは不誠実でも女性にだらしない人でもないの。私も彼も少し運が悪かっただ

「結婚した時に植えた桜の木が、ようやく花を咲かせるようになって
たそうです。春には、見に来て欲しいって、夏海さんが仰ってまし
た」

「ああ、そうか……」

万里子が運転する帰宅途中、交わしたのはそんな会話だけだった。

一生を約束しても、二人の間には共有できるものが少な過ぎる。

夫婦の間にだけ漂わせることの出来るベッドの中の秘密も、鋸かすがいと
呼べるはずの子ども、現状では何も得ることは出来ないのだ。

だが翌日、藤原邸の正門から玄関までを右に迂回する車道沿いの
木が、一斉に植え替えられた。

何ことが起こったのか訳が判らない。戸惑う万里子の手を引き、
卓巳は新しく植樹された苗木の側まで連れて来たのだった。

苗木の近くにはまだ造園業者と、住み込みの庭師・柎ひいらぎが仕上げの
作業をしていた。

卓巳より少し年長だが、土いじりが何より好きだという柎は、少
し呆れたような声で万里子に声を掛ける。

「これほどの寒さですからね、植樹はギリギリですよ。もっと早く
言って下さればよかったですか……」

そこに植えられていたのは、見渡す限りの桜の苗木であった。

「一条先生のお宅は一本だったろう？ ざっと三十本は植えた。先
生の奥さんより三十倍は幸せにしてやるから……羨ましがする必要は
ない。判ったな」

万里子の頬に涙が伝った。

数が問題ではないのに……万里子はそう思い掛けて訂正した。それを言うなら寧ろ、桜の数ではなく『卓巳の心』が重要なのだ。不器用でも、精一杯の想いを示そうとしてくれる。それを“愛”と呼ぶはずしてなんと呼ぶのであろう。

「足りないなら裏庭にも……」

「いいえ。いいえ、もう充分です。春が楽しみですね」

来年は無理だろう。再来年も難しいかも知れない。でも、何年掛かっても何十年掛けても咲かせて行けばいい。

万里子の心には、満開の桜並木の下、寄り添うふたりの姿が浮かんでいた。

・そして、それが二人きりではない幸運を、この時の卓巳と万里子はまだ知らない。

番外編「君の心に咲いた花（後編）」（後書き）

御堂です。どうもありがとうございます。

質より量！コレが卓巳の基本でしょうか？

超幸せそうだなあ〜どっちのカップルも。

明日から、「鬼」って言われるかな（苦笑）

いやいや、ラストの引きに相応しい幸せを掴むために頑張ります！

後半戦も応援よろしくお願い致しますm（――）m

総集編「忙しい人のための…3分で“愛を教える”」（前書き）

御堂です。

本編73話、17万字を超えました！

ご覧頂いております皆様、どうもありがとうございますm()m

この総集編は、ここから読もうかな…でも、長いからどうしようか…とお悩みの方にお送りします。

忙しいあなたに…3分で“愛を教える”しましょー！！

コレを見て「五章から読んでやってもいいか」「休み中に一章から読んでやるう」と思っていたらメチャクチャ嬉しい！！

もう判ったからいいや、という場合は…orz

来年はより一層精進したいと思いますm()m

総集編「忙しい人のための…3分で“愛を教える”」

ふじわらたくみ
藤原卓巳三十歳。

国内最大コンツェルンの社長である卓巳は、祖母・臯月さつきが遺言書を書き換えたことにより、結婚が急務となった。このまま臯月に万一のことがあれば、独身の卓巳には一切相続することが出来なくなる。遺留分等、裁判沙汰は極力避けたいところだ。

周囲からは、それぞれの思惑で花嫁を押し付ける動きもあり……。

そんな卓巳が自ら選んだ花嫁は

ちはやまりし
千早万里子二十二歳。

千早物産の社長令嬢で、都内の有名私立に幼稚舎から大学まで通う生粋のお嬢様だ。

四歳で母を亡くし、男手一つで父・隆太郎りゅうたろうが育て上げた掌中の珠である。

半年前のあるパーティーで彼女に目を留め、花嫁と言われて咄嗟に思い浮かんだのが万里子だった。

卓巳は個人秘書の宗行臣そうけいおみを使い、密かに彼女の身边を調べさせた。そして出て来たのが、なんと、純潔そのものに見える万里子には、妊娠中絶の過去があった！

それも、高校三年（十八歳）の時である。更に相手……中絶同意書に署名捺印された男には妻がいた。

「お嬢様のひと夏のアバンチュール、か……結果がコレとはお粗末な話だ。愚かな女の典型だな。だが、そうだった女のほうが扱いやすい」

卓巳はまず、千早物産の取り引き銀行の頭取まで抱き込み、偽の書

類を作らせ、父の窮状を装って万里子に契約結婚を迫るが玉砕。ついに妊娠中絶の過去を引つ張り出し、脅したり賺すかしたりしながら偽装結婚の契約書にサインさせるのだった。

(以上、第一章)

くくくくくくくく

偽装に見せないための小細工に、卓巳はせつせと万里子をデートに連れ出した。

だが、日本経済界の「氷のプリンス」と異名を取る卓巳にしては、どこか女性の扱いが不慣れだ。デートを重ねる毎に、お互いの目的が判らなくなっていく。

その後、卓巳は宗の助言により“既成事実”をでつちあげた。万里子を自ら所有するホテルのスイートに泊め、結婚を急ぐ理由を作ろうと画策。

それにより、万里子の父からOKを取ろうとした。だが、そのスイートでトラブルが発生。

卓巳は性に奔放な母親のせいで、最も多感な思春期にセックスに対して心に傷を負った。そして

二十歳の時に受けた診断は「重い心因性の性機能障害」というものであった。

行為が不可能なだけでなく、心が受け付けない。彼は女性にもセックスにも嫌悪感しか感じない人間なのだ。

そして万里子は、彼女の妊娠も墮胎も、二人組の男に性的暴行を受けた結果であった。

彼女は、最愛の父に知られることを最も恐れていた。しかも墮胎だけでなく、中絶手術により、妊娠も非常に困難となってしまうたの

だ。

万里子はそれを、墮胎を選んだ自分の罪だと思っていた。

様々な障害が立ちはだかるが、二人の中の淡い思いが次第に形を成していく……

「形式上でも君は二年間僕の妻となる。何かあれば、妻のことは全力で守る。祭壇の前で神に愛は誓えないが……代わりに、君を失望させないことを誓おう」

（以上、第二章）

くくくくくくくく

二人は結婚に向かって動き出した。

万里子が藤原邸を訪れ、皐月のお許しを得ることが第一である。

皐月は、孫・卓巳の体の事情を知っていた。そして全てが自分の責任だと思っていたのだ。自分は病で余命一年を宣告され、死ぬ前に何としても卓巳に幸せな家庭を持たせたいと願ったのである。

卓巳の父はお坊ちゃん育ちで、キャバクラ嬢の母の罫に掛かって結婚。卓巳は母にとって、金目当ての道具も同然だった。

やがて実家の援助も途切れ、母は父子を捨て出奔、卓巳は父とホムレスとなり彷徨う。父亡き後、再び母に利用されるが、藤原家から金は取れず……卓巳は高校にも行かず働き、自力で大学を卒業したのだった。

その後、卓巳父子を追い払った祖父・高德たかのりが死亡。卓巳は皐月により、藤原家に呼び戻されたのである。

藤原家には卓巳の叔母二人が万里子を追い返すべく待ち構えていた。

叔母たちは皐月の娘ではなく、高德が愛人に産ませた娘だ。そのため、皐月との仲はギクシャクしている。
しかも叔母・尚子なほこの息子・太一郎たいちろうは無類の女好き。ときめん万里子に目を付け、一人になった隙にキスを迫るといふ暴挙に出る……それには卓巳も逆上。

「いいか？ 私の妻に触れるな。……返事はひとつだ」

卓巳の生い立ちを知らなかった万里子は、色々聞かされ驚くものの卓巳の味方をする。

献身的で健気な万里子の言葉と、それに応えようとする卓巳の行動に、皐月は本物の愛情を確信。

二人は拳式より先に、入籍を済ませるのだった。

(以上、第三章)

くわくわくわくわく

病のため動けない皐月に配慮して、藤原邸でのガーデンウエディングが決まった。

既に入籍も済ませ、デートの芝居は必要ない……にも関わらず、二日と空けずに二人はデートを重ねていた。

もちろん、卓巳には体の事情があり、万里子も男性に対する恐怖感
は拭えないでいる。

それでも二人は少しずつ歩み寄り、お互いの存在に安らぎすら感じ
始めていた。

そして結婚式当日、卓巳は万里子と初めてのキスを交わした。

それは彼のこれまでの人生で至福の瞬間となる。

しかし、その披露宴会場に現れたのが香田俊介。こうたしゅんすけなんと、卓巳が目にした中絶同意書に名前が書かれた男だ。その勘違いは正されず、卓巳は激怒。

そのことを知らない万里子はごく自然に卓巳に俊介を紹介してしまう。

逆上した卓巳は後先考えず万里子を非難。それにより、万里子の愛は消えかかり、再び心を閉ざしてしまったのだった。

だが、万里子に対する確かな愛を自覚した卓巳は、どうにか彼女の愛を取り戻そうと努力する。

そんな中、ようやく卓巳は「妊娠に至る行動は万里子の意思ではない」と気付いた。

「万里子、人を愛するのにどんな資格が必要なんだ。過去において、一点の誤ちあやまちもない心と体、そして、行いが必要なのか？」もう嘘はつけないし、つきたくない。愛してるんだ」

卓巳は万里子の母代わりである家政婦の忍しのぶからすべての真実を聞いた。

そして、生涯懸けて万里子を幸せにする、と誓う卓巳であった。

(以上、第四章、前半終了です)

〈登場人物紹介〉

<http://book.geocities.jp/arlequinromann/pic/novel/aiwoosite/character.html>

総集編「忙しい人のための…3分で“愛を教える”」（後書き）

あらずじ書くのも結構難しいですね。

一章で、「卓巳、それって一目惚れ」とか突っ込みを入れつつ書いておりました（苦笑）

引き続き、よろしくお願い致します（平伏）

第五章 熱愛 (1) 危機

卓巳が万里子の実家から戻ると、邸内が妙にざわついていた。

「お、お帰りなさいませえ、旦那さまあ」

その声に、一瞬で卓巳の眉間に皺が寄る。つい先日まで、邸内最年少であったメイドの佐々木かなが迎えに出て来たのだ。

最近のご機嫌なことが多く、かなが前に出て来て何か失敗をやらかしても、いきなり怒鳴りつけることはなくなつた。だが、険しい表情には違いない。そんな卓巳の顔色を伺いつつ、恐る恐るかなは口を開く。

「あのお……今、皆さん手が放せなくてえ」

通常、車が正門を通過した時点で万里子の携帯にメールが届く。彼女はそれを見て、卓巳が玄関に入る前には一階に下りて来ているのだ。

「ああ、それは構わない。……万里子はどうした？ 調理場か？

まさか、びつくりパーティとか計画してるんじゃないな」

かなにビジネスバッグを渡しながら、卓巳はそんなことを呟いた。「勘弁してくれよ」と言いつつ、万里子が卓巳のためにしてくれることなら何でも嬉しくて堪らない。卓巳はネクタイを緩めながら返事を待つが……。かなは、どこかオドオドしていて歯切れが悪い。

「あ……いえ。あのう、奥様はあ……お部屋でお待ちですう」

「部屋で？」

「お帰りなさいませ、旦那様。お出迎えが遅れまして申し訳ございません」

執事の浮島が卓巳を迎えた。スツと合図してメイドのかなを下

がらせる。かなはピョコツと頭を下げ、奥に引っ込んでしまった。もう少し礼儀作法を仕込む必要がある、と思いつつ、卓巳の関心はすぐに万里子のほうに移ってしまう。

「何があつた？ 万里子はどうした？」

「はい。実は 先月入りました、メイドの佐伯茜さえきあかねを覚えておられますか？」

万里子のことを尋ねて、なぜ新入りのメイドに話がるのか判らないが……卓巳は思い出しながら答える。

「ああ、確か……十七の娘だろう」

「はい。その娘に太一郎様が無体な真似をなさいまして」

「またか！ 代議士の娘に手を出した時に言つたはずだ。次は自分で責任をとってもらう、と。十七なら合意の上でも条例違反だ。なければ暴行傷害でも強姦致傷でも構わん、警察に突き出せ！」

太一郎は非常に危険な存在だ。卓巳らの部屋には誰も無断で踏み入れないように、センサーが取り付けられている。それは二十四時間、警備室直通だ。雪音にも、昼間であつても注意を怠らず、万里子から離れないように頼んであつた。

だが、太一郎が問題を起こしたのなら幸いである。理由はなんであれ、この邸から叩き出す口実になる。その娘には気の毒だが……そう考えた瞬間だつた。

「いえ、それが……メイドの助けを呼ぶ声に奥様が気付かれました。その娘は事なきを得たのですが……。代わりに奥様が……」

浮島の言葉に卓巳の顔色は変わった。

くくくくくくくくくく

佐伯茜は十七歳、高校二年生の少女だ。

父親は代々続く老舗の和菓子屋を継いだ経営者兼菓子職人だった。その父が病で亡くなり、同じく菓子職人である母が子供三人を抱え一人で頑張っていた。だが、ついに体を壊し入院してしまったのだ。後継者もおらず、店は立ち行かなくなり……立ち退きを迫られた店舗付き住宅の権利者が藤原グループの不動産会社であった。

その時、茜は何を思ったのか、週刊誌で見かけた社長の婚約者・万里子を大学まで訪ね直談判したのだ。母さえ元気になれば続けられる、経営状態は悪くない、月々の返済は母が戻るまで待つて欲しい、と。

正直に言えば、そんな末端のことまで卓巳に判るうはずがない。ましてや、万里子に言われてもどうしようもないことだ。しかし万里子は、母親や弟妹のため必死になる茜に同情したのだった。

「同じような境遇の少女などごまんという。一人二人助けてどうなるもんでもない。自力でどうにかしなきゃならない時があるんだ」「全部を救って欲しい訳でも、それが出来るとも思っていない。ただ、目の前で溺れそうになって、助けてくれって言う人がいるのに、他にも溺れてる人がいるから……それは」

涙ぐむ万里子に卓巳が逆らえるはずもなく。卓巳は茜に、返済の猶予ではなく無金利で貸付け、高校を辞めずに働ける場所を提供したのだった。

当然それには、邸内で万里子の味方を増やす目論見もあったが……。

ところが数時間前、ちょうど卓巳が千早邸で忍と話していた頃のこと。

渡り廊下で繋がれた裏の棟から少女の助けを呼ぶ声が聞こえた。

「いやっ！ いやです。……やめてっ！」

普段なら、万里子は決して近づかない場所だ。雪音に用事があり、邸内を探すうちに渡り廊下まで来てしまったのだった。

万里子は、少女の声は茜に違いない、と思った。

高校生の茜が一日勤めるのは土日くらいだ。邸内で唯一通いのメイドである。まだ雑用が多く、皿洗いと掃除洗濯が主な仕事と言っても良い。部屋つきにしないことで、なるべく太一郎から遠ざける目的もあった。そうでなければ、経験がなさそうな少女はたちまち太一郎の毒牙に掛かってしまうだろう。だが、十七歳であること、次回は司法の手に委ねることを、太一郎にはよく言い含めていたはずであった。

ところが、太一郎はそんな警告を無視した。

茜に用を言いつけて部屋に入れ、突然襲い掛かったのである。

「お願い……いやぁ！ 助け」

少女の声に驚き、すぐに人を呼びに行こうとした。しかし、不意にその声が途切れ……。自分が頼んで雇い入れて貰った少女だ。見過ごすことなど出来ない。矢も盾もたまらず、万里子は飛び込んでしまったのである。

第五章 熱愛 (1) 危機(後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

番外編を挟みましたが、第四章から繋がっております。(卓巳の誕

生日当日です)

お待ちかねの太一郎が登場致します。(待つてない?すみません

(^^;)

冬休み中は更新が遅くなるかも知れませんが、何卒ご容赦下さい(平
伏)

後半も、引き続きよろしくお願い致します。

第五章 熱愛 (2) 悪魔の素顔

「茜さんっ!? 大丈夫、茜さん!」

茜の名を呼び、太一郎の部屋に飛び込んだ万里子が目にしたのは、床に押し倒された茜の姿だった。

メイド服の上半分は引き裂かれ、既に半裸である。太一郎は自分の半分ほどの体重しかない少女の上に跨り、押さえ込んでいた。

茜の頬は赤くなり、万里子を見るなり涙が^{こめかみ}蟀谷に一筋流れる。これが同意でないことは、彼女の口に押し込まれた白い布を見れば明らかだろう。

「なんて……なんてことを……。やめてください。お願いやめて!」
「うるせえ! 入るなっ! 俺の部屋だ。出て行けよ。邪魔すんじやねーよ。これからお楽しみなんだからさ。なあ、茜ちゃん」
「……………う……………う……………」

茜は必死で首を振る。

万里子の脳裏に、四年前の事件が浮かんだ。茜の姿が、助けを呼んで泣き叫んだ自分と重なる。

膝が震えた。手も唇も震え、息をするのも苦しい。でも……
万里子は体当たりする勢いで太一郎に突進し、なんと、茜の上から突き飛ばしたのだ。

「え? おいつ! うわっ」
思いもよらない万里子の攻撃に、太一郎は床の上を転がった。

「大丈夫よ。もう大丈夫だから……さあ、立って」
万里子は羽織ったショールを外し、茜の身体を包み込む。口から取り出した布切れは、茜のつけていたエプロンの一部だった。

しかし、このままで済むはずがない。

「何、すんだ！ このあまあ」

太一郎はすぐに起き上がり、悪態を吐きながら万里子の左腕を掴んだ。

「触らないで！ 離してください。離して」

「俺は何やつてもいいんだよ。あのクソ爺おじいがそう言ったんだ！ それをためえ、よくも邪魔しやがって！ ……ま、いいか。その小娘の代わりに、お前が俺のムスコを慰めてくれるんならさ」

太一郎は万里子の耳元に顔を寄せた。相変わらず酒臭い。万里子は顔を背けつつ、

「わ、わたしは……卓巳さんの妻です。離してください」

「どうせ毎晩、卓巳のをしゃぶってんだろ。俺のも味見してくれよ。奴よりよっぽどデカくて、使い込んでるコイツを、さ」

万里子の頬に太一郎の息がかかる。シヨールを茜に貸したため、カシミヤの薄いセーター一枚だけだ。濃紺のセーターは万里子のバストラインを綺麗に形作り、太一郎の目にくつきりと映し出した。

「……おくさま……」

茜の涙交じりの声に、万里子は勇気を奮い立たせる。

「早く行きなさい！ 誰かにこのことを……」

その瞬間、太一郎は万里子を部屋の奥に突き飛ばし、自分は茜のほうに向かった。

「お前はもういい。出てけっ！ さあ、さっさと出て行かねえと犯すぞ」

茜は廊下に転げるように飛び出した。それを見届け、太一郎は扉を閉めて後ろ手に鍵を掛ける。

「さあ、これで二人つきりだ」

猥雑わいざつさに塗まみれた太一郎の声が、万里子の耳に響いた。

（大丈夫。絶対に大丈夫。必ず誰かが助けに来てくれるわ……必ず）

万里子はゆっくりと立ち上がり、後ずさりしつつ……。助けを信じて、心の中で自分を励ましたのだった。

くくくくくくく

「言つとくけどさ、お前が勝手に俺の部屋に入って来たんだからな。連れ込んだわけじゃない、忘れんなよ」

「い、いい加減に、してください。そんな言い訳は通用しないわ」「通用しないかどうか、やってみたら判るだろ？ さあやろうぜ。あいつより気持ちよくさせてやるよ」

「近寄らないで！ 嫌、絶対に嫌！ 卓巳さんだけだわ。他の人なんて絶対にイヤッ！」

太一郎は近づきかけて一旦止まり、頭を掻きながら呆れた声で言った。

「あんな奴のドコがそんなにいいわけ？ 何考えてるか判んねえ野郎のさ」

「あ、愛してるもの……愛してくれてるもの！」

“愛”という言葉を口にした直後、太一郎の形相が変わった。

「愛なんざくそくらえだ！！」

ヘラヘラした口調も凶悪なものに取って代わり、万里子に罵声を浴びせかける。

「奴が本気で女を愛するわけねえだろうが！ 婆はやおが死んで、この家と金、それに会社が手に入れば、お前なんかお払い箱さ。それも判んねえのかつ、この馬鹿女が！」

その時、泣き崩れるかと思つた万里子が、キツと太一郎を睨みつけた。

「そ、そうかも知れない。すぐに、捨てられるのかも知れません。

でも……それでも愛してるんです。卓巳さんが好きなのっ！」

その言葉は炎となり、太一郎の全身を嘗め尽くす。

太一郎は神経の末端まで黒こげにされた気分を味わっていた。悔しかった。卓巳は自分にはないものを全部持っている。正当な血筋、優秀な頭脳、強靱な肉体、周囲の信頼……どれをとっても遙かに及ばない。

太一郎の名は祖父・高德たかのりがつけた。長男・跡継ぎを主張した名前だ。彼は過大に期待され、またその期待に応えようとしていた。

だが、哀しいかな、お世辞にも彼は優秀なほうではなかったのだ。勉強は期待された半分も数字が取れず、スポーツも根気のなさが災いして長くは続かない。何をさせても標準以下。周囲は期待外れを感じていたが口にはせず、母の尚子も決して認めようとはしなかった。

祖父や母は「やれば出来るはずだ。出来ないはずがない」と重圧を掛け、義理の祖母・皐月と父は、太一郎を無視した。太一郎がどんな馬鹿な真似をしても、愚かな罪を犯しても、誰も叱らない。止めると言わず、裏で手を回して揉み消すのだ。

卓巳にしてもそうであった。卓巳は、まるで太一郎のことなど視界に入らないかのように振舞う。次は許さない。そんなものは口先ばかりであった。

(どいつもこいつもクソばっかりだ)

そんな太一郎の目に飛び込んで来たのは万里子だった。

『やはり乱暴は間違っていると思います。あんな真似はもうなさらないで下さい。お願い致します』

万里子は太一郎を庇った訳ではない。あの言葉を卓巳を見つめ、卓巳に向かって言った言葉だ。

判ってはいても、なぜか心が攪くすぐられる。それはあまりに穏やかな、

愛に満ちた声だ。欺瞞と虚飾、欲望に糊塗ことされた藤原家に生まれ…
…何不自由なく育ったはずの、太一郎が初めて耳にするものであつた。

第五章 熱愛 (3) 痛み(前書き)

暴力的な描写があります。

苦手な方はパスしてください。

第五章 熱愛 (3) 痛み

太一郎にとって、万里子は眩しくて直視し難い存在だった。

その意味が、この時の彼には判らず……それは不幸にも、卓巳への憎しみにスライドされる。何が憎いのか判らなくなるほど、太一郎は破壊的衝動に駆られたのだ。

「俺も“愛して”やるよ。身体の隅々までな……」
言つと同時に太一郎は万里子に飛び掛った。

「きや……」

さすがに手馴れているのだろう。あつという間に、さつき茜が転がされていた床に、万里子を押し倒した。

この時の万里子は、逃げたくても逃げられなかった。膝が震え、まるで力が入らない。茜を助けたくて飛び込んだものの、太一郎の淫猥いんわいさには、とても万里子のような女性が太刀打ち出来るものではなかったのだ。

押し倒され、床に転がされた瞬間　四年前の記憶が万里子の中に生々しく蘇る。

恐怖は万里子から悲鳴すら奪う。

「お前の目つてそそられるんだよなあ。男をイカせる目だよ。その目で卓巳を落としたのか？」

太一郎はそんな言葉を吐きながら、セーターの裾を掴み、一気に捲り上げた。万里子の肌理きま細やかな肌がライトに照らされ、オフホワイトのブラジャーと共に白く反射した。胸元は半分以上が露あらわになり、太一郎の目に晒される。

あずさほどのポリウムはない。だが、男の興奮を誘うには充分の色香が漂っていた。

「なあ、お前処女だろ？　毎晩亭主に可愛がられてる女がさ、こん

なガタガタ震えて膝を固く閉じてるわけないじゃん。卓巳ってホントはインポなんだろ？ 言えよ、正直に言ったら見逃してやるぜ」

助けて貰えるなら何でも言っ飛ばさよう、万里子は一瞬そう思った。

でも……真実が明らかになれば、卓巳の心も名誉も傷つけてしまおう。

（それだけは絶対に出来ない！）

「卓巳さんは……わたしを愛してくださいました。わたしの身体は、全部夫のもんです！ あなたとなんて、死んでもイヤです！」

万里子は馬乗りになる太一郎を蹴飛ばし、起き上がるとドアに駆け寄った。必死でノブを掴み、鍵を開けようとする。だが、鍵の掴みに手が届いた瞬間、後ろから髪を掴んで引っ張られた。

万里子は必死で暴れて抵抗するが……。

その時、万里子の左頬に衝撃が走る。太一郎は平手で彼女の頬を殴ったのだ。万里子は反動でソファまで飛ばされた。口の中が切れ、血の味が広がる。

卓巳への想いで塞がりかけた古傷を、太一郎は暴力により力任せに引き剥がしたのだ。

「いや……なぐらないで……たすけて、いや、やめて」

「抵抗するんじゃないよ。死んでもイヤだと？ そんなこと言えなくしてやるよ。殴られたくなきゃ黙って足を開いてる！」

両腕で身体を抱き締め、貝のように固まり動かなく……動けなくなる。

暴力は万里子から逆らう気力を奪った。万里子は顎を掴まれ上を

向かされる。その目は閉じたままだ。そして……口角から血を流す万里子の唇に、太一郎は自分の唇を押し当てたのである。

それは万里子にとって、絶望の底を突き破るほどの衝撃だった。

（キスだけは……唇だけは、卓巳さんのものだったのに……。彼だけのものだったのに！）

そう思った時、万里子は太一郎の唇に噛み付いていた。それも、噛み千切っても構わないとさえ思うほど、渾身の力で。

「あつ！ 痛つう……痛えだろがつ！」

太一郎は口元を押さえ万里子から飛び退く。

次の瞬間、万里子の目にナイフが映った。それは、ガラステーブルの上、フルーツ皿に添えられた果物ナイフだ。万里子は咄嗟にそれを手に取り、自らの喉に押し当てたのだった。

再びあの苦しみを味わうくらいなら……今度こそ死のう。

太一郎に穢される前に、自ら命を断とう　万里子はそう心に決めた。

「二度と……卓巳さんに会えない……」

「おい……待てよ。そんな、ムキになるようなことじゃないだろ？」

たかがセックスだよ。なあ……キスくらいで何を」

「近づかないで！ 一歩でも近づいたら……死にます」

（唇だけだったのに……卓巳さんにあげられるものは……それだけだったのに）

太一郎は万里子の瞳に浮かぶ、思いつめた光が怖かった。ここま

で一途に、誰かを想う女に会った事などない。どんな女も、腕尽くで抱きさえすればモノに出来る。出来なくても、金を積めば済むことだ。

でもそれが間違いであると、目の前の万里子が太一郎に教える。

「待てよ、判ったから……ナイフを下ろせ……な」

そう言つて踏み出した瞬間、万里子は自らを刺すために反動をつけた。

くくくくくくくく

「だれか……たすけて。奥様が……万里子様が」

万里子に助けられた茜は、廊下を何度となく転びながら、助けを求めにメイドルームに直行した。

数分後、千代子や雪音たちが太一郎の部屋の前に駆けつける。ドアには鍵がかかり、中からは微かに物音と女性の悲鳴が聞こえた。

「万里子様！ 大丈夫ですか、万里子様！？ ちよつと、なんで開かないのよこのドア！ 分厚すぎるんじゃないのっ！」

雪音は力一杯ドアを叩くが、中からは何のリアクションもない。

扉は防音になっており、叩いたくらいではビクともしない。万里子が茜の悲鳴に気付いたのは、扉がキツチリと閉まつてなかつたからである。

浮島が合鍵を持って来るまでの時間稼ぎにと、表からドアを叩いて牽制するが……。二人の耳に届いている様子はない。

直後、ようやく浮島が駆けつけた。冷静な彼には珍しく、見て判るほど鍵を持つ手が震えている。当然、鍵穴に上手く差し込めない。「貸してっ！」

苛々した雪音は横から奪い取り、急いで鍵を開け部屋に飛び込む。

そして彼らの目に映ったのは、万里子がナイフを自らの喉に突き立てようとした瞬間であった。

ナイフは皮膚に食い込み、ペルシャ織の絨毯に血が滴り落ちる。

だがそれは万里子ではなく、太一郎の血であった。太一郎は咄嗟に、万里子の手にしたナイフを素手で掴んだのである。

「二度と……こんな真似はしない！二度とあなたには触れない！だから……止めてくれ。頼むから、止めてくれっ！」

万里子の手がナイフの柄から離れ……そのまま、崩れ落ちるように倒れ込んだ。

「万里子様、大丈夫ですか！？しっかりして下さい！」
「奥様！医者を、安西先生を呼びなさい。早く！太一郎様、手を開かないで下さい」

太一郎が手を動かした時、血に濡れたナイフは音もなく滑り落ちた。

彼は嘔き出す血と共に、傷つく痛みを知ったのである。

第五章 熱愛 (4) 誰がための怒り(前書き)

暴力的な描写があります。

苦手な方はパスしてください。

第五章 熱愛 (4) 誰がための怒り

卓巳が、扉をぶち破る勢いで部屋に飛び込んだ時、万里子はベッドに身体を起こしていた。

大きな音に、中にいた全員が振り返る。

「卓巳さん お帰りなさいませ。お迎えに出られなくて……ごめんなさい」

それは、消え入りそうな小さな声であった。

左の頬が腫れている、唇の横に貼られたテープも痛々しい。抵抗した際にぶつけた右手の甲も腫れ上がり湿布をして包帯が巻いてあった。

万里子の側についていた雪音が「お帰りなさいませ」と椅子から立ち上がり、続けて卓巳に報告する。

「主治医の安西先生に診ていただきました。骨に異常はないそうです。でも明日、精密検査に来院して欲しいと仰ってました。……こんなことになってしまい、本当に申し訳ございません」

そのまま、雪音は深々と頭を下げた。

「違うの卓巳さん。雪音さんのせいじゃなくて……あの……」
言葉が続かず、万里子の瞳から涙が零れ落ちた。泣くつもりではないのだろう。卓巳を見つめ、目を見開いたまま、涙の雫が右手の包帯を濡らした。

「あの……ごめんなさい……わたし……ごめん、なさい。せつかくの、お誕生日なのに……」

卓巳の中で何かが切れた。同時に体が熱くなり、ふつつつと全身の血が音を立て沸騰し始める。

ほんの数時間前のことだ。二度と傷つけない、必ず守る、そう誓

つたばかりであつた。
それが……。

卓巳はそのまま回れ右をして部屋から飛び出したのだ。行き先は一つだろう。

「旦那様！　旦那様！　この件につきまして、大奥様からお話がございます！」

執事の浮島が卓巳を追いかけながら大声で叫ぶ。

「旦那様。まずは落ち着かれて……どうか、奥様の傍にいらしてあげて下さいませ。旦那様っ！」

まるきりスピードを緩めることなく卓巳は一階に下り、渡り廊下を抜けて裏の棟に向かった。

「奥様が泣いておられます。どうか、旦那様が」

「太一郎は……部屋だな」

卓巳の耳に浮島の言葉など入ってはいなかった。

くくくくくくくく

「もう、お終いだ。あれほど、少しは慎むようにと言っておいたのに。女には不自由してないだろう？　それを、こんな……：～：～よりもよって卓巳くんの」

太一郎の父親・藤原敦は、息子の部屋を訪れ、愚痴をこぼしている。太一郎が怪我をしたと聞き、急遽、外出先から呼び戻された。そして、怪我の理由を聞いた後は……：～：～ソファに力なく座り込んだままだ。叱るでもなし、怒るでもなし、延々愚痴を言い続けている。
「お終いだ……：～：～私たちはもう」

「何を仰るの！？　太一郎さんはこんな大怪我をしたんですよ！」

母親の尚子は、この期に及んでまだ、事態が飲み込めていないらしい。

太一郎は医者に来てもらい、右手を八針縫った。確かにかなり深い傷ではある。部屋の絨毯には赤黒い染みが残り、消毒薬の匂いが充満して、宛ら病院のようだ。

「あの女よ、あの女に刺されたのよ！　そうよ……自分でこの部屋に来ておきながら、使用人にそれを知られそうになつたから、太一郎さんのせいによつとしたんですわ！　そうに決まっています。ね、太一郎さん、そんなのよねっ！？」

尚子はソファに腰掛けたまま、部屋の奥にいる太一郎にそう問い掛けた。

（答えなんか聞いちゃいねえくせに……）

勝手に質問と答えを用意して、太一郎が返事をする前に全ては終っているのだ。

豪胆で豪傑、そんな祖父と同じだと、尚子は周囲に吹聴する。だが当の太一郎は、見た目こそ祖父に似てはいたが、内面は父とそっくりであつた。優柔不断で気弱、自分より弱いものとしか戦えない人間だ。

今この時も、万里子はそんな女じゃない、と反論したくても出来ない。悪意ではなく、勇気が足りないために……。

「可哀想な太一郎さん。こんな酷い怪我をさせられて、あたくし、臯月さまに談判して参りますわっ！　そうでないとなんのですっ！　失礼じゃありませんの、ノックもな、しに」

いきなり、扉が開け放たれ、卓巳がそこに立っていた。

「た、たくみくん。この度は本当に倅が申し訳ないことを……」
「卓巳さん、今回のことは皐月さまを交えてちゃんとお話を」

卓巳は、立ち上がった敦と尚子には目もくれず、部屋の奥に突き進んだ。そして、そのまま勢いをつけて太一郎の顔に右の拳を叩き込む。それは、ベッドに腰掛けていた太一郎が立ち上がるうとした瞬間だった。彼は壁まで殴り飛ばされ……フロアに置かれたスタンドライトが倒れた。ライトシェードや電球の碎け散る派手な音が室内に響き渡る。

だが、後方で上がる悲鳴など、卓巳は完全に無視だ。

「万里子に触れるな、そう言った筈だ。今度やったらただじゃ済まない、そうも言った。覚悟は出来てるな」

ガシヤ 卓巳は靴の底で割れたガラスを踏み締める。藤原邸に靴を脱いであがる習慣はなかった。そうでなければ卓巳も大怪我をしているところだ。

「どつ、する気だ……俺を……」

「貴様には留学してもらおう。誰も知らないうちに、誰も知らない場所、だ」

口の中で何かが転がる。それは折れた歯であった。太一郎はそれを血と共に吐き出しながら……漸おちう声を出した。

「留、学先で……おれは行方不明に、なるわけか？」

「さあな。どっちにしても、二度と貴様に会うことはない。永久に、万里子の前から消し去ってやる。来いっ！」

血に汚れたシャツの襟首を掴み、卓巳は太一郎を部屋から引きずり出そうとする。

それを遠巻きに止めようとしたのが尚子であった。

「ちょっと待って……ね、卓巳さん、太一郎が悪かったわ。あたしくしも、お詫びします。万里子さんが素敵な方だから、迷ってしまったのよ。許してやってちょうだい……血の繋がった従弟じゃないの」「許す?」

卓巳の怒りは沈静に向かうどころか、まさに燃え盛っている。そして、媚びた笑いを浮かべる尚子に卓巳が返したのは、辛辣しんらつか且つ凶悪な台詞であった。

「いいですよ。だが、彼は数々の犯罪を重ねてきた。僕はその証拠を山と抱えている。彼にはその責任を取って別荘で暮して頂きましょう。そしてあなた方にも、息子を犯罪者に育てた責任を取ってもらいましょうか?」

「せ、責任? そんな……」

別荘が刑務所であることは、太一郎にもすぐに判った。返事に詰まる両親に、卓巳は怒声を浴びせる。

「貴様らの口座はすぐさま凍結する。何も持たずにこの家から出て行け! 藤原の庇護から離れて、生きていけるものならやってみろ! それとも……留学先で失踪した息子を持つほうがいいか。さあ、選んでくれ! どっちを取るんだ!」

重苦しい無言の時間が流れた。

再び卓巳が足を動かした時、太一郎は両親の顔を見る。彼らの出した答えは……なんと、彼らは息子から視線を逸らせたのだった。

その瞬間、場違いな嘲笑が開かれたままのドアから廊下にまで響き渡った。卓巳である。

「私の両親も褒められたものじゃないが……お前の親も相当だな。どうだ太一郎、親に金と命を天秤に掛けられ、捨てられた気分は」

卓巳の目は、万里子がナイフを掴んだ時と寸分違わぬ光を宿していた。

(本気だ……こいつは、本気で俺を殺す気だ)

太一郎は、卓巳にとって命より大事なものを、土足で踏み躪にじってしまったのだ。背中から這い上がるソレが悪寒を伴い、“痛み”の次に彼が学んだのは“恐怖”であった。

「ま、まてよ、ちょっと待ってくれよ。俺は」

そう言った瞬間、太一郎は卓巳の手を振り解き、逃げようとした。だがその直後、鳩尾みぞおちに激痛が走る。そこには卓巳の革靴がめり込んでいた。太一郎は縛もつれる足で廊下まで転げ出て……堪えきれずに吐き戻した。そのほとんどがアルコールだ。

腹を押さえて呻く太一郎の胸倉を掴み、卓巳は更に殴りつけた。とうとう彼は膝から崩れ落ちて、床を這うように逃げるが……卓巳は容赦なくその足を踏み躪り、腰を蹴り飛ばした。

駆けつけた使用人たちも、鬼神の如く、鉄槌を下す卓巳を声もなく見つめている。

「立て。まだ終わりじゃないぞ」

「た……のむ、許してくれ……もう、カンベンしてくれよ。助けて

……」

「そうか、貴様でも殴られると痛いんだな。だが、貴様はその手で万里子を殴ったんだ。それが、どれほどの痛みか判るかっ！」

「わかった……もう、許してくれ……よくわかったから、だから」

「万里子もそう言わなかったか？ 離してくれ、助けてくれと、頼まなかったか？ 彼女だけじゃない。お前が今まで殴りつけた女も、そう泣いて頼んだんじゃないのか!? お前は一度でも許してやったのか。そんな女を、殴り倒して、最後まで犯したんじゃないのかっ！」

卓巳の怒りは邸中を震撼させた。それは目の前にいる太一郎だけでなく、四年前、万里子を襲った連中に向けた怒りでもあった。

第五章 熱愛 (4) 誰がための怒り(後書き)

御堂です。いつもご覧頂きありがとうございます。

更新が遅くなり申し訳ありませんm(____)m(途中で切れず長くなってしまいました)

本年はどうもありがとうございました。

来年も私に書ける精一杯の作品を書いて行きたいと思っております。引き続き、何卒、よろしくお願い致します。

では、良いお年を(^^)/

09/12/31

御堂志生

第五章 熱愛 (5) 赦し

邸中の使用人がこの場にいた。太一郎の両親も、叔母の和子や従弟の孝司もいたのだ。

しかし、その全員が誰一人として太一郎を庇おうとはしなかった。それも当然だ。若いメイドたちの過半数が、卓巳の言葉通りの仕打ちを、太一郎から受けていたのである。仮に、このまま連れて行かれ、太一郎が海外に留学したとでも言われたら……。皆、十日も経たずに太一郎のことは忘れるだろう。二度と戻らなくても、悲しむ人間など一人もいない。

恐怖は通り抜け、“自業自得”の意味を太一郎は噛み締めていた。

「さあ、来るんだ」

既に、立つて歩くことも儘ままならず……太一郎は卓巳に襟首を掴まれ、渡り廊下のほうまで突き飛ばされた。

口に出来ない言葉が太一郎の中をグルグル回る。

殴ってはダメだと、誰も教えてはくれなかった。力尽くで人を思い通りにする太一郎を、祖父に似ていると母は褒めてくれたのだ。それが自分の価値だと、そう思い続けた少年時代であった。

だが、いつまでも子供ではいられない。太一郎もじきに、母の言葉が誤りで、暴力が間違った手段であることに気付く。それと同時に、彼は無力な自分にも気づいたのである。

太一郎は俯いたまま床を見つめ、廊下を這い　そんな彼の前を、白い素足が横切った。

「やめて！　もう、やめて。もう、これ以上は……やめて下さい」

使用人の間を割り、卓巳に抱きついて止めたのは、他ならぬ万里子であった。

「何を言ってるんだ!? こいつをこのままにしておいたら、君がどんな目に遭うか判らない。僕は……君を傷つける人間は絶対に許さない!」

「でも……でも、助けくれたわ! 原因は太一郎さんだから、正確に言うとは違うのかも知れないけれど。でも、太一郎さんが止めてくれなかったら、わたしは本当に死ぬつもりでした」

そんな万里子の言葉に横から口を挟んだのは雪音であった。

「でも万里子様、それって逆じゃないですか? この男のせいで死ぬところだった、って言うべきだと思うんですけど」

「そうです! この人は私のことも殴って脅したんです。訴えても無駄だつて、履歴書を十八に書き換えたって。私が嘘をついて、お金欲しさに迫ったんだつて。みんなにそう言うつて言ったのよ! 最低だわ、訴えてやる! 絶対に許さない!」

茜も万里子と同じである。頬が腫れ、医師の手当てを受けていたレイプが未遂であったことが、彼女の声を大きくした要因であろう。他のメイドたちは……金を受け取った後ろめたさもあり、言葉にはしない。だが、皆一様に冷やかな視線で太一郎を見ていた。

敦や尚子も大差なかった。太一郎の行動を褒め続けた尚子も、犠牲が我が身に迫るや否や、即座に太一郎を捨てて逃げ出したのだ。尚子にとって息子は、蜥蜴とかけの尻尾に過ぎなかった。

「万里子、君が許しても、誰もこいつを許さない。少なくともこの家に、太一郎の居場所はない」

卓巳に言われ、万里子は周囲を見回した。誰もが順に目を伏せる。「でも……二度としないつて言ってくれました。もう二度とこんな真似はしないつて」

「信じられるか! 万里子、君が優しいのは判る。だが、奴はまたやるぞ。暴力で君のような……いや、今日の君以上の目に誰かを遭

わせる」

その言葉で、万里子は卓巳が四年前のことを、想像ではなく確信しているのだと悟った。

だから、恐ろしいまでの怒りを太一郎にぶつけているのだ、と。忍に聞いたのかも知れない、しかし、何処まで聞いたにせよ、卓巳は万里子のために怒ってくれているのだ。自分に向けられる卓巳の目に、憐憫も侮蔑もなかった。怒りの奥に見えるのは。

「判ったかい、万里子。確かに、命で責任を取らせるような言い方は間違いだった。僕の言い過ぎだ、訂正する。だが、この男だけは許せない。この家から追放し、二度と敷居は跨がせない。そのほうが君も安心だろう?」

そんな卓巳に、万里子は静かに首を横に振った。

「そしてあなたも……おじい様と同じ間違いを犯すのですか? たった一言『許す』と言えば済むことなのに……。卓巳さんはこの邸で、声を荒げたことなどなかったと聞きました。太一郎さんも、卓巳さんが何を考えているのか判らない、と」

静寂の中、万里子は卓巳の瞳を見つめたまま、思いのたけを口に
する。

「わたしが初めてこの家を訪れた日に、卓巳さんも初めて、本気で太一郎さんを怒ったのでしょう? あの時、叔父様も叔母様もお叱りにはならなかった。その責任はどうされるんですか? 何をやっても叱られなかったら、それが良いことか悪いことか判らないわ。飼い犬に何も教えず、いきなり鞭で打って保健所に送るようなものじゃないですか!」

万里子は太一郎に歩み寄った。

そのまま、自分の羽織ったシヨールを外して、彼の下半身に掛け

る。卓巳の狂気に満ちた怒りをまともに喰らい、太一郎は本気で怯え失禁していたのだ。

「今じゃなくてもいいから、ちゃんと謝ってください。わたしだけじゃなくて、茜さんにも。そして、あなたが傷つけた人みんなに」

太一郎は床を見つめたまま震えながら言った。

「……なぐればいい……おれのこと」

「殴られたら痛いでしょう？ わたしは、自分がされて嫌なことは、人にもしません」

その言葉に太一郎はハツとして顔を上げ、万里子を見た。

瞬間　卓巳が後方から万里子を抱き寄せ、太一郎の側から引き離す。

「卓巳さん」

「僕が見逃しても、告訴されたらお終いだ。まあ、刑務所に……いや、いつそ保健所にでも叩き込まれて処分されたほうが、社会のためになるんだろうが」

万里子の言葉を受け、卓巳は悪意を籠めて太一郎を犬に例えたのだった。

そんな卓巳の右手を、万里子は両手でそっと包み込む。そこは、太一郎の血で汚れているだけでなく、卓巳自身の拳も傷ついていた。「暴力はだめです。あなたに何かあったら、わたしはどうしたらいいんですか……」

最初からそうであった。万里子は卓巳の痛い所ばかり突いてくる。太一郎がどんな悪さをして、卓巳はまともに叱ったことなどなかった。正直に言えば、女性をレイプして妊娠させたと聞いても、金で済ませればいい、自分には関係ないとすら思っていた。

卓巳自身、セックスに関することには全てコンプレックスがある。女を見ても抱きたいとすら思えない。卓巳の男としての価値はゼロ

なのだ。女を抱き、子供を作ることの出来る太一郎に嫉妬すら覚え、近づきたくなかった。

万里子さえ無事ならそれでいい。仮に、太一郎が茜を犯していても、追い出す理由が出来た、とすら考えたはずだ。それは卓巳の浅ましい見であった。挙げ句、万里子を守れなかった苛立ちを、“正義”と呼んで、太一郎にぶつけたのである。

(高潔も何も無い。騎士^{ナイト}気取りが聞いて呆れる……)

「判った。太一郎、殴ったことは謝る、済まなかった。だが、君が万里子や佐伯くんにしたことは傷害と強姦未遂だ。訴えられたら、君は自身で償うことになる。藤原の名前を使い、金で解決するような真似は二度としない。何度も与えられた更生のチャンスを、棒に振ったのは君自身だ。無論、僕を訴えるのも自由だ。だが、君が万里子にしたことは……たとえ彼女が許しても、僕は許さない。それだけは忘れるな」

卓巳は裸足の万里子を抱き上げると、母屋に向かって歩き出す。張り詰めた空気は、ようやく解放されたのであった。

第五章 熱愛 (5) 赦し(後書き)

あけましておめでとございます。

怒り冷めやらぬ方もいらっしやるかと思いますが……新年です、万里子に免じて赦してやって下さいm)——(m)いや、彼らはまだ12月ですが(^^;))

ということ、サブタイトル通り、明日以降、ジェットコースターからメリーゴーランドに変わります。

甘い新婚生活を彼らにも送って頂きましょう！
しばらくの間は……ね(^^;))

では、本年もこんな感じで、よろしくお願い致します(平伏)

御堂志生

第五章 熱愛 (6) Happy birthday to you

「もう大丈夫ですから……」

万里子はその言葉をさつきから五回は繰り返していた。

卓巳は万里子を抱き上げ二人の部屋まで戻った。

邸内は再びざわつき、それはしばらく続いたのである。まず、卓巳の姿が見えなくなった途端、尚子が正気に戻った。いや、普段通り、常識を失ったと言うほうが正しいかも知れない。一度は見捨てたはずの太一郎の名を呼び、卓巳を「人殺しも同然」と罵る。

そして、その太一郎のために再度、主治医の安西医師が呼ばれたのだ。

あんだいみのる
安西実医師は四十代で、元々は彼の父親が藤原家のホームドクターであった。卓巳の祖父・高德の支援で安西の父は個人病院を開業。高德の死後、五年前に息子の実に引継ぎ、現在に至る。藤原家に恩義を感じているのか、いつでも往診には応じてくれていた。

「見た目の割に骨折もなく、酷い怪我じゃなかったよ」

太一郎の様子を報告がてら、卓巳の手の傷を診ようと部屋まで安西医師は来てくれた。

「君は相当手馴れているな。若い頃はやんちゃだったんだろう？」

そんな風にかかわれたのが面白くなかったのか、卓巳は治療を断わり、

「昔のことは覚えてませんよ。ただ、加減は頭じゃなく体で覚えていただけです」

ニコリともせずに応えたのであった。

「奴に殴られた時、頭に衝撃を受けてる恐れがある。少しでも具合が悪くなったら言うんだ」

太一郎のことなど気にもせず、自分の怪我は絆創膏を貼るだけで済ませながら……万里子のことは心配のし通しである。部屋に戻ってから片時も離れようとしない。

「卓巳さん。そんなに酷く殴られたわけじゃありませんから。頭も打つてませんし……。大丈夫ですから、もう心配しないで下さい」

「僕が傍にいるのは迷惑なのか？」

「そんなことはありません。そうじゃなくて」

「じゃあ、今日は僕の言う通りにするんだ。頼むから、そうしてくれ」

卓巳が傍にいてくれて、嫌なわけがない。万里子は困ったような微笑を浮かべ、肯くのであった。

数時間後、私室のリビングは華やいだムードと甘い匂いで一杯になっっていた。

応接セットのテーブルにはケーキが置かれている。二人で作った卓巳のバースデーケーキだ。大粒のイチゴが五個、ケーキの上に綺麗に並んでいた。生クリームも均等に塗られ、まるでプロの仕上げだ。

それもそのはず ケーキは藤原家お抱えのコックが、デコレーションしたものであった。

ちょうど、最終段階の直前に事件が起こり、ケーキは途中で止まったままになってしまった。

「せっかく、卓巳さんが一緒に作ってくれたのに……」

万里子がそう言って残念がっていると聞き、コックたちは彼女のために、綺麗に完成させてくれたのだった。嫁いで一ヶ月にもならない。それでも、使用人たちから信頼と尊敬を受けるのは、万里子の人柄というものだろう。

大きめの蝋燭が青・緑・黄色と三本あり、暗がりにはゆらゆらと柔らかな火が灯る。そして万里子は透き通るような声で歌い始めたのだ。

「Happy birthday to you,
Happy birthday to you,
Happy birthday, dear 卓巳さん,
Happy birthday to you。」

卓巳は万里子に促され、蝋燭を一気に吹き消した。

「卓巳さん、お誕生日おめでとーございます」

「……ありがとう」

心なしか卓巳の声が震えて聞こえた。

「あ、すぐに灯りを点けますね」

万里子がリモコンを手にボタンを押そうとした瞬間である。横からふわっと卓巳が抱きついた。

「どこか痛かったら言ってくれ。少しでいい。しばらく、このままで……」

「卓巳さん」

「生きてきて良かったと、ようやく思えた。この世に生まれてきて良かった。初めて、両親に礼を言いたい」

数日前、卓巳に押し倒されたカウチソファに万里子は座っている。今日の卓巳は当然そんな乱暴な真似はせず、ただ、壊れ物を抱き締めるようにそうつと包み込んだ。卓巳の温もりで万里子は癒され……太一郎から与えられたショックが少しずつ和らいで行くのが判る。だが、卓巳の指先が万里子の頬に触れた瞬間。

「ごめんなさいっ」

キスの気配に、万里子は卓巳を押し退け、顔を背けてしまった。

「すまない。痛かったかい？ 勘弁してくれ」

卓巳は傷に触れたのかと思い、慌てて謝る。だが、それは決して卓巳のせいではなかった。

太一郎にキスされた。卓巳から預かった大切なものに、傷をつけてしまったようで……万里子は申し訳なさで一杯だ。しかし、卓巳に話すつもりはない。なぜなら、それを知れば、卓巳はもう一度太一郎を殴りに行くであろう。

「万里子？ 具合が悪いのか？ すぐに救急車を」

「違うの。本当に大丈夫だから……ただ、二度とあんな風に人を殴ったりしないで下さい。お願い、約束して」

卓巳は少し視線を泳がせ、小さな声で答えた。

「出来ない」

「卓巳さん！」

万里子の右手に巻かれた包帯に、卓巳は唇を寄せて呟いた。

「太一郎に限らず、君を傷つけるものが現れたら、僕は許さない」

「それは無理です」

「どういう意味だ？ 僕じゃ君を守れないと言うのか？ そりゃ、今回も君に怪我をさせてしまった。本当に申し訳ないと思っている。でも」

万里子は自分の右手に添えられた卓巳に手に、左手を重ねる。

「違います。だって、わたしを傷つけることが出来るのは……卓巳さん、あなただけですもの。太一郎さんにいくら叩かれても、それは一瞬の痛み。あなたに背を向けられたら……わたしは死んでしまおうわ」

「万里子、震えている。僕が怖いかい？」

「いいえ。ただ、唇が痛くて……キスは」

小さな声で万里子は嘘をついた。

だが、卓巳にも万里子の痛みが唇ではなく、別のところにあると

気付き。

「ずるくないか、万里子」

卓巳はわざと、少しふざけた口調で言った。

「え？ あの」

「僕のことは引っ叩いたくせに、奴にはお咎めなしなんて」

「それは……」

少し悩んだが、万里子も思い出した。オーナーズスイートで契約を交わした日のことを言っているのだ。

卓巳は自分の左頬を擦りながら、

「結構効いた一発だったな」

「いいんですか？ そんなこと仰って」

「え？」

「どうして叩かれたのか……わたしに何て仰ったか、思い出して言ってみてください」

卓巳はあの日の失言を思い出したのだろう、手は頬から口に移動し、押さえたまま黙り込む。

万里子はクスツと笑みを浮かべ、卓巳の胸に身体を預けた。卓巳が再び、万里子を優しく抱き締めたのは言うまでもない。

第五章 熱愛 (7) 予感

物音が聞こえた気がした。

卓巳は目を覚まし、ベッドサイドの時計に目をやる。まだ、二時を回った辺りだ。間接照明は一旦天井を照らし、下方に降り注ぐ光が、家具を朧おぼろげに浮かび立たせていた。

隣のベッドを見ると、万里子は布団に潜り込む様にして眠っている。

卓巳はふと何かを思い出した。静かにベッドから下り、ラウンジチェアのオットマンに向かう。そこに置かれた万里子からのプレゼントを手に取り……。

「急いで編んだんです。だから、あまり手の込んだ柄にはならなくてゴメンなさい」

そう言っただけで差し出したのは、手編みのフィッシャーマンセーターであった。クラシックな四つの柄『ハニカム・ダイヤ・ケーブル・バスケット』で編まれており、色はオフホワイト。

素人の卓巳にも、これが十二月に入ってから編まれたものでないことくらい、すぐに判る。

「いったい……いつからこれを？」

「入籍した日です。婚姻届を見て、卓巳さんの誕生日が判ったからでも、結婚式の準備もあって、あまり時間が取れなくて」

ふわつと微笑む万里子に一瞬見惚れ……。直後、卓巳は頭に浮かんだことを尋ねてみた。

「これは、皆に編んでるのかな？」

「父には何枚か……後、忍にはカーディガンを編んだこともありますけど」

万里子には卓巳の質問の意味が伝わらなかつたらしい。

名前を口にすることに気恥ずかしさを覚えつつ、

「いや、そうじゃなくて……例の、俊介くんにも編んでやったのか、と聞いている」

照れ隠しに、少々慥然とした顔で質問した。

今度は、そんな卓巳を万里子はクスクス笑う。

「セーターはありませんけど……マフラーなら。でも、中学生の頃ですよ」

「だったら、来年はマフラーにしてくれ」

「来年でいいんですか？」

ちよつと悪戯っぽく万里子は微笑む。

「それは、どういう」

「クリスマス用に、これと同じデザインのマフラーを編んでるんですけど……間に合わなかつたらゴメンなさい」

万里子はペロツと舌を出して肩を竦めた。口元の絆創膏が痛々しくて、余計に卓巳は万里子の頬に触れなくなる。だが、太一郎の暴力が切っ掛けとなり、心に負った古傷が再び痛み出したようだ。そんな万里子に、卓巳からしつこくアプローチすることは避けたかった。

「マフラーは長めに頼む」

万里子と少し距離を取り、卓巳は口にした。

「長いほうがお好きなんですか？」

「いや、そうじゃなくて……二人で巻いてみたい」

さすがの万里子も絶句したみたいだ。だが、卓巳も諦めない。

「外がイヤなら邸の庭でもいい！ その……若い頃に何もしたことがないから……そういったカップルのイベントというか、楽しみと
いうか」

「……庭でよかつたら」

万里子の返事に卓巳は有頂天になり、更に願望を口にする。

「来年は、同じセーターをもう一枚編んでくれ」

「同じ、ですか？」

「そうだ……君の分を」

卓巳の中では、愛し合う二人にペアルックは外せないアイテムであつた。

呆れた顔で、それでも笑いながら肯いてくれた万里子が、胸のスクリーンに映し出された。卓巳はほんの数時間前を思い出しながら、そつとセーターに触れてみる。すると、夢のような妄想に神経が蕩けそつになり……。

「いやあ！ やあつ、やめて、卓巳さん助けてっ！」

絹を裂くような万里子の悲鳴が、突如、闇に響いた。

くくくくくくくくく

卓巳は満面の笑みでプレゼントを受け取ってくれた。

ケーキもちゃんと食べてくれたのである。

実は、卓巳は甘い物が苦手だ。食後のデザートも滅多に食べない。一緒に暮し始めてすぐに判った。だが、それでも卓巳は二人で作ったケーキを食べてくれたのだ。たとえ、厚さ二センチくらいだったとしても。

本当は、卓巳にキスして欲しかった。

でも、万里子の唇は汚れている。自分に触れたら卓巳まで穢すこ

とになる。そんなことは、怖くて出来なかった。熱いタオルで拭い、消毒液も使った。それでも万里子には充分だと思えない。せめて、お風呂に入り、万里子自身が自分を許せるまで洗ってからでなければ……。

しかし卓巳が、精密検査を受けるまでは、と入浴を禁じたのである。

少しでも汚れを落とすたくて、万里子は必死で唇を擦った。唇がひりひりと痛む。それで皮がめくれ、表面が綺麗になるなら構わないとすら思えた。

『……万里子……』

卓巳が万里子を呼ぶ声が聞こえる。振り返ると、突然、温かいものが唇に重なった。

離れた瞬間、万里子は目を開け……その表情は凍りつく。彼女に口づけたのは太一郎だったのだ。

『“愛して”やるよ。身体の隅々まで』

太一郎はそう言うと、下卑た笑いを浮かべ、万里子の衣服を脱がそうとした。

『お前の目ってそそられるんだよなあ』

太一郎の声は、次第に、四年前の男たちの声に替わっていく。

『お前が誘ったんだ。その目で……』

身体を二つに引き裂かれるような痛みが、何度も……何度も繰り返し、万里子を苛んだ。

(いや……いや！ 助けて、助けて、卓巳さん！ 卓巳さん、卓巳

さん)

「万里子！ 万里子、しっかりしろ！ 大丈夫だ、僕がいる。傍にいるから」

「た、くみ、さん」

掠れる声と共に、涙が一滴、万里子の瞳から零れ落ちる。

「万里子、僕だ。もう、だいじょう」

「卓巳、さん……どうして助けてくれないの？ 怖かったのに……キスはあなただけだったの。もう、何もなくなってしまうたから……もう、だめなの。体中が痛い……きれいじゃなくてゴメンなさい。もう、いや……死なせて……卓巳さんに逢えないから……だから」

万里子は錯乱していた。

胸の奥に抱えた不安が、ただ闇雲に口を衝いて出てくる。

太一郎にセーターを引き上げられた時に、胸を見られたこともシヨックだった。下着がずれ、胸の頂きまで見られたかも知れない。その時に、僅かだが太一郎の指が肌に触れて……。

そんなことを考えながら、万里子は可笑しくなった。

今更、胸がどうだと言うのだろう。それよりもっと恥ずかしい場所を、見知らぬ男たちに見られている。もっと醜猥な行為までして、癒えない傷を負ってしまった。男たちの体液は万里子の身体に吸収され、細胞まで侵蝕している。

幸福過ぎた夜、万里子の不安は形となって、彼女の心に襲い掛かった。

混濁した意識の中、万里子は絶望を口にする。

「わたしはもう……助からない……」

「万里子　目を覚ますんだ！　僕だ、大丈夫、僕がいる。万里子、必ず僕が助ける！」

第五章 熱愛 (8) 女神に触れた夜(前書き)

更新が遅くなつてすみませんm)——) m

ほんの少しラブエッチです(苦笑)

苦手な方はご注意ください。

第五章 熱愛 (8) 女神に触れた夜

ちゃんと目は開いている。なのに、意識が混濁したまま万里子は泣き続けていた。

このまま万里子がどこかに行ってしまうそう、卓巳は怖くて堪らない。いつもなら、決して力一杯抱き締めたりはしない。だが今は、どうにか引き止めたくて……卓巳は万里子の名を呼び、息が止まりそうなほど強く掻き抱いた。

「た、たくみさん……くるしい」

「あ、ああ、ゴメン」

どれくらいの間が過ぎただろう。万里子の小さな声が聞こえた。少し体を離し、卓巳は万里子の顔を覗き込む。その瞳は焦点が定まり、卓巳をジッと見つめていた。ほんの僅か、困惑と哀しげな色が浮かんでいたが……卓巳はそれを軽く無視する。

「万里子、何があった？ 太一郎に何をされたんだ？ もし、他にも殴られたところがあるなら、ちゃんと医者に診てもらわないとダメだ」

この時、卓巳は万里子のベッドの中にいた。しっかりと抱き締めるために、万里子の身体にぴったりと寄り添っている。同じベッドで眠ることはあっても、ここまで近づいたのは初めてだろう。

そんな卓巳の問いに、万里子は夜目にも薄っすらと頬を染めながら答えたのだ。

「胸を……見られて……それに、指先が少し、む、胸に触れて」

その声は震えていた。加えて、戸惑い一つも告白する万里子の声は、妙に艶かしい。卓巳の心拍と血圧は一気上昇する。

そのせいか、卓巳もこれ以上ないほどの震える声で、信じられない言葉を口にした。

「僕にも……見せて欲しい」

卓巳はそう言った時、すぐさま後悔したが、後の祭りである。

万里子の右手が卓巳のパジャマの袖を掴み、左手が胸辺りに触れ……。卓巳は突き飛ばされるのを覚悟した。

深夜の、寝室の空気は凜として張り詰め、二つの呼吸音すら消し去る。その緊張を断ち切るように、万里子はゆっくりと肯くのであった。

万里子はシルクのパジャマを着ていた。卓巳は白蝶貝しらせかいのボタンに触れ、上から一つずつ外し始める。これが普通の男なら、お決まりの悦びは約束されたも同然で、興奮の極みであろう。

だが、卓巳にとってこの瞬間は試練であった。指が震え、手が滑る……。卓巳自身が滑稽だと思えるほどの無様さだ。万里子の息遣いがため息に変わること、卓巳は怯えていた。

シエルボタンを全部外し終えた瞬間　シルクは万里子の肌を左右に滑り落ちる。

そこには、薄いキャミソールから今にも零れ落ちそうな、象牙色に煌く豊かな胸があった。申し訳程度に隠された二つの頂きは、レースに透けてくつきりと見える。

揺蕩たゆたう灯りに幻想的に浮かび上がった万里子の姿に、卓巳は祈りにも似た感動を覚えていた。

（まるで女神だ……この世に、こんな美しいものがあっていいのか

?)

色んな女性に散々迫られてきた。慎みとは正反対の意味をなすのが女性の裸だと、卓巳は思い続けた。とくに、撓たわわな女性の胸は淫乱さの象徴だ。触れるのも汚らわしい。

それが。

万里子の半裸を目にし、そこに触れたい、口づけたい、と初めて思った。卓巳は瞬きもせず、万里子の身体を見つめ続ける。

「あの……そんなに見ないで、下さい」

「すまない。あまりにキレイで……」

「キレイじゃない……です。……傷もあって」

万里子の声はどんどん小さくなり、語尾はかき消されて行く。

言われて初めて、薄っすらと赤い線のようなものがあることに卓巳は気付いた。

「どうしたんだ？ これは」

本当に薄く長さも二センチ程度のものだ。だが、例え一ミリでも卓巳にとって許せないほどの感情を呼び覚ました。

「これは……太郎がやったのか」

その怒気を含んだ声に、万里子は慌てて釈明した。

「あの、当たったんです。掠ったっていうか……。それだけです」

「この傷が痛むのか？」

(もう二、三発殴っておけばよかった)

卓巳はそんなことを考えつつ、無意識で万里子の傷に触れた。指先で白い肌をそっと撫でてみる……。

直後、万里子の身体がビクツツとして強張り、卓巳は慌てて手を引

く。

「すまない、痛かったか？」

「いえ……あの……お願いがあるんですけど」

「なんだい？ 何でも言っていよいよ」

まさに“何でも”そんな気分であった。万里子の望みならなんでも叶えてやりたい。そんな卓巳に万里子が願ったのは、

「あの……キス……してもらえませんか？」

卓巳は息を呑む。一瞬、幻聴だと思っただくらいだ。

「今、キスって言ったのか？」

万里子はコクンと肯いた。

「太一郎さんに……唇を奪われて。何度も洗って、消毒液も使ったんですけど……落ちない気がして。ゴメンなさい、ゴメンなさい……あなた以外の人と」

そう言いながら、万里子は左手の甲で必死になって唇を擦る。

「止せ。何をやってるんだ、万里子！」

卓巳は万里子の手を押さえ、唇に目を凝らした。

やっと、万里子のキスを避ける仕草と、それでいて、寂しい眼差しを卓巳に向ける理由が判った。

いつもはふつくらと艶めく彼女の唇が、今は所々擦り切れて血が滲んでいる。卓巳は恐る恐る指先で触れ、その荒れた感触に驚いた。おそらく、ベッドに入ってから無意識で擦り続けたのだろう。

（こんなになるまで……。もう十発、いや、やはり叩き出してやるべきだった！）

卓巳は、もう一度、太一郎を殴りに行きたい衝動に駆られる。だが今は、そんな場合ではなかった。

「もう……ダメですか？ わたしとは、もう」

涙に滲んだ万里子の声は、卓巳の中のスイッチを押した。

言葉もなく、息もつかせぬように、卓巳は万里子に口づける。

それでも、切れた口の端には触れないように、と気遣いは見せたつもりだ。しかし、重なる万里子の唇から微かな吐息が漏れるたび、卓巳の理性に霧が掛かって行く。

自制心という名の障害に目隠しがされた時、卓巳の心は万里子一色に染まった。そして、これまでになく強く唇を押し付け、舌先で割り込んだ口腔まで躊躇いなく愛撫する。

次第にキスは、万里子の首筋から胸の谷間にかけて下りて行き、薄っすらと付いた傷を軽く舐め上げた。

刹那　万里子の手が卓巳の肩を強く掴む。

「たくみさん……好きです」

その声は溢れそうなほどの愛に満ちていて……。

「好きだよ。あいしてる、万里子」

万里子の手が“拒否”ではないと判ったとき、卓巳は、ガラス細工の壊れ物を抱き留めるかのように、優しく万里子を抱き締め包み込んでいた。

第五章 熱愛 (9) 愛するあまり (前書き)

すみません、忘れてました(^^;)

引き続き、ちょっとだけラブエッチモードです。

苦手な方はご注意下さいm(____)m

第五章 熱愛 (9) 愛するあまり

熱を孕んだ切ない吐息が夫婦の寝室を包み込んだ。

万里子の身体からは甘い香りが漂う。どこもかしこも触れた場所はすべてが柔らかく、壊れそうに繊細だ。極上の絹に……それも温かなシルクに、卓巳の体は吸い取られる感触だった。

数日前、リビングのカウチソファに押し倒し、強引に同じ場所にキスした時とはまるで違う。あの時の万里子は冷たく固まっていた。硬く張り詰めた肌が、今は、ほんのりピンク色に染まっている。それはあたかも、卓巳の唇を待つかのように。

唇を重ね、万里子が嫌がってないことを確認すると、卓巳はそこから胸元までを辿る。何度も何度も同じ行為を繰り返す、それは少しずつ場所を変え、キャミソールの肩紐をずらしていった。

その時、卓巳は何かに気付き、弾かれたように体を起こしたのだ。万里子の左肩と首の付け根にある赤い刻印。それは キスマークであった。

「こんなことまで…… 太一郎にされたのか？ もっと殴ってやればよかった！」

愛撫をやめ、ふいに声を上げる卓巳に万里子はビククリした。

「え？ こんな……って」

「首の真横に充血がある。これは唇の痕だろうか？」

その言葉に、万里子は頬を赤らめながら、意外な犯人を教えてくださいました。

「昼間はハイネックのセーターを着ていました。だから、そんな所に太一郎さんが唇なんて……あなた、です。卓巳さんが、ソファの上で。あの時、強く吸われたから……痕が消えなくて」

今度は卓巳が赤面する番である。

太一郎を殴れた義理じゃない。耳まで赤く染め、卓巳は必死で謝った。

「ご、ごめん。痛かっただろう？　こんなに強く吸っていたとは思わなかった。これからは気をつけるから」

「いえ……そんな。あんな場所で無理にされるのは嫌ですけど……。でも、痕が残るのは嫌じゃないです。あなたの妻になれた証のような気がして」

万里子の声が途切れ、ベッドの中に再び静寂が訪れる。今度は優しく、万里子の望む“妻の証”を、卓巳は至る場所に残して回った。

「僕の手で、触れてもいいかい？」

卓巳はとうとうキャミソールの肩紐を掴み、万里子の許可を待つ。彼女は包帯の巻いた右手を顔の上に翳して、卓巳の問い掛けに小さく肯いた。

その膨らみの全体を目にしたことは当然ある。

だが、そこから先は未知の世界だ。卓巳は両方の乳房を、手の平ですくい上げるように、そつと触れた。先ほどまでレースに隠された部分は、本当に桜の花びらのような淡い色をしている。その先端に指で触れた瞬間……。

「……ん……っ」

万里子の喉から漏れるような聞こえた。

それは卓巳にとって、落雷を受けたような衝撃だった。一気に電流が流れ込み、スイッチは弾け飛ぶ。

たった今、指で触れたその場所に、卓巳は唇をつけ、更には口に含んだ。

何もかもが初めてだった。卓巳は万里子を愛そうと夢中になる。彼は自らの本能にせつせと火をくべ、小さな種火はやがて炎上しはじめた。万里子の漏らした僅かな官能を伴う声が、卓巳の理性を十光年彼方へと吹き飛ばしてしまったのだ。彼はなんと、そのまま万里子の下半身に手を伸ばした。

「あっ！？ やっ！ ちょっと待って」

小さな抗議を無視して、パジャマのズボンの中に、スリりと手を差し込む。

「待って……卓巳さん！ それはちょっと……今はまだ……お願い」

生まれて初めて官能の海に叩き込まれたのだ。溺れそうな卓巳には、万里子が本気で抵抗していることに気付くことが出来ない。

卓巳の手がショーツに届いた瞬間。

「いやっ！ やめて！ いや、そこは触らないで……いやあっ！」

卓巳の耳に万里子の涙声が響いた。そして、掴まれた指の力に、卓巳は失態を犯したことに気付く。卓巳は万里子から飛び退くと、ダブルベッドに正座をして頭を下げた。

「すまないっ！ つい……悪かった。もうしない。何もしない。無断で下半身に手を触れるような真似は決してしない。悪かった。本当にすまない」

「ごめんなさい……わたし」

「君が謝るんじゃない。悪いのは僕だ。ルールを破った時は叱らないとダメだ。だから、男は付け上がるんだ。僕も男だから、ついス

トッパーが外れる。君が嫌な時は、叩いても蹴ってもいい、止めさせてくれ。愛するあまり、罪を犯しそうになる。僕を罪人にしないでくれ、頼む」

度を越した誠実さが卓巳の長所であり、短所でもあった。

人生の不幸を嘆き、親の無責任さを口にして、自分の権利を主張したなら、卓巳は内に病巣を抱えることはなかったはずである。

だが運命は、そんな卓巳に相応しい女神を選んでくれた。

万里子は卓巳の真摯な思いを酌み取り、微笑みを返した。

「……判りました」

その笑顔は卓巳にとって、凍える寒さを忘れさせるストーブの炎だ。万里子の“お許し”に心の底から安堵する。

「あの……今夜はもう、着ても、いいですか？ 恥ずかしいから……」

うつかりしていた。万里子はこの寒い中、上半身が剥き出しなのだ。抱き合っている時はいいが、離れた途端に体温は下がる。

卓巳は毛布を手繰り寄せ、万里子の肩に掛けながら、

「ああ、もちろんだ。すまない、寒かったらどう？ でも、一つだけお願いがあるんだが」

「なんですか？」

「脱がせたのは僕だから、着るのも手伝いたいんだが……いいかな？」

「……はい」

卓巳の本音は、もう一度あの胸にキスしたいと願っていた。

数え切れぬほど口づけて、卓巳自身もパジャマを脱ぎ捨て、裸で抱き合いたい。それで全てが解決するわけでないことは判っている。それでも、可能か不可能かではなく、ただ、そうしたかったのだ。

だが、卓巳は体内を焼き尽くすような、燃え盛る激情は微塵も見せなかった。これ以上万里子を、怖がらせたくはなかったからだ。キヤミソールで胸を覆い、肩紐を元に戻した。そして、彼が外したパジャマのボタンを、今度は下から順に一つ一つ掛けて行く。隠されていく素肌に、後る髪は引かれたが……。

（落ち着け、焦るんじゃない。万里子は僕の妻なんだ）

深呼吸を一つすると卓巳はわざと気取った声を出した。

「奥様、隣に寝て腕枕をする名誉はいただけますか？」

そのお茶目な口調に、万里子は吹き出しながら……。「ええ、与えましょう」

二人は顔を見合わせて笑った。と、そのまま、ごく自然に唇を重ね。

軽くキスし合っては少し離れ、また唇を寄せ合う。まるで高校生同士の初体験よろしく、二人は少しずつ、寄り添う温もりを知って行くのであった。

第五章 熱愛 (10) 真実を君に…

卓巳の腕の中はなんて心地が良いのだろう。

万里子は半分眠りかけた頭で、ボンヤリとそんなことを考えていた。悲しく辛い気持ちで目を開けたとき、そこに卓巳がいたのだ。夢か現実か区別がつかず、万里子は思わずキスをねだっていた。後になって考えれば、恐ろしく大胆なことを言ったものである。

(卓巳さんに裸を見られてしまったんだわ……)

卓巳は綺麗だと言ってくれた。

なんて優しく、紳士的で素晴らしい男性なのだろう。それでいて卓巳のキスはこの上なく情熱的であった。卓巳の唇が胸の先端に触れた瞬間、例えようのない幸福感が万里子を包み込んだ。

次は……次の機会は、下半身を触られても、声を上げないように頑張ろう。次こそは……。

「……り、こ。万里子？ もう寝たのかい？」

「え？ あ、いえ……まだ起きています」

横になった後も、しばらくキスを繰り返した二人だったが……。

空白の時間が、万里子を夢の世界へ手招きした。逆らう理由がない。万里子は卓巳の腕の中で安らぎ、眠りにつこうと目を閉じて

その直後、卓巳の声が聞こえたのである。

「もしよければ、少し話をしたいんだが」

それは少し前までの、熱に浮かされたような声ではない。僅かだ

が、卓巳の緊張が万里子にも伝わる。気のせいか、室温まで下がったようだ。万里子は卓巳のパジャマにしがみついて答えた。

「ええ、何でしょうか？」

「実は……僕は君に嘘をついていた」

「え？」

「すまない。本当にすまない。だが、どうしても話せなかったんだ」
そこまで言うと、卓巳の口は再び閉じてしまった。

沈黙したまま時間だけが過ぎる。そのせいだろうか、時計の秒針が刻む音が異様に大きく聞こえた。

「たくみ、さん？」

卓巳の眉間には皺が寄り、あまりに深刻な表情である。それは、快楽を伴うセックスに、一歩足を踏み入れたばかりの万里子まで不安に巻き込んだ。

「あ、ああ、悪い。いざとなると、なかなか……」

「正直に仰ってください。やっぱり、わたしのことお気に召しませんでした？ この間のプロポーズを撤回されるなら、わたしは」

「違う。そうじゃない！ 何を言ってるんだ、万里子。君は最高だった。女神のような美しさだ。いや、それ以上だよ。僕には勿体ないくらいで……本当に、僕のような男には」

「卓巳さん……」

そのまま、また黙り込んでしまう。

万里子はそんな卓巳の様子に、初めて藤原邸を訪れた時のことを思い出していた。

とくにあの…… 皐月が卓巳の病状に関する報告書を出した時、彼の体は小刻みに震えていたのだ。酷く苦しそうな表情で、万里子の手をしっかりと握り……その手は驚くほど汗ばんでいた。

「卓巳さん。わたしはあなたからどんな告白を聞いても、気持ちには

変わりません。たとえあなたが犯罪者でも、何万年離れた惑星^{ほし}から来たって言われても、です」

それはつい先日、万里子に正しいプロポーズをした時、卓巳の言った台詞と同じであった。

万里子は卓巳の左手を持ち上げ、自分の右手を絡める。包帯が少し邪魔であったが、その代わりに左手を添え、大切そうに両手で挟み込んだ。そして、最上級の笑顔を見せながら、あらためて、プロポーズの返事をしたのだった。

「あなたが、わたしのことを“愛してる”って泣いて頼むから……一生お傍にすることにしました。だから、もしあなたが正義の味方で、役目を終えて惑星^{ほし}帰られる時は、わたしも連れて行って下さいね」

万里子につられ、卓巳の頬も緩む。緊張が解れたようで、ようやく卓巳は重い口を開き始めたのだった。

「僕の母の話はしたよね？ 母は僕の前でも構わず男を引つ張り込んで、セックス三昧だったって……今なら多少は母の苦勞も判らないではない。でも、中学生の少年には無理な話だ」

そこまで話し、卓巳は静かに身を起こした。万里子も一緒に起き上がる。

そして、卓巳が語ったことは万里子にとって衝撃の内容であった。

「僕が中学三年の時だ。店から酔って帰った母は、僕に関係を迫った」

「……」

万里子は口元を押さえ、言葉もない。

卓巳は中空を睨んだまま、淡々と話し始める。

「母は……僕のアレを啜たえて勃たたそうとしたんだ。僕は自分を抑えるのに必死だった。勃たつなってね。母の中に入れられるようにはなるなって、必死で抵抗してた。それから何度か、義父が仕事で居ない夜に……。でも、どうやってもダメだと判ると、父も時々ダメだった、親子揃もって……と笑ってたよ」

卓巳は自嘲じちゆう気味に薄笑いを浮かべた。

万里子はこの時、聞くだけで切なくなる告白を止めようとしたのだ。しかし、卓巳は言葉にすることを望んでいる。「話せない」万里子には、「話したい」卓巳の想いが痛いほど判った。妻であるなら、卓巳を愛しているなら、聞かなければならない。万里子は、卓巳のどんな告白も受け止める覚悟を決める。

「それでも……ホツとしてたんだ。罪を犯さずに済んだって。十八の時に母が亡くなり、僕はようやく解放された。女性に惹かれたり……当然、セックスのことも考えるようになった。でも、その……アダルトビデオや、そういった雑誌を見ても全く反応しなかったんだ。不安になって病院に行った。その時のカルテを見つけてきて、叔母たちが騒いでたんだよ」

卓巳は以前『失恋のショックで一時期、女性と関係が持てなくなつたことがある』そう万里子に語った。それが卓巳の言う『嘘』であろうか？ 万里子はそう尋ねたかったが、口は挟まず、卓巳の言葉を待った。

「医者いしやの診断は『心因性の性機能障害』だった。母のことで、性的事柄全てに嫌悪感を抱いている、と言われたんだ。自然治癒は困難で、時間を掛けて治療する必要がある、と。だが、僕はそれを否定した。自分はそんなに弱い人間ではない。母はもう亡くなつたし、

何年も前に割り切ったことだ。それを証明するために、僕は女性を口説いていきなりベッドに連れ込んだ」

「嘘だわ……そんな……卓巳さんに限って」

万里子が声を上げたのは卓巳の病名ではなく、女性とベッドを共にした、という告白。

しかし続く言葉に、万里子はこっそりと安堵のため息を漏らしたのである。

「結果は……見事、撃沈。下半身はピクリとも動かず、服すら脱がすことが出来なかった。僕は笑いものになり……逃げたんだ。二度と女には近づかない。そう決めていた僕に、静香は迫って来た」

「え？ 静香さんが、ですか？」

あずさのことは聞いていた万里子だが、静香のことは初耳だった。

「静香の裸を見た時、僕は吐いたんだ。美しいとも綺麗だとも思わなかった。無理矢理、母の胸を触らされたことを思い出したただけだ。手が腐っていく気がしたよ。セックスは罪だ。誰も彼も、愛という言葉を免罪符に使ってるだけだ。女の胸に顔を埋めて喘ぐなんて、そんなみつともない姿を晒すくらいなら、死んだほうがまだ……と、ついこの間まで本気で思っていたんだ」

第五章 熱愛 (10) 真実を君に… (後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

web拍手のお礼は活動報告にコメントしてしますので、お心当たりの方はぜひご確認下さいませ。

(活動報告 <http://mypage.ssyosetu.com/mypageblog/list/userid/36400/>)

切ない告白は続きます。

引き続きよろしくお願い致しますm(____)m

第五章 熱愛 (11) 甘やかな試練

遠くを見ていた卓巳は、その目を軽く閉じた。

そして開いた時に、隣にいる万里子を愛しそうにみつめて微笑む。しかし、そこから哀しみの色が消えることはなかった。

「僕は君に出逢ってしまった。どうしても、もう一度チャンスが欲しくて病院の検査を受けたんだ。だが、結果は、機能回復の可能性は限りなくゼロ……そう言われた」

「じゃあ、おばあ様はご存知で、あんな報告書を」

尚子たちの前に出した報告書は偽物だった。だから、医師の名前の書かれた診断書ではなかったのだ。偽りの診断書を医師に書かせる訳にはいかなかったのだろう。

卓巳の様子がおかしかったのも肯ける。万里子は、卓巳を想う皐月の深い愛情に涙が浮かんだ。

「祖母上は、心の繋がらない二人に身体の繋がりだけあっても意味はない、と。万里子、君を愛している。心の底から君を求めている。嘘じゃない。だが……僕の身体は反応しない。今もそうだ。すまない」

卓巳は頭を抱え込むようにして、万里子から顔を背けた。その肩は微かに震えている。それはまるで、小さな男の子が膝を抱えて泣いているようだ。

「卓巳さん……お願い、謝らないで……お願い」

「僕は、怖いんだ。あの母の子供だから、可能な状態になれば、母とでも関係したんじゃないか、って。君のことだって、傷つけたかも知れない。静香やメイドの永瀬もそうだ。愛はない、でも、反応したら間違いなく抱えていただろう。僕に太一郎を責める資格はな

い。出来ないからやらなかっただけだ。僕は罰が当たったんだよ。罪を犯さないように戒められたんだ」

「それは違うわ！」

自らを卑下するように卓巳は吐き捨てた。だが、卓巳はそんな人間でない。万里子は必死の想いで言葉を見つける。

「罪を……犯したから、罰が下るのよ。あなたは違う！ あなたのおかげで、お母様は救われたんだわ。自らの心を壊してまで、必死で耐えたあなたを誰が罰するというの？」

「神は時に非情だ。公平でも公正でもない。正しく生きていても、酷い目に遭わないとも限らない」

「それは……」

卓巳が言っているのは万里子自身のことだ。

それに気付いた時、万里子は息も出来ないほどの苦しさに、言葉を失う。

「愛する資格がないのは僕のほうなんだ。今まで、たくさん酷いことを言って済まなかった。万里子、プロポーズの答えはもう一度考えてくれていい。おそらく、僕には今日以上のことは出来ないだろう。妻になる、本当の悦びを教えることは……僕では無理だ」

「……昔……牧師様に尋ねたことがあります。神様はどうしてこんなに不公平なのか、と。神は不公平ではない、と言われました。今、辛い思いをしているなら、それは試練だ、と。神は、それに耐え得る者にだけ試練をお与えになる。だから、あなたは必ずそれを乗り越えて幸せになるでしょう。……そう言われました。卓巳さんは太一郎さんとは違います！ 本当に愛する人が現れたらきつと」

その言葉に驚いたのは卓巳のほうであった。

「待て、待ってくれ。僕が君を裏切るといつのか？」
「わたしじゃダメなんです。きつと……わたしじゃ……」

卓巳の真実の相手は万里子ではなかったのかも知れない。そう思うと、後は涙で言葉にならない。
そんな万里子を卓巳は抱き寄せた。

「馬鹿を言うな。僕が欲しいのは、抱きたいのは君だけだ。君が不安を覚えるなら、こんなモノは切り落としたって構わない。僕の妻は万里子しかいない。僕は、君と共に試練を乗り越えて幸福な家庭を築いていきたい。もう一度、返事を聞かせてくれ」

卓巳は全てを話してくれた。

自分も同じようにすべきだろうか？ そんな不安が万里子を襲う。
「その前に……私の過去を聞かなくても構わないんですか？」

「必要ない」

卓巳は即答だった。

理由は、万里子は嘘をついてないからだと言う。

「僕は自分の意思で君を抱かない」

誤解と嫉妬があったとはいえ、卓巳は酷い言葉で何度も万里子を傷つけた。

「あの言葉は全部嘘だ。本当はずっと抱きたかった。傷つけたことを謝りたくて、真実を告白した。だが、最後までは出来なくても、男として君の身体を愛したい。今夜のように少しずつ、僕たちのペースで愛し合う、というのはダメだろうか？ 君が受け入れてくれるなら、そんな夫婦の形を築いて行きたいと思っている」

卓巳の胸に抱かれ、万里子は幸せを噛み締めていた。

その一言一言に、万里子への愛が溢れている。

「うれしい……こんなに幸せなんて夢のよう。昨日の夕方には、死ぬことも覚悟していたのに……」

「ああ、そうだ、これだけは。たとえば、どんな辛い目に遭っても、死ぬことだけは考えないでくれ。もし、君が喉を突いて死んでいたら、僕は殺人者になっていた。そして、今日が僕ら三人の命日になっただろう」

万里子は情熱的な卓巳の言葉に、吸い寄せられるように口づけた。「わたしは、あなた以外の人は絶対に嫌です。卓巳さんとなら……乗り越えて行きたいと思っています」

突然のキスに卓巳は驚き、食い入るように万里子を見つめる。そして数秒後には、軽く触れる以上のキスを万里子に返していた。

「イエスに聞こえた。それでいいんだね？」

「はい。ずっと、あなたの妻でいさせてください。でも……わたしの裸は平気ですか？」

女性の胸に吐き気がすると卓巳は言った。でも、さっきの行為がとても我慢していたとは思えない。

「あんなことだけはしないと、心に誓っていたことを……僕はとうとうしてしまったな」

キスを止め、卓巳は前髪をかき上げながら恥ずかしそうに呟いた。その声は先ほどとは違って、自虐のムードはまるでない。寧ろ、キスによって卓巳の声に興奮の色が滲んできた。

「君の胸に吸い込まれるように口づけた。顔を埋めた時は、気が狂いそうなほどの悦びを知った。女性の身体を賛美して快樂を得るためにひれ伏すのは、罪に屈服することだと信じてたんだ。でも、違った。あの瞬間は最高だった。……愛する妻の身体に溺れて何が悪いんだ！」

ああ、万里子　君の胸は柔らかくて絹のよう肌触りだった。甘い香りに酔い痴れたよ。君に触れるたび、僕の体は清められた。今度は僕も上を脱いで君を抱き締めたい。今はまだ、情けない下半身を君の前に晒す自信はないが……いつか、生まれたままの姿で抱き合いたいと思っている」

「たくみ、さ」

万里子の声は卓巳の唇で遮られた。

数分後、卓巳の指は再び万里子のパジャマのボタンに触れ……新婚夫婦は翌朝の朝食に、大幅に遅れることになったのである。

第五章 熱愛 (12) 一条の光

恥ずかしそうに卓巳の胸に顔を埋め、囁いた万里子の声は今も耳から離れない。

「わたしも……卓巳さんになら全てを見て欲しい。いつかきつと……そう信じていてもいいですか？」

卓巳に異論などあるはずがない。

更に万里子は言ったのだ。

「あなたに会えないくらいなら、死んだほうがましだっと思ったの。キスも、それ以上も、他の女の人には絶対にしないで。あなたの夢中になる顔は、わたしにだけ見せて。わたし、もう、卓巳さんに捨てられたら生きていけない」

あれを誘惑だと思わない男がこの世にいるんだろうか？ そう考え苦笑した。

(ああ……そう言えば、三カ月前の僕じゃないか)

これが他の女なら、汚い手で触るなど振り払っていただろう。だが、この夜の卓巳は違った。

「ダメだ、万里子。そんな風に言ったら、またパジャマを脱がして夢中になって愛してしまう。本音を言えば、さつきからしたくて堪らないんだ。自分の中に、こんな欲望があるとは思ってもみなかった。妻を求めるのは罪じゃないと言ってくれ。ああ……もうダメだ、我慢できない」

卓巳は万里子の上に覆い被さり、キスを繰り返した。今度はボタンを二個外しただけで、そこから手を差し込み、万里子の肌に直接触れる。見えない分だけ興奮は増し、手の平はセンサーが付いたかのように敏感だ。卓巳は体中の神経を右手に集中させ、優しく労わ^{いた}

る様にゆっくりと揉みしだいた。

「……………」

万里子は唇を噛み締め、声を押し殺した。それが官能とも戸惑いとも、卓巳には推し量れず。愛しさは理性を押し流し、それはほんの僅かだが卓巳の体にも変化を齎^{もたら}して……………。

「卓巳さん……………卓巳さん」

「まりこ、ああ、万里子、愛してるよ」

一度通った道なら二度目は簡単だ。元々学習能力の高さと器用さには自信がある。

後日 恋愛問題の難しさは、ペーパーテストでは量れないことを知るが、この時の卓巳に判るはずもなく。

万里子の柔らかな肢体に唇を這わそうと卓巳は……………

「卓巳さん！ 起きて下さい。もう朝ですってば！」

官能とは程遠い差し迫った声に卓巳はハッと目覚めた。

「お、おはよう……………万里子」

「おはようございます。でも、時間が……………。それに、全然放して下さい
さらないし」

「あ、ああ、すまない」

どつやら、ずっと起こしていたらしい。しかも、卓巳の手は万里子のキャミソールの下に潜り込み、胸を掴んでいた。夢見心地ですと万里子の身体に触れていたようだ。

卓巳は恐る恐る、万里子の顔を覗き込む。

「本当に悪かった。怒ってるならどうか勘弁して欲しい……万里子？ 本気で怒ってたりしないよね？」

謝ることで尚更不安に陥る卓巳に、万里子は呆れたように笑い掛けた。

「もっつ、卓巳さんたら。……そんな顔なならないで、怒ってませんから。ね」

万里子はそう言うと、卓巳の鼻先にチュッとキスした。

男心とは何と現金なものであるう、と卓巳は思い知る。三十秒前の反省が、軽い挨拶のようなキス一つで吹き飛びそうになるのだ。しかも、万里子が電灯を点けたせいで、彼女のはだけたパジャマと素肌が目に飛び込んできた。首筋から胸元に掛けて到るところに卓巳の刻印が押し込めてある。

「万里子……それは、ちょっと、朝から刺激的すぎる」

「え？ きゃ！ 卓巳さんのエッチ！」

そう言ってパジャマの前を合わせ、毛布で胸元を隠す仕草もまた可愛らしく……。

(だめだ……これじゃキリがない)

卓巳は両手で前髪をかき上げ、後頭部で手を組んだ。気分を切り替えようと努力してみる。だが、視線は無意識のうちに万里子を追ってしまう。それはまるで、コンパスが北を向くような感じだ。

その時、卓巳は一つの事実に気づき、昨夜のことを思い出し出していた。

卓巳とて男だ。生殖機能はあるため、当然、溜まるものは溜まる。それは、定期的に体外に排出するだけであった。十五年間、完全に

コントロールしてきたはずが、昨夜は不可能に陥ったのだ。下着の不快感がそれを証明している。しかも、わずかだが快感を得たようにも思えた。

卓巳の中で何かが変わり始めた。

「とにかく、シャワーを浴びて……頭を冷やして来ないと、これじゃ仕事にならないな」

「ご、ごめんなさい」

「どうして君が謝るんだい？」

卓巳はベッドから下り、窓際まで歩き寄る。そして、一気に遮光カーテンを引いた。

バルコニーに面した大きなフランス窓から、明るい陽射しが寝室に注ぎ込まれる。朝の光は生気に満ちていて、あっという間に室内を席卷してしまうのだった。

窓辺に立つ卓巳が、万里子を振り返った。そして、夕べの余韻を漂わせたまま、親密な笑顔を見せたのだ。万里子はうっとりとし見惚れそうになり……慌てて口を開いた。

「あ、うっかり寝過ごしてしまっ……」

「お互い様だ。それより、頬は大丈夫か？ 何処か痛いところはな
いか？ 君を労るつもりでベッドを分けたのに、もっと色々してしまっ……止まらなかったんだ。本当にすまない」

卓巳は再び万里子の傍まで来て、ベッドに腰掛けた。そして手を伸ばして頬に触れる。……それだけで、万里子は胸の高鳴りを覚えた。愛し合う行為は、卓巳だけでなく、万里子をも変えていく。

卓巳の、まるで宝物を扱うかのような、繊細な指遣いと唇は、万

里子の身体にも火を点けた。

「そうだったんですね。わたしはてっきり……」

卓巳と初めて新婚らしい朝を迎えて以降、ずっとベッドは一緒だった。なのに、昨夜は別にしようと言われ、万里子はそれがショックだったのだ。悪い夢を見たのも、そのせいだったのかも知れない。それを卓巳に告げると、彼は身を乗り出し、万里子を抱き締めた。

「そんなわけがないだろう？　だが、夕べは少々楽しみ過ぎた。眠ったのが夜明け前だ」

「それは卓巳さんが……ずっとわたしの身体を……」

「ああ、そうだ。全部僕が悪い。どうやって責任をとればいい？」

ふざけた口調で卓巳は腕の中の万里子に問い掛ける。

「もっつ！　シャワーはどうするんですか？　お迎えが来ちゃいますよ！」

万里子の可愛らしい抗議に卓巳は苦笑しつつ、彼女の耳元で声を潜めたのだ。

「それに……こんな形で下着を汚したのは中学生以来だな。君の身体に感じすぎたみたいだ」

そのとんでもない報告に、万里子は赤面するしかなく　どちらにしても、ご機嫌の卓巳であった。

第五章 熱愛 (13) 変わり始めた朝

「万里子様、一体どうされたんですか？」

階段を下りてすぐ、玄関ホールで宗は待つていた。そして、卓巳より先に下りて来た万里子に顔を見るなり声を上げる。

すぐに冷やしたので思ったより腫れてはいなかった。だが、口元の絆創膏はいやでも目立つだろう。

「階段から……落ちてしまって。でも、見た目ほど酷くはないんです。あの……卓巳さんもすぐに下りて来られますから、お待たせしてごめんなさい」

誰がどう見ても『階段から落ちた傷』でないのは明らかである。だが、万里子はそんな言い訳をして微笑んだ。

昨夜から今朝にかけての卓巳は、まるでブレーキの壊れた車のようだ。

実はさっきも……キスしたかと思ったら、朝から万里子をベッドに押し倒そうとしたのである。宗から電話が掛からなければ、万里子の胸にキスマークの数が増えていたことだろう。

「万里子、今日は病院に行って検査を受けてくるんだ。それから、肩と肘にも痣が出来ていた。ちゃんと診て貰うように」

万里子より少し遅れて、卓巳はオープン階段に姿を現した。

今日の卓巳はハンツマンのオーダーメイドスーツに身を包んでいる。ロンドンの一流ブランドで、わざわざサヴィルロウの店に発注したと卓巳は言っていた。ロンドン支社の取引相手がサーの称号を持つ英国貴族らしく、スーツを着ても見劣りするわけにはいかないようだ。

万里子にすれば、相手はロンドンに住んでいるのだから、日本に

いる間はそんなに気にしなくても、と思うが……。

世界中がインターネットで繋がれている時代である。卓巳ほどの立場になると、何処で写真に撮られ、それを見られないとも限らないのだ。そう言われれば、万里子が卓巳の情報を探したのもインターネットであつた。

クラシカルな一つ釦ボタンのスーツを着こなす卓巳は、一分の隙もなく威風堂々としている。蕩けるような瞳で万里子にキスをねだつた、昨夜の痴態が嘘のようだ。

「万里子？ どうしたんだ？」

「あ、いえ……はい、判りました」

「じゃ、行って来る」

「行ってらっしゃいませ」

万里子は、ほんの二十分前の会話を思い起こすと、英国紳士然とした卓巳に切なさを感じる。その時、卓巳は万里子の隣まで引き返して来たのだ。

「……続きは今夜のお楽しみだ。それとアレは無理しなくていい。処分すればいいから」

耳元でコソツと呟き、返事を待たずに玄関から出て行ってしまふ。

(ずるいわ、あんな風に囁かれたら……)

卓巳の声が耳に残つたまま消えない。それは、ベッドの上で言われた幾つもの愛の言葉と重なり……。真冬の外気に触れながら、万里子の頬は火照つたままである。卓巳の乗つた車が並木の向こうに消えても、ずっと見送っていたのだった。

「奥様、あの……奥様？」

そんな万里子に後ろから声を掛けたのは、メイドの佐伯茜だ。今朝は私服姿である。

「お怪我の具合はいかがでしょうか？ 私のせいですみませんでした」

頭を下げ万里子を気遣うが、茜の頬も腫れが残っていた。

「あなたのせいじゃないわ。茜さんは大丈夫？ 傷あとが残ったりしないかしら？」

「私は平気です。でも 旦那様って凄いですね！ 私、感動しました。王子様っていうか、映画のヒーローみたいでした！」

「そ、そうかしら？」

万里子は少し返事に躊躇する。なぜなら、卓巳は助け出すために暴力をふるった訳ではない。言い方は悪いが、太一郎に報復したのである。あまり褒められた行為ではないだろう。もちろん、万里子は嬉しかったが……それで卓巳の名誉が傷ついたり、怪我をしたりしては喜んではいられない。

「それに、奥様も素敵でした！」

「え？ わたし？」

「はいっ！ あの男を、犬呼ばわりですもの。メイドルームは大うけでした！」

万里子は思わず赤面した。そんなつもりではなかったのだが、例えが悪かったかもしれない。

「随分失礼なことを言ってしまったわ。今度会ったら謝らないと」

「とんでもない！ あの男が謝るのが先ですよ。でも、私は土下座されたって許しませんから！ 早くこのお邸から出て行ってくれたらいいのに」

茜は思い出したのか、身震いしながら怒りを露にする。

「そうですね。そうしたら万里子様も枕を高くして眠れたでしょう

に。逆恨みして、卓巳様の不在を狙って襲ってくるかも知れませんが」

気づけば茜の後ろから雪音が来ていて、そんな風に口を挟んだのだった。

「もう二度としないって言ったわ。それに、今のままで太一郎さんを追い出したら自棄になつて何をするか……。自分が安全なら、他の誰かが傷ついては構わないとは思えないの。本気で太一郎さんには反省して欲しいから」

雪音は万里子の言葉に大きなため息をつく。

「そう簡単に、悔い改めるオトコとは思えませんけど」

「でも、わたしが卓巳さんのことを愛してるって言った時、太一郎さんの形相が変わつたの。ひよつとしたら、抱き合えば愛し合えると思ってるのかも知れない。愛し合ってるから抱き合いたいと思う心を知らないのよ……」

二度としないと泣くように叫んでいた。大勢の音が聞こえた瞬間、気が緩んで意識が落ちてしまったけれど。万里子の中では、太一郎から目を背ける自分と、慈悲を訴える自分が闘せめぎ合っている。

「なるほどなるほど。愛し合ってるから抱き合いたい……ですか。」

で、それを確認するあまり、ご夫婦揃って寝過ごしてしまった、と「ゆ、雪音さん！ もうっ」

万里子が目覚めた時、既に朝食の時間は過ぎていた。それから卓巳を起こし、あの有様である。二人とも身繕いが精一杯で、卓巳は朝食抜きで出勤したのだった。

クスクス笑う雪音の横で、高校生の茜まで笑っている。「すみません」と謝るが、堪え切れないようだ。

「昨夜は夕食もろくに取られてないでしょう？ それで朝までコースだと、さぞお腹が空かたんじゃありませんか。ランチを用意さ

せていただきましょうか？」

雪音には終始からかわれっぱなしである。雇用主に対する態度としては相応しくない、と執事の浮島からは度々注意が入るといふ。だが、万里子にとっては雪音の存在にだいぶ助けられていた。

卓巳は笑顔が増え、万里子も人との関わりに恐怖を感じる事が少なくなった。

お互いの過去を乗り越え、少しずつだが確かに変わり始めている。人は変われる。

太一郎や尚子たちも変わってくれることを、願わずにはいられない万里子だった。

第五章 熱愛 (14) 妻として

社用車であるベンツの後部座席に座り、卓巳は会議用の資料に目を通していた。九時半の予定を、社長の“個人的な事情”で、十時半にずらした会議だ。

「少しもコスト削減になってないな。担当者はこの一ヶ月何をしていたんだ」

眼鏡の奥の瞳を殊更厳しく光らせる。

だが、そのわざとらしさが、宗の目には『心ここに有らず』に映った。

「それは担当の者から説明させます。ところで社長 お邸で何かあつたんでしょうか？」

「何が言いたい？」

「万里子様です。階段から落ちたと言われても……私の目は節穴じやありませんので」

卓巳は資料を一旦閉じ、宗の疑問に答えるべく口を開いた。

「決まつてる。あの馬鹿者がしかしたんだ。メイドに手を出した拳げ句、助けに入った万里子にまで……」

「メイド？ 一体誰にそんな真似を」

僅かに力が入った質問を、卓巳は聞き逃さなかった。

「宗……お前の守備範囲が広いのは知っているが、手を広げ過ぎると痛い目を見るぞ」

「考え過ぎです、社長。それで、万里子様はご無事だったんですか？」

「ああ、未遂だ。だが、夕べは酷く怯えて……寝付いたのは朝方だった」

卓巳はどことなくソワソワしている。

(バレたのか？ いや、メイドに手を出したところで社長が気にするはずは……)

「社長……寝過ぎされた理由はそれだけですか？」

何気なく尋ねたつもりだった。

ところが、卓巳の慌てふためいた返答に、宗のほづが面食らってしまう。

「聞くな！ どうにも気分が落ち着かないんだ、万里子のことは話さないでくれ！ 私だって我を忘れることくら……い、いや、会議で惚けたらどうするんだ、全く」

「……？」

男同士なら、勤務中でも戦果報告程度は普通であろう。だが、この二人の間に色っぽい話は皆無であった。宗がいくら振っても、その方面になると卓巳は一切応じなかったからだ。それが……。

(おいおい……十代のガキじゃあるまいし)

卓巳は再び資料を開き、必死に目を通す“フリ”をしている。だが、ページは行ったり来たりで、あれでは頭に入るはずがない。からかうつもりはなかったのだが、珍しい卓巳の様子に、宗もついつい口が軽くなる。

「昨夜は……惚けるほど良かったんですか？」

「そりゃあもう最高に……だ、だから聞くなと言ってる！」

なんと卓巳は怒鳴ると同時に横を向き、耳まで赤くして額の汗を拭っているではないか。

(これが……あの藤原社長か？ 一体、何がどうなってるんだ？)

宗は一瞬呆気にとられ、直後、大爆笑したい衝動に駆られた。だ

部屋に戻った万里子は急いで洗面所に入り、その塊を見つけた。すぐに食事の用意を、という雪音に、三十分ほど後にしてもらったのはこのためだ。

それは、卓巳がシャワールームに向かいつつ言った一言が切っ掛けだった。

「さて、と。シャワーを浴びて仕事の顔に戻してくる。だが、この歳になって風呂場で下着を洗うことになるとは思わなかったよ」

男性機能の仕組みは万里子にはよく判らない。判るうともしなかったし、判りたくもなかったから当然だろう。しかし、卓巳のことなら別だ。

苦笑しながらも、とにかく嬉しそうだ。卓巳にとって『そのことは、回復に向けて余程喜ばしいことだったのだろう。そんな卓巳を見ていると、万里子も嬉しくなる。』

「待って下さい。卓巳さんがそんなこと……」

藤原家の当主で、巨大複合企業の社長である卓巳に、下着を洗うような真似はさせられない。第一、彼は独身ではなく、万里子という妻がいるのだ。

「君が気にすることじゃない。捨てれば済むことなんだが……そんな気分じゃないんだ。メイドには知られたくないしね。さすがに恥ずかしい」

そう言う卓巳は照れたようにはいかんだ。

(卓巳さんって、なんて可愛らしいのかしら)

卓巳のことを思い出すだけで万里子の頬が緩む。

八つも年上の男性をつかまえて、可愛いもないものである。だが、万里子と二人きりである時の卓巳は、本当に『駄々子』で『甘えん坊』に変わる。もちろん、日常のクールな卓巳が偽物と言うわけではない。おそらく男性が、パートナーだけに見せる素顔なのだろう。万里子はそう考えていた。

「わたしがいるんですから、任せてください」

と、胸を叩くように宣言した万里子だったが……。

しかし、よく考えたら男物の下着など触ったこともないのだ。かろうじて目にしたのは父の下着くらいであろう。もちろん忍が万里子を甘やかした訳ではない。下着は自分で手洗いするように、などと教えられている。だが父のものになると、「未婚のお嬢様が手にするものではありません」と、触れさせることもなかった。

初めて目にするソレに、万里子は恐る恐る触れてみた。

父の下着とは違う形だ。女性用の下着コーナーにも同じようなデザインが置いてある。ボクサーパンツというものだ。違うのは窓の有無だろう。万里子は着用したことはないが、男性用もあるのね、と素直に考えた。

男性用が流行し、女性用も作られたと、万里子が知ったのは後日のことである。

（わたしは人妻なのよ。夫の下着を洗うのは当然のことだわ。別に、イケナイことをしてる訳じゃないんだから）

万里子は洗面台で卓巳の下着を洗った。

そして、心の中で卓巳を夫と呼び……その勢いで昨夜の、夫婦生活の“イロイロ”を思い出してしまう。それは恥ずかしくもあるが、やはり嬉しい。

ふと我に返り、万里子が顔を上げた瞬間、鏡に映った胸元が目

飛び込んで来た。

「もう、卓巳さんったら」

思わず呟きと笑みが零れ落ち……万里子はハタと気づいたのだ。

(ど、どうしたらいいの?)

肘はともかく、首筋を見せずに肩口の診察なんて、どうすればいいのだろう。

万里子は卓巳の付けた『妻の証』を見つめつつ、途方にくれたのであった。

第五章 熱愛 (14) 妻として(後書き)

御堂です。ご覧頂きまして、ありがとうございます。

アッってコレです(苦笑)

もう何でも幸せに繋がる心理状態ですね、幸せな二人です(^^;)

たくさんウェブ拍手ありがとうございます。メッセージのお礼を活動報告でさせていただきました。良かったらご確認下さい(感謝!)

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/list/userid/36400/>

では、今後ともよろしくお願い致しますm(____)m

第五章 熱愛 (15) 悪意

「太一郎の奴、アレ以来、一步も外に出なくて引き籠もりですって」「そりゃあ恥ずかしくて出て来れないでしょう？ 全員の前で漏らしちゃったんだから」

「いい気味だわ！ 座敷牢にでも放り込んでやればいいのよ！」「……ないわよ、さすがに」

事件から数日後 万里子の耳に飛び込んできたのが、階段を掃除するメイドたちの声であった。

彼女らの中で一番酷い目に遭った合崎悠里あいちゆうりを、宥める口調なのが広川美和子ひろかわみわこだ。

「じゃあ地下牢！ あんな駄犬、鎖に繋いでおけばいいのよっ！」「まあまあ、ゆうちゃん。でも……呼び出しもないし、ね。このままじゃお手当てもなくなっちゃうんだらうなあ」

「そ、それは」

太一郎は憎いが、割り切った今となつては給料が減るのは惜しい。邸で過ごす夜は、メイドの中から誰かを連れ込むのが常となつていた太一郎だ。それが全くなかった。おまけに夜遊びにも出ない。外に行くのが好きなかなの場合、チャンスがなくなったと嘆いている。

聞くとはなしに、そういつた話が耳に入り……。

万里子はこの邸の全てが、太一郎の罪を容認していたのだと知る。

「お食事はどうされてるの？」

不意に話しかけた万里子に二人は飛び上がって驚き、

「あっ、お、おくさま……はい、担当のものが扉の前までお運びしてます。あまり召し上がられませんが」

「尚子叔母様はなんて？」

「……もう、太一郎、さまはダメだ、と。卓巳さまが正式に総帥に就任された暁には、自分たちはこの邸を追い出されるだろうと仰られて……。いろいろ蓄財に走っておられるようですわ」

「そんなこと。卓巳さんはそんな方ではありません。血の繋がった叔母様一家を追い出すだなんて！」

眉間に皺を寄せ、卓巳の情を唱える万里子に、メイド二人は視線を合せた。

「失礼ながら……そうは思いませんわ。万里子さまを奥さまにお迎えになるまで、尚子さま和子さまの卓巳さま虐めは酷かったですもの」

美和子が口を開き、さらに言葉を続ける。

「私は高校を出てすぐ、七年前に採用して頂いたんですけど。ちょうどその頃、卓巳さまがお邸にお戻りになられて……。最初は、ナイフやフォークの使い方もご存知でなく、スーツも一着しかお持ちでなかったんです。『野育ちの方はコレだから』とか、ご両親のことも引き合いに出されて、それはもう散々な言われようでした。卓巳さまが総帥に就任なさったら、裏にお住まいの皆様を追い出されるおつもりじゃないでしょうか？」

「そのほうがよろしいじゃありませんか？ 奥さまも気が楽だと思えますけど」

悠里も先輩である美和子に同意する。しかし、万里子にはとてもそうは思えなかった。

「大勢いると大変なことは多いでしょう。でも、協力し合えば喜びも広がるわ。追い出すつもりならとくにそうなさっていたと思います。過去に拘って、未来の可能性を潰してしまうのは愚かだと、卓巳さんがわたしに教えて下さいました。彼は氷のような方じゃありません。人を許すこともご存知だし、もっと器の大きな方なのよ」

「でも……」

美和子は黙り込むが、悠里は合点がいかないようだ。とくに、太一郎を許すなど論外だと言いたげであった。

「それにね、家族が一気に六人も減ってしまったら、裏の別棟は閉鎖が取り壊しになるでしょう。そうすれば、十人を超えるメイドなんて要らなくなってしまっわ。もちろん、違っお仕事は探して頂けるでしょうけど」

さすがにドキツとしたのか、悠里も口を嚙む。

その時、万里子は決意したように顔を上げて言った。

「今日の昼食は、わたしが太一郎さんの部屋に運びます」

二人が蒼白になり、引き止めたのは言うまでもない。

くわくわくわくわく

「鈍臭いわねえ。せつかく万里子をあんたの部屋に近づけてやったのに。ヤレなかった上に、卓巳に半殺しなんて。笑えるわ」

万里子が無謀なことを言い出した前夜、太一郎の部屋に客があった。

あずさである。

「やっぱお前か。おかしいと思っただ。俺はあんなガキ、部屋に呼んでねえんだからな」

目の前にいれば手を出してしまう。太一郎に、我慢する、という経験はない。卓巳の警告がストップパーになる自信もなかった。

太一郎が狂ったように手を出すのは、経験の少ない娘ばかりだ。それもまた、自信のなさの裏返しであった。このあずさのような女に手を出すのは稀だ。というより、積極的に迫られたせいとも言えよう。“バージンキラー”なんてレトロな呼び名も、金目当ての取り巻きが付けた揶揄に過ぎない。自虐的な意味も籠めて、太一郎自身も使っていた。

「あら、抱きたかったんでしょ？ 雪音を探してメイドルームにまで来た万里子を、あんたの部屋近くにまで行かせてやったのよ。まんまと部屋に引き込みながら……全くなにやってるんだか」

あずさはそう言つと鼻で笑った。

全てはあずさの計画だった。太一郎の名で茜を部屋まで行かせたのも彼女だ。欲求不満気味の太一郎はまんまと茜を襲い……。

その時、あずさは茜にこう囁いた。

「太一郎は危険な男よ。部屋に入った時は必ず、ドアを開けたままにしておきなさい」

それには、雪音が休憩時間に度々外出するのも予定に入っていた。特に行き先も告げずふらつと出る。時間内に戻って来ているのだから、別に問題はないのだ。しかし、あずさはそれをも利用した。

メイドより家政婦の呼び名が似合う六十過ぎの同僚に、尚子の名前で雪音を探すように言いつける。案の定、万里子は祖母の年齢に近いメイドを氣遣つて、自ら雪音を探し始めた。

後は簡単だ。

あずさは「雪音さんなら、よくリネン室で煙草を吸ってますわ」

リネン室は渡り廊下の横にあった。

「ホント、汚ねえ女だな、お前は」

「だから何？ あたしがいつ、あんたに万里子を襲えつて言った？ あんたが狙ってるって言うから、力を貸してやったんじゃない。あのガキだってそうよ。勝手に欲情して押し倒したのはあんたじゃない」

一々尤もで、太一郎は言い返す言葉もない。

卓巳に殴られた怪我は、そう酷くはなかった。寧ろナイフを掴んだ傷と、心に受けた傷のほうが深いだろう。あの日から太一郎は、ほとんどをベッドに潜り込んだまま過ごしている。そのせいか部屋は妙に男臭く、饅えた様な匂いが漂っていた。

あずさは言い負かしたのが嬉しかったようだ。少し鼻を曲げながら、それでも太一郎の背中を擦り、股間に手を伸ばしてくる。

「ねえ、最近セックスしてないんじゃないの？ 粗相をしたムスコを、あたしが可愛がってあげ」

太一郎はあずさの台詞を遮り、突き飛ばした。

「失せろっ、クソ女！ お前を抱くくらいなら、八十の婆おばあを抱いたほうがマシだ！」

「言ったわね。あんたには野良犬のメスがお似合いよ！」

顔を真っ赤にして、あずさは部屋を出て行く。勢いよく閉まった扉に、太一郎の投げたグラスは当たり……周囲には割れたグラスの欠片とアルコールの匂いが広がったのだった。

第五章 熱愛 (16) 扉の向こうの試練

二回ほどドアをノックしたが、返事はない。

万里子が渡り廊下のほうに視線をやると、美和子と悠里が首を左右に振った。何度も「お止めになったほうが」と言われ、執事の浮島や雪音を呼んでくるというのも、万里子が押し止めたのだ。彼らにも、反対されるのは目に見えている。

だが、万里子は自分の言葉を証明したかった。

彼女自身が卓巳に言った『赦す』という言葉。その重さを、そして勇気を。万里子が自ら乗り越えるべき『試練』は、形となり、扉の向こうにある。

万里子は合鍵を鍵穴に差し込み、ゆっくりと回す。そして、猛獣の檻に足を踏み入れたのだった。

そこは先日とは違い、薄暗かった。カーテンも開いておらず、電気も点いていない。

万里子が三步目を踏み込んだ瞬間、足の裏に奇妙な感触を覚えた。慌てて一步下がる。目を凝らすと、扉の内側には硝子の破片が散らばり、常夜灯の明かりにキラキラと光っていた。絨毯の上には残骸が転がり、それがガラスであったことを万里子に教える。

部屋全体が噎せるような匂いだ。不快そうに万里子は眉を顰めたのだった。

この間を見る余裕もなかったが、卓巳の部屋のリビングと同じ位の大きさだろうか。奥にダブルベッドが置いてあるようだ。一部屋なのだが、鉛色のパーテーションで仕切られているため、ベッドの一部分しか見えない。

万里子は出来る限り硝子を踏まないように、慎重に進んで行く。そして、カウチソファの前に置かれたテーブルの上に、静かにトレイを置いた。ハムと玉子のサンドイッチとポテトサラダに野菜ジュース。食欲がなくても簡単に食べられるように、と万里子がコックに頼んだのである。

左右は壁で、ベッドの横を抜けた正面に大きなフランス窓があった。そこからテラスに下りられるらしい。

万里子は覚悟を決めるとベッドの横を早足で通過し、一気にカーテンを開けた。そしてそのまま、床から天井まである大きな窓を全開にしたのである。

激んだ室内の空気が一斉に外に押し出され、十二月の寒風が太郎の部屋に吹き荒れたのだった。

「お、お、おまえ……何してるんだ？」

エアコンで温められた室内が急激に冷やされる。それに驚いて、太郎はベッドから顔を出したのであった。

「なに、勝手なことしてんだよ……」

無精ひげを生やし、言葉に力もなかった。

万里子は体の前で手を組み、クツと顔を上げると太郎を正面から見据えて口を開く。

「あれから何日経ってると思っているんですか？ 一度も出て来ないなんて。この季節だから多少は平気かも知れませんが……。シートだって何日替えてないんですか？ すぐにメイドを呼びますから」

「うるせえんだよ！ ほっとけよ！」

「ほっとけませんっ！」

万里子の大きな声に太郎はビクツとした。

いや、言った万里子のほうがもつと驚いている。だが、もう後は引けない。

「怪我だって、安西先生に精密検査に来るように言われたのでしょ
う？ それも言っていないと聞きました。卓巳さんに殴られた傷、
まだ痛みますか？ 一度ちゃんとお医者様に診て頂いたほうが……」

太一郎が心配と言うより、卓巳の暴力が元で太一郎に何かあつて
はいけない、という思いが先に浮かぶ。そんな万里子の思惑が伝わ
ったのか、太一郎は寂しげに笑って答えた。

「死にやしねえよ。第一、俺が死んだほうが嬉しいだろ。そのほう
が、邸中の人間が喜ぶ」

「ちゃんと謝ったら許してくれます。太一郎さんさえ心を入れ替え
たら、ご両親もおばあ様もお認めになると思えます。それに卓巳さ
んだって……血の繋がった従兄弟なんだから」

「おまえ馬鹿か？ 俺がおまえに何をしたか一週間も経ってないの
に忘れたのかよ？ こんなところに入ってきて、マジで犯すぞ！」

太一郎はベッドから出て、足を床に下ろした。その勢いで万里子
を睨み、脅す。

「もう……二度としない、頼むから止めてくれ……わたしは覚
えています」

万里子は震える声で言い返す。

だがそう言った瞬間、太一郎の目に凶悪な光が浮かび、万里子の
手首を掴んだ。そのまま引つ張られ、ベッドに押し倒される。

布団は何日も干しておらず、部屋は掃除もしていない。そのせい
か、それだけの動きで大気中に埃が舞った。

太一郎は万里子の腕を掴んだまま、上に押し掛かってくる。そし
て、顔を近づけ悪態を吐いた。

「甘いぜ。馬鹿じゃねえの？ そんな約束守るかよ。誰も……卓巳
も信じてねえよ」

状況はこの間と変わらないはずである。なのに、万里子には今の太一郎が怖いとは思えなかった。宛ら、人間に怯えて牙を剥く獣のようだ。

万里子は太一郎から目を逸らさず、凜とした声で言葉を返した。

「わたしは信じています。だって……卓巳さんみたいに愛してやるって言ったわ。愛するって体だけじゃないもの。それも重要だけど、一番じゃない。……あなたはズルイわ。愛して欲しいなら、自分から愛するべきよ！」

「……おれは……別に、愛なんか」

太一郎はタジタジになる。ろくに言い返すことも出来ず、口籠もるだけだ。

「嘘！ いま嘘をついて逃げたら、一生逃げた儘よ。一生独りで生きていくつもりなの？ 答えて、太一郎さんっ！」

太一郎は万里子から手を放した。そのまま力が抜けたようにベッドの横にへたり込む。髪を掻き毟り、顔を抱え、言葉もなく頂垂れている。

万里子は体を起こした。そして、そんな太一郎を泣きたい想いで見つめていた。

この家の人間は皆病んでいる。

おそらく、尚子や和子にしても同じだろう。静香は万里子が嫁いで以降、毎夜帰りが遅い。どうやら避けられているようだ。それは静香の弟・孝司も同じである。さすがに朝晩の挨拶くらいはするが、まるで同じ家に住んでいるとは思えない気遠い態度だ。

そしてそれは、使用人たちにも共通する気配であった。

万里子の目に太一郎が、四年前の犯人たちに重なる。悪夢は目を

閉じても消えないのだ。魔つなされ、泣きながら目覚める日々が万里子の脳裏に甦よみがえった。

（一生逃げるのはイヤ！ わたしはもう逃げたくない！）

第五章 熱愛 (17) 女神の十字架

「おとなしいだけのお嬢さんかと思ったら、おっかねー女だな。人を犬呼ばわりするだけのことはあるよ」

太一郎は笑いながら、そんな言葉を口にした。そのまま、腹を押さえ笑い続ける。だが、その態度にはどこか空虚さが漂った。

万里子は立ち上がり、大きく開いた窓の側まで歩いて行く。心では判っていても、身体が自然に逃げ道を探すのだ。膝も、指も震えていた。

「あの……ごめんなさい。例えが悪かったと反省しています」

万里子はカーテンを握り締め、それでも真剣に答えた。

だが、太一郎の視線は空を泳ぎ、万里子から微妙に逸らせたままである。床に座り、立てた膝の前で組む指は万里子以上に震えて……。

「あのさ、俺はもう無理だよ。卓巳とは違うんだ。奴には、どんなハンデでも跳ね返せる才能がある。でも、俺は能無しの馬鹿だから」
ポツリポツリと話し出す、それは静かな口調であった。全てを諦めたかのような、希望の欠片もない科白だ。

「それに、マジで何人が犯^ちってるしな。ソイツらにしたら、俺なんか死ねばいいって思ってるよ。だから……俺のことは放っておいてくれよ。このまま勝手に、墮ちるとこまで墮ちるからさ」

(太一郎さんが……あの二人組が死ねば、わたしは救われるのかしら……)

万里子の中に、不思議と「殺したい」「殺せばよかった」という

思いは浮かばなかった。

忍は「わたくしが刺し違えてでも」と言っていたが、寧ろ、忍が無事でいてくれて良かったと思っている。

「死ねばよかった」万里子が思ったのはそれだけだ。

だが、死んでいれば卓巳とは出逢えなかった。……現在いまを、未来をどんなに変えても、過去は変わらない。決して消えずに存在するのだ。

万里子は時々考えることがある。四年前の自分は本当に正しかったのだろうか、と。父親に知られることを恐れ、自らを庇い、なかつたことのように振る舞い……結果、永遠に我が子を失った。そして、それだけでなく、他の誰かにも同じ思いをさせているのではないか。

無論、そこまで万里子が責任を感じることはない。そんなことは十分に承知していた。だが、考えて感じるわけではなく、自然に沸き上がって来るのが、感情と言うものだ。

理屈ではなく、沸き立つ想いが、万里子の口から溢れ出た。

「殺しても……元には戻らないのよ」

万里子の唐突な言葉に、太一郎の目は彼女に焦点を合せる。

「太一郎さん。相手を殺して、何もなかったことに出来るなら……でも、ダメなのよ。出来ない。そんなことじゃ、胸の痛みは消えないの！」

「お、まえ……なに言ってるの？」

「わたし……高校生の時に……ふ、ふたり組の男に。……だからもう、綺麗な身体じゃないの。卓巳さんが、初めての人じゃないのよ。

死にたいってずっと思っていたわ。お父様さえ悲しまなければ、こんな体、この世から消してしまいたいって」

万里子の告白に太一郎は驚き、食い入るように見つめ続けている。

「じゃ、な……んで、俺を庇ったんだ？ だつたら尚更、卓巳を止めなきゃよかったんだ！ そうだろ？ その連中に死んで欲しいだろ、誰かが殺してくれたら手を叩いて喜ぶだろ？ 俺が死んだら、みんな救われて大喜びだ！」

「救われないわ！ 例えあの二人が死んでも、過去は変わらない。わたしは少しも救われない。彼らが人を愛する心や殴られた痛みを知って、自分の犯した罪の大きさを悟って、同じように苦しんで欲しい。本当に申し訳なかった、許して欲しいと、手について謝ってくれたなら……」

万里子は一旦目を閉じ、ゆっくりと開いた。

その瞳の奥には深い悲しみの色を宿している。だが、涙はない。万里子は祈るように手を胸の前で組み、澄んだ眼差しで、太一郎の瞳を見て言ったのだ。

「心からの反省と謝罪があれば……わたしは赦します」

太一郎には万里子に伝える言葉が見つからず。彼は黙って立ち上がり、ベッドに潜り込んだ。そして布団を頭から被る。

「出てけよ……いや、卓巳は知ってんのか？ いいのか？ 俺がもし、言いふらしたら」

「卓巳さんをご存知よ。もちろん、人には知られたくないけれど……でも、無理じゃないって、太一郎さんに判って欲しかったの。それに、例え何があっても、卓巳さんさえ居て下さったら、わたしは平気よ」

風がひゅうつと音を立てカーテンをはためかせた。

さすがに寒い。五を切ってるかも知れない。万里子は室内の空気が完全に入れ替わったこと肌で確認して、窓を閉めた。

「……出て行ってくれ」

籠もった声がベッドから聞こえる。

「判りました。でも、メイドに掃除とベッドメイクに來させます。食事もちゃんと食べて下さいね」

万里子の言葉に、太一郎の返事はなかった。そのまま、部屋から出ようと踵かかとを返した、その時。

「なあ……殴つて、悪かった。キスも……カンベンしてくれ」

微かに聞き取れる程度の小さな声ではあつたが、それは今の太一郎にとつて、精一杯の謝罪であつた。万里子の全身から緊張が解け、安堵の吐息が零れる。

「はい。わたしは許してあげます。それと……太一郎さん、八針も縫つたと聞きました。自殺を止めてくれて……ありがとございまして」

万里子が部屋を出て、ものの数分で室内は暖かさを取り戻した。

それは、向かう当てのない憤りであつた。物心ついてからずっと、太一郎の胸に纏わり付いていたのだ。今は、きれいさっぱり消え失せている。

そして、生まれて初めて貰つた感謝の言葉が、太一郎の胸に芽生えた罪悪感を苛さいなんだ。

与えられた感謝は、その傷に相応しいものではない。太一郎は右手を握り締め……白い包帯は血と涙に滲んでいった。

第五章 熱愛 (18) ふたりのベッド

万里子は太一郎の部屋を後にし、渡り廊下を過ぎてオープン階段の横から玄関フロアに出た。

「万里子様っ！」

すると、突然切羽詰った声で名前を呼ばれ、ドキッとする。

雪音だ。

雪音は二段飛びで階段を下り、万里子に向かって駆けて来る。彼女の後ろからは、美和子と悠里も付いて来ていた。

「どうかしたの？ 雪音さん」

血相を変えてやって来る雪音に、万里子は驚いて声を掛ける。

しかし、そんな万里子に雪音は呆れ顔だ。

「どうも、ごうも…… 太一郎、様の部屋に、独りで行かれたと聞いて。もう…… 無茶なさらないで下さいよ！」

「ごめんなさい。でも、大丈夫だから。それに、太一郎さんもちゃんと謝ってくれたのよ」

そう言つと、万里子はニッコリと微笑んだ。

後日 「卓巳といい、太一郎といい……」万里子には“猛獣使い”の称号が付いたのであった。

くわくわくわくわく

「どつしましゅう、ごんな……」

「ある意味判りやすいですね。卓巳様の意思表示って」

他のメイドに太一郎の部屋の掃除を頼み、雪音と二人で万里子は自室に戻った。そして、雪音に促され、万里子は寝室を覗き込んだ。すると、彼女の目に飛び込んできたのは……天蓋の付いた、スーパークィングサイズのベッドであった。

一点ものの輸入家具でイタリア製だという。有名な工房の作品で、イタリア貴族が発注した品じゃなからうか、と業者が話していたらしい。縦横のサイズがほとんど変わらない、正方形に近い形である。しかも、一辺が二メートルを楽に超えていた。バルコニー側の窓を全開にして、斜めにしてようやくマットレスが入ったのだ、と雪音は万里子に話した。

確かに、今朝、卓巳が出勤する時に言っていた。

「寝室のレイアウトを変えたい。業者を呼んでおいたから、彼らに任せてくれ」

その言葉を雪音に伝え、様々な手配は彼女に任せた。そして、やって来た業者は二台のダブルベッドを運び出し、新しいベッドを入れたのである。

万里子が天蓋の側まで歩み寄り、四本の支柱に目を凝らした。濃いブラウンでマホガニー材の支柱は、それぞれに繊細な細工が施され、カーテンが留められていた。カーテンはレースだが二重になっているため下ろせば内側の様子は影しか浮かばないだろう。

万里子はベッドの端に腰掛けてみる。スプリングは程よい弾力性で、身体が沈み込むような感触はなかった。

「これだけ大きかったら、寝返り五回くらい出来そうですね」

雪音はベッドの足元側に立ち、笑いながら左右に手を広げて見せた。身長と同じ長さと言われるが……約一六〇センチの雪音の腕が、もう一本要りそうである。

「でも、卓巳さんがお留守の時、この巨大なベッドに、わたし独りで寝るの?」

「留守にする気がないんじゃないですか？ 結婚後は、外泊はほぼゼロですし……。韓国に出張された時も」

雪音はそう口にするのと、堪え切れずに吹き出している。

「雪音さん、笑うのは失礼だわ」

笑いながら注意する万里子も説得力に欠けるだろう。

結婚以来、卓巳がオーナーズスイートに泊まることは、ほぼ無くなった。毎日、仕事が終われば飛んで帰ってくる。新婚に相応しい姿だと、祖母の臯月は大喜びしているくらいだ。

そして、なんと卓巳は韓国からも日帰りして来た。しかも、翌日もソウル市内で仕事があるのに、だ。

「それは失礼致しました。さて、と。私、このサイズのカバーを用意しないと……。市販じゃ無理ですよね？」

「ごめんなさいね。面倒掛けてしまって」「いえいえ、仕事ですから。でもお姫様仕様って、一つ間違えばラブホテルですよね？」

そんな雪音の言葉に、卓巳とのアレコレを想像して、万里子は真っ赤になるのだった。

くくくくくくくく

その夜、卓巳から「遅くなる」と連絡があった。

卓巳の帰りを待っていた万里子だが、深夜の〇時を回っても戻らず。万里子は諦め、何処で寝ようか思案をし始める。

その時、携帯からメールの着信メロディが流れた。卓巳が帰って来たのだ。門を通過すると自動でメールが届くシステムになっている。

万里子は嬉しくて、パジャマの上からカシミアで織られたアイボリーのショールを羽織り、一階まで出迎えに下りて行った。邸内はシンと静まり返っている。仕事熱心な執事の浮島も、歳のせいか夜は早い。他のメイドも全員、別棟の自室に戻っている時間であった。万里子は急いでオーブン階段を下りた。彼女の室内履きの音だけが、玄関フロアに響く。

「お帰りなさいませ」

「ああ、ただいま」

万里子が鍵を開けた直後、扉は開き、卓巳が入って来た。

外はかなり寒いのだろう。卓巳の吐く息は真っ白である。玄関はそれぞれの個室に比べて当然肌寒い。だが、空調は邸全体で整えてあるので、外ほど寒くはないのだった。

「今夜はホテルにお泊りだと思ってました。必要なものがありませんたら届けましたのに」

「君の顔が見たくて、商談が終わるなり飛んで帰って来たんだぞ。なのに、あまり嬉しくなさそうだね」

仕事が終わわり、万里子の前に立つと、途端に卓巳の顔から社長の仮面が剥がれる。寝静まった邸内の様子が、余計に帰宅を拒否されたように感じたのかも知れない。

卓巳は小さな男の子のように、唇を尖らせて拗ねて見せる。その可愛らしい卓巳の仕草に、万里子は苦笑を浮かべた。

「わたしのベッドがなくなっちゃったので……何処で寝ようか迷っていたところでした」

「僕たちのベッドだろ？ 気に入らなかったのかい？」

「広過ぎて、独りでは寂しくて寝られません。卓巳さんが……毎晩

横にいて下さらないと」

万里子はそう言つて、少し上目遣いに卓巳を見上げた。

「ああ、もちろん、毎晩……そのつもりで買い換えたんだ」

「卓巳さんって……」

万里子が言いよんどんで下を向くと、卓巳は万里子に近づき、身体を寄せてくる。

「ん？ 僕が何？」

卓巳の顔はすっかりプライベートモードだ。彼の手は、既に万里子の腰に回つていて、ごく自然な動作で引き寄せた。

「……卓巳さんが、こんなエッチな方だとは思いませんでした」

万里子は小さな……本当に小さな声で答える。

「ああ、僕も思わなかった。今も、君をどんな風に脱がそうかって

……エッチな想像でいっぱいだ」

言つたり、万里子に軽くキスしたのだ。

「卓巳さん！ ここはお部屋じゃありません。まだ玄関ですよ。酔つてらっしゃるの？」

「人前ではしない約束だ。誰もいないだろ？ 君に酔ってる、もうメロメロだ」

卓巳は万里子を抱き締め、今度は奪うように強く口づけた。

第五章 熱愛 (19) 秘めやかな夜(前書き)

第五章 熱愛 (19) 秘めやかな夜

卓巳の誕生日から一週間も経っていない。

それなのに、二人の行為は夜毎エスカレートするばかりだ。もちろん、世間一般の夫婦とは違った形ではある。だが……彼らにとつては、紛れもない愛の悦びであった。

玄関とはいえ時刻は深夜だ。誰も出て来るはずがない。

なぜなら、卓巳の出迎えは万里子がする、と皆……特に浮島が思っているからだ。以前は、仕事で遅くなる卓巳を、わざわざ浮島が出迎えた。断わっても「これが私の仕事です」と言つて聞かない。卓巳のホテル泊まりが増えたのは、そんな使用人に対する気遣いからであった。

無論、叔母方と顔を合わせたくないという理由も、無きにしも非ずである。

卓巳の情熱に、万里子が抗^{あらが}えるはずがない。舌先が唇を割り込み中に滑り込む。その瞬間、卓巳を押しやる力はベクトルを変え、万里子の手は彼の背中に回った。

吹き抜けの寒々しいはずの玄関が、春の陽気を通り越し、真夏の熱気に包まれる。

二人が抱き合う、ちょうど正面にクリスマスツリーが置かれていた。見下ろす白亜の天使様も視線のやり場に困っている。

「たくみ……さん、ちょっと、ちょっと……待って」

卓巳は事も有るうに、キスしながら万里子のパジャマをたくし上げた。そして、裾から手を差し込んできたのだ。彼の手の平はそのまま素肌を伝い、胸に辿り着く。卓巳の冷たい指が胸の頂きに触れ、

万里子は身震いした。もちろん寒さからではない。

「もう我慢できない。もつと……君の身体に触れたい。キスしたいよ……君が欲しい」

キスの合間に喘ぐように言われ、万里子もおかしくなりそうだった。

最初の時は、卓巳の手がパジャマのズボンに潜り込むだけで、悲鳴を上げた万里子であったが……。

次の夜は、パジャマの上から卓巳に脚を撫でられても叫ぶことはなかった。

まずは膝まで。卓巳の手は、ふくらはぎから膝までの間を優しく撫で擦り、唇は、万里子の足先に軽く触れただけだった。それから二日かけて、卓巳は万里子の太腿から腰に触れることを許されたのである。

次はもつと先へ。それは卓巳だけでなく、万里子の期待でもあった。

「ここじゃ……ダメ、です。部屋に」

卓巳にされることは何も嫌じゃない。何をされてもいいし、卓巳さえ望むなら全てに応えたい。万里子の想いは遠慮がちに、少しずつ高まってきていた。

そんな万里子の言葉に卓巳は肯くと、一気に彼女を抱き上げる。

「キヤッ！」

オープン階段は階段部分が左右に分かれている。二階にはバルコニー形式のセンターフロアがあり、一階の玄関スペースが見渡せるようになっていた。二階、センターフロア正面のドアは卓巳の書斎だ。仕事関係の資料はこの部屋にあり、限られた人間しか出入りを許されていない。卓巳の、今は夫婦の私室は書斎より右手側にあつた。

二人が多く使うのが右手側の階段だ。そこを卓巳は万里子を抱い

て一気に駆け上がる。嘗ての卓巳を思えば、信じられない行動である。

愛は人の心に、恐ろしいほどのエネルギーを充填する。

それは良くも悪しくも……今の卓巳の生体エネルギーは、万里子と出逢う前の何倍にもなっていた。

寢室のドアノブを回すと、卓巳は肩で扉を押し開けた。

そこに待っていたのは、純白のベッドカバーが掛けられ、天蓋からはレースのカーテンが垂れ下がった“スーパーキングサイズ”のベッドであった。

「アイボリーのマホガニー材で作られたベッドを探したんだが、国内で見つかったのはブラウンだった。少し男性的なイメージだな。君の好きな色に塗らせてもいいよ」

だが、これでベッドの色が白やピンクになれば、間違いなく“ラブホテル仕様”と言われてしまうだろう。万里子は雪音から言われたことを卓巳に伝える。

「ラブホテルは行ったことがないので判らないが……。 “ハネムーンスイート仕様”だよ」

少し恥ずかしそうに笑い、卓巳は万里子を抱いたまま、ベッドに転がり込んだ。

万里子が一番好きなのは、卓巳が指先にしてくれるキスであった。万里子の瞳をジッとみつめて、手を取ると指先の一本一本にゆっくりと口づける。決して焦らず、僅かに開いた唇を指に付けて……。普段とは明らかに違う目で卓巳は万里子を見つめる。すぐに閉じこもってしまう万里子の心の扉を、卓巳は時間を掛けて、全開に押し広げるのだ。

万里子の吐息に色加わる。その先は、誰にも知られたくない、

二人だけの愛の行為であった。

その夜、二人はこれまでと違い、パジャマのズボンを脱ぎ捨てた。お互いに下着一枚の姿で愛し合ったのである。

「万里子……無理はしないで欲しい。怖くなったらいつでも引き返そう。僕は君を愛したいだけなんだから」

「ええ、判ってます。大丈夫よ……卓巳さんに触って欲しいから」
シーツに顔を半分隠し、万里子は恥ずかしそうに卓巳の愛をねだった。

「万里子、それは反則だ。可能な限り、出来るところまでやりたい
と思ってしまう」

「た、たくみさん」

万里子の声に不安の気配が見えた瞬間、

「嘘だよ。僕は君の騎士^{ナイト}だ。君の足元にひれ伏して居られるだけで、
幸せな男なんだ」

そんな卓巳の言葉に万里子はクスクス笑った。

「それも嘘。ダメだと言ってもキスしてくる、悪戯っ子だわ」

「ばれたか……では、君の言葉が真実^{ほんとう}だと証明しよう」

卓巳は万里子と唇を重ねた。その唇は、次第に万里子の身体
を下りて来る。

二人の触れ合う部分を伝わり、心地よい快感がお互いを往復した。
そして、卓巳の唇が万里子の太腿を幾度もなぞり……万里子の吐息
の色は淡いピンクから、その色を濃くしていった。

第五章 熱愛 (20) 家族の食卓

翌朝、食堂で執事の浮島は、表面に何も書かれていない角形二号の茶封筒を卓巳に差し出した。

ちよつと、食後のコーヒーが運ばれてきた直後である。

「旦那様、運転手の竹川から預かっております。昨夜、車内にお忘れになられたとか。間違いございませんか？」

卓巳は無造作に受け取り、中をチラツと確認した。その様子から、大した書類ではないらしい。

「ああ、そつだ。すまなかつた。だが、今朝気付いたのか？ 怠慢だな」

卓巳は少し不満げで、運転手を責める口ぶりであった。

「いえ、すぐにお届けに上がったそつでございます。しかし、旦那様が奥様とご一緒で、とても声をお掛けすることは出来なかつた、と申しておりますが……。お心当たりがないようでしたら、注意しておきましょう」

その飄々とした浮島の返事に、万里子は一瞬で真っ赤になつた。

卓巳もコーヒーが気管に入ったのか、咳き込んでいる。

どうやら、そんな二人の様子に事情を察したらしく、メイド頭の千代子が口を挟んだ。

「まあ、新婚さんですもの。仕方ございませんわ。ご夫婦仲がよろしいのが一番！ ねえ、大奥様」

「そのようですね。やはり万里子さんにお嫁に来て頂いてよかつた。この家も、随分風通しが良くなつたこと」

臯月は千代子と顔を合わせて朗らかに笑つ。

初めの頃こそ気を揉んだが、ようやく仲直りしたようで臯月も安

堵していた。

寒くなり皐月の体調もあまり思わしくない。

太一郎の件でも、本人を呼び付けてきつく叱責したい、と皐月は希望したが……。 「興奮するのはよくない」と医者から止められたのである。

結局、万里子の口添えで、皐月は心ならずも不問にしたのであった。

それに些か面白くないのが和子だ。卓巳のもう一人の叔母である。「でも、うちには高校生の男の子もおりますのよ。いくら新婚さんとはいえ、その辺りは自重して頂きませんか」と

「す、すみません」

和子に言われ、すぐさま、万里子は謝った。

「そんなですから、太一郎さんも間違いを起こしそうになるのよ。

ねえ、お姉さま」

「……」

この席にいないのは敦と太一郎の二人である。

太一郎はいつものことだ。だが敦は、卓巳から何か言われるのが恐ろしく、会社でも邸でも逃げ回っている。尚子にしても、さすがに面と向かってこれまでのような嫌味は言い辛い。妹・和子の言葉にも小さく肯くくらいで、何も言葉にはしなかった。

和子ひとりでは当然威力も弱まる。近頃の食卓は、卓巳にとって安全地帯であった。

卓巳はあらためて咳払いをする。

「昨夜の件は失礼致しました。少々お酒が入っていて、度を過ぎていたかもしれません。以後、注意します。浮島、竹川には後で

私から話しておこう」

浮島は相変わらず無口・無表情で、「かしこまりました」とだけ言い、後ろに下がった。

だが、このタイミングで言い出す辺りが……どうやら、浮島の“注意”は、卓巳に向けてのものだったようだ。

しかし、この新婚カップルのご乱行を、臯月は不道德とは思わなかったらしい。

「浮島は堅苦しいこと。少々構いませんよ、卓巳さん。孝司さんにとって、良い手本になるでしょう。この家には誰も……手本となるべき夫婦がおりませんでしたから。わたくしも含めて、ですけど」

臯月の言葉に、尚子・和子姉妹は視線を逸らせた。

「夫婦の……家族のあるべき姿を、愛し合う素晴らしさを、孝司さんには学んでいって欲しいと思います。静香さんも今からでも遅くはないですよ。それに、太一郎さんもね」

臯月は、血の繋がらぬ亡き夫の孫に視線を注ぐ。そして、久しく見ていない、太一郎の空席にも目をやった。

臯月の言葉に、万里子は満面の笑顔で隣の卓巳を見上げた。同時に卓巳も万里子を見つめ、二人は極上の笑顔で視線を絡める。そのまま二人の世界に入って行きそうになり……。 「コホン」と咳払いが一つ。邸の女主人・臯月の後方に立つ、浮島だ。

万里子は嬉しそうに肩を竦め、卓巳は軽く両手を上げ“判った”と浮島に伝えつつ、口を開いた。

「そうならば、簡単に夫婦喧嘩も出来ませんね」

「浮気もダメですよ。将来、孝司さんが浮気性になったら困りますもの、ね」

万里子はそんな冗談を言い、孝司に笑い掛ける。

この時、孝司は初めてぎこちなくだが笑顔を見せた。
「浮気？ 何のことかな？ 僕の辞書にそんな文字はないよ」
内心、笑顔の安売りをする万里子に心がざわめく卓巳だ。彼の辞書には『浮気』の文字が入る余地もないほど、『嫉妬』の項目が大量にあった。

この家族の食卓らしい雰囲気には押されたのか、珍しく孝司が口を開き、卓巳に尋ねる。

「でも……僕らはここを出なきゃならないんでしょう？ この間の太一郎さんのことで……。卓巳さんが総帥に就任したら、僕らは追いつけなくなるって」

その言葉に和やかなムードは一転した。

「何を仰ってるの、孝司さん！？ このわたくしは先代の娘なのよ。ここに権利があります。あなたがそんな心配……」

「嘘をつくなよ！」

孝司は母・和子を制し、初めて声を荒げたのだった。

「この家の権利はおばあ様の……。皐月さまのものだ！ 卓巳さんが受け継いだら、僕らは無関係じゃないか！ おじい様から貰った遺産なんてほとんど残ってないんだろ？ 居候は僕らだってメイドたちも言ってるよ！ 追い出されたら路頭に迷う……可哀相だから、妾の娘でも置いて貰ってるんだって」

「なんて言い方！ あなた、お母様に向かって……」

ハラハラして見守る万里子を尻目に、卓巳は冷静に言い放った。

「孝司くん 私に与えて貰えると思うな。欲しいものは自分で掴むんだ。自分で決めて自分の責任において行動しろ。太一郎くんに出て行くよう言ったのは事実だ。事情は君も知っているだろう。だが決めるのは本人だ。最悪、君たちがこの家を出て、僕の父のようになつたとしても、それは君たちの自由だ」

冷たい声と冷たい眼差し。卓巳はまるで「父のように死ぬ」と言っているようだ。

孝司もそう思ったのだろう。黙って席を立ち、食堂から出て行くとする。そんな孝司の背中に、万里子は声を掛けた。

「良かったわね」

場違いな明るい声に、卓巳以外の全員が目を見開き、万里子を凝視した。

「そりゃ、あなたにとつては良いことでしょうけど……」

静香は呆れた口ぶりだ。

だが、万里子は笑って言葉を続けた。

「だって、卓巳さんはあなたの自由にしていいって言ったのよ。太郎さんのことも、出て行くのも残るのも自由だ、って。でも、無計画に出て行つては、卓巳さんのお父様のように困ることになるから、ちゃんと考えなさい。そう言ったのよね？ 卓巳さん」

万里子はまるで通訳のように卓巳の言葉を噛み砕いて伝えた。

そんな愛する妻の笑顔に、卓巳も苦笑するしかないだろう。

「女性はともかく、大の男を遊んで食わせるわけには行かない。大学を出たら二人とも働いて貰う。くれぐれも、短気を起こして飛び出すな。私の下が嫌で出て行くのなら、一般社会で必要なスキルと常識を身につけてからにするんだ」

そんな卓巳の言葉に驚いたのが孝司であった。

「卓巳さんは……僕らのことが嫌いだっただんじやないんですか？」

「孝司くん……三十男に、従弟に向かって何を言わせたいんだ」

万里子によって愛を知り、笑顔を取り戻した卓巳だが、人に与えるのは不慣れだ。

思いやりや優しさを口にして、照れてコーヒーを煽るように飲む

が……空であった。

「僕は、この家に居るべき人間じゃないと、ずっと思ってた……」
孝司は卓巳の言葉が俄かに信じられず、呆然と呟く。

だが、
「自分の居場所は自分で見つけるんだ。愛情もそうだ。欲しいものは待ってても与えられない。嘆くより、手に入れる努力をするんだな。まずは叔母上……君の母上に詫びて、祖母上に断ってから食堂を出るんだ。これからは、従兄であり年長者として、君たちの無礼は許さない。覚悟しておくように。静香くん、君もだ」

これは卓巳なりに考えたことだった。

万里子が言った『祖父と同じ間違い』を卓巳は繰り返すつもりなどない。

「まあ、怖い。でも、女性にはお優しいんでしょう？ 従兄どの」

静香の戯けた口調に、

「女性しだいだ」

卓巳は素気無く言い返した。どうやら静香のことは相変わらず苦手らしい。

だが孝司は、初めて知る卓巳の真心に感銘を受けたようだ。卓巳に言われた通り、和子と臯月に頭を下げた。

万里子の笑顔によって、確実に藤原家の人間は変わり始めていた。だが、それを良く思わない者もいたのである。

第五章 熱愛 (20) 家族の食卓(後書き)

御堂です。ご覧頂き、ありがとうございます。

ここで第5章が終了です。

秘書の宗がメインの番外編を挟み、第6章へ続きます。

あらかじめ言っておきましょう…メリーゴーランドからジェットコ

ースターに乗りかえて頂く事になります(笑)() おいおい()

では、引き続きよろしくお願い致しますm()——() m

番外編「秘書の休日（前編）」（前書き）

*中盤に性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。R15
でお願いします。

番外編「秘書の休日（前編）」

そこは例の離れであつた。

卓巳と万里子の結婚式当日、新婦の控え室として使われた場所である。白い外壁、直線的なデザイン、無機質な内装は、一見するとごく普通の事務所のようなだ。

一階部分に余計なものは一切ない。仕切りもない空間で、母屋や裏庭を使ったパーティの際、来客用に解放することが多かった。中央南寄りに螺旋階段があり、そこから二階に上がることが出来る。二階は廊下を挟んで左右にゲストルームが二部屋あつた。どちらもほぼ同じ間取りで、ホテルのスイート顔負けの設備が整っている。

「あれ？ おかしいわね。どうして開かないの？」

静香に引つ張られ、宗は離れの二階まで来ていた。

宗行臣（宗行のあみ）、三十四歳。卓巳の個人秘書になる前は、弁護士として個人の法律事務所勤めていた。卓巳とは、年齢は違つが同じ年度に司法修習を受けた身である。

宗は四国の出身で、両親共に市役所に勤める地方公務員だ。親からは堅い職業が一番だと言われ官僚を目指したが、国からは必要とされなかつたらしい。

女性とは器用に付き合つが、別れるのは苦手であつた。弁護士を辞めた切欠も、女性との別れ話のもつれからである。出来れば女性側から別れを言い出して欲しい、というずるい男の見本だ。

そして最近も、出来れば振つて欲しい女性が二人いる。

卓巳の秘書・中澤朝美と、藤原家のお嬢様、静香であつた。実は、静香には卓巳の指示で水面下に縁談が進んでいる。特に藤原グループとして必要な訳ではない。だが、静香が望むなら、卓巳にとつて

は渡りに船の話であった。

卓巳からは「宗は結婚しないのか？」と探りを入れられたばかりだ。

それは暗に、結婚の意思がないなら静香との関係を清算しろ、といった口調であった。

今日は休日である。卓巳は万里子を連れてデートに出てしまった。さて、自分はどうするか、と思った矢先、静香に携帯で呼び出され……。とりあえず理由をつけて、藤原邸を訪れた宗であった。

「鍵が掛かってるんですよ」

「この間は開いてたのに……もうっ！」
腹いせに、ガンツと静香は開かないドアを足で蹴る。

先月、二人はこの離れの二階に入り込み、ベッドやシャワーを無断で利用したばかりだ。料金も掛からなければ、履歴にも残らない。まさにお手軽スイートである。

だが、そうそう上手くは行かないようだ。

「仕方ありませんね。今日は諦めましょう」

宗はサラッと言うと、螺旋階段を下り、出て行くこととした。だが、静香は納得が行かないらしい。

「待ってよ。ねえユキ……一ヶ月ぶりなのよ！ まさか、あのインテリ秘書と本気で付き合い始めたんじゃないでしょうね？」

宗は思わず苦笑した。女というものは本当に判らない。正直に、身体が目当てだと言うと、鬼の首を取ったように怒るだろう。その割に、身体さえ与えておけば男は言いなりになると思っている。もちろん、万里子のような存在は例外だ。だが、宗の知っている女性は皆そういうタイプであった。

「中澤はただの仕事仲間ですよ」

宗が他の女との関係を認めることはない。それが彼なりのルールであった。

一階フロアの壁際には、休憩用のベンチソファが置かれている。座り心地はお世辞にも良いとは言えない代物だ。しかし、長居するような場所でもない。この程度で充分というソファであろう。

そこで静香は、唐突に宗の前に屈み込んだ。そして、手慣れた様子でベルトを外す。

「静香お嬢さん……こんなところで始める気ですか？」

「イヤなの？　すぐに、そんなこと言えなくしてあげる」

確かに、女性の柔らかな手でその部分に触れられ……口に含まれては、抗える男は限られている。下半身から何かが駆け上がってくるいつもの感覚だ。

「チッ」

宗は短く舌打ちすると、静香の腰を掴み、背中を向かせた。ソファに手を付かせ、そのままの勢いで下着を押し下げる。宗が指で触れた場所は、確かに、一ヶ月ぶりの行為を待ち侘びているのが良く判った。

「困ったお嬢さんだ、全く」

いつの間に取り出したのだろう。宗は四角いパッケージを口の端に咥えていた。それを、卓巳には真似出来ない素早さと器用さで装着し、すぐさま、静香の下の口を黙らせたのだった。

くくくくくくくくくく

「三十分か……こんなもんよね」

宗と静香が始めたのが、昼の二時を回った辺りだ。三十分程度と目算し、雪音が戻ってきたのが二時半であった。

案の定、派手な色の短めのスカートについた皺を直しながら……静香は離れから出て行く。刺激的なロケーションがお気に召したのか、その顔は満足そうであった。

離れの一階は解放し易いように、東西に一つずつ大きな扉がある。雪音は静香が出た反対のドアから中に入った。

そこは、セックス特有の生々しい匂いで一杯だ。雪音は思わず顔を顰^{しか}めた。

宗は雪音に気づかず、ズボンのベルトを締め、身繕いの最中だった。そして、先の縛った使用済みの避妊具をゴミ箱に放り込もうとした、その時だ。

「ソレをそこに捨てられると非常に困るんですけど」

雪音の声にハツとして宗は振り向く。一瞬驚き、すぐに悪戯が見つかつた少年のような笑顔になつた。

背は卓巳より少し高めで、細身でバランスの取れたスタイルをしている。柔和で繊細な印象を与えるルックスは、世間一般ではハンサムの部類だろう。コンタクトレンズを使用し、スーツは明るめのトーンを中心に選ぶ。若く見られるのを嫌い、地味なスーツを選ぶ卓巳とは、性格も考え方も逆であった。

「やあ、雪音くん、君がここの担当とは知らなかつたな。鍵を掛けたのも君かい？」

社長の従妹との密会が見つかつた割りに、緊張感はまるでない。

「ゲストルームを無断で使つたのは、あなたたちだつたのね。……まったく」

離れは本来、前当主・高德がいつでも女性を連れ込むための場所であった。

使用人にせよ、妾にせよ、さすがに母屋は皐月の目があつてまずい。遠慮すると言つわけではなかったが、充分に楽しめなくては意味がない。当時の離れは木造二階建て、別荘のような建物だった。いつでも使えるように、と、高德は浮島に命じて鍵を掛けさせなかった。その名残で、離れは常に解放されていたのだったが……。

卓巳が高徳のような使い方をするはずがなく。卓巳の命令で離れはゲスト用に改築された。

だが、ゲストの居ない時　離れは実に、使いたい放題であつた。特に邸内のカププルにとっては、無料のラブホテルだ。年末に一度、大掃除の時に浮島のチェックが入ることになっている。その時には、掃除や備品の補充など、メイドたちは抜きなく整えていた。ところが先月、結婚式の控え室に使用するため、例年より早く浮島の監査が入った。間が悪いことに、乱れたシーツや使用済みの避妊具が見つかり……担当責任者は叱責を受け、施錠を義務付けられたのである。

「それは……悪かつたね」

事情を聞いた宗は、笑いを堪えつつ謝罪を口にする。

「あなたね、こんな場所でしなくても、ホテルのスイートに連れ込むくらいのサラリーはあるんでしょ？」

三食付き、住居・備品・光熱費負担なしの住み込みメイドの雪音で、手取り二十万円弱だ。多いに越したことはないが、十分に満足出来る金額である。

片や、宗は国内最大と言われるコンツェルンの社長秘書だ。彼は八桁の年俸を貰っていた。

「君も知ってるだろ？ 俺に拒否権はないんだ。お嬢様しだいさ」
「もう止めたら？ あなたがクツションにならなくても、卓巳……
様にも充分に対抗出来ると思うわよ」

宗に卓巳の下半身事情は知らない。

恐ろしく禁欲的だとは思う。ただ『出来ない』にせよ『しない』
にせよ、目的を持って近づいてくる女にはそれなりに対抗しなければ
ならない。卓巳に女を軽くあしらえる才覚があればいいが……。
あれでは敵を量産するばかりであろう。

女に利用され、或いは敵にして失脚する人間は多い。卓巳にそう
なられては、宗が困るのだ。

宗は上着を手に窓辺に寄った。

窓を開けると、厳しい冬の風が吹き込む。女を抱いた後の、火照
った体を程よく冷ましてくれる。

数ヶ月前、朝美を抱く時に万里子の身体を想像した。あれ以来、
女を抱く時は必ず思い浮かべるのが癖になってしまった。最初に、
いずれそうなるだろう と思ったのが間違いだったのだ。

今となってはあり得ない可能性である。卓巳を敵に回す訳にはい
かないし、やたら敏感な万里子に悟られるのも不味い。

恋と呼ぶほど拙くもなく、愛と呼ぶほどの執着もない。憧れと呼
べばいいのか……宗にもわからなかった。

番外編「秘書の休日（前編）」（後書き）

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

気づいた方もいらした（多かつた？）んですが、宗と雪音です。

この時点ではちょっと親しげ？…なんというか、ドライでクールな
2人は非常に曖昧な関係です（苦笑）

ひよっとしたら（前・中・後編）になるかも知れません（^^;）

アダルト方面を一手に引き受ける宗くんと、しばしお付き合いくだ
さいm（——）m

番外編「秘書の休日（中編）」

「今日は……もう帰るの？」

雪音の呟きが聞こえた。

ふと気づくと、宗は万里子のことを考えていたようだ。これではまるで、自分に暗示を掛けてしまいかねない。宗は軽く頭を振り、雪音のほうを見た。

「用は済んだみたいだ。このまま帰っても静香は何も言わないだろうな」

宗に雪音の質問の意味は判っていた。わざと答えたのだが、横を向いて黙り込む雪音を見てみると、酷く自分が意地悪に思えてくる。「社長の書斎を借りて仕事をして行こう。九時頃に引き上げる。朝は……七時前には社長を迎えに来てもいい」

雪音の眼鏡に隠された瞳が急に明るくなった。

「でも、九時だと卓巳様と万里子様がお帰りなんじゃ……」

今日の休日出勤は卓巳の命令ではない。宗が藤原邸にすることで、卓巳が怪しむのではないかと、言ってるのだ。

「なんとも言い訳するさ。だが、時間が有り過ぎるな。この上で昼寝して行ってもいいかな？ 最近休みが少なくてね。疲れ気味なんだ」

それは彼の本音だ。年末年始の二週間、社長不在なのである。卓巳は社長に就任してから、一度も長期休暇は取っていない。ロンドンではレセプションを兼ねたニューイヤーパーティが企画されているが、それ以外は全てハネムーンなのだ。

準備のために宗はきりきり舞いをしており、その上、年末年始は休みなしである。

「いいわ。鍵を開けるから。ああ……そのゴミはこっちの袋に入れ

てよ。私が始末しておくから」

宗は、ようやく使用済みの避妊具を手放せ、ホツとした。

「なんだったら、添い寝してくれてもいいけどね」

軽くウインクすると、宗は雪音の目線に高さを合わせ、身を屈めた。雪音は万里子と同じ背丈であった。日本人女性のほぼ平均だろう。

だが、バストを中心に万里子より細い。つつい、その辺りに宗の視線も彷徨った。

「ちよつと疲れてるんじゃないの？ それに、たった今したばかりなんでしょ？」

「お嬢様を満足させただけさ」

「自分だって満足したんじゃない！」

ゴミ袋を突き出し、雪音は宗に言い放つ。

「ま……それはそうなんだけど、ね」

宗は困ったように頭を掻いた。

雪音は鍵の束から一本抜き出し、宗に押し付ける。

「上がって右側を使って。出るときは鍵を忘れないですよ。じゃ……九時にいつもの場所で」

「……りょーかい」

わざと間延びした声で宗は答え、雪音に敬礼して螺旋階段を昇っていくのだった。

く*く*く*く*く*

住み込みの使用人に決められた門限は十時だ。それ以降の外出は禁止されている。無論、理由があり、家人の許可が取れば別だ。

一番手っ取り早いのが、誰かの付き添いで外出する、というもの

であった。これだと大っぴらに夜間の外出が可能だ。もう一つは、誰かの車に同乗して、無許可で外出するというもの。バレさえしなければ報告もしなくて済む。だが、バレたら大きな問題になるのは間違いない。

ここまで管理が厳しくなったのには理由がある。

先代社長・高德が亡くなる前後、一人の使用人が、ごたついた邸内から美術品や高価な調度品を多数持ち出したのだ。使用人はそれを質屋に売り払い、盗難事件が発覚したのである。

雪音は、尚子・和子一家とは対立関係にあった。

卓巳の味方をしたことに後悔はない。だが、雪音には、深夜に外出したい事情があった。卓巳は真面目で公平な人物だ。だが、融通を利かせるということは苦手なタイプである。

せつかく勝ち得た雇用主の信頼を、こんなことで損なうのはイヤだ。雪音はしばらく黙っていたが……。どうしても表に行きたい。そう思い詰め、敷地内の車道を正門に向かって歩いていった時、彼女の前を宗の車が通ったのだった。

今から半年前のことである。

宗らしいと言えらしいだろう。だが、年齢の割に実用性のまるでない、赤のRX-7が彼の愛車であった。

ロータリーエンジンを積んだ金食い虫のスポーツカーなど、道楽以外の何物でもない。

しかも、乗り心地はお世辞にも良いとは言えず……。何が楽しくて、いい歳してこんな車に乗ってるの？」

雪音が聞きたくなくなる気持ちも判る。なんと年間維持費が雪音の年収を上回るのだ。都内を走るのに、どう考えても意味のない車であった。

「普通の女の子は、『キヤーカツコイイ!』って言うてくれるんだけどね」

いつもの場所　藤原邸のエントランスから正門までの、ちょうど中間地点が待ち合わせ場所だ。監視カメラの死角であった。そこで雪音を拾い、正門を抜ける。常駐の警備員が軽く会釈し、ノーチエックで社長秘書を通過させたのだった。

「それはごめんなさいね。フツーじゃなくて」

確かに普通ではない。夜遊びに行くのに相変わらずのノーメイクだ。一つに縛った髪は解いているが、いつもの黒ぶち眼鏡でジーンズにセーター。上からはアメリカンカジュアルなダウンコートを羽織っているだけである。

月に一〜二回、こうして宗が脱出を手助けしていた。これまでで十回程度であろうか。

行き先は決まって横浜だ。雪音の地元だという。

中華街から埠頭に向かってしばらく行った場所で、宗は彼女を降ろす。すると、道から少し入った木造アパートに雪音は向かうのだ。宗が見届けるのはそこまでだった。

「男だよ。君が逢いに行ってるのは」

「……」

「いや、詮索する気はないよ。だからどう、って訳じゃないんだけど」

半年前は、宗にも横浜市内に住む女性との付き合いがあった。

そんなついでもあり、雪音の送迎を引き受けたのだ。もちろん、あわよくば、と想像しなくてもなかったが……。雪音には、ハツキリと断わられたのである。

宗が万里子の身辺調査や仕事に忙殺されている間に、横浜の女は

一方的に別れを告げ、宗を追い払った。去る者は追わずの主義なので、宗には“ついで”がなくなってしまう。それでもなぜか雪音に付き合っている。

本人に詮索するまでもなく、雪音の周辺は調査済みであった。

彼女が高校中退であることは履歴書通りで特に問題はない。問題があるのは、雪音より一つ年上の交際相手のほうだった。

宗の調査によると、相手の男は暴力事件等で補導歴があり、複数の校則違反で高校を退学になった。高校で出会い、交際中だった雪音は男の後を追って自主退学。その後、雪音は家出同然に親元を離れ、二年間同棲している。

だが、男は借金を返すために、雪音を風俗で働かそうとした。それを拒否し、雪音は自力で逃げ出したのだ。男から隠れる意味もあり、住み込みのメイドを始めたらしい。

卓巳なら「馬鹿な女の典型」と言うであろう。

その証拠に、一年ほど前から、雪音は休みのたびに男のアパートを訪れている。報告書には、男の泣き落として縋りを戻した、と書かれてあった。

雪音曰く、男は真面目に働き始めたという。ただ……風俗店の呼び込みに“真面目”をつけて良いのか悩ましい所であろう。

「昼間は寝るから、仕事で居ない夜に来て欲しいらしくて……。でも、邸勤めで夜中に出歩くのは難しくして」

休日だけじゃ不満なのか？ と尋ねた宗に、雪音の返事がこれであった。

「普通は逆じゃないか？ 家に居る昼間に会おうって言うんじゃないの？」

「全く居ないって訳じゃないから……。それに寝てる時じゃ掃除と出来ないし」

「なあ、雪音くん。本当に、彼はその仕事で食えてるわけ？」
「……」

賭けてもいい。相手の男は働いてはいないだろう。宗は心で思ったが口にはしなかった。雪音がはつきりと言った訳ではない。だが、彼女の様子から給料のほとんどを貢いでいるのが判る。

最初、そんな雪音に危険を感じた。男のために罪を犯す女は少ない。雪音ほどしつかりした女性が、と誰もが思うだろう。だが、彼女のようなタイプが一番、馬鹿な男に引っ掛かりやすいことを宗は知っている。

「朝は六時にここに来るから。電話はしないよ。この間掛けた時、彼氏が怒ってたろ？」

六時を十分回っても雪音は出て来ず、宗は携帯を鳴らしたのだ。すると男が出て、

『んだ、てめえ！？ 雪音、お前浮気してんのか！？ おい、俺の女に手え出したら殺すぞ！』

そんな風に凄まれた。

太一郎などと同じで、口や態度に出す人間は然程恐ろしくはない。だが、電話の向こうで必死に言い訳をする雪音の声に切ないものを感じ……宗は電話を切ったのだった。

「判ってる。もう、遅れないから……宗さんは“横浜の彼女”の家に行くんでしょ？」

「まあね。どうして？」

「他の女の匂いをさせたまんまで、よく怒らないね？」

「君の？」

「静香の……」

「ああ。まあ、回数が減ったら怒るだろうね」「宗はしらっと答えた。「じゃ」と短く言い、雪音は車を降りる。

いつもなら、少し思案して、じきに車を走らせるのだ。だが今夜は、五分ほど同じ場所にいた。特に意味はなく、雪音の消えた方角をジッと見つめる。

やがて、深いため息と共に車のエンジンを掛けようとしたその時、雪音が駆け戻って来たのだった。

番外編「秘書の休日（中編）」（後書き）

御堂です。アレ？……何か、真面目な話になってきました（汗）
明日、後編です。

引き続き、ご覧下さいませm（――）m

番外編「秘書の休日（後編）」（前書き）

*後半に性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。R15
でお願いします。

番外編「秘書の休日（後編）」

（どうしてこんなことになったんだろう……）

雪音は恋人と思っていた男性の部屋から逃げ出した。後ろからは男の罵声が聞こえ……。

七年前、両親は離婚し、父は二十歳の女と再婚した。母にも新しい恋人がいて、一人娘を両親は押し付けあったのだ。

仕方なく母親は雪音を引き取り、離婚から半年経って再婚する。その時、雪音は高校に入学したばかりであった。

再婚相手にも歳の変わらない連れ子が二人いて、母はその二人ばかり可愛がったのだ。義父への気遣いであろう。おまけに、義父の親戚が再婚家庭を訪れた時、雪音の耳に飛び込んだできた言葉は……。「可哀想だとは思うけど、あの子さえいなかったら良かったのになえ」

高校に入った雪音に、初めて恋人が出来る。

彼は雪音が必要だと言ってくれた。一番困った時には必ず雪音を頼ってくれた。利用されていると気付いた後も、雪音には手放すことなど出来なかったのである。

別れてしばらく経って、共通の友人を通じて彼は謝ってきた。借金は自分で返した、ちゃんと仕事も見つけた、二度と馬鹿なことは言わないから戻って欲しい、と。

「彼はその仕事で食えてるわけ？」

宗は気づいている、雪音の愚かさを。そして、恐らくは卓巳の命令で雪音を見張っているのだろう。それ以外に、宗が雪音に関わる理由などない。雪音はそう思っていたのだった。

くわくわくわくわく

宗は車から降りようとして慌てて止める。

なぜなら、雪音の後ろから四〇五人の男が追いかけて来たからだ。一人なら楽勝、二人でも何とかなる。だが、三人以上を相手にするのは愚の骨頂だ。この場合、最も有効な手段は 三十六計逃げるに如かず、である。

宗はキーを掴むと、燃費の悪いロータリーエンジンをかけた。ここぞとばかりにアクセルを吹かす。コンパクトなエンジンは回転数を上げると、暴走族顔負けの派手な爆音を辺りに轟かせた。

ギヤをローに入れ 車は弾けるように雪音に向かって突進した。雪音が公園の横を駆け抜け、道路を横切り、それと同時に宗のRX-7は雪音の横をすり抜けた。急ブレーキとハンドル操作で雪音と男たちの間に割り込む。

「乗れっ！」

ケツを振りながら突っ込んできたRX-7に男たちはびびったようだ。暴力団とまでは言い難い、その辺に転がっているチンピラの種類である。

雪音が助手席に飛び込むと、ドアを閉める間もなく、宗はアクセルを踏み込んだ。そのまま一気に、車は大通りに飛び出す。

暴走する真っ赤なRX-7はクラクションの嵐を潜り抜け、ヘツドライトの海に紛れ込んだのだった。

宗は片手でハンドルを操作し、身を乗り出してドアを閉める。

両手で顔を覆っていた雪音は、いきなり声を立てて笑い始めたのだ。

「ばっかみたい。借金が増えたんだってさ。風俗が嫌なら裏ビデオに出ろって。ホント、馬鹿みたいよね」

撮影の段取りをして、彼らは雪音を待ち構えていたという。

宗にすれば、雪音の身の上は大凡おおおよその所承知している。彼女が一人の男に執着するわけも……。

「おしゃれとか、化粧なんかしなくても美人だとか言われてさ。真に受けて……別れてる間も、口紅ひとつ買わなかったわよ。そうやって貯めたお金も全部渡しちゃって……ホント大笑い」

そんなことまでは、さすがの宗にも判らなかった。

女の化粧品代まで吸い上げる男がいるのには驚きだ。だが、それでようやく雪音が身なりに構わない理由も判った。

必死で笑う雪音を宗は横目に見る。瞳に浮かぶ大粒の涙がどうにも痛々しい。

「奴だけなんだろう？」

「何が？」

「他の男も試してみたら、ってこと」

宗の言葉に、雪音は一気に気色ばむ。

「そんな言い方せずにはつきり言えば？ 助けてやったんだから俺と寝ろって」

「ひどいなあ。俺ってそんな男に見える？」

「他に何かあるっていつの？ 卓巳の命令で私を見張ってたんでしょ？ 言えばいいわ。どうせクビなんでしょ」

採用前のことは卓巳も当然承知している。だが、その後の雪音の行動は一切報告はしていない。

それを雪音に証明して、彼女に選ばせるのが最も安全だ。責任を逃れるために、宗自身が好んで使ってきた手段である。

少し考え、宗は思わず苦笑した。雪音の男と大差はないズルイ男の手口だ、と。

だが……。

「オツケー。じゃあそうしよう。俺の言う通りにしたら、社長には報告しないよ」

「断わったら……」

「グルツと一回りして、さっきのアパートの前に君を降ろす」

「！」

宗は笑いながらとんでもない台詞を口にする。雪音は彼の部屋で見た撮影セットを思い出し、声が震える。

「どうせ私なんか、どうなっても構わないって言うのね」

「ビデオ一本予約しとこうかな。本物の代わりに慰めてもらうよ」

「最っ低」

「ありがとう」

女は面倒だ。

だが、こういうややこしさなら悪くない。宗はこの状況を楽しんでいたのだった。

く*く*く*く*

「てっつきり……ラブホテルに連れ込まれるんだと思ってた」

雪音は呆気に取られて室内を見回している。そこは、卓巳が利用する系列企業のホテルではなく、お台場にあるライバル社のホテルであった。その中でも最も景観の良い、コーナースイートと呼ばれる部屋を宗は選んだ。

電本一本で用意させる辺りは、やはり、藤原の名前であろう。

「それか、車の中とか……」

「あの車で？ 勘弁してくれよ。罰ゲームのようなセックスはもうご免だ」

昼間の離れでの情事を思い出し、宗は本音で答えた。

相手には事欠かないし、毎週誰かとセックスはしている。携帯に入ったセフレのナンバーだけで二桁はいるのだ。綱渡りの関係を楽しんできたはずだが……最近の卓巳を見ると、どうにも自分が負け組に思えてやるせない。

すごい……その言葉を呟き続け、雪音は地上二十七階から、お台場の夜景を見下ろしている。

後ろから歩み寄った宗が抱き締めても、雪音は抵抗しなかった。いや、させなかったと言うべきだろう。

「いいか？ 男は奪うものだ。君は逆らえないまま俺に奪われるんだ」

唇を髪に寄せ、なぞるように耳朶まで下げる。そっと舐め上げた後、宗は首筋に吸い付いた。雪音の喉から吐息が漏れる。波打つようにリズムカルに、それでいてなだらかに。唇の動きに合わせて雪音の声は高まっていく。

「そ……う、さん」

「ユキオミだ……言ってごらん」
「ユキ、オ……ミ」

窓際に立ったまま、一枚一枚服を脱がしていく。やがて最後の薄一枚まで足から抜き取り、雪音は生まれたままの姿で宗の腕の中にいた。

スレンダーなボディが暗い窓ガラスに映る。

「み、られるわ」

「覗けるのはカモメくらいだ。でも、夜は飛んでない」

「……冷たい……」

さすがに、裸でガラスにもたれたら冷たさを感じるだろう。

宗は手の平に納まる雪音の胸を撫で擦りながら、彼女の身体を上から下に唇を這わしていく。そしてそのまま雪音の前にしゃがみ込んだ。

「雪音……覚えておいたほうがいい。男は奪う分だけ、与えるんだ」
「……くっ！」

彼女は初めて唇と舌先、そして吐息で、その部分に洗礼を受けた。堪えきれず、宗の肩に爪を立てる。

（随分久しぶりだな……セックスでリードするのは）

雪音の膝が崩れ落ちそうになり、太腿が戦慄わなないた。室内に、押し殺したような声が広がる。

宗は口元を拭い立ち上がると、初めて雪音に口づけた。

キスの合間に彼自身も手早く脱ぎ……雪音の片足を腰の位置まで抱え上げ……ゆっくりと、二人は繋がったのである。そこは十分に潤い、適度な狭さと締め付けで宗を迎え入れた。

雪音は唇を噛み締め、宗の腕をしっかりと掴んでいる。その唇を割り、舌を差し込むのは、男ならではの悦びだろう。

やがて、規則正しい律動が始まる。眼下に見えるレインボーブリッジが、宗の瞳の中で揺れ……雪音はそれを見ながら、与えるのではなく奪われる快感に酔い痴れたのであった。

その夜以降、宗はセックスの最中に、万里子の顔が思い浮かぶことはなくなつた。

くろくろくろくろくろくろく

「雪音さん、口紅なんて持ってたのね」

万里子は驚いて声を上げた。随分失礼な聞き方かも知れない。でもそれは卓巳から、雪音は化粧はしないしファッションにも興味はないと聞いていたせいだ。

ここ数日、雪音は口元に目立たないピンクベージュのルージュをつけていた。髪も少し短くなり、無造作に一つに束ねることもなくなり……。

窓拭きを手伝いながら、万里子はこちらからかうように質問する。

「ひよつとして、彼からの贈り物かしら？」

「ナイシヨです」

雪音は屈託のない笑顔を見せた。

そして、雪音の休日と宗の休日と重なることに万里子が気付くの

も

。

番外編「秘書の休日（後編）」（後書き）

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

皆様お待ちかね（？）のR15全開で宗くんに頑張って頂きました

（苦笑）

機会があればまた、この二人のお話も書きたいと思います。

その前にセルフレをどうにかしろよ、という突っ込みはさておき（
^ ; ;）

昨日で連載100話目を迎えました、お祝いメッセージありがとうございます
ございました。

明日から第6章です。

これからも頑張りますので、引き続きよろしくお願い致しますm（

——）m

第六章 試練 (1) 予感(前書き)

*前半に性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。

第六章 試練 (1) 予感

「やっ……あん」

「万里子、もう少し……もう少しだけ」

「だめえ、そこは……あっちゃっ！」

「愛してるよ。万里子っ」

「きゃっ！ もうっ。卓巳さんのバカッ！」

その瞬間 卓巳は万里子に蹴り飛ばされ、天蓋に吊るされた力
ーテンの隙間から転げ落ちた。

二人の愛の行為は日々進展している。

万里子のほうも卓巳に教わり、彼の肌に触れるようになっていた。最初は腕や肩、今では背中や胸辺りまで、軽く唇を寄せられるほどだ。

そして卓巳のほうはと言えば……。

その部分に力が漲みなぎることはないが、それなりに快感を覚えるようになってきていた。そのせいだろうか、今夜はふいに思い立ったことを実行してしまったのである。

卓巳は二人の大事な部分を重ね、なんと律動しようとした。擬似セックスである。しかし、それには万里子が驚いた。当然だろう、いきなり足を大きく開かされ、その間に卓巳が入り込んで来たのだから……。

「ご、ごめん。本当にごめん。つい、そんな気になって」

“スーパージョーキングサイズ”のベッドに復帰しつつ、卓巳は必死で謝る。

「酷いわ卓巳さん！ こんな、こんなこと……わたし、本当にされるのかと思って」

両方の肩紐が二の腕までずり落ち、シルクのキャミソールから二つの小山が零れ落ちていた。ツンと尖った頂いたたきが目に入り、張りのある白い肌と共に卓巳を誘惑する。

キャミソールは裾が捲れ上がり、かろうじて万里子のお臍へそを隠すくらいか。腰から下を覆うのは、白い小さなレースだけである。飛びつきたい衝動に駆られ、卓巳の鼓動は速くなるばかりだ。

「ぼ、僕にそれが出来ないことは……君が一番良く知ってるだろう？ でも、つい、そんな形になってみたかったんだ。そんなにイヤかな？」

卓巳は必死で冷静な顔を作り、猫撫で声で万里子に問い掛ける。

「イヤ、とかじゃありません。あなたになら……わたしは、何をされても構わないと思ってますから。でも無言で、いきなり足首を持って左右に、なんて……止めてください」

万里子は怖かったのだろう。ひよつとすれば例の事件を思い出したのかも知れない。卓巳は自分の迂闊な行動に心から反省した。

卓巳はベッドの上に正座し、折れそうほど項垂れて謝罪を口にする。

「すまない。本当に、申し訳ない」

「もう、卓巳さんたら」

今日の卓巳はアイスブルーのボクサーブリーフだ。その下着一枚で、ベッドの上にちょこんと正座する姿は、どこことなく哀愁すら漂っていて……。

万里子はクスツと微笑むと、

「あなたに言われることなら、わたしはノーとは言いませんから……

…ね？」

「本当に？ じゃあ、足を開いてって言ったらそうしてくれるかい？」

「……はい……」

一瞬で卓巳の笑顔は復活して、万里子に擦り寄った。そして、彼女の両足を持ち、口づけると脚の間に体を滑り込ませて行く。卓巳は遠慮がちにその場所を押し付け合い……キスを繰り返しつつ、腰を揺らし始めた。

「愛してる。万里子……君だけだ。愛してるよ」

「愛しています。卓巳さんだけを。お願い、傍にいてね。絶対に離さないで」

「離さない、離すもんか！ ああ、万里子っ！ 君は最高だ……好きだ……愛してる。君が死ぬほど好きだっ！！」

挿入が果たせないだけで、二人の行為は限りなくセックスに近かった。

だが卓巳にすれば、自分の不甲斐なさから一つになれないのである。セックスの快楽に近づけば近づくほど、その焦燥感は高まり。

それはあらゆる意味で、卓巳が独りで乗り越えねばならない試練であった。

くくくくくくくく

クリスマスを間近に控えたその日、藤原家の食堂で信じられないことが起こった。

なんと、朝食の席に太一郎が居たのである。

しかも 丸刈りだ。

その心境の変化に驚きのあまり全員が黙り込む。しかし、太一郎

の後から食堂に姿を見せた静香は、そんな太一郎を見るなり吹き出したのだった。

「どっ、どうしたの？ 太一郎さん、あなた、卓巳さんに殴られておかしくなっただんじやないの？」

「静香さん、そんなこと」

無遠慮な静香の言葉を、万里子は止めさせようとするが……逆に、静香は矛先を万里子に向けて来た。

「ああ、そういうこと。あの太一郎を子猫ちゃんにしちゃうなんて、万里子さんたらやるわね。まあ、卓巳さんを骨抜きにするくらいですもの。さすがだわあ」

「その女は関係ねえ」

卓巳より早く万里子を庇ったのは太一郎であった。

太一郎は淡々と言葉を続ける。

「腹が減ったから、朝メシを食いに来ただけだ」

食堂は水を打ったように静まり返る。

そして、その静寂を破ったのは万里子であった。

「良かったわ。元気になられて。ね、卓巳さん」

「多少元気がないほうが、あらゆる意味で安心かも知れないがな。しかし太一郎くん、この時期にしては随分涼し気な頭だな。一体、どういった心境の変化か聞かせてもらいたいものだ」

先に万里子を庇われた悔しさはともかく。放蕩の限りを尽くした従弟の変わり様に、卓巳は憮然とした面持ちで訊ねる。

だが、太一郎は掻き込むように朝食を済ませ、コーヒーを用意しようとした浮島に「要らねえよ」と一言投げつけ席を立った。

「太一郎！ 席に着くなら食堂のルールは守るんだ！ そんな勝手な真似は」
「卓巳さんっ」

こうと決めたらその型に嵌めようとする。融通が利かないのが卓巳の悪い点だ。それは仕事においても同じであった。良くも悪しくも一度決めたルールを守ろうとする。臨機応変に対応することは、卓巳にとって至難の業と言えよう。

そんな卓巳の目を見つめ、万里子は首を左右に振った。

太一郎にとって家族や使用人の前に出てくることは、かなりの勇気を要したであろう。人は変わるがいきなりは無理である。そして、その努力を認めてくれるものがいなければ、次の勇気は生まれない。

藤原家では特別なことがない限り、昼食と夕食はそれぞれ好きな時間に取る。可能な限り、全員が揃うように決められているのは朝食の席だけだ。

「太一郎さん、明日の朝もお待ちしていますね」

万里子はそう声を掛けた。

「腹が……空いたらな」

ぶつきらぼうに答え、太一郎は食堂から出て行くのだった。

… 新たな可能性が生まれた。それは同時に、新たな火種ともなり…
… 卓巳と万里子を包み込んで行くのだった。

第六章 試練 (1) 予感(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

明日辺りが彼らのクリスマスです(^^;)

季節的に約一ヶ月ずれ込んでおりますが…このままドンドンずれて行きます(苦笑)

番外編の後、宗&雪音に対する好意的な声にホッといたしました。

(ご希望があればまた書かせて頂きますね(^^)(/)

では、第6章もよろしく願い致しますm()m

第六章 試練 (2) クリスマスの夜に

今日はクリスマス・イブだ。

また手作りケーキで、と言いたいところだが、なんと卓巳は札幌に出張中であつた。

ニューイヤーパーティが新規事業のレセプションを兼ねているため、二十八日には東京を出発予定だ。それに向けて最終的なスケジュール調整をしており、今の卓巳はとにかく多忙であつた。

「八時まで会議の予定が入ってるんだ。十時前の最終便に間に合えばいいんだが」

今朝家を出る時、卓巳はそんな風に言っていた。

せつかくのイブと一緒に過ごせないのは残念だが、それもこれもハネムーンのためである。無理しないで明日の夜一緒に過ごしましよう、と言って万里子は卓巳を送り出したのだった。

そんな万里子が今やっていることは。

「万里子様がそんなことなさらなくても」

という雪音を説き伏せ、大掃除の手伝いをしている。

藤原邸は広い。特に、高さ三階建て相当の玄関ホールの吹き抜けは、道具と技術がなければ掃除は不可能だ。

玄関から右手に行くとコレクションルームがある。先代社長が投資目的で集めた美術品が保管・展示してあつた。億単位の品も多く、鍵は浮島が厳重に管理していた。

コレクションルームの前に個室が二つ。一つは空き部屋で一つは浮島の私室だ。

玄関から左手にあるのが、ウエイティングルーム。

壁に沿ってソファが置かれその前には小さめのテーブルがあった。奥にはバーカウンターもあり、コーヒ―紅茶のソフトドリンクから、アルコールまで提供できるようになっている。通常訪れたゲストに、お待ち頂くためのスペースであった。

親戚であったり、さらに親密な関係であったりする場合、ウエイティングルームより左手奥に位置するリビングを使う。万里子が最初に訪れた時、通された部屋だ。

機能的なウエイティングルームに比べ、リビングの内装はアンティークである。卓巳の部屋にある暖炉は本物だが、ここにあるのは擬似暖炉だ。窓際にはチョコレート色に艶めくグランドピアノも置かれていた。ドイツ製のハンマーやワイヤーを使い、外装はウォールナット材で艶出しされていて、実用より観賞用とも言えるだろう。本体も椅子も猫足になっているのがポイントだ。

リビングの前には来客用のトイレがあり、更に進むと突き当たりがメイドルームである。

階段脇、右手の通路は裏の棟へ行ける渡り廊下に繋がり、手前にリネン室、その横にもトイレ……レストルームがあった。万里子があずさに通されたのはこちらの方だ。個室の数が多い来客用に比べ、こちらはパウダールームとしての設備が充実していた。

だが、あずさの場合、ひよっとしたら最初から太一郎を^{そそのか}唆すつもりだったのかも知れない。

母屋の中央に位置するのが食堂　　言い方を変えれば大広間であった。

ちよっとした披露宴会場より広く、迎賓館とまではいかないが、内装も見事なものである。玄関正面と左手側にはアーチ型の観音開きの扉があり、右手側に普通サイズの扉があった。

食堂の裏手は、裏庭が見える一面ガラス張りの長廊下だ。左側のオープン階段下を抜ける通路と、渡り廊下に繋がる通路が長廊下で繋がっていて、邸内を一周出来る構造である。

長廊下の途中に、卓巳が皐月のために作ったサンルームがあった。その皐月の部屋があるのが、母屋の一階左手奥、千代子の部屋は隣（むすこ）に設（た）えてある。

他にも厨房や食料庫、洗濯室があり……総勢十三人のメイドがいとも、簡単には終りそうもない広さなのであった。

万里子は二階のバルコニーで脚立を使い窓を拭いている。

横には雪音もいて、何が楽しいのか二人ともおもちゃ箱をひっくり返したような笑顔だ。

「気に食わない、あの女」

万里子と雪音を見上げていたのは、メイドの永瀬あずさだった。

手を貸してやったはずが……太一郎には感謝されるどころか、罵詈雑言を浴びせられた。言うに事を欠いて「八十の婆（おば）を抱いたほうがマシ」とはあまりな言葉であろう。

ほんの何日か前まで、太一郎もあずさを抱いて楽しんでいたはずなのだ。

それが今では万里子の飼い犬同然である。彼女に気に入られようと、尻尾を振って擦り寄っているのは見え見えだ。片や、あずさに向かつては牙を剥き始めたのだから怒りも増すというものだろう。

あずさは今日の担当場所であるサンルームの床をモップで掃除しながら、コツソリとほくそ笑む。

「ふふん。笑っていられるのも今のうちよ」

そう、例の件を報告すれば……そして最も効果的な作戦は……あずさは更に卑劣な罫を計画していたのであった。

イブの夜、藤原邸の食堂はこれまでになく華やかであった。

皐月や孝司と一緒に、使用人たちも加わって、クリスマスパーティーの真つ最中なのだ。

静香には鼻で笑われ、太一郎はまんざらでもない様子だったが……。

玄関にあつた巨大なツリーは、男性陣が正面の大扉より中に運び込んでくれた。あちこちに付けられたクリスマス飾りは、まるで幼稚園に迷い込んだかのような可愛らしさである。万里子の手作りだった。

「来年は、もつと大きな食堂専用のツリーを飾りましょう！ 皆のご家族やお友達も呼んで、もつと早くパーティーの計画をしましょうね」

万里子は嬉しそうにそんな提案をした。

そんな万里子を実の孫を見るように皐月は愛しげに見つめている。

「ええ、ええ。それは楽しそうなこと。孝司さんもガールフレンドくらいは連れていらっしやいな。皆さんもね。万里子さんのお父様も呼んで……ああ、でもその頃には、赤ちゃんが産まれているかも知れないわね」

皐月は、その頃には自分は……そんな人生の悲哀など、ちらとも感じさせない。

そんな皐月の想いに、

「小さなお子様の声が増えれば、それはもう賑やかにおなりですわ」
千代子も笑顔で深く同意したのであった。

万里子は少し上を向き、ツリーの天使様を見る振りをして微笑む。

それが涙を見せないようにする仕草だと気づき、皐月は万里子に感謝した。だが、本当の理由は……。

「万里子様　札幌からお電話がありました……。残念ながら、最終便には乗れなかったようです」

「卓巳さんから？」

「いえ、秘書の宗様からのお電話でした。卓巳様はまだ会議中だそうですね」

万里子は雪音からの報告を聞き、時計を見上げ、ため息をついた。もうすぐ十時だ。こんなことなら卓巳について行けば良かったのかも知れない。でも……楽しいクリスマスを過ごせたのである。贅沢は言っまい、万里子はそう自分を納得させたのだった。

第六章 試練 (3) 優しい嘘

遊歩道沿いの並木はキラキラとイルミネーションに煌いていた。

そこはまるで、表参道にワープしたかのような光の海だ。万里子にすれば、ここまで本格的なものは考えてはいなかった。ところが卓巳は万里子の話を聞くと庭師に命じて……後は言わずもがな、である。

○時には消灯することになっているが、今夜はクリスマス・イブ。

最終に間に合えば、○時過ぎに卓巳は邸に戻るはずであった。だが今はもう午前二時。眠れない万里子は卓巳に渡すはずだった長めのマフラーを手に、遊歩道まで出て来てしまう。

光のシャワーを浴びながら、万里子は遊歩道のちょうど真ん中辺りにあるベンチに腰掛ける。

独りになると、知らず知らずのうちに皐月の言葉が頭を過ぎり、目の奥が熱くなった。来年も再来年もその次も、きつと卓巳は万里子の隣にいてくれるだろう。でも万里子が妻で居る限り、卓巳は後継ぎを儲けることが出来ないのだ。一年や二年は何も言われずともいずれハッキリさせなければならぬ。卓巳の名誉のためにも。

そのことを考えると、せつかくのクリスマスなのに気が重くてならない。

万里子が何度目かのため息をついた瞬間 ニットガウンのポケットに入れた携帯が、メールの着信を告げた。

「え？ どうして？」

万里子が驚くのも無理は無い。そのメロディは卓巳の車が正門を通過した時の音。

ベンチから立ち上がると、立ち木の間を抜け、万里子は車道側に向かった。遊歩道とほんの十メートルほどしか離れていない。

その時、なんと卓巳の乗るリムジンが万里子の前を走り抜けたのだ。啞然として見送る万里子。

だが直後に車は急停止し、そのままバックして万里子の前で止まった。そして後部座席からは最愛の夫、卓巳が降りて来たのである。

「どうして？ どうして、卓巳さんがここにいるの？」

「どうしてだって？ もちろん、それは」

卓巳の言葉を遮るようにリムジンの後部座席、サイドウィンドーが下がっていく。

中には秘書の宗が乗っており、万里子に軽く会釈した。

「社長。書類は書斎でよろしいですか？」

「ああ。任せる」

「今夜は遅くなりましたので、離れに泊めて頂いても構いませんか？」

「ああ 何でも良いから好きにしろ」

卓巳はまるで、宗が邪魔だと言わんばかりだ。

だが、宗は嫌な顔一つせず「では、メリークリスマス」小さな声で呟くとニッコリ微笑んだ。そして、窓が閉まると同時に、車は秘書だけ乗せて走り去ったのである。

卓巳は万里子に歩み寄ると、黒のチェスターコート脱ぎ、妻の肩に掛けた。

「卓巳さんが寒くなるわ」

「じゃあ代わりに、その手の中の物を貰うとしよう」

誕生日プレゼントのセーターと、同じデザインのマフラーだ。万里子は悴んだ手で、卓巳の首にそっと巻いたのだった。

その手を卓巳が掴み、

「いつから外にいる？ 氷のようじゃないか」

「じゃあ、温めて下さる？」

万里子は、氷河をも溶かしそうな極上の笑みを見せる。卓巳はそれを独り占めしたくて、そのまま万里子を抱き寄せ、吐息を重ねたのだった。冷たい唇は瞬く間に熱を帯びて……。

「まあ！ じゃあわざわざ飛行機をチャーターしたんですか？」

万里子が驚くのも無理はない。朝には問題なく飛行機は飛び立つのだ。いくらイブでも、新妻に逢うためだけに飛行機をチャーターする人間は少ないだろう。北海道からなら片道で数千万円は掛かったはずだ。

「でも、発着時間が規制されるんじゃない……」

成田空港の場合、夜十一時から朝六時までには発着禁止である。だが、新千歳空港と東京国際空港……通称・羽田空港は二十四時間発着可能であった。

だが、事前に飛行計画など提出し、許可を取らなくて良いものだろうか？ それを万里子が質問すると、卓巳は微妙にはぐらかした。

二人は今、せっかくだから、とイルミネーションの真下のベンチに座っている。さつき万里子が一人で座っていた場所だ。二人だと気持ちはまるで違う。たぶん、長いマフラーを二人で巻いているせいかもしれない。

「万里子……クリスマスに話そうと思っていたことがある」

卓巳は改まった口調で切り出した。

思わず、万里子の顔にも緊張が走る。

「何でしょうか？」

「実は、君に話さなければならぬことが二つあるんだ。一つは、君のお父上の会社のことだ」

卓巳の言葉に、万里子は驚き、聞き返す声も上ずった。

「あの……父の会社が倒産とか、そういったことですか？」

「いや、そうじゃない。済まない！ 全部、嘘なんだ。資金繰りに困っているということも、会社の経営が傾いてると言った言葉も……君を得たいがためについた嘘だ。申し訳ない」

突然の告白に万里子の頭は真つ白だ。

「それは、じゃあ、卓巳さんの援助がなくても、父の会社は潰れることはないってこと……ですか？」

万里子の質問に卓巳は大きく肯き、「本当にすまなかった」

そんな謝罪を繰り返している。

これが一ヶ月前であったならどうなったかは判らない。だが、今となっては……。

あまりに殊勝な卓巳の態度に、万里子は思わず吹き出してしまう。

「もうっ！ 卓巳さんたら。じゃ、東西銀行の頭取もグルだったんですね。悪い人たちだわ。犯罪ですよ」

「怒ってる？」

「何を仰ってるの？ わたしが怒ってるように見えますか？」

クスクスと本当に可笑しそうに万里子は笑った。

すると、卓巳はあからさまにホツとした様子で、もう一つの話を持ち出したのだ。

「実は……子供のことなんだ」

不意打ちだった。その言葉に万里子の胸は槍で突き刺されたよう

な衝撃を受ける。

「君にどうしても話しておきたくてね」

「ええ、あの、卓巳さん、実はわたし」

「僕に子供は持てない。 イギリスから戻り次第、病院に行ってみようと思う。十年前は治療を拒んだが、今からでも可能な限り治療を受けようと思っっている。カウンセリングだけでなく、投薬や手術もあるそうだ。でも、子供は無理かも知れない。だから」

「卓巳さんっ！ わたし……わたしも……あの」

その瞬間、卓巳は万里子を抱き寄せキスしたのだ。

唇が離れた時、

「僕がそうでも君が愛してくれるなら……仮に逆の立場に立たされても、同じだとは思わないかい？」

卓巳の優しい嘘が万里子の胸に沁み透って行く。ため息で埋もれ掛けた心を、イルミネーションで照らし出してくれた。

「卓巳さんは……それでいいの？」

「聞いているのは僕だよ」

きらきら……きらきら……優しさは雪のように降り積もる。

「その時は……養子でもいいかしら？ 不幸にして独りになった子供はたくさんいると思うの」

「何人でも。空き部屋はたくさんある。足りなければ、裏の連中を追い出そう」

万里子の涙を指先で拭いながら、卓巳は冗談めかして答える。

幸福の光が二人に降り注ぐ。それはまるで雪のように……わずか数日で消えてしまう、切ない光であった。

第六章 試練 (4) 亀裂

卓巳がチャーター機を飛ばして舞い戻った翌日。

そしてそれは、新婚旅行へ出発する二日前 事件は起こった。

この日、万里子は都心に買い物に出ていた。全くの偶然だが同じ時間帯、太一郎も出掛けていたのだ。

一時は引き籠もっていた太一郎だったが、最近ようやく出歩くようになった。だが以前のような外泊はせず、メイドを部屋に引き込むこともなくなる。食堂にも毎朝顔を出すようになり……。

何もかもが良くなり始めている。そう思った矢先のことであった。

きっかけは一枚のFAXである。

「そう言えば旦那様、明後日でございましたわね。お嬢様が新婚旅行に行かれるのは」

千早家の朝はだいぶのんびりになった。

十時過ぎだが、万里子の父・隆太郎は庭先に下り、花壇に水を遣りつつ家政婦・忍のほうを振り返る。

「ああ、そうだな。土産は何がいいかと聞かれたから、無事に帰ってくればそれでいい、と言っておいた。しかしなあ……大学の友達からハワイ旅行に誘われた時も、お父様が一緒でないと怖いから、と言って断わってたんだがなあ」

新婚夫婦の仲が良いのはめでたいことだ。

判ってはいるのだが、隆太郎と万里子は父一人子一人であった。周囲からファザコンと呼ばれるほど、何でも「お父様」だった娘で

ある。それが最近では電話で話すたびに「卓巳さんが、卓巳さんも」と夫の話ばかりだ。

嘗ては八時前には家を出、帰宅は深夜がざらの隆太郎だった。だが最近では、若い人間を積極的に登用し、重要なポジションを任せている。自分は昼前に出社、夜八時前には帰宅という日々だ。

男親には娘の体の変化などまるで判らない。だが、結婚はせずに一生仕事をする、と言う万里子から妙な気配は察していた。事情はどうあれ、万里子が親元に残りたいというなら、一生困らないようにしてやらなければ……それが隆太郎の原動力であった。

だが、その万里子は父親が止めるのも聞かず、あつという間に恋に落ち、嫁に行ってしまう。しかも相手は、生活の心配などしてやる必要もない大富豪だ。娘の人生に親の出る幕はなくなってしまった。

そんな隆太郎の落ち込みように心を痛めているのが忍である。

二十年近く、亡き妻の面影を宿す忘れ形見を大切に育ててきた。だが、その隆太郎とて五十年代半ば、まだまだ人生は二十年以上残っている。楽隠居を決め込むには早過ぎる、と忍は思う。

「では旦那様。昨日のお嬢様からのお電話は、そのお話で？」

「ん？ ああ、いや、何か妙なことを言っていたな。うちの会社は資金繰りに困ってないか？ と聞かれたよ」

隆太郎は笑って答え、話を続ける。

「もう将来のために、と稼ぐ必要はないからな。これからはより多く、社員と社会に還元して行こうと思つとる。藤原家の若奥様が変な噂を流さんでくれ、と言っておいたよ」

「きつと、景気が中々上向かないのでご心配されたのでしょうか。でも、旦那様が根を詰められることがなくなつて、よろしゅうございしました。まだまだお若いのですから、再婚でも考えて見られては？」

「おいおい……」

そんな時、電話のコール音がしてFAXに切り替わった。まずは忍が手にし、驚いて隆太郎に手渡す。同じものが千早物産の社長室にも、そして泉月の元にも届き……。それは当然、F総合企画と書かれた社内のFAXにも送信されていた。

「社長、お気づきのことと思われませんが、念のために言わせて頂きます。これは……合成写真ですよ」

宗は送られたFAXを机の上に置き、じつと睨む卓巳に向かって言った。

もし宗が最初に見つけていたら、可能な限り社長には見せず処分したのである。だが、第一秘書の中澤朝美は嬉々としてFAXを卓巳に差し出した。

『夫のイトコと寝る女』

書かれていたのはその文章だけだった。

後は写真だ。宗が指摘するように、そのほとんどが一目で判る素人の作った合成写真である。だが、どうみても違うものも含まれていた。

それは先日、万里子が太一郎の部屋を訪れた際の写真である。

庭から撮ったもので、万里子はカーテンの横に立ち、半裸の太一郎はベッドにいた。そして、もうワンショットが……ベッドに仰向けになる女性の上に押し掛かる太一郎の姿だ。女性の顔は見えないが、その服装は明らかに万里子であった。

他は、全裸の女性がベッドに座っていたり、まるで男がセックスの最中にふざけて撮ったようなショットまで一枚のFAXに掲載さ

れていた。

男に跨り、裸を晒した女の顔を、あるうことか万里子に入れ替えているのだ。

繋ぎ目も雑で合成は明らかである。だが、本物を混ぜることで、嘘を真実に見せてしまう騙し絵のような効果があった。

卓巳はふいに立ち上がり、その写真付きの怪文書をシュレッダーにかけた。終始無言である。

そんな卓巳の様子に、宗のほう心配になる。

「犯人ならすぐに調べ上げますが」

「どうせ邸の人間だ。放っておいても尻尾を出す」

「万里子様のことは……」

「これは妻の身体じゃない。私が一番よく知っている」

「なら、よろしいのですが」

この時、宗は妙に冷静な卓巳の様子に、逆に嫌な気配を覚えたのだった。

その頃、藤原邸もこのFAXを巡って大騒ぎになっていた。

言われて見れば確かに、万里子が太一郎の部屋を訪れてから、太一郎は人が変わったみたいだ。これまでのように、突然、メイドの身体に触ったり卑猥な冗談を言うこともなくなった。

茜やその他のメイドたちに、未だ正式な謝罪はない。だが、あの坊主頭にそれなりの意味が籠められているのだろう。そんな噂がメイドルームでも広がっていた。

地獄の業火に我が身も焼き尽くさんばかりだった太一郎を、万里

子は見事に宥めた。微笑すら浮かべなかった卓巳が、今では声を立てて笑うのだ。引き籠もり同然だった孝司も、クリスマスパーティーに顔を出したり、率先して人と関わるようになって来ている。

万里子は平等に優しく親切だ。そして、批判を恐れず正しいと思うことを言い、正しいと思うことをする。

だがそれは、そうすることの出来ない人間にとって、脅威であり嫉妬の対象となるのだった。

第六章 試練 (5) 復讐の果てに

あずさはFAX用紙を手に持ち、ひらひらさせながら言った。

「こーゆー手を使われたんじゃ、あたしたちには敵わないわよねえ」
例の怪文書は臯月専用の電話だけでなく、邸内全ての受信可能な電話に送りつけられていた。そのため、メイドルームも大騒ぎだ。

「あずささあん。見せて見せてえ！ あたしも見つけたのにい、浮島さんに取り上げられちゃったんですう」

かななは太一郎の夜遊びがなくなり、同行出来なくなって欲求不満なのだ。

「この身体にいゝ卓巳さまも骨抜きにされちゃったのお？ えゝいやあゝ」

しかも悪気なく、軽薄に騒ぐタイプの娘である。

そして今回のことに、悠里と美和子も困惑していた。

「でも、これってこの間の、でしょ？ そういう関係だから、あんな目に遭ったのに平気で部屋に入って行ったってこと？」

「清楚なお嬢様の顔が全部芝居なら……凄いつて言うより怖いんだけど」

「卓巳も太一郎も、あの清纯ぶつた『えせ似非お嬢様』にまんまと利用されてるのよ。最近じゃ、孝司だつて言いなりじゃない。引き籠もりのオタク坊やなんて、楽勝でしょうねえ」

あずさはここぞとばかりに声を張り上げた。

そこに飛び込んで来たのが雪音である。

「ソレは回収って浮島さんに言われたでしょう！ 第一、こんなバレバレの合成写真がどうだっていうのよ！」

雪音と万里子の立場は明らかに違う。このご時世だが、身分違いというものは確かに存在する。だが、不思議と二人の間には友情が芽生えつつあった。

儂く無防備に見えて強い、それは雪音から見た万里子の印象だ。

「でも、太一郎は明らかに変わったわ。あの女を見る目が違う。あんただって、そのことは気付いてるんでしょ？」

あずさが雪音に言い放つ。

「それは太一郎の問題であって、万里子様とは」

「それに、三十分近くも二人つきりで部屋にいたのは事実だわ！万里子はあるたや浮島には言うなって言って、太一郎の部屋に入っで行ったんですって。さあ、何があったのかしら？」

それはまさしく、下種の勘繰りというものであろう。

卓巳の担当を降ろされたあずさと、卓巳本人に指名された雪音は悉く反目していた。

加えて、あずさは自分の誘惑に感じなかった卓巳を恨んでいる。

尚子の手先となり、卓巳を誘惑しようとした自分自身の行状はまるで棚上げだ。一時期はこの雪音と卓巳の仲をも疑い……結果、雪音とは顔を合わせると罵り合う関係になったのだった。

あずさは今でも、雪音の卓巳に対する忠心は下心ゆえだと思っている。

「それに……卓巳があの子と別れたら、あんたも嬉しいんじゃないの？」

「ちよっと！私をあんたと一緒にしないで！」

「よく言うわよ。獲物を釣り上げようと、チャンスを狙ってるだけでしょう？あたしが知らないでも思ってるの？どんなに色気づいても案山子は案山子よ！」

あずさは自分の体に自信を持っている。反面、細身の雪音を羨む感情もあつたのだ。そのため、雪音を侮辱する時は、必ずそのスレンダーなボディラインを馬鹿にして笑う。

(まさか、この女！)

雪音はあずさの言葉に違和感を覚え……。

そして雪音の想像通り、全てあずさの仕業であつた。

邸内や万里子の実家、藤原グループの基幹会社となる『F総合企画』だけでなく、本社や傘下企業の社長室あてにも『淫らな写真付きの怪文書』を送っていた。

これで万里子の評判は最低になる。卓巳もいい笑いで、太一郎の悪行は更に轟くだろう。

仮に、事実ではないと卓巳が納得しても、蟠わたかまりは残るはずだ。それに、合成写真だと判っていても、傘下・関連企業の重役連中が万里子を見る目は、低俗な欲望に塗れた男のソレになることは間違いない。

そして、庭にいたあずさの耳に、風に乗って聞こえてきた言葉……。

まだまだ価値のあるものを、利用しない手はなかった。

くわくわくわくわく

『夫のイトコと寝る女』

そう書かれたFAX用紙を尚子は握り締めていた。

尚子夫婦の部屋は太一郎の部屋の真上にある。

夫婦の部屋……それは名ばかりであった。夫婦生活がなくなり三年目までは数えていたが、もう忘れてしまった。だが、夫の敦に性欲がなくなつた訳ではない。そのことは、定期的に届く興信所の調査報告書が証明していた。

前の愛人が結婚退職したのが半年前。又候、またそろ浮気の虫が目覚ましたようだ。クリスマスは出張と偽り、九州の温泉旅館で楽しんで来たらしい。相手は二十八歳のホステスである。

尚子の部屋のバルコニーから斜め向かいに見えるのが、卓巳と万里子の部屋のバルコニーだ。

天気の良い日はバルコニーに立ち、新婚夫婦は何事か囁き合いながらキスを繰り返す。じゃれ合う声が聞こえることもあるくらいだ。尚子にすれば『周囲に見せ付けるため、二人はわざとやっている』そうでも思わなければ、腹立ちは抑えられない。

そんな時、あずさは尚子の耳に万里子の秘密を教えてくれた。決して安い金額ではなかったが、どうせ藤原家は追われるのだ。ならば、卓巳に負けた腹いせくらいはしていききたい。

尚子にとって、切り札であり唯一の持ち札であった太一郎はもうお終いだ。あるうことか、一人息子は万里子に惹かれている、いや、虜とりこといつてもよい。

そして、新婚夫婦を邪魔するかと思われた静香だが……。かなり好条件の結婚相手を卓巳から薦められ、なんと乗り気だという。しかも、尚子の妹・和子にまで縁談があり、和子は年甲斐もなく浮かれる始末だ。

それだけではない。和子の息子・孝司は万里子の言葉に後押しされ、大学は経済学部に進むつもりだと聞いた。

「孝司さんは従兄の卓巳さんに似て真面目な性格ですよ。やはり人の上に立つ者は清廉潔白でなくてはね。グループに入社したら、

いずれは取締役、系列会社の社長ですつて。わたくしそれで充分ですわ」

以前は先代を、そして太一郎を褒め称えた口は都合よく置き忘れてしまったようだ。和子は完全に卓巳に寝返った。

子供たちは誰もが万里子に影響され、卓巳を慕い始めた。

太一郎が卓巳の軍門に降るのも、時間の問題だろう。

使用人も粗方あらかたそつだ。運転手から庭師に到るまで、卓巳を旦那様、万里子を奥様と呼び、クリスマスパーティなどと騒いでいる。

尚子が初めてこの邸に連れて来られたのは、十二歳の時であった。母は父に手当ての増額を要求し、娘二人を連れて来たのである。

小学生の和子はよく覚えていないという。だが中学生の尚子はこの日、“人間の醜さ”を知る。

当時はまだ、父・高德の両親をはじめ兄弟姉妹も存命であった。

彼らは皆一様に、尚子たちを白い目で見た。使用人たちにまで「妾の子」と呼ばれ、蔑まれたのである。

それでも、初めて会った五歳年上の卓哉に「はじめまして、お兄さま」と声を掛けたのだ。すると卓哉は、

「僕を“兄”と呼ぶな！ お前は汚らしい妾の子で妹じゃない！」
そう怒鳴り、化け物でも見るような目で尚子を睨んだ。

父は芸者の母は気に入っていたようだが、決して二人の娘を望んだわけではなかった。

母を手放さないために、子供を産むことを許しただけだ。自分の意のままにするために、金を纏めて与えることもしなかった。尚子たちに贅沢な暮らしは許されなかったのである。そして、その母が亡くなるや否や、父は纏めて金を払い、尚子らは母方の親戚に厄介

払いされたのだった。

同じ父の子でありながら、使用人に傳かかれ、何不自由ない暮らしをする卓哉が許せなかった。

卓哉がこの邸を追い出され、血の繋がった子供欲しさに尚子姉妹は呼び寄せられ、それは復讐のチャンスだったのだ。父の言いなりに結婚もし、この家から決して離れずに生きてきた。太一郎さえ藤原家を継げば、尚子は大奥様と呼ばれる。「妾の子」と見下した全員に復讐出来たはずなのに……。

卓巳はあの時の卓哉と同じ目をしている。

卓巳を傷つけることが叶わないなら、万里子を傷つけてやろう。

彼女を引き摺り下ろし、ずたずたに引き裂いて、この邸から追い出してやろう。

あずさに唆そされ、尚子は歪んだ復讐心に火を点けてしまったのだ。
った。

第六章 試練 (6) 暗転

「大奥様……如何いかがいたしましょう」

千代子は下唇を噛み締めながら俯いた。

臯月の目に触れないように、気を配ったつもりであった。それが、ほんの少し席を外している間に、例の怪文書が女主人の手に渡ってしまったのだ。

臯月が知った以上、黙り通す訳にもいかず……。

「性質たちの悪い悪戯でしょう。万里子さんはどちら？」

「旅行用のお品に買い忘れがあったとかで、午前中に、お出掛けになられたそうですわ」

「そう……太郎は部屋ですか？」

臯月の質問に、千代子は随分答え難そうにする。

「いえ……。今朝早く、出掛けられたままでございます。大奥様、まさかご一緒なんてことは」

「愚かな想像を口にするものではありません。どちらかが戻ったら知らせて頂戴。それまで横になります」

「はい。申し訳ございません」

千代子は直ぐ様、頭を下げるのであった。

(万里子さんだけは……万に一つも、そんな娘さんであってはならないのよ)

臯月は、使い慣れたベッドに横たわりつつ、様々なことを考えていた。

そのベッドは、臯月がお気に入りのマットレスを介護用に改造したものだ。卓巳の指示である。ベッドだけではない。卓巳は一階フ

ロア全体をバリアフリーに改築した。そして、全てのトイレにも車椅子用の個室を導入したのである。

卓巳は何事にも過ぎる点があるのは否めないが、不器用なことは欠点ではない。

そう、卓巳は父親の卓哉に似て、非常に繊細で不器用だ。卓哉は幼い頃、嫌なことがあったり叱られたりすると、決まって熱を出して吐いたものだ。それは臯月自身も同じであった。歳を取り、母親となつて多少は強くなつたが……。

このところ、卓巳は徐々に男性としての自信を持ち始めて来たように思える。その証拠が、例の巨大ベッドの購入だろう。夫婦生活の有り様^{うりさま}までは判らない。だが、二人のベッドを一緒にしたということは、二人の仲に変化があつた、ということだ。

結婚当初はどこかギクシヤクしていた。そんな中、卓巳と秘書の噂を聞き、その後は太一郎が騒動を起こし……。臯月にとって気の休まる暇もなく。

だが、雨降つて地固まるとは、まさにこのことだろう。

それが……。

写真はほとんどが合成である。素人にも判る粗末なものだ。問題は、太一郎の部屋を万里子が一人で訪れていた、という使用人たちの証言である。その理由を臯月は確認しておきたかつた。それで、太一郎が変わつたのなら尚更だろう。

太一郎が性欲のみで万里子を襲つたのなら、卓巳の激昂ぶりを見て二度と繰り返すことはあるまい。だがもし、従兄の妻に横恋慕したのであれば……。あの事件の後、太一郎が無理に万里子と関係したのだとしたら？

いくら夫婦仲が良くても、卓巳と万里子の間には深い交わりはないだろう。卓巳の可能性はゼロに近いと書かれてあつた。

一方、太一郎は女性には手慣れている。閨事^{ねやごと}に長けた^た太一郎の手

に掛かり女にされては、万里子にとって辛いことになる。それに關して、卓巳に挽回の手立てはないのだから。

ましてや妊娠でもすれば……万里子は太一郎を選ぶかもしれない。そんなことになれば卓巳の心は壊れてしまふ。再び氷の城に繋がれて、その魂は今度こそ、永久凍土に埋もれるだろう。

良かれと思つた……万里子の気性は穏やかな春の日差しに似て、卓巳の心を見事に溶かした。しかし、その寛容さが、まさか太一郎の激情まで包み込んでしまふとは。

皐月はそれが取り越し苦労に過ぎないことを、ただ願うばかりであつた。

く*く*く*く*

冬至を過ぎたこの時期、夕方四時半を回れば周囲は薄暗くなる。そして、だいぶ暗くなつた五時頃、万里子は帰宅したのだった。

買い物は、グループ系列のデパートだと……なんと、店長以下幹部が最敬礼で出迎えてくれる。万里子にすればどうも居心地が悪くついつい、結婚前に通い慣れた大学近くのショッピングモールに足が向いてしまった。

ところが、今度は大学の友人とバツタリ顔を合わすことになり……。結局、久しぶりに何気ない話で盛り上がり、楽しい時間を過ごして来たのだった。

「ただいま帰りました！」

さすがに最近電車に乗ることが少なくなった。

今日は、行きは藤原家の車で、帰りはタクシーを使う。理由は――

つ、携帯電話を忘れたせいだ。万里子は運転手に連絡が取れなかったのである。

だが、そのことが万里子に対する疑惑を深める結果になってしまった。

そして当の万里子は　ハネムーン用に普段の五割増しはセクシ―な下着を購入して、ご機嫌であった。卓巳の驚く顔が今から目に浮かぶ。万里子はいつも以上の笑顔で帰宅したのである。

「お帰りなさいませ、奥様」

邸内は徒ならぬ雰囲気だ。出迎える浮島の顔にも、どことなく緊張が走る。

他の使用人たちが投げつける視線もそうだ。「お帰りなさいませ」と声を揃えるが、その裏に見え隠れする、誹謗や嘲笑、嫉妬、怒り、侮蔑そして同情。あらゆる視線に晒され、万里子は息を呑んだ。

ほんの数時間前、この邸を後にした時はいつも通りだったのに…。

(一体、何があったの？　わたしが何をしたというの？)

「あの、浮島さん。何かあったのかしら？」

「はい。旦那様が、奥様が戻られましたら、何はさておき、お部屋に戻られるように、とのご命令でございます」

「え？　卓巳さんがもうお帰りなの？」

これまで、卓巳が定時で終えて戻ったことなど一度もない。

「卓巳さんに何かあったのかしら？　お体の調子が悪いとか……」
「いえ、そういう事ではなく。とにかく、早くお部屋に」

浮島は、急いで万里子を卓巳の待つ自室に連れて行くこととする。だが、それを遮る人間が現れた。

「万里子さん。お帰りをお待ちしておりましたわ」

「尚子叔母さま、あの一体何があったんでしょうか？」

万里子は当然尚子にも事情を聞こうとする。だが、なぜか浮島がそれを止めた。

「奥様、まずは旦那様とお話を。お急ぎください」

「浮島っ！ あたくしが話をしているのよ。お前は引っ込んでなさい！」

浮島の声にヒステリックな尚子の声が重なる。

予想外の出来事に、万里子は足元から這い上がる冷たいものを感じていた。

第六章 試練 (7) 罫

「こ、こんな……違います！ わたしではありません！ わたしはこんな……」

十分後、万里子らは食堂の一角にいた。

大広間のコーナーには、ソファセットが幾つも置かれている。夜会などで来客が休憩用に使うためだ。滅多に使われることのない椅子に、今は邸の女主人である皐月が座っていた。

尚子はどうあってもその場で話をすると行って聞かず……。

困った執事の浮島は、雪音らに命じて、それぞれ皐月と卓巳を呼びに行かせた。結局、皐月の一声で全員が食堂に集められたのである。

万里子は、例の下劣な写真付きの怪文書を尚子から突きつけられる。それを手にすると、卓巳に向かって真っ先に否定した。

「判ってる。それは判ってる……だが」

卓巳は辛そうに横を向く。怒り心頭に発して、怒鳴り散らすならともかく……卓巳の様子がおかしい。万里子には何があったのか検討もつかず、繰り返し否定することしか出来ない。

だが、そんな万里子の疑問に、尚子は信じられない答えをくれた。

「あら、太一郎は認めましたよ。あなたと関係してしまった、と。

卓巳さんに申し訳ないと言って、あの子は家を出るつもりです。大学をやめて働く、と。太一郎はあなたのことを本気で愛しているのに……。そんな気持ちを踏み躪り、否定されるなんて！ あの子が哀れだわ」

そう叫ぶと、尚子は大袈裟にソファに倒れ込む。ハンカチで目元を拭うが、涙が見えないのはいつものことだ。

万里子にすれば、それこそ開いた口が塞がらない。
尚子らには、散々甚振いたぶられて来た卓巳なのだ。それが今日に限って叔母の言葉を信じるだなんて……訳が判らない。

「ま、待つて……待つてください。そんなこと何かの間違いです。
太一郎さんが……そんな嘘をつかれるはずがありません」

太一郎は確かに万里子に謝った。卓巳にもそのことは話してある。部屋まで行った事は話してないので、それには少し怒るかも知れない。でも、二人きりになったのはほんの三十分程度だ。

そこまで考え、万里子は手元のFAX用紙を見つめた。

目を背けたくなるようなシヨツトの中に、万里子の写真もあつた。太一郎にベッドに押し倒された時と、そこから起き上がり窓際に立った時の二枚だ。

卓巳は、この写真を見て怒っているのだろうか？ 万里子はそんな風に考え、口を開く。

「確かに……太一郎さんの部屋には行きました。シェフにお昼を作つて頂いて、お持ちしただけです。その時の写真が二枚交じつてますが、他は絶対にわたしではないんです！」

だがその直後、尚子は恐ろしい台詞を口にしたのである。

「嘘ではない証拠に、あたくし、太一郎から聞きましたのよ。あなた……高校時代にレイプされたことがあるんですって？」

万里子の中で時間が止まった。

心臓も鼓動を停止したかのようだ。万里子は衝撃で口も聞けない。

「過去の罪を死んで詫びたいという太一郎に、心からの謝罪があれ

ば許すと仰ったそうじゃないの。あの子は、その言葉に絆ほどされたと言ってしまったわ。そういう目に遭われたのはお気の毒だけれど、それを隠して嫁ぐなんて……まるで詐欺のようなものね」

太一郎は言った『いいのか？ 俺がもし、言いふらしたら』

(本当に話したの……信じたわたしが愚かだったの？)

万里子は基本的に人を信じて生きてきた。

悲しみや憎しみのほとんどが、相手を“許せない、信じられない”そんな思いから生まれるからだ。拒絶され、決して受け入れて貰えず、諦めたこともあった。それでも……いや、だからこそ、謝ってくれた太一郎の心を信じたいと思ったのだ。

尚子の言葉が事実であるなら、信じた相手にここまで手酷い裏切りに遭ったのは、初めてのことである。だが、万里子が自ら過去を告白したのは、太一郎しかいない。

万里子は動揺するあまり……。

「も、申し訳ありません、でも、騙すつもりは」

「万里子！ 余計な事をいうなっ！」

万里子の声に、切羽詰った卓巳の声が重なる。

ハッとして万里子が卓巳を見上げた時、遣り切れない表情に明らかな怒りが加わっていた。

このチャンスに尚子が逃すはずがない。ここぞとばかりに彼女は声を張り上げた。

「まあっ！ じゃあやっぱり事実ですね。臯月さまは、あたくしの言葉を信じて下さらなかつたですけど。こうして万里子さんご自身がお認めになったんですもの！」

皐月は万里子から視線を逸らし、何も言わない。

尚子は更に、

「卓巳さんにもお訊ねしましたのよ。以前、あんな風に仰ってたんですもの。先ほども庇ってらしたけど……どうやら、お気づきでなかったみたいね。卓巳さんは騙されていたのかしら？ それとも……」

万里子が戻る少し前、邸内はこの尚子の爆弾発言で話題が持ちきりだったのだ。

結婚前に卓巳の言った言葉『万里子は何も知らなかった』それを引き合いに出され、尚子は再度卓巳に詰め寄った。だが、卓巳は頑として撤回せず、そんな事実はない、と言い張った。

万里子はようやく、自分がとんでもない失敗をしたことに気づく。卓巳が先に話し合おうとしたのはこの件だったのだ。更なる失言を恐れて、万里子は一言も口に出来ない。

「ねえ万里子さん、随分遅いお帰りでしたわね。ひよつとして、太郎さんと会っておられたのかしら？ あら、髪が濡れてるんじゃないか？」

「違いますっ！ そんなこと」

濡れ衣もいいところである。万里子は卓巳を見るが、彼が見ていたのは祖母・皐月であった。

「祖母上、これは私たち夫婦の問題です。二人で話し合いたいのですが……」

「わたくしは絶対に許さないわ！ 太郎がどれだけ望んでも、あなたのような女は絶対に認めませんから！」

卓巳の言葉をかき消すように、尚子は叫んだ。

そんな姉の言葉に、和子もぼつりと呟く。

「そんな経験があられたのね……お可哀想に。でも、事実を隠して普通にお嫁に来られるのはどんなものかしら？ そのことが明らかになれば、卓巳さんの面目を潰すことになるとは思いませんでしたの？」

そして尚子は、より辛辣な、卓巳と万里子を傷つける言葉を選んで攻撃の手を弛めない。

「ああ、汚らわしい！ 卓巳さんも父親と同じですわね。ふしだらな女の罠に掛かってしまわれて。

万里子さん どうせお金に目が眩んだんでしょうけど。あなたのお父様も、こんな疵物きずものの娘を堂々と嫁に出すだなんて！ 親子揃ってなんて恥知らずなの！」

「いいえっ、父は……」

万里子は父の名誉だけでも守ろうと口を開く。だが、一斉に向けられた侮蔑の眼差しに、彼女は怯んでしまった。

大勢の目が万里子を見ている。一瞬で全身が硬直した。襪はく褌布ふのようになった体を、衆人環視に晒されている錯覚に陥る。息を吸うのが苦しい、膝が震え、立っているのも辛くなる。

(助けて……卓巳さん。お願い……助けて)

その言葉にしたいのに、声にもならないのだ。

卓巳は自分を守ってくれる。何があっても傍にいてくれる。万里子は卓巳の愛を信じ、勇気を出して卓巳の腕に縋ろうとした。

だが……。

第六章 試練 (8) 迷走

こんなものは万里子ではない。

卓巳はすぐに判った。だがその中で、明らかに万里子だと判るシヨットが二枚。その一つはベッドの上で太一郎に組み伏せられている。何か事情があるはずだ。それさえ聞けば、すぐに胸の痞えつかはなくなる。

そう思い、何度も万里子に連絡を取るが……。

万里子と話せぬまま、卓巳は急ぎ自宅に戻った。尚子に捕まったのはその時である。卓巳は尚子から最悪の言葉を聞かされ、それでも懸命に否定したのだ。

そして、卓巳が万里子を探しに行こうとした時、

「あらあら、逃げ出して何のご相談かしら？」

そんな尚子の揶揄に卓巳は動けず、宗に万里子を探しに行かせたのだった。

万里子の様子から、宗ともすれ違ったらしい。

だが、今となってはそんなことはどうでもよい。

……万里子は認めた。

不意をつかれたとはいえ、太一郎が知るはずがない、とは言わなかった。同じ失言であっても、意味は大きく違ってくる。

(なぜだ？ なぜ万里子は僕にも話していない四年前の事件を、太一郎に話したんだ！?)

むかつくような嫉妬が込み上げてきて、卓巳の胸を焦がした。この時の卓巳には、万里子を詰なる尚子の声など耳を素通りしている。

卓巳が眩暈を覚えたその瞬間、冷たい指が彼の手に触れた。卓巳

は条件反射のように、その手を振り払い　そして、呆然と見上げる万里子を、卓巳は一度も見ようとはしなかったのである。

くくくくくくくく

「太一郎に話したんだな！　なぜ話した！？　僕には話そうともしなかったくせに！」

部屋に戻るなり、卓巳は万里子に詰め寄った。

卓巳の心を占めるのはそのことだけだ。男としての自信のなさが嫉妬を生み、怒りを増幅させる。徹底的に万里子を責め立て、追い詰めるのがこれまでだった。

「卓巳さんをご存知じゃないですか。わたしが話さなくても、何でも調べてご存知のはずだわ」

万里子の声に含まれていたのは“怒り”だ。

この日の万里子は、一方的に追い立てられるだけの野兎（おひう）ではない。

「なんだその言い方は！　謝罪はないのか！？　僕を裏切って悪かったとは思わないのか？」

言い返された悔しさからか、卓巳の“怒り”も増すばかりである。そしてそれは、万里子にとっても同じであった。

「わたしは裏切ってなんかいません。裏切ったのは卓巳さんだわ！」
「僕がいつ、君を裏切った！」

「たった今です！　必ず守る、助けるって仰ったのに……尚子叔母

様に、あんなに酷いことを言われていたのに、卓巳さんは一言も庇つては下さらなかった」

万里子が怒りに任せて怒鳴り返すなど、滅多にあることではない。卓巳は驚き、躊躇して、つい迂闊な言葉を口にしてしまう。

「仕方がないだろう。君が認めるからだ。白を切り通せばいいものを」

「嘘を……つかなきやならなかったんですか？ 事実なら、わたしは疵物で穢れた女なんですか？」

「僕はそんなこと思っていない。でも他の連中は違う。第一、君のせいで僕の嘘もバレたんだ。世の中には、嘘をつかなきやならないときもあるんだ。君が、僕や君の父上に恥を掻かせたんだ！」

「……恥……ですか」

卓巳はこのとき、万里子の顔色が変わるのに気付かなかった。それは何度も繰り返す、卓巳の同じ失態である。

泣いても得られなかった愛情は、彼に愛の儚さを教えた。乳飲み子であった卓巳の魂に、刷り込まれて最早消せないのだ。男として愛を得た経験も乏しく、そんな卓巳に嫉妬心をコントロールする術など持ち合わせていない。

しかもこの日の万里子はいつもととは違った。反抗的なその態度に、卓巳は万里子の愛を見失う。

その瞬間、彼は一気に炎上した。せつかく築き上げた愛の城を、自らの嫉妬の炎で焼き尽くすほどに。それは留まる所を知らず、火に油を注ぎ込む。

「ああ、そうだ。妻が過去にレイプされてたなんて、男にとっては恥もい所だ。挙げ句に、太一郎の部屋に一人で行っただと？ 馬鹿にもほどがある！ この間の一件も、ただの痴話喧嘩じゃないか

と言われたんだぞ！ 君に……隙があつたと証明するようなものだ。第一、奴に話したら筒抜けになるのは最初から判つてただろう！」

ほんの一瞬、室内は静寂を取り戻した。

物音一つない。万里子の呼吸音すら聞こえない。卓巳はふと万里子を見つめた。それはこの部屋に戻って初めてのことだった。

そして、冷やかな万里子の視線に突き当たり、背筋が震えたのだ。

「取り返しのつかないことになる前に、助けたかったのよ……太一郎さんを」

万里子は硬い声でポツリと呟く。

「太一郎の為だと？ その為に、君自身を取り返しのつかなくなるような、愚かな真似をしたのか？」

「……」

それには、万里子は何も答えない。

終焉の予感が卓巳を背後から襲う。彼は抗うために激情を掻き立て、万里子にぶつけた。

「奴のキスはどうだった？」

「！」

「さぞ、俺より上手かったんだろうな。で……太一郎とは何回寝たんだ？」

「馬鹿なことを言わないで下さい。わたしは毎晩あなたと一緒にです！」

怒るのは相手を信頼しているから いつか宗が卓巳に言った言葉だ。

万里子が怒っている。卓巳は一步引いて、万里子の怒りが治まっ

てから、太一郎に話した理由を聞けばよかつたのだ。
それが……。

卓巳は万里子の両腕を掴み、食って掛かるように罵声を浴びせた。

「昼はどうだ？ 使用人の目を盗めば簡単なことだ！ 奴なら最後までしてくれる。本物のセックスを、だ！ 俺には話せないことも奴になら話せた。それは……俺の前では決して脱がない最後の一枚を、奴の前で脱いだからだろう！？」

卓巳の度を越した怒りに、万里子は臆して冷静さを取り戻す。

「いや……やめて、怒鳴らないで。腕を……離して」
身を振り卓巳の拘束から、万里子は必死で逃れようとした。

これまでなら、卓巳もここで我に返ってきた。

だが、幾夜も万里子を抱いて過ごし、彼自身が男の性に目覚めてしまっている。太一郎とベッドで絡む姿を想像し、そして卓巳を見上げる万里子の瞳に堪らなく欲情した。

「来いよ。お前の身体に聞いてやる！」

第六章 試練 (9) 愛が砕けた夜(前書き)

強制的な性的行為の描写があります。(性行為にまでは至りませ
ん)

苦手な方はパスしてください。

第六章 試練 (9) 愛が砕けた夜

卓巳は一気に万里子を抱き上げ、大股で部屋を横切る。

そのまま二重の扉を抜けて寝室に入ると、万里子をベッドに下ろすのだった。

「た、たくみ、さん？」

本気であるはずがない。

万里子はそう思っていた。卓巳が本気で万里子の身体を傷つけるだなんて、絶対にあり得ないのだ。卓巳は愛してくれている。例えば万里子が人を殺しても、それでも愛すると言ってくれたのだ。

だが、今日の卓巳はおかしい。

卓巳は寝室の内扉に鍵を掛けた。その足で窓際に行きカーテンを閉める。この暗さだから、どちらにせよ同じだ、と万里子は思ったが……その瞬間、室内は煌々とした灯りに照らされた。

「待つて！ 卓巳さん、これじゃ話し合いなんて出来ません！」

そんな万里子の言葉を無視し、卓巳は無言でスーツを脱いだ。タプカラーのドレスシャツを無造作に脱ぎ、あつという間に半裸になる。

「やめて下さい。わたしはとてもそんな気にはなれませんから。

失礼します」

万里子は起き上がり、ベッドから下りると足早に扉に向かう。

その時だ、卓巳は背後から万里子を抱き止めた。

「卓巳さんっ！」

その腕にいつもの優しさはなく……卓巳の指は、背後から万里子のブラウスに手を掛けた。そして、存在を無視されたボタンが弾け飛び、床に転がる。

「きゃっ！」

スカートも強引に脱がされ、卓巳は再び万里子をベッドに押し倒した。

「たくみさん……お願いだから、やめて……何か言っつて、たくみさん」

「違っただろう？ 太一郎に見せた顔を俺にも見せるよ。どんな顔で告白したんだ、レイプされたつて。亭主は役立たずで自分を癒してくれない、全部忘れさせてくれつて……そう奴に頼んだらつて。言えよ、正直に言っつてみる。俺じゃ満足できないつて言っつてみるよ！」

万里子は怯えていた。卓巳が怖い……言葉遣いまでいつもと違っつて。

ところが、恐怖に口を閉ざした万里子を、言い訳の出来ない後ろめたさだと卓巳は誤解したのである。誤解は卓巳の目を眩ませ、決してしてはならないことをやらせた。

卓巳は万里子から、身を隠す全ての布地を奪い取つてしまったのだ。

「お前は俺の妻だ。夫が妻の身体に触れて何処が悪いんだ！」

万里子の裸体は、眩しい照明の下に晒された。

肌に刺さる光は屈辱以外の何物でもない。それなのに。卓巳は万里子の許しも得ず、彼女が隠し続けた場所に触れたのだ。ようやく塞がりかけた傷口を抉られる悲しみに、万里子は小さく悲鳴を上げた。

「俺との馬鹿げたセックスまで、奴に話したのかつ？ 無様な俺の

姿を太一郎に抱かれて笑ってたのか……さあ、言ってみろっ！」

卓巳にとって初めて触れる場所である。

経験がないどころか知識もない。出来る限りセックスを思わせる情報を人生から排除してきたせいだ。万里子と抱き合うようになっても、余計な期待は抱かぬように、と核心部分は避けていた。

そんな卓巳である。加減など判ろうはずがない。指を押し込まれた瞬間、万里子は激痛が走った。

瞬く間に、万里子は四年前の悪夢に引き戻される。唇を噛み締め、痛みに耐えた、生涯忘れえぬ夜。その苦しみは、いつか必ず卓巳が忘れさせてくれると信じていた。

この時、卓巳が男としての自信を取り戻しかけていたように、万里子にも女としての自信が芽生え始めていた。卓巳から、綺麗だ、女神のようだと言われ、彼女の内に眠る“女”が美しく花開く寸前だったのだ。

その綻びかけた花びらを、卓巳自身が無残にも散らしてしまう。それは例え夫婦の間でも、指一本であったとしても……レイプといえる行為であった。

万里子が堪え切れずに口から零した言葉は、

「やめて……言うから……言います。太一郎さんに抱かれました……だから、もうやめて……」

声帯を引き絞るような、苦痛に満ちた万里子の声だ。寝室の空気が凍りつき、全ての音が途切れた。徒らに時間だけが過ぎる。

卓巳は万里子から離れ、ベッドからも滑り落ちた。そのまま、力が抜けたように床に座り込んでいる。

「僕を……捨てるのか？」

「……あなたが望むなら」

万里子は疲れきっていた。心も身体も。何もかも投げ出したくなるほどに。

「太一郎は知ってるのか？ 子供の産めない身体で、普通に結婚なんか出来な」

卓巳はハツとして言葉を飲み込む。

だが、もう遅い。

「やっぱり、そのことまで知ってらしたのね」

万里子の声は明らかに卓巳を責めていた。

「だからクリスマスに、あんな風に言ってお下さったのね。だから……わたしなのでしょう？ それなのに、愛してるなんて嘘まで吐いて」

「嘘じゃない。嘘なんか」

「いいえ、嘘よ！ だから……そんな女だから……女を抱けない自分でも構わないと思っただわ！ わたしが断るはずがないって」

「違う……そんなんじゃない。僕は」

万里子は怒りに体が震え、頭で考えた言葉ではなく、傷ついた心が刃を抜いた。

「馬鹿にしないで！ どうせわたしは、普通に結婚も出来ない、惨めな欠陥品です。でもだからって、どうしてあなたにベッドの上でおもちやにされなきゃならないの？ 馬鹿みたい。妻だなんて言わ

れて喜んで、愛されてるなんて思ってたなんて！」

「酷いのはそつちだろう。勃起もしないコイツを、お前の体に擦り付けて……悦んでる僕を見て面白かったか？ さぞ滑稽だったろうな」

「そう、ですね。わたしが欠陥品ならあなただって……なのに、どうしてわたしばかり責めるの？ こんな風に押し倒したって、どうせ本当には出来ないくせに！」

万里子の口から溢れ出る言葉に、卓巳は完膚なきまでに叩きのめされた。

卓巳はふらふらと立ち上がり、再びスーツを着る。それはとりあえず“服を着ている”という状態だ。

「出てくる……今夜は戻らない」

万里子は卓巳を見ようとせず、何も答えない。卓巳も、返事を求めてはいなかった。

お互いがお互いの言葉で傷ついていたのだ。愛は二人の距離を縮め、近づき過ぎてぶつかり 再び砕け散ったのである。

第六章 試練 (10) 離れた手

浴室の鏡は白く曇っている。それは見事に万里子の心を映していた。

熱いシャワーが万里子の体を伝い、浴室のタイルの上に滑り落ちる。タイルに熱を奪われ、少し温めになったお湯は排水溝に向かって川を作り……その中には、万里子の涙も混ざっていた。

四年前と同じように、万里子は自分の身体から全てを洗い流したかった。

今夜、卓巳に触れられた場所だけでなく。何度となく重ね合った唇も、熱い指先で触れられた肌のあちこちも。愛し合った幾夜の思い出まで、何もかも消し去りたかった。

“愛”ではなかった。

愛は初めから何処にもなかったのだ。

卓巳には妻が必要だった。それも、彼のプライドを傷つけず、言いなりになる女が欲しかったのだらう。ひよっとしたら、最初から全てを知っていたのかもしれない。

だから万里子を選んだ。

卓巳が好きなようにベッドの上で弄もてあそび……それでいて、セックスをしなくて済む相手。

“普通の結婚”が出来ない万里子なら、ほんの少し優しさを見せるだけで卓巳に夢中になると知っていたのだ。案の定、万里子はすぐに卓巳を愛した。

それは万里子にとって、堪らなく惨めな現実だった。

ありったけの石鹸で体を洗おう……そう思うのに、指先が動かない。

卓巳の声が耳元で聞こえる。『愛してる、一生君だけだ、死ぬほ

ど好きだ』すべて幻想だったのに。
それなのに、万里子は卓巳の唇が残した跡を洗い流すことが出来ず
にいた。

どれくらい、流れ落ちるお湯に打たれていたのだろう。万里子はシャ
ワワーのコックを捻りお湯を止めた。その瞬間、浴室は静まり返る。
やがて白い煙のような湯気も消え、シンとした気配に万里子の体は震
えた。

カタン。

寝室のほうから音が聞こえた気がしたのだ。

(卓巳さんが帰ってきたの?)

万里子は濡れたままでバスローブを引っ掛け、洗面所を出て寝室
に駆け込む。

「卓巳さん！」

「……万里子様……」

そこに立っていたのは雪音であった。

「ゆきね、さん」

「あの……卓巳様はご自分でお車を出されました。行き先は、ちよ
つと。でも、今夜はお戻りにならないと仰られて」

雪音の顔を見るなり、万里子は涙がポロポロこぼれた。

卓巳はもう戻らない。二人の夫婦ごっこは終わりなのだ。いや…
…始まってすらいなかった。彼の中では。

「卓巳様は酷いわ。こんな、こんなこと。ご夫婦の間でも許されることじゃありません」

雪音の瞳も潤んでいる。彼女の手には引き裂かれたブラウスやスカート、そして 下着があつた。

「ああ、ごめんなさい。そんなのじゃないから……本当に、もう大丈夫。心配を掛けてごめんなさい」

「過去のことは万里子様のせいじゃありません。それに、あの写真が合成なのは誰にでも判ることです。謝る必要なんてないわ！ 堂々として下さい。でなきゃ、アレをばら撒いた女が喜ぶだけですよ！」

「ありがとう。本当にありがとう。少し気が緩んで……涙がこぼれただけなのよ。わたしは大丈夫だから、心配しないで」

万里子は慌てて涙を拭くと、静かに微笑む。

雪音が犯人を限定するかのように、口にした言葉など、今の万里子には気づくこともなかった。

部屋は何もなかったかのように片付けられていた。

パジャマに着替えた万里子はベッドから毛布を一枚抜き取る。そのまま、ラウンジチェアの上で毛布に包まり丸まった。黒い革製の大きめの椅子は、卓巳のお気に入りなのだ。椅子は万里子を受け止め、小さく軋んだ。

卓巳と一緒になければあのベッドは広すぎる。

そして、万里子が考えていたのは、最初に交わした契約書のことだった。あれ以上、卓巳に責められるのが怖くて、万里子は言ってしまったのだ、「太一郎さんに抱かれた」と。契約書が有効なら、万里子はこの家を追われるだろう。不貞を犯した妻として。

(きつと、わたしが要らなくなったのね。彼に……恥を搔かせたから)

この時、万里子の胸中を占めていたのは、卓巳に手を払われた事実であった。

卓巳が万里子を拒絶した。彼女はそう思っている。

過去は話さなくていいと、卓巳が言ったのだ。彼女はそれを額面通りに受け取った。まさか、『知っていること』と『万里子から聞かされること』に大きな違いがあるなんて。

それに、万里子は自分が卓巳を傷つけたということにも、気づいてはいなかった。

万里子を傷つけることが出来るのは卓巳だけ……そして、卓巳の心に致命傷を負わせられるのも、万里子だけなのである。

卓巳の甘く優しい愛の囁きは、万里子に自信と余裕を与え……そして我俣にした。万里子は愛されている幸福に浸り、生まれて初めて“甘えた”のである。周囲の顔色を伺い、氣遣ってばかりいた彼女にとって、それは信じられない出来事だ。

そして、万里子はまだ卓巳の愛に甘えている。

愛はなかったと泣きながら……万里子は一睡もせず、卓巳の帰りを待ち続けたのであった。

くくくくくくくく

一方、邸を飛び出した卓巳は……行く当てもなく、ただ走っていた。

「太一郎さんに抱かれました」
「どうせ本当には出来ないくせに」

万里子の声が頭の中を回り続ける。

万里子の全てが自分のものだと思っていた。彼女は特別で、他のどんな女とも違う。愛していると言って欲しかった。以前のように泣いて縋って欲しかったのだ。一言謝ってくれたなら、決してあんな真似はしなかった。

卓巳は、万里子の心の変化に気づいてなかったのである。

本来なら、万里子をリードするのは卓巳の役目だ。

傷ついた彼女に愛を教え、真綿で包み込むように癒してやらなければならぬ。ところが、ベッドの行為一つとっても、卓巳には未知の世界である。とてもリードどころではない。にも拘らず、卓巳には巨大複合企業コングレガトのトップとして、年齢相応のプライドも持っていた。

キスすらスマートにこなせない自分が齒痒く、どうしようもない苛立ちを覚える。その自尊心を支えていたのが、妻の全てを知るのは自分だけだ、という一点。

万里子が初めて四年前の事件を告白したのは、自分ではなかった。それは、卓巳にとって存在価値を揺るがすほどの事件だ。あまりのショックで、万里子に対する尚子の暴言など耳に入るはずがない。手を振り払ったのは、太一郎に話したことに対する怒りの意思表示に過ぎなかった。

だが……。

（万里子もやはり不満だったんだ。太一郎に抱かれて、僕のことを……）

卓巳は愛車ニューBMW760Liのアクセルを踏み込む。V型12気筒のエンジンは主人の憤りに応え、首都高速をアウトバーンさながらに変える走りを見せたのだった。

第六章 試練 (11) “さよなら”

「社長。こんな時間、こんな場所に呼び出されるとは思いもありませんでした」

「悪かった。反省してる。君の弁護士資格で出してもらえないか……頼む」

深夜三時に宗が呼び出されたのは、神奈川県警高速道路交通警察隊。

そして卓巳が現在居るのは、管轄警察署の留置場であった。

首都高速はやはりアウトバーンではなく。その証拠に、あつという間に卓巳の運転するBMWは警察に止められたのである。何と時速七十キロオーバー、免許停止確実だ。

しかもそれだけではない。卓巳は通常リムジンで移動するため、免許証を持ち歩く習慣がなかった。それでも、普通の精神状態であれば携行している。だがこの日に限って、彼の上着のポケットに免許証はなかった。

だが、それだけで留置場にまで入れられることはないはずである。取り締まりにあつた管轄警察署まで、卓巳が連行されたのは……なんと警官と口論をしでかしたからなのだ。そして、警官の手を振り払った時点で、公務執行妨害が追加された。卓巳にとっては皮肉な巡り合わせであろう。彼は人生初の留置場一泊が決定したのだ。

「手を払ったぐらいが何だと言うんだ！ 怒ってる時はそれくらいするだろう!？」

卓巳は己の馬鹿さ加減に嫌気が差し、不貞腐ふてくすれて床にごろ寝を決

め込んだ。警察に言った文句は、実は万里子に言いたい一言だった。

だが、留置場の冷え冷えとした寒さに、次第に気持ちも鎮まってくる。そうになると、今度は自分のやったことの愚かさが思い出される。

怒りに任せて万里子の服を裂き、嫌がる彼女を裸にしたのだ。それも、わざとライトを点け、煌々とした灯りの下に晒した。そして彼女の脚の間に指を押し込み……。そこまで思い出した時、卓巳の体はカタカタと震えだした。

(私は……万里子に何をした?)

全裸の彼女を押さえつけ、太一郎に抱かれたと言え、と迫った。

万里子の瞳に浮かんでいたのは『恐怖』だ。あれは明らかかな脅迫であろう。暴力で自白を強要したようなものだ。

とにかく、一刻も早く戻ろう。邸に戻り、万里子に謝る。本当に疑っているわけではないことを告げて、彼女の言い分を聞くのだ。事件が明らかになった以上、周囲の万里子を見る目は変わるだろう。特に、男とはそういうものだ。彼女にどんな危害が及ぶか知れない。卓巳が傍にいて万里子を守らねば……。

そこまで考えた時、卓巳は嘗て口にした誓いの言葉を思い出した。

『もし今度、僕が嫉妬に狂って馬鹿な事を言ったら、君は問答無用でこの家を出てくれて構わない。泣いて謝っても許さなくていい』

万里子と幼馴染・香田俊介との仲を疑った時、彼女に詫びて言った台詞だ。

卓巳の震える体に、今度は脂汗がじつとりと染み出してくる。誓いの言葉は毒蛇に姿を変え、卓巳の背筋を這い上がり首に巻き付いた。真綿まわたで首を締めるとはまさにこんな気分であろう。

(ど、どうする。どうすればいいんだ)

二度としないと誓った約束を破ってしまった。万里子は家を出るかもしれない。

それに、子供のことである。あんな形で告げる気はなかったのだ。万里子の心を少しでも楽にしてやりたくて、卓巳は嘘をついた。知らないことにするという、忍との約束まで破ってしまった。

万里子は酷い誤解をしていた。だから妻に選んだのだ、と。

卓巳は床に座り込んだまま、壁に固定されたベンチを拳で数回叩く。

(あの時、私は何を言った？ 普通の結婚は出来ない、万里子にそう言ったのか!?)

卓巳自身がそうだから、万里子に相応しいのは自分だと情けない論法をはじき出してしまったのだ。愚かにも程がある。卓巳は頭を抱え込み、額をベンチに押し付けた。鉄製のそれは硬く、氷のように冷たい。表面は錆びてザラザラしていた。

太一郎などどうでもいい、卓巳が一番だと言って欲しかっただけだ。男として役に立たない、無様なことは百も承知している。それでも万里子に選んで欲しかった。

留置場の窓から月明かりが射し込んだ。

愛しさが募り、彼女を初めて抱き締めた、ホテルで過ごした一夜のように……。

祖母の反対を知りながら、それでも妻にと望んだ、あの夜のように……。

卓巳は大声で警官を呼び、謝罪と反省を申し入れた。そして、弁

護士として宗を呼んだのである。

「頼む。私が愚かだった。免停でも取り消しても構わない。処分は甘んじて受ける。早くここから出して欲しい」

はじめに卓巳の姿を見たとき、宗は啞然とした。シャツのボタンはちぐはぐで、裾はズボンからはみ出ている。それに、ノーネクタイの卓巳を見るのは極めて珍しい。

「まあ、酒気帯びでなくて幸いです。事故も起こしてませんから、取り消しにもならないでしょう。でも、罰金刑は覚悟して下さいよ」「一千万でも二千万でも払う」

「警察はポツタクリバーじゃありませんよ。公務執行妨害の件は、反省文を出せば許して貰えるそうです」

「判った。反省ならいくらでもする。さっきの警官に直接詫びてもいい。早く出してくれ！」

留置場程度で怖気づく卓巳ではない。だが、一分一秒でも早く戻り、土下座をしても万里子に詫びなければ、取り返しのないこととなる。

だが、事務手続きで朝まで待たされ……卓巳が宗の車で警察署を出たのは八時を回っていたのだった。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊

浮島の「お帰りなさいませ」と言う言葉を無視し、卓巳は二階に駆け上がり自室に飛び込んだ。

「万里子！ 万里子！ 何処にいる！？ 済まない、悪かった、今度こそちゃんと話したい。万里子！」

入ってすぐのリビングに万里子の姿はなく、奥の寝室に人の気配を感じた。

「万里子。悪かった。本当に……」

だが、ベッドの向こうにあるウォークインクローゼットから姿を見せたのは、万里子ではなかった。

「お帰りなさいませ。旦那様」

雪音は冷ややかな声で言う。

「あ、ああ、ただいま。万里子はどこかな？」

「……」

恐ろしいほどの沈黙が寝室を席卷した。卓巳は唾を飲み込む。喉の奥がゴクリと鳴った。

数秒後、

「存じません。失礼致します。……ああ、奥様は夕べ、ラウンジチ

エアで休まれたようです」

その雪音の返答には何か含みがあるようだ。卓巳の鼓動は嫌な予感に次第に速くなる。

卓巳が横にいないとベッドでは寝ない、万里子はそんなことを言っていた。

卓巳は、恐る恐るラウンジチェアに近づいた。オットマンの上に白い紙が見える。紙を取り上げた瞬間、彼の足元には銀白色に光る小さなものが転がった。

慌てて拾い上げる。それは……二人で選んだ結婚指輪であった。

二つ折りにされた白い紙に書かれていたのは、

「卓巳さま

あなたの望む妻になれなかったことを、お許しください。
信じていただけなくとも、愛していました。
ありがとうございます。さようなら。

万里子」

第六章 試練 (12) 月に願いを

夜明け前、卓巳が留置場で苛々と釈放を待っていた頃、万里子は部屋を後にした。

幸か不幸か、新婚旅行用の大きなスーツケースに着替え一式が用意してある。だが、それには手を付けず。万里子は必要な分だけ抜き取って、小さなポストンバッグに詰め替えた。

部屋を出る寸前、結婚指輪を外して置き手紙の上に置く。

万里子はずっと、卓巳が戻って来て、抱き締めてくれるのを待っていた。

本当は愛している、そう言ってくれさえすれば……。卓巳になら何をされても構わない。愛が動機であるなら、全てを受け入れることが出来たのだ。

だが……。

あのドアを開けて、卓巳は飛び込んで来る。「万里子、済まなかった。許して欲しい。愛してるんだ」そう言つと万里子を抱き上げ、ベッドに連れて行ってくれる。

何度も、何度も、そんな幻が浮かんでは消えていく。

万里子はたった一晩で、涙が枯れるほど泣いた。それは四年前より苦しく、愛を知った分だけ、心を砕かれた痛みがした。

やがて泣き疲れ、万里子の目には上弦の月を少し太らせたような宵月が映る。カーテンの隙間、ガラス越しにぼんやりと浮かんでいた。

奇しくも二人は、遠く離れた場所で同じ月の光を浴び、同じ夜を思い出していた。

間もなく夜が明ける。

この邸を立ち去る前に、と万里子は皐月の部屋を訪れた。ノックもせず、そうつと中に入る。車椅子で移動する皐月のため、床に障害となるものは何もない。暗がりの中、万里子は真つ直ぐに歩き、皐月の枕元に立ったのだ。そして、小さなケースをベッドサイドの机の上に置く。中にはエメラルドの婚約指輪が入っていた。

「万里子……さん？」

元々眠りが浅いせいもあるだろう。微かな物音に目を開けた皐月は、そこに万里子の姿を見た。

「……おばあ様。起こしてしまって申し訳ありません」

「どうしたのです？ それは」

万里子の置いた指輪の箱を見つけ、皐月は声を上げる。

「これはお返し致します。どうか卓巳さんの妻に相応しい方にお渡しください」

「何を言うのです！」

「卓巳さんは、お戻りになられませんでした。お許し……ただけなかったようです。卓巳さんは何もご存知ありませんでした。全てわたしの罪です。卓巳さんを傷つけ恥を掻かせてしまい、本当に申し訳ありませんでした。お許し下さい」

万里子は一言も言い訳せず、皐月に深々と頭を下げた。

皐月はそんな万里子をジッと見つめ、ゆっくりと身を起こす。万里子は皐月に慌てて手を差し伸べ、肩にショールを羽織らせたのだ。つた。

「そつ……事件のことは本当のことなのね。辛かったでしょうね。可哀想に」

それは穏やかで慈愛に満ちた声であった。皐月の手は万里子の髪に触れ、そつと撫でる。

万里子はその瞬間、皐月に縋って泣いていた。瞳からは堰を切ったように涙が溢れ出てくる。嗚咽だけで言葉にはならない。

「ごめんなさいね。尚子さんたちを止めようかとも思ったのだけど、卓巳さんがいらしたから」

「いえ……いえ」

万里子はこれまで、忍の前では思い切り泣くことが出来なかった。なぜなら、忍は全てが自分の責任だと思っている。母でもあり祖母でもある忍に、あれ以上の悲しみを与えたくなかった。

そして、万里子が落ち着くの見計らい、皐月は尋ねた。

「一つ聞いていいかしら？ なぜ……あなたは太一郎さんにそのことを話したのです？」

「もうご自分は手遅れだ、と。そんな風に仰る太一郎さんに知って欲しかったんです。真実の心の声を伝えたくて、告白しました。犯した罪が消えないからといって、これ以上、重ねるべきではない、と」

皐月はそんな万里子の真意を、もう一步踏み込んで聞いてみたくなる。

「卓巳さんはね、心に深い傷を負っておられます。そのせいで随分苦しんで来られました。あの母親に委ねて、わたくしが夫に逆らえなかったから。でも、何不自由なく育った太一郎さんのことまで救う必要があるのかしら？」

皐月は、卓巳が万里子に全てを話したことは知らない。そのため、控えめな言葉を選んだ。

そして皐月の太一郎に対する思いは……息子と同じように、この家を追い出され苦勞させてやりたい。それぐらいしなければ、息子もそして卓巳も浮かばれない。皐月の言葉の端々から、苦い思いが滲み出ていた。

そんな皐月の気配を察し、万里子は静かに首を横に振る。

「太一郎さんも、卓巳さんと同じだと思います。卓巳さんは、失敗を恐れて心を凍らしてしまっただけで、太一郎さんはどうしたらいいのか判らず、暴走しているだけです。本当に悪人であれば、わたしが死のうとした時、無視されたでしょう。太一郎さんは大怪我をされてもわたしを止めて、悪かったと言って下さいました。だから、もう少し時間を上げて下さい。きっと他の方にも謝罪されます……どうか、お願いします」

太一郎のために頭を下げる万里子を、皐月は胸がざわめく思いで見つめていた。

「万里子さん……太一郎さんに話したことが筒抜けになったのです。よう？ あの子はあなたの信頼を裏切ったのですよ」

顔を上げた万里子は、涙に潤んだ瞳でニツコリと笑った。

「いいえ。わたしは、彼を傷つけないと約束しました。疑えば傷つけます。信じて欲しいから、わたしも信じます。どうか、おばあ様も信じて上げて下さい。卓巳さんを愛するように、太一郎さんも愛してあげて下さい」

皐月にとってそれは受け容れがたい言葉だった。

太一郎は憎い妾の孫なのだ。歪んだ形ではあったが、先代の高德は芸者あがりの妾を愛していた。他の女とは作らなかつた子供も、あの女には産ませた。しかも二人も。挙げ句にその娘たちを本邸にまで呼び寄せ……。

皐月の愛もプライドも踏み躪った。皐月にとって、太一郎はその

化身なのだ。愛せるはずがない。

「万里子さん、あなたが優しいのは判ります。でも、あなたは卓巳さんの妻なのです。そんなに太一郎さんのことを庇うのは、如何なものかしら？」

それは少し険の含んだ皐月の言葉だ。

皐月がそんな風に言えば、誰もが気遣い迎合する。それは半世紀以上もの間、この家で闘い抜いた皐月の知恵であり、武器であった。気づかぬうちに皐月の心を覆い隠した鋼の鎧はがねのよろい。しかし、万里子の言葉はそれをも貫いた。

「おばあ様は、卓巳さんが孤独だと仰いました。けれど、この家でおばあ様と他の皆様を繋ぐことが出来るのは、卓巳さんだけです。彼だけが、皆と血が繋がっているのに……。」

おばあ様は、卓巳さんのおじい様やお父様の愛し方を間違ったと言われました。亡くなった方とやり直すことは出来ないでしょう。でも、おばあ様は生きておられます！

わたしは卓巳さんを愛しています。愛して貰えなくても、ずっとずっと愛し続けます。どうか……どうか、お幸せになられますように……わたしは祈り続けます。叔母様や従妹弟たちと仲直りして、皆で幸せに暮らせますように。いつか……本当に愛する奥様を迎えられて、幸せな家庭を築けますように。

お約束が守れず、申し訳ありませんでした。でも、彼を愛する気持ちに嘘はありませんでした。それだけは信じてください」

そして万里子が最後に皐月に頼んだことは、事件のことを実家の父に知られぬように、と皐月の力添えを願った言葉であった。

第六章 試練 (13) 挫折

卓巳を藤原邸まで送り届け、宗は自宅マンションに戻った。

出勤は午後からで充分だろう。卓巳の様子からそう判断し、シャワーを浴び、ベッドに潜り込む。そして眠りに落ちる寸前、彼の携帯は真夜中を再現するようにけたたましく鳴った。

「社長。恐れ入りますが社長、事情を説明いただけますか？ 社長？」

卓巳がおかしい、と連絡を受け、宗はスーツに着替えて車を飛ばして来たのだ。今度はさすがに自分の運転ではなくタクシーである。

「あの、社長……何か言っていただけませんか？」

卓巳は寝室のラウンジチェアに座り込んだまま、宗の問いにポツリと答えた。

「……社長は辞める。後は……任せる」

「なっ、そんな……何を突然！？ 万里子様はどうされたんですか？ 社長！」

卓巳が口にしたのはその一言だけだった。後はまるで糸の切れたマリオネット同然である。宗の呼び掛けにも全く反応を示さない。

「雪音……さん。万里子様は？」

宗は隣に立つメイドの雪音に問い掛けた。だが、その雪音の様子も普段とどこか違う。怒りのオーラが見え、宗は無条件で謝りそうになった。

この時、宗は卓巳からFAXの件は“終わった”としか聞かされていない。

卓巳は邸を飛び出してすぐ、宗に連絡を入れたのだ。卓巳の口調

は怒りに満ちていて、とても“終った”ようには思えず。だが、余計なことはしないのが彼の長所でもある。

留置場の卓巳にも問い質すようなことはしなかった。

「奥様は荷物を持って家を出られました。旦那様が追い出されたよ
うなものです」

「何でそんな真似を!? 社長、どうしてそんなことをしたんです
か」

雪音の返答に宗は慌てふためく。血相を変えて卓巳に訊ねるが、
彼は表情も変えず座り込んだままだ。明日の渡英、そして、その三
日後には行われるレセプションパーティの行方に、眩暈を覚えた宗
であった。

卓巳を心配して皐月までもが二階に上がって来た。

「卓巳さん! こんなことをしている場合ですか? 早く万里子さ
んを追いなさい。今ならまだ間に合います。お互いに誤解してすれ
違ってるだけなのですよ。万里子さんは、あなたのことを愛してい
ると仰ってました。……聞こえないのですか、卓巳さん!」

そんな皐月の言葉にも、卓巳を首を左右に振ったまま立ち上がる
うとしない。

「何かの発作かも……?」

雪音の呟きに今度は主治医の安西医師が呼ばれた。だが、なんと
卓巳は脈すら取らそうとせず、安西をはじめ他の全員を部屋から追
い出したのだ。

安西は卓巳の様子に、

「何か強烈なショック症状のようだね。鬱^{うつ}状態らしい。誰か付いて
いる方がいいんだが」

そして、「自殺までは心配しなくてもいいと思うが……」付け足

された言葉に、周囲は些かどよめいた。

とりあえず、宗の配慮で卓巳は急病と報告され、仕事は可能な限り重役たちに振り分けられた。病欠など、社長就任以来初めてのことだ。

中には、
「明日から新婚旅行じゃないか。一日も待てないなんて、社長も若いなあ」

などと完全に誤解される始末である。だが、宗は敢えて否定はしなかった。

絶対権力の先代社長が亡くなり六年、実質卓巳が社長として手腕を揮い始めて五年程度である。

八〇年代を頂点に、日本経済界で複合企業は悉く衰退し、ほとんどが業務提携という形に変化していった。その反面、独占禁止法の改正により、嘗て解体された財閥がそれぞれの枠を越えて結集する動きも見られる。その中で、卓巳はF総合企画という基幹会社を設立。グループの統廃合に向けて陣頭で指揮を取った。

しかし、若い上に実権は祖母・臯月が握っている。少しでも気を抜けば、卓巳とて外部から攻撃され、追い落とされる危険もあるのだ。結集が弱まれば、当然企業の力は分散される。そうなれば確実に、藤原の息の掛かった人間は取締役会から排除されるだろう。

宗は卓巳が信頼する沖倉修一郎弁護士に説得を頼んだ。

だが、卓巳は沖倉を追い出すような真似はしなかったが、その反面、口を開くこともなかった。

卓巳には知力や商才だけでなく、人並み外れた強靱な肉体と精神力があると、宗は信じていた。卓巳に最もカリスマ性を感じていた

のは彼かもしれない。

無論、それは間違いではなかった。だが、その牙城となっていたのは、幼少年期に受けた心の傷を隠すための城だったのだ。

卓巳は物心ついた時から懸命に生きてきた。

心も体も弱く、すぐに誰かを頼ろうとする父を助け、母の下でも、十五歳から必死で働き家族を支えた。働きながら大学を出て、ようやく自由になりかけた時、藤原家に引き戻されてしまう。皐月の頼みを無下に断われなかったためである。思えば、誰かのためにと、しゃかりきに働き続けた人生だった。

その糸が、万里子を失った衝撃でふつつりと切れてしまう。

卓巳は、勇気を出して自らの心に刺さった氷の棘を引き抜いた。

男としての性を直視し、彼は城から出て戦いに挑んだのだ。だが、ここまでにはほとんど成果は得られず。その苦しみあまり、ぶり返した嫉妬という刃で、卓巳は愛する人を手に掛けてしまう。

椅子の上に膝を抱え座り込む。万里子の愛した誇り高き騎士は、今や、親に捨てられた幼子同然であった。

宗は最後の手段を選ぶ。

くくくくくくくく

一方、万里子は公園のベンチに座っていた。

昨日のFAXの件を心配し、父・隆太郎から携帯に連絡があった。帰ると伝えたかったが、思わず「何でもないから、心配しないで」と万里子は明るい声で言ってしまう。

だが、もし尚子らが万里子の実家に連絡すれば、四年前の事件を父に知られることになる。それで卓巳を怒らせ、離婚となれば……。

事件のことを他言しないように尚子らや使用人に厳命する。臯月はそう言ってくれたが、人の口には戸が立てられないという。万里子は気が重く、そのせいか実家に向かう足も重くなり、途中の公園から動けずにいたのであった。

（夜になったらどうしよう……しばらくはホテルに泊まるお金はあるけど、その先は）

午前中をファミリーストランで、午後を丸々公園で過ごし、体は芯から冷えていた。そして、陽が傾き始めたのを見て、ようやく重い腰を上げる。

（お父様の元に帰ろう。疑われるようなことをした、わたしが悪かったのだ、と謝ろう）

万里子はどんなに辛くても苦しくても、すぐに前を向いて立ち上がる。自分自身に打ち克とうとする強い想い、それは卓巳にはないものだった。

第六章 試練 (14) 連理の枝

今日一日で軽く三桁にいきそうなため息を吐きつつ、万里子は実家に向かう道を歩いてきた。この角を曲がれば駐車場の屋根と門が見える。

そう思ったとき、見覚えのある黒い車が視界に飛び込んできた。家の前に停まっているのは、卓巳が普段使用するメルセデスベンツのリムジンだ。

その瞬間、

(卓巳さんが迎えに来てくれたんだわ！)

万里子の気持ちは見る間に浮き立った。小走りに門から玄関までの石畳を駆け抜け、

「卓巳さん！」

勢いつけてドアを開けると、卓巳の名を呼んだ。

だが、そこに居たのは他ならぬ卓巳の秘書、宗であった。

「宗さん。どうして……」

万里子は落胆が隠せない。

それだけじゃない。すぐに、宗が何をしに来たのか不安を覚えた。彼は知っている、あの事件で万里子が中絶手術を受けた事実を。そのことは太一郎には話さなかった。伝える必要がないと思ったからだ。

そしてこの宗は、万里子が子供の産めない身体であることも知っているのだろうか。だが、まさか実家でそんなことを聞ける訳がない。

「万里子！ 一体何処に行ってたんだ。本当は何があったんだ？ お父さんに話してみなさい」

「お嬢様、ご無事でようございませう。こちらの秘書様も何も話し

ては下さいませんし、万里子お嬢様に万一のことがあったら、と。
わたくしは……」

父は只ならぬ気配を察したのかも知れない。忍はおそらく、今度のことにあの事件が関わっていると気づいているかも……。

二人に順番に捲し立てられ、万里子は閉口した。

この時、万里子の中で卓巳が如何に大きな存在か、既にこの二人以上であることに気付いたのだ。

父や忍には、心配を掛けるのが嫌で何も言えない。だから、迂闊に泣くこともしないし、出来ない。だが、卓巳は違う。彼が傍にいてくれたら、万里子はいつでも泣けるし、思ったことをそのまま口に出れるのだ。

それが、愛と人生を分かち合う夫という存在。比翼の鳥 卓巳は万里子にとって魂の半身である、と。

万里子は、父の胸に飛び込めば癒されると思っていた自分の愚かさを知る。

そこに宗が、「こちらへ……」そう言うと万里子を玄関の外に連れ出した。

「大よその事は、メイドの雪音さんより聞きました。社長の元にお戻り頂けませんか？」

万里子はすぐさま首を左右に振る。

「いいえ。わたしはもう、卓巳さんには許して頂けないわ。本気で怒らせてしまって……」

そこまで言うと、万里子は喉が詰まったように口元を押さえた。前夜から泣き過ぎたせい、目の回りは薄っすらと赤くなり腫れている。

宗はそんな万里子を見下ろし、しばし沈黙の後。

「実は……昨夜社長が首都高速を猛スピードで走られまして……その拳げ句」

「えっ？ まさか……事故……」

「私は深夜に警察に呼び出され……驚きました」

「卓巳さんは？ ご無事なのよね！？ 命に別状はないと仰って下さい！」

宗は万里子の必死の問い掛けに、苦悩の色を浮かべ答える。

「それが、今現在、大変なことになっておられます。医者が言うには、お命に関わる可能性も。どうか私と一緒に来て、社長が元に戻られるようご協力下さい」

万里子は足元が崩れるような感覚に囚われた。

(わたしのせいだわ。わたしのせいで卓巳さんが……)

「行きます。すぐに。お願い、卓巳さんの傍に連れて行って！」

「えっと、あの……少々、様子が変わっておられまして、驚かれるかも知れませんが……」

「構いません！ 生きてさえ居て下されば。わたしが一生、卓巳さんの傍に寄り添います！」

万里子は宗を急かすようにリムジンに飛び乗った。後方では何事だとはかり、父や忍が声高こゝろたかに叫んでいる。だが、今、万里子の頭にあるのは、傷つき横たわる卓巳の姿だけであつた。

くくくくくくくく

宗が舌先三寸を駆使して、まんまと万里子連れ戻そうとしてい

た頃。

藤原家の本邸は大揺れであった。

鋼鉄の心臓を持つ浮島まで、卓巳の変わりように動揺する始末だ。そのせいも、使用人全体の土気が下がってしまった。

若いメイドを統率するはずの、メイド頭の千代子もそれどころではない。卓巳の状態に、皐月が軽い心臓発作を起こしてしまったのだ。安西医師と共に、千代子もずっと皐月に付き添っていた。幸い大したことはなく、皐月の意識もすぐに戻ったのだが。

卓巳に祖母の発作を告げても、彼は余計に頭を抱え込んだだけであつた。

メイドたちは口々に、

「ええ、どうなっちゃうのお？」

「藤原グループも崩壊ね。次の仕事口見つけたほうがいいかな？」

「でもでも。びっくりしたあゝあの万里子さまが……」

「やめなさい、かな」

「でもお。新入りのコックさんとかあ、万里子さまを見る目が変わつてたよお」

「全部あの太一郎のせいよ！ 母親使つて、相変わらず姑息なヤツ」
「俺がなんだよ」

後ろから聞こえた声にびっくりしてメイドたちは振り返つた。そこに立っていたのは太一郎だ。なんと彼は最悪のタイミングで外泊し、約三十六時間ぶりに戻ってきたのだつた。

その十分後、太一郎は別棟の二階にある両親の部屋に怒鳴り込んでいた。

「俺がいつそんなことを言った!? あの女と寝たなんていつ言ったんだ!」

メイドたちに昨日のことを聞いた瞬間、太一郎は母親に対して煮え滾るたぎような怒りを覚える。だが、当の尚子は素知らぬ顔だ。それは、彼女が心の内では息子を軽んじている証拠であろう。

「あたくしは、あなたの気持ちを考えてあげたのよ。正直におっしゃい。あの女が欲しいのでしょうか?」

そんな尚子の言葉に太一郎はグツと息が詰まった。

息子の顔色を見ながら、尚子は鼻で笑う。

「あんな女のどこがいいのかしら? 卓巳さんと別れてもまともな嫁ぎ先などないでしょうね。あなたの愛人にすればいいわ。でも妻はダメ、愛人なら許してあげましょう。卓巳さんの妻だった女を、あなたが愛人にするなんて! ああ愉快なこと」

太一郎は呵呵かかとして笑う母親の姿に、空恐ろしさを感じていた。

第六章 試練 (14) 連理の枝(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

サブタイトルは長恨歌の「在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」(天にあつては願わくは比翼の鳥となり、地にあつては願わくは連理の枝とならん)からきています。

皇帝と楊貴妃のお話はあまり好きではありませんが、この詩だけは素晴らしいと思います。

今の万里子の気持ちにちょうどいいかなと思ひまして…。

宗…お前つてヤツは…orz

遅くなりましたが、アルファポリスさんの恋愛大賞にエントリーしています。

早速投票いただいた皆様、本当にありがとうございます(感謝)

精一杯、更新を続けさせていたかくことしか出来ませんが、引き続きよろしくお願い致します(平伏)

第六章 試練 (15) 贖罪

太一郎を一番理解していないのはこの母親であった。

祖父というフィルターを通さず、無条件で彼の存在を認めてくれる人間に巡り会いたかったのだ。それを母に求め、父に求め、この家に住む誰かに求めた。

親や祖父母らの経緯など知らない。期待に添うことの出来ない自分を持って余していた時、突然、比べ物にならないほど優秀な従兄がやって来たのだ。祖父の生前から暴力行為で学校から呼び出されることは間々あった。だが、その暴力が女性に向かい始めたのは、卓巳が来てからである。

愛して欲しかった。皆に認めて欲しかった。

闇雲に手を出した邸のメイドたちは、太一郎の行為を責めながらも、全員が尚子から金を受け取る。そして次からは自分で服を脱いだ。それが“愛”だと、“愛”は買うものだ、と。母は息子に愛の値段を教えた。

だが、金で買った愛情に太一郎の心が満たされることはなく……。

『あなたはズルイわ。愛して欲しいなら、自分から愛するべきよ!』

万里子の言葉は太一郎の胸を矢の如く貫いた。

欲しがるだけで与えることなど考えたこともなかったのだ。

太一郎に愛の存在を教えてくれたのは、万里子であった。

万里子の愛は腕づくでは奪えない。それに金でも買えないのだ。卓巳を愛していると、本気で死のうとした万里子の想いに愛の在り方を知る。

「ありがとう」 たった一言、それだけで太一郎は涙が止まら

なかった。

あの日、万里子と過ごした三十分間で、太一郎は生まれ変わるこ
とが出来たのである。人生の景色が百八十度入れ替わった瞬間。そ
れを写真に撮られ利用されるとは。しかも、生まれて初めて心を震
わせた女性を、こんな風に傷つけるなんて……。

太一郎は唾棄するように言う。

「とつとと死んでくれた分だけ、卓巳の親のほうがましだな」

「なんですって！ 親に向かってなんてことを」

「よく言っぜ。俺の命と安穏な生活と……天秤に掛けた拳げ句、俺
を捨てたくせによ」

その言葉にはさすがの尚子も躊躇を見せた。

だが、

「それはあなたが……あんな女に手を出すから。ええ、でも判って
いるわ。あの女があなたに擦り寄って来たのよね？ レイプかどう
かも怪しいものだわ。物欲しげに男を誘うような顔ですもの」

太一郎は、母の中に万里子に対する嫉妬を感じていた。

尚子は、若くて美しい、しかも夫に愛される万里子が悔しくて仕
方がないのだ。自分の夫・敦ですら、万里子に見惚れていることも
ある。しかも万里子は、由緒ある中堅企業の社長令嬢で母の実家は
資産もある旧家だ。尚子の『芸者の娘』『妾腹めかけぼろ』と蔑まれた過去が、
万里子に対する嫉妬心を増長させている。

太一郎は、母の汚らわしさに身震いした。それは卓巳が母に抱く
感情と似たものであった。

尚子はこの同じ口調で万里子を責めたのだらう。メイドたちが口
籠もったのを見て、母の言葉の酷さが窺える。万里子は当然、太一
郎が話した、と思ったはずだ。

(……もう、お終いだ)

太一郎には母を変えることは出来ない。せめて卓巳ほどの力があれば、変えないまでも黙らせることは出来るだろう。だが、自分にはそれすら出来ない。太一郎は逃げるように部屋を飛び出した。廊下を駆け下りる太一郎の耳に万里子の声が響く。

「……わたしは赦します」

自分を赦してくれる人はもういない。罪を償いやり直すチャンスは永遠に失われた。あとは墮ちるだけだ。そして渡り廊下まで来た時、不意に太一郎の足が止まる。万里子に会い、母の仕打ちを詫びたかった。でも「裏切り者、卑怯者」きつとそう言われるだろう。FAXの犯人は自分じゃない、万里子の言葉を母に話したりなどしてはいない。しかし、太一郎にはそれを証明する手立てがなかった。

だが……だが、そんな太一郎の背に万里子の声が聞こえるのだ。

「いま嘘をついて逃げたら、一生逃げた儘ままよ。一生独りで生きていくつもりなの？」

もう二度とこの家には戻らない。たとえ叔父の二の舞であっても、野垂れ死にが自分には似合いだ。そう思うのに、足が渡り廊下から動かないのだ。

「太一郎様、お帰りになられてよろしゅうございました。大奥様がお呼びです。お部屋までお越し下さいませ」

メイド頭の千代子が長廊下を小走りやって来て、太一郎を引き止める。

太一郎は不覚にも浮かんだ涙を見られまいと、わざと眠そうに目

を擦った。

「何だよ。婆さんの説教はご免だね」

「言い訳をなさらなくてよろしいのですか？」

「何を言っても無駄じゃねーの？ どうせ俺なら、従兄の嫁さんともやりかねないって思ってたんだろ？」

投げやりな太一郎の言葉に、千代子の声は明らかに怒っていた。

「太一郎様！ それをお聞きになりたいと、大奥様は仰っておられるのです！」

「好きに思ってたらいいぜ。卓巳にぶん殴られた腹いせに、あの女をやったとかさ。このままいたら、今度は間違はなく卓巳に殺されるだろうなあ」

薄笑いを浮かべ、わざと汚い言葉を口にする太一郎に、千代子は信じられない一言を投げつけた。

「さあ、それはどうでございましょう？ 卓巳様は万里子様を疑われ、軽率な行動をお叱りになられたそうです。そして、万里子様は出て行かれました。このままですと、万里子様は夫の従弟である太一郎様と不貞を働いた、と。話はそこに落ち着いてしましますが、よろしいですね」

（万里子が出て行った、だと！？）

それは太一郎には衝撃的な言葉だった。

太一郎は、尚子の万里子に対する所業を聞いただけで、母の元に乗りに込んだのだ。その後の騒動は何も知らない。大喧嘩の末に卓巳が家を飛び出し、その間に万里子は指輪を臯月に返して家を出てしまったこと。更には、それを知った卓巳が仕事を投げ出し、部屋に籠もっていることも。

太一郎の足は臯月の部屋に向かう。それは彼が選んだ初めての“逃げ道”以外の道であった。

第六章 試練 (16) 信じるという事

太一郎が皐月の部屋に通されたのは初めてのこともかもしれない。記憶にない程、幼い頃のことには確かではないが。

卓巳は皐月と同じ目をしている。初めて卓巳に会った時、そう思った。皐月がいつも太一郎を見る冷やかな視線。お前に生まれてきた意味も価値もない。皐月の瞳はいつも太一郎を見下していた。

「なにか、言いたいことはありませんか？」

「どうせ俺ならやるだろう、って思ってんだろ？ 別にいいよ。でもアイツは……あの女は違うだろ？ なんて追い出したりしたんだ！ 卓巳は一体、何をやってるんだ。あんたはなんで止めないんだよ！」

「口が過ぎますよ、太一郎様」

「うるせえっ」

横から千代子が太一郎に向かって注意を促す。

皐月は発作を起こしたばかりなのだ。無理は禁物である。それでも、太一郎の帰宅を知り、どうしても、と言い張ったのだ。

太一郎にとって皐月は敵であった。

「皐月さまのせい、あなたの本当のおばあさまは亡くなってしまったのよ」

母・尚子は事ある毎にそう言い聞かせた。太一郎の一番古い皐月の記憶は、彼が幼稚園の時のことだ。敬老の日に祖父母の絵を書くことになり、彼は皐月の絵を書いた。幼稚園から持ち帰った絵を皐月にも見せようとした時、皐月は怒って二つに裂いたのだ。

「わたくしの孫は一人だけ。あなたの『おばあさま』ではありません！」

ヒステリックに怒鳴られたことだけはよく覚えている。

だが、それには皐月のほうにも深い理由があった。

間の悪いことに、その直前、皐月は一人息子の死を知ったのだ。そして卓巳が施設に入れられたことも。卓巳を引き取りたいと言った皐月を、夫は無視した。そんな時、奇しくもその高德によく似た幼子に「おばあさま」と呼ばれ……。太郎を可愛いと思えるほど、皐月は人格者ではなかった。

「太一郎さん。今まで何処に行っていたのです？ 尚子さんはあなただが、この家を出て大学をやめて働こうとしている。万里子さんのことを本気で愛している、と仰っていましたか……。本当ですか？」
「んなわけないだろ。笑わせんなよ」

太一郎は皐月から目を背け答える。

それは事実であった。太一郎が丸一日以上戻らなかったのは、仕事を探していたためだ。卓巳や両親の庇護の下ではなく、自立するために。

だが、現実は厳しかった。

藤原の名前を出すだけで、どんな仕事も面接すら受けられない。

「藤原家のお坊ちゃんが何を仰います。先代社長のお孫さんを、うちなんかで雇えるはずがないでしょう。卒業後は役付きで本社入りが決まってるっしやるはずだ。研修でしたら本社を通してお預かり致しますので」

そんな風に言われ体良く追い払われる。

初めは愚かにも、太一郎は額面通りに受け取っていた。だが、忘れ物を取りに戻った時、彼らの本音を知るのだ。

「冗談じゃないよ。大学は一流私大だが、金と名前で入った馬鹿じゃないか」

藤原家の太一郎はとんでもない放蕩息子だ。女癖も悪く、暴力事件を金で揉み消している。正嫡せいちゃくの卓巳社長とは雲泥の差、所詮、妾の血統に過ぎない、と。

尚子らは、卓巳の母がキャバクラ嬢だったことを笑うが、それでも正式な夫婦の間の子供だ。尚子とは違う。傘下の社員らは、卓巳が血統書付きなら、太一郎は雑種だと揶揄して笑っていた。

それが世間の評価で事実なのだ。自らの力で一步踏み出そうとして、太一郎は現実を知る。

偽名では正規の仕事は得られない。このまま家を出たら、卓巳の父・卓哉の末路を辿るのは目に見えていた。最後の手段、卓巳に頭を下げる心積もりで戻って来たら……。この有様だったのだ。

「卓巳さんは社長を辞めると言っています。それ以外は一言も話さず、仕事も放棄して、部屋に閉じ籠もってしまいました」

仕事の鬼である卓巳が仕事を放棄など、まさに晴天の霹靂であるう。

いつだったか卓巳は暴漢に遭い、肋骨を折ったことがあった。だが、その日のうちにコルセットを嵌めてニューヨークに商談に出かけたくらいだ。

「何でだよ。そんな……卓巳に限って……」

ある意味、太一郎にとって卓巳は憧れの存在であった。

それが自分の中で上手く整理出来ず、やがて嫉妬に摩り替わり、とにかく反抗するようになってしまう。しかし、全てにおいて完璧に見える卓巳は、今でも太一郎の理想だ。

その時、千代子がおずおずと口を開く。

「実は、お部屋担当の者に聞きましたところ。太一郎様との関係を疑い、一時の激情に駆られ……卓巳様は万里子様に随分酷い仕打ちをなさったようでございます」

「なんで疑うんだよっ！ バカじゃねえのか！」

「仕事が人生の全てであった卓巳さんが、仕事を辞めると言うほどです。己の愚かさは、一番承知しているでしょう」

激昂する太一郎に臯月は答えた。

「でも何だつて閉じ籠もるんだ？ さつさと彼女を迎えに行けばいいだろ。明日から新婚旅行だろうが。どうすんだよ」

「卓巳さんは自信がないのでしょうか。愛されることも、愛することも許されず、人生をたった独りで歩いて来られました。運命に逆らった初めての恋愛に戸惑っているのです」

「たった……独り？」

「太一郎さん 卓巳さんの目を、覚ませてやっつては貰えませんか？」

それは太一郎にとって思いも寄らない臯月の言葉であった。

「な、なんで俺にそんな」

「あなたと卓巳さんは同じだと、万里子さんが言いました。卓巳さんは動けなくなり、あなたは暴走する、と」

万里子の名を聞き、太一郎は胸に熱い塊がこみ上げた。

頭上から大錠おおなたを振り下ろされる気分だ。喉の奥を搾るように声を出す。

「俺のこと……何て言ってた？ 許さない、大嘘つきだつて……言つてたんだろ？」

臯月は微かに笑みを浮かべ、太一郎が予想もしなかった言葉を口

にした。

「あなたを傷つけないと約束した。あなたに信じて欲しいから、自分も信じる……そう仰ってましたよ。万里子さんはこの世の中で一番尊くて、そして難しいことを知っています。『人を赦す』ということを」

太一郎はこの時、万里子を疑った卓巳を責める資格はない、と思っただ。

万里子の信頼を損ねたと、太一郎自身も彼女の真心を疑ったのだ。

皐月は続ける。

「太一郎さん、あなたが万里子さんに惹かれても無理はないでしょう。そして、万里子さんが自然にあなたに心を動かすのなら、それは仕方のないことだと思います。ただ、これまでのように、腕力に訴えるような真似だけは止めて下さい。どうか、それだけは」

この瞬間まで、皐月は太一郎の誠意を半信半疑に思っていた。

万里子の言葉は正しい。

だが……。

「……ありがとうって言うてくれた」

太一郎は俯き、ポツリと呟いた。

「俺が追い詰めて、殺そうとしたようなもんなのに。自殺を止めてくれてありがとう、って。……初めて言われた。感謝されることが認められることが、こんなに嬉しいって初めて知ったんだ。謝って良かったと思った。二度としない、本当に心からそう思った。」

彼女は卓巳さんに惚れてる。腕づくでなんて……絶対にするもんか。俺、彼女の子供に生まれたかった……あんな風に愛されたら、見失うことはなかったのに。こんなに……罪を犯さず済んだのに」

この邸で一番大きな体を震わせ、太一郎は泣いていた。その姿は、差し出した愛情を破り捨てられた五歳の少年に重なる。

大人の確執の犠牲者だ。すぐ近くにいたのに、一つ屋根の下に暮らしながら、二十年以上も気付くこともなかった。墮ちてゆく少年を更に追い落とし、誰ひとり救いの手を差し伸べず……。

臯月は自らの罪を痛感した。

「遅くはありません。生きている限り、行いを正すことは出来ます。わたくしの罪も聞いてください。わたくしは、あなたが愚かな行いをする度、密かに喜んでいました。あなたのおばあ様に向けた醜い嫉妬を、あなたの母親に向け、そして、あなたに向けました。卓巳さんにとってあなたが血の繋がった従弟であることを、わたくしは忘れておりました。……ごめんなさいね。愚かなわたくしを赦して頂戴」

臯月は太一郎に手を差し伸べる。

太一郎は産まれて初めて祖母に抱き締められた。その瞬間、彼は声を上げて泣いたのだ。それは臯月や千代子の耳に、産声のように聞こえるのだった。

第六章 試練 (17) 目覚めるか？

卓巳は何かの気配にふつと顔を上げた。

ラウンジチェアに座り込んだまま、どれほど時間が経ったのだろう。窓の外はもう日が陰っていた。そう言えば、宗が何か言っていた気がする。仕事は……いや、もうどうでもいい。万里子を失っては働く意味などない。卓巳はそんなことを考えながら、再び膝を抱え込もうとした。

その時。

「ちよつと！ 止めて！ 誰か止めて！」

そんな女の声が聞こえた気がした。

聞きなれた……ああ、和田雪音の声か。卓巳が声の主を思い出した瞬間 顔面に冷たい衝撃を浴びる。それは、ここが風呂場かプールでなければあり得ない感覚だ。

なんと、卓巳は頭から水を被っていた。

文字通り、室内は水を打ったように静かになる。

卓巳の前髪からは、ポトポト雫が滴り落ちた。ラウンジチェアの下は水浸しだ。

「な……なんだ、これは」

「いい加減にしてくんねえか。卓巳さんよ」

今度はしっかりと焦点を合わせて卓巳は前を向いた。そこに立っていたのは太一郎だ。掃除に使うスチールバケツを手にしている。

「太一郎……これは何の真似だ」

「それはこっちの台詞だろう！？」 秘書や婆さんだけじゃない。医

者や弁護士のオッサンまで入れ替わり立ち替わりやって来てんのに。全部追い出して、あんた一体何やってんだ？」

卓巳は太一郎の問いに答えることが出来ない。

なぜなら、まるで覚えてなかったからだ。

そんな呆けた卓巳の様子を、太一郎は嘲笑うかのように言った。

「女房に逃げられてその様か。日本経済界の若き天才？ 『氷のプリンズ』が聞いて呆れるぜ」

「言いたいことはそれだけか？ じゃあもう出て行ってくれ」

「社長辞めんなら俺が貰うぞ、婆さんにも俺を後継者にしてくれって言いに行ってくる」

「……ああ、構わん。好きにしろ」

「じゃあ、社長夫人も俺が貰う」

「それは……」

太一郎に背を向け、再び殻に閉じ籠もろうとした卓巳に、その言葉は強烈な一発となる。

卓巳の瞳に独占欲や嫉妬心が浮かび上がり、太一郎はそれを見逃さなかった。

「あんな女初めてだ。彼女が俺のモノになってくれるんなら、何でもするよ。婆さんに……臯月さまに土下座してでも、この家に置いてもらう。それだけの価値のある女だ」

太一郎の言葉は真実味が溢れていた。ある意味本気で言っているのだから当然だ。だが肝心の卓巳は、その言葉に発奮せず、太一郎の本気に臆してしまう。

「そう……だな。万里子が望むなら、幸せにしてやってくれ。私は

「この家を出るから」

「貴様、本気で言ってるのか？」

情けない言葉を吐く卓巳に、太一郎は我慢出来ずに殴りかかった。

彼らの背後から悲鳴が上がる。

だが、太一郎に殴られても卓巳は全く無抵抗のままだ。太一郎は殴ったら殴り返してくると思っていた。こんな事態は想定しておらず、思わず後方を顧みる。

雪音やその隣には千代子までいて、『もっとやれ』のジエスチャ―をして見せた。

（もっと、かよ。……ったく、埒が明かねえ。他にコイツを動かすには）

太一郎はいつも通り凶悪な口調で卓巳を焚き付けた。彼には、万里子が卓巳に強制されて太一郎との関係を告白したことなど知るはずもなく。

「じゃあ、さ……腑抜けのあんたに、本当のこと教えてやるよ。写真見たんだろ？ あんたの可愛い万里子ちゃんももう俺のモノなんだよ。最初は泣いて抵抗したけど……ちよつとナイフで脅してやりゃあさ。無理矢理でもブチ込まれたら、後はおとなしいもんだつたぜ」

さすがに卓巳の顔色が変わった。太一郎はここぞとばかり、汚い言葉で卓巳を煽る。

「『卓巳さん、助けてえ』なんて泣いてやがったけどさ。もう、いいよな？ どうせ誰だか判んねえ男にやられちゃった女なんだろ。あんたもさ、飽きたから捨てるわけじゃん。今度は俺が、あの女を飽きるまで可愛がってやる……よ」

声を立てて笑おうとした太一郎の左頬に、卓巳のストレートが入った。
死んだような卓巳の目に生氣ならぬ殺氣が宿り、太一郎を見据えている。

「訂正するなら今のうちだ。本気なら 殺してやる」

太一郎の脳裏に、サンドバッグのように殴られた記憶が甦る。背筋に冷たいものが流れ、瞬時に股間が竦み上がった。だが、皐月の頼みである。ここで逃げたら次のチャンスはないはずだ。

太一郎は肩で大きく呼吸いきをして、下腹にグツと力を籠める。そして、卓巳に向かって怒鳴り返した。

「やってみるよ！ 今のためえなんざ怖くねえよ！」

その一言で藤原邸にゴングが鳴った。

喧嘩のテクニクもくぐった修羅場も卓巳が数枚上手うわてのはずだ。だが、この日の卓巳は冷静さを欠き、捨て身の太一郎は互角にやりあっていた。卓巳は太一郎ほど大柄ではないが、それでも大の男が二人、真剣に殴り合っているのだ。女と年寄りでは止めようがない。二人は寝室からリビングへ、更には扉をぶち破る勢いで廊下に飛び出した。そして、そのまま書斎前の二階センターフロアまで床を転がるように移動する。

「太一郎様っ！ もういいですから……。ちょっと誰か止めて！
男の人を呼んできてっ！」

雪音が叫んだ瞬間　そこに登場したのは、やはり水を満載したバケツであろう。

「え？ あ、あの……」

驚く雪音の様子が、殴り合う二人に伝わるはずもなく。

今度は藤原邸の廊下で水飛沫が舞った。卓巳にとっては二杯目の洗礼だ。そして、掛けた張本人は……。

くくくくくくくく

それは、万里子が宗の言葉を誤解し、藤原邸に駆け込んだ瞬間である。

何故かしら、邸内は俄かに活気付き、大声や女性の悲鳴まで聞こえた。そして、万里子がオープン階段の真上、二階のバルコニーを見上げた時、とんでもない光景が目飛び込んで来る。

なんと、卓巳と太一郎が胸倉を掴み合い、しかも、卓巳は太一郎の体を手すりに押し付けているのだ。基本的に古い家である。万に一つも手すりが壊れでもしたら……大惨事であろう。

万里子は大急ぎで階段を駆け上がった。

ちょうどそこに十七歳のメイド・佐伯茜がバケツを持ってやって来る。二人を止めるためか、バケツにはなみなみと水が汲まれている、とにかく重そうだ。

だが万里子はそのなことお構いなしでバケツを奪い取った。

「貸してね」

「お、おくさま？」

万里子は大量の水を、殴り合う二人の頭上に、一気に打ちまけたのであった。

第六章 試練 (18) 捧げた愛の行方

「何でこんな……卓巳さんが……命に関わる事故って、だから、わたし……なのに」

万里子の手には、吹き抜けのシャンデリアにキラキラと輝くスチールバケツがあった。万里子は、混乱する頭を落ち着かせつつ、ようやく二階に上がってきた宗に質問をぶつける。

「宗さん！ どういうことなんですか！？ どうして二人が殴り合ってるんですか？ 大変なことになる、命に関わるって……そう仰ったから」

泣きそうになる万里子を見て、宗は慌てて言い訳をした。

「いえ、嘘は言っておりません。突然社長が会社を辞める、後は任せると仰いまして。そのまま病人のように黙り込まれて……。安西先生から『自殺』という言葉が出たのでお命に関わる、と申し上げました。ですが……何で太一郎様と殴り合っておられるのかは、私には何とも」

確かに宗も訳が判らないだろう。あれほど無反応だった卓巳が……これが良化の兆しと言えるのかどうか、微妙なところである。

太一郎は耳に水が入ったのか、頭を傾げて片方を叩いていた。坊主頭のため、濡れても張り付くような髪もなく、その点は便利そうだ。そして、まだ水が残っている感触があるのだろう、太一郎は小指で耳を穿りながら顔を顰めつつ、万里子に話しかける。

「ちょうど良かった。なあ、万里子さん、コイツと別れて俺と結婚してよ」

いきなりのプロポーズだ。万里子には何がちょうどいいのかサッ

パリ判らない。

「突然……何を仰るんですか？ わたしはもう」

卓巳の妻だと言おうとして、左手薬指に結婚指輪がないことに気が付いた。

唇を噛む万里子に太一郎は、

「卓巳はいいってさ」

「え？」

万里子は一層びっくりして卓巳を振り返る。

卓巳は、雫を滴らせながら、拭おうともせず立ったままであった。

「君が望むなら……好きにしたらいい」

卓巳は万里子を見ずに答えたのだ。

その言葉を聞いた瞬間、万里子は来なければよかった、と思った。こんな言葉を聞きたいために来たんじゃない。卓巳のため、たとえ寝たきりでも、意識がなかったとしても、一生彼の傍にいて尽くそう。そんな覚悟はシャボン玉のように弾け飛んだ。

「そうそう、レイプされた女なんか誰も好き好んで嫁にするかよ。そんな物好きは俺くらいだって。……俺だったらさ、人のことは言えないだろ？」

太一郎の辛辣な言葉に、万里子の鼓動は一瞬跳ね上がる。

だが、そこに悪意や嘲弄ちょうりやうは感じられない。万里子が太一郎の顔を見たとき、申し訳なさそうに視線を逸らしたのが証拠だ。

ただ、騒ぎに集まって来た使用人たちの中には、不作法にも好奇の眼差しを万里子に向ける者もいた。

「やめろ、太一郎！ 本気ならそんな言い方をするな！」

卓巳は声を荒げたが、さっきのように殴り掛かることはしない。「今更、いいカツコすんなよ。あんただって、そんな女が嫌で追い出すんだろ？ ま、卓巳にも散々ヤラれまくったんだろうけどさ。その分、俺のことも楽しませてくれよ、な、万里子ちゃん」

太一郎はわざとらしく大声で卓巳を挑発する。
だが……当の卓巳はやけに静かだ。

(こ、こいつ……怒り過ぎて、マジで俺を殺そうとか考えてんじやねえよな?)

物騒な予感に、太一郎はこれ以上万里子を槍玉やりだまに挙げるのを躊躇した。

元々、太一郎にすれば、万里子を悪く言うのは嫌なのだ。皇月や卓巳のため、果ては万里子のため、とはいえ、かなりきつい。

その時、卓巳は何を考えたのか顔を上げ、よく通る声でハッキリと答えた。

「それはない。万里子はただ一度、お前のような愚か者の犠牲になっただけだ。自ら男に体を開いたことなどない。無垢な女性だ」

「た……くみ、さん？」

万里子には卓巳が何を言おうとしているのか判らない。いや、言葉の意味は判る。だが、何故ここで口にするのか……。ここには邸の人間が集まっている。卓巳の逆鱗を恐れてか、尚子らは正面には出て来ない。だが、オープン階段の陰からこちらを窺っているのが丸見えだ。それに、秘書の宗もこの場に居た。

卓巳はジッと万里子を見つめた。

瞳には何も浮かんではおらず。その瞬間、万里子には卓巳が何を言おうとしているか判った。

「やめて！ 卓巳さん」

万里子にとって、それは最も望まない形なのだ。

しかし、卓巳には届かない。

卓巳は、過去が明るみになり傷ついた万里子の心臓ココロを癒すため、自らの心臓ココロを差し出してしまおう。

「私には女性を抱く能力はない。祖母上は私を庇ってくれただけだ。私は万里子を抱いてはいない。私たちが夫婦であったことは一度もない。だから……大切にやって欲しい。私はこの家の後継者には相応しくない人間だ。藤原の名前も会社も……万里子も、太一郎、お前に任せる。よろしく頼む」

全てを告白すると、卓巳は太一郎に頭を下げた。

あんなに隠し続けた秘密だった。なのに、今の卓巳にはどうでもいいことのように思う。万里子の名誉を守りたい。彼女のためなら何でもしてやりたい。

万里子を守るために卓巳の選んだ道。

だがそれは、拙いながらも精一杯に築き上げた二人の愛を、跡形もなく叩き潰してしまっただも同然で。

「ひどいわ！ そんな……夫婦じゃないなんて……あんなに毎晩わたしのことを……なのに、抱いてない、なんて……あんまりです」

万里子は人目も憚らず、大声で叫び泣き始めた。

卓巳のほうは、そんな万里子の様子に気圧され、

「いや……だって一度だって最後までは」

「最後までしなければ、何もなかったことになるの？ 妻は生涯わたしだけだって仰ったくせに。卓巳さんが望むならこの家を出たっ

ていい。社長じゃなくても構いません。わたしに、ついて来いって仰ってくださいっ!」

指輪を置いて出て行ったことを、卓巳に詰られるのは覚悟の上であつた。何度でも詫びて怒りを収めて貰おう。妻として付き添えるように、許して貰おうと思ひ、駆けつけたのだ。だが、“夫婦ではなかつた” “何もなかつた” と言われるくらいなら、夫を裏切つた妻として、離婚を言い渡されるほうが百倍ましであろう。

邸中が静まり返り、全員が卓巳の返答を待つていた。

しかし、時計の秒針が一周して……二周目を過ぎても、卓巳は何も言葉にはしなかつた。

「これが……お返事なんです。夫だと思つから、身を任せていたのに。一度も……妻だと思つて下さらなかつたなんて……」

沈黙に耐え切れず、万里子は自ら答えを出した。そして、流れる涙を拭おうともせず、階段を駆け下り、邸を飛び出したのだつた。

「ほんと……バカ」

普段とはまるで違う口調でボソツと呟いたのは雪音であつた。

「同じベッドで毎晩眠つて、キスマークの消える日がないくらい抱かれて。それで何もなかつたなんて言われたら……私ならブン殴りますね」

そんな雪音の言葉に続いたのが太一郎だ。

「あのさ、もう殴り合つのも馬鹿馬鹿しいから言つちまうけど……さっきのは全部嘘だから。まあ、判つてんだろうけどさ……」。

あの時、俺が言いふらしたらどうする、って聞いたなら、お前が居てくれたら平気だつて彼女は答えた。お前に愛されてる、自分は全部夫のものだつて」

太一郎は、様々な万里子の仕草を思い出していた。あれほどまでに万里子に愛されながら、どうして卓巳はこの場に立ち尽くしているのか。次第に、太一郎の中に怒りの炎が湧き上がる。

「なあ卓巳さんよ。あんた、偉そうに孝司に説教したんだつてな。ホントに欲しいものは待つても手に入らないんだろ？ てめえが勃たねえのはソイツだけじゃねえのか？ 他も全部役立たずかつ！？」

太一郎の罵声に卓巳の出した答えは　。

第六章 試練 (19) 雪音の作戦

「痛つてえ。くそお、なんて頑固な奴なんだ」

雪音は太一郎の傷の手当てをしていた。担当ではないのだが、他のメイドが嫌がったためだ。万里子を追い、戻ってきた宗も同じ部屋にいる。

邸内は異様なほどの静寂に包まれていた。

「困りましたね。万里子様も実家に戻られて……今度ばかりは会って頂けませんでした」

ため息混じりに言う宗の言葉を受け、

「所々善人ぶるからですよ。徹底的に鬼畜・極道路線を貫けばよかつたのに」

太一郎に向かって、雪音はシラツと口にした。

宗までもが肯きながら「本当に」と呟いている。

太一郎は、

「無茶言つなよ。卓巳が本気で切れたら、殺されかねないんだからなっ」

「でも……切れませんでしたね。とうとう……」

そんな宗の言葉に閉口する一同であった。

さつさと万里子を追え。

太一郎は暗に卓巳を噓けしかけけていた。だが、卓巳はその一步を踏み出すことが出来ないまま……。

「ああ、そつだ。役立たずなんだ。どれだけ強く抱き合っても、私に男の資格はない。みんな、今まで騙していて済まなかった。これ

以上は……勘弁してくれ」

卓巳は、太一郎に殴られた体を引き摺るように部屋に逃げ込んだ。扉の鍵は固く閉められ、それは、卓巳自身の心のようだった。

「でも、本当にこのままでは……。社長はこの夏まで、イギリスの新規事業に関してはご自身で采配を揮っておられました。秋以降はプライベート重視で、担当責任者に一任しておりますが。ロンドンでのレセプションは形式的なものではなく、事実上、認可を得るための最終段階なのです。社長が欠席しようものなら、我が社の信頼は一気に失墜します」

多国籍企業の欧州最大勢力とも呼ばれる米・フォークナーグループと共同で、英国内の土地開発にあたること。そのために提示された条件が、土地開発の監査及び認可を政府より一任されている、ライカー社との契約であった。ライカー社のトップは准男爵、いずれは伯爵と呼ばれる貴族だ。彼らは名誉と伝統、そして安定を重んじる。

日本の藤原本社が社長交代で揺れでもしたら、認可が下りる可能性はゼロに等しい。それは億単位の損失に繋がる。無論、単位はポンドである。

神妙な顔で俯く宗を見て、雪音が声を上げた。

「だったら仕方ないわね。ここは一発、勝負を掛けてみましょう。お二人に、英国に行つて貰う外ほかないわ」

そんな雪音の提案に、二人とも反対の声を上げた。

「馬鹿か、お前？ もう新婚旅行なんて状態じゃねえだろ！ どっちも行くかよ」

「私も難しいと思います。第一、今の社長ではライカー社の手玉に

取られるのがオチです」

だが雪音は気弱な二人を一喝する。

「情けないわね、男でしょ！ 行く気がないならさせるまでよ、仕事もやらせるのよ」

「ヤツの股間を勃たせるくらい、難しいんじゃないの？ うおおっ！」

馬鹿にする太一郎の背中に、雪音は手にした湿布を、バンツ！

と叩き付けた。痛さと冷たさに思わず悲鳴を上げる。

「下品な冗談言ってる暇はないのよ。宗さん、卓巳様に最後の仕事をしてくれ、って頼んで下さい。ロンドンでのレセプションに出席して、無事認可が下りて契約すれば社長の役目は終了。対外的にも、新婚の奥様には同行して貰わなければならぬ、と話して」

「役員会はどうします？ 尚子様が敦様を通じて、早速役員会に報告されましたよ。年明け早々にも役員が召集されるでしょう」

尚子の名前に太一郎がビクツと反応する。

「そこは、現会長である大奥様にストップを掛けて頂きましょう。契約の完了を条件にすれば、役員会もまだまだ社長派が多いはず。それは太一郎様にお願ひします。それと、卓巳様に、後は自分がしつかり引き受けるから、心置きなく最後の仕事を済ませてくれ。あ、万里子様のこと、別れるなら指一本触れるな、と念を押して下さい」

雪音は二人にてきばきと指示する。

だが、男二人は今ひとつ得心が行かないようだ。

「でもさ、そんなこと言ったらあの堅物、マジで指一本触れないぜ」「万が一、契約が失敗して本当に社長が解任されたら……」

「契約が成功して、夫婦仲良く帰国すれば問題なしじゃないですか！ それに万一の時は言ったことの責任をとって、太一郎様が社長になるしかないですね」

雪音の宣言に、青褪める宗と太一郎であった。

くわくわくわくわく

結局、宗の説得により卓巳は英国での仕事を引き受けた。

万里子の同行は間際まで拒んだが、彼女の将来と名誉のために強引にでも体裁を整えておくべき、という意見を受け入れたのである。

翌朝、卓巳の部屋で雪音は渡英準備をしていた。

「ほとんど奥様をご用意されたものです。私は確認だけさせて頂きました」

卓巳は憔悴の色が濃い。昨夜は一睡もしなかったのだろう。太一郎と殴り合った傷は手当てしてあったが、レセプションまでに消えてくれることを願うのみだ。

「ああ、すまない。君にも世話になった。渡英中に万里子の荷物を纏めておいてやってくれ。この家を出るにせよ、太一郎と一緒になるにせよ、この部屋を使うことはないだろうから」

そんな卓巳の言葉を雪音はアツサリ否定した。

「太一郎様はこのお部屋を使いたいと仰っておられました。レイアウトもベッドも変えずに、と」

「なっ！ それでは万里子が……。そんな真似は止めるように言っ
てやってくれ。これ以上、万里子を傷つけないでやって欲しい」

「使用人の私にはなんと……旦那様から太一郎様にお話し下さい」

雪音は、あの夜万里子がどれだけ卓巳の帰りを待っていたか……

言葉にし掛けて止めたのである。

卓巳の憔悴の理由は、万里子の愛を疑ったことではない。公衆の面前であれほどまでに深い愛を告げられたのだ。この上、疑う愚か者はいないだろう。

おそらくは、自信のなさ……。卓巳は、愛し続ける自信がないのだ。万里子の深い愛情に応える自信がない。こればかりは、卓巳自身が変わらなければ、他人にはどうしようもないことである。

雪音は消沈する卓巳に容赦なく追い討ちを掛けた。

「それに、万里子様なら大丈夫ですよ。大変前向きでお強い方ですから。」

太一郎様も、今度ばかりは性根を据えられたようです。大奥様にも涙を流してお願いしたと聞きました。それだけではありません。この邸内で、ご自分が傷つけたメイド全員に土下座して廻られました。愛人同様にお手当てを貰う者もおりましたが、纏まったお金を渡して関係は全て絶ったようです。

そしてそのお金は、大奥様が喜んで用立てて下さったとか」

卓巳は雪音の言葉を、啞然とした面持ちで聞いていたのだった。

第六章 試練 (20) 消せない想い

「そう……か。祖母上が太一郎を認めたのか。あいつはそこまで、万里子を愛しているのか」

たった一夜で、卓巳は万里子だけでなく祖母の信頼まで損ねたことを知る。自ら選択した道とはいえ、卓巳は完全に置いてきぼりだ。そして、雪音は太一郎とは違い、攻撃の手を緩めることはなかった。

「全てを承知の上で万里子様を愛されるのは、卓巳様だけではない、と言うことです。会社のほうもそうでしょうね。卓巳様に求められているのは、このロンドン行きが最後じゃないですか？ 努力が一瞬间で吹き飛ぶことなんて、人生にはよくあることですから」

卓巳は自嘲めいた笑みを浮かべつつ、

「君は聡明な女性だ。僕がここを出ても、万里子が太一郎を選んだ時は、傍についてやって欲しい。彼女を助」

「それは大きなお世話と言うものです！」

雪音は手を止め、卓巳を振り返る。そして、大きな声で彼の言葉を一刀両断にした。

「連れて行って欲しいと泣いて縋る女性を、捨てたのは卓巳様ご自身じゃありませんか!？」

運命の悪戯や他人の悪意で失ったものは、取り戻すことが出来ると私は信じています。もし叶わなくても、探し続け、求め続ける資格がある、と。でも、自ら捨てたものは二度とその手には戻りません。

人生には抗えない運命があることは知っています。けれど、運命

に従うのは義務じゃありません！」

万里子と同じ歳の雪音に叱られ、卓巳の顔面は蒼白であった。

「私は……弱い人間なんだ。万里子に誓った約束を破った。すまない、許してくれ、と些細なことも合わせれば何度言ったか判らない。今度もそうだ。きっとまた傷つける。こんな役立たずの愚か者は、彼女の夫には相応しくない」

立ち上がりたい。だが、立ち上がれない。

心が折れて、愛する人に抱き締められることすら辛い。万里子に愛されることすら、胸が痛くて息も出来ないのだ。

卓巳は愛を知り、心につけた氷の鎧を外した。

愛は人を強くする。だが、鉄も打ち方を誤れば、折れるのである。

「そうかも知れませんね。万里子様は穏やかで温かくて、そして、お強い方です。」

卓巳様のご心配には及びませんよ。あれだけ若くて綺麗な方なんですから、過去など関係ない、妻にしたいと言われる方は太一郎様以外にも大勢いらっしゃるでしょう。きっとお幸せになられます。

実際にはご夫婦でなかったと仰るなら、卓巳様との短い結婚生活など、すぐにお忘れになるでしょうね」

雪音の最後の言葉は、卓巳に残った微かなプライドを射抜いた。

……すぐに忘れる……。

「私は万里子を抱いてはいない。私たちが夫婦であったことは一度もない」

そう言ったのは卓巳だ。だが……。

毎夜、万里子を抱き締めた。夫婦としてお互いを求め合い、可能な限り愛し交わした。あれが、『何もない』訳がない。卓巳の指も唇も、そして万里子に触れられた体中が幾つもの夜を覚えている。今の卓巳は迷宮の住人であった。あまりにも愛するがゆえに、これ以上愛してはいけない。万里子の愛に縋れば、胸の痛みは消えるだろう。だが、それは新たな苦しみへの序章となる。

卓巳は愛を捨てるため、ロンドンに向かうことを決めたのである。そしてそれは、人の心に“消せない想い”があることを、卓巳に教えたのだった。

くくくくくくくく

「これは一体どういうことなんだ、卓巳くん!? 一度は戻ってきた万里子が、君の秘書と一緒に行ってしまった。と思ったら、今度は泣きながら帰って来て……。君とはもう終わりだと言っている。まさか、あのFAXが原因じゃないだろうね? それなら、とんでもないことだ。万里子は君のことを本当に愛している。不倫なんてあり得んよ。もう一度ちゃんと話を」

千早邸の玄関に立つ、そこに居るのは嘗ての卓巳であった。

仕立ての良いダークグレーのスーツに身を包み、少しでも心を悟られまいと眼鏡を掛ける。ネクタイは英国の連隊を発祥とする、ごく一般的なレジメンタル・ストライプだった。

「残念ですが、お義父さん。万里子本人が不貞行為を認めたくて、彼女を呼んで下さい。話があります」

卓巳は何度も心で繰り返した言葉を、万里子の父・隆太郎に向かって発した。

「たくみ、さん……」

万里子はゆっくりと階段を下りてきた。

目を真つ赤に泣き腫らし、掠れる声で卓巳の名を呼ぶ。そんな万里子の姿を目にすると……。卓巳の中に様々な感情が吹き荒れた。この場で土下座をして詫びれば、きつと万里子なら許してくれるだろう。

（そうして、また傷つけるのか？ また失うのか？ もう耐え切れない）

卓巳は感情を殺し、声を作った。

「万里子、君は私を裏切ったと告白した。それは看過できない。君とは別れる。条件は一つだ……。今から予定通り、私と一緒にロンドンに行ってくれ。レセプションパーティで妻として最後の役目を果たして欲しい」

呆然と立ち尽くす万里子の耳元で、卓巳は続けて囁いた。

「お父上の耳には入れたくないだろう？ 私の秘密は告白済みで取引材料にはならないぞ」

それはまるで、最初に戻ったような脅迫の言葉であった。

万里子の父はまだ、四年前の事件は知らない。断われれば、子供の産めないことまで話すと言っているのだ。万里子の握っている卓巳の秘密は、既にジョーカーの役目は果たさない。昨夜の告白は、決して万里子のためではなかったと、宣言したようなものだった。

卓巳はスツと万里子から離れた。

「判ったかな？ 他には何も求めない。車で待っている」

それだけ言うと卓巳は万里子らに背を向けた。

だが、隆太郎には納得がいかない。

「ちよつと待ってくれ！　なんだそれは……あまりにも一方的じゃないか。私にはとても信じ難い。そうだろう、万里子。何とか言いなさい！」

卓巳の言葉は、指輪を外した夜に感じた“愛は初めから何処にもなかった”その思いを後押しするものであった。

万里子は懸命に涙を押し止め、卓巳に応える。

「判りました……あなたの仰る通りに。わたしも着替えて参ります。少しだけ、お時間を下さい」

「万里子っ！　それはどういうことだ。まさか、卓巳さんの言う通りなのか。お前は、夫がいながら不貞を働いたのか!？」

父の声は怒りのあまり裏返っている。

違うとは言えなかった。万里子は確かに卓巳にそう言ってしまったのだ。

「わたし……ごめん、なさい……」

謝罪の言葉を呟いた娘に、隆太郎は怒りを覚え、思わず手を振り上げる。

万里子も父に殴られることを覚悟して、咄嗟に目を閉じた。だが……どれだけ待っても頬を叩かれることはなかった。

卓巳が二人の間に割り込み、隆太郎の手を押えていたのだ。

「お義父さん……万里子はまだ、私の妻です」

万里子の目の前に卓巳の背中があった。

触れたくても、もう二度と触れることは出来ない、愛しい人の背

中が。

隆太郎は卓巳の手を払い、奥に消える。卓巳も無言で玄関を出て行くのだった。

今日は新婚旅行に旅立つ朝だ。

今が幸福でなければ、いつ幸福になるのだろう。だが、戻れば離婚が待っている。卓巳の妻でいられるのもあと僅か……。それも、この一ヶ月のような、幸せな日々は望めない。

けれど。

万里子は思い出していた。多くを望んではいなかったはずだ。一瞬でも構わない、卓巳の妻と呼ばれたい。ウエディングドレスを着て彼の隣に立つ、それだけで一生の思い出になる。そう思っていたはずなのだ。

“愛している”の言葉に、万里子は欲張りになっていた自分を知る。いつの間にか、卓巳に選んで貰えることを、当然に思っていた。（最後まで卓巳さんのことを愛そう……一分でも一秒でも多く彼の傍に居て、彼のことを見つめていよう。心に焼き付けて、たとえ二度と逢えなくても、一生忘れないように）

愛は与えるものだ、と太一郎に教えたのは万里子である。

万里子は泣くのを止めた。

卓巳に従おう。たくさんの愛の言葉をくれた。万里子には決して届かないと諦めた、煌く宇宙の星を、卓巳は与えてくれたのだ。嘆くのは、全てを失くした後でいい。

万里子は玄関から出ると、車で待つ卓巳に向かって静かに微笑んだ。

その瞬間の、卓巳の心など、彼女には知る由もなかつたのである。

(少しでも長く万里子と一緒にいたい。生涯ただ一人の妻だから…
…決して忘れないように)

第六章 試練 (20) 消せない想い(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

さて、試練を乗り越えられぬまま、ロンドンまで持ち越します(^
^ ;)

卓巳と万里子に試練を与えた結果、私自身にも試練が与えられたよ
うな第6章でした: orz

「神は耐え得る者にだけ試練をお与えになる」(ホントか?)

買ってまで苦労をしたくはありませんが、困難にぶち当たった時はそ
の言葉を信じたい気がしますm () m

明日から第7章『慈愛』です。

引き続きよろしくお願い致します(平伏)

第七章 慈愛 (1) すれ違う心 (前書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

第七章、切なさMAXからスタートです。orz

ロンドン滞在中は、「」の台詞が日本語、『』が英語だと思って
ご覧下さい。

引き続きよろしくお願い致しますm()m

第七章 慈愛 (1) すれ違う心

千早邸を出て、正午に成田空港を発った。

ヴァージン・アトランティック航空の直行便で、同日の十五時半、二人はヒースロー空港に到着する。日本との時差はマイナス九時間。機外はかなり寒い。東京の最低気温がロンドンの最高気温といった辺りだろう。

ヒースローからロンドンの中心地までは航空会社のショーファーカーが送り届けてくれる。

宿泊先はリッツ・ロンドン。

そこは、万里子が一度は泊まってみたいと卓巳に話したホテルであった。

『お待ち申し上げておりました。ようこそ、ロンドンへ！』

金髪の巻き毛が目立つ青年が、リッツのロビーに立ち、爽やかな笑顔で迎えてくれた。

彼はジェイク・フォレスター、フジワラ・ロンドン本社の社員だ。卓巳より一歳若い。リサーチ部門の平社員であった彼を、卓巳が今回のチームに抜擢したのだという。卓巳の英国滞在中は、宗の代わりに、秘書の役目も果たしていた。

『社長は僕を屈なデスクワークから救ってくれた。命の恩人です！』

無口な卓巳とは対照的で、始終朗らかに喋っている。どうやら、秘書には自分と違ったタイプを選んでいられるらしい。

そして、卓巳が万里子のために選んだ部屋は、『グリーンパーク・

スイート』。

その名の通り、窓からはグリーンパーク、そしてバッキンガム宮殿を望める位置に面していた。外廊下からドアは二重になっており、正面の大きなドアを開くとシッティングルームがあった。日本のリビングに相当する部屋だ。その奥がベッドルームである。内側の廊下にはもう一つドアが付いていて、そこは来客を泊めることの出来る、エキストラ・ベッドルームであった。

万里子は前々日まで用意したトランクから、パーティ用の衣装をはじめ荷物を出し、クローゼットに片付ける。

ロンドンには一週間滞在する予定だ。その後、ウエールズに向かい、フジワラ所有の古城ホテルに宿泊するプランである。後半の一週間は、丸々新婚旅行を楽しむ予定だった。

だが今となつては、ウエールズに行くことはないだろう。ひよつとしたら三日後のレセプションパーティが終われば、一週間も経たずに帰国することになるかも知れない。

しかも卓巳は到着するなり、ジェイクを急かすように、仕事に行つてしまった。

拳式前、卓巳と一緒にオーナーズスイートに宿泊したが……。

『グリーンパーク・スイート』はあの部屋より遥かに広く、万里子には何をしたらいいのか判らない。

ホテル側は気を利かせてくれて、随所にハネムーン用の飾りつけを施してくれている。シッティングルームのセンターテーブルの上には、淡いピンクの薔薇の花かごが置かれ、カードには「Happy ever after（いつまでもお幸せに）」の文字が。さらに、ベッドの上には赤い薔薇の花びらが散らされ、洗面台に置かれた石鹸はハートの形をしているのだ。

深夜になつても戻らない卓巳を思い、目にするだけで切なさが増していく万里子だった。

機内でも、卓巳はすぐに眠ってしまった。

ろくに機内食にも手を付けず、空港でもコーヒー以外は口にした様子もない。

何か召し上がっておられるのだろうか？　夕べはちゃんと眠られたのだろうか？　聞きたいことは山ほどあるのに、結局、何一つ尋ねることは出来なかった。

だが、そういう万里子にしても変わりはない。

一昨日から、ほとんど何も食べておらず、眠ってもいなかったのである。

そんな万里子のこと、卓巳は心配で堪らない。

二晩離れていただけなのに、まるで二年も経った気分だ。卓巳が独りで、あの天蓋付きの巨大ベッドに眠れるはずがなく。万里子以上に、卓巳は一睡もしていなかった。

万里子の顔は蒼白で、ひたすら正面を見つめ続けている。

無論、そんな時しか彼女を盗み見ることが出来なかったのだが。

卓巳が話しかければ、万里子は大粒の涙をこぼしそうな気がする。

そうなれば理性を保てる自信などない。

藤原邸を出る時、くどいくらい太一郎に念を押された。

「社長を辞めてこの家を出るって、あんたが言ったんだからな。万里子さんに二度と手を触れるなよ。これはもう、新婚旅行じゃない。あんたは仕事に行くんだ！　戻ってきたら、会社も彼女も俺がもらう。俺だったら、ちゃんと抱いてやれる。役立たずのあんたは、指一本触れるなよ。いいなっ！」

追いかけると言われた時、どうやっても追う勇気が出せなかった。

周囲も呆れて、ため息をついていた気がする。それも当然だ。我ながら、あまりの無様さに言い訳すら思いつかない。

ロンドンまでのフライト時間は約十二時間半。

時差を考えれば睡眠を取っておくのがベストなはずである。アツパークラスの座席は、倒すとフルフラットになる。だが、卓巳はそれを断わり、書類に目を通していた。

だが……一瞬、体が傾かしいだ。卓巳はハツとして、どうやら、そのままの姿勢で眠っていたらしい。そして横を見ると、万里子も眠っていた。

卓巳は身を乗り出して、ずり落ちそうな毛布を万里子の体に掛け直す。熟睡していることに気づくと、卓巳は万里子のシートをフラットに調整した。彼女を起こさないように、そうつとだ。

万里子の寝顔を見ていると、今までのことが具くさげに思い出される。

その瞬間、卓巳は腹の底から突き上げるような衝動を覚えた。“それ”は、万里子の身体に触れ、唇を重ねると命令する。

卓巳は万里子から逃げるように視線を逸らせた。

可能な限り、ホテルの部屋では二人きりになるのは止めたほうがいい。雪音の言った通り、自分にはもう、その資格がないのだから。

最初の夜、卓巳が戻ってきたのは深夜二時を廻っていた。

戻るなりシャワーを浴び、ベッドに転がる。

「お帰りなさいませ」

万里子はずっと起きて待っていたのだ。しかし、卓巳は「ただいま」すら言おうとしない。万里子は諦め、そつとベッドの端に潜り込む。目を閉じ、浮かんでくる涙を必死で拭い……。

反対側の端に転がる卓巳が、朝まで眠るフリを続けたことなど、

万里子には気づくはずもなかったのである。

第七章 慈愛 (2) 予感

『ミセス・フジワラ、女性お一人でも、歩いて行ける範囲内に観光名所がたくさんございますよ。よろしければ、こちらでガイドも用意させて頂きます』

毎日ホテル内で、独り過ごしている万里子を見かねたのだろう。

ホテルのコンシェルジュが声を掛けた。確かに、ハネムーンにはあり得ない事態だ。だが、彼らは卓巳の立場を知っていた。あくまで、忙しい夫を健気に待つフジワラの社長夫人に同情したらしい。

万里子はその心遣いを丁重に断わり、卓巳の帰りを待ち続けたのである。

そして……あつという間に、レセプションを兼ねたニューイヤーパーティ当日となった。

く*く*く*く*

パーティ会場もこのリッツ・ロンドンである。

二人とも一緒に居る時はあまりに辛く、眠ることも儘ままならない。

万里子はまだ昼間に仮眠が取れるが、卓巳にはそれすらも許されず。彼は限界を超えるまで自分を苛め続けた。

そして、その張り詰めた緊張が、パーティ開始直後の卓巳を襲う。彼はとうとう、過労と睡眠不足で倒れたのである。

卓巳が目を開けると、そこに万里子がいた。

人前では不審がられぬよう最低限の会話は努めている。だが二人きりになると、卓巳は万里子に一度も話しかけてはいなかった。

「わたしを憎んでおられるなら、それでも構いません。でも、これ以上は無理なさらないで下さい」

卓巳の体を案じる、思いやり溢れた眼差しで万里子は見下ろしていた。彼の目に点滴の管が映る。そう言えば、ここ数日何を食べたのか記憶にない。何を話したのか、どんな仕事をしたのか、何を見て誰と会ったのかすら、思い出せないのだ。

万里子の瞳を見つめ続けることが出来ず、卓巳は無言で目を閉じた。

（抱き締めたい……口づけたい……愛していると行ってしまいたい！）

そんな衝動と戦う卓巳を、万里子はどう思ったのだろうか。身を乗り出すようにベッドサイドの椅子に座っていたのを、スツと引いたのだった。

「わたしがお傍にいては、充分にお休みなれないでしょう……。わたしはパーティの席に戻ります。卓巳さんのご気分が良くなるまで、横になっていて下さい」

そう言って万里子は立ち上がり、部屋から出て行く。代わって入って来たのはスイートルーム担当の客室係であった。

『ミスター・フジワラのお世話をしよう、奥様に申し付かって参りました。何でもご命令下さい』

既に見えるはずのない万里子の背中を卓巳の目は追った。悲しげな瞳や心細そうな肩が、卓巳の^{まぶた}瞼に残像となってちらついた。

『ミスター？ ご気分が悪いようでしたら、すぐにホテルドクターを』

『いや、いい。しばらく独りにしてくれ』

客室係は卓巳を気遣ったが、こればかりはどんな名医にも治す事は不可能だろう。

それが“孤独”と知らぬうちは何でもなかったことである。だが、卓巳の心と体は万里子の寝息と肌の温もりを知り、本当の“孤独”を知った。それはもう、彼女を抱き締めずに眠ることなど出来ぬほどに。

卓巳は重症の“恋の病”であった。

くくくくくくくく

点滴と休憩でだいぶ楽になり、卓巳はようやくパーティ会場に戻る。

○時前、カウントダウンまではもうしばらく時間があった。本社社長の体を心配し、数人の幹部社員が寄ってくる。彼らに儀礼的な笑顔で応対しつつ、卓巳の目は万里子を探した。

そして万里子の姿を見つけた瞬間、卓巳の表情は凍りつく。

彼女の傍にはタキシード……英国風に呼ぶならディナージャケットを着たプラチナブロンドの男がいたからだ。

日本人としては高身長卓巳だが、その男は更に十センチ以上高かった。万里子を見上げる仕草からも、太一郎より高いことが判る。近寄ると、その髪がグレーに近いプラチナであることが判る。そして、黒に見える瞳も水底を思わせるダークグレーで……。

彼がライカー社の社長、サー・ステイブン・ライカーである。

認可の内定は既に受けていて、新年早々に正式調印となる予定だ。

だが、気分屋で有名なサー・ステイブンのこと。万一、彼のこ
機嫌を損ねてもしたら帳消しになる可能性も懸念される。

しかも、今回の内定に卓巳は若干の不安を覚えていた。

サー・ステイブンの実父は、なんとフォークナー財閥の総帥ネ
イサン・B・フォークナー氏。今回の共同開発において、フジワラ・
ロンドン本社の業務提携先である。

アメリカ人であるフォークナー氏は英国籍の後妻を娶り、ステイ
ブンが産まれた。だが、排他的な英国貴族社会、それに追随する
英国経済界を嫌悪していたのだ。ところが長男ステイブンは父に
逆らい、伯爵家の一人娘と結婚。彼はサーの称号を持つ、貴族の仲
間入りをしたのであった。

現在は准男爵という貴族の中でも最も身分が低い。だが、いずれ
妻が伯爵位を継承すれば、彼はロードの敬称を持つようになる。そ
うなれば、ステイブンは自動的に貴族院のメンバーとなるのだ。

サー・ステイブンは結婚を機に会社を興した。そして、国から
監査を任されるまでに成長させたのである。しかもここ数年で。そ
の手腕は見事と言えるだろう。

そして今回の業務提携である。

実は、藤原グループに協力を要請してきたのは、フォークナーの
ほうであった。多国籍企業としては、特に欧州では後塵を拝する藤
原である。現在の世界経済情勢を鑑みて、単独で立ち向かえるもの
ではない。優良企業であるフォークナーとの繋がりには、ぜひとも維
持しておきたい。そんな思惑もあり、ライカー社との折衝を引き受

けたのであった。

だが、この内定を受けたのは二ヶ月も前だ。内定から正式調印まで、やけに時間を取らされたことも気に掛かる。無用な軋轢あつれきを避けるために、卓巳に折衝役を求めたのだ、と考えていたが……。

しかし、今の卓巳の懸念はそこではなかった。

サー・ステイブンは三十代半ば、既婚に関わらず、ロンドン社交界では有名な女好きである。

それも、太一郎のような子供じみた違法行為などもってのほかだ。相手に応じて実に巧妙に、且つ合法的なやり方でお目当ての女性を手に入れていく。

金を欲しがる女性には有り余る金を、セックスの悦びを求める女性にはベッドの上での満足を。それだけではない。愛を欲しがる女性には、惜しげもなく愛情を与えるという。彼の熱烈な愛情表現に負け、頑なな女性もやがて彼を愛するようになるらしい。

卓巳にはとても真似は出来ない。

いや、そもそも、多くの女性を得ることの何が楽しいのか、卓巳には理解出来ないのだ。相手は一人だけでいい。唯ひとり、彼女だけを愛し抜く心と体があれば。

そしてその唯ひとりの女性……万里子の傍らに寄り添い、談笑する男。

卓巳はサー・ステイブンを見据えると、呼吸を整え、ゆっくりと近づいた。

第七章 慈愛 (3) ニューイヤークス

万里子がハツとして卓巳のほうを見た。その瞬間、ウェイターとぶつかったのだ。

よろめいた万里子をステイブンが抱きとめようと。

『失礼！ サー、妻がご迷惑をお掛けしたようです』

ステイブンの腕に落ち掛けた万里子を、卓巳は間一髪で取り戻した。そして、素早く二人の間に体を割り込ませる。卓巳の目は「妻に触れるな！」と言っていた。

『やあ、タクミ。気分はどうだい？ いくら新婚旅行を兼ねているとはいえ、睡眠不足で倒れるほど頑張るものではないよ』

サー・ステイブン・ライカーは大袈裟なジェスチャーで卓巳を茶化した。その言葉の意味に気付いたのだろう。万里子も赤面している。

『ご心配は無用です。私は時差に弱くて、その影響ですよ』「万里子、話がある。すぐに部屋に戻っていてくれ。僕も行く」

サラッと流すと卓巳は万里子に向き直った。そして、日本語に切り替え命令する。一秒でも早く、ステイブンの近くから万里子を引き離したい。 時間がないのだ。

「あ……はい。でも、卓巳さん、本当に大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。早く」

『5・4・3・2・1……』

カウントダウンに卓巳は軽く舌打ちした。まだもう少し、時間は残されていると思っていたのだ。

その直後、

『ハッピーニューイヤー!! God Save the Queen (女王陛下万歳)!!』

その声に手にしたシャンパングラスを全員が高く掲げる。

「万里子、僕の傍から離れるな」

「は、はい」

万里子を部屋に引き止めておくべきだった。いや、点滴など引き抜いてすぐに追えばよかった。自分が倒れたりしたばかりに……。

卓巳は後悔しきりだ。

パーティの列席者は、口々に『ハッピーニューイヤー』と言いながら、目に付いた片っ端から抱き合い、頬にキスをした。ただ、英国では男性同士は抱き合うだけでキスはしないのが基本だ。

カップルなどは軽く唇にもキスをする。万里子も、背後から年配の女性に抱き締められ、右頬にキスされた。

ステーキブンも数人とニューイヤーの挨拶をしながら、万里子に近づいている。

だが、万里子はステーキブンどころではないようだ。身を潜める様に、卓巳の背中を掴んでいる。その瞬間、卓巳は万里子を抱き締め、右頬に口づけた。

「こうしていれば、すぐに終る。我慢してくれ」

「……卓巳さん……ありがとう」

その言葉と同時に万里子も、卓巳の右頬に軽くキスを返したのだ。

今夜の万里子は朱色のイブニングドレスを着ていた。

肩と背中が大きく開いたデザインだ。万里子はその部分をジョーゼットのシヨールで軽く覆った。髪は柔らかく、膨らみを持たせて纏め上げ、首にはドレスと共布のチョーカーが巻かれる。

チヨーカーを攪くすくるように零れる数本の後れ毛　清楚な色香が万里子を包み込む。

淡い髪を持つ人種に混じれば、万里子の髪は漆黒に映る。さらには神秘的な黒い瞳。日本人の肌理きめ細かな肌質は、日焼けしていない彼女の肌を一層輝かせ……。

卓巳の、万里子を抱き締める手に力が籠もった。

「ハッピーニューイヤー」

そんな言葉で誤魔化しながら、卓巳は万里子と唇を重ねていた。強く押し付けることも、唇の間を割ることもせず、ただ……甘く懐かしい感触に卓巳が浸りかけた瞬間、

『ニューイヤーキスは終了だ。タクミ、続きはパーティが終わってからにしてくれ』

サー・ステイブンのジョークを含んだ声に、周囲もドツと沸いた。

『そんなに警戒しなくても、君の妻を頭から食べたりはしないよ』
卓巳は理由をつけて、万里子をステイブンの前から追いつめた。それに気づいたのだろう、彼は銀髪を揺らし苦笑している。

だが、卓巳は彼の言葉を信用してはいなかった。この男は獲物を見つければ手段は選ばない。よくない噂は山のように聞いている。

『マリコはとても英語が上手だね。しかもイギリス英語クイーンズイングリッシュを綺麗に話す。日本人には珍しいタイプだ』

『妻には留学経験もないはずです。サーに褒めていただけるとは光栄ですね。本人にも伝えておきましょう』

『私の父はアメリカ人だ。私自身、向こうで暮したこともあって、アメリカ英語の訛りが抜けない。こういった席では、下品だと顔を顰められる。だが、マリコは私の英語を笑わなかった。素敵な女性だ』

『気が付かなかっただけでしょう。妻の無知をお詫びします』

平静を装いながら、卓巳は奥歯を噛み締めた。

(こんな男にまで優しくしなくてもいいものを！)

だが、万里子にすれば卓巳の大事な取り引き相手である。

不快な思いをさせてはいけない。卓巳の妻として、立派に役目を果たさなければいけない。彼女なりに必死であった。

『いや、私の英語に彼女も同じイントネーションで返してくれた。聡明で思いやり深い女性だ。私も彼女のような女性を妻に持ちたかった』

『妻はごく普通の日本人女性です。サーに釣り合う身分も、実家の資産も持ち合わせてはいません。第一、美しい奥様がおいでではありませんか』

『ああ、確かに美しい。初夜の床で体位を指示した素晴らしい女性だ。その後、早産と称して六カ月後に元気な息子を産んでくれた。だが、称号と後ろ盾欲しさに結んだ婚姻だ。解消するわけにはいかない。ミスター・フジワラ、私は君が羨ましい。眠るのがもつたかないと思えるほどの夜を、私も過ごしてみたいものだ』

同様の噂を卓巳も知っている。

冗談か本気が判らないが、自嘲するようにサー・ステイブンは浅く笑った。

命すら捧げられるほど愛する人に出逢えて、更には愛されて、そ

の上、永遠を誓えるのは奇跡なのかも知れない。

愛と引き替えにステイブンはサーの称号を得た。

彼は自ら人生を選んだのだ。そこに愛がなくとも、同情には値しない。だが、奇跡の少数派になるチャンスを自ら捨てようとしている。そんな大馬鹿者にも同情の余地はない。

そんなことを考えつつ、卓巳が思い浮かべていたのは……。

今日の万里子の美しさは格別だろう。

ウエディングドレスの時の初々しさとは違って、開花し始めた薔薇のような……瑞々しい艶やかさがあつた。ステイブンが目を奪われても無理はない、とさえ思える。

卓巳は先刻の抱擁、そしてキスを思い出し……狂いそうなほどの衝動に駆られた。

(欲しい。どうしても。独りでは眠れない)

激情は卓巳から理性を奪い、万里子を……という一点からも目を逸らさせたのだった。

第七章 慈愛 (4) 裏切りのキス

ニューイヤーパーティは朝方まで踊り明かすこともあるという。だが、フジワラ主催のパーティはそこまでの時間にはならず二時を少し回った辺りで散会となった。

卓巳の采配であろう、あの後万里子は一度もステイプンと話をすることもなく。卓巳より先に、スイートルームに戻ったのだった。

卓巳に触れられた唇が熱い。

話があると言ったのは、ニューイヤークスのことを心配してくれたのだろう。万里子は年末年始に海外に出たことはなかったから、うっかりしていた。でもそのおかげで、卓巳とキスが出来たのだ。

これで妻の役目は終わってしまった。明日にも、卓巳は日本に帰ろうと言い出すかも知れない。だとすれば、今夜は卓巳と過ごす最後の夜になる。

万里子は熱いシャワーを浴びながら、一つのことを考えていた。

(嘘でもいいから、もう一度だけ愛してると言われて、卓巳さんに抱き締めて欲しい)

万里子は、恥を忍んで最後のお願いをしてみるつもりだ。軽蔑されても構わない。どうせ日本に帰れば、二度と逢うことなど出来ない人である。一生に一度だけ、自分の意思で男性を誘惑してみよう。スーツケースの中には、あの日に買ってきた、とびきりセクシーな下着が入っていた。

万里子はいれ忘れたと思っていたが……実は、雪音が気づき、忍ばせたものだった。

鏡を見ながら、万里子は身支度を整える。あずさほどではないが、

しつかり寄せると零れ落ちそうなくらいには見える。上下ともそれほど隠す部分の少ないデザインは初めてであった。

少し悩んだが、一応、ブラウスとスカートも着て卓巳の帰りを待つ。

そして三時になる少し前、部屋のブザーが鳴った。

「お帰りなさいませ。お疲れ様でした。お体はもう……」

万里子は精一杯の笑顔で卓巳を迎えたようにしたのだ。しかし。

卓巳のすぐ後から、青い瞳で金髪の典型的な英国美人が部屋に入ってきた。ロンドン出身のモデルで、名前は確か、ジューデイス・モーガンと紹介された覚えがある。

(……どうということなの?)

『まあ！　なんて素敵なお部屋なの。さすがフジワラのオーナーね。この部屋に相応しい夜を期待していいのかしら?』

ジューデイスは万里子を見無視し、部屋に入るなりそんな言葉を叫んだ。そして、卓巳の首に手を回している。更には、なんと卓巳は彼女の腰に手を添えているのだ。

そして、卓巳の言った言葉は……。

「万里子、僕は今夜、彼女と過ごしたいと思っている。君は、隣のエキストラルームを使ってくれ」

彼は万里子の方を見ることもせず、そう命令した。

頭がちやんと働かない。万里子は一言もなく、コートとバッグを掴み外に出ようとする。そして二人の横をすれ違う瞬間、息が止まった。

ジューデイスは卓巳の首に回した手を引き寄せ、そのまま唇を重ねたのだ。まさか、卓巳が他の女性とキスする姿を見ることになる

なんて！

万里子は逃げるように部屋から飛び出した。

くくくくくくくく

何処をどう歩いたのか判らない。無論、エキストラルームには行かなかった。

万里子は今、リッツのロビーにいる。『お具合でも？』とおよそ五十代のコンシェルジュに話しかけられた。万里子に観光を薦めてくれた人だ。穏やかな眼差しが父を思わせる。その父を怒らせ、振り切つてまで卓巳について来てしまったのに……。

こみ上げそうになる涙をグツと飲み込み『大丈夫です』と微笑と共に万里子は答えた。

一旦は正面入り口を抜け、外に出たのだ。

だが、こんな時間とはいえピカデリー通りはたくさんの人で賑わっていた。万里子もすぐに声を掛けられる。しかもニューイヤード皆浮かれているらしく、『ハッピーニューイヤー！』と抱き付かれそうになり、怖くてすぐに戻つて来たのだった。

万里子の男性恐怖症は治まったわけではない。

今夜のパーティーも、卓巳が横になつている時は大変だったのだ。万里子の考え過ぎで、相手は紳士的にエスコートしてくれているだけかも知れない。だが、腰や背中に触れられるのは、彼女には耐え難い苦痛であった。

ライカー社の社長にしてもそうである。まるでスクリーンから抜け出して来たかのような、整った容姿の男性であることは間違いな

い。だが、彼の視線は苦手だ。ロンドン支社長から、『最重要人物です』と言われているなければ、真っ先に逃げ出していただろう。

卓巳が割り込んで来てくれた時は、心の底からホッとしたのだ。背中に庇われ、カウントダウンの時は抱き締められて、キスされた。万里子の瞳には卓巳しか映らず、耳に残るのも卓巳の声だけである。

仄かな期待を裏切られ、万里子は大声で泣きたかった。でも、ただでさえ日本人で目立つのだ。こんなところで妻が泣いていたら、夫の卓巳に悪い評判が立ってしまう。

（卓巳さんはあの女性を抱くの？ わたしにしか見せてくれなかった顔を、あの女に見せるの？）

卓巳は、女性に関しては誠実な人だ。その前提があつたため、万里子は嫉妬など感じたことはなかった。だがこの時初めて、卓巳が太一郎や俊介に対して見せた、自らをも焼き尽くしそうな炎が自分の内にもあることを実感したのだ。

あの女が妬ましい。すぐにもスイートに駆け戻り、あの女を部屋から叩き出してやりたい。黒い感情が万里子の胸に渦巻いた。

卓巳は……卓巳だけは、こんな真似はしないと高たかを括っていたのだ。

だがそれは、言い換えれば、十分な男性機能を持たない卓巳を軽んじていたのかも知れない。そのことに反省と後悔を覚えつつ、それでも気持ちは治まらない。

卓巳が万里子以外の女を抱いている。

今、この瞬間も。悔しさと切なさを取り返しのつかない絶望感で、万里子はこの恋の終焉を感じていた。

（二度と……信じない。卓巳さんのことも、誰の言葉も。愛なんて、

二度と求めない！)

万里子の左手薬指には、こちらに来て卓巳に渡された間に合わせの結婚指輪が納まっていた。それをスツと外し、ポケットに仕舞う。卓巳の思惑などどうでもいい。今から取れる一番早い便で日本に戻ろう。

飛行機の予約を先ほどのコンシェルジュに頼もうと、ロビーのソファから立ち上がった瞬間だった。

万里子の目に映ったのは。

第七章 慈愛 (5) 愚かなる者

エレベーターの扉が開き、一人の女性が降りて来た。

さつきは手に持っていた黒いコートを今は羽織っている。それも金色の髪も覆い隠すように。よほど目立ちたくないのだろう、濃い色のサングラスも掛けていた。

「ミス・ジューデイス・モーガン……どうして？」

万里子は、そんなに時間が経ったのか、と時計を見たが……せいぜい三十分程度だ。ジューデイスは足早にロビーを横切って行く。そんな彼女を追いかけ、万里子は声を掛けた。

「すみません。あの、ミス……」

ジューデイスはファンカマスコミを警戒したのだろう。大股で飛ぶように歩き、立ち去ろうとした。だが、万里子の顔を見てピタッと立ち止まる。

「あなた、ミセス・フジワラね」

「あ、はい。あの」

「彼はペドなの？ それともソドムの住人！？ どちらにしても、私の胸に触れて吐いた男は初めてだわ。彼は病気ね。医者に見せたほうが良くないかしら？ 二度とこの国で女を口説けると思わないことね。タクミの男の価値はゼロだわ。そう伝えてちょうだい！」

北部出身なのだろう。ジューデイスはスラング混じりの英語で一気に捲し立てる。万里子には半分程度しか理解出来ない。だが、卓巳は彼女の期待に応えられなかったのだ。

ジューデイスは万里子に噛み付くと少しは鬱憤が晴れたのか、颯爽と正面玄関から出て行った。

その時すでに、万里子の姿はロビーにはなく……エレベーターは上を目指していた。

くくくくくくくく

(……万里子が欲しい。彼女を抱きたい)

卓巳は胸の奥で猛り狂うその思いから、目を逸らしたかった。

そして無意識のうちに、女が抱きたいのだ、と掬^すり替えてしまう。そこにつけ込んだのが英国人モデル、ジューデイス・モーガンだった。

卓巳は妻がいる身で、十年前と同じ失態を演じてしまったのだ。

欲望を代替品で賄おうと愚行に走った卓巳に、その罰はすぐさま下された。

ジューデイスのキスに応えようとした卓巳だったが……愛しさも何も感じない。寧ろ、卓巳は嫌悪感に耐えるのが必死であった。それはかつて、セックスに関わる行為全てに感じていたことだ。

万里子が飛び出して行くのは覚えている。

普段の卓巳であれば、心配で後を追うであろう。だが、この時すでに彼の神経は限界まで擦り切れ、ピークを超えた疲労は、正常な判断力を奪い取っていた。

そして彼には、より重い罰を与えられたのである。

卓巳はジューデイスを引き剥がし、『飲みなおそう』と提案する。単なる時間稼ぎだ。だが、この部屋に来た彼女の目的は一つである。卓巳の小手先の誤魔化しが通用する相手ではなかった。

ジューデイスはアルコールを手にも卓巳の膝に乗りキスを続けよう

とする。艶かしい、興奮を煽るようなキスだ。多くの男は、このシチュエーションで与えられる積極的なキスを悦ぶだろう。しかし、卓巳にとっては……キスは次第に、汚物を口に流し込まれる感覚に変わって行く。

それは警告だった。体が赤信号を点滅させている。それを感じながらも、卓巳には引くことが出来ない。

仕事においてはそれが長所となり、集中力の高さや熱心さにおいて尊敬され、成功を収めてきた。また、限界に挑むことでそれを超えてきた、と言ってもいい。

だが、恋愛やセックスにおいては……。

十年前は何も出来ないまま撤退を余儀なくされた。だが、今回は少なくとも万里子との経験がある。卓巳はその勢いを借りて、ジューデイスの服に手を掛けようとする。

しかし、彼女は万里子とは違った。万里子は全て卓巳の主導で、彼が与えるまでジツと待っていてくれる。どれほどたどたどしい愛撫であれ、万里子は目を潤ませ、卓巳を受け入れてくれるのだ。

そんな夫婦の間のルールが、ジューデイスに適用されるわけがない。彼女は率先して卓巳の身体に触れ、洋服も下着も脱がし始めたのだ。

体に触れる彼女の指先は恐ろしく官能的なものである。石像すら熱く高ぶらせるであろう。そんな愛撫の魔術マジックが、卓巳にとっては苦行そのものだった。自分がどれほどセックスを嫌悪し、女の体を忌み嫌っていたか、卓巳は思い出していた。

そして、ジューデイスの露になったバストに触れた瞬間。卓巳は彼女を突き飛ばし、ウォッシュルームと書かれたドアに飛び込んでいた。どうしてもこれ以上の我慢が出来なかったのだ。彼は洗面台に覆い被さり、縁ふちを掴んで嘔吐を繰り返す。

自尊心を傷つけられたジューデイスは烈火の如く怒った。

『タクミ！ あなたは女を愛せない最低の男ね。この私を馬鹿にし

て、このままで済むとは思わないで!』
そして、思いつく限りの悪態で卓巳を罵り、部屋から出て行ったのだ。

卓巳は万里子との行為で、自分にも男としての欲望があることに気づかされた。最早、それから逃げることは出来ない。だが、その対象がたった一人であることも、今夜思い知ったのだ。

(なんてことだ……万里子以外の女性では、僕は心を解き放つことが出来ないんだ)

理由は判っている。万里子を愛しているから。卓巳には、愛のない行為は不可能なのだ。

独りでは眠ることすら出来ない、女が抱きたくて堪らない……それは……万里子なしでは眠れない、万里子を抱きたくて堪らない。それだけだ、と。

もう、逃げられない。愛することを止められない。愚かな失態を繰り返しても、その都度ひれ伏して、彼女に愛を請うしかないのだ。

「万里子……愛してる……万里子」

洗面台に突っ伏したまま卓巳は泣いていた。

その万里子は無言で部屋を出て行った。当然だろう。これほどの手酷い裏切りに遭い、戻って来るわけがない。赦すつもりも価値もない、万里子はそう思ったに決まっている。

卓巳の体に、絶え間なく嘔吐感が襲い掛かる。ほとんど食事も取っておらず、胃が空っぽなのだ。吐くものなどあるはずがない。だが、ジューデイスに触れた指の心地悪さと罪悪感に、卓巳は胃液まで吐き続けた。体調の悪さも災いして、心も体もボロボロだ。苦しくて、辛くて、いっそのまま死んでしまいたい、卓巳の心が闇

に沈み掛けた　その時だった。

裸の上半身がバスローブに包まれ、震える卓巳の背中を温かい手が擦る。

「大丈夫、大丈夫だから……。ゆっくり息をして、落ち着いたらベツドに横になって下さい。お医者様に来てもらいましょう」

（嘘だ。幻聴だ。彼女が戻るはずがない）

それは万里子の声に聞こえ……。信じられない思いで、卓巳は顔を上げた。

第七章 慈愛 (6) 愛の闇、愛の光

卓巳は万里子のことを怒っている。

ロンドンに来る途中も、来てからも、何度も太一郎との関係は嘘だと伝えたが……。もう信じては貰えないのだ。最後の夜と一緒に過ごすことも出来ず、日本に帰らなければならぬ。

それに、卓巳は万里子の目の前でジューデイスとキスをした。万里子を追い出し、きつとそれ以上のこともしている。どれほど愛していても、そんな卓巳の傍には居られない。

そう思っていたのに……。

「どう、して……だ。僕は君を裏切ったんだぞ。なぜ、優しくするんだ？ ざまあみろ、自業自得だと笑えばいい」

万里子への愛を告げる声は消えそうなほど儚く、彼女の耳には届いてはいなかった。

それでも、打ちのめされた卓巳の姿は、万里子に衝撃を与えたのだ。このまま見過ごすことなど、とても出来そうにない。

「あなたの苦しむ姿は見たくありません。もう、やめて。もう……無理は、なさらないで」

「……どういう意味だ？」

「わたしの気持ちをご存知なのでしょう？ 日本に帰ってまで、しつこくあなたを追い回したりは致しません。ちゃんと、離婚にも同意します。だから……」

「違う！ そんなんじゃない。女が欲しくて引つ張り込んだ。拳げ句がこの様だ。何も出来ないのに……あの女の裸を見ても、下半身はピクリとも反応しない。なのに欲しいんだ、女が抱きたい。こんな人並みでない体で……お笑いだ」

卓巳は冷たい床に座り込み、タイルにもたれ掛かり、乾いた声で笑った。

ほんの数時間前まで、卓巳はブラックタイでパーティの中央に立っていた。社長と呼ばれる彼と、同一人物とはとても思えない。仕事中の卓巳がどれほど冷酷に見えても、万里子はその内側にある少年のような笑顔を知っている。傷つきやすく繊細で、プライドが高い。

愛していると言いながらどうして疑うのか。万里子には不思議であった。それは、本当に愛してはいないからだ。そう言って卓巳を責めた。だが、嫉妬が理性で動かせる感情ではないことを、万里子は今夜知ったのだ。

ジューデイスが抱けなかったことで、卓巳はこれほどまでに傷ついている。真実は少し違うが、そのことは万里子に知りようがない。そして、卓巳の傷を知りながら、万里子は嬉しいのだ。彼が、自分以外の女性の胸に口づけられなかったことを喜んでいる。卓巳が他の女性を抱き、幸福な家庭を作って欲しいと口にしながら……心の中では全く逆のことを願うなんて。

愛は綺麗なだけではない。

光には必ず影があるように、万里子の心にも醜い感情が芽生えていた。だが、それを受け入れなければ、愛を続けることは出来ないのだろう。

そして、その影があるということは……光もそこに必ずある。

万里子はコクンと息を飲み、決意を新たに口を開いた。

「卓巳さん……わたしを……わたしを抱いて。あなたの好きにしてくれて構わないから。卓巳さんの言う通りにします。だから、わたしを抱いてください」

「……ま、りこ……」

卓巳は目を見開いた、まるで、信じられないものでも見るように。名前を呼んだ後は、開いた口も塞がらない。

「でも、お願い。一つだけお願いがあります。愛してるって言うてください。嘘でもいいの、愛してるって……愛されずに抱かれるのは、それだけはイヤだから。今夜だけの嘘でいいから、わたしのことを愛してるって抱いてください！」

万里子も床の上に跪き、卓巳の首に手を回した。万里子の頬を伝った涙が、卓巳の胸を濡らして行く。涙に潤んだ声で、「お願い」と繰り返す万里子に、卓巳の壊れかけた理性が耐え得るはずはなかった。

そのまま、卓巳は奪うようにキスをした。何度も何度も二人は唇を重ね合う。万里子も卓巳の唇からジュースとのキスを拭い去ろうと懸命に応え……。万里子の手が裸の胸に触れた瞬間、卓巳はその部分から全身に炎が燃え広がった。何が違うのか、どんな差があるのか卓巳にも判らない。肌が万里子の指を覚えている。いや、万里子の指だと思うから、全身が悦びに震えるのかも知れない。

万里子の手が背中に回り、卓巳を抱き締める。卓巳も万里子の折れそうな腰に手を添え、抱え込み、大理石の床に押し倒しそうになった。

「待て。待ってくれ。万里子……先にシャワーを浴びてくる。あの女の匂いを消してくるから……」
「いやっ！ 行かないで。離れないで。お願い……傍にいて。あの人の香りならわたしが消してあげる」

そんな風に万里子に言われたのは初めてだった。卓巳は驚きと共に、血が沸騰するような感覚に囚われる。だが、このまま大理石の

上で万里子を裸には出来ない。卓巳は立ち上がると同時に彼女を抱き上げた。

ついさっきまで、体を支えることすらやっとであった。それが……卓巳は自分のどこにそんな力が残っていたのか、不思議でならない。

大股でウォッシュルームを横切り、ベッドルーム直通のドアを卓巳は肩で押し開けた。

「万里子……本当に、僕の言う通りにしてくれるのか？」

万里子の唇は卓巳の首筋にピツタリと付けられている。小さなイエスの返事は甘い吐息となり、卓巳の肌から体内に響き渡った。

そのままベッドに飛び込みたい誘惑を抑え、卓巳は万里子を床に下ろす。彼女の足元に靴はなく、ストッキングだけになっていた。途中で脱げたのだらう。振り向くと、ベッドルームの床に点々と転がっている。

「服を脱いでくれ、自分で……下着もストッキングも……全部だ」

卓巳の声は上ずっていた。

自分で脱がしたい。だが、打ち砕かれた自信を取り戻すには時間がなさ過ぎる。

そんな卓巳の心中を察したのか、万里子は立ち上がり、コートから順に脱いで行った。キャミソールとストッキングを脱ぐと、後は真っ白なレースの二枚だけになる。

ハーフカップのブラジャーは先端が見えるギリギリのデザインだ。形の良いバストを下からすくい上げ、目が眩むような谷間を作り上げていた。下は……Tバックではないが、恐ろしく布地が少ない。全体が薄いレースで出来ているのだらう。純白のせいか、常夜灯の弱い光にも、中心の色づいた部分が浮き上がり……卓巳の想像を掻き立てた。

やがて、純白のレースが足元から外れた瞬間、万里子は生まれたままの姿で卓巳の前に立つ。

それはまるで、ボツティチェリの「ヴィーナスの誕生」を思わせる神々しい姿であった。

卓巳は万里子の身体から目が離せない。同じ乳房であるはずなのに、彼女の胸に覚えるのは吐き気ではなく、愛しさと全身に漲るみなぎ欲情だ。

だが、いつまでも万里子ひとりを裸にはしておけない。卓巳もバスローブを肩から外した。ジューデイスにボタンを外され、だらしなく着崩れしているスラックスのチャックも下ろす。

そして、そのまま一気に全部を脱ぎ捨てたのだ。

卓巳の身体は興奮の極地に達している。だが、下半身はその兆候を示してはおらず……。判ってはいても、卓巳は落胆の思いを隠せずにはいた。

そして、それでも万里子が欲しいのだ。

「万里子……ご覧の通りだ。でも、愛している……おいで」「卓巳さん！」

万里子は迷わず卓巳の胸に飛び込んだ。

第七章 慈愛 (7) 覚醒(前書き)

*全体的に性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。 R 1
5でお願いします。

第七章 慈愛 (7) 覚醒

新婚仕様にデコレーションされたベッドルームが、初めてその用途を果たしていた。空調が整ったはずの室内は甘い吐息で満たされ、暖かさより暑さを覚えるほどだ。

卓巳はこの数日間の苦悩と欲望を解き放ち、思うさま万里子の身体を愛し続けた。万里子もまた同じである。最愛の卓巳の腕の外に、寛げる場所などない。

お互いに、全裸で愛し合ったのは初めての経験だった。

「この間のような真似は絶対にしない。優しくする……触れてもいいかな？」

「ええ……でも、軽蔑しないで」

「何を軽蔑するんだい？」

卓巳は万里子の許しを得て、初めて彼女の大事な場所に触れた。ほんの数日前、強引に指を押し込んだ場所だ。だが、その時とはまるで様子が違っている。まさに蕩けそうなほど熱く……卓巳は集めたばかりの蜂蜜の壺を探してあてた気分だった。

卓巳の好きにしろと言われても、具体的なことは何も経験がない。万里子と抱き合うようになり、さすがに、ベッドの上の所作まで宗に尋ねるわけにはいかず。せめて知識を得るべく、卓巳は様々なマニユアル本を読み漁った。

その結果、女性側の直接的な愛撫により、男性自身のリアクションを望める可能性を知ったのだ。相手がジューデイスのような女性であれば、様々な手段を用いてくれるかも知れない。

それは世の多くの男たちがやっていることだ。浮気、女遊び、一夜の情事……呼び方は何でもいい。ジューデイスはパトロンを捉まえてはステップアップして行くタイプの女性だ。充分なものを与えたら適切に指導してもらえると、浅はかにも思ったのである。

浮気であるなら万里子のいないところでやれ、と宗が居たなら言っただであらう。

だが卓巳にも「本当には出来ないくせに」と言っただけで万里子に対する意地があった。……結果がこれでは、お粗末な話ではあるが。

万里子にそれを望めるだろうか、と考え、すぐに却下する。卓巳には指導も助言も出来ない。命令などもつてのほかだ。

ならばどうすれば、と思った時に、卓巳は万里子の反応を知った。それは彼にとつて新鮮な驚きである。

これまでは、自分一人が悦んでいるのだとばかり思っていた。だが、白いレースの下に隠された場所が、これほどまで卓巳の愛撫に応えてくれていたとは……。

卓巳は思わず、万里子をひどく困らせるような質問をしてしまった。

「万里子……ひよつとして、感じてくれるのか？」

「そ、それは……そんなこと」

その答えは卓巳が触れる部分が教えてくれた。優しく、そうつと全体の形を覚えるかのように指を這わせ続ける。そして往復するうちに、決まった所で万里子の息が荒くなることに気づく。その都度、彼女の太腿に思い切り力が加わり……。

「ま、万里子、手首が締まるんだが」

「じゅめん……なさい」

蚊の鳴くような声で謝るが、内股の力はかなり強い。本気で嫌がっているのではないか、と不安になる。だが、そうではない証拠に、

万里子は卓巳に抱きついてきたのだ。卓巳が探り当てた場所をなぞるたび、万里子は必死で声を押し殺そうとする。その、自然に漏れる微かな声と吐息が、卓巳を心酔させた。

卓巳は声を上げてセックスを楽しむ女性を軽蔑している。

万里子はずっとそう思ってきた。だから、自分もそうだと知られたら嫌われる。卓巳に軽蔑されたくなくて、これまでは必死に声を押し殺してきた。

だが、その部分を知られてしまったら“感じていない”振りなど出来ない。

卓巳は経験や技術的なものばかり気にしているようだが、万里子にとつて最も重要なことは……自分に触れる指が卓巳である、という一点のみ。

あの夜、卓巳は強引に万里子の身体を割ろうとした。シヨックではあった。だが、それも卓巳なのだ。彼の全てが愛しくて堪らない。もし、倒錯的な愛情表現で卓巳に満足を与えられるなら、自分に応じられることは何でもしよう。でも、複数の女性と分かち合うことだけは出来ない。それ以外なら、何でも、彼の望む通りに。万里子が“感じている”ことを知って卓巳が怒り出さないか。今の彼女にはそれだけが心配であった。

だが、当の卓巳は歓喜に震えている。

「……君はこれまでも感じてたのか？　ここがこんな風になっていたのか？　正直に言うんだ。いや、言ってくれ。頼む」

万里子は言葉では答えず、頷いた。

そして、

「ご、めんなさい。お願い……きれいに……ならないで」

二つの瞳に涙を浮かべて、消え入りそうな声だ。

その言葉がなければ、彼女を苦しめているのか、と慌てて卓巳は体を離すところである。

「何を言ってるんだ。嫌いになる訳がない。嬉しいよ、君がこんなに悦んでくれてるなんて……知らなかった。最高に嬉しい」

自分にも女性を悦ばせることが出来る。

それは卓巳の心に俄かに自信を復活させた。我ながらなんと単純なものだろう、と苦笑する。その勢いを借りて、卓巳は万里子の脚の間に身体を添わせた。

「万里子……嫌なら言ってくれ」

「今日は、何でも平気。卓巳さんの……望むままに……」

薄いレース越しでは感じ得なかった秘密の園は、卓巳を柔らかく包む込む。それはフォンデュの中に浸したような感覚だ。奥まで分け入ることは出来なくても、その心地良さは言葉では表し難い。

また、自分の体の下から万里子の切なげな溜息が聞こえた。

「これも……気持ちいいのかな？」

「やだ、いじわる。……卓巳……さんは？」

「最高だ　万里子、愛してる！　君だけだ……君でなきゃダメなんだ！」

可愛らしい万里子の声に後押しされたように、卓巳は動き始めた。これまでより少し強く、すると卓巳の耳にも確かな万里子の声が聞こえてくる。もっと、もっと彼女を感じさせたい。自分に与えられる全てを万里子に。卓巳は何も考えず、その行為に没頭していた。直後、万里子が違う声を上げたのだ。

「あっ！　いやっ……中に……」

万里子の声で卓巳の動きは止まり、彼自身も気がついた。直立とは言い難い。だが、幾分硬度を増した抜き身の刀は、鞘の中に納まるうとしてゐる。

わずかだが、すでに万里子の領域に踏み込みつつあり……。その瞬間、卓巳は千載一遇のチャンスを掴もうと必死になった。

初めてではない、とはいえ、『ただ一度、愚か者の犠牲になっただけ』に過ぎない万里子である。尚更、彼女の身体は侵入者を拒んだ。

愛する卓巳の願いを叶えてやりたくても、無意識で万里子の身体は強張る。

卓巳も、ようやく訪れた奇跡のようなチャンスを逃がしたくない一心で、万里子を労わることを忘れていた。

惜しげもなく愛を注ぎ込んでこそ、万里子は応えてくれるのだ。

卓巳が愛を忘れると、途端に枯渇してしまう。

「い……いたい」

万里子の掠れるような声を聞き、卓巳はハッとした。その顔は、恥ずかしそうに頬を赤く染めた時とは違い、苦痛に歪んでいる。

その二秒後　奇跡の瞬間は卓巳に十五年ぶりの解放感を教え、タイムアップを迎えたのだった。

第七章 慈愛 (8) 不安の欠片

(僕は、なんて真似を……)

悦楽の波が引いた途端、卓巳に後悔が襲い掛かった。

卓巳を許し、優しく労わってくれた万里子を、調子に乗って性の吐け口のような扱いをしたのだ。今度こそ「最低」だと罵られて、見限られても文句は言えない。卓巳は急いで彼女から離れようとした。

「いや、待って！ 傍にいて……。終わってすぐに離れたりしないで。お願い、抱き締めていて……。今夜だけでいいから……。お願いします」

ベッドから下りようとした卓巳の腕に万里子が抱きつく。泣くようにしがみ付かれ、卓巳は慌てて引き返し、万里子を胸に掻き抱いた。

「怒って……。ないのか？ 僕は君を」

「嬉しかった。少しでもわたしの中に……。わたしがもつと慣れていたら……。ちゃんと出来たのに。ごめんなさい」

その言葉に、卓巳は胸が千切れるほどの痛みを覚えた。

ほんの僅かな時間でも、卓巳と一つになれたことを喜んでくれる。最後まで到らなかつたことは決して万里子のせいではないのだ。彼女が詫びる理由など何処にもない。

「万里子、すまない。痛かっただろう？ 辛い思いをさせて……。本当に申し訳ない。嫌なことを思い出したんじゃないのか？ 全て僕の責任だ。許してくれ」

「謝らないで！ 卓巳さん……。大好き……。愛してる」

万里子は卓巳の首に腕を回し抱きついた。卓巳もそれに応える。二人は隙間もないくらい身体を重ね合わせ、お互いの唇を求め合い……。

過去に対する懸念も、未来に待ち受ける不安も、今この時だけは二人の胸から消え去った。ただお互いを想い、肌が触れて、心が絡み合う一瞬。

東の空が白み始める……夜明けが近いことを彼らは感じていた。

くくくくくくくく

朝というには些か遅い時間。

万里子が目を覚ましたのは、けたたましく鳴るドアベルの音であった。

眠ったのは完全に夜が明けた頃だ。それまでの間、二人は片時も離れず愛し合った。卓巳が万里子の領域を侵犯したのはあの一度きりであったが……。でも、卓巳はこの上なく幸せそうだった。そんな卓巳を見るだけで、万里子も無上の喜びを感じる。

今も、卓巳は万里子の横でスヤスヤと眠っている。これほど喧しいのだから、いずれ目覚めるだろうが。ここしばらく、ろくに眠っていないかったはずである。出来る限り卓巳を眠らせてあげたい。

万里子は床にそつと足を下ろした。思いの外、体の節々が痛む。どうしてこんなに、と考えた時……。昨夜、スイートのベッドで行われた様々なことが頭に浮かび、思わず赤面してしまう。

その間もドアベルは鳴り止まない。万里子は雑念を振り払いつつ、ベッドの周囲を見回した。ちょうど、卓巳の脱ぎ捨てたバスローブ

が目に留まる。それを羽織ると、万里子は玄関に向かった。

万里子の応対に、癖のある早口のコックニーが返って来た。どうやら、ロンドン本社の社員らしい。だが、この独特のロンドン英語で捲し立てられると、とても万里子の語学力では追いつけない。

とにかく社長を……と言つのが聞き取れ、『もうしばらくお待ち下さい』とだけ告げて、万里子は卓巳を呼びに戻る。

だが、たった今までベッドの中で眠っていた卓巳がいない。何処に行ったのだろう……と、万里子が思った直後、バスルームのドアが開く音がした。

視線を上げると、そこに卓巳がいた。

頭から水を浴びただけの姿だ。窓から射し込む朝の光が、水滴に反射して眩しい光を放っている。卓巳は腰にバスタオルを巻き、上半身は裸だった。こうして正面から見るのは初めてかもしれない。

彼は筋肉質ではないが細身でもなく……その絶妙なバランスに、万里子は来客も忘れ、見惚れていた。

「どつした？」

「あ……いえ、今まで眠っておられたのに……」

「今にもドアを蹴破りそうな勢いだったじゃないか。イヤでも目が覚めるさ」

卓巳はもう仕事の顔に戻っていた。ほんの数時間前まで、万里子の身体を余すところなく堪能していた男の影はどこにもない。

万里子の中に一瞬で切なさが増かび上がる。

「余程のことがあったようだな」

「す、すみません。早口のコックニーはよく判らなくて……ただ、すぐに社長に取り次いで欲しい、と」

「判った。スーツを用意してくれ」

「……はい……あ」

万里子はクローゼットのほうに足を向けた。だが、先ほどから感じていた違和感が膝まで達し、万里子はバスローブの裾から見えた光景に身体を震わせた。

「万里子、どうしたんだ？」

「い、いえ……なんでも」

俄かに足元から恐怖が這い上がった。万里子の顔は青褪めている。完全ではないにせよ二人は結ばれ、卓巳は万里子の中で最後の瞬間を迎えたのだ。当然の事態とも言えよう。だが、それと同じ感覚を味わった時の絶望は、簡単に忘れ去れるものではなく。

卓巳もすぐにその正体に気が付いた。

万里子の内腿を伝い膝を汚している。それが自分の責任であること、そして、過去の苦しみを呼び覚ましてしまったこと、を。

卓巳は有る限りの誠意と愛情を持って、万里子を抱き寄せた。

「あ……たくみ、さん」

「泣くな。頼むから、今は泣かないでくれ」

万里子の瞳はすでに、決壊しつつある。

「心配しないでくださいね。痛みとかじゃ、全然ないから……。もう、妊娠の心配もないし……。でも、そんな心配がしたかった。ごめんなさい……。卓巳さんになら、どれほど痛くても我慢したのにもう……。わたしは」

何をどう言っても簡単に慰められるとは思えず、卓巳は途方に暮れていた。

相変わらず、玄関からは卓巳を呼ぶ声が聞こえる。おそらく、ロンドン本社の社長を任せているジェームズ・サエキであろう。日系

だが生粋のロンドン生まれロンドン育ちで、日本語は苦手だと聞いている。

戸惑う卓巳の気配を察したのだろう。万里子は自ら体を引いた。そして、笑顔を作るように口を引き結ぶ。

「……ごめんなさい。すぐにスーツを」

「こうは思わないのか？」

唐突に卓巳は口を開き、上ずった声で言葉を続けた。

「僕の テクニックが優れていたから、昨夜、君に苦痛を与えなかったのだ、と」

「……」

万里子は目を見開いた。だがその目は瞬く間に潤んで、予想外にも零れるような笑顔を見せたのだ。

卓巳が本気が冗談か、本音を言えば微妙な辺りだ。だが、万里子の悲しい顔を見ずに済むのなら、この際冗談にして笑ってしまえばいい。

「よくも笑ったな。じゃあ今夜、それを証明して見せよう」

おどけた調子で卓巳は言った。

「では、まだ帰国しないんですね？ わたしはここで、あなたのお帰りを待っていても構わないんですね？」

「何を言ってるんだ？ 問題がなければ三日後にはウェールズだ。」

それまでは市内を…… ああ、続きはとにかく今夜だ」

卓巳は軽く万里子にキスしながら……。

（これで元通りだ。社長の椅子はともかく。僕は、万里子と絶対に別れない！）

だが 伝える言葉が少しだけ足りない。そのことに、卓巳は気づいてはいなかった。

第七章 慈愛 (9) 忍び寄る影

卓巳は行ってしまった。

仕事となると、まるで別人のようだ。でも、それはいつも通りで……万里子の前では、素顔の卓巳に戻ってくれる。

だが、今の万里子にはとても“いつも通り”とは思えなかった。

今夜だけの嘘でいいから、わたしのことを愛してるって抱いてください。

卓巳にそう言って泣いて縋った。

だから、抱いてくれた……愛していると言ってくれたのだ。万里子の耳に、卓巳の愛の言葉は一夜限りの偽りとして届いている。

でも、今夜は一緒にいられる。三日後にはウエールズにも一緒に行けるかも知れない。ひよっとしたら、日本に戻っても卓巳が飽きるまで傍に置いてもらえる可能性も……。

胸の奥にざわめく不安を抱え、卓巳の背中を涙で見送る万里子だった。

くくくくくくくく

卓巳はサエキ社長らの報告を聞くと、すぐにホテルを出てロンドン本社ビルに向った。

ホテル・リッツ・ロンドンは娯楽のウエスト・エンドと呼ばれる地区にある。隣には金融街でロンドンの中心とも言うべきシティがあった。フジワラ・ロンドン本社ビルもその地区に存在する。

トラブルの内容は予想通りであった。ライカー社は申請書類の不備を理由に認可の内定を取り消してきたのだ。虚偽記載の可能性まで指摘され、サエキらは慌てたらしい。

元々、従業員のほとんどが労働者階級のフジワラは、ライカー社からのぞんざいに扱われている。さすがに卓巳に対しては表面上の敬意は払うがそれだけだ。貴族階級のパーティーに招待されることもあるが、どれほど体裁を整えて行っても、爵位の持たぬ外国人と馬鹿にされるのがほとんどであった。

ライカー社の嫌がらせが、単にフォークナーとの確執が理由であるなら、卓巳にとっては織り込み済みだ。慌てるほどのことではない、と考えている。

だが、不確定な要素が一つ……万里子である。

昨夜のパーティーで、サー・ステイブン・ライカーは万里子にかなりの興味を見せていた。

一億ポンドの取引である。私的な女性問題を引っ張り出してくることなどあり得ない。そう自分を納得させようとする卓巳に、ジェイクは調査報告書を差し出した。

『巧妙に問題を摩り替えているようです。女性を泣かせているわけじゃありませんので、裁判沙汰にはなってますせんし。気がついたら娘を愛人として差し出してた、という話も聞きました』

『人道的に許されるのか？ それが英国紳士の本性か？』

卓巳の脳裏には、泣く泣く親元を離れる女性が思い浮かぶ。だが、ジェイクはそれを見事に粉碎してくれた。

『あ、いえ。どうやら、娘は親元を離れたかったようです。舞台女優になりたかった、とか。サーは彼女のパトロンとなり、束の間楽しんで、ブロードウェイに送り出したそうです。今も後援していて、渡米の際には会っているみたいですね。アメリカ妻というヤツです』

か？ 羨ましいことです』

『……』

感心するようにジエイクは報告する。卓巳にすればとても羨ましいとは思えない。だが、世間一般の男にとって、それは羨望に値する生活なのだろう。

やはり、問題は万里子だ。

そんな似非紳士えいせの俗物に目をつけられたのだとすれば、非常に厄介なことになる。念のため、万里子にはライカーから誘いがあっても体調不良で断るよう、と言いつけてきた。

ホテルのフロントにも、外部からの連絡は全て卓巳に報告するよう指示してある。

昨夜、卓巳は万里子を抱いた。

一瞬でも人並みに万里子を抱くことが出来たのだ。無論、とてもセックスを楽しむといったレベルではないが、飛躍的な進歩には違いない。そのことで卓巳が浮かれても、責めるのは酷と言うものだろう。

卓巳は意識をビジネス用に切り替えるため、冷たいシャワーを全身に浴びた。

だが、彼女の腿を伝う昨夜の名残りを目にした瞬間、最愛の女性をついに妻にすることが出来た喜びに、歡喜の声を上げそうになった。だが、同時に万里子にとって忌避すべき男のリストに加わったのではないか、という不安も頭を擡げる。

今は大事な時なのだ。

今度こそ、万里子の想いに応えなければならぬ。失敗は許されない。万里子を失う恐怖と闘って行く覚悟は出来た。実際に彼女を失えば、闘うことすら出来なくなることを知ったからだ。

帰国後の役員会で社長を解任されるかも知れない。

その時は、藤原の家も出なければならぬだろう。だが、万里子は誰にも渡さない。太一郎には譲れないし、実家に帰すわけにもいかない。ましてや、ライカーのような男に指一本触れさせるものかも、何らかの取り引き条件に万里子の名前でも挙げようものなら、契約の反故も辞さない卓巳であつた。

くわくわくわくわく

そして卓巳の予想は的中する。

その頃、なんと万里子はすでに、ライカーと再会していたのだつた。

午後過ぎにグリーンパーク・スイートに一本の電話があつた。相手はパーティーで挨拶をした元在日英国大使夫人キャロライン・ストラウドからのものだった。

万里子はミセス・ストラウドから、プリムローズ・ヒルの自宅に誘われる。断わりの意味も含めて、『主人に聞いてからお返事を』と返したが、『そのご主人のお役に立てるかも知れないわ』と言われ、心が動いた。

ミセス・ストラウドは丁寧なことに、迎いの車まで万里子に差し向けたのである。

(相手は女性よ、サー・ステイブンは関係ないわ。パーティーに招いた外交官夫人なら、身元も確かですもの。断わるのは失礼にあたるのかも知れない……)

卓巳の携帯は電源が切つてあつた。本社にも電話したのだ。だが、会議中と言われ取り次いで貰えない。万里子は卓巳と連絡を取るこ

とを諦めた。

そして、ミセス・ストラウドの寄越した車に乗ってしまったのだ。

第七章 慈愛 (10) 高貴なる誘惑

ウエスト・エンドから北に車で約三十分走ったところに、プリムローズ・ヒルと呼ばれる小高い丘があった。そこからはウエスト・エンド方面もシティ方面も一望出来る。なだらかな景色の、非常に美しい広場だ。

ミセス・キャロライン・ストラウドの住むセント・ジョンズ・ウツドは、その丘の西側に位置する。ヴィクトリア調のテラスハウスが建ち並び、モダン瀟洒な高級住宅街であった。

『ようこそ、ミセス・フジワラ。突然の招待でごめんなさいね』

ミセス・ストラウドは四十代半ばであろうか、淡い色のブロンドとグレーの瞳を持つ背の高い女性であった。ほっそりした体つきで、すでに独立した息子が二人いると言う。ひよつとしたら、万里子の想像より年配なのかも知れない。

『お招きありがとうございます。お電話頂いた後に、ちょうどピカデリーサーカスを通るニューイヤーパレードが見物出来て幸運でした』

日本のお正月に比べて、門松などに類した正月飾りは何も無い。街のあちこちにはまだ、クリスマスツリーが飾られている。テレビ番組も正月特番一色の日本と違い、至って普通だ。

ただ、ニューイヤーのカウントダウンが異様に盛り上がるせいだろうか。元日は家で過ごす人が多いと聞く。大手・老舗と呼ばれる店でも午後からの営業が少なくない。そのためだろう、元旦の街はやけに観光客ばかり目立っていた。

ミセス・ストラウドと呼びかける万里子に、『キャロラインと呼

んでちょうだい』と言われる。

『では、わたしもマリコと』

ガーデニングの本場と言われるだけに、とくに裏庭は見事にコーデイナートされていた。だが、さすがにこの時期、庭でお茶を飲むのは寒過ぎる。暖かい室内でお茶を頂きながら、六月が見ごろだという薔薇と、彼女が好きな日本料理の話に終始していた。

元日の朝から卓巳は会社に呼び出された。

そのまま何の連絡もない。もちろん知ったところで万里子に出来ることはないだろう。だが、何が起きているのか、知れるものなら知っておきたい。そう考え、取るものも取り敢えずやって来てしまったが……。

かと言って、自分の都合でミセス・ストラウドを急かすことは躊躇われる。万里子は根気よく彼女の話に付き合っていたのだった。

『マリコ、あなたは本当に聞いた通りの方ね』

ふいにミセス・ストラウドは相好を崩し、万里子に親密そうに話しかけた。

『わたしの何を聞かれたのでしょうか？ 悪い話でないといいいのですけれど』

『優しくして温かく、人の気持ちを思いやれる女性……だったかしら』
万里子は驚き、目を丸くした。

『まあ！ キャロライン、わたしはそんな素晴らしい人間ではありません。もちろん、そんな風になりたいとは思いますが。でも、どなたがそんなことを？』

『私ですよ、マリコ。 昨夜は楽しいひと時をありがとうございました』

万里子が振り向いた時、扉を開けて立っていたのはサー・ステイブン・ライカーであった。

『どうしてもあなたに会いたくて……こんな真似をしてみました』

た。どうか私を許してください』

万里子は息を呑んだ。

卓巳が絶対に会っては駄目だ、と言っていた男に会ってしまった。どうしてこんな事態になってしまったのか……万里子には訳が判らない。

その時、テーブルを挟んだ向かいの席でミセス・ストラウドが立ち上がった。つられて万里子も席を立つ。

『遅かったのですね、ステイブン。マリコをこんなに待たせてはいけないわ』

『申し訳ありません。でも、マリコは素敵な女性でしょう？』

『ええ、それはね』

ライカーはミセス・ストラウドの隣に立ち、右頬にキスした後、万里子を見つめて微笑んだ。

髪の色に合わせた濃いグレーのスーツは、一つ釦のクラシカルデザインだ。およそ、サヴィルロウ通りにある一流テーラーのオーダーメイドであろう。

手の動き一つとっても、ライカーは非常に上品で優雅に見える。流れるような動作は、やはり慣れであるうか。そして当然のように万里子の右手を取り、甲に口づけた。その一瞬、右手に添えた彼の指が、手の平を軽くなぞる。万里子は背筋がゾクツとして、彼の唇が離れるや否や、手を引つ込めた。

『あ、あの……どういうことでしょうか？ わたしにはさっぱり判りません。キャロラインはサー・ステイブンとお知り合いなのでですか？』

『ステイブンは私の弟です。十歳以上離れていて、母親も違うのであまり似てはいませんけれど』

『それは……でも、どうしてこんな……どうしてわたしを』

騙したのか？ と尋ねるのは早計過ぎると思い、万里子は言葉を濁した。

『ああ、マリコ、姉を責めるのは止めてください。私が頼んだのです。ぜひもう一度、あなたと逢い、楽しい時間を過ごしたかった。タクミは、君の前から私を消し去りたかったようだがね』

ライカーの瞳をジッと見つめていると、吸い寄せられるような錯覚に陥る。それはまるで深い沼の底に引きずり込まれる感覚だ。万里子は慌てて視線を逸らせる。

だが、ライカーは万里子から目を離さない。その瞳に、初対面の太一郎に感じたような猥褻わいせつさはなく、不快感もなかった。ただ……零れたワインが絨毯に染み込んでいく様な感覚。甘く濃厚な香りを放ち、万里子の体に侵食してくる。

それはまるで性的感覚を享受しているようで、万里子はその場から逃げ出したくなった。

『はじめに申し上げておきます。わたしは理由は存じません。ですが、夫からサーと個人的に会うことを止められております。どうか、夫の許可を得てから、わたしをお訪ね下さい。では、失礼致します』
万里子は再び席に着くつもりがないことを、ライカーに意思表示した。

（キャロラインに挨拶を済ませたら、すぐに御暇おいとましよう。失礼ではないはずよ）

そして、ミセス・ストラウドのほうを向いた万里子に、ライカーは初めて攻撃的な言葉を投げ掛けた。

『マリコ！ 君はタクミの“所有物”かい？』

卓巳は万里子のことを、日本人女性の平均レベル、とライカーに

思わせようとした。だが、彼は本物を見抜く目を持っていた、こと女性に関しては。

ライカーは万里子のことを、ロンドン社交界にデビューしても見劣りしない教養と知性、そして容姿の持ち主だと判断している。おそらくは、日本国内における実家の格式も決して低くはないはずだ。加えて、そういう女性は高い自尊心を持っている。こういう聞かれ方をすれば、向きになって否定するだろう。その時に言うのだ『だったら証明して見せてくれ』と。
しかし……。

『サー・ステイブン。夫の心に副^そうことは、わたしの希望であり喜びです』

漆黒の瞳は一筋の動揺も見せず、真正面からライカーを捕えたのであった。

第七章 慈愛 (11) キスの時間(前書き)

*後半に性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。 R15
でお願いします。

第七章 慈愛 (11) キスの時間

それは、あまりに予想外の答えであった。

『それでは、わたしはこれで失礼致します。キャロライン、美味しいお茶をありがとう。お話も楽しかったです。今度はぜひ、素敵なお庭も見せてくださいね』

ライカーは一言もなく、万里子を見送った。

万里子がタクシーに乗るのを見届け、ミセス・ストラウドがリビングに戻って来る。彼女は静かに窓辺に立つ弟に声を掛けた。

『ステイブン、もう、よろしいでしょう？』

『よろしくはない。だが……どうやら彼女は、これまでの女性とは違うようだ。人妻は、それもタクミのような男の妻なら、夫に退屈してアバンチュールを望んでいると思っていたんですがね』

ライカーは苦笑混じりに答える。

彼の周囲にいる人妻とはそういう人種であった。とくに金や身分があるほどその傾向が強い。新婚とはいえ簡単に切り崩せると思っていた。

『ロマンティックな出会いと、情熱的な愛の言葉では通用しない、か』

『そのチャンスも貰えなかったようね。マリコは無理よ。心から夫を愛して尊敬しているわ。あなたに与えて欲しいものは何もないみたい。諦めるべきね』

ミセス・ストラウドは、いつまでたっても遊び心の抜けない弟を諭すように言う。

『ヤマトナデシコ、か。余計に欲しくなった。なければ作るまでだ』
『ステイブン！』

彼は自分の張った罟をすり抜けて行った獲物に、興奮と期待を感じていた。

くくくくくくくく

ホテルに戻った万里子はフロントからメッセージを受け取る。卓巳からだ。

続きは今夜……と言っていたが、今夜はホテルに戻れない、という連絡だった。

昨日はあんなに具合が悪かった。今日は、ちゃんと食事を取っているだろうか。今夜は会社とはいえ、ちゃんと眠れるベッドがあればいいのだけど……そんな心配ばかりしてしまう。

そして、

ストラウド邸は楽しかったかい？

卓巳に昼間のことをなんと話そうと悩んでいた万里子だったが……。

どうやら卓巳は、相変わらず全てをお見通しのようだ。自分から説明せずに済み、そして卓巳が怒っていなくてホッと息をつく万里子だった。

この時、卓巳がミセス・ストラウドとライカーの関係を知らないとは、思ってもみなかったのである。

翌朝、万里子は着替えを持って、シティのフジワラ本社を訪れようと考えていた。

しかし、万里子が行動に移す前に、卓巳のぼうが着替えと朝食に

戻って来たのである。

卓巳は大変そうではあったが、ほんの二三日前までの病的な状態とはまるで印象が違った。瞳に力が戻っている。真っ直ぐに万里子を見つめて、部屋に入るなり抱き締めてくれた。

「一人にして本当に済まない。この埋め合わせは必ずするから」
そう言うと、すぐさまシャワーに消えた。

そんな卓巳の背中を、万里子は切ないながらもうつとりと見送る。しばらくして、ハタと気づいたのだ。妻として新しい着替えを準備しなければならぬ、と。

クローゼットに仕舞った分から、新品のものを取り出し、万里子はバスルームに持って行く。

このスイートは、バスタブのあるシャワースペースと洗面台の間にはガラスの仕切りがあるだけだ。バスタブが丸見えで、万里子にすれば非常に気恥ずかしい。だが、国やホテルによって見解に違いがあるのだろう。

万里子はなるべく卓巳のほうを見ないように、ここに置きます、と声を掛ける。その時、卓巳が浴室から出てきたのだ。

(卓巳さん！ は、早すぎます)

卓巳のお風呂タイムは、のんびりバスタブに浸かることもなく上がってくる。日本でも同じなので、どうやら忙しい彼の癖になっているようだ。

万里子は、いきなり全裸の卓巳と向き合う形になってしまった。目のやり場に困ってしまう。夫婦とはいえ、一昨日の夜に結ばれたばかりである。それも、かなり微妙な形で……。昨日の朝は、半裸の卓巳にすら、うるたえてしまった。それが今は……。慌てて目を逸らし、万里子は出て行くこととする。

「僕の体は見るのも嫌か？ 見劣りしないように鍛えているつもり
なんだけどね。情けなくぶら下がってるコイツのせいで台無しかな
……」

卓巳は別段隠す素振りもない。だが、どこか寂しそうだ。

「そんなこと……情けなくなんかありません！ とつても素敵でし
た。あの……力強くて。いえ、その……気持ちよかつ……あ、いえ、
わたしは。あの……えっと」

卓巳との夜がいかにか素晴らかったか、言葉にしようとするればする
ほど万里子は恥ずかしい。

「ほんとうに、わたしは嬉しくて……」

卓巳は真つ赤になって俯く万里子を見ているのが堪らなく嬉しか
った。一時間以内に戻らなければならぬのを、忘れそうになるほ
ど……。

卓巳は濡れた体のまま万里子に近寄り、胸に引き寄せた。

「ありがとう……キスの時間くらいはあるかな」

「卓巳……さん」

目を閉じた万里子の唇を、卓巳は奪った。そして、キスだけ、と
言いつつ卓巳の手は万里子の胸元に伸びて行く。

今朝の万里子は、オフホワイトのニットのワンピースだ。ハイネ
ックで飾りは何もない。シルクとカシミアの素材はとも肌触りが
良く、柔らかい光沢を放っていた。そして見事に浮き上がった体の
線^{ライン} 卓巳は触れずにはいられなくなる。

万里子の身体を壁に押し付け、頬や耳朶に唇を這わした。喘ぐよ
うな吐息を聴覚に捉え、卓巳の行為はより一層エスカレートする。

ニットの裾から太腿をなぞりたくし上げていく。その瞬間、万里

子の声がウオツシユルームに響いた。

「万里子……もう感じてるのか？ ひよっとして濡れてる？」

「そ、そんなことない、です。わたし、そんな」

卓巳の言葉に、万里子は反射的に腰を引こうとする。そんな彼女をグツと体で押さえ込み、

「じゃあ、確かめてみてもいいかい？」

言いながら、卓巳の指はショーツを引き下ろそうとする。

「あつ！ ちよつと待って……あの……ダメ、なの、わたし」

二人の視線が絡み合い、見る間に取り巻く空気すら熱く甘く濃度を変える。万里子の全身から、蒸せるような官能の香りが立ち昇り、卓巳の思考を麻痺させた。

「万里子……それって、どういう意味かな？」

卓巳はわざとらしく、下着の上から万里子の腰やお尻、そして下腹部を撫で擦った。

「今は……朝だから……それに、こんな明るいところでなんて」

「朝からそんなエッチな気分にはなっていないってこと？ それとも、明るい場所で確認されたら困るくらい……感じてるってこと？」

卓巳の声も指もエスカレートするばかりだ。彼自身の息も荒くなるほどに。

「言っでごらん、万里子。それとも脱がして、僕の中で確認してもいい？」

「ダメ、待って……ダメなの……感じてるの。恥ずかしいから……お願い、もう許して」

「万里子……君は可愛すぎる。君にもっと素晴らしいものを教えてやりたい。僕を許してくれ」

卓巳は膝が崩れそうになる万里子を支え……彼の指は苔の中に潜り込んだ。

第七章 慈愛 (12) 薬指の誓い

(……卓巳さんのいじわる)

髪は濡れたまま、万里子はベッドに転がっていた。全身から気だるさが抜けない。

卓巳に言われた通り、シャワーを浴びたけれど……目を閉じると、卓巳の唇や指の感触が甦ってくる。下腹部の熱くなる感触に、万里子は太腿をすり合わせた。

その瞬間、初めての経験に万里子は力一杯卓巳に抱きついた。卓巳の肩口に爪痕が残るほど。万里子は小刻みに痙攣を繰り返し、その後は、とても独りでは立っていられなかった。

万里子は荒い息で卓巳にもたれ掛かり……。
そんな彼女の髪を撫でながら、卓巳はからかうように口にする。

「達くのは初めてだろう？ どんな気分だい？」

「あっ……わたし……」

万里子の頭の中は一瞬で真っ白になり、何もなくなってしまうた。卓巳の前で、しかも指で……。万里子は恥ずかしくて身の置き場がない。

でも、卓巳から離れたたくとも膝が震えるのだ。それに、身体のうちこちにも余韻が残っていた。

そんな万里子を卓巳は愛しそうに見下ろしている。

そして、苦笑を浮かべつつ、軽いキスを繰り返した。

「可愛かったよ、万里子。そんなに恥ずかしがらないでくれ。僕
のときはいつも見ているだろう？　これでおあいこだ」

卓巳のあまりに明るい口調に万里子は戸惑っていた。

なぜなら、二人は帰国後に離婚が決まっているはずである。もち
ろん、万里子は別れたくない。でも卓巳は？　卓巳はどう考えてい
るのだろうか？

「こんな……こんな風にされたら……わたし、離れたくなくなる」

「ごめんごめん、やり過ぎたかな？　もっと傍にいたいけど」

「違うの。そうじゃなくて……わたしずっとあなたと」

その時、卓巳の携帯が鳴った。

「　悪い。朝食を取りながら、報告を聞くことになった。一緒に
食べられそうにない。でも、夜には必ず戻るようにするから」

万里子から離れ、卓巳は着替え始める。

「君はゆつくりシャワーを浴びて、身体の火照りを冷ましておいで。
今日は一日、男の前に出るんじゃないぞ。その潤んだ瞳で見つめら
れたら……どんな男も君に襲い掛かるだろう。危険な目に遭いたく
なければ、僕の帰りをおとなしく待ってるんだ。観光は僕が必ず連
れて行くから。いいね」

卓巳はくどいくらい念を押し、ウォッシュルームを出て行く。

だが、万里子は熱くなる身体とは逆に、心は冷える一方だった。

卓巳は万里子の身体を気に入っただけかも知れない。いつまで、
何処まで抱くつもりだろう。確かに、万里子が構わないと言っ
たんだことだ。だが、愛のない結婚より、愛のないセックスにほう
が罪深い気がする。

卓巳に抱かれない。

でもそれは、卓巳の全てが欲しい。人生のほんの一瞬ではなく……
卓巳の全てを知り、万里子の全てを望んで欲しいのだ。
万里子は卓巳と愛を交わす最中、四年前の悪夢を思い出すことも
なくなつた。

どうして、偽りの愛の言葉をねだってしまったのだろう。

カチャ。

万里子の視界が涙に滲んだ時、出掛けたはずの卓巳が戻ってきた
のである。

「どうした、万里子？ 僕は君に酷いことをしたのか？ 嫌なことを
したなら謝る。本当に済まない」

ずっと同じ壁にもたれ掛かり佇む万里子を見つけ、卓巳は不安を
覚えて駆け寄つた。

「ち、がうの。そうじゃないから。心配しないで……。大丈夫だから、
お仕事に行つて」

万里子は精一杯微笑み返そうとするが、声はどうしても震えてい
た。

「ああ、判っている。でも、上着のポケットに入れてるのを思い出
してね。これが君の指にないと、僕は安心出来ないんだ」

そう言つて、卓巳は万里子の左手を取り、その薬指に結婚指輪を
押し込んだ。

それはロンドンに来てから買った間に合わせの指輪ではなく、二
人が愛を誓った時の結婚式で嵌めたもの……。

「二度と外さないでくれ。愛してるよ、万里子」

万里子はベッドに横たわつたまま、左手に煌くプラチナの指輪を
うつとりと眺めた。

結局あの後、催促の電話が掛かるまで、卓巳は万里子を抱き締め
てキスを続けたのだ。卓巳が強く吸い上げ、軽く歯を立てた下唇が
むず痒い。触れると少し腫れていて……。

万里子が思い出した瞬間、肌に巻きつくシルクのシートが、卓巳
の舌先を彷彿とさせた。

(もっ……卓巳さんの馬鹿)

これで卓巳の仕事が無事に終われば、後半はきつと素敵なハネム
ンになる。

万里子は結婚指輪に唇を寄せたまま、浅い眠りに引き込まれた。

くくくくくくくく

午後三時を回った頃、ガーデンスイートの電話が鳴る。フロント
から来客を告げるものだった。

相手はなんと、サー・ステイブン・ライカー。

万里子は卓巳に言われた通り、

『本日は気分がすぐれないので、何方とも会うつもりはございませ
ん。恐れ入りますが、お引取り願えますようお願い下さい』

そうフロントに伝言を頼んだのであった。

その一時間後……ドアベルの音が室内に響き渡る。

来客の予定などない。卓巳なら鍵を開けて入ってくるはずだ。不
思議に思いつつ応対すると、ドアの外から支配人の声が返って来た。

『お体の具合が悪いと伺いました。往診を願われたとのことで、お
医者さまがお越しになられております』

万里子にはまるで心当たりがない。

第一、外部から往診など頼まなくとも、リッツにはホテルドクターが常駐しているのだ。

『それは……何かの間違いだと思います。わたしは往診などお願いしておりません』

万里子はドアを閉じたまま診察を拒否した。

しかし、ドアの外から新たな声が聞こえ、万里子は驚愕する。

『失礼……ステイブンです。ロンドンの名医をお連れしました。ぜひ診察を受けて下さい』

建前ではなく、ライカーは本当に医者を連れて来たのだ。

それもかなり権威のある医者らしく、ホテルの支配人も恐縮している。万里子もそのまま門前払いというわけにもいかず……。

だが、医者と共に部屋に入ろうとするライカーを万里子を制した。『サー・ステイブン、例え支配人やドクターと一緒にでも部屋に入られるのは困ります』

称号の力が財力が、万里子には判らない。だが、支配人も逆らえない様子だ。

『確かに。では“パーム・コート”でお待ちしましょう。ちょうどアフタヌーンティの時間だ』

リッツのアフタヌーンティは観光客の人気である。三カ月前に予約があるはずだ。だが、ライカーには関係のないことらしい。

『判りました。お話は伺います』

そう言わざるを得ない万里子だった。

第七章 慈愛 (13) 困惑のティータイム

『やあ、マリコ。具合は良くなつたかな?』

“パーム・コート”は一階のロビーとメインダイニングの間にある。

目を見張るほどの豪華絢爛なシャンデリアの下に、真っ白いテーブルクロスが掛けられた円形テーブルが並んでいた。ピアノの生演奏がバツクに流れ、食器は全て最高級のロイヤル・ウースターだ。

万里子は、シッティングルームで形ばかりの診察を受けた後、“疲労”との名目でビタミン剤の処方箋を渡された。

『おかげさまで……過分なお心遣い恐れ入ります』

『そんな警戒せずに。もっと肩の力を抜きたまえ。こんな場所で君を襲つたりはしないさ』

『別にそういつつもりでは……』

ライカーはダージリントイを頼み、万里子はアッサムを選んだ。

テーブルにセットされた三段トレイは 下から、スモークサーモンやハムなどのサンドイッチが数種類、真ん中にはレーズンとアップルのスコーン、最上段に数種のリッツ・オリジナルケーキという、トラディショナルアフタヌーンティコースであった。

本当なら今日のもっと早い時間、卓巳と二人で来るつもりで予約を入れていたのだ。

楽しみにしていたアフタヌーンティも、目に前に座る男性が卓巳でなければ意味が無い。万里子本人も無意識のうちに、ため息が零れてしまう。

『私が一緒では退屈そうだね』

『いえ、そういう訳では。ただ、わたしにお話がございましたら、早めにお聞かせ願いたいと思います』

『……フーン』

ライカーは万里子の顔をジッと見ていたが、何か気づいたらしい。彼はフツと口角を上げ笑った。

『タクミは戻って来て夫の務めを果たしているようだ』

『それは……どういう意味でしょうか？』

万里子は怪訝そうな声で尋ねる。

ライカーはゆったりとした動作でスコーンを取ると、クロテッドクリームを塗り、万里子のプレートに置いた。

『リッツご自慢のクリームだよ、女性に大人気だ。……ああ、そうだ。髪は下ろしたほうがいい。黒く美しい髪は魅力的だし、キスマークも隠してくれる』

万里子はハツとして首筋を押さえた。慌ててバレッタを外し、髪を下ろす。

恥ずかしさを隠すため、万里子は目の前にあるトレイに手を伸ばした。アフタヌーンティでは下から頂くのが正式な作法だ。まずは、小さめにカットされたフィンガーサンドイッチを取る。

『タクミはさすがだ。私の挑発をかわして、よく頑張っている』

万里子は一瞬、聞き違いかと思った。

『挑発……と仰いました？ それは』

『なんだ、何も聞いてないのかい？ 書類の不備を指摘して、正式調印に待ったを掛けているのは私なんだよ。知らなかった？』

だから卓巳はライカーに会うなと言ったのだろうか？

だが、「挑発」という単語は穏やかではない。

『どんな不備かは存じませんが、卓巳さんが解決してくれると信じています』

『君も解決に一役買ってはどうだろうか？』

『わたしは……お勤めをしたこともない学生なので、卓巳さんのお役には立てないかと』

『そうそう、君は今年で二十三歳なんだね。もっと若く見える。“幼い”ではなくて、“純粹”で“清らか”だと言いたいんだ。ああ、すまない。言い忘れていた。君は見る度に美しくなる。東洋の神秘だ』

『あ、ありがとう……ごじます』

こういった贅辞には慣れていない万里子は、気の利いた返事が咄嗟に思い浮かばない。

日本でも万里子は年齢以上に見られたことがない。実年齢より上に見られる卓巳とでは、十歳以上離れていると思われることもある。そのため、結婚後は懸命に卓巳に合わせて、大人の女を意識した服装を選ぶのだが……。

実は、卓巳があまりいい顔をしない。「君には似合わない」とけんもほろろだ。卓巳は、余計なことは言うくせに、大事なことに口数の少なくなる男であった。

万里子は肉感的でもなければスレンダーでもない。無個性な自分に魅力のなさを感じ、万里子は自信を喪失気味だ。

『タクミは君を籠かごの鳥にしておきたいらしい。だから、仕事のことも話さない。君が自信を持って羽ばたくのが怖いんだろうな』

言い終えると、ライカーはダージリンをストレートで口に運ぶ。

卓巳を貶された気がして、万里子は気色ばんだ。

『卓巳さんは責任感が強いんです。わたしを守って下さるおつもり

なんです。それに……何度も言うようですが、素人のわたしがお役に立てることなど」

「では、書類の不備はあらかじめ見逃したものだ……と言ったらどうする？ しかもそれは次々と出てくる。タクミは様々な手を打つだろうが……この国において、私が外国人に負けることはあり得ない。特に、フォークナーの件だけではなくったからね」

万里子にはライカーの言葉の意味が半分も判らない。いや、頭の中で訳した内容が理解不能なのだ。

「サー・ステイブソン、それは……わたしには初めから契約の意思がなかった、と聞こえるのですが」

「とんでもない。認可に伴う責任は我が社に掛かってくる。充分に調査したうえで、自国に有利な条件で契約するつもりだった。だが今は、例え不利になっても私の希望が叶えば契約する」

「……」

万里子は益々判らなくなる。

「マリコ、君はタクミの何処に惹かれたのかな？」

「サー！ 契約の話と個人的な話を一緒にしようとなさらないで下さい。全く関係のないことです！」

「大いにある！ 私はタクミ以上のものを君に与えられる。君が望めばどんなものでも。マリコ。正直に言おう。私は君に恋をした。君が欲しい。タクミと別れて、この国に残り私の恋人になつて欲しい」

開いた口が塞がらないとはこのことだろう。万里子は声も出ない。そのことをライカーはどう思ったのか、更に言葉を続ける。

「ただ二つだけ、君に上げられないものがある。それは妻の座と子供だ。私たち夫婦は、公式の席以外ではほとんど会わない。住んで

いる屋敷も別だ。彼女には結婚前から若い愛人がいて、こちらに干渉してくることはない。

この二つ以外なら、私は持てる全てを君に捧げよう。君の美しさはダイヤモンドの原石だ。磨けば磨くほど美しく輝く。そんな地味なファッションで、君の素晴らしさを隠しておこうとするタクミの神経が判らない。

ああ、そうだ！ 今度パリに行こう。君には最新のクチュールが相応しい。私なら、最高のステージで君をエスコートして見せよう』

万里子はライカーの演説に呆気に取られていた。すぐ後ろに人が立ったことも気づかぬほど……。

カッソ。

『サー・ステイブソ。あなたが約束したのはこの私で、妻ではないはずだ。しかも、とうに時間は過ぎていく』

卓巳の声はあからさまな怒りを滾たぎらせていた。

第七章 慈愛 (13) 困惑のティータイム(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

リッツ・ロンドンをはじめ様々な固有名詞が出てまいります。

基本的に全て架空のもののご判断下さい、実在のものとは一切関係はございません。

作法や様式につきましても、可能な限り調べておりますが完全ではないかも知れません。

雰囲気は伝わるように心掛けて書いております。

その点ご了承の上、お読み頂けたら嬉しいです(笑)

引き続き、よろしくお願い致しますm(____)m

第七章 慈愛 (14) 君は僕が守る

ライカーは逆に、待ち侘びた友人に向けるような笑顔を見せ、立ち上がった。

卓巳に歩み寄り、肩を叩きながら手を差し出す。

『やあ、タクミ。君が来るのを待っていたよ。私は直接マリコにお願いすることにしたんだ。君に頼んでも少しも話が進まないのね』

「万里子、今日は部屋から出るなど言っただけだ。部屋に戻りなさい」

卓巳は恐ろしいほど高圧的な視線をライカーに向け、握手を無視した。そして、ライカーと同時に立ち上がった万里子に、日本語で命令する。卓巳は怒りの波動を漂わせる以外は完全に無表情だ。その思惑を誰にも読ませない。

しかしこの時、さすがにライカーから笑顔が消えた。

卓巳の無礼極まりない行為に、口を固く閉じ、鼻に皺を寄せて卓巳を睨んでいる。

「ごめんなさい。卓巳さん、わたし……」

『ほら、これだ！タクミは君の話も聞かない。自分の気持ちを押し付けるだけだ。マリコ、命令されるだけで君は幸せになれるのかい？』

ライカーの横やりに卓巳も黙ってはいない。

『それは私たち夫婦の問題です。あなたには無関係だ』「万里子、部屋に戻るんだ」

『私も彼女に聞いているんだ。マリコ、私は君に鎖は付けられない。君はもっと自由に広い世界を知るべきだ。自分の美しさや魅力を知って、君には本当の価値を知る権利がある』

ライカーが一步踏み出し、万里子の手を取った瞬間、卓巳は奪い返した。そのまま、万里子を自分の腕の中に引き寄せる。

『万里子は私の妻だ！ サー、私は妻を英国貴族の愛人に売りに来たわけではない。商談はお終いだ。お引取り願おう』

卓巳は比較的大きめの声でそう宣言した。

周囲のテーブル客たちも視線を向け始める。ブラックタイで正装した給仕も、トレイを抱えたまま通路で立ち往生していた。この由緒あるリッツのパーム・コートで、滅多に遭遇しないトラブルだろう。

『いいのかい？ 認可が下りなければ開発計画は頓挫する。外国人の君たちには必要不可欠なものだ。それを君からご破算にすれば、フォークナーから莫大な違約金が請求されるはずだ。フジワラは英国から撤退を余儀なくされ、タクミは会社に多大な損害を与えた“無能な経営者”と呼ばれる』

『いい加減にして下さい！』

万里子は卓巳から離れ、一人で立つとライカーに向かって言い放った。

『サー、あなたは誤解しています。わたしはあなたが仰るような女性ではありません。それに……わたしは藤原卓巳の妻ですが、あなたから、彼の所有物として扱われることは不愉快です。』

失礼します』

万里子は日本風に頭を下げる。そして卓巳の腕を取り、エレベーターに向かって歩き出した。

ライカーは独り、パームコートに取り残されたのである。

くくくくくく

「なぜ会った？ それも二人つきりで」
入り口の扉を開け、人目が無くなるなり、卓巳は万里子に怒鳴りつける。

万里子は必死で電話が掛かったことから卓巳に説明した。

「……そうしたら、本物のドクターまで連れてきて」
「無視すればいい！」

「部屋の前まで、それに支配人も一緒だったんです！ 無視したら、倒れてるんじゃないか、って中に入ってくるかも知れないでしょう？」

「君が……逢いたかつたんじゃないのか？」

「何のために？ どうして、わたしが彼に会わなきゃならないんですか？」

「聞いたよ。ミセス・ストラウドは……奴のあの姉らしいな」

その言葉に、万里子は卓巳が全てを知っていたわけじゃなかったことに気づいた。

「……ご存知なかつたんですか？」

「奴は狙った獲物は逃がさないんだそうだ。認可が下り、開発が始まれば最終的には奴の会社にも一億ポンドからの収益が上がるはずだ。その取引を棒に振ってでも、君を欲しがっている。」

ライカーは鼻につく自信家だが、伯爵家の養子に入ったことで桁外れの資産と権力を持つ男だ。すぐに自信を失って、迷い始める僕とは大違いだな」

卓巳は自虐的な笑みを浮かべた。

万里子の胸に一気に不安が押し寄せる。莫大な違約金というのは

本当だろうか？ 本当に万里子が原因で契約が流れるのだろうか？
そうなら卓巳の立場はどうなるのか。仕事で失敗する。そんな卓巳の姿を想像したこともなかった。日本のマスコミは、卓巳は天才で右に並ぶ者などいない、そう書きたてたはずだ。ライカールも「タクミはさすがだ」と認めていた。だが……「この国では負けない」とも言っていた。

「卓巳さん……わたし、サーの言う通りにしないといけないの？
そうしないと、あなたが困るの？」

いつもと違う、どこか投げやりな卓巳の姿に、万里子は涙が浮かんできた。

「何を馬鹿なことを……」

「いやっ！ 行きたくない、絶対にイヤ。でも、怖い。無理矢理、連れて行かれそうで……怖い」

万里子は、逃げても逃げても追い詰められ、ついには背後から伸びる手に捕らえられる恐怖に身震いした。逃げられないのかも知れない。それに、ライカールの目的が万里子だけなら……自分のせいで卓巳を巻き込んでしまう。

やっと、薬指に結婚指輪が戻ってきたのに……。

万里子はそんな思いに打ちのめされそうになった。

「大丈夫だ。万里子、君は僕が守る。奴には指一本触れさせない。絶対だ」

万里子をしつかりと抱き締め、卓巳は言った。

そのまま二人は見つめ合い……唇が近づく。アッサムの香りのするミルクテイ味のキスを卓巳が堪能した頃、ようやくそこがまだ内廊下であることに気がついた。

二人は目を合わせて軽く笑うと、卓巳は万里子を抱き上げ……ベツドルームへと直行したのである。

くわくわくわくわく

翌日、卓巳は不安がる万里子を気遣い、シテイの本社に行くことを止めた。スイートに関係者を呼びつけ、そこから指揮を執る。

部屋に会社関係者が出入りすることになり、万里子はエキストラ・ベッドルームに移った。

だがそのせいで、万里子にもトラブルの解決が順調に進んでないことが判ってしまう。

社長室兼会議室のようなシッティングルームから、たまに卓巳の怒鳴り声が聞こえるのだ。彼は仕事において、どんなときも声を上げない、感情を表に出さない人間のはずであった。だからこそ、世間では“冷静・冷徹・冷酷”な『氷のプリンス』などと呼ばれて来たのだ。

もちろん、万里子と一緒にいる卓巳はかなりの感情家である。

あの契約書を交わした時も、オーナーズ・スイートで卓巳とは怒鳴り合った。怒ったり笑ったり泣いたり落ち込んだり……もちろん冷たい表情を見せることもある。でもそれ以上に、時折見せる子供のような表情も、ベッドの上で見せてくれる男の顔も、万里子には全てが愛しいのだ。

ライカーは『タクミ以上のものを君に与えられる』と言った。だが万里子にとって、卓巳以外から与えられるものに価値などないのだ。

その真実にライカーが気づいてくれることを願うばかりだが……。

第七章 慈愛 (15) 眠れぬ夜

『サー・ステイブン。夫の心に副^そうことは、わたしの希望であり喜びです』

ライカーはあの日以来、万里子の言葉が耳から離れなくなっていた。

日本人女性と親しい関係になったことはない。万里子が一般的であるかどうか、ライカーには判断出来なかった。

だが万里子は、彼女を所有する権利を、自ら卓巳に捧げている。卓巳の姿を映すだけで漆黒の瞳は輝きを増すのだ。あの眼差しを、あらん限りの信頼と愛情をライカーのほうに向けることが出来たら……。

その望みに、彼は論理的な解決法を見つける。

卓巳に得られる権利なら、その権利者がライカーであっても構わないはずだ、と。

万里子の望むものを見つけ、卓巳以上に“それ”を与える。これまでも、彼と関わった多くの女性を社交界の華に変え、彼女らが欲しいものを手に入れる援助は惜しまなかった。万里子も、自らが注目を浴びる存在になれば、必ずや感謝するだろう。

ライカーは自身の正義を信じ、万里子の間違いを正すため、更なる実力行使に出た。

くくくくくくくく

卓巳は夜遅く、フォークナー側の関係者に呼び出された。

ラフなスタイルからスーツに着替えつつ、今夜中に戻れそうもない、とひどく苛立たしげだ。

「支配人には厳しく言っておいた。サーであれクイーンであれ、誰も通すな、と。電話も、私以外は如何なる外線も繋がれない。念のため、鍵だけはちゃんと掛けて、ゆっくり休むといい。戻るのは……早くても明日の朝だ」

万里子は不安の色が隠しきれない。夜中に独りているのはどう考えても心細い。

そんな万里子の様子に気づいたのだろう、卓巳は彼女の両頬に手を添え、上を向かせた。額をコツンとつけると、呪文のように言葉を繰り返す。

「大丈夫。大丈夫だ、絶対に君をサーに渡したりはしない。大丈夫。万里子、僕と一緒に日本に帰ろう」

「本当に？ 本当にわたしはあなたと一緒に日本に帰っていいの？」
万里子の声は半オクターブ跳ね上がった。

「当たり前だろう。僕だけ帰れと言うのか？」
「いえ、そうじゃなくて……。先に帰されるんじゃないかって、そう思っていました。それが」

……ライカーの機嫌を取って欲しい。

卓巳にそう言われたら……万里子は従うだろう。それが卓巳のためであるなら、どんな犠牲も厭わない。ただ、その後自分がどうなるのか、万里子には思い描くことが出来なかった。

そんな万里子の沈黙を、卓巳は誤解したらしい。

「まだ怒っているのか？ ミス・モーガンのこと……不貞を働こうとしたのは事実だ、君の目の前で彼女とキスした。君に、あの裏切りは許せない、と言われたら……僕には為す術がない。」

だが、結果はご覧の通りだ。彼女に触れようとした途端、胃が引

き千切られるような痛みに襲われたよ。あれは間違いなく僕に下された罰だ。心から反省した、もう二度としない。僕は君しか抱けないようになってるんだ。だから……君とは別れられない」「……はい……わたしも……あなたと離れられないし、離れたくない」「

卓巳は万里子の顔を引き寄せ、狂おしいほどのキスを求めた。

体の境界線を忘れてしまえるほど。二人の心が溶け合い、その唇まで一つに思えてくるほど。濃密な時間が流れ……卓巳は突然、万里子から飛び退くように離れる。

「すまない。本当に行かなきゃならないんだ」

卓巳は肩で息をしながら、漸ゆるう声を絞り出すのだった。

独りになり、万里子は鍵を掛けた。

万里子の身体も熱を帯びていた。女の部分が卓巳を求めている。卓巳が、他の女性が抱けないから万里子を抱く、と言うのならそれでもいい。卓巳を独り占め出来るなら、今の万里子はどんなことでもしただろう。

ライカーの知りたがっている万里子の欲しいもの。それは唯一にして最大の望み“卓巳の愛”であった。

その、僅か二十分後、ホテルのスタッフが次々とスイートを訪れた。

まず初めに届けられたのは、三百本の赤い薔薇の花束である。さすがに一束には出来なかつたのが、三つに分けられ三人のスタッフによって運び込まれた。

啞然とする万里子の耳に、再びドアベルが鳴り……。

目の前に置かれた大きな箱には、シルクのドレスが納まっていた。どう見ても既製品には思えない。仕立てさせたのだとしたら、いつの間に？ それも数回会っただけのライカーにどうしてサイズが判るのだろうか？ そんな疑問ばかり膨らむ。

ドレスは真紅の薔薇と同じ色だ。胸元からウエスト、ヒップまで体の線がくつきりと浮き出るようなマーメイドラインである。間違っても下着など着けられない。

戸惑う万里子を見無視して、ドレスと共布で作られたピンヒールのパーティシユーズやヘッドドレス、同色のガーターベルトやシルクのストッキングまで贈り物は続く。

更に、一カラットはありそうなダイヤモンドのイヤリングとネックレスまで届けられた。

シッティングルームは咽返るような甘ったるい薔薇の香りと、目の覚めるような赤色に覆い尽くされた。

滅多に覚えない怒りと動揺に、万里子は部屋の中央に棒立ちである。

その直後、電話が鳴った。

卓巳以外は女王陛下であっても取り次がない、そのはずである。だが、卓巳であるならタイミングが良過ぎるだろう。ライカーだと言われたら、断ればいい。万里子はそう心に決めて受話器を上げた。

『素敵な夜だね、マリコ。プレゼントは気に入ってくれたかな？』
予想通り、サー・ステイブン・ライカーだった。

万里子の心臓はスピードを上げ鼓動を刻む。まずはフロント係が客の了解を得てから繋ぐはずなのに、どうしてそれが……万里子はハッとした。

スイートの電話は部屋の内装に合わせてアンティークなデザイン

だ。だが、その機能は最新式でインターネットにも接続可能である。その電話機のサイドに付けられたランプが点灯して、この通話が内線であることを告げていた。

『明日の夜、新年のパーティを開くことになった。場所はリッチモンドだ。ぜひ出席して欲しい』

『それは……わたし独りでは決められません』

『タクミは忙しいだろう。君ひとりでも恥を掻かせるようなことはしない。安心してくれ』

『既婚のわたしが公式の場に、夫以外の男性と出ることはありません』

『非公式のパーティだ。エスコートは夫以外でも構わない』
『……』

ライカーがなぜここまで自分にこだわるのか、さっぱり判らない。だが、万里子の沈黙に頑なまでの拒絶を感じ取ったのだろう。ライカーは妥協案を示してきた。

『いいだろう……では、タクミにも一緒に出て貰おう。君は私の贈ったドレスを身に付けて出席する。タクミがOKすれば、君もOKしてくれるね？』

『ええ……彼が了解するのであれば』

万里子は渋々了承する。だが、次にライカーの言った台詞に彼女は背筋が寒くなった。

『さすがのタクミも忙しくて、今夜は夫の役目を果たせないだろう。私は君の向かい“ピカデリー・スイート”にいる。そして、このフロアは全て私が借り切った。今夜この階で眠るのは、私たち二人きりだ。』

ああ、まさか、君の部屋に押し入ったりはしない。ここはフェミ

ニストの国で、私も紳士だ。ただ、君が寂しい時はいつでも訪ねて欲しい。「ニッポンダンジ」というのか……日本人男性は妻に大して少し横暴なようだ』

万里子は最後の理性を振り絞り、可能な限り落ち着いた声で答えた。

『サー・ステイブン、あなたは勘違いをされておいでです。彼は横暴な夫ではないし、わたしは従順なだけの妻ではありません。でも、今夜はあなたの言葉を信じて眠ります。英国はフェミニストの国で、英国貴族のあなたがその言葉に違たがわない方であることに感謝して……おやすみなさい』

ライカーの返事は聞かず、万里子は急いで電話を切った。

このフロアは全て私が借り切った。今夜この階で眠るのは、私たち二人きりだ。

(……まるでストーカーだわ)

万里子は念入りに施錠を確認し、一睡もせずに卓巳の帰りを待ったのである。

第七章 慈愛 (16) 鬨いの火蓋

ロンドン中心部からヒースロー空港の方角に向かって約一時間、テムズ河畔にリッチモンドがあった。

英国内に十個ある王立公園のうち二個がここにあり、高級住宅地には一流ブランド店が立ち並ぶ。観光で来るならロンドンから日帰り一日楽しめる場所だ。

その高級住宅地の一角にライカーが所有する邸があった。

卓巳の調べたところ、そこはライカーが女性との情事に利用する別邸らしい。一時期、特定の女性を住まわせていたようだが、今は管理人だけだという。今回のパーティーはライカーが突然思い立ったものなので、身分の高い客は来ないとのことだった。

だが、卓巳と万里子がそこを訪れて、啞然とする。

貴族階級の者がいないというだけで、それは決して小規模とはいえない難しいパーティーであった。非公式、しかもライカーの思いつきでこれだけの客が集まる。おそらく、それを万里子に見せ付ける意味もあるのだろう。

く*く*く*く*

万里子の予想は正解だった。

ライカーはそれまでの経験に従い、万里子にアプローチをしていた。

身分と財力のある男性に積極的に迫られたら、どんな女性も悪い気はしないだろう。夫の前ではノーと言っても、心の中ではライカ

ーを意識し始めるはずだ。

ましてやライカーは、見た目で女性が逃げ出すような容姿ではない。

母方に北欧の血が混じる彼は、少し威圧感はあるが彫りの深い顔立ちをしている。そして身長が高いだけでなく、引き締まった逞しい体つきをしていた。

万里子は情に厚い女性である。ライカーの不幸な結婚生活を知れば、同情を寄せるだろう。そして、如何に卓巳が不実な夫かを証明して見れば必ず自分に傾く。

ライカーはニューイヤーパーティの後、卓巳がジューデイス・モーガンを部屋に連れ込んだ情報を得ていた。

く*く*く*く*

その日の昼過ぎ、卓巳は部屋に戻って来た。

「……すまない。一緒にパーティに出席して欲しい」

卓巳は喘ぐように言うと、額を押さえ、ソファにドサツと座り込む。疲労の色が濃い。おそらくここ十日ほど、食事も睡眠もゆっくりに取っていないはずだ。

「卓巳さん、大丈夫ですか？ 少しお休みになって……」

万里子はコンシェルジュに頼んで取り寄せて貰った日本茶を淹れながら、卓巳に声を掛ける。だが、彼の視界に吊るされた真紅のドレスが入った途端、卓巳は立ち上がり叫んだ。

「これが奴からのプレゼントか！ なんだこのドレスは？ 奴はお

前を娼婦か何かと間違えてるんじゃないのかっ!？」

「やっぱり、これを着て出ないといけないんですね」

万里子のしんみりとした声に卓巳は数秒黙り込む。

「イヤ、いい。やっぱり止めだ。その必要はない!　なんでそんなパーティーに出なきゃならないんだ。どうしてお前をそんな……」

ライカー社は、今朝になり突然話し合いの場を指定してきた。

それが、今夜リッチモンドのライカー邸で行われるパーティーであった。ドレスコードはブラックタイ。卓巳には夫人同伴で、しかも、万里子が着用するのは、ライカーの届けたドレス、とまで指示してきたのだ。

それもフジワラを飛ばして、フォークナーに。

卓巳の面目は丸つぶれである。フォークナーの担当者は薄々ライカーの目的を察しながらも了解した。フジワラ・ロンドン本社には通達事項として報告が入り……。

万里子は苦々しげに話す卓巳の言葉にジッと耳を傾けていた。

そんな卓巳を見るだけで、彼の苦悩が手に取るように判り、万里子も辛い。

「判りました。行きましよう、卓巳さん!」

万里子はわざと明るい声を出す。

「第一、わたしにこんな派手なドレスは似合いませんよ。きっと、サーも間違いに気付くはずです。それに、卓巳さんも一緒でしょう?　目一杯、仲良くして見せ付けてやりましようよ。ね」

本当は万里子も不安だった。

ドレスはホルターネックで、腕も肩もむき出しのデザインだ。背中の上半分以上が露になってしまう。しかも、どんな下着でも……持

つてはいないが仮にTバックのようなものでも、着用すればラインが浮き出てしまうだろう。万里子にすれば裸同然の格好で人前に立つような気分だ。

そして、打ちのめされた風情の卓巳に、万里子はい、

「あの……わたしからも頼んでみましようか？ もう、こんなことは止めて、普通にお取引して頂けるように……」

「馬鹿を言うな！ そんなことをしてみろ、奴の思いのままじゃないか！」

「そんな！ サーの言う通りになるとは言ってます。わたしはただ」

「万里子、君は男を知らない。いや、君は僕のことを最高の男だと思ってるんだ。そうだろう？ 尊敬して……騎士のようだと喜んでくれた」

「ええ、そうです。今も、そう思っています」

万里子は急いで頷いた。だが、卓巳が何を言いたいのかわからない。

「僕のキスで満足してくれて、僕との……セックスで感じてくれてる。でも、それは君が本当の男を知らないからだ」

言い返そうとした万里子の口を、卓巳は指を立て制した。

「君も知ってる通り、僕は女性と付き合っただけじゃない。だから、エスコート一つ満足に出来ないんだ。十代の頃からずっと避けてきた事柄だから、本当はベッドの上で君をどう愛したらいいのかも判らない。」

悔しいが、僕に比べて奴は本物の男だ。彼に一度でもキスされたら、いかに僕が駄目な男か、君にも判ると思う。彼なら……嫌な思い出などあつという間に忘れさせてくれる。最高に幸せな気分には

万里子は卓巳の指を掴み、泣き言を言い始めた口元をキスで塞ぐ。

卓巳はびっくりして目を見開いたままだ。

「ミス・モーガンのほうが美人でスタイルも良くて、それに……男性経験も豊富で。でも、彼女じゃ駄目だって言ったわ！ わたししか抱けないって！ どんなにサーが素晴らしい男性でも、わたしは卓巳さんじゃなきゃ嫌なの。タベだって一睡も出来なかった。新婚旅行なんて、もうどうでもいい。契約が終ったら早く日本に帰りたい。卓巳さんと一緒に帰りたいたい！」

泣くつもりはなかったのに、興奮のあまり万里子は泣きながら卓巳に縋りついた。

「悪かった。帰ろう、すぐに決着をつける。一緒に帰ろう、万里子」

卓巳の腕の中は温かくて心地よい。

社長は辞める、仕事などどうでもいい、そう言いながらも卓巳は正式契約のためにロンドンまでやって来た。ロンドン本社を潰しても良いなどと、本心から思っていないはずだ。

卓巳の言葉を信じたい、だが、すぐに決着はつかないかもしれない。

その時は 自分も卓巳と共に闘おう。そう心に決める万里子だった。

第七章 慈愛 (17) リッチモンドの攻防 万里子

『やあ、マリコ、楽しんでるか？』

ライカーはまるで悪びれない、屈託のない笑顔を万里子に向ける。無意識のうちに、万里子は卓巳の肘辺りを握り締めていた。それに気づいた卓巳は、万里子の手を上から包み込む。

『タクミ、うちの責任者が別室で話し合いたいと言っている。フォークナーの人間も待っている。行って来たまえ。マリコのエスコートなら心配は要らない。君の代わりに私が引き受けよう。良い話になることを期待している』

ライカーは白々しくもそんな言葉を口にした。そして、ごく自然な動作で万里子の手を取ろうとする。

だが、それを当然のように払い除けたのは卓巳だ。

『サー、私はあなたと話し合うためにここまで来たはずだ』

『言ってなかったかな？ 私は今回の件を責任者に一任している。私が同席すれば、彼は面目を失うだろう』

卓巳は無表情のままその場に立ち尽くしていた。

その時、今度は万里子がそつと卓巳の手に触れたのだ。そして、お互いの瞳を見つめ合った瞬間、万里子は無言で頷いた。

卓巳はため息を吐きつつ、案内に従おうとする。

それでも、万里子から離れる時は執拗なほど念を押した。

『万里子は私の妻だ。それをお忘れなきよう』

ライカーは降参のように軽く両手を挙げ、首を横に振るのだった。

くくくくくくくく

『素晴らしいね。思った通り抜群のスタイルだ。これほど肌理きめの細かい肌の持ち主を私は知らない。君の肌は特別だ。そんな素晴らしいものを隠してしまうなんてもつたいないよ。見てごらん、男たちは皆、君を見つめている』

ライカーは万里子を絶賛した。

確かに、今夜の万里子はこれまでとは全く違う。

ドレスに合わせて施した濃い目の化粧。チークやマスカラなど成人式と結婚式に使ったくらいだ。そして、初めてひいた真紅ルージュの口紅。シャンデリアの光に照らされベルベットの光沢を放つ。

極めつけは、緩く纏め上げたシニヨンから零れる数本の後れ毛だろう。象牙色の肌に絡みつく黒い髪は、それがシーツの上で乱れる様を容易に想像させた。

だが当の万里子は、鏡はおろか窓ガラスに映る自分の姿すら嫌悪している。

見たくない。肩や背中当たる冷たい風や、複数の男たちの不躡な視線が、露になった肌を切り刻んだ。

万里子は仕方なしにライカーの手を取った。だが、彼の賛辞には唇を引き結んだままだ。一言も答えようとはしない。

『ドイツ・シエパードのようにタクミが睨んでいなければ、皆が君をダンスに誘っただろう。だが、一番は私だ。レディ・マリコ、私と踊って頂けますか？』

懲りずにライカーは誘惑を続ける。わざとらしく、レディの称号までつけて。

真上から降り注がれるライカーの視線を、大きく開いた胸元に感じ……万里子は奥歯を噛み締めた。

『サー・ステイブン。残念ですが、わたしは踊れません』

『ステイブンを構わないよ、マリコ。それと、嘘はやめてくれ。君はニューイヤーパーティでタクミと踊っていた。曲はワルツだ、プロのステップは要求しない。いや、君がプロに見えるように、私がリードしよう』

ライカーは掴んだ手を引き、万里子と共にフロアの中央に出る。そして、もう一方の手を腰に回そうとした。その時、万里子はライカーの手を振り払った。

『サー、わたしは、夫以外の男性に手を握られたくはありません。あなたがわたしの腰に手を触れたら……わたしは悲鳴を上げて大騒ぎし、あなたに恥を掻かせるでしょう』

両手を左右広げ、目を見開き、ライカーは不思議そうに尋ねる。

『どうしたと言っただ……マリコ？ 私は君の美しさを讃え、ダンスに誘っただけだ』

『いいえ。こんな露出の多いドレスは、わたしにとって拷問にほかなりません。あなたの一歩も引かない構えでライカーを睨みつける。』

万里子は一歩も引かない構えでライカーを睨みつける。

灰色の瞳が戸惑いに揺れた。遠慮がちに断わられたことはあっても、拷問を与えている、などと言われたのは初めてだったのだろう。

『マリコ、君は何かと間違えているのではないかな？ 私の耳に“拷問”と聞こえた。それはあまりに穏やかでない単語だ』

『間違えてなどおりません。わたしは、複数の男性に襲われ……辱めを受けました。わたしの心も体も深い傷を負っています。このよ
うな姿で華やかな場所に立つことは、わたしにとって大変な苦痛な
のです。』

サー・ステイブン、わたしは穢れた女です。あなたに賞賛され
るような、綺麗な体はしておりません。ですが、お金や名誉、贈り
物に心を奪われ、夫を捨てるような恥知らずでもありません！

それとも、英国紳士というのは、わたしのような女の名誉はどれ
ほど傷つけても構わない、と仰るのでしょうか？ サー、わたしは
夫以外とは踊れないし、踊りません。それがご不満なら、ドレスや
アクセサリーだけでなく、全てをお返しします。この場で。もし
てこのまま日本に戻り、二度とこの国を訪れることはありません』

万里子はライカーから視線を逸らさず、毅然とした態度で彼の全
てを拒否した。

ライカーは一方的に万里子に幻想を抱いている。それを公衆の面
前で叩き壊し、更に恥を搔かせてやろう。ターゲットから外れるこ
とが出来るなら、たとえ怒りを買っても構わない。万里子はそう思
っていた。

周囲は、女性に拒絶され、フロアの中央で身動きもしないライカ
ーを遠巻きに見ている。『サーの誘いを断る女性がいるなんて……』
そんな囁きが万里子の耳にも届く。

そして次の瞬間、ライカーは床に片膝をついたのだ。

『君を……怖がらせたことを謝りたい。私は待つ準備も出来ている。
君が私に手を差し伸べてダンスに誘ってくれる日まで……。君に対
する非礼をお詫びしたい』

今度は万里子が驚く番であった。

まさか、膝を折るなどあり得ないことだ。妻や身分が上の女性ならいざ知らず、万里子は階級など持たない一般人女性、しかも外国人だ。

絶句する万里子にライカーは続けた。

『だが、これだけは言わせて欲しい。君は今夜このフロアにいる誰より誇り高く美しい。その美しさは魂の輝きだ、何人も君の魂を穢なまじすことなど不可能だ。万里子、君は間違いなくアフロディーテに愛されているよ』

ライカーは本気だ。

万里子はそれに気づき、自らを蜘蛛の巣に掛かった羽虫のように感じ始めていた。

第七章 慈愛 (18) リッチモンドの攻防 卓巳

フロアを離れ、人気のない廊下をライカーは早足で歩いた。胸の高鳴りが抑えられない。

(こんな手強い女性は初めてだ)

男の同情や気を惹くために、様々な過去を語る女を見てきた。嘘はすぐに見抜く自信がある。そして、万里子の言葉に偽りはなかった。彼女の魂も肉体も神々しいまでに輝いている。欲しい、なんとしても、彼女の口から『愛している』の言葉を言わせたい。だが……。

ライカーは足を止め、背後の賑わいに気配を向ける。

(一筋縄でいかないのは、タクミよりマリコのほうかも知れない……)

く*く*く*く*

ライカーは担当責任者にわざと無能な男を選んだようだ 卓巳
はそんな感想を持っていた。

卓巳の質問に正確な返事も出来ない。細かな点は本社に戻り、専門の者に相談したいと言いつつ始末だ。おそらくは、卓巳らの到着直前に、突然『責任者になれ』とでも言われたのだろう。万里子から卓巳を引き離すためとはいえ、見え見えの手段だ。

だが、それは卓巳にしても同じ、単なる時間稼ぎに過ぎない。

夜明けと共に次の行動に出る。どちらが先に有効な手を打てるか。卓巳が不利なのは明らかだ。敵地にあり、協力を仰げる人間も少ない。しかも奴の狙いは万里子なのだ。

ライカーは気に入った女性をコレクションしたい訳ではなく、愛されることが目的のようだ。しかし、奴が爵位を捨てない限り、万里子は決して奴のものにはならない。

あの男は、英国中の金を積んでも動かせない心があることを知るはずだ。そしてそれこそが、彼の望む“愛”なのだ、と。

卓巳は無駄な会談をさつさと切り上げ、パーティフロアに急ぐ。

万里子のことは信じている。だが、それと嫉妬は別物だ。いつもなら少しでも肌が露出する部分は、シヨールなどで隠すようにしている。それが……部屋まで呼んだ美容師は、あの馬鹿げたドレスに合わせたメイクを万里子に施した。男に徒^{あた}な期待を持たせるような真っ赤な口紅を塗ったのだ。

「何がコケティッシュユでセクシーだ。間抜けな美容師め！」

階段を下りながら、やたら広い屋敷に苛立たしさを覚え、つい悪態が口を衝いて出る。

『あまり良い話にはならなかったようだ』

階段下のスペースにはベンチが置かれている。喫煙コーナーにもなっており、そこから姿を現したのはライカーであった。

『いえ……全く、です』

卓巳は呼吸を整え姿勢を正した。

ライカーの声は張り詰め、まるで宣戦布告のような緊張感を漂わせている。どんな隙を突いて攻められるか判らない。卓巳もすぐに迎撃態勢に入る。気は抜けない。

『妻がお手を煩わせました。彼女を連れて、すぐに失礼致します』
『ああ、そうか。それは仕方がないだろう……今夜は』
『思わせぶりにライカーは止めた。』

『次のご招待に応じるかどうかは私次第です。そして、二度と応じるつもりはありません。では、失礼』

踵を返した卓巳の背後にライカーは直球を投げつけた。

『マリコは素晴らしい女性だ　私が貰う』

『無駄だ。彼女は私の妻だ』

『関係ないな。婚姻は契約の一つに過ぎない。愛の前には無意味だ』
『それは愛のない結婚をした場合だ、あなたのように。愛し合っている僕らに割り込む余地などない』

痛烈な嫌味に、ライカーの暗灰色の瞳がぎらついた。

だが、すぐに余裕を取り戻し、

『ほう、それはそれは……愛し合っている新婚の妻を部屋から追い出し、金髪モデルをスイートに引っ張り込んだ男の言葉とは思えないな』

貴族ぶった仮面が剥がれ、その下に見えたのは、身分主義者が陥る自己陶醉の薄汚い微笑だった。

おそらくは、卓巳の祖父もライカーのような思惑で祖母を妻にしたのだろう。表情の変わらない卓巳をどう思ったのか、ライカーは更に言い募る。

『明日の“ザ・サン”に、君のセックススキャンダルが掲載される。ミス・ジューデイス・モーガンは君とのセックスを紙面で大告白してくれた。彼女は女優にもなれそうだ。』

タクミ。これにより、禁欲的で厳肅な君のイメージは見事に壊れる。マリコは君を信じるだろうが、しこりは残るだろうね』

ライカーは卓巳の反応を楽しむように、笑いながら顔を覗き込む。

『だから？』

表情を変えたのは卓巳ではなくライカーのほうであった。

『……ああ、よく判った。君とポーカーだけはしたくない』

数十秒の空白の後、ライカーは諦めたような声を上げる。“氷のプリンス”の呼び名通り、全く表情を崩さない卓巳に、お手上げといったポーズだ。

『では、あなたとの勝負はポーカーに徹しよう。失礼する』

卓巳はライカーを置き去りにして万里子を探した。

だがパーティフロアに彼女はいない。少し考え、卓巳はパウダールームに向かう。中に入ろうとする女性に声を掛け……予想通り、万里子を捉まえたのだった。

「卓巳さん！ お話はどうなりました？」

「サーに進める意思がないのは明らかだ。こうなったら、他の手段を講じるしかないな」

だが、時間がない。

最初から卓巳の関わった計画なだけに、契約までは、と考えていたが……。

この時、卓巳は内心動揺していた。

女性問題ほど卓巳にとって不案内で厄介な問題はない。これまで、

行動に出るたびに過ちを犯してきた。万里子とのこともそうだ。祖母の臯月に相続条件として結婚を示唆される前から、気になって密かに身元を確認した女性だった。

宗に詳細を調べさせ、中絶の過去を探り当てた時の衝撃は今でも覚えている。卓巳の人生に、一目惚れ、などあり得ない。結局、弱みを握り契約結婚という形で手に入れようとした愚か者だ。

（僕に、サーを笑う資格などない）

ジューデイスが卓巳に仕返しをすることは容易に考えられた。

卓巳の調査で、彼女の背後にライカーの影はなかったはずである。手を組んだ……いや、ジューデイスを利用することを思いついたのはあの後に違いない。

ザ・サンは英国のタブロイド紙だ。大衆紙と言われ、かなり下品な記事も載せる。トップレスの女性の写真も多く、日本の新聞紙よりスポーツ紙に近いイメージだ。

ジューデイスを警戒してタブロイド紙にも手は回していたが、ライカーの影響力が上と言うことだろう。

朝刊ならすぐに手を打てば金で止められる。だが、サーが絡んでいる。ギリギリのタイミングで教えたということは……。

（これも畏か？）

不安そうな万里子を抱き寄せ、曖昧な笑みを浮かべる卓巳だった。

第七章 慈愛 (19) 愛と罪の行為(前書き)

*性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。R15で願
いします。

第七章 慈愛 (19) 愛と罪の行為

リッチモンドを出てすぐ、ホテルには連絡を入れておいた。

「卓巳さん、お疲れでしょう？ お腹は空いてませんか？ ルームサービスを……きゃ」

すでに暖められた室内に、万里子はホツとしてコートを脱いだ。そして、ポールハンガーに掛けようとしたその時、卓巳は万里子を背後から抱き締める。

「あつ、あの、卓巳さん……少しはゆっくりして下さい。でなきゃ、また倒れたりしたら。お願い」

卓巳は万里子の耳からイヤリングを外し、床に叩きつける。

だが、それだけでは怒りが収まらなかったのだろう。万里子の胸元に輝いてるダイヤモンドのネックレスを掴み、両手でチェーンを引き千切った。留め金が歪み、弾け飛ぶ。卓巳は手の中に残った部分を握り締め、直後、ゴミ箱に叩き込んだ。

「僕のいない間、奴に何をされた？ キスされたのか？ 君が望めば、奴はあの屋敷すら与えるだろう。本当は……この部屋に戻って来たくなかったんじゃないのか？」

卓巳の言葉に、万里子に対する怒りは感じない。卓巳自身に向けられた、焦り、嘆き、悲しみであった。

万里子は傷ついた獣を撫でるように、ゆっくりと手を差し伸べ、卓巳の頬に優しく触れる。

「……そんなわけ……ありません。わたしには、あなただけよ」

「怖い。奪われそうだ。勝負に勝っても、君の心を奴に奪われたら……万里子」

卓巳はコートも脱がず、そのまま、正面から万里子を抱き締め、唇を重ねた。

シッティングルームにはソファに合わせた低いテーブルと、ダイニングの高さの円形テーブルがある。白い円形テーブルは繊細な作りだが四本の脚はしっかりしていて……卓巳はその上に万里子を押し倒した。

キスは次第に深まり、万里子の真っ白い喉元や首筋をなぞり、胸元に下りてくる。卓巳は片手で首の裏にあるボタンを外した……すると、

「あ……」

掠れるような万里子の小さな声が聞こえ、ホルターネックが緩む。下着を付けていない両方の頂きが露になり、外気に晒された。卓巳はそこにくちづけ、安堵の吐息を漏らす。

「万里子……愛してる。僕には君しかいないんだ」

「わたしにもあなただけ……。サーとはダンスも踊ってません。あなた以外の人とは手も握れない、そう言って断ったから」「ほんとうに？」

卓巳はジッと万里子を見つめた。

瞳の色が変わる……それは本当に色が変わるわけじゃない。けれども、その言葉の意味が万里子にもようやく判るようになった。行き場の無い熱を孕んだ瞳、今の卓巳の目は、男の本能を剥き出しにしている。そしてそれは、彼が万里子にだけ向ける眼差しなのだ。

「本当です。だから離さないで……わたしのこと捨てないって言うて！ ずっと妻でいていいって、そう言うて下さい。お願いっ！」

「ああ、もちろんだ。離さない……君は僕のものだ」

キスの合間に、卓巳がブラックタイを投げ捨てるのが見えた。デイナージャケットを脱ぎ、カマーバンドとサスペンダーを外す。

卓巳はベッドルームに移動する様子もなく……万里子の口元が自由になった瞬間、胸の谷間に顔を埋めた。

「た、たくみさん、ちょっと待って。ジャケットが皺になるから……。それに、ベッドに」

「駄目だ、もう待てない。この唇も……胸も……ココも全て僕だけに許されたものだ」

卓巳は喘ぐように呟きながら、胸に触れていた指がドレスの裾をたくし上げ始める。

ドレスの下はストッキングだけだ。それはラインの浮き出ない加工を施されたガーターベルトで留められている。万里子自身を隠す布地は何もない。

「こんな無防備な姿で、あの男の傍にいたのか？」

「下着のラインを見られるほうが、恥ずかしいと思って」

「思い出すだけで、気が狂いそうだ」

太腿から上は肌に張り付いて中々めくれない。卓巳は嫉妬心と苛立ちで、シルクの布地を引き裂いた。激しい音が室内に響き渡る。

「たくみさん……怒ってるの？ でも、わたしは」

「怒ってないよ。悔しいだけだ。こんなもの……僕の手で君の身体から引き剥がしてやる！」

卓巳の視線が万里子の下半身に移る。

そしてそれは……見るだけでは収まらなくなったようだ。指が触れ、万里子の目覚め始めたばかりの官能に火を点ける。

そして今夜は指先だけではなく、卓巳は万里子の足下に跪き、そこに口づけた。

突然のことだった。その部分にキスされるなんて想像もしておらず、万里子は恥ずかしさのあまり声もない。

だが、卓巳の唇を押し退けることは出来なかった。次第に、万里子は下腹部を中心に大きな炎が燃え上がったことを知る。それは、鎮火しそうになつては再び炎に包まれ……万里子は燃え尽きそうなほど卓巳の行為に翻弄された。

その時、横を向いた万里子の視界に、とんでもない姿が飛び込んできた。

ソファセットの向こうには大きめの鏡がある。そこには万里子と卓巳の情事の姿が映し出されていた。

万里子は、ぼろ切れのようなドレスの残骸を身に纏い、テーブルの上に仰向けになっている。そして卓巳のしている行為……それはあまりに卑猥で、万里子の目に涙が溢れた。

卓巳は今日のドレスを見て、ライカーが万里子を娼婦だと思っているのか、と怒っていた。でも、膝を開き、卓巳のキスを受け入れる姿も、まるで娼婦のようだ。「愛してる」「も「君だけだ」も全てこの行為のためかも知れない。

万里子は「嘘でもいいから愛してると言って欲しい」その言葉の畏に嵌っていた。

卓巳が愛を囁けば囁くほど、自分の台詞が彼女の首を絞めるのだ。愛の行為に没頭すればするほど、その罪深さに恐ろしくなる。

情熱的な愛撫に火照った身体が少しずつ熱を失う。

その弱まった炎は卓巳にも伝わり……。

第七章 慈愛 (20) 至福の夜(前書き)

*性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。R15で願
いします。

第七章 慈愛 (20) 至福の夜

万里子の反応が変わった。

卓巳はハツとして体を起こし、慌てて立ち上がる。

「済まない！ 悪かった。こんなつもりじゃ……つい、調子に乗って」

何度謝っただろう。どうしてももっと余裕を持ってないのか。万里子の反応を確かめながら進めて行けないのか……経験のなさに、卓巳は唇を噛み締める。

だが、万里子はこれまでと違い、卓巳に抱きついた。

「違うんです！ あなたが好きだから……どんな風にされてもわたしは平気です。ただ、びっくりして……。あなたにされて嫌なことは一つもありません。わたしは卓巳さんを愛してるから」

「僕もだ。万里子、僕も君を愛している。こんな風にしたいと思うのは、君だけだよ、万里子」

二人は、ひしと抱き合った。まるで今にも溺れそうなほど、互いを必要としていたのだ。

そして……最も相手を身近に感じる方法で愛し合うことを選ぶ。卓巳はその部分に彼女を感じるだけで、本当に結ばれている錯覚に陥った。重なる部分から幸福感がじわじわと全身に広がり、卓巳の不安を少しずつ消して行く。

次第に、卓巳の下にいる万里子の息が荒くなった。

ウォッシュルームの壁に彼女を押し付けた時のようだ。卓巳がそう思った瞬間、万里子は切れ切れに声を上げ、卓巳の二の腕に爪痕を残した。

万里子は、薄っすらと涙を浮かべ、肩で浅い息を繰り返している。卓巳は愛すべき妻に口づけて、彼女の耳元で囁いた。

「ありがとう、感じてくれて。万里子……最高に綺麗だ。僕は嬉しくておかしくなりそうだ。愛してるよ、万里子」

卓巳はより一層激しい動きで万里子を攻める。

その直後、万里子は眉根を寄せ、唇を噛み締めた。

「たく、たくみ、さん。待って、お願いま……って」

「万里子？ どう……し」

卓巳は先日、浅い位置ながら初めて一つに結ばれた夜のことを思い出していた。

（落ち着け……落ち着くんだ。この間より充実感はある。でも、無理は禁物だ。力任せでは万里子の身体は受け付けない。辛い思いだけはさせられない……）

「ま、まりこ……少し、ほんの少しだが……君の中に入ったようだ。痛むか？」

「……少し。この間より……その……わかります」

万里子は遠慮がちに、おずおずと卓巳に答える。

「そう、か。この間より、奥まで……入っているみたいだ。このまま、ジツとしていてもいいだろうか？ 少しでも長く……君と一つでいたい」

卓巳は恐る恐る万里子の顔を覗き込んだ。すると、万里子は瞳を涙で一杯にして。

「たくみ、さん……嬉しい。とっても嬉しくて……今、あなたと……」

…一つに」

「ああ。幸せだ。夢みたいだ」

二人はお互いの目を見つめ合ってそうっと微笑んだ。

卓巳は微動だにせず、万里子の身体を支える。そう簡単には結ばれなかった二人だからこそ、僅かな繋がりでも至福の喜びとなる。

だが、万里子の潤んだ瞳に吸い込まれるように、卓巳は口づけ…
…そして。

「まり、こ…ゴメン、ちょっと、もう」

わずか一度、卓巳が万里子の全てを知ろうと動いた瞬間。目標は達成半ばで、卓巳は後退を余儀なくされた。だが、先日を遙かに上回る素晴らしい感覚に、卓巳の自尊心は急上昇したのである。

「すまない…重かっただろう？」

脱力感から、つい万里子に体を預けてしまっていた。

卓巳は慌てて体を起こし…ある一つの事実に目を奪われる。彼は、万里子のドレスを引き裂くに留まらず、汚してしまったことに気づいたのだ。卓巳はそれを見た瞬間、男としての優越感に浸ったのは言うまでもない。

「卓巳さん…もう、見ないで…」

卓巳の視線に万里子は脚を重ね合わせ、露出した部分を隠そうとする。だが、今や真紅の端布はぎれと化したドレスなど、何の役にも立たず。

卓巳はコートを拾い上げ万里子を包み込んだ。

柔らかく結び上げたシニョンは、卓巳のせいで解けてしまった。万里子の額に掛かった数本の髪を、卓巳は払い除ける。そして、至近距離から万里子の瞳を覗き込んだ。

「万里子……痛くなかったかい？ 僕は君を傷つけなかっただろうか？」

万里子の頬は薄い桜色に上気していた。華奢な肩も小さく上下している。

「いいえ。いいえ、卓巳さん……あの、わたしたち最後まで？」

「いや、全部は無理だった。ごめん、我慢出来なかった。でも……この次はきつと」

「この……次？」

「ああ、この間より だつたらう？」

「……！」

卓巳の様々な含みを帯びた問いに、万里子は真っ赤になりながらも、しっかりと頷いた。

「この間は、偶然の幸運に恵まれただけだと思っていた。だが今夜は違う。機能が戻ってきてるようだ。信じられない、ゼロパーセントだったのに……。ゼロには何を掛けてもゼロだって諦めてたんだ」
興奮気味に語る卓巳に、

「いやだ、卓巳さん。掛けるんじゃないよ、足せばいいのよ。答えはゼロとは限らないでしょう？」

恥ずかしそうに小首を傾げ、万里子は微笑んだ。

それは闇の中の光であり、砂漠のオアシスでもある。慈しみに溢れた万里子の全てが、堪らなく愛しい。卓巳はかけがえのない宝物を強く、そして優しく抱き締めた。

「万里子……君は僕の命だ。絶対に離さない」

「卓巳さん」

「ああ、もう駄目だ！ 奴より先に手を打たなきゃならないのに。それを考えなきゃならないのに。駄目だ、頭がさっぱり廻らない。こんなことをしてる場合じゃないんだ」

言葉とは裏腹に、卓巳は足下に落ちたスラックスと下着を振り捨てた。全裸になると万里子を抱き上げ、ベッドルームに向かう。

「た、たくみさん？ あの」

「今夜は考えるのは止めだ。その代わりにゆっくり眠りたい。君の傍で……構わないだろう？」

「ええ、それはもちろん。でも……眠るだけでいいの？」

「……なんて意地悪な奥さんなんだ」

「ち、ちがうわ！ わたしはただ」

「判ってる。眠るだけだ。そう、君の身体のキスマークを二桁に増やした後で」

そして、ベッドに到着する前にキスマークの数は増え……。

万里子と出逢い、卓巳の中に目覚めた愛は着実に形を成し始めた。

第七章 慈愛 (21) 迷宮の出口

万里子は暗がりの中、そつと左手を伸ばした。そして薬指の結婚指輪を確認する。

(しあわせ……きっと今が一生のうちで一番幸せ……日本に戻るまでも、たとえ、今夜一晚のことでも)

「何を考えてる？」

規則的な呼吸音が聞こえていた。

卓巳は眠ったのだと思っていた。それが、突然声を掛けられ、万里子はびっくりする。

「万里子……どうした？ まさか、泣いてたのか？」

「違うわ。あの……本当なら昨日にはウェールズに着いてたはずなのについて」

卓巳の質問に、咄嗟に嘘をついた。本当の気持ちは言えない。言え、卓巳は万里子を庇うだろう。

「ああ、そうだな。こうして、一日中ベッドで過ごす予定だったんだが……申し訳ない」

卓巳もため息混じりに呟いた。

日本を発つてもう九日目。今朝は、予定通りならウェールズの古城で迎えていたはずである。なのに、現実にはロンドン市内の観光すらしていない。

万里子はライカーのことで卓巳を責めた様な気がして、慌てて訂正した。

「いいえ、そうじゃないの。卓巳さんが悪いなんて思ってなくて…

…あの、お風呂に入りますか？ バスタブにお湯を張ってきまじょうか？ たまにはゆっくり寛いだほうが」

「今は君の香りを消したくない。シャワーなら仕事に出る前で充分だ」

言いながら、卓巳は万里子の背中に手を回し、身体をピツタリと添わせてきた。そして、肌を擦り付ける。暗く見えなが、ザラザラと感じるのは卓巳の髭ひげだろう。不思議な感触に、くすぐったくて万里子は声を出さずに笑った。

だが、どうやら卓巳も何事かを思い出し、笑っていたようだ。万里子に話しかける声が妙に弾んでいる。

「万里子、一つどうしても言ってみたい言葉があるんだ。笑わずに聞いてくれるかな？」

「何ですか？」

「ひょっとしてもう笑ってる？」

「違います、髭が……卓巳さんの頬とか顎が当たって、ザラザラしてるのが可笑しくて」

卓巳はきよとんとしている。その何が可笑しいのか判らないらしい。もちろん、万里子にも判らない。ただ、今は全てが幸福なのだ。

少し伸びた卓巳の前髪が、キスのたびに万里子の脛に当たる感覚も。もの凄く近くで見ないと判らない、卓巳の鼻に付いた眼鏡の跡も。楽しくて、何もかもが嬉しい。

卓巳は咳払いをすると、

「さつき……あ、いや昨夜か。ともかく、僕は君を抱いたんだ。だから、責任を取らなきゃならない」

「……？」

万里子は卓巳が言わんとすることに見当もつかない。しかもかな

り緊張して、上ずった声で……。そう思った時、一つのことを思い当たった。

「だから、だ。僕が言いたいの」

「判っています。だから……仰らないで」

万里子は卓巳の声を遮った。

クリスマスの夜に話してくれた、卓巳に子供が出来ないと言うのは嘘だ。全てを知っていて、万里子の為にくれた嘘なのだ。卓巳の機能が回復して、普通に女性と関係を持てるようになったなら、もう万里子は必要ない。寧ろ邪魔になる。彼は藤原グループの後継者なのだ。そうでなくとも、卓巳には子供を持つ資格も権利もある。万里子が足を引く張るべきではない。もう、万里子の役目は終わったのだ、と。

「怒ってるのかい？ 確かに十分な満足は与えられなかっただろうけど、君を抱いたことは間違いない。何が起きて僕も僕の責任だから……それを忘れないでくれ」

「そんな……愛し合うあまり夢中になって最後の一線を越えてしまったから、責任をとって結婚して下さったんでしょう？」

万里子は涙を堪え、茶化すように答えた。

だが、その言葉に卓巳はむきになって言い返す。

「ああ……そういうえば、そういう設定だった。でも、言わせてくれよ。真面目に聞いてくれ。その……避妊とか、僕の人生であり得ない事態に遭遇して何の注意も払わなかった。だから僕の責任だ、結婚しよう”って一度言っただけで見たかったんだ。笑うなよ。もう結婚してるって突っ込みはなしだ」

卓巳は本当に嬉しそうだ。

そんな卓巳を見てみると、万里子は涙が堪え切れなくなる。

「そうね……でも、でも、私に、は」

否定しようとした万里子の唇を卓巳はキスで止めた。

「泣かせるために言ったんじゃない。万里子、君の可能性はゼロじゃないだろう？ 今度は僕が、君に奇跡を起こしてみせる。もう一度、検査してもらおう。四年以上経ってるんだ。もし、今でも可能性が低かったとしても、治療方法があるはずだ。必ず、君を母親にする！ 僕を信じてくれ」

「……たくみさん……」

卓巳の愛は本物かも知れない。

だがそれなら尚のこと、無駄な努力をさせてしまうのではないか？ ほんの数日前まで、卓巳をどん底に追い込んだ苦惱 あまりにも愛するがゆえに、これ以上愛してはいけない。卓巳が落ちた迷宮に、万里子もまた足を踏み入れることになり……。

くわくわくわくわく

次に万里子が気づいた時、カーテンの隙間から薄い光が見えた。

そして、万里子の耳には卓巳の話し声が聞こえる。どうやら電話らしい。

「おはよう、起こして悪かったね。僕はもう出るから」

「あ、おはようございます。ごめんなさい、今何時ですか？」

卓巳はすでにスーツを着込んでいた。シャワーも浴びたらしい。

眠り込んでいた自分が恥ずかしく、万里子も慌てて起きようとした。

「まだ六時だ。君はもう少し眠ったらいい。万里子、今朝の新聞に、君にとって嫌な記事が出る。でも、真実は君が一番よく知っている。ここにマスコミが押しかけるようなことは絶対にさせない

から……僕を信じて欲しい」

それがジューデイスの件だと、万里子は薄々気が付いた。

だが万里子が気になったのはそんなことではなく。卓巳はベツドに腰掛け、人差し指を伸ばすと万里子の頬を撫でた。その後、数本の髪を手にとると先端に口づける。その間、卓巳の瞳は万里子しか映してはいない。

わずか一夜。卓巳の見事な変わりように、万里子は困惑していた。

「は……い。判りました。あ、シッティングルームを片付けないと……テーブルの上も」

二人の愛し合った跡が残ったままでは、様々なことを客室係に知られてしまう。いくら新婚でも、筒抜けになるのは恥ずかしい。

「心配は要らないよ。奴の贈り物は、花の一本までゴミ箱行きだ」

万里子は驚きのあまり声もない。それを卓巳は勘違いしたらしい。

「万里子、君の欲しいものは全部僕が買ってやる、あれ以上のものを」

「い、いえ……わたしはドレスや宝石に興味はありませんから。ただ、返さなくてよかったのでしょうか？」

ライターに張り合っつてロンドン中の冬咲きの薔薇を集められても困る。卓巳が徹底的にやる性格なのは、万里子にもよく判っていた。「僕が奴ならこう言うだろう。返すくらいならテムズ河に捨ててくれってね。いや、奴ならもっとクールな言葉を言うかも知れない。女性を喜ばせるのは奴の得意技だ」

悔しいのか、卓巳は天井を仰いで唇を噛み締めた。

そんな卓巳を見ていたら、万里子は無意識のうちに、心の中の想いを声にしていった。

「いいえ、卓巳さん以上の男性なんていません。お願い……もう、これ以上素敵にはならないで。わたしはもう、これ以上好きになつたらどうしたらいいのか判らない。頭がおかしくなりそう」

その瞬間、卓巳は万里子を凝視した。そして、万里子の引力に吸い寄せられるように抱きつき、唇を押し付ける。

「僕の頭はとうにおかしくなってる。君の情熱的なドレス姿に……ベッドまで待てず、テーブルに押し倒すくらいだ」

舌先を押し込む寸前、万里子の唇だけ強く吸って、強引に体を引き離れた。卓巳はそのまま動きを止め、ギョツと目を瞑り、ひたすら何かに耐えている風情だ。

「クソツ！ 君に惚けたままじゃ、奴に勝てない。万里子、しばらくこの件に集中したい。二三日戻らないかも知れないが……僕を信じて待つと約束してくれ」

「……はい」

卓巳の言葉が嬉しくて、万里子は笑顔で応えた。しかしその笑顔にも「ああ、駄目だ、畜生！」とブツブツ言いながら卓巳は万里子に背を向ける。

奇跡は起こらないかも知れない。神様が万里子に与えるものは試練だけかも知れない。でも、卓巳の“言葉”を信じよう。

万里子は結婚指輪に口づけて、この日新たに、卓巳への愛と忠誠を誓った。

その指輪を、再び外すことになるとは、思いもせずに。

第七章 慈愛 (21) 迷宮の出口(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

本日で第7章終了です。

思わせぶりな引きなんですけど…ちょっと、日本の様子を番外編で挟み、次の第8章「奇跡」へと続きます。

う…長くなっても8章で終るか、9章に分けるか思案中です(^^;))

第3回アルファポリス恋愛大賞が終了致しました。

昨夜、ギリギリに「最後まで頑張って下さい」とメッセージを頂き、あまりのありがたさに涙が零れました(号泣)

銀メダルでも胸を張って日本に帰ってきたいと思います(こらこらっ)

冗談はさておき、本当にたくさんの応援ありがとうございました。更新を続けることしか出来ませんが、完結まで全力で走りたいと思います。

引き続きよろしくお願い致します。

どうもありがとうございます(平伏)

(元日は晴れそうだな)

離れの二階から、宗は窓ガラス越しに星空を見上げていた。オリオン座が見える。とくに星に興味がない宗にとって、判る星座はそれくらいだった。

大晦日の深夜、卓巳の個人秘書・宗行臣は離れの二階で一人の女性を待っていた。

もうすぐ日本時間ではカウントダウンだ。ロンドンではまだ昼の三時といった辺りか。レセプションを兼ねたニューイヤーパーティさえ乗り切れば、後は正式契約を残すのみである。

ロンドンのフジワラ本社から定期連絡は入るが、卓巳からは梨の礫つぶてであった。雪音の言葉を信用して、卓巳と万里子だけで送り出したが……。本当によかったのだろうか？ やはり、自分も付き添ったほうが……。宗がそんなことを考えた時、二階に上がってくる足音が聞こえた。

卓巳と万里子が不在なこともあってか、この藤原邸では年末年始パーティの予定はない。住み込みの従業員も、半数が帰省している。母屋も離れも、全てがシンと静まり返り、新しい年が来るのをおとなしく待っていた。

だが、あまり“いい子”で待っていてられないのが宗である。彼がジツと見つめていると、ノックもなしにドアはすつつと開いた。鍵は開けたままだ。入ってきたのは、そのシルエットから明らかに女性。暗い室内で待っていたので、彼の目はだいぶん闇に慣れてきている。その人影が蛍光灯のスイッチに手を伸ばしたのが見え、

彼は声を掛けた。

「電気は消したままのほうがいい。離れが明々としてれば、下手をすれば堅物の執事殿に見つかる」

「でも……この明るさで見えるの？」

ジャツ　宗は窓のカーテンを閉じた。

そして、ベッドサイドの灯りを点ける。この程度の光であれば、遮光カーテンを引いていれば外には漏れないだろう。

「さあ、これでOKだ。ベッドまで来いよ。隣が空いてる」

宗はベッドに腰掛け、欲望を絡ませた声で女を誘った。同じことを卓巳がするには、あと十年修行がいる。

「あら？　本気だったの？　あなたは案山子かかしがタイプなんだと思ってたわ」

オレンジ色の灯りに照らされたのは　藤原家のメイド・永瀬あずさだった。

くくくくくくくく

「君だろうか？　例のFAXを送った犯人は」

わずか十二時間前、宗は母屋の裏手で私服のあずさを掴まえ、問い質した。

「何のことかしら？　証拠を見せてちょうだい」

あずさは自信満々だ。いつか聞かれると判っていたらしい。

だが、そんな彼女に答えず、宗は思わせぶりに笑う。

「言っておくけど、太一郎と絡んでる裸の女があたしだとしても、それで犯人とは限らないわ。太一郎自身かも知れないし、あいつが写真のデータを流出したのかも……。それか、あたしを嫌う誰かが罠に嵌めたのかもね。そう思わない？」

わざと顎を突き上げ、あずさは自慢の胸を張る。そして、微妙な視線を送る宗を、怪訝そうに見返した。

「このことは、社長には報告してない」

「それってどういう意味？」

「俺は個人秘書なんだ。社長が失脚すれば、即行でクビだ」

「だったら何なの？」

「太一郎と尚子親子を押さえれば、クビは繋がる」

宗は肩を竦めしらつとした顔で言った。

その直後、弾かれたようにあずさが笑う。そして瞳をギラギラさせて口にした。

「そんなこと信用するとも思う？ バレてないと思ってるの？ 静香や、それに雪音とも寝てるでしょ？」

雪音のことはよほど嫌いなようだ。“雪音”と発する声だけトーンが凶悪なものに変わる。

「まあ、そんなとこかな。便利な駒は多いほどいい」

宗は丸つきり悪びれず認めた。

これには、さすがのあずさも驚いたようだ。虚を衝かれたのか、彼女の口調は憎しみと嫉妬に塗れた。

「あんな……前と後ろが判らないような女のどこがいいの？」

「スリーサイズは関係ないさ。駒は使い道が多ければ多いほどいい。」

彼女は社長夫婦のお気に入りだ。押さえておいて損はない」

「そんなこと、あたしに言っていていいわけ？」

あずさの声から険悪さが消え掛かった。

「いいことを教えてやるのか？ 君はミスを犯してる。雪音たちの前で万里子様が太一郎様に部屋にいた正確な時間を言い当てたんだって？ その場にいた二人のメイドは、FAXが出回るまで雪音以外には話してなかった。三十分って時間も、君が口にした後で確認したそうさ。しかも、FAXの送信元はこの邸だ」

あずさの目が初めて泳いだ。

「時間は……適当に言っただけよ。それにFAXなんて、だれでも使えるわ。邸内に何人の人間がいると思うの？ そうよ、あなただつて……あの、中澤つて澄ました秘書も……出入りする人間は大勢」

「残念だが無理だ」

「いいえ！ 出来るわ！」

どんどんあずさの声は大きくなる。

その様子に宗はクツと笑い、

「この邸の回線でFAXは一箇所。世帯ごとにナンバーが違うからね。社長の書斎や離れ、使用人棟、警備室にもあるが、全て番号が違う。使用人棟のを使わなかったのは、母屋のほうがバレにくいと思っただからだろう。だが……時期が悪かった。知ってるかい？ つい先日大掃除があつたのを」

宗の声を聞きながら、あずさは真つ青になって行く。

「大掃除？ だから……なんなの？」

「オープン階段下の電話スペース、茜ちゃんが掃除したそうだよ。割り当てられた彼女が冬休みに入り、ようやく掃除を済ませたのが騒動の前日。FAXの指紋が何個残ってたか、君も聞きたいんじゃないかな？」

冷たい木枯らしが、宗の言葉を一層冷ややかなものにした。
元日早々に寒気が来るといふ。明日は今日より寒くなる。そんな
天気予報を宗は思い出していた。

「あたしに……どうしろって言うの？ クビにするって言うなら、
おあいにくさま」

「ああ、辞めるんだってね。会長から聞いたよ。尚子様から相当な
情報料を貰ったらしいな。おまけに、口止め料まで会長に要求した
んだって？」

金の話になり、あずさはピンときた様子で、僅かだが勢いを取り
戻した。

「退職金よ。それとも何？ あたしを恐喝してるの？ 社長秘書さ
ん」
俄に優位に立とうとしたあずさを、宗は一笑に付した。

「おいおい、そんなはした金、俺が欲しがると思ってるのか？」
「だったら何よっ！」

「写真。万里子様が写った写真のデータ、後、そつだな君と太
一郎様の写った奴、あれも使えそつだ」
「……？」

「万里子様は社長にも太一郎様にも使える。それに、次期社長のセ
ックスキャンダルは、証拠付きで持つてるほうが有利だ。そして、
太一郎様と寝てない雪音じゃ役に立たない。俺は藤原の人間じゃな
いが……今はおそらく、一番金の近くにいます」

宗は隠すことなく、視線をあずさの胸元に注いだ。

女を裸にして舐めるような雄の目だ。トップが替われば、雪音よ
りあずさのほうが役に立つ。宗の言葉はあずさの優越感を擦った。

それは、波乱に満ちたロンドンの幕開け直前のこと。

番外編「都内の攻防」 宗 (前編) (後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

さて……何と言いますか、とりあえず、明日の後編をご覧ください)

^^;))

番外編は太一郎に続きます。(多分、前後編になると……)

では、引き続きよろしくお願い致します。

番外編「都内の攻防 宗 (後編)」「(前書き)

*後半に性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。R15
でお願いします。

離れの二階、ゲストルームは宗も数回利用している。無断を含めれば数十回になるかも知れない。螺旋階段を上がり廊下を挟んで左右に部屋があり、いつもは右側を使うが……。

今夜、宗は左側の部屋にあずさを呼び出した。

「その前に、ちゃんと聞かせて欲しいんだけど」

「何を？」

「雪音よりあたしを選んだってことを」

チツ……あずさに耳に聞こえないほど小さな舌打ちをして、宗は立ち上がった。

そのまま無言で歩を進め、あずさの腕を掴むなり引き寄せ、唇を重ねる。

「これが返事だ」

「あなたって本当に悪い男なのね」

あずさは呆れた口調だ。宗は前屈みになり、耳の傍で囁いた。

「否定はしない……選んで欲しければ、俺に似合いの女だと証明してくれ」

唇が耳朶に触れ、掠れる声が直に入り込む。あずさの瞳に焦れた炎が浮かび……。だが、宗はトンツと彼女を突き放した。

あずさは軽く身震いすると、宗に負けまいと必死の面持ちだ。気を取り直し、彼女はコーナーテーブルにセットされたパソコンを起動させる。

数分後、液晶画面に映し出されたのは例のFAXに掲載された画

像データであった。

「デジタルって法的には意味がないんでしょう？ 証拠にはならな
いわよね」

「参考程度だろうな」

「でも……人の心を動かすには充分だと思わない？」

「例えば？」

肩を抱き、宗は親密そうな空気を作り上げ、質問を繰り返した。
「例えば、どんなことかな？」

あずさは思い出したように含み笑いをして、

「あの若いコック……なんて言ったかしら？ きつと、あたしの裸
を見ながらイケナイ想像をしてるんでしょうねえ。あの手の坊やな
ら、ちよつと背中を押せばすぐに犯罪に走るわ。万里子相手に……
ね。あたしなら簡単よ」

キスの効果も出て来たようだ。あずさは興奮気味に語り始める。

「太一郎が万里子を襲ったでしょう？ あれも、うまーく駒を配置
してやっただけ」

「へえ……怖いね。どんな風にやったんだ？」

宗は正面からあずさの瞳をジツと見つめ、尋ねた。

案の定、あずさは面白いようにペラペラと太一郎を嵌めた件くだりを話
し続けたのである。

「尚子様からも、その調子で金を引き出したのか？」

「言ったでしょう？ ちよつとした情報料よ」

そんなことを言いながら、あずさは宗の前に立ち、スーツの上着
を脱がし始めた。誘うような上目遣いだ。舌先で唇を舐める仕草は、
明らかにキスをねだっていた。

宗は指先であずさの唇をなぞり……彼女の興奮を煽る。

「会長には何て言ったんだ？ 退職金には多すぎやしないか？」
「なんて……言ったと思う？」

ベルトを外し始めたあずさの指を押し止め、宗は彼女の背後に回り込んだ。首筋に息を吹きかけ、期待させた後で同じ場所に舌先を這わせる。同時に、右手をスカートの中に潜り込ませた。

「君はこの写真をどうすると言ったんだ？」

「た、太郎を……あの腐った男の本性を、マスコミにブチ撒けてやると言ったのよ！ 何が涙の和解よ……妾の孫のために金を払うなんて……馬鹿なバアさん、よ。ねえ……お願い、もう」

カチツ。

それはスイッチの音だった。室内は突然、煌々とした灯りに照らし出される。

「な、何？ 何なの？」

あずさは声を上げ、眩しそうに額に手を翳した。

宗も目を細めてドアの辺りに視線をやる。そこに立っていたのは、メイド・和田雪音であった。

く*く*く*く*く*

(少し早いが仕方ないか……)

どうやら、これ以上は我慢出来なかったと見える。雪音は燃えるような目であずさを睨んでいた。

「もう充分でしょう？ それとも、この女とその先までやりたいわけっ！」

雪音は視線をあずさに固定したまま、宗を怒鳴りつける。

「いや、とんでもない。さて、刑法二二二条脅迫罪、刑法二四九条恐喝罪の証拠は揃った。ああ、俺は強要してないぜ、質問しただけだ」

宗はあずさから離れながら、乱れたシャツの裾をズボンに押し込みベルトを締め直した。そのままベッドサイドに近づくとライトに手を伸ばす。宗が持ち上げたのはボールペン二本分くらいの黒い物体 ICレコーダーだった。

彼は呆気にとられるあずさの前を横切り、ソファに置かれたブリ―フケースから書類を取り出した。

「悪いことは言わない。これにサインするんだ。簡単に言えば恐喝罪や名誉毀損罪を認め、二度とこの家に関わらないという誓約書だ。会長が沖倉弁護士ではなく、俺に任せてくれたことに感謝するんだな。沖倉先生なら完璧に刑務所送りにされるぜ」

あずさはようやく立ち直ったのか、真っ赤になって叫び始めた。

「ふざけないで！ 違法だわっ！ 強要と同じじゃない。あんな…

…あんな、卑劣な手段で……あたしを誘惑したのよっ！」

「そうだったかな？ 証拠はあるかい？」

「む、無断で……録音なんか……」

「無断？ 俺はライトの横、見える位置に“これ”を置いて“これ”でOKだ」と言っただけだ。異論を唱えなかったのは君だよ」

宗の瞳から気だるさは消え、違う目的に輝いていた。人を動かすことにかけては、彼のほうがあずさより数枚上手である。

「なっ!？」 この男はね、あんたのことも利用してるだけよ!
社長夫婦に気に入られてるからってね」

敵わないと思ったのか、あずさの標的は雪音に移る。

だが、

「残念でした! 利用してるのは私のほうよ。融通は利くし、セツクスは上手だし、お金も持つてるし、ね。でも、あんたが思ってるような、卓巳様に近づくために利用してるわけじゃないわ!」

雪音の大胆発言を宗は笑いを堪えながら聞いていた。だが、今にも爆笑しそうに頬は震えている。

「こんな……男の、セフレの一人になっただくらいで、勝ったつもり?」

キスひとつ、指先一本に翻弄されたのが悔しいのか、あずさの声にいつもの迫力はなかった。

そうなれば、口で負ける雪音ではない。

「勝ったつもりも何も……悪いけど、あんたに負けた覚えは一度もないわ」

これには宗も口笛を吹く。そのまま、肩を揺らして笑ったのだった。

く*く*く*く*

ふと気づけば……すでに新年である。

あずさは誓約書にサインをして、勤務年数相応の退職金を受け取り、藤原邸を後にした。尚子だけで済ませておけば良かったのだ。行き掛けの駄賃よろしく、皐月にまで金を要求し、愚かな結末を迎

えた。

さすがに相手構わず欲情する年齢ではない。だが、ムードを作ればそれなりに気分も盛り上がる。あずさを藤原家の敷地から追い出してすぐ、宗は雪音を右側の部屋に連れ込んだ。

ほんの三十分間で見事なほどに空気は入れ替わる。二人の肌から立ち上る熱気に、部屋中が暖かい気流に支配されていた。

「ねえ、何て言ってココに呼び出したの？」

雪音はベッドにうつ伏せになり、両手の上に顎を乗せ、宗に質問した。背中のシャープな直線と、下に向かうほど丸みを帯びてくる曲線が、酷く扇情的だ。

宗は手の平にそれを感じつつ答えた。

「ナイショ」

「まさか、あの女を抱いたの!？」

「真冬に裏庭で？ ムスコが縮み上がるよ」

電話機の指紋の件。あれはハツタリである。指紋に日付は入っていない。しかも、怪文書送信時の指紋だと証明も出来ないの、実際に指紋の採取はしていなかった。宗は、無駄なことはしない主義である。

「キスマまでして誑し込んで告白させるなんて。アレで通るの、弁護士センセ？」

「俺は秘書として言われた仕事をしただけさ。ま、適当に脅しときゃ、しばらく悪さはしないだろ？」

「万里子様だったら……どうしたかな。こういうやり方は良くないって止めたかもね」

裏表がなく馬鹿を見ても真正直に生きることには、確かに憧れる。

だが……。

「馬鹿正直に生きてる人間は嫌いじゃない。でも……黙って鍵を貸してくれるお前が、俺は好きだよ」

腰の終点を過ぎ、丸みがなくなったところで谷間に指が吸い込まれる。

「やつ……ん……やだ」

「このために俺を利用してるんだろ？ 楽しめばいい」

「そ、それは……だって……あ！」

「遠慮するなよ。最大限にご奉仕させて頂きましょう」

「ちよつと……それ、やつ！」

奉仕は指から口に移る。嫌だと言う割に、脚は開き気味で……腰を動かし始める辺りが可愛い。

膝を立たせ、腰を突き出させて……宗はそのまま重なった。雪音のようなイジツパリを後ろから突き上げるのは、まるで征服者の気分だ。生意気な口を塞げないのが残念だが。

「あ、ヤダ……。もう、後ろは、ダメって、言った、のに」

宗の動きに合わせて雪音の声も切れ切れになる。

「どうして？ 悪くないってこの中が言ってる」

「だって、顔……見てたい、から」

そんな台詞を耳まで真っ赤になり、雪音は呟く。

宗は動きが止まり……“可愛い”が“可愛くて仕方ない”に変わった。

一瞬で、しかも離れることなくポジションが入れ替わり、二人は向かい合う。

「仰せのままに、お姫様」

いつもの新年とは違う予感に、なぜか笑みの零れる宗であった。

番外編「都内の攻防」 宗 (後編) (後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

宗行臣……真面目か不真面目か判らん男です(苦笑)

とりあえず、あずさは追い払いました。

次は太一郎です。いや、彼を追い払うわけではないですけど(^^;)

都内の攻防戦はさらに続きます。

よろしくお願い致しますm()m

番外編「都内の攻防 太一郎 (前編)」

藤原グループ本社ビル、都内に建つ地上五十四階、地下五階。

先代社長・高德の急死で頓挫^{とんざ}仕掛けた計画を、卓巳が引き継ぎ着工、三年前に完成した。東京タワーはもちろん、富士山まで望める高さにオフィスはある。

「すつげえー！」

卓巳のデスクの後ろに立ち、窓からの眺めに太一郎は絶叫している。

「すげえな。あいつ毎日こんなトコで仕事してんだよな」

それは単純な賞賛だった。

嫉妬など感じるはずもない。任されてすぐ、こんなものを建てる人間の神経など、太一郎には到底理解出来ないからだ。もし太一郎であれば、何も出来ず周囲に従うだけであろう。

(俺は百回死んでも卓巳にはなれねえな)

太一郎は、そんなことを胸に思い浮かべる。

「太一郎様、良くない情報です」

そう言ってファイルを抱えて現れたのは卓巳の秘書、宗行臣だ。彼は太一郎の目に、何を考えているのか判らない、得体の知れない男であった。

司法修習で一緒だったと言い、社長就任後しばらくして、卓巳が連れて来たのだ。

宗はある意味、欲望とは縁遠い男に見える。性欲だけでなく、ギ

ラギラした出世欲も、金に対する執着心も感じられない。全てにおいて要領が良く、当たりがソフトで敵を作らないタイプに思える。その点、卓巳も太一郎も方向は違うが要領が悪く敵も多い。

そんな宗だが。

太一郎の母・尚子の調査によると、女性問題を起こして最初に務めていた弁護士事務所をクビになったという。それは不味いだろうか？と思わなくもないが……。卓巳が認めている以上、おそらく仕事の上で欠かせない存在なのだろう。

「こないだから良い情報って聞いたことないぜ」

「そう言わないでください。フジワラ・ロンドン本社で何かごたごたが起きているようです」

「それって卓巳絡みか？」

「おそらくは。契約完了の報告もありませんし。社長からはレセプション終了の連絡を貰ったきりで……。万里子様との仲がどうなっているのかも不明です」

二人で顔を見合わせ、深いため息を吐いた。

「本当に良かったんだろうな？ 夫婦仲も契約もぶっ壊れて、卓巳が戻って来ないなんてことは……。ないよな？」

太一郎の声はおっかなびっくりだ。

「それは……」

「ないって言えよっ！」

答えない宗を睨みつけ、太一郎はガンと机を殴った。

「畜生！ こっちは七五三以来のスーツなんぞ着て来たつてのに」

「いや、馬子にも衣装ですよ」

「雪音と同じこと言っつてんじゃねえっ！」

今日の太一郎は濃紺のオーダーメイドスーツだ。ボタンは二つ、

典型的なりクルートスーツである。無精ひげも綺麗に剃り、このまま面接にでも行けそうだ。丸刈り頭の違和感も、太一郎の体格なら体育会系だと思ってももらえるだろう。

だが、これから彼が向かうのは面接ではない。

藤原グループの取締役会であつた。

太一郎は今朝の尚子の狂喜乱舞ぶりを思い出していた。

「この日が来るのを待っていましたのよ。ええ、あたくし信用してましたわ。太一郎さん！ やっぱり先代に良く似て、貫禄がありましてよっ」

ただでさえ、緊張のあまり胃がひっくり返りそうなのだ。そこを耳元で騒がれ、以前なら怒鳴りつけるか逃げ出すのが精々であつたろう。

だが、「血の繋がつたいとこ同士、力を合わせてね」と臯月に頼まれては断わることは出来ない。

今の太一郎にとって、臯月の信頼が存在価値と同等になっている。臯月の……祖母の期待に応えるために、成人式ですら着なかつたスーツを着て、初めて本社ビルに足を踏み入れた。

なんと、父と母も一緒だ。

幼稚園の入園式じゃねえんだぞ、と言いたいところだが……。今日は我慢である。

「何のために恥を掻きに来たのか判んねえだろ、卓巳が戻つて来なきゃ」

「人の信頼には応えずにはいられない方ですからね、社長は。きつと、戻られますよ。戻る場所があれば、ですが」

何気なく、宗は太一郎にプレッシャーを与えてくれる。

「俺……トイレ行ってくる」

「そろそろ皆様お揃いです。先代社長の派閥の方も、皆様お越しですよ。遅れないようになさってください」

「逃げた時はお前が上手くやってくれ」

「大丈夫です。今のあなたは逃げませんよ。太一郎様」

くわくわくわくわく

(わ、判らん……一体、どこに繋がってるんだ?)

適当に下りたのが間違いだった。

最上階はワンフロア全部がF総合企画で締められている。そして、取締役会の行われる会議室は四十階だと聞いていた。素直にエレベーターで下りればよかったのだが……。

トイレから出てエレベーターホールに向かう途中、話し声が聞こえたのだ。

「まさか、藤原社長の代わりにあんな馬鹿殿がやって来るんじゃないだろうな」

「潰れるって。勘弁してくれ」

「ママあ、会社の場所が判りませーん。ってか?」

その場にいた複数の社員が一斉に笑った。

判ってはいても、やはり耳に入ると萎える。どうにか頑張って乗

り切ろうという気持ちだが、どうせ無駄だ、と思えてしまふ。

その社員らの前に出て行くには……。

太一郎の中の、ありったけの勇気をかき集めても、足は一步も動かないのだ。

「あの……」

「……！」

驚いて振り返ると、卓巳の秘書室で見かけた女性が立っていた。

「あの、大丈夫ですか？」

おそらくは、秘書の一人だろう。二十代半ばから後半で黒のスーツを着ていた。それも黒一色ではなく、所々白が加わるのでとても上品に映る。背は高く、中程度のヒールを履いて一七〇は超えていそうだ。黒いバインダーを大事そうに抱え、見るからに『大人の女性』であった。

太一郎にとって一番苦手なタイプだ。

年齢はさほど変わらないのだが、もろに劣等感を刺激される。

「失礼ですが、藤原社長のご親族さまですよね？」

「……ああ」

「一社員に笑われたままで、よろしいんですか？」

「あいつらの言う事は間違っていないからな。俺は卓巳……社長の代わりにはなれない。まじで潰すって」

「だったら、何をしに来られたんですか？ 社長がロンドンに発たれてから、社内には妙な噂が広まっています。社長が契約に失敗して更迭される、と。今日の緊急取締役会には、最近欠席がちだった前社長の派閥の方も多く見えています……。社長が解任された時はF企画そのものが解散でしょうか？ 私たちは次の仕事を探さないといけませんか？」

声からは微かな怒りが感じられた。縁なしメガネの奥にある黒い瞳に見据えられ、太一郎は返事も出来ない。

黒いスーツの女性はため息を吐くと、

「失礼致しました。あなた様に伺っても無駄でしたね。よろしければ、お母さまに聞いてきて頂けませんか？」

薄いレンズ越しに軽蔑の視線が刺さる。

太一郎は「ああ、判った」と答え、エレベーターホールから逃げ出すように、階段に向かったのだった。

四十五階から五十三階まではホテルが入っていた。そのため、太一郎の下りた非常階段側は施錠されており、予想外にも丸十階分を下りる羽目になったのである。

そして中に入り飛び乗ったエレベーターは、なぜか四十階には止まらず……。

太一郎は琴の音色と共に、お正月用に飾り付けられたショッピングモールを目の前にして立ち尽くすのだった。

(チクシヨウ！ 何がどうなってるんだよ)

こんなことなら意地を張らず、社長室に戻って宗に連れて行って貰うんだ。と思っても後の祭りなのである。

く*く*く*く*

「どうなってるんだね、宗。なぜこちらまで案内して来なかったんだ？」

「いやはや困ったものだ。社内で迷子とは」

「宗くん。ちゃんと迷子札は持たしてあげたのかね」

社長派の連中は面白おかしく囃し立てる。

正月早々、緊急の名目で召集された彼らは一様に不満顔だ。彼らにとっては先代の影など、今更、と言うものだろう。先代の業績は大きい、それを引き継ぐ二代目というのは、得てして役者の足り

ない人間が多い。しかし、卓巳は見事にそれらの定石を覆した。

卓巳の方向性に「積極的過ぎる」「守りに入ったほうがいい」という意見もある。だが、卓巳は実績を数字で示してきた。たかが数字、されど数字である。一番、目に見えて判りやすく、人の心を捉えやすい。給料が増えて文句をいう社員はいないし、配当金が増えて嫌がる株主もない。

だが、中には先代の遺業を継いだだけに過ぎない、と声高に言う連中もいた。先代社長派の人間は今も尚子と結託し、太一郎を次期社長に、と推している。それが先代の遺志であり、我々は卓巳に頼るのではなく、太一郎と共に苦勞する義理がある、と。

浪花節と言えば聞こえは良いが、卓巳では傀儡に出来ないということだろう。

今回、尚子はそんな先代社長派を動かした。

「卓巳さんが辞意を表明致しました。外部からの圧力が掛かる前に、次期社長を社内で決定したいのですけれど……。会長は太一郎を推して下さいましたのよ」

最後の一言は決定打となる。

経営には口を出さないが、臯月は筆頭株主だ。そんな彼女にとって太一郎は、生なさぬ仲の尚子の息子。そんな太一郎を臯月が認めたと云うのなら、藤原家でもんでもないことが起こったに違いない。誰もがそう思った。

くわくわくわくわく

「遅く……なりました」

太一郎が第一会議室と書かれたドアを押し上げた時、一斉に視線

が注がれた。

その様々な思惑の籠もった目に、太一郎は一瞬怯む。謝って、出て行くかとも考えたくらいだ。

「よろしいのよ、太一郎さん。次期社長のあなたを、皆が待つのは当然なのだから」

尚子も取締役会に席を持っている。

先代から相続した関係で株主であることも理由の一つだ。だが、普段は会議に出席することはあり得ない。経営に口を出さない約束で、彼女は役員報酬を得ているからだ。

会議室は無機質な冷ややかさを持った広い空間だった。

ダークブラウンの大きな重役用の会議机が中央に置かれ、周囲に黒い革張りの椅子が配置されている。宗や尚子のほかに、ざっと二十人はいるだろうか。

母・尚子の恐ろしいほどの笑顔に、太一郎は身が竦んだ。この笑顔が数分後にはどう変わるだろう……本音を言えば想像したくない。やっぱり無理だ、出来ない、自分がやらずとも卓巳が戻って来てどうにかするだろう。そして、太一郎の心が回れ右をした瞬間、たった今入ってきたドアが大きな音を立てて開き、彼の鼓動は跳ね上がった。

「ああ、よかった、お判りになられたのですね」

それは、ついさっきエレベーターホールの手前で話しかけてきた女性である。宗は「秘書室の志賀さんです」と言い、彼女に太一郎を探して貰っていたと告げる。

志賀は笑みを浮かべて太一郎を見たが、眼鏡の奥の瞳は笑っていない。それは明らかに、場違いで愚鈍な男を蔑んでいた。

だが、彼女が入ってきたことで、太一郎は逃げるタイミングを外

したのである。

（＊）＊）＊）＊）

「以上が緊急招集のあらましです。全て、藤原尚子様からのお申し出となります。今回の一件に関しまして、会長の藤原臯月様から委任状を預かっております」

そう言つと、宗は内ポケットから会議机の上にスツと置いた。一通の白い封筒で、中に委任状が入っていることが判る。

「会長は、藤原太一郎氏に本日の取締役会における決定権を委任されました。尚、ロンドンのフジワラ本社から、ライカー社との契約締結の報告はありません。藤原卓巳社長とは連絡が取れておらず、今回の取締役会の決定につきましては、承認なさらない可能性もあることをご承知おき下さい。以上です」

宗が全員の前で話し終えると、すぐに尚子が言った。

「本人が辞めたいと言つたのよ！ あたくしはちゃんと聞きましたわ。宗さん、あなたも聞いたでしょう？ この太一郎に任せる、とそれを後になつて承認しないなんて」

興奮する尚子の横で、敦が「止めないか」と小声で制する。

太一郎は会長の代理ということと同の上座に座り、そんな両親の姿を見ていた。太一郎は親の、特に母の姿が恥ずかしい。こんな両親からまともな息子が生まれるものか。そう思い続けた。

だが……。

「太一郎様」

背後に立つ宗が、太一郎の背中を突いた。早く口を開けとジェスチャーで示す。太一郎は息を吐き、そして少し吸って止め……立ち

上がった。

「俺は……」

足を後ろからコンと蹴られ……宗が首を横に振る。

「わ、私は……今回の件について、会長より一任されてきま……参りました」

漸ゆるう話し出すと、宗は二歩ほど後ろに下がった。

「その……皆さんが社長解任について話し合われる前に、聞いて頂きたいことがあります」

その言葉に全員顔を上げる。

太一郎は生唾を飲み込み、何度か口を開きかけ……やがて思い切ったように話し始めた。

「やっぱ俺に卓巳みたいに話すのは無理なんだよ。だから、悪いけどこんな感じで聞いてくれ。」

俺は“藤原”には入りません。先代の爺さんも、本当は俺なんかに継がせたくはなかったと思う。それに、本当に卓巳は凄い奴で……会長から従弟として協力してやってくれと言われたけど、今の俺には無理です。この厳しい情勢を乗り切れるのは卓巳以外にはいない。

だから、どうかお願いします。奴がライカー社との契約を済ませて戻ってきた時、辞意表明の件はなかったことにしてやって下さい。

お願いします！」

太一郎は一步下がると、机に額がつくほど頭を下げた。

ざわつく会議室内に椅子が倒れる音が響き渡る。尚子だ。彼女は憤怒の形相で立ち上がった。だが、怒鳴ろうとしたその時、彼女を制し、敦が口を開いた。

「今回の一件、家内がお騒がせして本当に申し訳ない。先代社長に、私は大変世話になりました。おそらく、そういった方々も多いと思われる。ですが、今はもう卓巳くんの時代です。倅はご覧の通り、まだまだ口の聞き方も知りません。この騒動の責任を取るといふ形で……私と家内は取締役会から退きたいと思います。どうぞ、ご承認下さい」

敦の一言は拍手により承認され、会議は予想外の終幕を迎えたのであった。

くわくわくわくわく

怒りが納まらないのが尚子であろう。

役員からも外れ、太一郎は藤原グループに入らないという。

「あなたは……あなたがたはあたくしを何だと思ってるの!? こんなこと、こんなこと絶対に認めませんっ!」

閉口する太一郎と敦の横から、宗が口を挟んだ。

「尚子様、年末に使用人の永瀬が辞めたのをご存知ですね」

「それが何だというのっ!? あたくしには……」

「彼女はあなたから金品を受け取り、工作上偶然知り得た情報を流しました。万里子様の一件です」

尚子はICレコーダーから流れるあずさの声に青褪める。そして目の前に、あずさが署名捺印した誓約書を差し出されたのだ。

「あなたは度々彼女に命じ、社長に対する嫌がらせをしていますね。彼女が罪に問われた場合、この件もあなたの命令で、と」

「違うわ! あ、あたくし聞いただけですもの。それを話しただけなのよっ! 第一本当のことじゃないの。そんな」

「尚子様、名誉毀損は真実であつても罪に問われることをご存知ですか？ 邸内に広めた時点で、あなたは永瀬の共犯です」

宗の言葉に尚子は項垂れ、敦に付き添われ会社を後にした。

「ご立派でしたよ。太一郎様」

「……高えスーツが無駄になったな」

宗は微笑み、一枚の紙を差し出す。

「苗字は敦様の旧姓・伊勢崎を使いました。私の知人と言うことで……市の委託業者でちゃんとした会社ですが、楽な仕事ではありませんよ」

「いいんだよ。ムシヨに入ったつもりで働くんだからさ」

何もかもなくした割に、太一郎の表情は晴れやかだ。彼は藤原家を出て、汲み取り業者で働くことになった。宗の紹介で、『伊勢崎太一郎』として。父・敦も了解している。

「ま、悪いことをしたら便所掃除と相場は決まっていますから。ちょっといいですね」

「お前、言いたい放題の奴だな」

「では……いつか、ここにお戻りになれることを願って」

そう言って差し出した宗の手を太一郎が掴んだ瞬間

「宗さん！ ロンドンから、社長からお電話です！！」

番外編「都内の攻防

太一郎

(後編)

「(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

太一郎も頑張りました。宗くんはあっちこっちで活躍してるし…)

苦笑)

さあて、ロンドンです。

この連絡は…数話先の話になります。

では、8章を引き続きよろしくお願い致しますm)——(m

第八章 奇跡 (1) 反撃、そして反撃

「はい……あ、いえ。誰も来てませんし、連絡もありません。ええ、気をつけます。卓巳さんも無理なさらないで」

万里子は静かに受話器を下ろす。その横には本日発売のタブロイド紙があり、ジューデイスの顔が一面に大きく報じられていた。

卓巳が部屋を出て丸二日が過ぎた。

今日はもうロンドン滞在十一日目である。卓巳のガードは相変わらず厳しい。ライカーからのアプローチはカード一枚であっても、万里子には届かないよう手配されていた。

そのため、日本から様子を伺う電話も万里子には繋がれず……。万里子自身もあんな形で飛び出してきた藤原家や実家に、連絡を入れ辛くなっていったのだった。

リッチモンドから戻った翌朝、英国大衆紙ザ・サンに、日本から来た実業家の情事が掲載された。

万里子の卓巳への不信感を持たせるために、ライカーが企んだスキャンダルであった。だが、結果的に不発に終わる。

記事は厳格で仕事熱心な卓巳のイメージを損ねるものには違いない。万里子自身、目にした時は不快に感じたが……。ライカーは大きな失敗をしたのだった。

まず、卓巳とジューデイスの関係を一夜だけのものにしなかったのが、最大のミスとなる。

確かに、事業計画が持ち上がった一昨年から、卓巳は頻繁に英国

ならびにEU各国を訪れている。そのため、ジューデイスとの関係はその都度、複数回に渡るものと彼女は告白していた。

もちろん、ライカーに卓巳の下半身事情までは知りようがない。しかも、卓巳は結婚二ヶ月の花嫁を連れて新婚旅行中であり、その情熱のほどをライカーは見せつけられている。彼が卓巳を自分の同類と思う要素は充分にあった。

その新妻を無視した行為、英国モデルを娼婦のように扱う日本の若手実業家 それらを淫靡的に脚色され、掲載された。

だが、万里子は卓巳の苦悩を知っている。

ジューデイスに酷い言葉で罵られ、ウォツシユルムに座り込んでいた卓巳の姿は忘れようにも忘れられない。ジューデイスの嘘が判る以上、卓巳に対する愛情は増しても不審など感じるはずがなかった。

そして、最もライカーの予想を外したのは卓巳の行動だった。

ザ・サン紙が発売され、その日のうちにインターネットで大騒ぎとなった。当然、卓巳も反撃に出るだろう。ライカーはそのためにわざと卑猥な言葉を列挙させたのである。卓巳は怒り狂って反論し、彼の氷の仮面を叩き壊してやろう。それが一番の目的だったと言ってもいい。

だが、卓巳は一切の取材を無視し、対外的にもノーコメントを貫いた。抗議も反論もしない卓巳に、ライカーは戸惑い、次の手を打てずにいたのである。

そして記事から二日目の朝、ライカーは卓巳の取った反撃手段を知る。

今、万里子の手元にあるのはザ・サン紙ではなく、デイリー紙であった。デイリー・スター、デイリー・スポーツ、同じ種類のタブ

ロイド紙と言つべきか。

そこに書かれてあつたのは、『ジューデイス・モーガンに愛人発覚』の文字。

同時に、彼女の長年に渡る薬物依存と入院歴、十代の逮捕歴まで明らかになる。愛人はかなり知名度のある業界人で、しかも英国人だ。わけの判らぬ日本人との噂より、マスコミは一気にそちらに喰い付いた。

あつという間に、スキヤンダルはスキヤンダルで上塗りされ、タクミ・フジワラの名前は一日で紙面から消えたのである。

無論、これが偶然のスクープであるはずがないだろう。

くくくくくくくく

その日の午後、リッツ・ロンドンの『グリーンパーク・スイート』を一人の男が訪れた。

本来なら、卓巳の仕事は全て終わり、仲直りした二人はウェールズの湖畔でハネムーンを楽しんでいる頃である。

それが……卓巳とも逢えず、ライカーの影に怯え、万里子はホテルの部屋に籠もらざるを得ない状況だ。日本語で書かれた旅行誌を見ながら、せめて目の前のグリーンパークでも卓巳と一緒に歩けたら、そんな想像をして楽しんでいた。

『社長の命令で参りました』

そう言って苦虫を噛み潰したような顔で立っていたのは、ジェームズ・サエキだった。

彼はフジワラ・ロンドン本社の社長である。日系二世で一見すると日本人だが、よくよく見ると、目も肌も髪の色も薄い。

万里子はジェームズのイントネーションに、卓巳と初めて結ばれた朝にやって来た社員を思い出していた。今より訛りの強いコックニーだったが、声は彼に違いない、と。

ジェームズとは最初にレセプションで挨拶を交わした。だが、その時の彼は招待客に合わせて無難な英国英語を使っていた。それに、万里子はどこか避けられているように感じて……出来る限り近づかないようにしていたのである。

そういえば卓巳が以前、ロンドン本社を任せている人間は、テムズ河の北側、イーストエンド出身だと言っていた。

五十代の優秀な男だ。日系人だが日本を訪れたことはなく、日本嫌い。日系企業に勤めるのだから日本語くらいは覚えて欲しいものだが……。

万里子が日本で聞いたことを思い出しつつ、

『主人に何かあったんですか？ どうぞ、お入りになって下さい』

何の警戒もせずに万里子はジェームズを通した。

それもそのはず、一度ライカーを通した件で卓巳は支配人に嚴重抗議をしている。そのチェックを抜けてここまで来れたということは、卓巳の命令が事実だとしか考えられない。

（卓巳さんに、会社に、何か悪いことが起こったの？）

万里子の不安は的中する。

しかし、それは全くの予想外で……ジェームズの手紙はとんでもないものであった。

第八章 奇跡 (1) 反撃、そして反撃(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

本日から第8章です。

R指定の問題で「なるつ」さん全体が揺れておりますが…(^^;) この2人の結ばれる過程をゆっくり丁寧に描いているつもりなんです。が、伝わっておりますでしょうか？

(宗くんは除外してやって下さいm(____)m)

出来ればこの章でラストまでいきたいと思っています。

よろしければお付き合いくださいませ(平伏)

第八章 奇跡 (2) 裏切り

『非常に……申し上げ難いのですが。社長はあなたを、サー・ステイブソン・ライカーの許にお連れするように、このことをごぞいませ』

万里子の中で心臓と時間が止まった。

耳にした言葉が自分の翻訳ミスかと思ひ、愛想笑いまで浮かべてしまつた。

『あ……いえ、ごめんなさい。よく聞こえなくて……出来ればもう一度』

『あらゆる手段を取りましたが、このままではフジワラ・ロンドン社は閉鎖に追い込まれます。東京本社の蒙る打撃も少なくない。社長は個人的な感情より、会社の存続を優先されました』

目眩がした。

卓巳が万里子をライカーに差し出すなんて……。それは、やはり卓巳にとって万里子は『愛する妻』ではなかったということだろうか？

『た、卓巳さんが……そう仰つたんですか？ そんな馬鹿な。そんなこと信じられません。そんな……』

英語で答えていたはずが、万里子はしだいに日本語になる。

『判りました。少々お待ち下さい』

ジェームズは携帯電話を取り出し、どこかに電話している。相手は卓巳であろう。なぜ彼は電話を掛けるのか。卓巳が出て何と云うのだらう。卓巳は……卓巳は……。

ジェームズは二言三言話し、すぐに万里子に渡した。

『 どうぞ 』

「卓巳……さん？」

「万里子か？ 突然のことで済まない。全てジェームズに指示してある。彼に従ってくれ」

「そんな……本気ですか？ 本気で仰ってるの？」

「ああ、済まない。時間がないんだ。とにかく、必要なものは向こうで調達すればいい、君の荷物はあとで送らせるから……すぐに彼と一緒にそこを出てくれ」

「……そんな……そんな……」

「愛してるよ、万里子。君のためだ。向こうでも充分楽しめる。僕の言う通りにするんだ。いいね」

「たくみ……さん」

プツツと電話は切れ、携帯の画面はやがて真っ暗になった。まるで、万里子の心の中のような。

(これだけ……？ たったこれだけで、わたしたちは終わりなの？)

『では奥様、参りましょう。お荷物は手荷物だけで構いません。後でお送りいたします』

ジェームズはニコリともせずに行った。

万里子の頭は麻痺したようだ。ちゃんと動かず、まともに考えることも出来ない。だが確かに、卓巳はこのジェームズに従えと言った。それは、万里子を差し出すことでライカーと和解したのだろうか？ 恒久的に？ それとも一晩？ ……或いはライカーが飽きるまで。

混乱する万里子の心を打ちのめすように、ジェームズは言葉を重

ねた。

「サーは女性には優しい方です。彼の愛人は皆、望むものを与えられて幸せに暮らしておられる。自由になる資産はこれまでより多くなられますよ。あなたは何も失わない。ただ、パートナーが替わるだけだ」

彼の後半部分の言葉に蔑みが含まれていたことなど、万里子に気づく余裕はない。

考える時間も泣く時間も与えられず、万里子は急き立てられて身支度を整える。「愛してる」の言葉で卓巳は万里子に何をさせようと言うのか。

その時、万里子は一つのことを思い当たり愕然としたのだ。

卓巳はまだ怒っているのかも知れない、と。

彼に邸内で恥を掻かせ、しかも太一郎に真実を話した万里子を許してはいないのだ。それなのに、ロンドンで彼女を抱いてしまった。万里子の誘惑に落ちたことを、卓巳は後悔している。そうでなければ、本当に“愛する妻”を他人に譲るなどあり得ない。

この場で拒否して帰国すればいい。

だが……頭の何処かに、ひよつとしたら卓巳の愛は本物で苦渋の決断なのかも知れない、と過る。もしそうなら、卓巳を見捨てて行くわけにいかない。

そして万里子は、卓巳を信じると決めた心に従った。

自分に出来る全てのことをしよう。どうせ、いつ死んでも構わないと思ってきた命だ。卓巳のために使えるのなら、たとえどんなことでも……。

「二度と外さないでくれ。愛してるよ、万里子」

「わたしも……わたしも愛してるわ、卓巳さん」

万里子は結婚指輪に唇を寄せて囁く。そして自ら外し、シッティングルームの白い円形テーブルの上に置いた。

万里子が廊下に出た時、背後で『グリーンパーク・スイート』の扉が音を立てて締まり……。それは、卓巳と共に歩む道を閉ざされた瞬間であった。

くわくわくわくわく

『全く！ なんだってジェームズは携帯で掛けて来るんだ！』

英語で悪態を吐く卓巳に、秘書代わりのジェイク・フォレストは苦笑しつつ答えた。

『部屋の電話ですと、従業員にライカーの息が掛かっていれば筒抜けですからね』

『だが、今の奴なら盗聴だってしかねないだろう。携帯は危険だ。だからこそ手紙を持たせたのに』

卓巳は苛々した表情だ。万里子に対する指示は全て手紙に書いた。日本語で書かれた手紙なら、ちょっとした暗号にもなる。それに万里子なら卓巳の筆跡が判るはずだ。

この時、卓巳はライカーを追い詰めていた。元々、ライカー社の急激な成長ぶりに目を付け、調査させてはいたのだ。予想通り、ライカー社は強引が過ぎて違法スレスレ……いや、違法を疑われる行為すらあった。その証拠さえ握れば認可を出させることは容易だ。

さすがのライカーも会社や名誉と引き替えにしてまで、万里子を得ようとはしないはずだ。

だが、卓巳に弱味を握られそうな状況を、ライカーも察知したらしい。そして、そうなる前に万里子に対して乱暴な手段を取りそうだと、その情報入手した。

万里子は英国のハネムーンを楽しみにしていた。契約を済ませたら日本に連絡して滞在を延長しよう。せめて三日、いや二日でも万里子の望む所に連れて行ってやりたい。卓巳はそんなことを考えていたのだ。しかし、それに拘って万里子に何かあつては目も当てられない。

これ以上万里子を英国内に置くのは危険だ。ライカーの手が届かない国外に退避させよう。

そして、飛行機のチケットを手配し、ロンドン本社トップのジェームズ・サエキに手紙を持たせた。リッツの支配人にも、ジェームズを部屋に通すように伝えたのだ。

ジェームズの携帯電話で万里子と話して約二時間が過ぎた。

ヒースロー空港に着いたら公衆電話から連絡を入れるように言っている。だが、肝心の連絡は一向に来ない。

そして……。

『社長！ 調査が完了しました！』

こつも都合よく先手を打たれ、正式契約目前に虚偽記載にまで発展するのはおかしい。万里子のことがあるにせよ、事前に準備しておかなければ出来ないことだ。

卓巳はジェイクに命じて、ロンドン本社内にいる内通者の存在を探っていた。ジェイクは卓巳の期待に応えてよく働いた。見た目は軽薄で頼りなく思えるが、中々機転も利いて優秀な頭脳をしている。

当初、担当部門の社員を中心に調査を進めていたジェイクだった。しかし成果は上がらず、卓巳の許可を得て重役以上の代表取締役まで調査の手を広げていた。

『詳細の確認にまでは至ってませんが……これはちょっと……大変なことになりそうです』

ジェイクの顔は青褪めていた。そんな彼を見て、卓巳は瞬時に嫌な予感が湧き上がる。

『誰だ？』

『ロンドン本社社長……ジェームズ・サエキです』

第八章 奇跡 (3) 愛の値段

『……ジエームズ・サエキだと?』

卓巳の思考が凍りつく。

社長の顔色を伺いながら、ジエイクは続けた。

『彼は二十五年連れ添った妻を五年前に亡くしました。その一年後、二十代の女性と再婚しました。それが今の妻、ナタリーです。かなりお金の掛かる女性らしく……ミスター・サエキの生活も荒れ始めたようです。ハイリスクの投資ファンドや先物取引に手を出して、十万ポンド以上の借金があります。調査は不完全ですが、賄賂^{わいろ}だけでなく、横領の可能性も出てきました。彼がライカー社の人間と私的に会っているのは確かなようです……社長?』

ジエイクの報告を最後まで聞かず、卓巳は手元にある受話器を取った。

待たされる時間も忌むしい。

ジエームズ・サエキは、自分の中に流れる日本人の血を嫌っている。上流階級^{アップパークラス}であった英国人の母は身分を捨て、日本人の男と結婚した。そのため、彼の人生は労働者階級^{ワーキングクラス}からのスタートを余儀なくされたのだ

卓巳は古参の社員から聞いた、ジエームズの話思い出していた。その日本人の血が縁でフジワラに採用されたのだが、彼はそれすらも触れられるのが嫌な様子だったという。

このフジワラ・ロンドン本社を設立したのは先代社長だ。卓巳が関わったのは、フォークナーの申し入れがあった一昨年からである。当時、ジエームズはすでにロンドン本社社長だった。一見して虫の好く相手ではなかったため、卓巳も近づかずにしたのだ。礼を失することさえなければ、日本人に対する感情などどうでもいい、卓巳

はそう思っていた。

卓巳はチケットを予約したエール・フランス航空と、パリのホテル“インターコンチネンタル・ル・グラン”に電話で確認を取った。返事はどちらも『Non』。マリコ・フジワラの搭乗記録はなく、当然チエックインもされてはいなかった。

卓巳は椅子を蹴るように立ち上がると、ポールハンガーから上着を取る。

『ジェイク！ サー・ステイブン・ライカーの居場所を見つけ出せ。大至急だ！ ロンドン市内にいるはずだ。それと税関に連絡してサエキの出国を止める！ 銀行にも手を回して口座も凍結だ。それと、サエキの自宅住所を携帯メールに送ってくれ』

『社長……あの、奥様は』

『ボヤツとするなっ！ さっさと動け！』

それだけ言うとジェイクより先に、卓巳は部屋を飛び出した。

くくくくくくくく

万里子がジエームズの車に乗せられ連れて行かれたのは、ライカーの屋敷ではなかった。

ホテルシエラトンプークレーン……なんとリッツ・ロンドンから一キロも離れてはいない。ピカデリー通りに面し、ロンドンきつての高級住宅地メイフェアにある。ライカー自身がオーナーだという。

ホテルの裏にあたるピカデリー側の入り口に万里子は降ろされた。『中に入れば支配人が待っています。後はサーのお部屋まで案内し

てくださいますよ』

ジェームズはそれだけ言って万里子を置き去りにしたのである。

万里子の中には入ることを躊躇したが、これは卓巳の希望なのだ。卓巳は万里子のためだと言った。何か理由があるのかも知れない。万里子は覚悟を決め、黒い回転扉を押して中に入る。

すると、そこはいきなりラウンジであった。シェラトンパークレインの“パーム・コート”ここでもアフタヌーンティが有名だ。優雅で上品な色彩に溢れ、何のために来たのか忘れてしまうほどである。

何処へ行けばいいのか……立ち竦む万里子に一人の男性が近づいた。カチツとしたスーツに身を包み、胸の高い位置に金で縁取られた名札をつけている。

『失礼、マダム。ミスター・サエキの案内でお越しになられた方でしょうか？』

『……はい……あの』
『どうぞ、こちらへ』

ジェームズの言った通り、そこに待っていたのは支配人のようだ。万里子は彼の案内でラウンジを抜け、エレベーターホールに向かう。そして警備員の立つ横を抜けると『スイート専用』と書かれたエレベーターに乗り込んだ。

それは最上階のスイート直通であった。

『サー。マダムをお連れ致しました』

支配人はドアをノックし、そう告げた。

『入りたまえ』

両開きのドアの片方が開かれ、万里子が入るより先にライカーの声が聞こえた。

『ああ、判っている。　　そうだ、約束通りだ。……二度とかけて来るな。ああ、ご苦労』

ライカーは耳に携帯電話を当て、話していた。指で万里子に入るよう促し……足を踏み入れた直後、彼女の背後で扉が閉まった。

シッティングルームは広く、さっきまで万里子がいた部屋より一回りほど大きい。ホテルの外観もアール・デコ調の建築であったが、スイートの内装や家具もそれに揃えられていた。

『ようこそ、マリコ。私はロンドン市内ではここに居ることが多いんだ。前も言ったが屋敷には戻らない。妻と愛人が暮しているからね。だが……君と暮らすにはここは狭い。ロンドン郊外に新しい家を建てよう。私の恋人になった君に最初のプレゼントだ』

浮かれた口調で話すライカーに万里子は冷ややかな視線を向ける。

『その前に。わたしは卓巳さんに言われてここに来ました。それは……わたしがあなたの愛人になれば、卓巳さんは何も失わずに済むということでしょうか？』

視線と同じく、万里子の言葉も零下並の冷たさである。

ライカーは驚きを露にして、少し大袈裟におどけて見せた。

『おお、マリコ！　どうしたんだい？　愛人なんて言葉は君に相応しくない。私たちは愛を語り合う、恋人同士になるんだ』

『綺麗事は止めて下さい。わたしは夫のために来ました。契約が成立しなければ、愛人にはなりません』

一切の妥協は受け入れない。そんな万里子の対応に、ライカーは脅しを掛けてきた。

『マリコ……君は私との関係にもう少し積極的になるべきだ。そうでなければ、卓巳の決断は無駄になるだろう。ドアに鍵は掛かっていない。出て行くのは自由だよ』

『積極的？　ベッドルームはどちらですか？　服を脱いであなたを

待てばいいんでしょうか？　サー、何億ポンドを積んでも愛や尊敬は買えません。ですが、軽蔑や同情を買うのに大金は必要ないことをご存知でしょうか？』

それは痛烈な皮肉であった。さすがのライカーも気色ばんで万里子に背を向ける。だが次の瞬間、ライカーは開き直ったのか両手を高く上げた。

『ああ、判った、判った。君には敵わない。フジワラとは最初の条件で正式契約する。ちよつと待ちたまえ……』

ライカーは固定電話の内線ボタンを押し、秘書のような男性を呼びつけた。

『これを、シティのフジワラ・ロンドン本社ビルに届けてくれ』

万里子の目の前で、正式契約書並びに国の認可書にライカーは署名捺印した。それを封筒に入れ、卓巳のもとに送り届けるよう命令する。

(良かった……これで卓巳さんは助かるのね)

万里子のホツとした表情に、ライカーも気を取り直したようだ。

『さあ、憂いは消えた。乾杯しようじゃないか！』

『待つて、そんな、わたしはまだ……戸籍上、藤原卓巳の妻です』

『そんなことは心配しなくていい。彼が帰国しだい、離婚届けを提出するだろう。君は自由になれるんだ。私は彼に劣らない愛を君に与えよう。約束するよ』

万里子は目を伏せ軽く首を左右に振った。

『愛は……要りません。家もお金も何も欲しくありません。わたしを抱きたいなら早く抱いて下さい。そして、一刻も早く捨てて下さい。わたしの願いはそれだけです』

その万里子の言葉にライカーは息を呑み、目を見開いた。

第八章 奇跡 (4) 絶望の手前

ライカーは心の底から驚いていた。万里子は思いやりと優しさに溢れ、愛に満ちている。そんな彼女からは、俄かに想像出来ない言葉だ。

『何を言うんだい？ 私は君を捨てたりしないよ。神の前で誓うことは出来ないが……結婚の誓いに匹敵する契約書を交わそう。恋人は君だけだ。妻とも話して、実質君と結婚生活を送ると告げてきた。私は君を妻同然に扱うつもりなんだ。今はタクミのことを愛しているかもしれないが、すぐに忘れる。私が忘れさせてあげるよ。マリコ、愛している』

これほどまでに、ひとりの女性にのめり込むことになるとは……ライカー自身も考えてはいなかった。

どんな女性も形ばかりの抵抗を見せ、最終的には望むものをライカーの手から受け取るのだ。ライカーにも万里子の愛が無償の愛であること。その全てを相手に捧げ、与えたいと望んでいることに気づいていた。

そして、その相手が卓巳であることも……。

『マリコ……君をここにやったのはタクミだろう？ 君はタクミに言われて来たのだろうか？ 彼は会社と君を天秤に掛け、君を捨てたんだ。タクミは君が愛を捧げるのに相応しい男ではなかった。そうは思わないかい？』

項垂れる万里子の身体がピクリと動いた。

万里子を絶望の淵に追いやり、その後で、手を差し伸べればいい。

ライカーは思惑通り、卓巳に捨てられた悲しみを実感し始めたであろう万里子の肩に、労るように手を添えた。

『マリコ。今だけだ、悲しいのは今だけだよ。女の喜びも幸せも、全て私が教えよう。私が君を世界一幸せな女性にしよう……』

ライカーの指先が万里子の髪に触れた。

日本女性の髪は黒くて硬いのだと思っていた彼は、その柔らかさにドキツとする。まるで絹糸のように滑らかで繊細だ。彼の指はそのまま万里子の首筋をなぞる。

リッチモンドでの夜、ライカーは万里子を『美と愛の女神に愛されている』と口にした。だがこの時、彼はその言葉の誤りに気づいたのだ。万里子は女神そのものだ、と。肩から首筋のラインに触れただけで、これまでどんな女性にも覚えたことのない、胸の高鳴りを感じていた。

そして、ライカーの指は万里子の優美なラインを描く顎に辿り着く。彼は口づけようと、人差し指にそうつと力を加え、押し上げた。万里子の唇が微かに動き、搾り出されるような声にライカーは耳を傾ける。

「助けて……たくみさん……たすけて」

くくくくくくくくく

『ミスター・サエキをお通しするように、とのことでしたので。正午少し前に、奥様と一緒にホテルを出られました』

卓巳はリッツ・ロンドンに戻っていた。

万里子が何処に連れて行かれたのか……少しでも手掛かりを求め

てのことである。支配人は卓巳の殺気立った形相に押されながら、思いつく限りの言葉を口にする。

『ほ、他の従業員にも確認を取りましたが……特に変わった様子はなかったと言っております。刃物でありませぬ、とか、そう言った犯罪に類する行為を目にした者はおりませぬ。もしそうであつたら、我々もすぐに通報しております』

卓巳は二日ぶりに部屋に戻った。万里子と抱き合つて眠つた夜が、ついでさつきのように思い出される。

「お帰りなさい、卓巳さん」

卓巳の耳にそんな幻聴まで響いた。ベッドルームに向かおうとした時、彼の目に光る何かが映る。それは、リッチモンドから戻つてすぐ、万里子を押し倒した白いテーブルの上……。ゆっくり近づくが、見るのが怖い。

卓巳は奥歯を噛み締めて、“目の前の真実”を掴み上げた。

わずか二週間。そんな短い間で二度もこれを外させた。自分がいかに無能で最悪の夫か、思い知らされた気分だ。

彼に従つてくれ。君のためだ。僕の言う通りにするんだ。

卓巳は万里子にそう言った。ジエームズ・サエキがライカーと通じていたなら、『フランスに』ではなく、『ライカーのもとに』と掏り替えられた筈だ。

万里子はどんな思いで卓巳の言葉を聞いただろう。夫に、英国貴族に売られた、と思つたかも知れない。「愛している」も「君だけだ」も全て嘘だと思つたはずだ。もう……お終いだ。

万里子がいなければ、仕事で勝つても意味がない。卓巳の人生に

おいて、守るものはなくなつた。

いや違う……守れなかつたのだ。

卓巳は指輪を握り締め、ストーンと床に膝をつく。そのまま、倒れ込むようにテーブルに突っ伏した。

（なぜだ！？　なぜ、運命はこんなにも邪魔をする。そんなに僕が憎いのか？　僕が何を……幸福になつてはいけない、どんな罪を犯したと言うんだ）

彼の心は、抗い難い敵に蹴散らされ、無残にも粉々に打ち砕かれた。そして、崩れ落ちそうになる寸前。

小さな振動と共に携帯が鳴る。メールの着信音だ。

卓巳は内ポケットから携帯を取り出し、画面に目をやると……ジエイク・フォレスターであった。

ジエームズが自宅に立ち寄つた形跡はなく、妻は彼女の妹名義のアパートメントに暮している。だが、その妹は十年以上英国に戻つておらず、実際に夫婦が暮しているのはそこである可能性が高い。そんな情報と共に、ロンドン市内の住所が書かれていた。

そして、卓巳が読み終わる前に次のメールが届く。

ジエイクは　口座凍結は完了、税関は手続きにもう少し時間が掛かる、そして、スウェーデン行きの際に妻の名前で予約があつた。収賄の件はある程度証拠が揃つたので次の指示を……そんな内容であつた。

どうやらジエイクは、卓巳の予想以上に行動力があるらしい。

そして、卓巳の中にも一つの感情が浮かび上がってきた。

絶望の淵に沈むのには早すぎる、と。奪われたものは奪い返す、

どんな手段を使っても。

もし、万里子を取り戻せなかったその時は
。

第八章 奇跡 (5) 駆け引き

セント・ジョーンズ・ウッド、グローブエンド通りにそのアパートメントはあった。

卓巳は、ジエイクには別の命令をして、自分はジエームズ・サエキの妻の妹名義という住所に向かう。リッツ・ロンドンからは北へ数キロの距離だ。しかし車で向かうとなると……卓巳は途中でタクシーを降り、そのまま走った。

『早く、早くしろ！ 余計な荷物は持つてくるな。ああ……そんなカードはいらん。私名義のものは、何も使えなくなってるはずだ。クソッ、あの日本人め』

男はポストンバッグを二個抱え、玄関のドアを開けた。コックニ―で悪態を吐きながら、若い妻を急かす。

『もうっ！ 急なんだもの、ジエームズ。あたしは後から行くわ。いいでしょ？』

赤毛の女が海外旅行用のトランクを引き摺りながら出てくる。だが、持つて行きたい洋服やアクセサリーが入りきらなかったらしい。女のほうは緊張感がなく、足取りも重い。

『馬鹿を言うな！ 何のためにこんな危ない橋を渡ったと思ってるんだ！』

『ちよつとお。人殺しとか、してないわよね？』

歳の離れた夫の鬼気迫る様子に、赤毛の若妻は体を引き気味だ。

『フン！ 殺したりするもんか。だが、女房が居なくなつて今頃慌てるだろつよ。私の身边を、金髪の小僧を使って探らせたりするからだ。さあ、この隙に逃げるんだ！ 一先ずはストックホルムの友人に……』

『どこに逃げるんだって？』

男……ジェームズ・サエキは玄関のドアを開き、閉じようとした瞬間 扉の影から伸びた手に襟首を掴まれた。その腕の主を知り、ジェームズの喉から空気が漏れる。目は見開かれ、口は酸欠の金魚のように開閉を繰り返した。

『……ひい』

『この私から本気で逃げられると思ってるのか？ 地獄の果てまで貴様を追い詰めてやる！』

憤怒の形相で卓巳はロンドン本社の元社長ジェームズを睨みつけた。

ジェームズは両脇に抱えたバッグで卓巳の腕を振り払い、ついでに荷物を投げつけ、逃げ出した。

卓巳は悲鳴を上げる女は無視し、ジェームズを追う。しかし、相手は五十代後半の中年男、階段を必死で駆け下りるが……。卓巳にすれば、特に急ぐ必要もない。ジェームズの足が地面に着いた瞬間、卓巳は奴の尻を蹴飛ばした。

ジェームズはつんのめり、土の上に転がる。卓巳は大股で近づくと、奴の首根っ子を掴み引っ張り上げ、アパートメントの壁に顔を押し付けた。

『う、ごか、誤解、です。会社の、ためを考えて……。仕方なく。サーに逆らうことは……。私は会社の』

『言い訳は無用だ。君の口座は全て凍結された。国外逃亡は不可能だ。本日中に君には逮捕状が出て、身柄を拘束される。さあ、何処に逃げる？』

抑揚のない卓巳の声に、ジェームズは真っ青だ。彼は、こんなに

早くばれると思っていなかったのだ。もしばれても、卓巳は真つ先に万里子を探すだろうから、その間に海外に逃げようと考えていた。『待つて……待つて下さい。私は三十年会社に仕えてきた。その退職金のようなもので……』

『ここ三年で約五十万ポンドか。収賄の金を合わせればもつとだな。無断で着服した会社の金は退職金とは言わない。それは日本でも英国でも同じことだ。君は罪を犯した。だが、君を救える人間もいる。それが誰かは判るな？』

卓巳の言葉にジェームズの顔に生気が戻った。

『わ、わたしを、見逃してくれるのか？』

『ライカーの居場所を言え。君がヒースロー空港と間違えて妻を送り届けた場所だ』

卓巳は敬称も飛ばしてライカーを呼び捨てにした。英国で貴族階級の人間を相手に取り引きするのにあり得ないことだ。激昂する卓巳を見て、ジェームズの脳裏に打算が働いた。なんと最悪なことに、彼は万里子を取引材料にすることを考え付く。

『ええ、もちろんお話します。そうですね　すぐに口座の凍結を解除して、横領の告訴を取り下げて頂けるのなら』

『君は、私に取引を持ち掛けているのか？』

『こつちも人生が懸かっているもんでね。さあ社長、携帯ですぐに命令して下さい。急がないと、奥様はサーのものになりますよ。彼の総資産は社長以上だ。それに……あつちのほうも素晴らしいとかうかうかしてたら、奥様のほうから帰りたくないと言われかねない』

ジェームズは気づいていなかった、自分が既に何個もの地雷を踏みつけていることに。万里子に手を出した時点で、取り引きなど成立するはずがない。卓巳の怒りは限界を遥かに超えていた。

その時、卓巳の携帯が鳴った。メールではなく電話だ。

『ジエイクか。どうだ？』

『今そちらに向かっています。ですが、サーがロンドン近郊で使用する部屋は、個人で所有する邸宅やアパートメントにコテージ。賃貸のフラットやホテルまでと合わせると二十ヶ所近くあって。とても短時間で絞り込めるものではありません』

『ああ、そうか。それはよかった。報告は　　ちよっと待っていてくれ
え？　あの』

電話の向こうで驚くジエイクを無視し、卓巳はニヤリと笑った。
そして、ジエームズに向かって言い放つ。

『ジエイクがサーの居場所を割り出した。だが　勤続三十年に敬意を表して三秒やろう。君が私に貢献できる最後のチャンスだ。』 3

……2……1』

『待て！　シエラトンパークレーンだ。奥様をそこに』

卓巳は無言でピツと携帯を切った。

『口座の凍結は解除してくれるんだな。横領の告訴も……私を救ってくれと言ったはずだ。私は、そう、間違えたんだ。会社のために、ほんの少し間違えただけなんだ』

『君は正しい判断をした』

泣くように縋るジエームズに、卓巳は口角を上げて笑顔らしきものを作った。それをどう思ったのだろうか。彼は大きいため息を吐き、両手を上げてアパートメントに戻ろうとする。

その時だ。卓巳の後方、グローブエンド通りに三台の車が停まった。その最後尾の車、黒のローバーミニから降りて来たのはジエイ

くだ。

卓巳は足早にジエイクに近づく、途中黒いスーツの男たちとすれ違い……。男たちは小走りにジエームズの周囲を固めた。『ジエームズ・サエキだな。スコットランドヤードだ。君に逮捕状が出ている』

『じゃ……社長！ これはどういう……騙したのかっ！ 貴様よくも』

『君を救えるのが私だとは言っていない。弁護士にでも救ってもらえ。ああ、勤続三十年か……ご苦労だったな。敬意は伝えたぞ』

冷静な言葉とは裏腹に、卓巳の視線には殺意が籠められていた。ジエームズは震え上がり、思わず警官の後ろに隠れる。

『社長！ これを……先ほど、ライカー社の人間が会社に届けてきた、と』

ジエイクは一通の封筒を差し出した。

卓巳は受け取り、無造作に中身を取り出す。そこには、ライカー社の認可印が押された正式契約書が入っていた。そして、契約書に貼られたメモに書かれていたのは……“君の妻の代金だ”

『ジエイク、運転を頼む。メイフェアのシエラトパークレーンだ』

メモを握り潰した卓巳の指は、血の気が失せ、拳には血管が浮き出していた。

第八章 奇跡 (6) 冷たいキス

ライカーに日本語は判らない。万里子の呟きに彼が聞き取れたのは、卓巳の名前だけだった。

『タクミ？ 君はタクミが助けに来ると思っっているんだね？ 可哀相に』

万里子の頬に一筋の涙が伝い、彼女はふるふると首を振った。その涙を、ライカーはもう片方の手でソツと拭う。

『私は君の新しい希望になれる。タクミは君を捨てた愚か者だ。さあ、自ら夫の権利を売り渡した男のことなど、綺麗に忘れるんだ』

言い終えると、ライカーは万里子の桜色の唇に、彼の唇を重ねたのだった。

冷たい……そのあまりの冷ややかさに彼は驚く。だが、少しずつ万里子の官能を呼び覚ましてやればいい。そう考え、彼はキスを続行した。

しかし、どれほどのキスもライカー自身の情熱を高めるだけで……。堅く閉じた蕾が、綻ぶ兆しすら見せない。

やがて ギリギリ、と音が聞こえた。それはライカーが期待した甘い吐息と違い、奥歯の擦れる音だ。ライカーは弾けるように万里子から飛び退いた。

『夫の心に副うことは私の希望であり喜びです』

ライカーは万里子がストラウド邸で語ったその言葉に、強く惹かれていた。

そう言った彼女の微笑は、まさに女神……いや聖母マリアの如く慈愛に満ち溢れていたのだ。卓巳に向かう一筋な愛情は、それこそ

ライカーの欲するものであった。

ライカーの父、ネイサン・B・フォークナーの最初の妻が英国人だ。キャロライン・ストラウドの母である。上流階級の娘で、二人は真剣に愛し合い結婚した。妻のために、とネイサンは英国で暮し始めたが、結婚生活はわずか数年で破綻してしまう。妻の親族が、アメリカ人のネイサンを軽んじたからだ。やがて、妻と子供を連れネイサンはアメリカに戻った。だが……今度は妻がその生活に馴染めなかったのである。結果、最初の妻は三人の娘を連れ英国に戻り、数年後、二人は離婚した。

その後、ネイサンは二度の結婚離婚を繰り返す。

ネイサンがライカーの母親と知り合ったのは通算三度目の離婚の後。

彼女はネイサンがフランスに持つ邸の使用人だった。最初は優しくかったそうだが、母が実は英国人であることが判った途端、避け始めたという。だがその時、すでに彼女のお腹にはライカーが宿っていた。ネイサンは子供の親権が欲しくて、ライカーの母と結婚したのだ。二人の結婚生活は母が亡くなるまで続いた。だが、彼女が幸福であったとは、とても思えず……。

父・ネイサンは自分の行状は棚に上げ、息子には厳しかった。『お前はたった一人の息子だ。後継ぎなんだ』とライカーの全てをコントロールすることを望んだ。

彼はそんな父親に反発し、わざと英国貴族に婿入りしたのである。

ライカーの妻アマンドは、伯爵家の一人娘にあるまじき放蕩ぶりで有名だ。

だが、伯爵に身内はなく、彼女が爵位を継承し“伯爵夫人”と呼ばれる。独身の場合は“女伯爵”と呼ばれることもあるが、あまり

好ましいことではなかった。彼女は夫を必要としていた、それも早急に。父親の判らぬ子供を身籠るなど、本来なら勘当を言い渡されるところだろう。しかし、伯爵夫妻は歳をとって産まれた一人娘を溺愛していたのだ。

そして、ステイブン・ライカーは伯爵の目に留まった。

当時、ライカーが貴族の後ろ盾とスポンサーを探していたことはよく知られていたためだ。決して離婚はしないこと、そして、アマダが産む子供の父親となり、その子に爵位を継承すること。それが条件であった。

アマダの産んだライカーの長男は、伯爵夫妻のマナーハウスで育っている。

ライカーの心の奥底には、一度は眠らせた愛に対する憧憬があった。それは卓巳や太一郎が万里子を求めるのと同じように……ライカーも、彼女の春の日差しにも似た暖かさに、魅せられてしまったのだ。

彼は生まれながらの貴族ではない。だが、それに匹敵するプライドを持っていた。

気を取り直し、万里子の手を引きソファに座らせる。

『マリコ、キスで君の不安を取り除けなかったのは残念だ。ではこうしよう。君の不安を私に話して欲しい。私は出来る限りの努力をしよう』

『……不安など、ありません。もう、覚悟は出来ています』

『それは違う。“愛し合う”ことに覚悟など必要ない』

『わたしが愛しているのは、卓巳さんだけです』

『だが彼は君を手放した。利益と愛を天秤に掛け、会社を選んだのだ。いいかい、マリコ。タクミは君の愛を受ける権利を放棄した。そしてそれは、今、私の手の中にある。もちろん、無条件に行使で

きるとは思っていない。君の愛を受けるために、私は努力しようと言っているのだ』

万里子はライカーの言葉を聞き、俯いていた顔を上げた。涙に濡れた瞳は瞬きもせず、ライカーを凝視している。ライカーには、万里子が何にそれほど驚いているのか判らない。

『権利とは何ですか？ わたしの卓巳さんに対する想いは、わたしの胸の中にあります。それは卓巳さんのモノではないし、ましてやサー、あなたの手には入りません』

それは痛烈な一言だった。動けないライカーに万里子は更に言葉を続ける。

『サー・ステイブソン。愛は土地とは違うのよ。譲渡は出来ないし、“行使する権利”でもないわ！』

ライカーはやり場のない苛立ちを覚える。

万里子が欲しかった。あの卓巳に向ける笑顔を、ライカーに向けて欲しかったのだ。おそらくは、もし、万里子が愛情に満ちた瞳でライカーを見つめ、『他の何も要らないから妻にして欲しい』そう望んでくれたなら。

万里子は母を思い出させる。

滅多に訪れない父を待ちながら、フランスの邸で母と暮した幼い日々。『いいのよ。私はネイサンを愛しているから』そう話した母は哀れであった。その愛に応えない父を憎み、その愛に殉じた母を愚かだと思った。

頑なな愛は愚かだ。万里子の、卓巳に対する愛情は愚かの極みだ。

その愚かな愛情を与えられたいと願う、相反する感情に、ライカ
ーの心は翻弄された。

『判った。いいだろう。なら、君の言う通り、その覚悟とやらを見
せてもらおう。マリコ、私はすぐに君を降参させてみせるよ。君の
ほうから、私が欲しいと言わせよう。その時こそ、君の胸にあるタ
クミへの愛は消え、私はそれを手に入れるだろう』

瞬時に、万里子は怯えた瞳でライカーを見上げた。彼はそれを無
視すると、万里子を抱き上げ……寝室へと向かったのだった。

第八章 奇跡 (7) 突撃

どれほどの時間が過ぎたのだろうか。

気がつくと万里子は広いベッドの上でひとり寝転がっていた。

万里子の目に見覚えのないシャンデリアが映る。それは、ルイ王朝風の豪華なリッツの物とは違った。幾分年代も新しい、すっきりとしたアール・デコ調のインテリアだ。

しかし、天井も壁も澱んだような白さに見える。カーテンは開いてるが光は射し込んでこない。そう言えば今日は曇り空だった……そんなことを思い出していた。

何が起こったのだろうか……万里子は何があったのかまるで思い出せないのだ。

そして、そうつと身体を起こし、驚愕の事実を知る。彼女は、一糸纏わぬ姿で、ベッドの中央に横たわっていたのだった。

しかも、なぜそうなったのか、何も覚えていない。

(……サーはわたしを?)

室内は静寂の一言に尽きる。ライカーの姿は見えず、その名残りすら感じられない。万里子は手近にある毛布で身体を包み込んだ。

四年前は酷い痛みを覚えた。だが今は、身体のどこにも痛みは感じない。だが、あの時とは事情が違う。卓巳に愛されて、万里子の経験はゼロではないのだから。

不意に、万里子の頭の中でライカーの声が響いた。『君は全てが美しい』そして、肌をなぞる指の感触を思い出し……万里子は身震

いする。

転げるようにベッドから下り、服を探すが見当たらない。そして目に付いたバスルームの文字。 万里子はその中に飛び込んだ。

ライターを受け入れた記憶はない。それに身体にその証もなかった。だが、万里子はその行為において避妊具を使った経験がないのだ。使うとどうなるのかもよく判らない。もし使うことで、痛みもなく、痕跡も残らないのであれば……。

（わたしは……卓巳さんを裏切ってしまったの？）

取り返しのつかないことをしてしまった。

万里子は急いでシャワーのコックを捻る。大理石のバスルームは、デザインが日本のバスタブに近い。だが、のんびりお湯を張る余裕はなかった。一刻も早く、全てを洗い流さなければ……そんな思いが万里子の中を駆け巡る。

そして、万里子は何かに憑かれたように、身体を洗い始めた。隅に置かれたボディソープが空になるまで洗い続け……。ソープが無くなると、今度はボディスポンジに力を入れる。しつとりと繊細な皮膚がやがて真っ赤になり、裂けて血が滲み出ても擦り続けたのだ。

く*く*く*く*

卓巳がシエラトンパークレーンのメイフェア側玄関口に降り立ったのは、ちょうどその頃であった。

馬蹄型をした建物の中央部分に、正面玄関は位置していた。そこ

には、万里子の入ったピカデリー側より大きい回転ドアがある。ドアマンに車のキーを預け、慌てて追いかけてくるジェイクを置き去りに、卓巳はロビーを横切った。

このホテルのオーナー専用スイートには直通エレベーターがあることを知っている。卓巳はそこに向かって走った。

(まさか、こんな近くとは……ふざけやがって！)

アメリカと違いロンドンでは警官すら拳銃を所持してはいない。ましてや五つ星のホテルだ。騒動を起こす人間など皆無に等しかった。

警備員は驚いてひたすら卓巳を制止しようとするが、どこか緊迫感が足りない。そして、彼が卓巳の肩を掴んだ瞬間　卓巳は警備員を問答無用で叩きのめしていた。

卓巳は後方で上がる悲鳴を無視し、そのまま、エレベーターに乗り込んだ。微かに、ジェイクがぶちきれた社長ボスを引き止める声も聞こえた。それに重なるように、見覚えのある支配人が卓巳の名前を呼ぶ声も。通常であれば、他の……正当な手段を選ぶであろう。だが、卓巳の理性は我慢の限界を超えていた。警察ヤードに通報されることも覚悟の上だ。

エレベーターは最上階に到着し、扉が開いた。

予想外にも押し寄せる従業員や警備員はいない。卓巳は薄いグリーンの絨毯が敷かれたフロアを、正面のドアに向かって大股で歩いた。

そして、扉の前に立つ。直後、卓巳はドアベルを無視していきなり叩き始めたのである。

『万里子！　万里子！　いるんだろう……僕だ、返事をしてくれ！』
ようやく後方に人の気配を感じ始めた。だが、卓巳はまるで気に

せず、怒鳴り続ける。

『ライカー！ 貴様、よくもやってくれたな。万里子を返せ！ ドアを開けないならぶち破るだけだ！』

言つや否や、卓巳は扉の横に置かれた花台から花瓶を払い除けた。派手な音を立て、白いガラス製の花瓶は割れ、トルコキキョウの柔らかな花びらが宙に舞う。

『……ガ、ガレが…… エミール・ガレが』

卓巳の背後からそんな声上がる。だが、卓巳にとっては大した問題ではなかった。

これが一般人なら、早々に取り押さえられるのかも知れない。だが支配人はこの狼藉者が、日本の企業で最初に名前が挙がる藤原グループの社長であることを知っていた。

支配人はライカー社とフジワラの間で問題が起きていることを聞き、出来れば、話し合いで解決して欲しいと願っていたのだ。どんな理由であれホテルに警察を呼ぶなど、不祥事に他ならない。

『ミスター・フジワラ…… どうぞ落ち着かれています。あなたはとんでもない誤解に基づき、違法な行為をされておいでです。どうか落ち着かれて、お部屋を用意しますので……』

遠巻きにしつつ、声を掛けてくる支配人を振り返り、卓巳は怒鳴りつけた。

『さつさと警察を呼べ！ このホテルのオーナー、サー・ステイブン・ライカーは私の妻を誘拐したあげく監禁している。しかも、このホテルに、だ。違つと言つなら、このドアを開けて潔白を証明して見せればいい。出来ないのは、ここに私の妻がいるからだ！』

言い終えると、卓巳はマホガニー材で作られた焦げ茶色の花台を持ち上げた。女性従業員の悲鳴がフロアに響き渡る。後方から聞こえる一切の説得に、卓巳は耳を貸すつもりはなかった。

『開けないなら壊すまでだ。はったりだと思つなよ、ライカー。怪我をしたくなければ、ドアから離れるんだな!』

黒のチェスターコートを翻し、卓巳は花台を振り上げた。

第八章 奇跡 (8) 傷ついた女神

カチ……ドアの鍵が開く音がした。

花台が扉に衝突する寸前、卓巳はその音を耳に捉え、急停止する。無言で花台を床に下ろすと、卓巳は部屋に飛び込んだ。

『やあ、ごきげんよう、ミスター・タクミ・フジワラ』

ライカーはワイングラスを片手にしている。黒いバスローブをだらしなく着崩し、見るからにほろ酔い加減だ。

シッティングルームは芳醇な赤ワインの香りに満たされ、卓巳は咽返りそうになる。だが、その何処にも万里子の姿は見えない。

(寝室か)

卓巳はこのままライカーに飛び掛り、絞め殺したい衝動に駆られた。

『万里子はどこだ!』

『人の部屋を訪れて挨拶もなしかい? 失礼じゃないか』

『人の妻を攫うような男に礼を尽くす気はない』

『攫ってなどいないよ。彼女は自分からここに来たんだ。そうだったね、支配人? ミセス・マリコ・フジワラは、独りで歩いてこのホテルにやって来た。……違ったかな?』

その時はじめて、卓巳は支配人を含む多数の従業員が、スイートの室内に入り込んでいることを知る。だがジェイクの姿は見えない。不測の事態に備えて、卓巳の部下は下で止められているようだ。卓巳の違法行為の証人は大勢いても、ライカーの罪は誰も見ていない、と言っことである。

「い、いえ。オーナーの仰る通りです。先ほどの女性でしたら、誰かに無理やり連れて来られた訳ではありませんでした。私が……」
「ああ、そうだろう。うちの元本社長ジエームズ・サエキを使い、奴が万里子を騙し、このホテルの前に連れてきた。貴様を訪ねるように。それが僕の希望だ、と。彼女は僕のためにこんな場所に来たんだ！」

卓巳は支配人の言葉を遮り、吼えるように叫んだ。

ライカーはそんな卓巳を一瞥して背を向ける。

彼はソファに座ると、空になったグラスにワインを注ぎ込んだ。それは、ブルゴーニュの代表的な赤ワイン『シャンベルタン』だ。室内に深く優雅な香りが強まる。ライカーはそれらをゆっくりと鼻腔に吸い込み、笑みを湛えた。

「なるほど、そう言うことか。では、彼女を騙したのはその元本社長だろう。私はただ、提案を受け入れてくれた彼女を招き入れただけだ。それがどんな罪になるんだい？ 教えてくれるかな？」

ライカーの答えは予想通りであった。

ジエームズは、ジエイクの調査が自分まで及んでいることを知り、口座から大金を動かせなかった。そんなことをすれば、今から逃げます、と言っているようなものだ。不審な動きをしないように、ライカーから逃走資金として現金を受け取ったのだろう。

ライカーは『万里子を連れて来い』とは間違っても言わない。『万里子が手に入るのなら、金はいくら掛かっても構わない』そんな独り言を、ジエームズが真に受けただけなのだ。そして、ジエームズが勝手に悪知恵を働かせた。

ライカーの言い訳が判るだけに、卓巳は唇を噛み締める以外にない。

数回、卓巳は深呼吸を繰り返した。

『……妻を……返してくれ。頼む』

卓巳はライカーに頭を下げた。

ライカーは満足そうに笑うのかと思いきや、彼はテーブルに置かれたワインと同じようなルビー色に頬を染めた。それは、頭を下げた卓巳より、怒りや屈辱を味わったかのような表情だ。

直後、何事か思いついたのだろう。意地悪げな笑みを浮かべ、ライカーは立ち上がった。

『では、今の彼女の姿を見てもらおう。それでも、連れて帰ると言うかな？』

ライカーは大股で部屋を横切り、寝室のドアを開けた。

くくくくくくくく

一方、水音の止んだバスルームに、万里子は立ち尽くしていた。激しくドアを叩く音、何かが割れる音と大勢の悲鳴。さすがに同じフロア内の音はバスルームにも振動となって届いていた。だが、万里子が我に返ったのは、室内に入り込んだ時の卓巳の怒声である。そして、その言葉の内容に万里子は驚愕していた。

（本社長がわたしを騙したの？ それって、どういうこと……。だって、彼の言う通りにしろって。卓巳さんの言葉じゃなきゃ、わたしは信じなかった……。でも）

卓巳は万里子を捨てた訳ではなかった。

そうでなければ、こんな所まで迎えには来ないだろう。万里子はジエームズに騙されたことを知り、膝がガクガクと震え始めた。

「卓巳さんのためなら」「これが卓巳さんの希望なのだから」

万里子はそう自分を納得させて、ライカーのもとにやって来たのだ。だが、それが卓巳の意思でないのなら、万里子は夫を裏切っただけになる。夫を信じず、浅はかにも夫の敵と深い関係になってしまったのかも知れない。

万里子は倒れずにいるのが必死であった。

その直後　バスルームのドアが思い切り開かれた。

「きゃー！」

『……信じられない。君はまだ、ここにいたのか？』

その声はライカーであった。

万里子は全裸のまま。両腕で上半身を抱き締めるようにして屈み込む。

「出て行って……出て行ってください」

『さあマリコ、タクミが迎えに来ている。君の夫だった男だ。挨拶くらいしたまえ』

ライカーの声に優しさは微塵もない。彼はバスルームにずかずかと押し入って万里子の腕を掴んだ。

「い、や……やめて……お願い。卓巳さんには逢えませぬ。お願い、許して……彼の前には」

立ち上がるうとしない万里子の腕を、ライカーは舌打ちして一旦放した。そして、フックに掛かっていた白いバスローブを投げつける。

『さっさと着るんだ。さもなければ、その……私のものになった裸

体を夫に晒すことになるぞ。それでもいいのか？」

その言葉に万里子は背筋が凍りつく。

(やっぱり……わたしは……)

万里子は、再び近づこうとするライカーの気配を感じた。慌ててバスローブに袖を通す。

「待って……サー、お願いします」

『マリコ、残念だが……私には日本語はさっぱり判らない』

そう言われてはじめて、彼女は自分が日本語を口走っていたことに気づいたのだ。だが、この状況での確な英語など万里子には思い浮かばない。何度も口を開くが言葉にならず、次第に息苦しくなる。万里子は自分を落ち着かせようと、バスローブ越しに身体を抱き締めた。そして、必死になって息を吸おうとする。だが、息苦しさは増すばかりだ。

『卓巳さん……卓巳さん……』

ようやく零れ出た声も、卓巳の名を呼ぶことしか出来ない。

そんな万里子の腕をライカーは乱暴に掴むと、なんと、バスルームの外に万里子を引っ張り出したのだ。恐怖のあまり、万里子は悲鳴すら上げられない。

万里子の身体から無数の雫が滴り落ち、寝室の絨毯を濡らした。恐る恐る見上げたライカーの暗灰色あんかいしよくの瞳からは、そこはかとない狂気が漂う。

『サー、どうして……』

『君たちの愛は私を傷つける。君も……傷つけばいい』

抑揚のない声でライカーは眩き、彼は万里子をシッティングルームに引き摺り出した。

第八章 奇跡 (9) 狂気

数時間前。

ライカーは万里子をベッドに横たえた。決して乱暴な真似はせず……丁寧に万里子の服を脱がせる。そして、自らも上半身裸になり、ライカーは自分の胸に万里子の手を当てた。

『判るだろう？ 私の心臓は君の素晴らしい身体に興奮している』
確かに、彼の心臓はトクントクンと早鐘を打つようだった。ライカーはそのまま、特別なものを扱うように、万里子に触れる。
『素敵だ。マリコ、君は全てが美しい』

(やっと宝物を手に入れた。タクミから私のモノになったんだ！)

ライカーの指によって、徐々に万里子の呼吸は速くなり、身体も熱くなる……はずであった。

だが、ライカーの思惑に反して、万里子の身体は冷え冷えとしていた。一切の抵抗はなく、涙も見せず、まるで人形のようにだ。彼は万里子の瞳を覗き込んだ。そこには何の感情も映ってはいなかった。
『マリコ、もっと心を解き放つんだ。お願いだから、私を受け入れてくれ！』

ライカーは懇願するように万里子の肌に頬をすり寄せた。祈るような気持ちで“許し”を請う。

しかし、彼はこの時、万里子の全身に鳥肌が立っているのに気づいたのだ。

ライカーにとって、これほどまでの拒否は初めてである。

今まで関係した女性はすべて、ベッドの上では彼に降参してきた。

彼を嫌う妻すら、会うと必ず夫を求める。妻のアマンダは『ステイ
ーブンこそ愛人に相応しい男よ。一度試してみたら？』そんな風に
女友達に言うくらいだ。苦々しく思う反面、上流階級の結婚にはこ
のくらいが丁度いい、とすら思っていた。
なのに万里子と出会ってしまった。夫を本気で愛する女と。しか
も夫も妻を愛している。

ライカーがジューデイス・モーガンから聞いた話は、『この私を
夫婦喧嘩の当て付けに利用するなんて！』。卓巳がジューデイスを
部屋に入れたのは、万里子に嫉妬して欲しかったに違いない。ジュ
ーデイスは“幻の一夜”の代金を卓巳から貰うつもりだと言った。
ライカーは、その“幻の一夜”を買い取ったのだ。

はじめはゲームだった。夫に匹敵する男であれば夫でなくても構
わない。それを証明しようとしただけだ。二人をほんの少し苛めて、
契約書を交わしてお終いにするつもりであった。

それが……。

気が付けば、ライカーは必死になっていた。

そして、万里子に執着するあまり、ライカーは本気で卓巳を怒ら
せてしまった。このまま行くと公益事業に関わる権利を全て取り上
げられてしまう。それは、破綻とまではいかないが、ライカーは多
くのを失うことになる。

卓巳に降参して手を引くのが最良の手段だ。

だがそれは、頑なで愚かな愛を、本物の愛だ認めることになる。

ライカーは二人の愛に負けなくなかった。そしてそれほどまでに強
い愛なら尚のこと、自分のモノにしたいと願った。

『ああ、判った。では私もそのつもりでやろう。君は早く抱いて早
く捨ててくれと言ったね。いいだろう、君は私が金で買った娼婦だ。

諦めて、私に身体を許したまえ！』

その時、はじめてベッドの上で万里子が口を開いた。

『サー、この身体はモノです。モノに心など宿りません。どうせ、スクラップ同然の身体です。どうぞ、お好きになさって下さい』

万里子に漆黒の視線を向けられ、ライカーはたじろいだ。その目は侮蔑と憎悪、そして絶望を宿していた。もし彼女に触れる男が卓巳であれば、彼女はどんな眼差しを向けるのだろう。それを思うだけでライカーの胸に焼け付くような痛みが走る。

夫に捨てられても売られても、それでも夫を想う万里子が憎らしい。卓巳が嫉ましく、悔しくて堪らない！

『マリコ、君は私に、そんな風に投げ出された身体を抱けというのか？』

『何を今更。あなたの好きなようになさったら、どうぞ解放してください。夫のもとには戻れませんが、わたしには愛する父がいます。父のもとに……帰して……ください。どうか日本に……日本に帰りたい』

万里子はしだいに日本語となり……涙が^{こめかみ}蟀谷を伝った。

ライカーは万里子から飛び退き、シッティングルームに駆け込んだ。手近にあるワインを開け、喉の奥に流し込む。見る間に一本が空になった。

(私は……愚かな愛に負けたのか)

母は生涯父を愛した。おそらく万里子も卓巳を愛するだろう。愚かだが、それこそが真実の愛なのだ。ライカーは手に入れられない

愛の存在に狂喜し、且つ、卓巳に向かう嫉妬が精神を支配した。

そして バスルームで万里子を見つけた時、彼女はベッドの上での記憶を失くしていた。

日本語で何かを呟きながら、狂ったように身体を洗い続ける。ライカーは恐ろしくなり、再びワインボトルを手にして……。

激しくドアが叩かれたのは、その直後であった。

くわくわくわくわく

万里子によるけながら、シッティングルームに姿を見せた。

真っ白なバスローブの腰紐は結んでおらず、懸命に手で合わせている。卓巳は一瞬で万里子の身に何があったのかを察した。はらわたが煮えくり返る、とはこのことだろう。すぐにもライカーに飛び掛り、殴り殺してやりたいと思った。

だが今は、万里子を卓巳の手に取り戻すことが先決だ。

「万里子……遅くなって済まない。迎えに来た、一緒に帰ろう」

卓巳は精一杯の優しい声で万里子に語り掛けた。だが、彼女は一度も卓巳を見ようとせず、震えて視線を背けたままだ。

『どうしたんだい、マリコ？ 君の愛する夫が迎えに来たんだよ。ああ、私を受け入れた身体を恥じているのかい？ 確かに、清楚な顔からは想像も出来ない激しさだったね。驚いたよ。私の言葉が嘘だと言うなら、反論してみたまえ』

万里子はきつく目を閉じたまま何も反論しようとはしない。そん

な万里子の様子を面白そうに見ながら、ライカーは卓巳を見下すように言い募った。

『ご覧の通りだ、タクミ。彼女は私とのセックスが気に入ったらしい。君では物足りなかつたんだろうね』

『言いたいことはそれだけか？ では、妻を連れて失礼する』

卓巳は万里子に向かって一歩踏み出した。

そんな卓巳の悠然たる態度が気に触つたらしい。ライカーは上ずつた声で更なる言い掛かりをつけはじめた。

『彼女が私の愛人になることで、君の会社に認可を出したんだ。ここに留まらないと言つのなら、契約書を返して貰おう。たった一度ベッドを共にしたぐらいで、数億ポンドの価値が君の妻の身体にあると思つのか？』

卓巳は無言で契約書をコートの内ポケットから取り出した。そのまま一気に破り捨てる。

『これで文句はないな』

第八章 奇跡 (10) 壊れた心

二つに裂かれた契約書はひらひらと舞い床に落ちる。何の迷いもない卓巳の行動に、彼は理不尽な怒りを覚えていた。

『待て！』ライカーは逼迫した声で卓巳を制止した。

彼はその怒りに心を奪われ、更なる愚行に及んだ。無造作に万里子の腕を掴み……その時だ。

『万里子に触れるなっ！』

殺気立った卓巳の声に、ライカーの動きは一瞬止まった。

しかし、口角を吊り上げいやらしい笑みを浮かべつつ、ライカーは万里子を自分のもとに引き寄せたのだ。そして、とんでもなく醜悪な言葉を口にする。

『おいおいタクミ、人にもものを頼むには相応の態度があるんじゃないのかい？ 君は妻の破廉恥を棚に上げ、私のホテルに乗り込み、乱暴を働いた。きちんと謝罪してもらおう。そう……日本人が得意な「ドゲザ」をしてもらおうか』

その瞬間、弾かれたように万里子が声を上げた。

『ヤメテ！ もう止めてください……お願いします』

『嫌なら構わない。彼女は、私の愛人になりたい、とやって来た。』

このまま……娼婦のように扱ってもいいんだよ』

二人の愛を踏み躪る心地良さに、ライカーはほくそ笑んだ。

「卓巳さん……ごめんなさい。もう、わたしのことは……このまま、もう」

「万里子、本当に済まない。本当に、僕は」

二人は日本語で語りかけ……お互いの瞳を見つめ合う。

卓巳の姿を瞳に映した瞬間、万里子は堪えきれず涙が滝のように流れ落ちた。ライカーが強引に止めた万里子の時間が、再び動き出したかのよう。

そんな万里子の様子にライカーは悔しさを隠せない。

『さあ、どっちにするんだ！ 私は警察を呼んでも一向に構わない。タクミは連行され、マリコは私のベッドに戻る……それで』

苛立たしそくに癩癩を起こすライカーの眼前で、卓巳は床に膝をついた。膝は揃えず開き気味で、そのまま腰も下ろす。

卓巳は手を床につき、頭を下げ、頭を下げてライカーに頼んだのである。

『この通り、非礼の段はお詫びします。どうか、妻を返して下さい』

それは、どう見てもライカーの完全勝利であった。

契約書を破った以上、フジワラ・ロンドン本社は閉鎖寸前となる。無論、卓巳が報復に出ればライカーも危機に陥る。だが、それでフジワラが浮上すると言っわけではないのだ。

そして万里子である。真実はともかく、卓巳は妻を奪われたのだ。更には、床につくほど頭を下げて、卓巳は謝罪している。

だが、ライカーは床に平伏する卓巳に圧倒されていた。

どれほど卑猥な言葉で貶めても、二人が互いを想い合う心には傷一つ入れられない。卓巳に対する敗北感ばかりが募る。ライカーの自尊心は元には戻らなかった。

万里子のせいだ。ライカーに対して身体を開こうとしなかった、全ては万里子のせいである。彼女をもっと傷つけたい、もっと辱めてやりたい。満たされなかった愛は、憎悪へと姿を変える。

彼の中に芽生えた憎しみは獰猛な獣のようにライカーの心を喰い尽くし、果ては万里子に向かった。

『……いいだろう。散々遊ばせてもらった。だが、二度も抱く気にはならない程度の女だ。この女に相応しい格好で君に返してやろう！
受け取れ』

言うなり、ライカーは万里子からバスローブを剥ぎ取った！

ホテルの従業員や警備員のいる前で全裸にさせ、床に座る卓巳の前に突き飛ばしたのだ。

あまりに突然の、そして尋常ならざるライカーの行動に、その場に居た全員が凍りついた。

「きゃっ！ いや、見ないで……いや……いやあっ！」

「なっ！？ 万里子」

卓巳はコートを脱ぐと飛びつくように万里子を包み込み、抱き締めめる。

その時はじめて卓巳は気づいたのだ。彼女の身体がボロボロに擦れて傷ついていることに。

「万里子、万里子、もう大丈夫だ。……万里子」

万里子の唇は紫色だった。「いや、みないで」震える唇からその言葉だけを繰り返す。全身が小刻みに震え、目の焦点も合っていない。呼びかける卓巳の声すら、今の万里子に受け入れることは困難なようである。

卓巳は、ようやくその手に戻った最愛の妻を、至宝を崇めるように丁寧に抱き上げた。そのまま立ち上がり、出口に向かう。

そして部屋を出る間際、卓巳はライカーを振り返った。

「サー・ステイブン・ライカー。貴様が万里子にした仕打ち……
赦されると思うなよ。「首を洗って待っている」この言葉を覚えて
おくんだな」

くくくくくく

最上階のエレベーターフロアは人垣が割れ、卓巳に道を作る。

卓巳の全身から噴き上げる怒りのオーラに、シエラトンパークレ
ーンの支配人は恐る恐る近寄った。

「ミスター・フジワラ。すぐにお部屋の手配を。ドクターをお呼び
致します。奥様のお着替えもご用意……」

「君はその目で見なかったのか？ このホテルのオーナーが、私の
妻にどれほどの侮辱を与えたのかを。このホテルの施しは水一滴不
要だ。英国貴族は紳士の看板を今すぐ下ろす事だな」

卓巳の当然の怒りに、支配人たちは言葉もない。ライカーの言動
は常軌を逸していた。強引に夫から奪い取った女性を、公衆の面前
で全裸にするなど、正気の沙汰ではない。仮に、相手が娼婦であつ
ても、やってはいけないことだった。

支配人はゴクリと唾を飲み込み、口を開く。

「サーは……ご存知でした。奥様のお名前は仰いませんでしたが、
今から一人の日本人女性が訪ねてくる。「ミスター・サエキ」の案
内で、と」

ライカーは万里子の名前を告げない周到さはあつたが、確認のた
め、ジエームズ・サエキの名前を口走っていた。それは、ジエーム
ズの企みを知っていた、或いは彼に命じた証拠とも言えよう。

『君はライカー^{オーナー}を裏切って私に報告するのか？』
『先ほどのオーナーの遣り様は、紳士以前の問題ではないかと思われ
れます』

『それは懸命な判断だ。君は再就職先に困ることはないだろう』

その言葉に、支配人以下全員の顔色が変わった。それはライカー
からこのホテルも取り上げる、という宣言に等しい。『あの、それ
はどういう？』

卓巳は支配人の質問を無視し、万里子と二人エレベーターに乗り
込んだ。支配人は慌ててロビーで待機する人間に、卓巳に失礼がな
いように、と指令を出すのであった。

卓巳が車を降りた同じ場所に、ジェイクはローバーを停めて待っ
ていた。機転が利いて幸いだ。卓巳は狭い車内に乗り込みホッとす
る。

『社長。奥様は……』

卓巳の腕の中にいる万里子に視線をやり、ジェイクは蒼白になっ
た。

『私がライカーを殺さずにいたことを褒めてくれ。……車を出せ』
安堵感と後悔が一気に押し寄せ、卓巳の声は微かに震えていた。

『リッツに戻りますか？』

『いや、行き先は プラザ・オン・ザ・リバーだ』

第八章 奇跡 (11) 繰り返す悲劇

テムズ河南岸、ウォータール駅の近くに位置し、客室数六十程度だが全室スイートタイプという、五つ星ホテル「プラザ・オン・ザ・リバー」。オーナーは藤原卓巳、その人だった。

卓巳はホテル内にオーナーズルームを所有している。いつもはそこが、彼のロンドンでの滞在先であった。

万里子は卓巳の腕の中で震えていた。

卓巳は繰り返して、万里子の名を呼んでみる。しかし、「やめて……いや」そんな言葉を泣きながら呟くだけだ。万里子の精神が戻って来る気配はない。卓巳はすぐに、婦人科と精神科のドクターを呼んだのである。

ドクターは二人とも女性だ。万里子の心理的負担を和らげるために、卓巳が希望したのだった。

精神科のドクターは、

『お気の毒です。あなたもショックでしょうが、奥様の受けたショックは計り知れません。このままだと奥様は心を闇に閉ざされたまま、永久に戻って来られないでしょう。彼女の心を取り戻せるように頑張りましょう』

卓巳は“永久に”の言葉にぞっとする。

だが、婦人科のドクターが卓巳に告げたのは、予想外の言葉であった。

『形跡がない？ 本当ですか？ 相手の男はハッキリ口にして……妻も否定しなかった』

内診の結果、性病や妊娠が懸念される性交渉はなかったと診断されたのだった。

『不幸中の幸いですが、間違いありません。法律的には未遂という

形であつたと思われれます。警察に通報されますか？』

英国でレイプは親告罪ではない。被害者対策先進国と言われる国だ。しかし、今回は被害を立証することが難しいだろう。

『形的には、妻が自ら男の許に出向き、愛人関係を了承したはずです。当然、セックスも……。自分から寝室に行き、服を脱いだ可能性もある。それが卑劣な罠で、彼女は僕のせいで脅迫に屈したんだとして』

卓巳は電話口で話した一言一言が悔やまれてならない。無意識とはいえ、万里子を罠に嵌める連中に加担したようなものである。

卓巳の視線の先には万里子が眠っていた。極度の興奮状態が続き、催眠鎮静剤を投与されてようやく落ち着いたので。卓巳は椅子に腰掛け、両肘を膝の上に置き、祈るように手を組んでいる。一言話す毎に指に力が加わり、爪が肌に食い込んで行く。

そんな様子に見かねたのか、精神科のドクターがスツと卓巳の両手に自身の手を添えた。

『この状態が続くようなら、入院をお勧めします。もちろん、日本に戻られて、ということでも構いません。ただ、決してご自分をお責めにならないように。あなたが自分を責めたら、彼女も自分を責めます。悪いのはあなた方を騙し、奥様を罠に掛けた男なのですか』

卓巳は一晩中、万里子の傍から離れることはなかった。

婦人科のドクターは万里子の体を診察して、全身の擦過傷に驚いていた。見た目ほど酷い傷ではなく、薬を塗るだけで数日で治るといふ。問題は場所であつた。それは主に、両手や首筋、胸元、腰のラインから大腿部にかけてに集中している。男が女を愛する時、触れる箇所と言つべきか。

卓巳は、万里子が太一郎から無理矢理キスされた時のことを思い

出していた。

唇が擦り切れて、ガサガサになるまで擦っていた。あの後しばらくは、「汚れが落ちない」「綺麗にならない」と、夜中に魘されることもあったくらいだ。だが、翌朝万里子に尋ねても何も覚えてはおらず。おそらく、四年前の悪夢が彼女を縛るのだろう。こればかりは、卓巳は傍に居て抱き締めてやることしか出来ない。

ライカーは思いつく限りの下劣な言葉で、万里子を罵った。精神の箍たがが外れたとしか思えない言動も、最後まで出来なかったことが理由のようだ。だが、ライカーが万里子を抱こうとしたのは間違いない。

万里子はライカーの跡を消し去るのに、自ら身体を傷つけた。皮膚が裂け、血が滲んでも、まだ擦り続けたのだ。

真つ暗な部屋に、ベッドサイドの灯りだけがボンヤリと浮かび上がる。室内は静寂が広がり、時折、空気が震えた。それは、卓巳が深く息を吸い込む音であった。

卓巳は万里子の手を握り、自分の額に押し当てた。“その時”の彼女の絶望と屈辱を思うと、涙が止まらない。

（なぜ、人に任せたりしたんだ！ 自分が空港まで送りさえすれば……。あんな奴を、信用したりしなれば！）

一刻も早く謝りたかった。全て僕のせいだ、悪かった、許して欲しい、と万里子に伝えたかった。だが、『永久に戻って来ない……』ドクターの言葉が頭の中で何度も繰り返す。その時は、二度と許してはもらえないのだろうか。

今度は僕が、君に奇跡を起こしてみせる。僕を信じてくれ。

そう言つて万里子にキスした時、はにかんだような彼女の笑顔が忘れられない。

「もう、これ以上素敵にはならないで」

「これ以上好きになつたらどうしたらいいのか判らない」

卓巳だけを見つめ、卓巳の愚かさを許してくれた。持てる愛情全てを注ぎ込んでくれた女性を、守ることも出来ず。

「万里子、君の心が戻らなくても……例え、一生赦してくれなくても、僕は君の傍から離れない。ずっと妻でいてくれ。……命よりも大事な君が、なぜ守れなかつたんだろう。こんなになるまで……痛かつただろう、辛かつただろう。僕を呼んだかい？ どうして……一分一秒でも早く、助けてやれなかつたんだろう。どうして……」

ライカーやサエキに対する恨みより、無力な自分への口惜しさで卓巳自身も碎けてしまいそうだった。

く*く*く*く*

同じ夜。

もう独り、一睡も出来ず後悔に苛まれている男がいた。サー・ステイブーン・ライカーである。

彼は独り部屋に佇んでいた。ふと気付くと手には一枚のバスローブを掴んでいる。なぜそんな物を持っているのだろう。ライカーは頭を巡らせ、不意に思い出したのだ。彼が万里子を全裸にし、公衆の面前で晒し者にしたという事実を。

『わあああああ！』

それらを打ち消そうと彼は絶叫した。それだけでは足りず、手近なもの叩き壊し始める。

万里子を手に入れたかった。眠るのが惜しいと思えるほどの夜を、万里子と過ごしたかっただけなのだ。卓巳の権利を奪い取れば、それは手に入ると信じていた。

だが、万里子は心も身体も、決してライカーに許すことはなく。思い通りにならない万里子に彼は激怒した。拳げ句、虚ろな目でベッドに横たわる彼女を、口汚く罵倒したのだ。

『君は不感症か？ タクミは君にどんなセックスを教えたのだ』

『夫に売られた君は娼婦同然だ。娼婦なら少しは、客に奉仕したらどうだ』

『私が賞賛するからといって付け上がるな！ 君ごときの身体にそれほどの価値はない。せいぜい一晩一〇〇ポンドだ』

どれほど罵っても万里子は無反応なままだった。

血だらけの自分の手を見た時、ライカーの中に万里子の姿が浮かんだ。

彼女の肌は、絹のように柔らかく、しっとりとしていた。それが……ざらざらになり血が滲んで。決して揺るがない、優しさと強さを秘めた黒い瞳は、光が消えて生気を失い 「いや……いやあつ！」

『……ちがう、違う、私は……あ、あ、わああああーっ！』

ライカーは脳裏に過る万里子の悲鳴をかき消そうと、絶叫を繰り返す。

返したのである。

夜中の騒音に階下の者が驚き、フロントに通報が入った。慌てて駆けつけた支配人は、とんでもないものを目にする。

室内は足の踏み場もないほど、割れたガラスが散乱していた。アール・デコ調の計算された美しさは、今はもう、スクラップの山である。

そしてその中心に、サーの称号を持つオーナーが立っていた。体のあちこちから血を流し、狂乱の悲鳴を上げながら……。

第八章 奇跡 (12) 報復

ライカーが強行策に出た翌々日、彼はライカー社のトップとして規制改革省の呼び出しを受ける。

そこで通告されたのは、ライカー社の傘下にある公益事業部門は全ての監査委託業務が取り消された、という事実であった。

ジェームズ・サエキの逮捕により、違法に近い職権濫用が発覚。いもづる式に他社との贈収賄疑惑が浮かび上がる。最終的には、それらに関わる担当社員の名簿まであることが判明。ライカーが呼び出しに応じている最中に、本社には強制捜査が入っていた。

そしてプライベートでもスキヤンダルが起こる。英国大衆紙ザ・サンはその日の朝刊に、ライカーが数年前、未成年の少女と性的関係を結んだと報道した。その少女はすでに成人している。彼女はライカーにより飲酒を勧められ、酩酊状態で性交に同意したこと。そして、彼女が当時未成年であることをライカーは知っていた、と告白している。

ライカーは“似非貴族^{えせ}”と書き立てられ、奔放な妻の行状まで話題になりそうな気配だ。

そんな中、同日付で新しく監査を委託された企業と、フジワラ・ロンドン本社の正式契約が発表されたのだった。

フェアなだけで会社経営は成り立たない。卓巳もアンフェアな手段を選ぶことはある。違法ではないが公平でもない、と思われる手口だ。それらの遣り様は、卓巳より宗のほうの方が長けているだろう。

今回、新たに監査を委託された企業とは……クッションはいくつも挟んであるが、元を辿れば藤原グループの息が掛かっていた。公

になれば公正であつても議論を呼ぶことになるだろう。第一、これほど極端な真似をしなくても、ライカー社は認可せざるを得ない状況であつた。それを承知で、卓巳はライカーから奪い取つたのである。

くくくくくくくく

その日の午後、ライカーがプラザ・オン・ザ・リバーを訪れた。卓巳の前に立つた彼は、サーの称号が似つかわしくないほどやつれていた。目の下の隈がダーググレーの瞳を浮き立たせている。眼球は忙しなく動き、何かに怯えた表情だ。所々皺の見えるスーツも彼の置かれた状況を表していた。

ライカーはオーナーズルームのリビングを見回した。万里子の姿を探しているようだ。だが、卓巳のことは直視出来ずにいる。怒りの直撃を恐れているらしい。

『マリコの具合はどうだろうか？　少しでも気持ちを癒せればと持つて来たんだが』

手には薔薇の花束を抱えている。それは淡いピンクの“プリンセスダイアナ”であつた。およそ温室栽培であろう、寒い時期に必死に咲く花に恨みはない。だが……卓巳は受け取ると、そのままゴミ箱に叩き込む。

『話はそれだけか。　ジエイク、サーのお帰りだ』

『待つてくれ……弁解をさせて欲しい。私のしたことが、許されるものでないのは判っている。だが、せめて彼女に直接、お詫びを言わせてはもらえないか。』

もう、聞いたと思うが……。私は彼女と、その……最終的な関係には到っていない。マリコは決して私に身体を許してはくれなかった。私も強引に奪うようなことはしたくなかったんだ。その悔しさのあまり、酷い言葉で傷つけてしまった。人前であんな……。』

ライカーは拳を握り締め、唇を噛み締めて一旦言葉に詰まる。

『……あんな、辱めを与えるつもりなどなかった。すまない。本当に申し訳ない。せめて、彼女を傷つけた全ての言葉を取り消したいと思う。どうか、マリコに』

卓巳は無言でライカーに近寄り、腕を掴んだ。

見る見るうちに燃え上がる卓巳の怒りに、ジェイクは部屋の隅に言葉もなく控えている。

『待つてくれ、タクミ。君が羨ましかった。そして、会う度にマリコに惹かれてしまった。だが、私が間違っていた。私は謝罪をしたいただけなんだ』

そんな言葉を吐き続けるライカーを、卓巳は力任せにドアに向かって突き飛ばした。ライカーが当たった傘立てが倒れ、ポールハンガーが揺れる。

『出て行け！ 私が貴様を殺さないうちに』

どれほどの制裁を加えても卓巳の怒りが静まることはなかった。
なぜなら……。

「いやあ！ いやあ……やめて！ 助けて……いや、見ないで。いやあっ！」

突然、リビングの奥にあるドアの向こうから、悲鳴が響き渡った。

卓巳は血相を変えてそのドアを開け、中に飛び込む。

部屋の中はカーテンが閉まったまま薄暗い。そこには、白衣のドクターとナース、付添い人が一人ずついた。全員女性だ。

中央のベッドに万里子はいた。身体を丸めて、喉が裂けそうな悲鳴を上げている。

この中で唯一日本語の話せる付添い人のソフィが、万里子に必死に語りかけるが……。

「万里子！ 大丈夫だ。大丈夫……僕を、僕を見るんだ」

ベッドに覆い被さるように、卓巳は万里子を抱き締め、落ち着かせようとする。

『鎮静剤を打ちましょう……注射を』

『待ってくれ。薬の多用はしたくない』

『この場合は仕方ありません。奥様は眠る必要があります。一日の限量を超えることはありませんから』

『……判った』

卓巳は腕の中で泣き叫ぶ万里子を、動かないように押さえ込んだ。催眠鎮静剤を投与されると、万里子は短い時間で落ち着きを取り戻す。即効性があるということは、その分副作用もあるということだ。卓巳はそれが不安であった。だが、このままにすると万里子はベッドから転げ落ちるように逃げ出し、バスルームに駆け込むのだ。そして、一心不乱に身体を擦り始める。

しばらくすると寝室はひっそりと静まった。

「万里子、すぐに楽になる。大丈夫だ、ゆっくりお休み」

「たくみさん？ たくみさん……ごめんなさい……ごめんなさい……

……ごめんなさい」

「君のせいじゃない。君が謝る必要は何処にもない。君は何も悪くないんだ」

卓巳は万里子の髪を撫でながら、同じ言葉を何度も何度も繰り返

した。それでも万里子は意識が落ちる寸前まで涙に震える声で「ごめんなさい」と謝り続けたのである。

『後は頼む』　小さな声でソフィに伝え、卓巳はベッドから離れた。

卓巳が顔を上げると、ドアにもたれるようにライカーは立っていた。言葉もなく、目は最大まで見開かれている。

そんなライカーを目にして、卓巳の胸から灼熱の溶岩が噴き上がった。

『起きている間はずっと泣いている。私の声に気付くと、さっきのように謝り続ける。彼女に罪がないことは、貴様が一番知っているはずだ。なのに、謝り続けるんだ!』

卓巳はライカーの胸倉を掴み上げ、壁に叩きつけた。

『泣き叫ぶ万里子の声を聞いただろう!?　彼女には、貴様のようなくソ野郎に傷つけられた過去がある。大きく胸元の開いた服も、水着姿も、男の目を怖がつて嫌がる。夏場でも肌を隠す彼女を、貴様は全裸で人前に晒したんだ。さあ、よく見ろ!　彼女は破廉恥か?　娼婦に見えるのか?!?』

ライカーの銀髪を驚づかみにして、卓巳はベッドを指し示した。膝から崩れ落ちそうになるライカーを卓巳は引き摺り、寝室の外に放り出す。

『食事も摂れない。薬を使わないと眠ることも出来ない。あれからずっとだ。万里子が貴様に何をした?　言ってみろっ!』

卓巳は後ろでに寝室のドアを閉める。

『薔薇の花で……償える程度の罪だと思っていたのか!?!』

ライカーはようやく口を開いた。

『……知らなかったんだ……こんな……』

『万里子は私の全てだ。彼女の笑顔だけが生きる支えなんだ。過去に苦しむ彼女を、この手で幸せにすることだけが望みだった！』

貴様から、全てを奪ってやる。万里子が貴様を赦すと言うまで、一生奪い続けてやる。何処にも逃げ場はないと思え！』

それは報復宣言だった。正義などどうでもいい。今の卓巳はただ、憎しみの塊と化していた。

『どう、すればいい？ どう償えば……英国中から医者を探してこよう。いや世界中から』

『貴様の手は借りん。万里子は私が治す。失せる』

床に座り込んだまま震えるライカーに、卓巳は吐き捨てたのであった。

第八章 奇跡 (13) 賭け

とうとう新婚旅行最終日となった。

ロンドンの空はどんよりと曇り、まるで卓巳の心を映したかのようだ。

成田直行便の最終は十九時過ぎに出発する。日本時間で翌日の十六時前、成田に到着予定である。

そして、卓巳が東京に戻れば、すぐにも取締役会が開かれるだろう。そこで解任されれば、卓巳は会社を追われる。

だが今の卓巳にとって、日本に戻ってからのことなど、どうでもよかった。

藤原グループにとっては卓巳も歯車の一つに過ぎない。仮に彼が抜けても、違う人間がすぐさま代わりを務めるだろう。

だが、万里子は違う。今の万里子を守るのは自分しかない。世界中を敵にしても守りたい、万里子さえ元に戻ってくれるなら、他の何と引き換えにしても惜しくはない。

万里子を取り戻す　卓巳は決意を新たにしたのであった。

初めは休ませることが先決と考えた。しかし今日で三日目。これ以上薬物に頼るのは万里子の体に負担を掛ける。無論、ドクターは無理は禁物だという。

だが……卓巳は万里子の強さを信じていた。

万里子は自分がどれほど苦しくても、先ず人を気遣うことが出来る人間だ。心配を掛けたくない、彼女は顔を上げ、微笑むのである。

卓巳の狂態にとうとう指輪を外し、藤原家を出て行った時もそうだった。

宗が卓巳の“暴走”を“事故”と勘違いさせたせいではあるだろう。それでも、万里子は卓巳の身を案じ、周囲の目も気にせず、駆けつけてくれたのである。そして愚かな卓巳に「ついて行く」と手を差し伸べてくれたのだ。本当なら卓巳が追いかけ、「戻って欲しい」と懇願しなければならなかったのに。

あの時、卓巳の精神は折れ、万里子を追うことも出来なかった。だが、折れた鋼は万里子の愛情によって溶かされ、卓巳は生まれ変わる事が出来たのだ。

その万里子が、卓巳を見捨てて閉じこもってしまうはずがない。彼女なら必ず乗り越える。

事件以降、泊り込みだった精神科のドクターに、昨夜は引き上げて貰った。今朝は十時頃に、ナースを連れて来ることになっている。

「おはようございます、オーナー。奥様は如何ですか。昨夜はお休みにられましたでしょうか？」

朝八時、付き添いを頼んでいるソフィが部屋を訪れた。

「ああ、昨夜は一度も目を覚まさなかった。このまま落ち着いてくれたらいいんだが」

久しぶりにぐっすり眠っている。このまま何事もなく目を覚まし、「おはよう、卓巳さん」と微笑んでくれたなら……。

「もう、大丈夫かも知れませんか。後は私が付き添いますので、オーナーも少しお休み下さい」

「いや……そうだな。じゃ、シャワーを使わせても貰おう。少し頼む」

卓巳はソフィに万里子を任せ、バスルームに向かったのだった。

ソフィ・カーライル、万里子より少し年上だ。量の多い赤茶色の髪をバレッタで後ろに纏めている。背はかなり高く、卓巳が少し見下ろす程度であった。

彼女はナニーの資格を持ち、このホテルの託児施設でベビーシッターをしている。そのため、化粧はしておらずアクセサリーの類は一切身につけていない。ホテルの制服を崩さずに着込み、まるで修道女のように慎ましやかな女性だ。それもそのはず……彼女には両親がおらず、教会で育ったという。

ソフィは十六の頃からプラザ・オン・ザ・リバーで働いていた。当時は雑用、下働きである。卓巳がこのホテルを購入した二年前、彼は従業員支援制度を設けた。そのおかげで彼女はナニースクールに通い、資格を取れたのである。

ソフィは当初、社長とは強欲な支配者である、と思っていたようだ。他の従業員も似たようなものであったから、前任者がそうだったのだろう。ソフィは日本から来た新しい社長に驚き、そして感謝の思いを伝えたくて日本語を覚えた。卓巳はそう聞いている。

今の万里子に英語は耳に入らない。日本語が話せて常に付き添える人間を、と考えた時、卓巳の頭にソフィが思い浮かんだのだった。

間もなくジエイクもやって来る。午後はどうしても出なければならぬ。今夜の帰国は不可能だ。そのことを宗に連絡しなければならぬのだが……どうにも気が重かった。

卓巳がため息と共にシャワーのコックを締めた時、『オーナー！奥様が』ドアの外からソフィの声が聞こえた。

「いや、いや……助けて！ いやあ、見ないで……おねがい……見ないで」

止めるソフィの手を振り切り、万里子は卓巳のほうへ、いや、バスルームに向かって走ってくる。

「万里子っ！ 落ち着け、落ち着くんだ！ もう大丈夫だ。大丈夫だから」

「ダメなの。綺麗にしなきゃ……体を洗わないと、卓巳さんに二度と会えないのっ！」

万里子は目を覚ました途端、パニックの発作に見舞われたようだ。自分の腕を掴んでいるのが卓巳だと判らないらしい。

「私、すぐにドクターに連絡してきます」

ソフィは部屋から飛び出そうとした。

「ダメだ！ 連絡はしなくていい」

卓巳はそう言ってソフィを引き止めた。そして、万里子を強引に抱え上げベッドに連れ戻したのだ。

「社長、おはよう………ごさいます」

そこに爽やかな顔で現れたのがジェイクである。だが、中の様子に一瞬で表情は引き締まった。

「ああ、ジェイク！ お願い、オーナーを止めてちょうだい」

「え？ あの、社長………すぐにドクターを」

ジェイクは切羽詰ったソフィに声色に驚き、携帯電話を取り出した。

「医者是要らんと言ってる！」

卓巳の怒声にジェイクの動きは固まった。

万里子の悲鳴が部屋に響く中、卓巳は彼女の両手首を持ち、ベッドに押さえつけているのだ。

「オーナー！ 焦ってはいけない、とドクターも仰ってました。奥様が壊れてしまうわ。止めて下さい！」

「万里子はこんなことで壊れたりしない！ 妻を……薬漬けにされ

てたまるか。ジェイク、ソフィを連れて外に出ろ。早くしろ！」

卓巳の剣幕に二人は驚き、ジェイクはソフィの手を引き、寝室から飛び出した。

第八章 奇跡 (14) 心の旅路

万里子は迷宮の中に閉じ込められていた。

抜け出したい。卓巳の音がするほうに必死で向かい、彼の腕に飛び込んだ瞬間、思い出すのだ。自分は卓巳を裏切ってしまったのだと。

「たくみさん……許して。ごめんなさい……ごめんなさい。わたしを許して」

信じれば良かった。

引き裂かれて初めて、卓巳の言葉が真実で、心から愛してくれていたのだと判った。

そうでなければ、迎えになど来なかっただろう。契約書を破ってくれたりもしない。あれほどまでに侮辱されながら、すでに他の男のものになった妻を、取り戻そうとはしてくれなかったはずだ。

卓巳の言葉は、悪意により誘導されたものだった。

万里子は確かめようともせず、ライカーの好きにすればいい、と身体を投げ出した。

何も覚えてはいないが、おそらくはライカーの言う通りなのだろう。卓巳のためだから……卓巳の望み通りにしよう。せめて、ただ一つの愛に殉じることが、万里子の愛の証だと思った。

愛を……諦めなければ良かった。

卓巳を、愛し続ければ良かったのだ。

「万里子……万里子、僕は君を愛してる」

卓巳は何度も言ってくれたのに、どうして信じなかったのだろう。

「万里子、一緒に日本に戻ろう」

戻りたかった。いや、卓巳と共に居られるなら、場所など何処でも構わない。

「君は僕の魂の半身だ。僕の命だよ、万里子」

卓巳の傍でなければ、息をするのも苦しい。

「戻っておいで……万里子。戻って来て、僕を許すと言ってくれ」

万里子の目の前に卓巳がいる。言いたいことはたくさんあるのに……。

「ごめんなさい……卓巳さん、ごめんなさい」

言葉になるのはそれだけだ。

「万里子、僕は君を苦しめてるのか？ 君は……このまま眠り続けるほうが楽かい？」

卓巳の声が耳の裏で聞こえる。万里子は夢と現実の間を漂いながら、後ろから卓巳に抱き締められていた。そう……“卓巳は万里子に触れている”のだ。

不意に、万里子の胸は申し訳なさで一杯になる。ライカーを受け入れた瞬間の記憶はない。だが、あの男の指に触れられ、唇がなぞり、舌が這い回った感触が甦る。

“わたしは穢れている”

皮膚の裏側まで、髪の毛一本まで、全身に流れる血液さえも毒が染み渡っていく。水に浸したスポンジのように、万里子の身体は毒に塗れた汚水を吸い上げ、やがて朽ちていくのだ。

それに、卓巳を巻き込んではいけない。

卓巳が触れているなら、せめて表面だけでも綺麗にしなくては…。

「洗わなきゃ……わたしは汚れてるの……綺麗にしなきゃ、卓巳さんか」

万里子は夢の中で卓巳を振り払い、シャワールームを探そうとした。

だが、強い力がそれを阻む。

「いや……お願い。もう、許して」

その瞬間“何か”が唇に触れた。

万里子は咄嗟に、ライカーにされた口づけを思い出した。シッティングルームでされたキスだけじゃない。ベッドの上でも……何度もキスされたことを思い出す。そのたびに、鳥肌の立つ気持ち悪さを我慢続けた。

初めは卓巳のことを考えようとしたのだ。卓巳に愛されたことを思い出すだけで、万里子の身体は蕩けそうになる。そのまま、自分に触れる指が卓巳のものだと思えばいい。そうすれば楽になれる。しかし、すぐに万里子の肌は違和感を唱え始めた。これは卓巳ではない、と。

次第に万里子は自らの心を凍らして行った。かつての卓巳がそうであったように。未来は閉ざされた、ならば、幸福な過去に閉じ籠もればよい。

きつく目を閉じ、歯を食い縛り、鍵を掛けた万里子の唇から“何か”は離れようとしなない。

唇の上をなぞる柔らかな感触、甘やかで情熱的な香り　それらは、万里子が心の奥に閉じ込めた幸福を呼び覚ます。

「万里子、愛してるよ。君を愛している。戻って来るんだ。僕はここにいます」

「たくみさん。戻りたい……でもダメなの。あなたに何も与えられない、この身体が疎ましい。あなたの愛を、信じられればよかった。でも、出来ない。この身体じゃ……何度あなたを受け入れても綺麗にはなれないから。乗り越えようとしたけど……忘れられると思っただけど……」

万里子はしゃくりを上げ、涙をぼろぼろ零した。夢の中の卓巳に抱きつき、心に溜めた忌わしい想いを吐き出すように口にする。

「死んでしまえばよかった。四年前に……そうすれば、あなたを巻き込まずに済んだのに。堕ちるのはわたし独りでよかったのに」

「万里子……生きるのはそんなに苦しいのか？　僕が傍に居ても、耐えられないほど辛いのかい？」

「苦しい、苦しいわ。死んでしまいたい。あの子と一緒に、死ねばよかった。お願い……もう、楽にして」

涙で卓巳の表情が見えない。

ひたすら沈み行く万里子の精神こころに、思いもよらない卓巳の言葉が響いた。

「判った。なら、僕と一緒に死のう」

それは、卓巳の声が、本当の意味で万里子に届いた一瞬だった。

万里子の瞳は卓巳を映した。

髪が……濡れていた。バスローブを羽織っている姿を見て、シャワーの途中だったことが判る。その証拠に、無精ひげが卓巳の顎に残っていた。

「だ、だめよ。卓巳さんは死んじゃ駄目。お願い、死ぬなんて二度と言わないで」

卓巳の顔は憔悴の色が濃く、目は真っ赤だ。ロンドンに着いてすぐの頃のように、何日も眠っていないのかも知れない。食事は取っているのだろうか？ また倒れはしないか？ 万里子の頭に、そんな心配ばかりが浮かぶ。

「どうして……どうしたの？ 卓巳さん……目が赤いわ、ちゃんと寝なきゃだめです。食事召し上がって……卓巳さん？」

卓巳の充血した瞳に涙が浮かぶ、やつれた頬がふわっと緩んで……卓巳は満面の笑みを浮かべたのだ。

「やっと僕を見てくれた。やあ、お帰り……奥さん」

第八章 奇跡 (15) ラブ・ストーム(前書き)

*性的表現があります。苦手な方は飛ばして下さい。R15で願
いします。

第八章 奇跡 (15) ラブ・ストーム

「あの……卓巳さん……あの」
ライカーのことを考え始めたら、万里子は再び心に鍵を掛けるか
もしれない。

卓巳は矢も盾もたまらず……万里子に口づけた。

二人の唇が触れ、啄ばむようなキスを繰り返す。強く押し当て、
官能の実を根こそぎ奪いそうになるのを卓巳は必死で我慢した。

「たくみ……さ」

「シツ、黙って。僕のことだけを考えてくれ」

万里子は卓巳に抱きつくでもなく、所在無げに手を広げたままだ。
卓巳はそんな万里子の指にそつと触れた。互いの手の平が重なり……
それだけで、例えようのない悦びが二人の間を行き来する。次第
に、絡め合う指がその隙間を埋めて行く。

万里子がバスルームに駆け込もうとしたため、二人はベッドのす
ぐ横に立っていた。

立ったままのキスから、卓巳は少しずつベッドに近寄り……。

「きゃっ」

万里子は膝の内側がベッドの縁にぶつかり、ストンとベッドに座
り込んだ。卓巳は手も唇も離さず、万里子の後を追いかける。

「あの、あの……たくみさん」

キスの合間に万里子は卓巳の名を呼ぶ。

「なんだい？ “ごめんなさい”は無しだ。いや、“愛してるわ、
卓巳さん”だけ言ってもいいよ」

「あ、愛してるわ……卓巳さん」

万里子は、唇が離れた隙に急いで口になっている。卓巳はそれが嬉

しくて堪らない。

「その調子だ。愛してるよ、万里子」

「あの……指輪が」

万里子は自分の左手に、結婚指輪が戻っていることを口にしたいらしい。それは、このホテルに着いてすぐ、卓巳が彼女の指に嵌めたのだった。

今度のことで卓巳は学んだ。

ジェームズ・サエキにはまんまと騙された。それがライカーの指示か、ジェームズの独断か、そんなことは最早どうでもいい。ただ、運命は悪意の塊だ。卑劣な罠を仕掛け、卓巳から万里子を奪おうと企む。ならば、闘ってやる。運命が何度、万里子の指から結婚指輪を奪い取っても、その度に、全力で取り戻してみせる。

卓巳の中にはもう、セックスを嫌悪し、愛の存在を否定して逃げ回っていた十五歳の少年はいない。母親の言動に振り回され、心を凍らせた少年を、卓巳は“過去”のアルバムに整理した。楽しい思い出として眺めることは出来ない。だが、もう“過去”なのだ。

卓巳は万里子の左手をしっかりと掴み、口元に引き寄せた。

「二度と外れないよう、呪文をかけよう」

「もし……外れたら？」

「また、僕が取り戻すよ。そして、君の指に嵌める。何度でも、だ」
卓巳は万里子の指、一本一本を唇でなぞった。そして手の平から手首……肘の内側へと繋げていく。

「卓巳さん、愛してるわ、でも」

その瞬間、万里子の口元に卓巳は指を押し当てた。

「覚えてるか？ 君が初めて僕にキスをねだったのは、太一郎に唇を奪われた時だった。だから……百回、いや千回でも口づけて、記憶の外に押し遣ってしまおう」

卓巳の手は万里子の腰を引き寄せ、包み込むように唇を重ねた。今までの優しいキスより、少し深く甘く、そして長くお互いを感じ合う。卓巳の熱が万里子に伝染り……彼女の細い指が卓巳の濡れた髪に絡んだ。

卓巳の手が万里子のパジャマのボタンに掛かった時、

「あ、だめ、だめよ卓巳さん」

「駄目じゃない。もう、待てないし、僕は待つ気もない」

「せめてシャワーを……体を洗ってくるから」

「万里子、君の体でそれ以上洗う場所なんかないだろう？ 千回で足りないなら、僕が一万回だって君の体を愛するから……」

卓巳は唇でなく、互いの額をつけたまま、万里子にそう伝えた。

すると、万里子がクスクスと笑い始める。真剣に想いを伝えて、笑われる理由は判らない。だが、笑顔の万里子が見られるなら、理由などどうでもいい。

「ひどい奥さんだな。僕の本気を笑うなんて。どうやってお仕置きしてやるうか？」

そんな冗談を口にしつつ、卓巳も一緒になって笑った。

「ごめんなさい。でも、一万回も愛してくださるの？」

「ああ、もちろん。男に二言はない」

「でも、毎晩でも……三十年も掛かるわ。その時、卓巳さんって六十歳なんだけれど……」

夫婦生活を思わせる言葉が恥ずかしかったのか、万里子の頬はほんのり桜色に染まった。

そんな妻に、落雷にも似た欲情を覚えつつ、

「大丈夫だよ。僕はスタートが遅いから、六十でも現役だ。ああ、そうか。一日二回なら、二万回は君を愛せる」

あからさまな卓巳の言葉に、万里子の頬は桜から薔薇へと色を変えたのだった。

「ひよつとして……そんな大きなことを言っただ大丈夫？　っと思ってるのかな？」

「ち、違います。わたしは」

ついさつき、吐息でなぞった万里子の指を、卓巳は握り締める。

そして、バスローブの下に誘導したのだ。万里子の手は少し冷たくそして柔らかかった。いや、卓巳が燃えるように熱いだけかも知れないが。

「驚いたかい？　いや、正直に告白しよう　僕も驚いている。キスを始めてからこの状態なんだ。万里子、“奇跡”を二人のものにしたい」

卓巳の言葉に万里子は、ほんとうに小さな声で「……はい」と答えた。

そして卓巳に起こった“奇跡”は万里子の体、奥深くまで伝わり……。かつて、愛を邪魔した僅かな隙間は、永遠に消え去った。

それは万里子を苛む苦痛に“奇跡”の雨を降らせ、卓巳は有らな限りの愛を注ぎ込んだ。

二万回に向けて、二人のカウンターは回り始める。

くくくくくくくくくく

「卓巳さん……外が、明るいわ」
クッションを背に、卓巳はベッドにゆったりと座り込んでいる。
そんな卓巳の脚の間に腰を下ろし……万里子は彼にもたれ掛かって
いた。

この時、ようやく万里子はここがリッツ・ロンドンでないことに
気づく。

もちろん、シエラトンパークレーンでもない。部屋は少し小さめ
のつくりで、現代風なすつきりとした家具が並んでいた。

ベッドの左手に大きな窓があり、黒い遮光カーテンが掛かっ
ている。その三分の一ほどが開き、白いレース越しに淡い光が射し込
んだ。

ベッドの正面にはナチュラルな木目調のローボード。その上には
42型のプラズマテレビが設置してあった。ドアはテレビの左横と
右手の壁にある。右の壁には書き物机とサイドボードが並び、ど
ちらも小さめだ。ベッドサイドのテーブルには白いシェードの電気ス
タンドがあり、灯りが点ったままだった。

卓巳は万里子の傷にそつと唇を寄せた。強く握ることも、乱暴な
真似も一切せず。万里子は素敵な夜を過ごしたと思っていたのだ。

しかし、この部屋に吹き荒れた嵐は、どうやら夜ではなく朝、と
もすれば昼だったのかも知れない。

そんな万里子の疑問に、ようやく小休止といった卓巳が答えをく
れた。

「朝だからね……多分。まだ、午前中だとは思って」

卓巳は万里子の乱れた髪を、一本ずつ解すように指を通して
いる。そんな気だるい様相の卓巳は初めてで……言いかえれば、今の卓巳

は以前からは想像も出来ないほど、男性的に思えたのだ。

「ねえ、卓巳さん。わたし、今ので判ったことがあるんですけど」「なんだい？」

「わたし、サーとは……“こういうこと”はなかったと思うわ」

万里子は恐ろしく真剣である。

だが卓巳は、何を今更、と言わんばかりの表情だ。

「ああ、そうだね。婦人科のドクターもそう言ってた。……ライカ
ーも」

「サーはどうして、わたしを抱かなかったのかしら？ それなのに、抱いたように言ったのかしら？」

卓巳が巻き起こした突風は、万里子の胸を蔽う霧を吹き飛ばした。その中には悲しみと真実が隠れていたが、万里子はその両方をきちんと受け止めたのだ。卓巳が万里子の全てを認め、無償の愛を与えてくれたから……。

愛は“奪うもの”でも“与えるもの”でもなく、そして、その両方なのだ。どちらかだけでは、愛は枯れ果てる。

「ねえ、サーとは……きゃ」

「ハネムーンのベッドで他の男の名前を呼ぶなんて、どうやらお仕置きが足りなかったらしいな」

言うなり、卓巳は万里子の口を塞ぐ。

会社は、契約はどうなったのか？ あれから何日経ったのか？

二人はまだ日本に戻らなくてもいいのか？ 卓巳に聞きたいことはたくさんある。

でも……万里子が一番知りたいことを選び、卓巳の背中に手を回

した。

第八章 奇跡 (15) ラブ・ストーム(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

えっと、これが、私の現在の描写力の限界です…m()m

こんな感じで、ハネムーンの延長戦となります(苦笑)

(飛び火もしちゃうし…^^;))

よかったら、クライマックスまでよろしくお付き合いくださいませ

(平伏)

第八章 奇跡 (16) 素敵な睦言

テムズ河に面した窓から、射し込む光がだいぶ鋭角になった頃……。

「万里子……もうダメだ。体がベッドから起こせそうにない」

オーナーズルームの寝室に、今にも死にそうな卓巳の声が響いた。

卓巳はベッドにうつ伏せだ。しかし、片手はしっかりと万里子の手を握り締めている。万里子も息は荒いが卓巳ほどではない。卓巳の隣で仰向けになり、毛布に包まれている。彼女の肌は上気してピンク色に染まり、擦過傷はあまり目立たなくなっていた。

「わたしも……ダメです。でも……卓巳さんのウソつき」

「えっ？ 僕が何だって。嘘つきって聞こえたが」

万里子は少し拗ねたような声を卓巳に投げかけた。

卓巳は驚いた様子で万里子ににじり寄り、顔を覗き込む。

「だって……ベッドの上でどう愛したらいいのか判らない。駄目な男だなんて。本当は、こんな風に何度も色々……。最初に卓巳さんからデートに誘われた時、お父様が仰ってました。悪い噂は聞かないけれど、縁談はたくさんあるって。本当は、お付き合いされた方がいらっしやるんじゃないですか？ 本当のことを教えて下さい！」

もう少し冗談めかして尋ねるつもりだった。だが、本当にそうだったら、と思い始めると……。万里子はどんどん思いつめた声になっ
て行く。

そんな万里子の頭の下に、卓巳はグイと腕を押し込んだ。そのま

ま軽く抱き寄せ、とんでもないことを口にする。

「えっと……仕方ないな。じゃ、僕の初めての女性の話をしようか」
「え……」

「最初の時はとにかく焦ってた。それ以前から、色々悪戯めいたこととはしていたんだが……彼女にとっても初めてのことだったからね。いきなり僕が押し入ってしまった」

軽い口調で語る卓巳に万里子は言葉もない。

「ああ、でも……途中まで、あっという間にギブアップだった」
「どう、して？ どうしてそんな方がいらっしやるなら、その方と結婚されなかつたんですか？ それを、そんな軽い言葉で」

万里子は卓巳の腕を振り解き、本心から批難しようとした。ところが……。

「何を怒ってるんだい？ 結婚してるじゃないか。新婚旅行中の出来事だよ。なんたって十日ほど前の話だからね。誰かさんにも身に覚えがあるんじゃないかな」

卓巳はさも楽しそうに笑っている。ようやく万里子も、卓巳にかかわれたことに気づいた。

「ひどいわ、卓巳さん。それに……わたしは、初めてじゃないわ」
「君はひき逃げされた被害者に、ルールを守って横断歩道を歩いたのが悪い、免許を取ったら減点しよう、っていうのか？ そんなのは、ノーカウントだ。だから、君の初めては僕なんだよ」

でも……と言いつけた万里子の反論を卓巳はキスで奪う。
「それに、僕は君を妊娠させると言っただろう？ 自信がある。母親になる覚悟は出来てるのかな……奥さん」

何もかも諦めていた。なのに、卓巳は万里子の願いを一つずつ叶えてくれる。

卓巳は“消せない過去”を塗りつぶし、その上から、幸福の絵の

具で未来を描くつもりなのだ。万里子の思い描いた夢を、過去が見えなくなるまで……何度も何度でも。

卓巳のゼロパーセントに「足せばいい」と答えたのは万里子だ。卓巳は繊細だが、一度決めたら目標を達成するまで諦めない人である。

万里子はイエスの代わりに卓巳にキスで答えた。

「卓巳さんの赤ちゃんが欲しい。今度こそ、産んであげるの。あの子の分も愛してあげたい」

「万里子、いつか話そうと思っていた。女の子だったんだね」

卓巳に胸に顔を伏せ、万里子は頷く。

「見ないほうがいいと言われたけれど……取り出された子供を見ました。手も、足もちゃんと出来てて。名前をつけてあげた時、本当は怖かった。戸籍に載るんじゃないか……父に知られるって酷い母親でしょう？ だから、母親になる資格がないんだと思って……」

「当たり前前の感情だ。本当に酷い母親は……子供のためには泣かない」

卓巳の言葉に、万里子は安堵した。失った子供のために泣くことは偽善ではないのだ、と。

四年前、手術を受けた病院はともかく、忍の勧めで受診したいくつかの産婦人科は万里子に冷たかった。被害者であることを伏せて受診したのだから、仕方がないのかも知れない。

医者は皆、卓巳が最初の頃口にした「女子高生が奔放に遊んだ拳げ句、妊娠して中絶」といった視線を万里子に向けた。数人のドクターからは、避妊の必要性を懇々と諭され、中には、後遺症は自業自得と言われたこともあった。

万里子が、自分には泣いて悲しむ資格すらない、と思い始め……『贖罪』に心が傾くのも当然であろう。

万里子がそんな経緯を卓巳に告げると 「その間抜けな医者の名前を言ってみろ。全員からドクターの肩書きを奪ってやる！」

「やめて、卓巳さん。そんなつもりはないの。それに……もう“過去”よ。そうでしょう?」

怒った卓巳は本当にやりかねない。万里子は慌てて言葉を続けた。「あ、あのね。例えば名前だけでも、愛し合って授かった命だと言ってあげたくて『愛が実る』と書いて『まなみ』と名づけたの」

あまりにも小さくて、火葬したとき骨は残らなかった。僅かな遺灰だけ、ペンダントにしたロケットに忍ばせている。今も海外旅行用のトランクの奥で眠っているはずだ。

万里子の言葉を受け、卓巳は怒りが収まったのか、今度は信じられないことを言い始めた。

「愛し合って授かった命だ。僕たちが、ね。ただ 少し早かった。早過ぎて、君を独りにしてしまった。辛い思いをさせて済まなかった。二度とさせない。僕を許してほしい」

万里子は困ったような笑みを浮かべ、首を左右に振る。

「卓巳さん、何を仰ってるの? あなたのせいじゃないわ。あなたが謝ることじゃないでしょう?」

「万里子、日本に戻った時、心無い誰かが墮胎の過去まで引っぱり出して来るかも知れない。その時はこう答えればいい 「子供の父親は藤原卓巳だ」と。君の子供の父親は、僕以外にはあり得ないんだから。過去も未来も……君は僕だけの妻だ」

泣きたくないのに、信じられないくらい幸福なのに……。

万里子は天井のライトが何重にも見えてくる。

「あまり、優しくしないで……本当にそう思ってしまうから」

「信じてくれないのは辛いな。じゃあ、信じてもらうために二度目のセックスの話をしよう。今から一週間ほど前、僕は初めてダイニングテーブルの上で体を重ねた」

「もうダメよつ。それ以上は言っちゃだめ！」

万里子は起き上がり、両手で卓巳の口を押さえようとした。

「僕は初めて彼女の可愛らしい部分にキスをして……彼女はとっても気持ち良さそうな声を」

卓巳は万里子から逃れながら、悪戯っぽく笑うのを止めない。万里子は卓巳の背中をばんばん叩いた。

「もう、卓巳さんのバカッ！ イジワルなんだからっ」

「疑われちゃ敵わないからね。三回目のセックスがどれほど素晴らしかったか。彼女の身体の、全てを知った瞬間も話してあげようか？」

万里子は降参だった。口では卓巳に勝てそうもない。

「判ったわ……判りました。ごめんなさい。でも、本当に嘘つきだなんて思ってた……ただ、あなたが、とても素敵だって言いたかったの。でも、上手く言えなくて、ごめんなさい」

卓巳の背中にそっと頬を寄せ、万里子は囁いた。すると、卓巳はクルリと向き直り、真顔で万里子に口づける。卓巳の手は毛布の中に滑り込み、万里子の背中を撫で……キュルルルー。

それは、万里子のお腹が鳴る音だった。

「や、やだ……ごめんなさい。でも、すごくお腹が空いて」

万里子は恥ずかしくて身を擦る。

でも卓巳は笑いも怒りもせず、

「そりゃあそうだろう。三日間点滴とスープじゃダイエットにも限界だ。さて、まずは胃に優しいものを食べに行こう！　今夜のためにも」

二万回が三万回になりそうだと曖昧に微笑む万里子だった。

第八章 奇跡 (17) 消えたふたり

卓巳がリビングに足を踏み入れた時、そこは無人だった。

(ジェイクとソフィは何処に行ったんだ?)

僅かに疑問を感じつつ、卓巳は窓際のデスクに近寄った。

オーク材で作られた、かなり幅の広い机だ。色は内装に合わせて軽めのライトブラウンである。卓巳は外線の受話器を上げ、日本の国番号81を押し、続けて電話番号を押しした。

繋がるまでの間、手持ち無沙汰に卓巳はベッドルームのドアに視線をやり……。

卓巳は万里子を抱かかえバスルームまで運んだ。

そのまま一緒に入ろうとしたら、「卓巳さんのエッチ！」と追いつ出されてしまった。

今の彼女なら、必要以上に体を傷つける真似はしないだろう。そう思いつつも、心配でドアの外で万里子が出て来るのを待つことに。彼女の後から卓巳はシャワーを利用したが、例によって例の如く“鳥の行水”だ。

昨日までの万里子はかなり衰弱して見えた。だが今は、少し痩せたくらいで元気そうに思える。昨夜ぐっすり眠ったのが良かったのかも知れない。或いは、やはり精神的なものが大きかったのだろう。多少疲れているようだが、回復してすぐにお腹が空く辺りは健康で若い証拠だ。

卓巳がシャワーから出て、万里子にその話をすると、

「疲れているのは卓巳さんが……。少しは手加減して下さいと、わたし……」

万里子は俯き、声のトーンまで下がって行く。
思わぬ藪蛇やぶへびに慌てたのが卓巳だ。

「す、すまない。つい、浮かれて。今夜からは決して無茶はしないし、ちゃんと睡眠を取ろう。それに可能な限り、滞在を延長しようと思っている。ハネムーンのやり直した。せめて、ロンドン市内や周辺の観光をしよう。まだ、二階建てダブルデッカーバスにも乗ってないだろう？」
卓巳の言葉にようやく万里子も微笑んで……。

「社長？ 藤原社長ですね？」

「ああ、私だ」

初々しい万里子の仕草を思い出し、卓巳は頬が緩み掛ける。だが、宗の声に一瞬で我に返った。

宗が出たのは予想外だ。秘書室には掛けたが、宗は滅多にデスクにおらず、他の秘書が出るものと思っていた。

「社長、今日が何日かご存知ですか？」

「旅行の最終日だ。今から八時間後には成田行きの飛行機に乗る……予定だったな」

卓巳は“予定”に力を入れて答える。

電話の向こうからはため息が聞こえた。

「ライカー社との契約について情報が錯綜しています。契約完了であったり、交渉決裂であったり……。ロンドン本社に連絡をしても

詳細は発表できない、と言われ。プロジェクトの担当責任者も不在のまま、サエキ本社長も捉まらない。おまけにリッツは、お部屋にはお繋ぎ出来ない、の一点張り。しかも社長からの電話は、なぜかプラザ・オン・ザ・リバーのオーナーズ・ルームから掛かっている。本日連絡もなく、予定の便にご搭乗がなければ……私も英国イギリスに向かう準備をしていました。

社長、一体ロンドンで何が起こってるんでしょうか？」

「……」

確かに、と卓巳も思わず納得してしまう。

ロンドン本社はトップの不祥事と契約に関するゴタゴタを、日本のグループ本社に逐一報告は出来ないだろう。ある程度決着がつき、目処が立ってから、になるはずだ。とくに、全権を担う卓巳が陣頭指揮を取っているのだから尚更である。

「契約は完了だ。フォークナーとの共同開発は計画通り進める。準備チームはそのまま開発チームに移行。ロンドン時間で本日夕刻に共同記者会見が行われる予定だ。私も出席する。詳細は戻ってからだな」

「……正式契約おめでとございます。お疲れのところ申し訳ありませんが、取締役会を明後日に予定しております」

「その件だが、延期してくれ」

一瞬、宗の声が詰まったが……予想の範囲内だったようだ。

「延期……ですか。どれくらいでしょう？」

「一週間」

「無理です！ 仕事がどれだけ溜まっていると思ってるんですか？」

「仕事？ 取締役会は私を解任するんじゃないのか？ 後任者が好きにやるだろう」

些か投げやりな卓巳の返事に、どうやら宗も本気で困っているらしい。

卓巳の真意を量りかねる、といったところか。

「それは、ともかく。現時点で社長に一任される決済事項やら何やら、全部待たせている状態ですから」

「今日も午後から会議だ。記者会見にも出なきゃならん。これじゃあハネムーンの意味がないだろう?」

「……ハネムーン、ですか? 帰国後に離婚する予定では?」

「……」

宗は笑いを含んだ声で聞いてくる。判っていて尋ねる辺りが小憎らしい男だ。

だが、次の瞬間、宗は声を潜めて言った。

「千早社長は激昂されておいでです。戻り次第、奥様を実家に連れて帰ると仰っておられました」

「……彼は、四年前の件を知ったのか?」

「藤原邸を訪れた際にお耳に入ったようです。香田忍さんが全てを話してしまわれまして……奥様に関する噂があまりに酷かったせいですが」

「そうか」

父親に知られたことを聞けば、万里子は傷つくに違いない。

卓巳は万里子に話すべきかどうか悩んだ。

「私は、万里子とは別れない。太一郎にも伝えておいてくれ。万里子だけは譲らない、と」

「それは……判りました。良かったと思います。太一郎様も同じで

はないでしょうか。でも一週間は……せめて三日なら」

「五日だ」

「四日が限界です」

「判った。四日後の最終便で帰国する。成田の到着は五日後の午後だ」

「了解しました。では、良いご旅行を」

宗の返事を聞いて、卓巳は受話器を置いた。

帰国すれば色々忙しくなる。ライカーの件は万里子の傷を深くした。せめて皮膚の傷が癒え、嫌な記憶を楽しい思い出に塗り替えてやるまでは……。父親の件はその後だ。

午後からの会議と記者会見の段取りを確認しておかねばならない。卓巳はオーク材のデスクに腰掛けたまま、長い足を組み替え、今度は携帯を手に取った。

すると……ピピピピピピピピ……そんなコール音が目の前のソファで鳴っている。そこには、今朝ジエイクが着ていたアッシュブラウンのスーツの上着が無造作に置かれていた。

卓巳は立ち上がり、ソファに近寄って上着を持ち上げる。音の発生源を確認すると 自身の携帯電話を切った。

室内を見回すと、入り口近くのポールハンガーにジエイクのコートが掛かっている。

(どういうことだ？ 財布も携帯も持たず、コートも着ずに外へ行ったのか?)

付き添いのソフィがいないのも気に掛かった。簡単に職場を放棄するような女性ではなかったはずだ。

リビングには仕切りがあり、簡易キッチンがついている。卓巳は中を覗き込むが……人が好んで隠れるようなスペースではない。第

「彼らが卓巳から身を隠す理由もないだろう。
室内で残る場所はウォッシュルームくらいだが……。」

第八章 奇跡 (18) 魅惑のティータイム

卓巳が入り口横の通路を抜け、ウォッシュルームのドアの外に立った時、中から人の気配がした。その瞬間、卓巳は絶句する。

(参ったな……まさか、ジエイクに限って……いや、ああいう奴だからか?)

それは……愛し合う最中の男女の声だ。

どうやら、ほんの数時間前とは逆の立場に立たされたらしい。卓巳はどうすればよいか判らず、途方にくれた。だが、そこに万里子がやってくる。薄く化粧を施し、ピンクベージュの口紅が彼女の白い肌にしっくりと馴染んでいた。

どうやら万里子もリビングに誰もいなくて驚いたらしい。卓巳の姿を見つけるなり、嬉しそうに駆け寄る。

「卓巳さん、あの……」

「シッ」卓巳は口元に指を一本立てて見せた。そして親指で目前のドアを指し示す。二人が静まり返った一瞬、女性が昇り詰める最中の声が辺りに響き渡る。それは卓巳たち以上に、大人のセックスを楽しんでいるに違いない声だ。

万里子は口をパクパク開け、眼球を忙しなく動かした。そして、瞬く間に頬が沸騰する。卓巳はそんな万里子の表情に苦笑いを浮かべつつ……。

卓巳は万里子の肩を抱き、ウォッシュルームの前を離れた。

「卓巳、さん……あの、あれってジエイク？」

「ああ、そうだろうな。勤務中にとんでもない奴だ。と、言いたい

ところだが……どうやら、火を点けたのは僕たちらしい」

追い出した後、卓巳が乱暴な真似をするのではないか、とドアの外で聞き耳を立てていたのだろう。夫婦の営みが始まった時は、さぞかし驚いたに違いない。ジェイクの困惑ぶりを想像して、卓巳は前髪をかき上げる。

「でも相手の女性って？ 卓巳さんはご存知なんですか？」

「多分、ソフィだろう。このホテルの託児室でベビーシッターをしている、ソフィ・カーライルだ」

「ジェイクの恋人なの？」

「いや……違うと思うが。彼女には君の付き添いを頼んでいた。この三日間、ずっと君の傍にいたんだが。全然覚えてないかい？」

「う、ごめんなさい。傍に誰かいてくれたことは……あの、卓巳さん。ここって何処ですか？」

質問されて始めて、卓巳は万里子にこの名前を教えていないことに気がついた。

万里子にホテル名を教え、ここが卓巳の所有で、卓巳専用の部屋であることも教える。

「そうですね。じゃやっぱり、窓の外に流れているのはテムズ河なんですネ。でも……よろしいんですか？」

万里子は得心がいったように頷きながら、ウォッシュルームのほうに視線をやった。

「あの声から言っても、ジェイクが無理にどうこうしてる感じじゃないからね。僕らの寝室の様子を窺ってるうちに、二人とも気持ちが高ぶって……といった所だろう。勤務中に、と怒るべきかも知れないが……うーん、困ったな」

ジェイクに午後の予定を確認しておきたかのだが、どうやら難しそうだ。彼は見た目は軽薄だが、中身は素晴らしく古風な男であった。社内でも堅物で通っている。一方、ソフィも教会での教えを守り、慎ましく暮らす女性である。

「そんなお二人なら、勢いで……なんて後悔されないでしょうか？
止めてあげたほうが」

「い、いや、万里子。ここで声を掛けて止めるというのは無茶な話だろうか？ 十分に最終段階まで進んでる様子だし、一ラウンド目とも限らない」

「それは……。でも、こういったことは女性にとっては重要なことですし……申し訳なくて。だってわたしたちのせいなんですよ？」
「だが二人とも大人だ。映画館で、ベッドシーンに興奮して隣の席の女性と関係してしまった、責任を取れ、と映画会社を訴える奴はいない」

ウォッシュルームのドアを叩きそうな万里子を引きとめ……卓巳は彼女が手にしたままのコートを、肩に掛けてやる。

「そんな顔をしなくても大丈夫だ。出来る限りのフォローはする。さあ、僕たちは先に出よう。目の前で聞かれたことを知ったほうが、ソフィも傷つくだろう。まあ、僕たちも聞かれたわけだから、おあいこのようなものだが」

卓巳はジェイクに尋ねるのを諦め、デスクの上にメモを残して二人は部屋を後にしたのだった。

くくくくくくくくくく

オックスフォードストリートと書かれた大通りを左に折れ、大きなデパートの裏手にタクシーは停まった。

「ここは？」

「ウォレスコレクション。美術館だが中庭のカフェがお気に入りだね。仕事の合間に立ち寄るんだ」

ウォレスコレクションの名前は万里子も聞き覚えがあった。ロンドンの観光名所でトップテンに入る場所だろう。レンブラント、ルーベンス、ベラスケス……十七世紀に活躍した画家の作品を多く所蔵している。名だたる画家の中で万里子が一番興味を惹かれたのはフランス・ハルスであった。人物画、それも笑顔の人物を多く描いたという。ハルスの騎士の絵を、万里子は見たいと思っていた。

「美術館も見れるのでしょうか？」

「ああ、だがまずは腹ごしらえだ。英国名物フィッシュアンドチップスも結構だが……フレッシュトマトスープが最高なんだ。君の胃も驚かないと思うよ」

万里子は卓巳オススメのトマトスープとマッシュポテトを注文する。スープは、完熟トマトを潰したばかりのような、真っ赤な色をしていた。濃厚だが酸味があるので胃にもたれることはなく、風味だけでも栄養満点だ。柔らかくて仄かに甘いマッシュポテトと共に、万里子の空腹をゆっくりと満たしてくれた。

食後にはアフタヌーンティもいただけると言う。

予約待ちというリッツ・ロンドンのアフタヌーンティは楽しみ損ねたが……。卓巳と二人で過ごせるなら、公園のベンチで食べるサンドイッチでも最高だ。

万里子はスコーンを皿に取り、ナイフとフォークで四つに切り分けた。リッツのスコーンはレーズンとアップル入りだったが、美術館のカフェ“バガテル”のスコーンはプレーン。横にはクロテッドクリームとイチゴジャムそれにレモンカスタードが添えてあった。

「わたしはクロテッドクリームとイチゴジャムで。卓巳さんはどれがいいですか？」

「ああ……甘くないので」

万里子はクスクス笑い、「スコーンがほんのり甘いです」

なるべく甘くなさそうなレモンカスタードをつけ、フォークに刺して卓巳に渡す。

ところが……パクツ！と卓巳はフォークを受け取らず、スコーンだけ食べてしまう。万里子は啞然だ。

「ごちそうさま。なんだったら、僕も食べさせてあげようか？」

「た、た、たく、たく……」

万里子は恥ずかしくて顔を伏せるが、卓巳はクリームとジャムのついたスコーンを手で取り、万里子の口元に差し出した。

「さ、召し上がれ」

「もっつ！」

万里子は周囲を見回した。中庭に並んだ白い円形テーブルはほぼ満員だ。だが、カップルは食事と会話に夢中で、後は読書や携帯電話を触っている。誰も万里子たちのことなど、気にもしていない。

万里子は意を決して、卓巳の指先にあるスコーンをサクツと一口食べた。そして、唇についたジャムを指先で拭おうとする。だが、今度はなんと卓巳が身を乗り出して……万里子の口元をペロツと舐めたのだ。

驚き過ぎて万里子は言葉もない。

「ああ……確かに甘い。でもこういつ食べ方なら、僕にもいけそう
だ」

ハルスの『微笑む騎士』より、ニッコリと微笑む卓巳を見て、満
足する万里子なのであった。

第八章 奇跡 (19) 騎士の怒り

カフェ“バガテル”を出た直後、卓巳の携帯が鳴った。

「ああ、ジェイクだ。ようやく仕事を思い出したらしい。ちょっと待ってくれ。」

卓巳は万里子に断わると中庭の隅まで移動して電話に出る。電話はほんの二分程度で、すぐに万里子の元に戻ってきた。

「全く。ソフィのことばかりで……契約が終ったからと言って、仕事も終わった訳じゃないんだぞ。」

ブツブツ言っているが、卓巳は本当にジェイクに怒っているわけではなさそうだ。

「ジェイクはなんて？」

「ああ、どうやら、元々ソフィに目をつけていたらしい。上手くベツドに……今回は洗面室だが……連れ込めて、即行でプロポーズしたそうだ。」

卓巳の言葉に万里子は心の底からホツとした。

この三日間のことはほとんど覚えてはいない。だが、卓巳以外の日本語が……それもたどたどしい女性の声が耳に残っていた。「ダイジョーブデス」と何度も言ってくれた気がする。そんな優しい女性を、万里子たちのことが切っ掛けで悲しい目に遭わせたくはない。

「そうだ！ 万里子、今夜もプラザ・オン・ザ・リバーで構わないだろう？」

「え？ ええ。それが何か？」

「一応、リッツのグリーンパーク・スイートを押さえたままだったんだ。それを、ジェイクたちの婚約祝いにした……事後承諾になっ

てすまない」

「いいえ。わたしは構いません。二人は喜んでました?」

「ああ。今夜も“避妊なし”で愛し合うそうだ。僕らより先に作ったら減俸だな」

子供っぽい卓巳の口調に、万里子は笑いが止まらない。

そんな万里子の肩を抱き、卓巳は胸の中に引き寄せた。彼の声が耳元で「笑い過ぎだ」と囁く。その直後、唇が重なった。軽い挨拶程度ではなく、もっと熱烈に。それは恋人同士のキスといふべきか。目を閉じると、万里子の脳裏から美術館の景色は消え去った。まるで世界中に卓巳と二人きりで居るような錯覚に陥る。舌先で味わうキスは仄かにイチゴジャムの味がした。

「甘いな……万里子の唇は」

「ジャムの味です。だから、卓巳さんも」

その時、口笛が聞こえたのだ。

カフェから館内への通路を歩く人々が、ジロジロふたりを見ている。口笛を吹いたのは若いカップルの男性であった。隣の女性に窺たしなめられながら館内に消えて行く。

「た、たくみさん。出ましようか?」

「え? ああ……館内を見るんじやなかったのかい?」

さっきの人たちと顔を合わせる事になったら、気まづいに違いない。卓巳は、気にするな、と笑うが……。万里子は卓巳を促し、ウォレスコレクションを出たのだった。

二人はそのままロンドンの街を腕を組んで歩いた。

ロンドン市内は渋滞が多い。その緩和策が通りごとに一方通行になっている。

万里子たちはオックスフォード通りのデパート、セルフリッジスを目指す。この辺り一帯はロンドン、いやヨーロッパとも言えるほどのショッピングストリートであった。ウイグモア通りを横切るとすぐにセルフリッジスの入り口が見える。

「ねえ、卓巳さん。皆にお土産を買って帰らなきゃ」

「みんなって……お義父さんとか？」

「皆は皆よ。お父様や忍もそうだけど、お祖母様にも……お邸の皆にね」

「なんのために？ あ、いや、戻ればおそらく邸を出ることになる。彼らに何を言われたか、どんな目で見られたか……君は忘れたのか？ 後は勝手にやればいい。藤原の家がどうなるかと、もう私たちには関係ないんだ。無論、社長としての責任は果たすつもりだよ……だが、藤原の連中は別だ」

午前中は晴れていたように思えた。だが、テムズ河の水面に光が反射してそう見えただけかも知れない。

今は……冬枯れの立ち木がストリートに並び、どんよりとした鉛色の空と重なる。卓巳は、そのモノトーンを背景に冷やかな言葉を口にしたのだった。

「お祖母様は……出て行けとは仰らないと思います。叔母様たちはきついことを仰るけど、皆がそうじゃないもの。それとも卓巳さん、今もわたしのこと……恥だと思われませんか？」

「馬鹿な！ あれは……下らない嫉妬心が引き起こした失言だ。本心じゃない。君も、そうだろう？ それともまだ、欠陥品だと思われてるのかな？」

一瞬で卓巳の目に欲望が生まれる。

それは、日本に居た時の卓巳からは想像しがたい表情であった。

「それは……今朝は違ったと思います」

「今朝は？」

「そう、今朝は」

「それは、今夜も証明してみせる必要があるってことかい？」

万里子は返事の代わりに、ギョツと卓巳の腕にしがみ付いた。

「お祖母様ともう一度話し合ってみて下さい。あなたを愛して、庇ってくれたことを忘れないで。お願い」

「……判った」

卓巳がそう答えた時、髪に唇が触れて……卓巳の大きな手が万里子の両手を包み込んだ。

くわくわくわくわく

セルフリッジスでショッピングを楽しんだ後、万里子は独り、タクシーでホテルに戻る。卓巳はそのままシティの本社に向かい、会議に出席。そして、フォークナーとの共同記者会見が行われた。

場所はなんと、ホテル・シエラトンパークレーン。

会見には規制改革省の役人も同席し、万里子が見たのはテレビのニュースであった。

なぜか、ライカー社の名前は欠片も拳がらず、しかも『ミスター・タクミ・フジワラがオーナーであるシエラトンパークレーンで記者会見が……』と説明され、万里子は驚いた。

あのホテルのオーナーはライカーであったはずだ。万里子はジェームズに車中でそう説明された。頭は混乱していたが、記憶違いで

はないと思う。

そして、その記者会見により、万里子は初めてジエームズ・サエキが、背任・横領の罪で逮捕されたことを知る。ライカー社をはじめ、収賄の証拠も多数あり実刑は免れないとニュースキャスターは言っていた。

同時に、ライカー社の担当者は贈賄で逮捕。公益事業の職権濫用が発覚して、ライカー社はライセンス取消し、と知る。

画面には社長としての責任を追及され、レポーターに追いかけるライカーが映し出された。

万里子は眉を顰めテレビの電源を切ろうとしたが……。

『レディ・アマンドはあなたと離婚し、息子の本当の父親と結婚すると仰ってますが事実ですか？ サマーセット伯爵はその件について……』

一言も答えず、ライカーは記者を押し退けるように歩いている。ドアの内側に姿が消えた時、なぜか、万里子はホッとしたのだった。

「ああ、シエラトンパークレーンは買収した。いや、正確には……ライカー社を買収したんだ」

夜、戻ってきた卓巳にホテルのことを尋ねた。その答えは万里子をさらに驚かせる。

ライカー社は今回の不祥事で資金源が断たれ、株も暴落した。そこを卓巳が出資する英国企業に買収させたという。シエラトンパークレーンのみ、卓巳が筆頭株主になったらしい。

「買収……ですか？ では、サーは？」

万里子の質問に卓巳はフツと鼻で笑った。

「その呼び名も、もう少しで終わりだ。奴は伯爵の逆鱗に触れ、家を追われる。名目的には……一連の不祥事が理由にされるだろう」

「……？」

卓巳が話したライカーの真実　なんと彼は子供が作れない体だというのだ。二十代前半で患った病気のせいらしい。

卓巳はライカーの言動からコンプレックスを感じ取り、調べさせたのだという。そしてそれを、サマーセット伯爵とネイサン・B・フォークナーに報告した。それが事実で公になれば、子供の父親として買われたも同然のライカーは意味がなくなる。そして、後継者として戻る場所さえなくなるのだ。

「どうしてそんなっ!？」

「当然の報いだ」

「子供を諦める辛さは……卓巳さんもよくご存知のはずです!」

「ああ知ってる。だから、だ！ 僕から君を奪った。その君に、赦し難い屈辱を与えた。永遠に君を失う所だったんだっ！ 心臓を鷲づかみにされたような……あの恐怖だけは忘れられない。

ライカーは生きたまま地獄に落としてやる!」

卓巳の怒りの深さに戸惑う万里子であった。

第八章 奇跡 (19) 騎士の怒り (後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

第8章の描写を変えて(若干構成も違います)サイトに掲載しております。

ストーリーは変わってません。

興味のある方はぜひ覗いてみてください。(R15です)

<http://book.geocities.jp/arlequinroman/pic/novel/aiwoosiete/index.html>

では、引き続きよろしくお願い致します(平伏)

第八章 奇跡 (20) 君が教えてくれたこと

「この話はもうお終いだ。四日後にはロンドンを発たなきゃならない。さあ、奴のことは忘れよう、万里子」

両手を上げ、聞き分けの悪い子供を諭すように卓巳は言う。ほんの少し持ち上がった口角が、万里子の目に、今の卓巳がとても意地悪そうに見えた。

「ええ 卓巳さんも忘れて下さるのなら」

ため息をひとつ吐き、卓巳は前髪をかき上げ 「ああ、判った。忘れよう」

何処か投げ遣りに即答する。そのまま万里子から視線を逸らし、吐き捨てるように卓巳は続けた。

「奴の信用は地に落ちたも同然だ。どのみち、私のやるべきことはもうないよ。 万里子、お前が赦してやれと言っても、奴は終わりだ」

(そうじゃないのに……)

万里子自身、ライカーを赦す気になどなれない。

だが、「赦さないこと」と「仕返しをすること」は違うはずだ。

人の弱味を見つけ、それを公にして笑い者にするというのなら、それは。

「サーを赦して欲しいなんて思っていない。ただ……思い出しただけです。不幸な過去を……体の欠陥を突き付けられて、悲しくて堪らなかつた時のことを」

明らかに卓巳の表情が変わった。

ほんの数ヶ月前、卓巳が万里子にした仕打ち 「ふしだらで汚れた女」「我が子を殺した」 あの脅迫の瞬間を思い出すたびに、万里子の手は冷たくなり震え始める。偽りを暴かれ、彼女は抵抗することも出来ずに卓巳の要求を受け入れていた。今ならもちろん判る。女性の全てを嫌悪していた卓巳が、万里子に抱いた恋情を認められず、彼自身も苦しんでいたのだ、と。ライカーは自らの犯した罪により裁かれるべきだ。体の機能に不都合があつたとしても、それは彼の罪ではない。

卓巳はしばらく万里子を見ていた。だが……無言のまま部屋を出て行ったのである。

くくくくくくくく

オーナーズルームのリビングは真つ暗だった。

卓巳が部屋を出て何時間が経つたのだろう。万里子は後を追わず、ただ卓巳の帰りを待っていた。

その時だ。静寂を破り、部屋の電話がけたたましい音を上げた。どうすればいいのか……悩む万里子の目の前で、電話はカチリと音を立て呼び出し音が止まる。留守番電話に切り替わつたのだ。万里子はホッとして、卓巳なら受話器を上げようと手を伸ばした。

『ああ ステイヴァン・ライカーだが……』

スピーカーから流れる声に、万里子はビクツとして手を止めた。しばらく間があり……再びライカーは話し始める。

『伝言を聞いた。マリコの意識が戻つたというのは間違いないだろうか？ 事実であれば、本当に良かった』

ライカーの声は微かに震えていた。万里子は、私怨に満ちた卓巳の行動を謝罪するべきかどうか迷う。だが……ライカーの声を直接耳にすることに恐怖と抵抗を感じて、受話器を上げることが出来なかった。

『タクミ、今回のことだが……。私は君に感謝している』

(え?)

万里子は目を見張り電話を見つめた。

『確かに、権利の濫用はあっただろう。私の指示だ。委託された権利にステイタスをつけるつもりだった。だが、それに金が動いていたことは知らなかった。君が我が社の株を買い取ってくれなければ、株券は一ペンスの価値もなくなっていただろう。一部社員の不品行と無能な経営者のせいだ、善良な社員とその家族、数千人の生活を脅かさずに済んでホッとしている』

ライカーの言葉は予想外のものだった。

卓巳がライカーから奪い取ったのは、怒りのためではなかったのだろうか？ 電話の前に混乱する万里子がいることも知らず、ライカーは話し続けた。

『例の件も、マスコミ流さずにくれて助かった。ただ、未成年の少女の件は……今更だが、記事が全て事実ではない、とマリコに伝えてもらえるだろうか？ もちろん、君の怒りが冷めてからでいい。』

君が羨ましかったよ。マリコの笑顔を手に入れて、私は君にならなかった。だが今は、彼女の悲鳴が耳から離れてくれない。

離婚が成立すれば、私は母と暮したフランスに戻るつもりでいる。私に対する怒りを妻や子、社員たちに向けずにくれた君に、心からの感謝を』

くわくわくわくわく

ピーー。

室内に電話から流れる電子音が鳴り響いていた。ライカーの声途切れ、万里子は呆然と立ち尽くしている。

卓巳は手を伸ばしボタンを押した。

一瞬でリビングは静まり返り……万里子が振り返った。

「た、くみさん」

「奴のためじゃない。あの少女はライカーとの関係を金にしたがっていた。嘘を承知で、私はマスコミを動かした」

奴を貶めるためなら何でもする。泣き叫ぶ万里子を見て、卓巳はそう決意していた。

マスコミ操作だけでは飽き足らず、ライカー社の違法行為を当局に通報した。更には、それを大株主に密告して株の暴落を謀ったのだ。ライカーの弱点を知った時は、嬉々としてタブロイド紙の一面に流してやろうとすら思っていた。

だが、鏡に映した自分の顔を見た瞬間、卓巳の背筋に悪寒が走る。それは、唾棄すべき叔母・尚子が卓巳を見下ろす時の顔にそっくりで、醜悪さに歪んでいた。

万里子が目覚めた時、騎士が悪魔に姿を変えていたらどう思うであろう……。

その時、ライカーが卓巳のもとを訪れた。

元々が英国人でない彼に、味方など一人もいない。ライカーは社

員を守るべく、卓巳に強いた土下座を、自らが返したのであった。

「買収はサーの希望だったんですね。だったらどうして」

「そこまで追い込んだのは僕だ。それに……奴を赦したと、君に思っ
つて欲しくはなかった」

卓巳は目を伏せ、デスクから離れた。そのまま、部屋の中央に置
かれたソファに腰掛ける。万里子もその横に座った。

「もし仮に、サーを裸にしてピカデリーサーカスに放り出したとし
ても……わたしは嬉しくはないし、全てを忘れることなんて出来ま
せん。わたしの望みは、今日のような日々を卓巳さんと過ごしたい
だけです」

そう言いながら、万里子は卓巳の手を握り締めた。

「考えていたんだ。あんなに酷いことを言った僕を、どうして君は
愛してくれたのか……。ライカーのように気の利いた贈り物さえせ
ず、優しい言葉すら掛けなかった。なのに」

「卓巳さん自身に嘘や偽りがなかったから。言葉とか……色々嘘が
あったとしても。あの“カノン”も“かすみ草”も……いつもわた
しの気持ちを一番に考えて下さったから」

万里子の手が腕から首に回り、「ごめんなさい……お願い……嫌
いにならないで」

涙声で卓巳に抱きついた。

「それは僕の台詞だ。あの日、君を傷つけて泣かせたことを赦して
くれ。だが、他の男は赦すなど言う僕を、愛してくれるかい？」

卓巳の手は万里子の腰を掴み、二人の体はソファの上でピッタリ
と寄り添った。

万里子は少し顔を上げ、「キスしてくれますか？ だったらわたし」

二人の唇が重なり……その夜遅くまで、リビングは熱い吐息に埋もれたのだった。

第八章 奇跡 (21) 愛はほどほど...

「待って……卓巳さん……ここじゃだめ」

「何が駄目？」

「見つかったら怒られるわ」

「キスするだけだよ。それ以上はしない」

「あ、あたりまえじゃないですかっ！」

ウエストミンスター寺院を観光で回りながら、卓巳は万里子を抱き寄せる。

「ここは教会ですよ。神聖な場所でこんな……」

「ああそうだよ。結婚式でキスする場所だ」

一事が万事この調子である。

ホテルの近くから、ということ……ウエストミンスター寺院や国会議事堂そしてビッグベンを回った後、バッキンガム宮殿へ。宮殿のあるバッキンガム・パレス・ガーデンズは、万里子が二週間近く眺め続けたグリーン・パークと隣り合わせになっている。やっと公園を卓巳と散歩できて、幸せ一杯の万里子だった。

次の日は天気良かったので大観覧車ロンドンアイに乗ることに。そこでも卓巳は万里子と二人きりになるために力技を繰り出してくる。なんと二十五人乗りのカプセルを貸切にしたのだ。

最大高度一三五メートルで東京タワーより少し低いくらいである。ロンドンの市内が一望出来るのはもちろんのこと、この日はウィンザー城まで見ることが出来た。

「楽しいが少し残念だな」

「何がですか？」

カプセル中央のベンチに腰掛け、二人は最高の景色を眺めている。なのに、卓巳は少し不機嫌だ。

「……キス以上のことが出来ない」

無然とした面持ちで呟く卓巳を見ながら、万里子は笑うしかない。

カプセルは見事なシースルーで外からは丸見えなのだ。ギリギリに立つと、下からスカートの中まで見えてしまいそうなくらいである。

入籍前、遊園地でデートした時に、卓巳はそこに観覧車がないことを知り、とても残念そうだった。

どうやら、デートで観覧車に乗る、というのも、卓巳にとってやってみたいことのひとつだったらしい。マフラーと一緒に巻いたり、パールツクを着たりするのと同じことである。

観覧車の中で何をするつもりだったのかは……。

そしてその後、二人は観光もそこそこに、新婚カップルに相応しい時間をホテルで過ごしたのである。

しかし、こんな卓巳に万里子は戸惑いを感じ始めていた。

日本では、これほどまでに人前で手を繋ぐことなどあり得ない。

藤原邸の庭を散歩する時だけ、卓巳は遠慮がちに肩に手を回した。

部屋でキスする時もぎこちなく……どこか甘酸っぱさが漂っていた。

ところが、本当の意味で夫婦になったこともあるのだろう。それに、異国の気安さも加わり、卓巳は街中で気軽に肩や腰に触れてくる。唇だけでなく、頬や髪、首筋にまでキスしてくるのだ。それは、レストランやバーでも同じだった。向かいではなく、卓巳は必ず隣に座る。そして、ふとした拍子に万里子の脚に手を置き、瞳を見つめては微笑んだ。後はキスへと、まるで無限ループである。

そしてホテルに戻ると……卓巳の要求はエスカレーターするばかりで。

「ジエイクたちも楽しんだんだ。僕たちにも同じことが出来るとは思わないかい？」

そんな言葉で万里子を誘い、なんと、来客用のウォッシュルームに引っ張り込んだ。そして、まるで子供のように万里子にねだり、洗面台の横のウッドベンチで愛し合ったのである。

ライカーの留守電を聞いた後、リビングのソファで万里子から積極的に誘い、愛し合ったのが悪かったのかも知れない。でも、元々気持ちが高まれば、何処でも押し倒す卓巳である。彼はベッド以外で愛を交わすことに夢中になった。

決して万里子も嫌なわけではない。

だが、卓巳の変化があまりにも急過ぎて、そのスピードについて行けないのだ。歩き始めたばかりで、走り出そうとする卓巳と、ゆっくり進みたい万里子の歩幅は少しずつズレが生じてきた。そして、そのズレが原因で、ロンドンで過ごす最後の夜に二人は喧嘩をってしまったのだった。

く*く*く*く*

「最後の夜くらい、何もせずにのんびり過ごしませんか？」

そんな万里子の言葉が切っ掛けだった。

「どうしてそんなことを言うんだ？ 日本に帰れば忙しくなる。最

後の夜なら心ゆくまで楽しみたい。欲望に溺れたセックスとはわけが違うんだ。愛を分け合う最高の行為を、わざわざ省く意味が判らない」

卓巳にすれば彼の中の“男”が、埋葬寸前に息を吹き返したようなものである。そして、眠り続けた十五年分の情熱を万里子に注ぎ込みたい一心であった。

卓巳はセックスがこんなに楽しいものだと思ってもみなかった。ずっと万里子に触れ、キスをしていても飽きることがない。いつでも何処でも、万里子と手を繋ぎ肩を抱いていた。

真冬の寒さも弾き返すパワーで、卓巳の心はロンドンの街並みをスキップしていた。

だが、それと同じくらいの不安も抱えている。自分のセックスは、前戯も含めて万里子を十分に満足させていないのではないかと。と。

卓巳自身は最高の快感を得ている。だが、万里子は……。多くの男性が自分の下半身に対して抱く不安を、卓巳はより一層抱いていた。

とくに、機能しなかった時間が長い。もしかた……。それを考えると、可能なうちに、と焦ってしまうのだ。色々考えすぎて、途中で興奮が途切れることもある。万里子にも同じだけの悦びを、と思えば思うほど上手く行かない。落ち込み、万里子に励まされ、再び立ち上がる、の繰り返しであった。

その姿は卓巳が想像する“理想的な大人の男”からは程遠い。万里子が考える以上に、卓巳は彼女の言動に神経を尖らせていたのだ。

その結果、万里子の一言は卓巳の耳に「あまり良くないから、もうセックスはしたくない」と聞こえてしまう。

そこでおとなしく引き下がれば良かったのだ、と卓巳は後になっ

て思った。何と言っても、たった一晚のことである。

だが、恋愛に関しては心も体も“十代の少年”並だ。そんな卓巳の頭に浮かんだプランは「キスして抱き合えば判り合える」というお粗末なもので……。

「卓巳さんのバカッ！ どうして判ってくれないの!？」の言葉をもらい、万里子にオーナーズルームから出て行かれたのだった。

第八章 奇跡 (22) 可愛いひと

卓巳にとって二人の時間 愛の囁きはそのままセックスに繋がっている。

だが、万里子にとっては違う。だからこそ、卓巳の男性機能が充分でなくとも、今と同じように愛していた。それらを補うために、精一杯の優しさを見せてくれる卓巳が、最高の男性に思えたのだ。

万里子がそれを伝えても、卓巳は判ってくれない。

男の価値を限りなくゼロにしている問題が解決したのに、以前のほうが良かったなんて……信じられないと卓巳は首を振る。

抱き合えば考えが変わるはずだ、と卓巳は更にセックスを迫った。「もう一度チャンスをくれ！」

怒って部屋を出ようとした万里子に、卓巳が投げかけた言葉の意味が、彼女には判らなかった。

ホテル・プラザ・オン・ザ・リバーの中を万里子が一人で歩くのは初めてだった。

決して大きなホテルではない。むしろ六十程度と部屋数は少ないくらいだ。それに五つ星ホテルの中でも宿泊料金は上位ランクである。だが、稼働率は好調だと聞いていた。

客室はシングルからツインまで全室スイートタイプ。リッツのよくな格調高い豪華さではなく、全てにおいて最新式の設備を誇る。しかし人気の秘密はそこではなく、また訪れたい、長く滞在したいと思わせるアットホームなサービスにあった。

その一つが託児システムだ。滞在中は二十四時間受けられるサービスで、子連れでも夫婦の時間を充分に楽しむことが出来る。ホテル利用者に家族連れが多い所以であろう。

万里子にとって小さな子供の世話をすることは苦行であった。だからこそ、生涯の仕事にしようと考えたのである。でも……卓巳に起こった奇跡は万里子にも起こるだろうか。

そんなことを考えながら、万里子は託児室の前までやって来た。

部屋はガラス張りで、誰でも中が覗けるようになっていた。それでいて、入り口には警備員が配置され、中に入るにはICカードが必要だった。どちらも安全のための配慮だ。

部屋の中にはソフィの姿があった。ジッと見ていると彼女も気が付き、万里子に会釈する。万里子も軽く頭を下げ……するとソフィが手招きしたのだった。

『構わないのかしら？』

恐る恐るドアから声を掛ける万里子に、ソフィは笑って答えた。

『今夜はお預かりするお子様は一人もいらっしやらないんです。だから警備の方もいないでしょう？ 託児中は厳しいですけど、それ以外は清掃や見学の方はフリーパスなんです』

『預かる子供さんはいないのに、こんな時間までお仕事を？』

もう九時近くである。

『今日は泊まりなんです。夜中に預かって欲しいとか、熱が出てドクターを呼んで欲しいとがありますから』

学生ボランティア以外に働いたことのない万里子にとって、ソフィは眩しかった。だが、新婚の万里子と結婚間近のソフィの場合、話は自然にパートナーのことになる。

『本当にオーナーご夫妻のおかげですわ。私みたいな女が、ジェイクのような男性と結婚出来るなんて……今でも夢を見てみたい』
ソフィは指輪を眺めウツトリしている。

さすがジェイク抜け目がないわ、と万里子も感心だ。ソフィとはあれから何度か話し、付き添いのお礼も言った。穏やかで真面目な人柄に、万里子も親しみを感じている。

『ジェイクのほうがラッキーだと主人が言っていたわ。ソフィは素晴らしい女性だ、つて。あんまり褒めるから、実は下心があったんじゃないかと思ったくらいよ』

万里子は冗談めかして、少しだけ本音を口にした。もちろん、まるで下心がないから褒めるのだとは思おうが……。

『そんな……オーナーは紳士ですわ。私も尊敬しています。奥様のことを命懸けで愛されているんですもの。あんなにホットな方だとは思いませんでした。以前は皆で、オーナーは石像なんだって言うてたくらいで……あ、申し訳ありません』

万里子とのホットなシーンを思い描いたのが、ソフィは頬を染める。

だが万里子は「頭の中まで石像なんだから……」思わず日本語で愚痴をこぼしてしまう。

『あの……変なこと聞くようだけど、ジェイクとはその後……どうなのかしら？』

『ええ、仕事が終わったら毎晩電話をくれます。私は寮に住んでいるので……来週から一緒に暮らすことにしました。彼が……我慢できないらしくて』

ソフィは恥ずかしいけど嬉しい……誰かに話したくて堪らない、といった感じであった。

『そう……二人が幸せで良かった』

『ジェイクはオーナーほど大人の男性ではありませんから、色々大変なことはあるんですけど。でも、私いい奥さんになるうと思っ
ています』

『え？ 大人の男性？』

予期せぬ言葉に万里子は聞きなおしてしまった。

『オーナーは経験の積まれた大人の男性に思えます。でも、ジェイクはあまり女性との付き合いがなかったみたいで……。オロオロしたり、私の気持ちを判ってくれなかったり、勝手に色々決めてしまったりするんです。まるで駄々をこねる子供みたいに。でも、私は辛抱強く話し合って行きたいと思っています。だって、私たちは家族になるんですもの』

万里子はソフィの言葉を聞いてドキツとした。

卓巳は年齢も立場も落ち着いた大人の男性に見えるが、こと恋愛とセックスに関しては間違いない^{ビギナー}初心者である。

だからこそ、嬉しくて堪らないのだ。それを回数といった形で万里子に示し、男として認めて貰おうとしているのだろうか。その場合、卓巳が年齢相応に慣れて、自分に自信が持てるようになるまで、じっくりと付き合うしかないのかも知れない。

『大きな子供ね、男の人って』

ため息混じりに万里子が言うと、ソフィも笑って答えた。

『ええ、本当に！ でも、可愛くて素敵な顔は私たちしか知らないのよ』

『そうね。とつても可愛いわ』

顔を見合わせ、二人は楽しそうに笑った。

第八章 奇跡 (22) 可愛いひと(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。

明日で8章終了、帰国後は最終章と致します。(短めになります)
それでは、最後までよろしくお願い致します。

第八章 奇跡 (23) ハネムーン最後の夜

「社長……今、何時かご存知ですよね？」

電話の向こうから眠そうな宗の声が聞こえる。

「夜の九時を回った辺りだ」

「こちらは朝の六時過ぎです。上司がハネムーンから戻って来ないので超過勤務続きで……昨夜も午前三時にベッドに入りました」

確かに細かい調整は宗に一任してある。その予定を四日間ずらし、別に組み込むのは骨の折れる作業なのだろう。

だが……。

「それは済まなかった。だがまさか、それ以前は違うベッドにいた、と言っんじゃあるまいな」

「……………新婚旅行はいかがですか？」

卓巳は微妙に話を変える宗に、相変わらずな奴だ、と苦笑いを浮かべる。

「ああ……今夜が最後なのが残念だ」

「社長！ また帰国を延ばすなんておっしゃいませんよね？」

「判ってる、明日の便でこっちを発つ」

「……………どうかなさいましたか？」

「何がだ」

「楽しい新婚旅行の真っ最中でしょう？ そんな不機嫌な声は似合いませんよ」

卓巳はこれまで、万里子との関係について何かと宗の助言を仰いで来た。今回も無意識のうちに宗に尋ねようとしたらしい。

「いや別に。ただ、何処まで行っても劣等感が付き纏う。私は夫としての務めを果たせているんだらうか」

「それは、私にはなんと。しかし社長が 夫婦であったことは一度もない、と言われた時の、奥様の嘆きようは本物でした」

「判っている……だからつい」

「奥様は社長以外には見えてませんよ。それほど心配されなくても」
「違うんだ、そうではなくて……頑張れば頑張るほど空回りのような気がする」

「……社長？」

「いや、いい。大丈夫だ。帰国は予定通りだ。朝から済まなかったな」

卓巳は携帯電話を切った。

いつまでも、宗の出した答えを丸写しでは情けないにも程がある。正しくても間違っている、より深い愛は教わるものではない。万里子と共に育んで行くべきだ。

卓巳はスーツの上着を手に部屋から出ようとした。

万里子の行動は、支配人から報告を受けている。館内の監視カメラで位置を確認させた。ホテルの外に出ようとしたら、引き止めてすぐさま卓巳に連絡を寄越すように言っている。

ほんの十分前の報告では、託児室でソフィと一緒にいるという。

卓巳がドアを開けた時 そこに万里子が立っていた。

「卓巳さん……お出掛けですか？」

「あ……いや、そろそろ迎えに行っても良いかと思って」

「わたしが何処に居るか……ご存知だったんですね」

万里子の言葉の端々に微かな怒りを感じ、卓巳は息を飲んだ。だが、ここで怯むわけにはいかない。彼なりに必死で考えた譲歩案を口にする。

「僕が悪かった。確かに……昨日もすぐに引き上げ、今日は天気が悪いから、と一日ベッドに……いや、ベッド以外の場所にも縛り付けて申し訳なかった。反省している。

ただ、僕がどれほど君を愛しているか、精一杯示そうとしたんだ！ 本当に……それだけなんだ。

今夜は君の言う通りにしたい。でも同じベッドで寝ることだけは認めてくれ。もちろんセックスはなしだ。君の疑問にはなんでも答えるし、話し合いで解決して行きたい。もう駄目だとか、無理だとかは言わないで欲しい。僕には君しかいないんだから」

それは譲歩と言うより、完全に白旗を揚げた敗北宣言であった。

万里子は卓巳の横をすり抜け、部屋の中に入った。卓巳はそんな万里子の後を追いついた。ひたすら説得に努めようとした、その時。なんと、万里子が突然卓巳に抱きついたので。

「もうっ卓巳さんたら……大好き！」

強く胸に抱きつかれ、卓巳は呆然とする。

「え？ あ、あの……怒ってないのかい？」

「怒ってないわ。ただ……」

万里子は少し体を離し、卓巳を見上げて言った。

「あなたの言う通りにして当然、のように扱われるのは嫌なの。だってそれじゃ、サーと同じですもの。わたしは自分の意志であなたに従っていたのに……サーはそれが、あなたの持っている権利のよいうに言ったのよ。わたしは少しでもあなたの笑顔が見たかった、喜

んで欲しかったただけなのに。

こうして本当の夫婦になれて、とつても幸せ……だけど、これ以上は出来ない、と言って、抱き締めて眠ってくれた時も、同じくらい幸せだった。

お願い卓巳さん、わたしを置いてきぼりにしないで。一緒に歩いて行きたい」

万里子の言葉に卓巳はようやく気付いたのだ。

周囲に追いつきたい、ジエイクに負けたくない、と独りよがりな対抗意識を燃やしていたことに。夫婦として二人三脚で進むはずだった。それなのに、座り込んだ万里子を引き摺り、全力で走ろうとしていた。

「済まない。本当に……僕は何度、君に謝ったらいいんだろう」

「わたしに言うことはそれだけ？」

「それじゃあ、ソファに座って……体を離してから話そう。このまま口になると、今度は君に引っ叩かれそうだ」

必死で自分を抑えようとする卓巳とは逆に、万里子は誘うように卓巳の胸を指で撫で、上目遣いで微笑んだ。

「どうして？ どうしてわたしがあなたを引っ叩くの？」

「どうって……今夜は何もしない約束だろう。なのに、君の胸が押し付けられて、目の前に白い項うなじがある。これは拷問だ」

「じゃあ言わなくていいから……キスして」

万里子からキスをねだらられ、断わることの出来る卓巳ではない。

「愛してる。愛してるよ、万里子。ああっ……どうしてくれるんだ！ 本当にコイツは、君には節操なしだ」

卓巳は目覚めて高ぶった愛の証を、万里子の腰に押し付ける。

「ソファはダメ。ちゃんとベッドまで運んでね。それと……帰国前にナショナル・ギャラリーに連れて行って。ソフィに聞いたの、ジエイクそっくりのキリストを見てから帰りましょう」

「万里子……それってOKに聞こえるよ」

「卓巳さんのほか……これ以上言わせないで」

少し口を尖らせ、万里子は微熱を孕んだ声で呟いた。そして彼女から、もう一度強く唇を押し付けられ……。

（我ながら、なんて単純なんだ）

卓巳の中から数分前の憂いは嘘のように消えている。

万里子を抱き上げ寝室に飛び込み……ふたりはハネムーン最後の夜を、愛を確かめ合って過ごしたのだった。

第八章 奇跡 (23) ハネムーン最後の夜(後書き)

御堂です。ご覧いただきありがとうございます。

明日から最終章となります。

ギリギリまで8章で終わらせるか悩みましたが、帰国後は分けることにしました。

最後までよろしくお願い致します(平伏)

最終章 命 (1) 出迎え

ロンドンのヒースロー空港を午後七時過ぎに発ち、翌日の午後四時過ぎ、卓巳と万里子は成田空港に到着した。

ヒースロー空港まではジェイクとソフィが見送りに来てくれ、

『結婚式に出て頂けなくて残念です。でも、子供が生まれたら名付け親になって下さい!』

と、声を揃える。

『ああ、判った判った。だが、そういうことは子供が出来てから言え』

呆れたように答える卓巳であった。

まさか、その年の春に慶びに満ちた報告をジェイクから受け、「カトリックでもない私が、洗礼式で名付け親をやるのか?」と青くなるとは、この時の卓巳に判るはずもなく……。

く*く*く*く*

「年の瀬に成田を発つ時、こんな気持ちで戻って来られるなんて思いもありませんでした。これで最後なら、いつそ飛行機が落ちてしまってもいいのにつて」

「おいおい、物騒だな」

「だって戻ったら離婚って仰ってたから」

「君にそんなことを言った愚か者がいたのか? とんでもない奴だ。顔が見てみたいよ」

「鏡をお出ししましょうか?」

万里子は茶目つ気タップリに微笑み、卓巳の右腕に手を添えた。そのまま、コツン、と頭を預け……卓巳は歩幅を縮め、歩く速さを万里子に合わせる。それに気づいたのだらう、万里子は再び卓巳を見上げ、今度ははにかむように笑った。

(ここは日本だ。街角で簡単にキスは出来ない)

その台詞をお題目のように心で唱え、些か故障気味の自制心を発揮して卓巳は踏み止まる。

そして、浮かれた気分のまま、到着手続きの最後である税関を抜けた。その時だ、思いもよらぬ待ち人を正面に見つけたのだ。

万里子も驚きの表情で、卓巳の袖をギュッと掴んだ。

「お迎えは、宗さん独りだと……」

「ああ、僕もそう聞いていた」

宗は困ったような笑みを浮かべている。

「お帰りなさいませ。無事にお戻り頂けて何よりでした」

控え目な声で遠慮しつつ声を掛ける。だが、彼が遠慮しているのは卓巳たちではなく、宗の隣に立つ万里子の父、千早隆太郎に、であった。その向こうには千早家の家政婦、忍の姿もある。

「お嬢様……お帰りなさいませ」

「忍、どうしたの？ お父様も、どうしてこんなところに」

驚く万里子の声を聞いた瞬間、卓巳は思い出した。

(ま、不味い……万里子に伝えるのを忘れていた！)

まさか、成田空港の出口に隆太郎が待ち構えているとは思わなかった。父親に知られたことは、日本に戻ってから折を見て伝えよう。

今後の方針が決まり、落ち着いてから二人で挨拶に行けばいい、と。

だが、隆太郎の顔にそんな余裕など浮かんではいなかった。

くくくくくくくく

「万里子っ！ それはどういうことだ。まさか、卓巳くんと言う通りなのか。お前は、夫がいながら不貞を働いたのか!？」

ロンドンへ出発する直前、隆太郎の問いに万里子は答えることができなかった。

だが、冷静になり考えれば考えるほど卓巳の言い分が信じられず、隆太郎は皐月の許を訪れる。

皐月はもちろん万里子と太一郎の関係を否定した。彼女は万里子に頼まれた通り、事件のことは一切口にせず。ただ、そんな皐月の口調には歯切れの悪い部分も出てしまう。

納得出来ぬまま邸を後にする隆太郎に、声を掛けたのが……藤原邸を出ることが決まっていたメイド、永瀬あずさだった。

「卓巳様が、太一郎様と万里子様との密会をお知りになったんです。それで、太一郎様に酷い暴力を……」

卓巳の怒りを恐れ、万里子は太一郎にレイプされたと嘘をついた。その結果、太一郎が怒って、万里子の秘密を暴露してしまったのだ、と。

そして、あずさはその“秘密”を隆太郎に話してしまう。

万里子は卓巳を騙して結婚した。卓巳は体の事情から万里子を妻にしたが、従弟との関係を知り離婚を決意したらしい。

あずさは嘘八百を並べ立て、最後に付け加える。

「あら、嘘だと思われるなら、尚子様にご確認下さいませ」

あずさの言葉に驚き、隆太郎は尚子の許に駆け込んだ。

「卓巳さんに男性機能がないからといって太一郎に言い寄るなんて……。いったい娘さんにどういう躰をなさったのかしら？ 過去のことはお気の毒ですけど、それで女性としての慎みを失ってしまったのね。やはり、男親だけでは娘の教育は出来ませんわね。」

卓巳さんも余程ショックだったのでしょう。社長の座を下りて、藤原の家を出て行かれるとか……。その途端に離婚だなんて。少しでも恥をご存知なら、娘さんをうちの息子に近づけないで下さいな。よろしいこと？」

その尚子の言い草に隆太郎は烈火のごとく怒った。

「確かに……。男親だけでは行き届かなかった点はあるだろう。だが、万里子はこの上なく慎み深い娘に育ってくれた。万里子は何処に出しても恥ずかしくない娘だ！ それを……。こんな侮辱は我慢ならん！ いいか、貴様の馬鹿息子こそ万里子に近づけるな。恥を知らんのは貴様らのほうだ！」

隆太郎が怒って当然である。

特に確認などしないが、万里子は無垢なまま卓巳に嫁いだはずだ。だからこそ、万里子を妻にした、とその日のうちに卓巳は隆太郎に頭を下げたのだろう。

そうだ、卓巳が床に手をつき、万里子を妻に欲しいと願ったのだ。

会長の許しを得られない場合、藤原を出て千早の家に入る、とまで言った。その真摯な言動に、隆太郎も胸を打たれたのである。

隆太郎は家に戻り、忍に事の顛末を話して聞かせた。

「全く！ 人を馬鹿にするにもほどがある。何様のつもりか知らんが、くだらん言い掛かりで万里子を貶めようなど……。あんな連中の話を鵝呑みにする卓巳くんも卓巳くんだ。あんなろくでもない男に、万里子はもつたいたい！ 忍もそう思うだろう！？」

だが、口では強気なことを言うものの、隆太郎は今にも倒れそうであった。娘を信じたい。だが、もし噂が事実なら。万里子の身に何かあったのだとしたら……。

そんな隆太郎の目に、青褪め口籠もる忍の姿が映った。不審に思った彼は忍を問い質し……隆太郎は四年前の全てを知ったのだった。

くくくくくくくく

すぐには状況が飲み込めず、万里子は助けを求めるような面持ちで卓巳を見上げる。

だが、そんな万里子に静かに語りかけたのは父・隆太郎であった。

「万里子。忍から全部聞いた。いや……。何も言わなくていい。何も気づいてやれず、お前には苦しい思いをさせたね。父さんは……お前が生きていてくれて……。そのことに感謝している。もう何も心配しなくていい。うちに戻っておいで。父さんはお前がいないと働く気にもならない。父さんの為にも……。帰ってきてくれないか？」

万里子は唐突な父の言葉に眩暈を覚える。

(知ってしまったの？ どうして……なぜ……そんな馬鹿な……)
クラクラする頭で忍に視線を向けた。

「お嬢様、申し訳ございませんっ！ 藤原家で旦那様が悪意に満ちた噂を聞いてこれ……とても黙ってはおられませんでした」

空港の冷たいタイルに忍はいきなり座り込んだ。

「やめなさい。君のせいじゃないんだ」隆太郎は忍の腕を掴み、懸命に立たせようとしている。

万里子も忍に駆け寄り、

「やめて、忍。あなたが謝ることじゃないわ。忍がいてくれたから……だから、わたしは生きていられたのよ。あなたが居なかったらわたしは四年前に死んでいたわ。 お腹の子供と一緒に」

「お、おじょうさまあ」

近くに寄って初めて判った。忍の目は真っ赤で、その下には大きな隈がある。そして父も……。頬が扱け、年末に比べひどく痩せたようだ。やはり、父は仕事で合流が遅れた自分を責めたのに違いい。

(わたしのせいで……)

申し訳なさに身の竦む万里子だった。

最終章 命 (1) 出迎え (後書き)

御堂です。ご覧頂きありがとうございます。

最終章「命」です。よろしくお願い致します m () m

最終章 命 (2) 戻る場所

「ここは……場所が場所ですので、移動されてはいかがでしょうか？　すぐに空港横のホテルにお部屋を」

口を挟んだのは宗であった。携帯電話を取り出し、番号を検索している。

だが、

「いや、気遣いは結構だ。我々はすぐに失礼させて頂く」

隆太郎はそう答えると、卓巳に向き直った。

「卓巳くん、私は君を買い被っていたようだ。君なら、万里子を預けるのに相応しいと思っていた。だが……忍に聞いたよ。君は全てを知りながら万里子を疑い、離婚を口にした。君の体の事情とやらは知らんが、万里子は私が連れて帰る。離婚届は、うちの弁護士に届けさせよう」

「お父様！」

蒼白になる万里子の腕をしっかりと掴み、隆太郎はそのまま引き上げようとした。万里子は父親と夫の顔を交互に見ている。

しばらくの時間、卓巳の耳から周囲の音が消えていた。だが、通り行く人の波が一段落し、到着ロビーの景色も見通しが良くなる。ガヤガヤと意味のなさない雑音が人の呟きに変わり、その場に立ち止まったままの卓巳らに視線が向き始めていた。

それまで黙っていた卓巳が、二・三度深呼吸して、ようやく口を開く。

「判りました」

「卓巳さんっ！」

「万里子、君は一先ず、実家に帰ったほうがいい」

「わたし……わたしは」

今にも泣きそうな万里子に卓巳は言葉を続けた。

「あの家は、もう少し思い切って風通しを良くする必要がある。祖母と話して、それでも駄目なら私も家を出る。社長を辞めたときは、次の仕事を探さなければならぬ。それに住む家も。決まったら、迎えに行く。それまで待っていてくれ」

気負うことも、虚勢を張ることもなく、卓巳は落ち着き払った態度で真正面から万里子にそう伝えた。そして、隆太郎のほうを向き直る。

「お義父さん、私は……」

「君に父と呼ばれるのは不愉快だ」

けんもほろろの返事だが、卓巳は一步も引くつもりはなかった。

「お義父さん　渡英前は別れた方が彼女の為だ、と思いました。

でも今は、それが間違いであることに気付きました。数日中に決着をつけて、万里子を迎えに行きます。それまで……妻を、よろしく願います」

卓巳はピツと姿勢を正し、深く頭を下げた。

藤原家が駄目なら千早家の世話になろうなんて、そんな情けない見で認めて貰えるはずがない。家を用意して、万里子の夫に相應しい仕事を見つけてから、改めて、万里子を迎えに行くべきだ。卓巳はそう決意したのだ。

卓巳の悠々たる態度に、隆太郎の表情も変わった。その固い決意に、早くも心が揺らぎ始めているようだ。

万里子の父に認められる男にならなければならない。強く、逞しく、隆太郎に代わって、万里子を守る男でなければ……そして、意気揚々と再び万里子の瞳を見たとき、彼女が静かに口を開いた。

「卓巳さん……わたしは、嫌です」

くわくわくわくわく

卓巳は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。だが、それが万里子の偽らざる本心であった。

「万里子、そんな何年、何ヶ月なんて言っただけはない。数日かたで方を付ける。それまで待っていて欲しいと言ってるんだ」

卓巳の言葉はよく判った。卓巳なら、きっと懸命に万里子を受け入れる準備を整えて、すぐに迎えに来てくれるだろう。万里子が辛くないように、苦しくないように、大切にしてくれるはずだ。そう、父のように……。

「卓巳さん、覚えていらっしゃいますか？」

「何をだい？」

「わたし、千早万里子は藤原卓巳を夫とし、その健やかなる時も病める時も富める時も貧しき時も、死が二人を別つまで、愛し敬い慰め助け合うことを誓います」

万里子は凛と顔を上げ、はっきりとした声で言った。

それは結婚式に祭壇の前でお互いに誓い合った言葉である。あの時は半信半疑で、自分の心ばかりを見つめていた。そして、よく見えない相手の心を疑い、お互いを責め、傷つけ合った。

「卓巳さん、どうか一緒に苦勞してくれと仰って下さい」
思いを伝え、万里子は静かに微笑む。

「ま、りこ……」

「駄目だ、万里子。父さんはあの家にお前を帰すつもりはない！
お前を……金目当ての娼婦のように言っただぞ。あんな女が居る
家に、大事な娘をやるものか！ それにあの太一郎とかいう男は、
獣けだものだと言っじゃないか？」

「お嬢様、お戻り下さいませ。使用人たちにまで、事件のことが知
れ渡っていると聞きました。卓巳様も酷うございます。お嬢様をお
守り下されると、あんなに約束されましたのにつ！」

卓巳を押しつけ、隆太郎と忍は万里子に詰め寄った。

父の心配は最もだろう。忍も、万里子が傷つき再び死を考えるの
ではないか、と恐れているのだ。

だが、今の万里子は“嘆き、悲しみ、死を願う”四年前の彼女で
はなく、卓巳と出会う前の“人生の無情を悟り、全てを諦めた”彼
女とも違った。

万里子は四年前、罅割ひびれた心を癒しながら生きてきた。少しでも
動こうとすると亀裂が広がり……恐ろしくて動けなかった。だが、
卓巳を愛し、愛されて……様々な悲しみが万里子を襲い、スクラッ
プ同然の心は見事に砕け散ったのだ。

それでも、万里子の中に残った真実もの “人を愛する心”

卓巳を想う気持ちは何より強い。そして、父や亡き母、母親同然
の忍も大切にしたいと想う。それに、藤原家の人たちも。お祖母様
には少しでも長生きして頂きたい。それに、他の皆とも判り合いた
いと、諦めたくない、万里子の心が叫ぶのだ。

万里子の顔は穏やかな笑みを湛え、声は湧き出る泉のように透き通っていた。

「お父様、人間って不思議ですね。ハリケーンに襲われ、地震で粉々に砕かれても……それでも人は立ち上がり、大地に種をまき、愛を育むんです。決して逃げずに、瓦礫がれきの山を一つずつ動かし、再び築き上げます。挫けずに、何度も何度でも　未来に繋ぐ命のために」

万里子は隆太郎と忍の横をすり抜け、卓巳の隣に立った。

「わたしは藤原万里子です。卓巳さんのいらっしやる所が、わたしの戻る場所なんです。どんなに厳しい場所であっても、逃げたくはありません。お父様……ごめんなさい」

万里子が見上げると、卓巳は目を見開いていた。だが二秒後には相好が崩れる。そして、卓巳は万里子の手をしっかりと握った。

「お義父さん、ご覧の通りお嬢さんに逆らえない情けない男ですが……。万里子が味方なら、世界を敵に回しても負けません。どうか、共に戦うことをお許しください」

頭を下げる二人を前にして、隆太郎はボソツと言う。

「全く、なんでこんな……親に頼らん娘に育ったのか」

「お父様……怒ってますか？」

「いや、本当に私には勿体ない娘だ。」

卓巳くん、藤原を出るな

ら、約束通り千早に入ってもらおうぞ！　その時は我が家で同居だからな！　婿として散々いびってやるから覚悟しておきなさい！」

それだけ言うと、隆太郎は何か言いたげな忍を連れて引き上げて行く。

そんな父の背中に、万里子と卓巳はもう一度、深々と頭を下げたのであった。

最終章 命 (3) 藤原家の変貌

メルセデス・ベンツS600プルマン・ガード、卓巳が社用で乗るストレッチリムジンである。

後部座席は対向四人掛け、しかも運転席とは完全に仕切られている。車中で極秘の会談も可能だ。社長を解任されれば、乗ることもないだろう。ある種の感慨に耽りながら、卓巳は万里子をエスコートしつつ、リムジンに乗り込む。

しかし 宗の報告は、そんな卓巳の予想を見事に裏切るものであった。

「太一郎が家を出た、だと!？」

「はい」

「まあ。では、次の社長には誰がなられるんですか？」

「いえ、次も何も……」

まず、太一郎が藤原家を出たことが伝えられた。

藤原グループとは一切関係のない一民間企業で、父親の旧姓を名乗り働き始めたという。大学は元々ろくに通っておらず、卒論も提出していなかったため中途退学の扱いとなった。尚子が購入した卒論を提出する予定であったが、太一郎が断わったようだ。

「万里子様に伝言があります。よろしいですか？」

宗は万里子ではなく卓巳の顔を覗き込んだ。万里子も同じだ。

二人から見つめられ、卓巳は不承不承頷く。

「ありがとう」と。その一言です」

「たったそれだけを、思わせぶりに言う奴があるか！」

愛している、何処かで待っている、そんな言葉を想像していた卓巳には、とんだ肩すかしだ。だが万里子にとつては、それなりに胸を打つものだったらしい。大きな黒い瞳を潤ませていた。

「宗さん、二度と会えないとかじゃありませんよね？ 太一郎さんもいつか戻って来られるのよね？」

「そうですね。でもしばらくはそっとしておきましょう。悪行を改めるのは、中々大変なものです」

宗はしみじみと呟いている。

「なるほど、経験者は語る、か」

卓巳のからかい口調に、宗は咳払いをして話を進めた。

この太一郎の行動は藤原家だけでなく、グループの取締役会にも波紋を広げた。

卓巳の社長解任を話し合う手はずとなっていた緊急の取締役会では……。太一郎が後継者の椅子を蹴っただけでなく、尚子は形ばかりの取締役を辞任、敦は本社の代表権まで返上することになったという。

藤原敦は肩書きとしては、藤原物流の代表取締役社長である。

本社に席はなくなったが、立場的にはこれまでとあまり変わらない。ところが今回、中国市場の拡大のため、彼自身が中国統括本部のある上海に乗り込むことを決めた。どうやら、息子の立ち直りを目の当たりにし、彼の中で眠り続けた勤労意欲が目を覚ましたらしい。

短くて二年、長ければ五年以上となるため、尚子もついて行くことになった。

「なんでも、方々に作った愛人とも全部手を切ったようですよ」
そんな宗の説明に卓巳は声も出ない。

「じゃあご夫婦仲が良くなられたんですね。良かったわ！　ね、卓巳さん！」

万里子は無邪気に喜んでいる。だが、これまでがこれまでだ。卓巳にすれば額面通り受け取って良いものかどうか悩ましい。何か裏があるのではないか、と勘繰りたくもなる。

考え込む卓巳に、宗は静香の縁談が上手く進んでいることも伝え
た。

静香にとって、放蕩の限りを尽くしていた従弟が、突然頭を丸めたのはショッキングな出来事だった。

その上、夜伽よこ紛いの行為を押し付けていたメイドたちに、謝罪して回り始めたのだ。かつて交際のあった、といえば聞こえは良いが、体目当てで弄んだお嬢様方にも謝罪しようか、と言い出したらしい。だが、ほとんどが既に嫁いでおり……謝罪自体が迷惑を掛けることになる、と宗が止めたのだった。

そんな従弟に加えて、彼女は弟の変貌振りにも驚かされる。

てつきり付属の大学に形式的な試験を受けて進むのだ、と想っていた。静香自身もそうしたからだ。ところが、弟の孝司はセンター試験を受けていた。卓巳と同じ……は無理でも、可能な限り上位ランクの大学を目指すという。静香は孝司のことを、真面目で面白いのない根暗な弟だ、と想っていた。それが……。

「卓巳さんの役に立つためには、肩書きも必要だからね。大学はス

テイタスで決める。それに、一人暮らしも始めるつもりだよ。バイトもやって……社会経験も大事だって宗さんに教えてもらったんだ」

「三面六臂さんめんろくつひの大活躍だな、宗。お前の守護霊も勤労意欲に目覚めたのか？」

半ば本気で感心し、それでも茶化すように卓巳は言う。

だが、今度は宗も黙ってはいなかった。

「はい。どうやら社長と守護霊が入れ替わったようですよ。そう言つとわざとらしくニッコリと微笑む。

(こいつ、何処まで知ってるんだ?)

今度は卓巳が咳払いをしつつ……話を静香の件に戻した。

「で、静香は例の縁談で手を打ったのか？」

相手は造船会社の御曹子であった。

それも、静香の取り巻きの一人である。会社の業績も安定しており、資産も申し分ない。静香がブランド品を買い漁ったところで傾くような会社ではなかった。しかも、青年は静香にベタ惚れだ。年齢が静香より一歳年下であること、そして一人息子だという点がネックだったが……。

「瀬戸内造船のご子息は、静香様の自尊心を程よく擦って下さいますからね。結婚後は別居、三十歳までは子供を作らないという条件で、お正月にダイヤモンドの指輪を受け取っておられました。三カラットで八桁はするそうです」

宗はことさら嬉しそうに語る。

だがその時、万里子が遠慮がちに口を開いた。

「それは……本当に良かったんですか？ 宗さんは一所懸命に動か
れておいででしたけれど、何か違う想いがあるようで気になってい
たんです。だって、初めて静香さんとお会いした時、お二人は付き
合っていていらっしやるんだと思ったもので。卓巳さんには考え過ぎだ
と言われたんですけれど……」

卓巳は、宗の女性関係は大よそ把握しているつもりである。

ここ数ヶ月、藤原邸を夜間に訪れる件や、たまに離れに泊まって
行く目的など。最初はいつも通りの遊びだと思っていた。ところが、
あの宗が、社内の女性関係を清算し始めたのだ。それに気づいたの
はごく最近である。

だが、数人はごねているという。その一人が、卓巳の第一秘書・
中澤朝美だ。卓巳自身も経験のある、かなり厄介な女性である。卓
巳の場合は迫られただけで深入りをした訳ではなかったが……。

宗は、女性問題では揉めた前科があるだけに、卓巳も成り行きを
案じていた。

真相は知らないものの、宗の本音を言い当てる万里子の洞察力は
かなりのものだ。僅かだが動揺を見せる宗を眺めつつ、卓巳はそん
なことを考えていた。

「も、もちろん個人的問題は一切ありません。社長の仰る通り、万
里子様の考え過ぎでございます。私も、静香様のご婚約には心から
安堵しております」

宗は表情を取り繕い、万里子に答える。

だが、次の言葉に取り繕った表情は一気に崩れ去った。

「そんなんですか？ 良かった。だったら雪音さんも安心ね」
「あ……いや……あの……」

微笑む万里子に宗は言葉が続かない。

卓巳は夕方五時を回り、夜の帳とほりが下りた東京の街並みを眺めつつ、
（“かなり”なんてもんじゃないな）

万里子あなごは侮れない 気持ちを引き締める卓巳であった。

最終章 命（4）生と死と

藤原邸の門をくぐった時、辺りは既に真っ暗であった。

正門から左手に折れ、遊歩道を迂回する車道をベントンはゆっくりと進む。万里子は外灯のない辺りにジッと目を凝らし、小さな声で呟いた。

「桜……ちゃんと根が付いたんですね。時期が遅いから、と柊さんが心配されていたので」

「大丈夫だろう。数年後にはこの道は桜並木だ。芝生の上で花見が出来そうだな」

卓巳は答えながら万里子のほうに体を寄せる。そして万里子が膝に置いた両手に、自身の右手を重ね……ふたりは顔を合わせて笑った。

「そのためには、社長に会社とこの家を守って頂かなくては」

温かなムードに、万里子はうつかり宗の存在を忘れてしまう所だった。卓巳も同じだったようだ。軽く宗を睨みつつ、名残惜しそうに万里子から離れて行った。

「判っている。投げ出す気はないさ。祖母上に結婚に関する全ての真実を話して……審判を仰ぐ。最初に契約書を交わした件も、全て告白する」

「卓巳さんっ！」

「社長！」

万里子の声に宗の声が被った。

まさか、万里子との始まりが契約結婚であったことまで話すつもりだとは、誰も思わなかったのだ。

「卓巳さん、そんなことを知られたら、お祖母様が悲しまれるんじゃないでしょうか？」

「いや、おそらくは気づいておられる。だからこそ、話すことで偽りではなくなったと証明したいんだ」

卓巳の言うことは判る。だが、卓巳は信じてても万里子のことはどうだろうか？ 皐月は、万里子の卓巳に対する愛情に疑問を抱くのではないか。二人がこんなに幸せだと、どうすれば伝えられるのか……万里子は無力な自分に腹立たしさを覚えていた。

車がエントランスホールに滑り込み、玄関前で停まった。そして玄関の中に足を踏み入れた途端、宗が思い出したように声を上げたのである。

「あつと……申し訳ありません。報告を忘れていました。永瀬あずさですが」

「あの女はクビだ！」

「いえ、ですから……」

即答する卓巳に、宗が説明しようとした時、邸内の様子がおかしいことに万里子が気づいた。

「待って……何か」

万里子の声に卓巳と宗も話すのを止める。

玄関から向かって左側、オープン階段下を抜ける通路から悲鳴が上がる。

「救急車！ 誰か、救急車を呼んで！ 大奥様がつ！」

それはメイド頭、千代子の叫び声であった。

くわくわくわくわく

卓巳は悲鳴を聞くなり、

「宗、救急車だ！」

「はい」

全ての荷物を放り投げ、走り出した。そのまま全速力で廊下を駆け抜ける。万里子がハツとして後を追った時には、すでに背中も見えない。

万里子が部屋に飛び込んだ瞬間、ベッドの上に横たわる皐月がいた。

卓巳は土足のままベッドに乗り、皐月の胸元を開き心音と呼吸を確認している。

皐月は……胸を押さえ苦しんでいる様子はない。すでにグッタリとして、意識はないようだ。紫色の唇を目にした時、万里子はふらつきドアにもたれ掛かった。

千代子は皐月に縋り、「大奥様あ！」と繰り返している。そして、どういいうわけか部屋の隅に尚子が座り込み、中空を睨んだまま身動きもしなかった。

「社長！ 会長の様子を教えてくださいっ！」

宗が携帯を片手に駆けつける。

救急車はすでにこちらに向かっているだろう。手配を済ませてから、患者の詳しい容態を聞いてくるのだ。そして、宗の質問に卓巳は極めて硬質な声で答えた。

「脈拍、呼吸共になし。時間は　確認出来るだけで二分」

駆けつけた全員が息を飲む。小さな悲鳴も上がった。

だが、千代子はそんなものでは済まない。人生の三分の二を共に過ごした、千代子にとって皐月は母親も同然なのだ。

「大奥様あ、大奥様あ、逝かないで下さいませ。独りにしないで下さいませえ！　どうか……どうかあぁ」

泣き叫んで皐月を揺さぶる。

「浮島、千代子が邪魔だ。宗、雪音と電話を代われ。お前はこつちだ　蘇生法は判るな？　胸骨圧迫を頼む。万里子、AEDがそこにある。準備してくれ。出来るな？」

卓巳は次々に指示をすると、自分は人工呼吸を始めた。

万里子も卓巳に言われた通り、壁に取り付けてあるAED『自動体外式除細動器』を取り出した。その瞬間、アラーム音が鳴り万里子の背筋に緊張が走る。

ベッドの横に持って行き、サイドテーブルをずらしてその上に置いた。三十センチ四方、見た目は小型のスーツケースだ。蓋を開けると同時に電源が入る。後は音声指示に従って動かせばいい。電極パッドを貼り付けるだけで、診断は全て機械がやってくれる。ほんの数年前、法改正により導入された非医療従事者向けのものだ。

「卓巳さん、指示が出ました！　間もなく充電完了です。離れてください！」

卓巳と宗が皐月から離れ両手を上げた。その瞬間、万里子は通電のスイッチを押す。電流が流れ、皐月の体が痙攣する。

そのまま音声指示に従い、卓巳らは再び心肺蘇生法を再開。それ

は救急隊が到着するまで続けられ……。

皐月の心臓は微弱ながら鼓動を刻み始めたのであった。

くくくくくくくく

「帰国早々、お疲れ様でした」

雪音に熱いお湯で絞ったタオルを差し出され、万里子は顔と手を拭った。その温かさにホツとして、ようやく人心地が付く。

深夜、卓巳を病院に残したまま、万里子は帰宅した。着替えて仮眠を取り、早朝には病院に戻らねばならない。おそらく卓巳は、そのまま仕事に出るのであろう。卓巳の着替えや髭剃りも必要だ。

タオルを返しながら、万里子は雪音に礼を言った。

「遅くまで起きてくれたの？ どうもありがとう」

「いえ。大奥様が助かったと聞いてホツと致しました」

「そうね。でもお歳がお歳だから……これからも十分に注意して差し上げないと」

皐月は心筋梗塞の発作を起こしていた。

だが、ほんの三十分前にホームドクター安西医師の診察を受け、何も問題はなかったそうだ。

年末に倒れてから、皐月には二十四時間体制で看護師が付いている。それが間の悪いことに、いつもの薬を貰う為、僅かに家を空けた際の出来事だった。

今回は助かった。だが次は。専門医に言葉を濁され卓巳の肩は震えていた。

「退院はちょっと判らないけれど、今度は専門のお医者様を住み込みでお願いすると仰っていたわ。そのほうが少しでも安心ですものね」

「でも……万里子様はあの機械の使い方をご存知だったんですね。私もこちらのお邸に雇って頂いた時、講習を受けたんですが……いざとなると」

そう言うと雪音は肩を竦めて見せた。

万里子とて医療従事者ではないから、決して慣れているわけではない。

「わたしが教員免許を持っているから……。だから、卓巳さんもわたしに仰ったのね」

法改正されて以降、ほとんどの学校に設置されつつある。一部を除き、教員は講習を受けるのが必須なのだ。万里子の大学でも講習会は毎年行われ、その全てに出席している。

「へえ。凄いですね、卓巳様って。あの状況でそんなことを考えられるなんて！ 少し見直しました……あ、いえ、失礼致しました」

雪音は慌てて訂正するが、確かに出発前夜の卓巳からは想像も出ないだろう。

自信を失って万里子から逃げ、社長の椅子を投げ出した。その上、祖母の臯月も見捨てて出て行くこととしたのだ。

だが、今夜は卓巳がいなければ臯月は確実に亡くなっていただろう。事実、病院でも適確な救命処置の賜物だと、医師から褒められたくらいだ。

「そうね。卓巳さんがいてくれたら、どんなことになっても安心だわ」

「それはそれは……」こ馳走様です」

「宗さんにも、ご苦労様って伝えてね」

「わ、私に言われましても……直接お伝え下さいませ」

些細な軽口に万里子の心は解れていく。

臯月が助かって本当に良かった。そうでなければ、たとえどんなに完璧な応急処置をしたとしても、しばらくは笑うことも出来なかつたはずだ。

その時、ふいに雪音の表情が曇り、何事か思い出したように呟く。

「そう言えば、千代子さんが……尚子様のせいだって仰ってたよう
な……」

最終章 命 (5) 罪なる秘密

暗闇の中、尚子はトランクに衣装を詰める。

「あたくしじゃないわ……あたくしのせいじゃ」

口の中で呟きつつ、「ああ、これじゃないわ。もう何をやっているのかしら！」気に入らないものまで入れてしまったのだろう。何着かを床に叩きつけた。

その時だ。

ジャツ。遮光カーテンの開く音がして、室内は一気に朝の光で満たされた。

「ひいつ！だ、誰ですの？か、勝手に部屋に、はははいつて
吃りながら誰何する尚子に、卓巳は厳しい声で答えた。

「夜逃げの準備には些か時間が掛かりすぎですね、叔母上」

尚子は卓巳が部屋に入ったことすら気づかず、一心不乱に荷物を詰めていたのだった。

卓巳が万里子から聞かされたのは、ほんの一時間前だ。

彼は仕事に向かわず、そのまま藤原邸に戻った。そして、千代子の部屋を訪ねたのである。

千代子の話では、安西医師が帰って間もなく、皐月の部屋を尚子が訪れた。そして三十二年前に、先代の高德が犯した罪と千代子の秘密をぶちまけたのだという。

「叔母上、あなたのせいで祖母は発作を起こしたんだ。あなたは、

祖母を殺すところだった。なぜ、そこまで祖母を憎むんです？ 彼女は生さぬ仲のあなた方姉妹を家に引き取り、こうして自分名義となった屋敷にも住まわせている！ 感謝こそすれ」

「どうして感謝しなければなりませんのっ！？」

俯き黙っていた尚子が不意に顔を上げた。その顔は鬼女の如く歪み、憎しみの籠もった目で卓巳を睨む。

「あたくしも先代の子供です！ それなのに……さも与えてやったと言わんばかりの顔で見て。臯月さまも、あなたの父親も、そしてあなたまで！」

卓巳は、それを言うなら責任は高德にあり、臯月や卓巳にはないはずだ、と思う。

だが……立場を替えれば、尚子と和子が妾の子だと蔑まれることも、彼女らの責任ではないのだ。全てにおいて悪いのは高德だが、墓の下まで殴りに行くわけにはいかない。

そう 全て、藤原高德の悪行の結果だ。その報いを、本人以外の人間ばかりが受けている。

卓巳は社長室に飾られた先代社長の写真を、額縁ごと叩き割り、粉々に砕いてやりたい衝動に駆られた。

「千代子の話は……事実なんですね？ いったいどうして、それをあなたが知ったんだ」

「先代が亡くなられた時、弁護士のファイルに千代子とあの男の名前があつたんですよ。聞いたけれど教えてはくれなかつたわ。法的には問題はない、の一点張りです。つい先日、ようやく判明しました。先代が五十間近で十六歳の少女を、なんてねえ」

三十二年前、それは卓巳が生まれる二年前の出来事だ。

当時、父・卓哉は高德に反抗し始め、臯月はその板ばさみで大変

な思いをしていたという。十六歳で奉公に上がった少女が半年勤めて体調を崩し、その半年後、再び職場に戻ったことなど、気にも留めなかった。

そんな時、ついに一人息子の卓哉が女と家を出てしまう。落ち込んだ臯月を、年若い少女が励ましてくれた。

その少女はいつも何かに怯えていた。臯月はそれが、彼女が弟妹のために重ねた借金が原因と知り、清算してやる。少女は臯月に感謝し、母親のように慕い始めた。最愛の息子を女に盗られた臯月は、その少女を自分の手元に置き、我が子のように可愛がったのだ。

その少女が、今のメイド頭・根元千代子である。

だが、千代子が怯えていたのは借金取りだけではなく……。彼女は勤めて早々に、高德により辱めを受けていた。それも一度ではなく数回。高德はその場凌ぎの金を千代子に与え、弟妹のために受け取った千代子に「これで和姦だ」と言い捨てた。当時は児童買春禁止法もなく、千代子は高德の言葉を真に受けてしまう。彼女は罪の意識と高德の行為に怯え、ひたすら口を噤んだ。

「……確かに、恥じるべきは祖父の行いでしょう。でも」

「あたくしを妾の娘と呼んだあの女にも、思い知らせてやりたかっただけよ！ 自分もただの妾で、息子を産んでるじゃない、ってね！」

ヒステリックな叫び声に卓巳は顔を顰めた。

尚子は千代子と先代の関係だけでなく、千代子の産んだ子供の存在まで探り当て、臯月に突きつけたのだ。

「……しかも、邸にまで引き入れていたのよ。臯月さまはそんなことも知らずに目を掛けておいで。臯月さまがお気の毒じゃありませんの。ですから、あたくしは真実をお教えしたまでですわ！」

梶真二郎、三十一歳、出入りの造園業者『梶造園』の次男坊である。

戸籍上の父親は間違いなく梶造園社長・雄一郎の名前があつた。あくまで、雄一郎が千代子に産ませた子供を、妻との間で特別養子縁組をして引き取り、実子同然に育てられたという形である。

庭師の柘は千代子の実子なのだ。

戸籍上の繋がりこそないものの、卓巳にとって血の繋がった叔父にあたる。だが、見た目はほとんど似ておらず、柘は小柄で素朴な青年であつた。彼の誠実で穏やかな人柄は育ての母にそっくりだ、と造園会社の社員から言われている。性格を形成する要素に、血の繋がりなどほんの僅かと言うことも知れない。

「本当に、そう思われますか？」

「当たり前じゃありません。そうでなければ千代子を傍に置いて……」

「あの祖母上が、本当に何も気づいておられなかつたとお思いですか？ この邸に来て、わずか六年の僕ですら知っていることに」

卓巳が藤原家に入ってすぐのことだつた。祖父の残した書類を見直した時、高德がなぜか庭師の柘を会社に迎えようとしていたことを知る。人は良さそうだが、会社経営に向くとは思われない。藤原家の顧問弁護士は、その時すでに沖倉に変わっており、何も引継ぎをされておらず……。

卓巳の調査が尚子のそれに劣るわけはなく。調査を始めて数週間後には、卓巳は真実を探り当てていた。

「……ご存知なかつた、はずよ。だって、あたくしがその話をした

ら酷く焦っておいで。千代子はあの庭師とグルになって、臯月さまに仕える芝居をして、いくらか遺産のおこぼれに預かるうと」

卓巳はその言葉を聞き、大きく息を吐いた。そして、

「祖母上が焦ったのは、千代子の為でしょう。千代子は祖父との關係を恥じていました。そして、柊のことを知りながらも、決して近寄ろうとはしなかった。そんな千代子を思いやり、祖母上は何も知らない振りを続けたんです」

卓巳の言葉に尚子は首を横に振る。

「いいえ、そんなはずがないわ！ あの男もまんまと家に入り込んで、財産目当てでなきや何だと言うの？ まさか偶然なんて笑わせないでちょうだい」

「もちろん、柊は知っていました。戸籍は養子縁組前のを調べれば実母の名前は判ったでしょう。ですが……ご存知なかったんですか？ 祖父は責任を逃れるために、認知すら柊造園の社長にさせたいたことを」

柊造園は高德に多額の借金があった。その上、出入り禁止をちらつかせ、養子にするだけでなく、認知まで要求する。柊自身は自分のことを、父親が十六歳の少女に産ませた子供だ、と長く誤解していた。

そして、その誤解を解いたのが、誰あろう高德本人だったのである。

最終章 命 (6) 親と子

大学を卒業して、柊は庭師として邸に住み込むようになった。

なんと高德はそんな柊に、養父に無断で実の父だと名乗ったのである。高德が亡くなる二年前のことだった。

その時、嫡男・卓哉は既に亡くなっており、その息子・卓巳を迎え入れるつもりもなかった。そして跡取りに決めた太郎は、どうみても役者が足りず……。そんな高德の前にもう一人の息子が現れたのである。

柊真二郎は礼儀正しく頭も良く、しかも従順だ。見るからに御し易い男に思えたのだろう。当時、柊の父は高齢で養母も他界していた。

柊は父親から真実を聞き　そして、高德の申し出を断わった。

「法的に何の権利もなかったので、祖父も諦めたんですよ。当時、会社の業績も低迷しており、祖父自身の体調もだいぶ悪かったようです。僕の父を簡単に勘当したのも、太郎が未成年だからという理由で相続人に指定しなかったのも、もう一人の息子が存在したからかも知れません」

卓巳は事も無げに言う。だかその口調が、尚子の怒りを激しく煽った。

「だったらなぜですのっ？　あの庭師は、財産目当てでないと云うならなぜ、この家に居座ったというのっ!？」

「千代子のため、ですよ。実母に逢いたいと願い、そして真実を知った」

卓巳が叔父の存在を知った時、柊と話したのだ。

望むなら公にして、相応の財産分与と役職で迎えたい、と伝える。だが、彼はその両方を断わった。

「実は、同じことを大奥様から言われました。千代子さんのことは色々ご存知だったそうなんです……僕のことを知ったのはごく最近だと仰ってました」

「柊のり子さんでしたね。お母さまは既に亡くなられたと聞きます。祖父のことはさぞ怨んでおられるでしょう。だが千代子は……」

卓巳の言わんとすることが判り、柊は慌てて首を振った。

「いえ、とんでもない！ 大奥様にも、辛い思いをさせて、と言われましたが……僕は柊の家で、これ以上ないほど可愛がられたんです。小さい頃は、実の両親でないなんて、疑ったこともありませんでしたよ」

そう言うと、柊は柔らかく笑った。

彼が知ったのは高校に上がる時だという。特別養子縁組とは通常の養子縁組に比べて、完全に実の親との親子関係が断たれる。そのため、戸籍を見ただけでは判り難いのだが……。柊は元の戸籍を探し、千代子の名前を見つけた。そして、父の不貞という偽りの真実を知ったのである。

「酷くショックで……お恥ずかしい話ですが、少し反抗しました。

そんな僕に、母の態度は変わることはなく、大切に育てた宝物だと言ってくれました。大学を出たら親孝行しようと思った矢先に癌で……」

彼は、先代のことは尊敬は出来ないし、自分とは無縁の人間だと言いつつ切った。

そして千代子のごことは、柊は父親から「可哀想なことをした、だが、助けてはやれなかった」と聞かされ……。

「ひよつとしたら僕の存在は目障りなだけかも知れません。でも、僕はこの庭が好きですし、何かあった時に傍にいたら、と。それだけです」

「嘘よ！ そんな……でたらめに違いないわっ！」

柊の本心を伝えた途端、尚子は騒ぎ始めた。

卓巳には、尚子の気持ち判らなくもないのだ。柊は幸運だった。叶うなら運命を入れ替えたいほどだ。万里子と逢う前なら喜んでそうするだろう。

「法的に権利がなくても……そうよ。臯月様をご存知だと判っていたのよ。そして、臯月様が遺言で残してくれるように企んで」

尚子の目は血走っている。憎しみが憎しみを呼び、最早、誰を憎んでいるのか判らない状態だ。

その時、入り口から頼りなげな声が聞こえた。

「お姉さま、もう止しましょう。小さいわたくしより、お姉さまのほうがさぞ悔しかったでしょう。でも、お母さまにも責任はあったのよ」

「和子さん！ 何を言うのっ」

「だって蔑まれることを承知で、わたくしたち姉妹をここに連れて来たんですもの。お父様から頂くお手当ても、その多くがお母さまの酒代と洋服代に……」

「お黙りなさい！ お前は勝手なことばかりした挙げ句、何度も出戻って来て！ なのに、静香は何処かの御曹子と結婚が決まって、孝司も国立大学ですって？ それが……どうしてあたくしばかり」

和子は尚子に歩み寄り、姉の肩に手を添える。

「お姉さまには太一郎さんがいらっしやるじゃない。取締役会では立派に発言されたと聞きました。外で色々学んで、きつといつか」

「やめて頂戴！」

尚子は妹の手を振り払い、よろけるように二・三步離れる。

「あの子はお終いよ。父親に似て愚図で役立たずで、先代に似てるのは粗野なところだけ。あれほど後押ししてやったのに。太一郎なんか産むんじゃないわ！」

「叔母上っ！ 言っつていいことと悪いことがあります！ 太一郎が聞いたら」

卓巳が声を上げた時、和子の背後から、

「……悪い、聞いてしまった」

太一郎だった。デニムのシャツとジーンズ、何の変哲もないスニーカーを履き、無造作に立っている。三週間ぶりに見た太一郎の顔はどこか大人びて、卓巳はその変化に目を見張った。

「なぜ、ここに居るんだ？」

「ばあさんが倒れたつて連絡があつたんだ」

太一郎の居所を知っているのは宗くらいだ。奴が知らせたのだから。

「お姉さま、太一郎さんに謝つて。たった一人の息子さんじゃありませんの」

「親を嵌めるような、愚かな息子を持った覚えはありません！ 太一郎のせいで主人もあたくしも、取締役を解任されたんですよ！」
尚子はキツと太一郎を睨みつけた後、卓巳に向き直る。

「卓巳さん、あたくしは皐月様にも本当のことを言っただけですから！ 発作を起こされたのはお気の毒ですけど……それも、千代子が大騒ぎしたせいですわ！」

何一つ自分の責任だとは認めず、尚子はトランクの蓋を閉じ、床に下ろした。

「あたくし、北京に向かうまでホテルに泊まりますから。よろしい

わねっ！」

ガラガラと大型のトランクを転がし、尚子は取り澄ました表情のまま太一郎とすれ違う。彼女は息子を一瞥もしなかった。

そんな母親の背中に、太一郎は声を掛ける。

「悪かったな。お袋の夢を叶えてやれなくて」

尚子が足を止め、卓巳も息を飲んだ。

「卓巳の親みたいになって死んでくれたらいいなんて、本心じゃねえから。……気いつけてな」

尚子の肩は僅かに震えたが、彼女は振り向くことなく藤原邸を出て行ったのだった。

くくくくくくくく

「本当に見舞って行かないのか？」

藤原邸を出て病院までの車中、卓巳は駅前で降りるといふ太一郎に問い掛けた。

車は卓巳が私用で乗るBMWだ。だが、今日は運転手付きである。昨年末、警察に逮捕された経緯を万里子に知られてしまい……。万里子から、免停中だけでなく、処分が決定する前も“運転禁止”を言い渡されたのだった。

「ああ。助かったんだろ？ だったら、見舞いは休みの日に行くよ。

今からなら仕事に間に合うからさ。もし何かあったら連絡をくれ、夜中でもいいから」

「万里子には会って行かなくていいのか？」

「えらく余裕じゃねえか。……役立たずのソイツは、少しは使えるようになったのか？」

「 愚問だな」

太一郎の問いに卓巳はニヤリと笑う。

「面白くねえー」

窓のほうを向き、ブスツとした声で太一郎は呟いた。

太一郎が車を降りた後、卓巳は車の窓を下げる。

「太一郎、あの家は無駄に広い。野垂れ死にしそうな時は、意地を張らずに戻って来い。お前の母親にも、そう伝えてやれ」

「随分、寛大だな」

「家族だからな。 ああ、忘れていた。殴ってくれたことに感謝している」

そう言うと卓巳は窓から手を差し出した。

太一郎はその手を握り返しながら、

「殴って礼を言われるなら、いつだってぶん殴ってやるぜ」

少し横を向きつつ、照れ笑いを浮かべる。

初めて見た従弟の素顔に、胸の熱くなる卓巳だった。

最終章 命 (7) 真実の嘘

「私のせいなんです。私のせいで大奥様は……」
と云っては泣き始める千代子をどう慰めていいのか、万里子も困っていた。

臯月が倒れて一週間が過ぎた。臯月の容態は安定している。だが、未だ意識は戻らない。脳に酸素が回らなかった時間もおり、高齢だけにこのまま意識が戻らない可能性もあるという。

あの夜、泣き叫ぶ千代子を病院には連れて行けなかった。結局、安西医師に往診して貰い、千代子に催眠鎮静剤を投与して眠らせたのである。万里子がロンドンで投与されたものより、若干遅効性のものであった。

その後、落ち着いた頃を見計らい臯月の見舞いに同行したのだが……。

「大奥様……申し訳ございません。どうか、どうか、私をお許し下さい。大奥様を裏切るつもりなどなかったのです。どうか……許すと言って下さいませ」

臯月の病室で泣き崩れる千代子を、引き摺るように連れて帰った卓巳と万里子であった。

「ねえ、千代子さんのせいじゃないわ。元々、心臓がお悪かったのよ。心配を掛けたというのなら、わたしもそうだし、卓巳さんだつて」

「いいえ。私は三十年も大奥様を欺き続けたのです。望んだことではないとはいえ……」

両親を事故で一度に亡くした千代子は、三人の弟妹を連れ途方に暮れていた。施設か親戚にバラバラに引き取られそうな所を、叔母の一人が纏めて面倒を見ても良いと言ってくれたのだ。その代わり、千代子が住み込みの家政婦として奉公に出て、生活費を入れるのが条件だった。

だが、後から思えば、先代社長・高德が気まぐれに遊べる十代の少女を探していただけかも知れない。千代子の叔母は水商売をしていて、高德の世話になっていた時期もあるという。

高德が妊娠に気づいたとき、千代子も始めて判ったそうだ。慌てて病院に連れて行かれ、墮胎が不可能と判ると、極秘裏に出産させられた。呆然自失の数ヶ月が過ぎ、我に返った時には千代子は我が子の養子縁組の書類にサインした後だった。

万里子は卓巳が話していたことを思い出していた。

卓巳は自分の想像だと前置きして……。

高德は千代子が子供を手放さないと言い出すのを恐れたのだろう。悪知恵の働く、例えば叔母などが背後に付けば面倒なことになる。そうなれば、養育費や財産分与、果ては慰謝料や口止め料まで要求され兼ねない。他の男がすでに認知していれば、新たに認知請求は出来ないからだ。認知無効の訴訟から始めるとなると、膨大な時間と金が掛かる。

「後からでも、自分の息子だと言えば、喜んで靡くと思っていたんだろうな。馬鹿な男だ」

そして、皐月が千代子を自分の傍から片時も放さなかったのも、夫・高德の所業を知ったことに違いない。その後は、若いメイドが採用されるたび、皐月は癩癩を起こしてすぐにクビしたのである。

高德も皐月の思惑に気づき、若い娘を雇うことはなくなった。もちろん、千代子にも近づかなかったという。

「十年ほど経って、一番下の弟も学校を卒業し、叔母に生活費を払わずに済むようになり……。私はようやく、自分の産んだ子供のことだけを考えられるようになりました。それまでも何度となく柘造園まで覗きに行き……。幸せそうな様子に感謝しておりました。柘の社長さんは本当に良い方で、私にも毎年あの子の写真を下さって」

千代子を取り出したのは、柘の子供の頃からの写真であった。よちよち歩きから小学校の入学式、毎年の音楽会や運動会、高校の卒業式に成人式までである。それを大事そうに千代子は胸に抱えた。

「ご存知であったなら、どれほどのお苦しみだったでしょう。ご恩返しをするつもりが、私が大奥様を悲しませていたなんて……。なんて罪深いことを」

そう呟いては、また涙に暮れるのであった。

くくくくくくくく

「なあ万里子、本当に会わせてよかったのか？」

卓巳は心配そうに尋ねる。

だが、万里子にはにっこりと笑って答えた。

「だって柘さんは、千代子の気持ちを気遣っていたわけでしょう？ それで距離を置いていたのなら、もうその必要はないと思って」

万里子は千代子を邸の外に連れ出した。「お祖母様の回復をお願いしましょう」と言い、近くの小さな神社に引つ張り出したのだ。そこは小さいながらも鎮守の杜に囲まれていた。石で出来た鳥居をくぐると右手に手水舎があり、その先に参道を挟んで狛犬が置かれている。そして拝殿の前で、その人物は待つていた。彼の姿を見るなり、千代子は息を飲み立ち竦んだ。

「お待たせしました。柎さん、千代子さんを連れて来ましたよ」

「奥様のお手を煩わせて申し訳ありません」

柎はいつも被っている無地のキャップを取り、万里子に頭を下げた。

「どういたしました。千代子さんを元氣付けてあげて下さいね」

「ま、万里子様……私は、私にはそんな資格は」

踵を返し逃げようとする千代子の腕を掴み、万里子は引き止めた。「お祖母様は、ご自分に何かあった時は柎さんに千代子さんのことをお願いしていたの。だから……話を聞くべきだわ」

「えっ？」

それは万里子の嘘である。

皇月は柎に対しても気を遣っていた。一方的に押し付けるような頼み事はしてはいない。

「大奥様はお優しい方です。一日も早くお邸にお戻りになられますように、お願いしませんか？ その……千代子さんも一緒に」

さすがに『お母さん』とは呼びづらいのだろう。口籠もりつつ、柎はこれまで通り名前で呼んだ。

千代子は頷き、万里子の傍から離れ……。万里子はそっと、参道脇の駐車場で待つ卓巳の許に引き上げたのだった。

卓巳が柎を誘い、事情を話してこの神社まで連れて来たのである。柎造園は近くなので万里子たち同様、二人も徒歩だ。駐車場の大きな楠くすのきにもたれ掛かり、卓巳は万里子を待つていた。

「君の言った通りに頼んでおいたから」

「ええ、ありがとうございます」

今の千代子には誰の言葉も耳に入らない。聞こえるのは臯月と柎だけだろう。そう思った万里子は卓巳を通じて柎に頼んだのだ。臯月が千代子のことを一切怒ってはいないこと、自分亡き後の千代子の身の振り方まで案じていた、ということ。おそらくは臯月もそれを望んでいる。だが、想いは届かなくては真実とならない。柎の口からなら、それは千代子の胸に響くはずだ。

「祖母上は、本当は自分以外に夫の息子を産んだ千代子を憎んでいたかも知れない。とは思わないのか？」

「その時は何が何でも元気になって、文句を言って頂かないとね」
万里子は三十一年目に初めて寄り添う母と子を見ながら、軽く答える。そして、

「太一郎さんを救って下さったのは、お祖母様だから……。わたしにも、とても優しい言葉を掛けて下さいました。そんなお祖母様が、千代子さんを恨むはずがありません」

少しだけ目を潤ませて、そう言い切ったのであった。

駐車場に車は一台もなく、社務所の扉も閉まり人影もなかった。外界から切り離されたような神社ではあるが……正月は参拝客で賑わうらしい。その証拠に、低木の枝は真新しいお御籤で満開だった。千代子たち以外は誰もいない境内に背を向け、卓巳は何を思ったのか万里子の腰に手を回してくる。

「卓巳さんっ！ 罰はひが当たりますよ！」

「誰もいないし見てないよ」

「神様が見てます！」

「良いことをしたんだ。少しくらい目を瞑つぶってくれるさ」

「た、たくみさん」

卓巳の懸念事項だった取締役会は、会長である皐月の入院に揺れた。

だが皐月は万一に備え、会長代行に卓巳の名を挙げ、白紙の委任状を沖倉弁護士に託していたのだ。それにより、卓巳は解任どころか社長と会長を兼務することになったのである。

万里子は卓巳の体を心配していたが……とんでもなく元気なようだ。

「大丈夫、ウエストミンスター寺院と似たようなものだ。君も目を瞑つぶってごらん」

卓巳の蕩けそうな囁きは、万里子の中にロンドンで過ごした幾つもの夜を思い出させ……。万里子は心の中で手を合わせ、ほんの少しだけ神様に目隠しをしたのだった。

最終章 命 (8) 春立つ日

立春 曆の上では春の始まりである。
だが、実際にはまだまだコートの手放せない時期だ。

「お帰りなさいませ、奥様」

「ただいま。変わったことはなかった？」

「はい」

この三週間、万里子は病院通いが日課となっている。

卓巳の祖母・皐月は入院したままであった。当然、意識は戻っていない。万里子は毎日見舞いに訪れ、数時間を過ごして帰宅する日々だ。

病院はもちろん完全看護だった。だが、元気になった千代子のたつての願いで、彼女は皐月に付き添っている。

万里子はコートを脱ぎながら雪音に渡した。

「大奥様はお変わりなく？」

「そうね……。でも、きつとまた元気になって戻って来られるわ」
雪音の寂しそうな問いかけに、他のメイドたちもしゅんとなる。

沈んだ雰囲気を一掃するように、万里子はわざと明るい声で答えたのであった。

くわくわくわくわく

藤原邸の家人はほんの半月前に比べ半分減っていた。

太一郎が家を出て、敦・尚子夫婦も一月末には北京に発った。皐

月は入院中で……このまま行くと、四月には静香も孝司も邸を出る予定だ。

家人だけじゃない。使用人もかなり少なくなった。

メイドの中で、太一郎に一番酷い思いをさせられた悠里は、両親が見つかったこともあり、邸を出て行った。

かななも住み込みの不自由さに嫌気が差したらしく、自ら辞めてしまう。

十七歳の茜は今年に入り、やっと母親が退院した。店の営業を再開し、彼女も家業を手伝うという。元気になった母親と一緒に挨拶に来た時、高校を卒業したら正式に採用して下さい、と言っていた。結局、若いメイドで残ったのは美和子と雪音だけだ。後は身寄りがない五十代、六十代となり……。その中で仕事の辛くなった者には充分な退職金を渡し、老人ホームを世話することにしたのだった。

だが何と言っても一番の変化は、あずさがいなくなったことだろう。

皐月の容態が安定し、ホツとした直後、卓巳と万里子は宗からあずさの一件を聞いた。誓約書を見せられ、卓巳は「本当なら訴えてやりたい所だが、追い込み過ぎて窮鼠となられては面倒だ」と言い、怒りを露にしていた。万里子としては、出て行ってくれたのなら追い掛けてまで争うつもりはない。

「マスコミには持ち込めないように手配しました。それから念のため、監視もつけています。妙な動きを見せれば、事前に手を打つつもりです」

卓巳ではないが、万里子も感心するほど宗は二人のハネムーン中に頑張ってくれた。

「各社の決算期を過ぎて総会までの間に休暇でもやろう。のんびりと旅行でもするだろう」

「雪音さんを誘うと思う？」

「さあな。だが、奴のことだ。整理するリストはまだまだ残っていると思うがな」

思わせぶりに卓巳は笑い……。

その数日後、宗がまだ数人の女性と関係が続けていることが発覚。それを雪音が知ってしまう。万里子の目に二人の仲は壊れたかに見える。

そして、お節介を承知で首を突っ込もうとした万里子を卓巳が止める。卓巳は、「しばらく様子を見よう」と言うのだ。

だが万里子は不安だった、雪音がまた、少しも愛してくれない男性の許に戻るんじゃないかと。雪音は宗とのことはあまり話してくれないが、去年まで付き合っていた男性のことは少し話してくれた。万里子には、その男性がとうてい立派な人物には思えない。なのに、雪音が庇おうとするのが気になり……。

しかし、そんな万里子の心配は杞憂に終わる。わずか数日で宗と雪音は元の鞘に戻ったのだ。

「ど、どうして？」

「男と女はそんなもんだ」

妙に余裕のある表情で笑う卓巳だった。

く*く*く*く*

「検査は明日受けることになったのか？」

卓巳は心配そうな表情で万里子に尋ねた。

「はい。丁度お祖母様のお見舞いに毎日通っていますし……。早いほうがいいと思って」

卓巳のコートをハンガーに掛けながら万里子は答えた。

深夜の帰宅なので出迎えは万里子だけだ。

邸内で浮島だけは変わらずに頑張っていた。だが、彼も寄る年波には勝てないのだろう。春には自分に代わる執事の見習いを入れて欲しいと卓巳に申し入れた。数年掛けて仕込みたいとのこと。浮島も、皐月の発作と入院には精神的に堪えているようだ。

「明日でなければ僕もついて行けるんだが」

「検査を受けるだけです。結果を聞くときは卓巳さんも同席して下さいね。あの……もし駄目なときは」

万里子は明日、不妊の検査を受けることになった。

皐月の入院する大学病院にも産婦人科があり、都内では最新の不妊治療を取り入れているという。万里子はそれを聞き、治療は時間の掛かるケースもあるので一日でも早く、と考えたのだった。

だが、万里子も気づかぬうちに、プレッシャーで眉間に皺が寄っていたらしい。

卓巳はふわっと万里子の髪を撫で、顔を覗き込み微笑んだ。

「受ける前からそんなでどうする？ 明日はとりあえず、だ。国内に不妊治療専門の優秀な病院はたくさんある。海外にはもっとだ。心配は要らない。僕が必ず君を母親にしてみせるさ」

卓巳の優しさはありがたかった。押し寄せる不安を卓巳の笑顔が払い除けてくれる。万里子はシャツを脱いだ卓巳にギュッと抱きついた。

もちろん他意はない。感謝の気持ちを伝えたくて……だが卓巳は違うように受け取ったみたいだ。

「万里子、やっぱり自分たちでも最大限の努力はするべきだろうな」

「た、たくみさん？ ごめんなさい、あの」

「今日こそは、一緒にシャワーを浴びてくれるだろう？」

「それは……」

一緒にお風呂に入ること万里子は嫌がった。体を洗ったり、プライベートな空間を卓巳に見せるようで、どうしても恥ずかしいのだ。万里子にとっては、トイレよりまし、ぐらいの気持ちである。でも、卓巳はその空間を共有することを望んでいた。

「もっと親密になることが重要だと思うんだが」

「もう十分に親密でしょう？」

「いや、まだまだ足りない。もっと近づけば、子供も僕たちの元に来易くなるよ」

判ったような判らないような理由をつけて、卓巳は万里子をバスルームに引つ張り込んだ。自分は残り数枚をさっさと脱ぎ、万里子の衣服にも手を掛け、脱がせ始める。

卓巳のキスは万里子の唇を掠めた。ほんの少し触れ合っては引き、突然強く押し付けて……万里子が口を開き掛けると離れる。焦らされて、思わず万里子から追いかけてしまいたくなるくらいに。

「卓巳さんの……意地悪」

「僕が？ 君を大好きなのに？ ほら、完全復活だろう。もう途中で萎えたりしないよ。任せてくれ」

満面の笑みで見つめる卓巳に、笑みを返さずにはいられない万里子であった。

まさかこの翌日、万里子はドクターの言葉に倒れることになるとは思ってもせずに……。

最終章 命 (9) 夜明け前

心ここに在らず、といった風情で、卓巳は坦々と仕事をこなしていた。それが時間を追うごとに、恐ろしいほど不機嫌に変わって行く。

今朝 「検査が終わったら連絡をしますね」万里子はそう言った。午前中には終わる予定だと聞いている。それが、昼の一時を回っても何の連絡もないのだ。

検査は種類によっては痛みを伴うものもあるという。こんなことなら、仕事を放り出して付いて行けば良かった。そう思っても後の祭りである。

その時、後方に控えていた宗が携帯電話を手に卓巳の横にやって来る。

「社長」宗の声には、彼には珍しく緊張の色が含まれていた。

「病院から社長に“緊急”とのことです」

卓巳はひったくるように携帯を奪い、立ち上がった。

「藤原だ」

『会議中恐れ入ります。私は産婦人科の』

「誰でも構わん！ 用件を言え！」

『は、はあ。実は先ほど、奥様が廊下で倒れられまして……それですぐに行く』

パチンと携帯を畳むと卓巳は振り返り、

「会議は中止だ。宗、玄関に車を回せ」

「大奥様ですか？ それとも」

「……万里子が倒れた」

喉の奥から絞り出すように口にし、卓巳は会議室を飛び出した。

くわくわくわくわく

それは、卓巳が電話を受ける三十分ほど前のこと……。

万里子は、ボンヤリと周囲を見渡した。

病院の待合室は、もっと混んでいると思っていたのに。ふつと頭に浮かぶ。しばらくしてようやく、今がお昼の休憩時間であることに気づいたのだった。

産婦人科となっているが、待合室は産科と婦人科に分けられている。子供の出来ない女性にとって、妊婦の姿は見るのも辛いものだ。不妊治療で通う患者は婦人科の待合室を使う。これは病院側の配慮であった。

そのおかげ、と言うべきか、辺りに妊婦の姿はない。いや、人影すら疎らまばらになった待合室のベンチに、万里子は座り込んでいた。

簡単な問診と尿検査、血液検査、そして内診。

それらは万里子の予想したより呆気なく終わった。だが、子宮卵管造影や通気検査など、時期が悪かったのかも知れない。万里子は医者の前に座り、次の予定が告げられるのを待っていた。

「診断結果は、ご主人と一緒に聞かれたほうがよろしいと思います。出来れば今日、藤原社長にこちらまでお越しいただけますでしょうか？」

それは検査以上に思いも寄らない言葉であった。

一体、何がどうしたと言うのだろう。考えられるとすれば、検査の余地もないほど卵管が癒着しているのだろうか。それとも、他の病気が見つかったとか……。それは、万里子にも思い当たる節があった。

先月は生理の予定日が少し遅れ、しかも三日ほどでほんの少量しか出血がなかった。皐月の入院もあってドタバタしており、体調が狂っただけだと思っていたのだ。

だが、もしそうでなければ……。考えは悪い方向にばかり進む。

その時、万里子の目に自動販売機が映った。ゆっくり立ち上がると財布から小銭を出し、百円玉を入れようとする。だが、百円玉はカチカチと音を立て投入口を叩くだけだ。指が震えて上手く入らないのである。

やっと滑り込み、ランプが点った。どうやら百円ではなく五百円玉だったらしい。何かのボタンを押し、何かを取り出し、気づくとそれを飲んでいた。

不意に肩を叩かれ、小銭を差し出される。

「お忘れですよ」

皐月より年配に見える老婦人だ。どうやら、万里子の後に自動販売機を使おうとしたらしい。

「あ……ありがとうございます」

万里子は自動的に、蚊の泣くような声で答えた。

その時初めて、自分の手に“水”のペットボトルがあることに気づいたのだった。

(こわい……怖い、怖い、怖い、怖い)

自分がもし、死んでしまうような病気であれば、どうすればいいのだろう。ほんの半年前であれば、それも運命だ、と受け入れたかも知れない。だが、今は嫌だった。卓巳と離れたくない。

こんな不幸福になりながら、更に子供まで望むから、きつと罰が当たったのだ。

万里子の不安は、坂道を転がる雪だるまのように膨れ上がる。

「今日……ですか？」

そこまで急ぐ必要があるのだろうか、と尋ねた万里子に、担当医は困ったような顔で答えた。

「ええ、そうですね。出来るだけ早いほうが」

「あの、わたしだけ……先に聞くことは出来ませんか？」

「こういう問題は、ご夫婦一緒のほうがよろしいと思います。藤原社長からも、慎重に、と厳命されているので」

もし……万に一つでも妊娠しているのだとしたら、最初に言われる言葉は「おめでとございます」ではないだろうか？ そうじゃない、と言うことは。

万里子は、耳のすぐ横で心臓が激しく脈打つ錯覚すら覚える。

（卓巳さんに連絡をしないと……）

病院内は携帯を切っている。外に出て掛けよう、そう思い万里子は立ち上がった。

その拍子にペットボトルが床に落ちた。ゴロゴロと転がる。慌てて拾おうとした時 突然、万里子の視界が歪んだ。平衡感覚がおかしい。気分が悪くなり、そのまま床に座り込む。ベンチに手をつき、頭を上げようとしますが……目は開いているはずなのに目の前が真っ暗だ。

「どうしました？ 具合が悪いのですか？ 声は聞こえますか？」

斜め上からそんな声が聞こえる。

万里子は「大丈夫です」と答えたのだが、声が出ないのだ。次第に手も足も重くなり、指一本動かせなくなってしまう……。万里子の心に卓巳の顔が浮かんだ瞬間、真つ暗になったのだった。

くくくくくくくく

「落ち着けだど？ これが落ち着いていられるかつ！ 妻は検査を受けに来ただけだ。それが何故こんなことになるんだ！？ 貴様は万里子に何を言った。一言でも妻を侮辱して試みる、二度と医者には名乗れんと思え！」

人の声が聞こえる、と思った瞬間、飛び込んで来たのは卓巳の怒鳴り声であった。

万里子は重い瞼をやつとの思いで開く。視界に入ったのは真つ白い天井と点滴のバッグとチューブ、そして、万里子を覗き込んでいる千代子の顔だった。

「万里子様！ 旦那様、奥様がつ！ …… ようございました。どうなることかと心配致しました」

千代子の目には涙が浮かんでおり、点滴の針が刺さっていない左手を握り締めている。

「千代子、さん……わたし」

それは自分でも驚くほど掠れた声であった。

「万里子！」

卓巳は部屋に飛び込むなり、万里子の許に駆け寄った。そして千代子と入れ替わるようにして、万里子の左手を握る。

「万里子、もう大丈夫だ。僕が傍にいる。一人にして済まなかった。やはり傍にいるべきだったんだ」

「いえ……ごめんなさい。わたしのせいで」

卓巳の顔を見るなり、万里子の双眸に涙が浮かび、こめかみ蟀谷に流れ落ちた。

「藪医者という言葉など気にするな。専門家はいくらでもいる。必要ならアメリカに渡ってもいい。だから、頼むから泣かないでくれ。別れるという言葉も絶対に無しだ」

「ち、違うの……厳しいことを言われた訳じゃなくて。何も言って貰えなかったの。ご主人と一緒に……って。それで、悪いことばかり考えてしまっただけ」

ベッドに横たわる万里子を、抱き締めるようにしていた卓巳は驚いたように体を起こす。

「何も？」

万里子は卓巳の問いに恥ずかしくなり、無言で頷いた。

その時、病室の入り口付近から咳払いが聞こえた。万里子を診察してくれた五十代の男性医師が立っている。

「実は、喜ばしいご報告と、あまり喜ばしくないご報告があるので。それで、ご主人と一緒にのほうがよろしいと判断させて頂きました」

そして伝えられた医師の言葉は　ふたりの胸に、喜びと悲しみの嵐を巻き起こしたのだった。

最終章 命 (10) 悪意に満ちた奇跡

「万里子、いい加減出て来るんだ。ちゃんと食事を取りなさい！」
「放っておいて下さい！」

万里子は病院から戻るなり、奥の寝室に籠城してしまった。卓巳はドアの前に佇むことしか出来ない。時間を空けては、万里子に声を掛けるだけだ。

(何でこうなるんだ！)

悪気なく言った言葉の全てが万里子を怒らせ、卓巳自身も泣きたい気分である。

「まあ、ではハネムーンベビーですか？ おめでとございます！」
帰宅後、話を聞いた雪音からお祝いを言われた。だが、それすら、何と答えたら良いのか検討もつかない。

しかも、「それは……旦那様が悪いと思います」事情を掻い摘んで話した時、雪音はそう答えたのだ。

努力は何一つ報われず、万里子すら卓巳を責める。こんなはずではなかった。こんな……悪意に満ちた奇跡にも程がある。

(万里子を想って言ったただけだ。何もかも、万里子を救いたかっただけなのに……)

くわくわくわくわく

「間違いなく妊娠されてますよ。おめでとつございます」
唐突な医者言葉に二人は面食らった。

横になっていた万里子は体を起こし、それを卓巳が支えている。
ドクターの言葉に、万里子の瞳は見る間に潤み、さつきとは違った
涙を零した。

「ですが……心拍が確認できません。最終月経から計算して、すでに六週目の後半に入られている予定なのですが、胎嚢たいのうが確認されたのみです」

立て続けに聞きなれない言葉をぶつけられ、卓巳は首を捻った。

「ドクター、それは何を意味するのか……判りやすくはつきり言つては貰えないか？」

担当医師は一冊のファイルを差し出し、卓巳に向かって説明を始める。

「こちらが六週の後半に差し掛かった胎児……正確には、胎芽たいがと呼ばれる段階ですが、そのエコー写真です」

胎嚢とは赤ん坊の入った袋だという。それが子宮内に確認されると子宮外妊娠ではない、ということになるらしい。そして、その中に点滅が確認されるとそれが心臓となるようだ。万里子の場合、まだその袋しか確認されていないのだという。

「排卵が遅れて、実際の週数とずれが生じる場合も多々あります。ですから、このまま二週間ほど様子を見たいと思います。ただ奥様の場合、気になる点が一つ」

そう言って、カルテを見ながら話し始めたのが、ロンドンで万里

子の投与された催眠鎮静剤である。

それは妊婦への投与は避けられている種類の薬であった。あの時、診察を受けた時点では、万里子の妊娠は確認されなかったのだ。だが、計算上では着床の時期と重なる。体内に薬物の成分が残っていた場合、妊娠に影響を与えていないとは言い切れない。

「薬の影響で成長が遅れている、或いは止まってしまった可能性もあります。後者の場合、流産となります。しかし、妊娠が継続された場合……」

生まれてくる子供に重大な障害があるかも知れない。

そして何より怖いのが、妊娠中期以降での流産や早産である。万里子の体に大きな負担を掛け、いよいよ二度と子供は産めなくなる可能性も捨てきれない。最悪の場合、命にも関わる。

この時、卓巳の中では生まれてくる命に対する期待より、万里子の命を失う恐怖が先に立った。

二人きりになり、ベッドの上で固まったままにいる万里子を抱き寄せ、囁いたのだ。

「今回は諦めよう。運が悪かったんだ。……良かったじゃないか、妊娠できるということが判っただけでも、十分な進歩だよ。次は万全に計画して」

その瞬間、万里子は卓巳を撥ね除けた。そして、明らかに怒りに満ちた表情で卓巳を見つめる。なぜ、そんな風に睨まれるのか、卓巳には訳が判らない。

「諦めるなんて、どうしてそんな簡単に言えるの？ 運が悪かった？ 良かったなんて……信じられない」

「簡単に言ってるんじゃない！　こうなって良かったと言ってる訳でもない。ただ、何処かに慰めを見つけて、良いほうに考えないと遣り切れないだろう」

万里子の辛さは十分に判っているつもりだった。だからこそ、卓巳は冷静に万里子の心を軽くするような言葉を選んだのだ。卓巳まで深刻になり頭を抱えては、万里子に更なる負担を強いると思ったからである。

「どうして？　どうして、そんな危険な薬を投与したの？　少しでも可能性があるなら、やめて欲しかった。本当は……妊娠なんて出来っこないって思っていたんでしょ？　だから」

「違う！　ちゃんとドクターには言ったし、検査もしたんだ！　あの時は、パニックを起こす君を落ち着かせるために必要だったんだ」「わたしなんか、どうなっても良かったのに。わたしはまた……自分が助かる為に、子供を殺したの？」

「万里子っ！」

く　＊　く　＊　く　＊　く

君のために必要だった、と言えば、自分のせいだと泣く。過ぎたことではなく、これからのことを考えようとすれば、卓巳のことを冷たいと責めるのだ。

無論、卓巳も自分の責任は痛感している。薬剤の影響で子供の成長が止まったというなら、卓巳が判断を誤ったのだ。だが、ドクタ―の警告に従い、調べるべきことは調べた。確かに、大きな病院で最新の超音波機器を使えば、ごく初期の妊娠でも判ったのかも知れない。しかし、あの時の万里子をそんな目には遭わせられなかった。

徒ならぬ二人の様子に氣遣ったのだろう。宗は雪音と一緒に卓巳の部屋を訪れる。その時初めて、卓巳はロンドンで起こったことを人に話したのだった。

「それはまた……災難でしたね」

宗はライカーの失脚を聞いており、事の顛末が判り啞然としている。

「ああ。あの一件がここまで足を引つ張るとは、思ってもみなかったよ」

「どちらにしても、この時点での決断は、早計に失するのではないでしょうか？」

「もし万里子に何かあったら、私はどうすればいいんだ！ もちろん子供は欲しいさ。それは万里子の願いだし、叶えてやりたいと思っている。だが、万里子はたった独りなんだぞ！ 彼女だけは……絶対に失いたくないんだ！」

子供だけでなく、万里子に万一のことがあれば、おそらく卓巳は二度と立ち直れないだろう。

だが、雪音の反応は万里子と同じだった。一気に表情が曇り、卓巳が悪いと決め付ける。雪音の視線に卓巳は居た堪れなくなり、逃げるように洗面所に飛び込んだのだった。

卓巳は冷たい水で顔を洗う。それも、頭から水を被る勢いで。

寝室への入り口はもう一つ、ここなら鍵を掛けていないかも知れない。

その時、ふと、鏡に映った自分の顔を見た。それはとても初めての子供を授かって、喜んでいる父親の顔ではない。

卓巳は悔しさと哀しさが^な緋い交ぜになり
台の鏡を叩き割っていた。

次の瞬間、拳で洗面

最終章 命 (11) 愛が創るもの

「卓巳さん！」

寝室側のドアが開き、飛び込んで来たのは万里子であった。数時間ぶりに目にする妻の姿に卓巳はホッとする。

少し時間を空けて、別のドアから宗と雪音も姿を見せた。「雪音さん、救急箱を」宗は雪音に声を掛ける。相変わらず、人前で親しげなところは見せない二人だ。雪音は無言で頷くとリビングに戻って行った。

「社長、奥様……危ないので鏡から離れて下さい。手当ては寝室のほうでお願いします」

宗に言われ鏡を見ると、殴った場所が陥没し、波紋のようにひび割れが広がっている。外れて落ちたら大怪我をするだろう。

それを考えた時、卓巳は咄嗟に万里子の腕を掴み、洗面台から引き離れた。

「僕はどうなってもいい。だが君は……大事な体なんだ」

それは無意識から出た言葉であった。ごく自然に卓巳の口から漏れたものだ。

ところがその瞬間、万里子は卓巳に抱きついた。

「ま……りこ？」

「そんな風に、言ってもらえて……嬉しい」

今の万里子は、嬉しくても哀しくても、とにかく涙が溢れ出てくる精神状態らしい。

だが、卓巳にはそれが辛い。妻を泣かせたままではある自分の力が足りないせいだ。卓巳には万里子の苦悩を解決してやる義務がある。

彼は自分の悲しみを二の次にして、まず万里子を救おうと必死で考えていた。

まさかそれが、万里子との距離を広げているなど思いもせず…。

万里子は涙を拭くと、手近にあるタオルを掴んだ。卓巳の右手を優しく包み込む。「もう、何てことを……」口の中でブツブツ言いながらも卓巳を気遣い、彼を寝室まで引っ張って行く。

「万里子、頼むから泣かないでくれ。もうこれ以上、君が悲しむ姿を見てられないんだ」

卓巳の言葉に、万里子は顔を上げた。おそらくはずっと泣いていたのだろう。瞳は赤く充血し、瞼は腫れ上がっている。なのに、その目は力を帯び、挑むような視線で卓巳を注視したのだ。

「それじゃあ、約束して下さい。二週間経って、この子の心拍が確認されたら……産んでもいいって」

卓巳はゆっくり首を振ると、静かに答えた。

「まるで僕が、子供を産むなど言っているみたいだ」

「だったらいいですよね？ わたし、この子の心臓が動き出したら、どんなことをしても守ってやりたいんです。たとえ障害があつたとしても、この子が懸命に生きる限り、寄り添って一緒に生きたいの」

万里子の瞳には、これまで見たこともないほどの力が籠められていた。卓巳を食い入るように見つめ、切々と訴える。

「もし……生まれてくることが叶わなかったとしても、最後まで一緒に頑張りたい。だって、わたしたちの愛で創り出した命の奇跡なんですよ。諦めることなんて……」

「駄目だ」

「卓巳さんっ！」

「君の母親はどうなった？」

「……！」

万里子の母親は妊娠中のトラブルで亡くなっている。

特に何の問題もないと言われていた。だが中期になって前置胎盤と判り、突然の大出血を引き起こし、あっという間に還らぬ人となったのだ。順調に思えても妊娠には危険が付き纏う。ましてや、母と娘は体質が似るといではないか。もし、万里子自身が妊娠中にトラブルが起こりやすい体質だとしたら……。何かあつてからでは取り返しがつかないのである。

「卓巳さん……そんなことを言ったら子どもなんて産めません」

「気が付かずに健康診断などでX線検査を受けたり、薬物を接種したりして、子どもを諦めるケースは少なくないと聞いた。もし、その子が生まれても数時間しか生きられなかったら？ 或いは、数年の人生をベッドの上でしか過ごせなかったとしても？」

卓巳は右手からタオルが落ちるのも構わず、万里子の両腕を掴んで熱く語った。

「僕には何も出来ないんだぞ！ 君や子どもが負うリスクを、最小限にしようとして何が悪い！ 今なら心臓も出来上がってない、僅か数ミリの細胞に過ぎないだろう！？」

パンツ！ という音が寝室に響き、救急箱を持って駆けつけた雪音の耳にも届いた。万里子が卓巳の手を振り解き、頬を打った音だ。

「わたしたちの子どもを……そんな、悪性の腫瘍みたいな言い方を
するなんて」

「今は同じだ。癌が見つかったと言われた気分だよ。第一、ライカ
ーの事情を知らなければ、奴の子どもじゃないかと疑うところだ」

その瞬間、万里子ではなく、後方から何か卓巳の背中に当たっ
た。下を向くと、足下には消毒液が転がっている。

「ゆ、ゆきね」宗が小声で止めるが雪音の耳には入っていない。

「なんて酷いことを仰るんですかっ!? 自分の子どもが癌と同じ
なんて……最低だわ!」

「雇い主にこんな真似をしてただで済むと思ってるのか!」

万里子には弱いのが、雪音に向かつては重役も震え上がるような声
で叱責する。だが、雪音の腹の据わり具合も半端ではないらしい。

「旦那様は前もそうだったわ。自分では何も出来ないからって、勝
手に終わらせて結果だけ押し付けて。子どもが授かっても喜んでも
くれないなんて!」

「話を聞いてないのか!? 今が喜べる状況だと思っつか?」

「良かった、嬉しい、ありがとう、おめでとう……何一つ言っ
てないじゃないですかっ?」

「だから何だ!? 言わなくても思ってる。それとも、万里子を抱
えて邸中スキップでもしろと言うのか!」

二人とも本気で怒鳴り合い、肩で息をしている。

卓巳の胸に警告ランプが点った。万里子の体をほんの僅か気遣っ
た時、彼女が見せた表情と、この雪音の言葉には繋がるものがある
のではないかと。ただ、苛立ちが目隠しをして、卓巳には真実が
見つけられない。

「宗、この女を黙らせる」
卓巳はやり場のない怒りを宗に向ける。

「雪音さんをクビにするなら……わたしも出て行きます」
「万里子！」

万里子は小さなポストンバッグを手に、そこに立っていた。いつの間に詰めたのか、中身も入っているらしい。

「次の診断結果が出るまでの二週間、実家に帰らせて頂きます。でも、その間に雪音さんをクビにしたら戻ってきませんから」

「万里子、いったい何の真似だ。僕を脅すのか？」

「この子が単なる細胞じゃなくて、愛の結晶だと認めてくださるまで戻りません」

「判った。認める。だから行くな」

「じゃあ、心音が確認されたら、産んでも構いませんね」

「……」

それでもし、子どもと一緒に万里子まで失えば 卓巳は神と運命を呪い、自滅の道突き進むであろう。卓巳には万里子が命を粗末にしていると思えない。夫より子どもが大事なのか、と愚かな嫉妬まで生まれる始末だ。

万里子は床に転がった消毒液を拾い、卓巳の傷の手当てをした。そして、躊躇する卓巳に背を向けたのであった。

最終章 命 (12) あなたが教えてくれたこと

ポチャン。

湯船の中に蛇口から水滴が落ち、波紋を広げた。

(怪我……大丈夫かしら。消毒する前に、冷やしたほうが良かったのかしら)

浴槽に座り込み、肩までお湯に浸かりながら万里子は卓巳のことを考えていた。

実家のお風呂に入るのは結婚して以来のことだ。年末に戻った時はそれどころではなかった。あの時から考えれば、今の万里子は随分落ち着いているのかも知れない。

最初は悲しかった。どうしようもないほど悲しくて……万里子は自分を責め、卓巳も責めた。原因を作ったライカーも、そして、万里子を診察したロンドンのドクターすら心の中で恨んだ。

でも、自分の中に諦めていた子どもがいる。それだけで、四年前、鬼籍に封じ込めたはずの母性が万里子の心に甦った。贖罪ではなく、愛する卓巳の子どもを……我が子を抱くチャンスなのだ。少しでも希望があるのなら、精一杯守ってあげなければ。それは、今度こそ万里子が母親として果たさねばならない義務だと思った。

もちろん、卓巳の気持ち判らないわけではない。

卓巳は子どもより万里子を大事に思ってくれている。通常の妊娠より僅かに上がる確率リスクすら、認められないほど。ライカーのことを口走っていたが、あれが卓巳の本心だとは思えない。子どもの事もそうだ。本当に単なる細胞の一つ、癌と同じだなんて思っていないな

い、と万里子は信じている。
……だからこそ。

万里子は湯船の中で、そうっとお腹に手を当ててみた。

「大丈夫……絶対に大丈夫よ。愛してるわ。パパもママもあなたのことを愛してるから。安心して鼓動を刻んでいいのよ」

万里子は静かに目を閉じ、幾度となく「だいじょうぶ」を繰り返したのだった。

くくくくくくくく

「やっぱり、実家のお風呂はホツとするわ。ねえ、忍、お腹が空いたんだけど……何か食べるものはある？」

「お、お嬢様……」

突然里帰りして来た娘を受け入れつつ……。

父・隆太郎と家政婦の忍は、犬も食わない夫婦喧嘩であろう、と苦笑していた。だが、妊娠の件を聞き、一瞬浮かんだ笑顔がすぐさま凍りつく。

万里子は卓巳との喧嘩の内容までは伝えず、母にお線香を上げ、しばらくその場にいた。その後は自分の部屋に戻り、そしてお風呂だ。

忍の作ってくれた梅干入りのおにぎりと、夕食のお味噌汁をキツチンカウンターで頂いた後、

「万里子、こっちに来て座りなさい」

厳しい顔の父が待ち構えていた。

万里子はロング丈のニットガウンの前をしつかり合わせながら、リビングのソファに座る。父と向かい合った位置だ。

「藤原に電話をしたんだが、卓巳くんはいなかった」

父の言葉に万里子はドキツとする。

まさかまた車で出たのだろうか？　だが、万里子が家を出た時、宗と一緒にいた。来月には九十日間免許停止になるはずの卓巳に、無茶はさせないだろう。

「代わりに和田さんという女性が出て、詳しいことは話してくれないんだが……お前は悪くない、自分を庇ってくれた、と言っていた。さて、今度のことで卓巳くんと何があったか、ちゃんと話してみなさい」

万里子は観念して口を開いた。

「……わたしたちの子どもなのよ。それを“数ミリの細胞”なんて“癌と同じ”なんてあんまりでしょう？」

「それはそうでございますが……」

父はともかく、忍は万里子と一緒にあって怒ってくれると思っていた。それが、予想外の反応に、万里子は胸騒ぎを覚える。

「卓巳さまのお言葉は、確かに殿方にありがちな無神経なものではありませんが……。わたくしは一概に間違っているとは思えません」

「し……のぶ」

「わたくしの夫は交通事故で亡くなりました。中学に上がったばかりの息子と二人取り残され……悲しみに暮れました。残されたものは本当に辛^{つら}うございます。ましてや卓巳さまのお祖母さまはご高齢

で、万が一のことがあれば……お気の毒どころではありません」

そんなことは言われなくとも万里子にも判っている。

卓巳を独りにしない為に、皇月は孫に花嫁を望んだのだ。

「忍は判ってくれると思っただわ。でも、忍には子どもがいて、孫までいるんですものね。お母様なら……きつとお母様が生きていらしたら賛成して下さいはすよ」

万里子は横を向き、幼い少女のように拗ねて見せた。まるで駄々を捏ねる子どものようなようだ。万里子自身もすぐに恥ずかしくて身の置き所がなくなる。

だが、忍は怒るでもなく……。

万里子の隣に座ると、娘に語りかけるように、ゆっくりと言っただけで聞かせた。

「ええ、わたくしも母親でございますから……我が子の命に関わると言われたら、それこそ命懸けで反対致します。お母さまもご存命なら反対されましたでしょう。未だ見ぬ孫より、お腹を痛めた我が子を救おうとするのは、母なら当然のことでございますよ」

それは理に適った言葉であった。

万里子が黙り込んだ時、父・隆太郎も話し始める。

「母さんが死んだ時、父さんも悔やんだよ。二人目が欲しい、男の子がいいなんて言わなければ良かった、と。もし、最初に判っていたら……子どもを諦めていただろう」

父は瞳を潤ませながら言葉を続ける。

「二度目のお産だからと安心していたんだ。万里子の世話もせず仕事ばかりだった。父さんなりに、家族の為ではあったが……。万里

子から母親を奪ってしまった、と悔やんでも悔やみ切れなかった」「わたしは寂しくなかなかったわ！ お父様が居て下さって、とっても幸せでした。子どもを産もうとしたのが間違いだっただなんて仰らないで！」

あの日、幼稚園に迎えに来るはずの母は、いつまで待っても来なかった。

父は直接病院に駆けつけ、万里子は幼稚園の先生が病院まで送ってくれたような気がする。四歳の万里子が詳しい状況まで覚えていなくても無理はない。

病院に到着した時、母は既に昏睡状態で……。お別れを言う時に触れた母の手の冷たさが、万里子の記憶に焼きついている。

幼い万里子は必死で母の手を擦り、息を吹きかけた。

「おかあさま、さむそう……：まりこがあつたためてあげるの」「万里子は優しいね」

そう言っただけ抱き締めてくれた父の手は、火傷しそうなほど熱く。万里子はきつと一生忘れないだろう。

判っている。判っているのだ。

判ってはいても、乗り越えられない試練はない、と。奇跡は必ずある、と教えてくれたのは卓巳だった。

「判っている」

「え？」

頭で思った言葉を父に言われ、万里子はびつくりした。

「忍の言う通り、母さんが生きていても止めただろう。だが、あの時……父さんが病院に駆けつけた時、母さんは 子どもだけでも助けてくれ、と言った。結局のところ、自分の血肉を分けて人間を

創り上げる……母親という存在に男は敵わんのだ」

そう言うと、父は立ち上がり万里子の頭を撫でた。

「一晩ゆっくり休んで、明日は家に戻るんだ。女の勝ちが決まってる勝負で、男を苛めるもんじゃない。祝いは産むことが決まってるにしよう」

「おとうさま……ありがとう」

込み上げる涙を万里子はグッと我慢した。

まだ、本当の意味での“おめでとう”ではないのだ。だが、辛さに涙を零すことは止めましょう。自分は母親になるのだから、と。

張り詰めた空気が緩み、三人が一様に肩を撫で下ろした。その後、夜の十一時を回った時間帯に、突然、玄関の呼び鈴が鳴る。

「ひよっとしたら卓巳さまかも知れませんわ。きっと万里子さまを迎えに来られたんですよ」

忍にそう言われたら万里子も気になった。

そつと玄関を覗き込み……外は雨が降り出したようだ。コートの裾から雫を落とすつ、玄関に立っていたのは卓巳だった。

万里子は急いでタオルを取り、卓巳の元に駆け寄る。

だが、卓巳の様子がおかしい。奥歯を噛み締め、胸に何かを堪えたかのような表情だ。

「万里子……病院に行ってきた。祖母上が……」

最終章 命 (13) 愛の降る夜

融通の利かない頑固者、卓巳はそれなりに自覚している。だが、万里子も相当だろう。

しかも、今度ばかりは一つも譲らない構えだ。子どもがいると判った途端、見る間に子どもが一番になるなんて、卓巳は考えてもみなかった。

彼にとって一番身近な女性は母だった。あの母は、簡単にお腹の子を処分していた、それも何度でも。可能なら生ゴミの日に捨てることくらい、平気でやっただろう。

卓巳は長い間、女とはそういうものだ、と思い続けてきた。そのせいか、万里子の反応に親として置いてきぼりを喰らった気分だ。

大多数の男親が父性本能を発揮するのは子どもが生まれた後だという。それも、子どもに笑顔を向けられ、「パパ」「お父さん」と呼ばれ、ようやく父親の自覚が芽生えてくるらしい。

そうなれば、父親は外敵から子どもを守り始める……命懸けで。約九ヶ月お腹の中で育てる母親と、スタート地点で差がつくのは仕方のないことなのだ。

卓巳も万里子もそのことを知識としてそれぞれ勉強していた。だが、知っていることと、納得することは別である。ましてや不妊治療から始めようとしていた二人だ。戸惑うのは当然だろう。

「祖母上の様子を見に行く。今日は、病院に行ったのに立ち寄る余裕もなかったからな」

時間外であることは承知していたが、その為の特別室だ。

コートを手には、独りで出ようとする卓巳を宗が引き止める。「私が運転しましょう」 留置場に入るような真似は二度とする気はない。だが、信用回復までには時間が掛かりそうだ。卓巳は諦め、宗に車の鍵を渡したのだった。

「まあ、そのほうがよろしいと思います。会長のお顔でもご覧になって、頭を冷やしてから、奥様を迎えに行かれるのが一番でしょう」 宗はしたり顔で頷いている。卓巳の本音などお見通しと言わんばかりだ。

「万里子を迎えに行くとは言っていない」

「では、行かれないのですか？」

「……行かないとも言っていない」

失笑を堪える宗の顔つきが、どうにも腹立たしい。

「おい！ 雪音の歯に衣を着せぬ口ぶりをどうにかしろ。お前の女だろう！」

「社長ですら奥様を持って余しておいでなのに。この私に、女の口を黙らせる力があると思われませんか？」

その返事には頷かざるを得ない。女というものは本当に……。

十代から大学卒業まで、肉体労働者や苦学生であった卓巳に近づく女はほんの僅かだった。それが、藤原グループの社長という肩書きがついた途端、彼女らの目の色が変わった。なんと単純で愚かな生き物だろう。卓巳は女を一括りにし、見下して生きてきた。

金や物を欲しがり、自分から言い寄って来る女たちを追い払う術は簡単だ。そして、女の癩癩にアタフタする男たちを横目で見て、卓巳はせせら笑った。女の一人も思い通りに動かせないのか、と。

「社長、女が厄介だと、少しは判って頂けましたか？」

「……ああ、認める」

特に“愛する女”は、と卓巳は胸の中で付け足す。
外は冷たい雨が降り出していた。

くくくくくくくく

そこはVIP用の特別病室だ。広いスペースに一般病室とは比べ物にならないダブルベッドが置かれていた。壁には水彩画が飾られ、その横には観葉植物が置かれている。ベッドの正面に設置された42型のプラズマテレビは、当たり前だがコイン式ではない。

壁際のデスクには外線電話が引かれ、インターネットも可能だ。部屋の隅に仕切りがしてあり、簡易キッチンもある。重役室並のソファセットも完備していて、奥には六畳の和室まであるのだ。ちょっとしたホテルのスイートを上回る居住性であろう。

利用者の大多数が政治家や企業のトップ。重病患者はごく稀で、保養所或いは避難所のような使われ方だという。

深夜の見舞い客に千代子は驚いた。だが、卓巳の思い詰めた表情に、昼間の一件を思い出したらしい。

千代子は気を利かして部屋を出てくれた。

「おばあ様……千代子から聞きましたか？ 万里子に子どもが出来ました。僕の、子どもです」

卓巳はベッドサイドの椅子に座り、臯月に語りかけた。

無論、臯月は何も答えない。最初に付けられていた鼻腔カニュー

レも、今は外されている。自発呼吸は安定しているが……。卓巳の
問い掛けには、二度と答えてはくれないのかも知れない。

「何の治療も受けていません。ごく自然に……。可能性はゼロに限り
なく近いと言われましたが、万里子が僕に奇跡をくれました」

卓巳は皐月の言葉を思い出していた。

『身体の繋がりなど、心の離れた二人には意味のないものですよ』
拳式直前、迷いを抱える卓巳に、皐月はキツパリと言ってくれた
のだ。

「……愛し合う僕らにとって、それは大きな意味がありました。万
里子の中に命が芽生えたんです。でも、それは今にも消えそうで……
万里子も……。連れて行ってしまいそうです」

言葉にした途端、卓巳は込み上げる涙を抑えることが出来なくな
った。

卓巳は皐月の手を握り、自分の額に押し付ける。祖母の手に縋り
……。卓巳は泣いた。

「どうすればいいのか……。本当は判らないんだ。万里子を守りたい
と思う僕は、父親……。失格ですか？ 子どもが欲しくない訳がない
でもそれ以上に……。万里子を失いたくない！」

無理強いをすれば万里子の心が離れるかも知れない。愛を失えば、
絶望の度合いは同じだ。子どもを望むことで究極の選択を強いられ
るとは思ってもみなかった。

「僕のせいで……。僕の判断ミスで……。取り返しのつかないことをし
てしまったんだ。本当は……。怖い。怖いんです。怖くて怖くて……

万里子を抱き締めて……泣きたいだけなんだ」

「……どうして……そうしないのです……」

風が震えた。

室内の機械音に打ち消されそうな声だった。

だが、卓巳が縋りついた小枝のような指が、しっかりと卓巳の手を握り返している。

「お、おばあ……さま？」

驚き、顔を上げた卓巳の目に、開かれた双眸が映った。

それは何一つ変わらず、気品に満ちた眼差しだ。穏やかな笑みを湛え、卓巳を見つめている。

「抱き合って……泣けば良いのです。怖いと……判らないと……それでいいのよ。答えは……要らないの」

皐月の言葉は卓巳の胸に、溶けない雪のように降り積もっていく。それは、たくさんの悲しみを、たった独りで乗り越えてきた皐月の想いが降らせた雪。孫の幸福のみを願う、愛と奇跡の籠められた雪であった。

くくくくくくくく

「お祖母様は……ご無事なんですね」

「ああ、意識が戻った。千代子も泣いて喜んでた。医者も、安静は続くが当面の危機は去った、と」

「良かった。わたし、すぐに用意します。お祖母様のお傍に……」

万里子は部屋に戻り着替えて来ようとする。だが、卓巳はそんな彼女の腕を掴み引き止めた。

「卓巳さ」

卓巳は万里子を抱き締めた。突然のことに彼女は言葉を失う。

「ごめん。上手く言えない。でも……何も出来ない自分が悔しい。

万里子……独りでは、いや、子どもと二人では逝かないでくれ。その時は、僕も一緒だと約束してくれ」

その時、万里子も手を伸ばし、卓巳の背中をギュッと抱き締める。

「大丈夫よ、卓巳さん。同じ約束なら、みんな生きて幸せになる約束をしましょう。だって、卓巳さんの愛がわたしに教えてくれたのよ。奇跡は精一杯手を伸ばして、懸命に掴むものだって」

雨はいつの間にか、雪に変わり……その下で、大地は春の鼓動を始める。

最終章 命 (14) 三人のデート

「なあ、万里子……もう降参だ。勘弁してくれ」

「ダメ！ わたしの気の済むまでって約束でしょう」

万里子はニツコリ笑って卓巳の顔を覗き込む。

「もう無理だよ。僕にこの手の経験が少ないことは知ってるだろう？」

「だ・か・ら、今のうちにタップリ経験しておかなくっちゃ！」

卓巳は大きく息を吐きながら、万里子に提案した。

「じゃ、もう一回だけ頑張るから、それで許してくれるかい？」

「もうっ！ 卓巳さんたら……まだ十回くらいしかしてないのよ」

「だから言ってるだろう？ 他の方法なら必ず君を喜ばせることが出来るんだ」

「……ズルは駄目よ」

口を尖らす万里子に卓巳は両手を上げた。

そして、大きく頷きながら、小さな声で呟く。

「はいはい。……騎士というより下僕だな」

「何か言った？」

「いや。可愛い奥さんの仰せのままに」

「よろしい！」

万里子はお茶目に返事をして、五百円玉を投入する。

「五百円で六回のほうがお得でしょう？」

軽快なメロディが鳴り始め、アームが動き出す。卓巳は人生初のクレーンゲーム機に十一回目のチャレンジを開始したのだった。

二月も半ばを過ぎて、明日は二度目の検診が予定されている。

もちろん、卓巳も付き添う予定だ。もし、心拍が確認されなかった場合、その日のうちに処置して貰うことになっている。その時は……この子とは明日でお別れなのだ。

たとえ人としての形はなくとも、間違いない二人の娘であり息子であった。元氣そうに振舞っても、検診の日が近づくにつれ食の細くなる万里子に、卓巳は提案したのだった。

「遊園地か何処かに遊びに行かないか？ その……家族三人で」

卓巳の言葉に一瞬で万里子の瞳は輝いた。

「じゃあ観覧車のある所がいいわ。子ども連れで乗るのが夢だったの」

そして二人が訪れたのが、お台場にあるアミューズメント施設に併設された巨大観覧車であった。地上――五メートル、卓巳らが英国で乗ったロンドンアイより二十メートルほど低い。だが、日本では最大級の大きさだという。

観覧車からは夜景を見ることにして、暗くなるまでレジャー施設で遊ぶことにしたのだった。

ゲーム機のコーナーを奥に進み、お化け屋敷に入りそうになる万里子を、卓巳はさり気なく止める。入場料金が書かれた立て看板の隅に、『入場をお断り致します』の注意書きが。その中に『妊娠中の方』という項目があった。

どこか恥ずかしそうな顔で万里子は微笑み、違うコーナーに卓巳を誘う。

スポーツゲームのコーナーでは、万里子にせがまれ卓巳が挑戦するが……。野球、サッカー、テニス、バスケットと、球技が全滅で

あることを証明しただけだった。

「言っておくが、僕はスポーツが苦手な訳じゃないぞ！ 球技が苦手なだけなんだ」

「でも、男の子だったらキャッチボールは基本じゃないの？ それとも最近はずサッカーかしら？」

「いいんだよ、娘なんだから。ピアノとかバレエとか」

「卓巳さん、クラシックも苦手なんじゃ」

「……」

思えば、親に何かをして貰った記憶がほとんどない。青くなる卓巳に万里子が慌てて声を掛ける。

「卓巳さんの息子だったらきつと頭が良くて勉強好きよ。宿題は見せてあげてね」

「ああ、もちろんだ！ 娘には僕が勉強を教えよう」

「もうっ！ 頑固なんだから」

「お互い様だ」

万里子はクスクス笑いながら卓巳の腕に抱きついた。

そんな妻の手をしっかりと握り締めながら……。

子どもは娘に決まっている、万里子が失った全てを取り戻してやるのが卓巳の願いなのだ。娘には「愛実^{まなみ}」と名付け、二人分の愛情を注ぐつもりでいる。万里子に似ていたら、それはもう美人だろう。そこまで考えて卓巳は不安に襲われた。

もし、娘が万里子のような目に遭ったら……。二十四時間、卓巳が傍にいらなければいいが不可能だ。幼稚園から大学まで女子校に通わせるとして、それ以外は……。

(ボディガードが必要だな)

今から人選に入る必要がある、と卓巳が真剣に考え始めた時、万里子が声を上げたのだった。

「卓巳さん！　ねえ、とつても可愛いわ！」

ガラスケースに張り付き、万里子は中を覗き込んでいる。卓巳が横に立つと、その中にはハート型のクッションに縫い付けられたアザラシもどきのぬいぐるみが押し込まれていた。陳列とは言い難い詰められようだ。

「気に入ったのかい？　だったら好きなだけ買えばいい」

万里子が物をねだるのは滅多にない。貴金属品店やブランドショップなどはいつも素通りだ。甘い物と花は喜ぶので、卓巳は気がつくとお土産に買ったたりしていた。

「いやだ、卓巳さん。これって自分で取らなきゃ駄目なのよ」「盗る？」

万里子は百円硬貨を取り出し、実演して見せた。

「どうやら……アームを動かし、先端で挟んで、隅の穴に落とす。というゲームらしいことは判った。」

「なんだ。そんなことなら簡単だ」

「そう言っただけで始めたのだが……。」

最終的に五千円ほどつき込み、ようやく卓巳は一個のぬいぐるみを取った。あまり可愛らしい色とは言い難い、茶色いアザラシが赤いハートにくっ付いている。

途中、店の従業員を呼び、

「これはいくらだ？」

「あ、いえ……お売りするという訳には……」

「なら機械ごと買おう。不満なら店ごとでも」

「言い、小切手を切ろうとして、慌てて万里子に止められたので

ある。

「全く。似たようなものは何処にでも売ってるだろうに。縫製も雑で、とても商品価値など……」

不満を小声で漏らす卓巳の耳に、万里子の安堵した声が聞こえた。

「嬉しい……卓巳さんが取ってくれたら、きっと赤ちゃんが抱けるって神様にお祈りしてたの。もし駄目でも、わたし一生この子を大切にするわ。……ありがとう」

万里子は一層の尊敬と信頼の眼差しで卓巳を見つめる。そんな彼女の肩を抱きながら、諦めなくて良かった、と心底思う卓巳だった。

くくくくくくくく

観覧車にはシースルーもあったが、二人とも普通のタイプにしよ
うと話し合う。一周約十六分、六人乗りのゴンドラだがここでは相
乗りはないらしい。二人がチケットを購入しようとした時、再び卓
巳が気づいたのだ。

「万里子……駄目だ」

「え？」

そこには『不測の事態に対処しにくいいため妊娠中の方はご利用出
来ません』と書かれていた。

少し離れた位置で、二人は観覧車を見上げる。

「明後日だったら乗れたかも……ね」

万里子は目を伏せると、小さく笑って言った。

卓巳はそんな万里子の髪をそつと撫で、

「いや、次は一年後だ。……三人で来よう」

「……はい」

次々とパターンを変え、イルミネーションに煌く観覧車に思いを馳せる二人だった。

最終章 命（15）卒業

三月半ば、聖マリア女子大学の卒業式が行われた。

聖マリアは入学式と卒業式には制服を着る決まりだ。万里子も濃紺の制服を着て、その上から黒のアカデミックガウンを羽織っていた。フード付きのガウンは襟とフードの縁が白、そして大学名の入った黒の角帽を被る。

式の後、^{チャペル}聖堂では神に感謝の祈りを捧げ 卒業に関する行事は全て終了したのだった。

「万里子さんはこのままお帰りになるのね」

聖堂の周りはアカデミックガウン姿の卒業生で溢れ返っている。万里子もその中にいた。

「はい。主人が迎えに来てくれますから」

はにかみながら答える万里子に、友人たちは軒並み「ごちそうさまー」と声を揃える。

ありがとう、お世話になりました、また逢いましょうね、連絡してね、と言葉を交わしながら教職員や友人たちに別れ告げ、万里子は一番最初に、正門に向かった。

正門の外には桜並木が広がる。この時期、枝にはまだ小さな蕾しか見えないが、入学式の頃には満開の桜が咲くのだ。

四年前、絶望に近い悲しみを抱え、万里子は大学の門をくぐった。その年は開花が早く、遠目にはピンク色の絨毯が素晴らしく幻想的に見えた。だが近寄ると、桜の花びらは踏み躪られ泥だらけで……我が身と重なり、涙した覚えがある。

一年目は時間さえあればチャペルに通い、神に祈った。神は万里

子に、答えを示してくれたのだろうか……今となつてはよく判らない。ただ、自分を苛めるように積極的に奉仕活動に参加したことは確かだ。特に、親に捨てられた子供たちと触れ合った時、身勝手な親を責める先生の言葉に、万里子は息も出来ないほど苦しかった。

万里子が贖罪の道を歩み始めた頃、卓巳と出逢つた。

桜並木の葉が色を変え、春とは違った絨毯が敷かれ掛けたこの場所に、卓巳は佇んでいた。黒、正確にはブラックサファイアというボデイカラーのBMWにもたれ掛かり、万里子を見つけると数十秒睨み続けた。そして、万里子目掛けて真っ直ぐに近づき 「千早万里子さんですね」。

卓巳の声は意外に硬く、素っ気ないものであつたことだけ、万里子もよく覚えていてる。

「万里子！ 無事に終わったかい？」

今日の車は社用のリムジンだ。

やはり待ち切れず、卓巳は外で立っていたらしい。今、万里子を呼ぶ声は例えようもないほど温かく、愛が満ち溢れている。

「車の中で待つていて下さればよろしいのに……。寒くありませんでした？」

二月の後半はコートなしで出歩けたが、三月に入つて再び寒気がやって来た。そうかと思えば昨日は五月の陽気となり、今日はまた昨日から十度も下がっている。

「僕はどうでもいいんだ。聖堂は寒かつたんじゃないのか？」

「大丈夫です。千代子さんに貰つた、腰巻のような腹巻を着けてますから」

「このまま病院に行くだろう？ 気分は？」

「酷いのは朝だけですから、本当にそんなに心配しないで」

薄手のアカデミックガウンを脱がせると、卓巳は万里子を厚手のコートで包み込む。

今日は通算四度目の検診日であった。

卓巳が無意識のうちに、万里子の期待に応えた茶色いアザラシのご利益か。

はたまた、忍が裸足でお百度参りをしてくれ、万里子の父が朝晩母のお墓まで行き祈ってくれたおかげだろうか。さらには、皐月の「わたくしを起こしてくれたのは小さな男の子だったわ」という不思議なお告げまであり……。

二度目の検診で、黒い胎囊たいのうの中に白い点滅が確認されたのだった。

「ちゃんと成長しているようですね。現段階で薬の影響は何とも言えませんが……」

担当医の口調から『懸念は残るが喜ばしい』と言った印象を万里子は受け取った。

通常の週数から比べれば、二週ほど成長が遅れているという。だが、このまま順当に発育するようであれば、排卵そのものが遅れた可能性が高い。そうなれば、投与された薬が胎児に影響を与える可能性はほぼゼロだと言っただ。

卓巳はそれを聞き、俄然奮起した。

邸に、産科のドクターを雇い入れ、超音波機器まで購入しようとしたのである。だが、万里子がそれを止めたのだった。

一日中ドクターに付き添われ、毎日検査されたのでは逆にプレッ

シャーと焦燥感が増すから、と。担当医からも、あまり気にせずゆったりとした気持ちで過ごすのが一番と言われ、卓巳もどうにか納得する。

しかし、その代わり、というべきか。卓巳は『質より量』の本領を發揮して、日本中から安産のお守りをかき集めたのだった。

「お守り記念館とか、博物館とか、お作りになるつもりなんですよか？」

雪音が呆れるのも無理はない。私室のリビングにある暖炉の上に並べたが……山盛りに近い状態なのだ。

しかも、行ける範囲では卓巳自身が出向き、祈祷を受けた腹帯まで貰ってくる。

「卓巳さん……それは五ヶ月の戌の日行くのが習わしなんですけど開いた口の塞がらない万里子に、卓巳は平然と答えた。

「その時はその時、また行けばいいだろう。神も仏もしつこく願えば根負けして優先してくれるかも知れない」

「でも……あまりしつこいと、怒らせたりしませんか？」

お詫びに回ってくるという卓巳を、必死で押し止める万里子だった。

くくくくくくくくく

「では、この一ヶ月、間違いなく順調に成長しているんだな？」

卓巳の念押しに、C.R.L……頭^{うしろ}臀^{おしり}長^{なが}を計りながら担当医は答える。

「はい、心音に問題はありませんし、二週間前に比べすっかり大きくなっていますからね」

そう言って、十二週から十週目に修正し、同時に出産予定日も十月半ばにずれたと告げられる。

それは万里子の目にもしつかりと映っていた。

ちゃんと人の形をしており手も足も動いている。自分の中に戻ってきた命を感じ、万里子はたくさんの人たちに感謝の気持ちで一杯だった。

「ええ、心配はしていませんでしたよ。教えてあげたではありませんか。卓巳さんに良く似た男の子が、わたくしの手を引いてくれたのよ」

検診の後、訪れた特別病室で皐月はころころと笑った。

皐月はこのひと月あまりで、目を見張る回復ぶりだ。暖かくなれば退院出来そうだという。そして顔を見るたびに、小さな男の子の話をするので卓巳は面白くなさそうである。

「おばあ様、お言葉ですが、まだ決まってはいませんよ。僕は娘が産まれると信じています」

「まあ、往生際の悪い方ね。死に掛けたわたくしが言うのだから、間違いありませんよ」

ちなみに卓巳の貰ってきたお守りの中に、三重の子安観音寺の物もあった。そこには一年中花をつけるという桜『ふだんざくら不断桜』がある。頂いた護符の中には桜の葉が一枚入っており、葉が裏だと男の子、表だと女の子が生まれるという。

万里子が「試しに開けてみましょうか？」と言うのを、卓巳は駄目だと言って譲らない。

「きつとこっそり開けて見たのではないかしら」

そう言って皐月や千代子は笑う。

余計に不機嫌そうになる卓巳に、万里子はこっそり耳打ちした。

「わたし、女の子が産まれるまで頑張りますから。卓巳さんも……
ね」

一瞬で笑顔に変わる卓巳だった。

最終章 命 (15) 卒業(後書き)

御堂です。

長らくご覧頂きまして、本当にありがとうございました。

明日で最終回となります。

最後までよろしくお付き合いくださいませ(平伏)

最終章 命 (16) 未来

万里子は空を見上げていた。

青い空の所々に、ワンポイントのように白い雲が浮かんでいる。そして、万里子の目の前にあるのは、巨大な観覧車であった。直径百メートル、ゴンドラの数は一六四台。額に手を翳し、万里子の見つめるブルーのゴンドラは、ちょうど地面から九〇度の地点を超えようとしていた。

腰近くまでであった万里子の長い髪は、今は肩の少し下くらいで切り揃えられている。今日は左右に分け、三つ編みにして……まるで昭和初期の女学生のような可愛さだ。女学生と違うのは、お腹が膨らんでいる点だろうか。安定期に入り、腹帯で支えなければ少し辛くなりかけの大きさである。

あまり上を見ていると眩暈がするので、万里子は手を下ろし正面を向いた。そこにはゴンドラに乗ろうと大勢の人が並んでいる。春休みの最終日曜日、やはり家族連れも多い。

万里子が手にしているのはベビーカーであった。

多機能タイプで生後一ヶ月から三歳児まで使える設計だ。だが、実際には三歳まで乗せることはあまりなかった。自在に歩けるようになった子どもは、ベビーカーに乗りたがらないものだろう。万里子がこのタイプを選んだのは、A型は操作性が今ひとつで、B型は軽いが安定性が悪いためだった。

万里子はベビーカーから落ちそうになったおもちゃを、腰を落として捨てる。それは何個目だったか……もう覚えてはいないが。卓巳がクレイゲーム機で取ってくれた“アザラシ”の一つであった。

くくくくくくくく

二人の“最初の子ども”が産まれたのは、予定日と言われた十月十一日の正午だった。

万里子は卓巳の懇願により、予定日二週間前から入院していた。もちろん、卓巳も病院から会社に通う毎日だ。そして予定日当日の早朝、万里子は破水したのだった。

「陣痛はまだ微弱なものですし、間隔も離れています。子宮口もまだだですので、早くても、あと半日は掛かると思っています。下さい」万里子は分娩に時間が掛かるのは承知していたし、覚悟も決まっている。

だが、泣きそうなのは卓巳のほうであった。その日はアメリカからの客を向かえ、重要な契約を控えていた。

「予定日ちよつどが一番確率が低いと……宗！ お前がそう言っつて予定を入れたんだぞ！」

「そ、それは……そういうデータがある、と申し上げただけです。社長、ロード氏がお待ちですので」

卓巳に怒鳴られ、宗は腕時計を見ながら汗を掻いている。

「たくみさん……大丈夫よ。行つて……」

万里子は精一杯の笑顔を作つて見せた。

それはテキサス州からのお客様で、北海道の牧場を案内しなければならぬという。「どうしてこの時期なんだ」と卓巳はスケジュール調整に苦心しつつ、宗の一言で予定日ちよつどにしたのだ。しかし、子どもに裏を掻かれたらしい。

「万里子……もし僕の居ない間に何かあったら……僕は」
「行って下さい、卓巳さん。この子のことはわたしに任せて。わたしを信じて、卓巳さん」

卓巳は万里子をジツと見つめて、両頬に手を添えるとそのままキスした。

「愛している。君を信じている。聞こえるかい、僕のお姫様、良い子にして、パパが帰るまで待ってるんだ。ママを困らせるんじゃないよ」

そう言うと万里子のお腹にも口づけた。

卓巳は後ろ髪にタイヤを付けられ、それを引き摺るように病室を後にしたのだった。

ドクターや看護師、付き添いに来ている忍や雪音も顔を見合わせ、て半分以上笑っている。

「うーん、王子様だと写真付きでお知らせしたんだが……。まだ、ご納得頂けないらしい」

そんなドクターの言葉に、万里子は笑顔で答えた。

「すみません。でも、今日までですから……それに、本当は王子様を楽しみにしているんですよ」

お産は時間が掛かるはずであった。

だが、思い立ったら即行動の父親に似たのかも知れない。午前十時を過ぎに始まった本格的な陣痛は急スピードで進み、子宮口も見る間に開いてくる。

その頃、卓巳はちょうど北海道に着いた所だと言われ……。

王子様はパパの言葉に従い、ママを困らせなかった。分娩室に入った三十分後、正午ちょうどに産声を上げたのである。

くわくわくわくわく

取引相手のロード氏は大家族の家長で、古き良きアメリカを代表する南部の男だ。妻の出産を伝えるとすぐさま契約書にサインをして、「Congratulations!」と卓巳に持たせ、解放してくれた。

出産から二時間が過ぎ、卓巳はようやく我が子と対面したのである。

三四七グラム、丸々とした男の子は何の問題も見当たらず、健康そのものだという。そして万里子も……。

「陣痛の間隔とか、治まっている間に食事をしたほうがいいのか、色々勉強したのよ。でも、全部必要なかったわ」

ペロツと舌を出し、顔をくしゃくしゃにして笑った。

そして、二人の顔を見た瞬間、卓巳の中で堰き止めていた何かを外れた。

たくさんの思いが一気に溢れ出し、洪水のように卓巳を襲う。彼にとって血の繋がりは金の繋がりがかった。血縁とは、破格の財産を相続することだけを意味していたのだ。人工的な手段で子どもを持つことは可能だ、と言われた時、人生の虚しさに心は一層凍りついた。

万里子に出逢わなければ……。

おそらく、臯月に何を言われても妻は迎えなかっただろう。

“愛”はある。

この世に生まれ出て僅か数時間、この無力な赤ん坊でなかった人間など一人もない。卓巳が生きているというそれだけで、きつと注がれた愛はあるはずだ。

私は幸せな家庭も、愛し合う夫婦も知らない。こんな私の傍にいて、彼女は幸せになれるのだろうか？

愛する妻と息子の姿は、卓巳の命の中に眠る“愛を所在”^{あじか}を教えてください。

その想いを万里子に伝えたい。なのに、声にならないのだ。

卓巳はベッドサイドに跪くなり、言葉もなく泣き始める。そんな夫の首に腕を回し、万里子は強く抱きついた。万里子の頬にも涙が伝う。

言葉は要らない。愛しさと喜びに包まれ、この日……愛し合う二人は“夫婦”から“家族”となった。

く*く*く*く*

観覧車が最上部に達した時、卓巳は窓から都心を一望していた。港区にある自社ビルもよく見える。今、卓巳の居る高さより軽く倍はあるのだから当然だろう。だが子どもたちには、パパの会社より羽田空港を飛び立つ飛行機のほうが魅力的らしい。

「ほら、また飛んだ！どこまで行くのかなあ」

「きつと、ロンドンのアビーのところだよ、お兄ちゃん！」

「違うよ。外国に行くのはもっと大きいやつさ」

五歳の長男・結人が四歳の次男・大樹に自慢げに教える。去年の夏に家族で行った英国旅行の印象が強いらしい。彼らにとつて飛行機のほとんどがロンドン行きのようなのだ。そして二人とも、一緒にウエルズを回ったジエイクとソフィの娘・アビーが大好きらしい。結人より二カ月遅く生まれた金髪巻き毛の美少女だ。卓巳が洗礼式にも立会い『アビゲイル』（父の喜び）と名付けた。そのアビーのおかげで、息子二人は熱心に英会話を勉強し始めたくらいである。

「パパ！ 夏休みにまた行ける？」

大樹が瞳をキラキラさせ振り返った。

卓巳によく似た長男に比べ、次男の大樹は万里子にそっくりだ。

特に今は襟首に掛かるくらい髪が伸びている。そのため、ズボンを着ているにも関わらず、女の子に間違われるほど可愛い。

「今年は無理だろうな。七月に家族が増えるんだ。ママたちを置いては行けないだろう？」

そんな卓巳の返事に、結人が付け足した。

「来年は行けるよ。光希だつて一歳のときに行けたんだから。そうだよ、お父さん！」

結人は卓巳が抱き上げる三男・光希を見て言った。今年の六月に二歳になる、今のところ末っ子だ。

曾孫の効果であろうか、皐月は当初の医者宣告よりかなり寿命を延ばした。そして二年前の春、三人目の誕生を楽しみしながら天に召されたのだった。

「ああ、来年は六人で行こう。それまでに英語は完璧にしておくんだ。アビーと話せるように、判ったね」

「はい！」「うん！」

手を上げて答える兄たちに倣って、「あーい」と両手を上げ答え

る光希だった。

くわくわくわくわく

藤原邸の桜が花を咲かせるようになったのは植樹から三年目のこと。

六度目の春を迎え、ようやくその下でお花見を楽しめるくらいの花つきとなった。

「じゃあ来年もイギリスに行きたいって？ まあ、よっぽど気に入ったのね。それともお気に入りはアビーのほうかしら？」

観覧車での話を聞き、万里子は複雑そうに微笑んだ。

ジェイクたちは、「社長のペースには付いて行けません」と去年は笑っていたが……。この秋、二人目が産まれると連絡があった。

卓巳は万里子の頬に唇を寄せ、軽くキスしながら囁く。

「来年こそは、僕たちの娘をジェイクに紹介出来そうだな」

「そうね、わたしたちの四番目の息子を」

そんな言葉と共に万里子一枚の写真を差し出した。胎児のエコー写真である。そこに映っていたモノは……。

「ああ、なるほど。これは確かに、僕の息子に相応しい立派なものだな」

「……喜んでくれる？」

「そうだな 結人、大樹、光希！ お前たちに弟が増えるぞ！」

桜の下で駆け回る息子たちに、卓巳は大きな声で叫んだ。すると、

父親に負けなくらいの歓声が子どもたちからも上がる。
その瞬間、卓巳は万里子を横抱きにして立ち上がった。

「きゃっ！ もう、卓巳さんたら」

まだ枝の低い桜を避けて、卓巳は芝生に向かって駆けて行く。子どもたちも一緒になって両親を追いかけた。

春も夏も秋も冬も、幾つもの季節と共に愛を重ね。
出会いも別れも喜びも悲しみも、手を伸ばすとそこにお互いが居た。

息子たちに、そして、いつか生まれる娘に、与え得る限りの愛を注ぎ込もう。それは二人の命を懸けた願いなのだ。

卓巳は腕の中の万里子に伝える。

「ありがとう……これからも、よろしく」

満開の桜と共に万里子は微笑みを返した。

愛は今、ここにある。

〈 f i n 〉

最終章 命 (16) 未来(後書き)

御堂です。

半年間お付き合いただきまして、本当にありがとうございます。

何度も読み直してしまい、更新が遅れて本当に申し訳ありません m

(m)

たくさん言葉に励まされ、毎日の連載を続けて参りました。

拙作、そして登場人物に、心の籠もったメッセージを頂き、皆様には感謝の言葉しかありません。

ちなみに、宗と太一郎を出さなかったのは、番外編があるためです

(^ ^ ;)

彼らは作品を盛り上げてくれたので、独立して未来を描いてあげたいと思います。

(でもとりあえず、完結作品にチェックを入れます)

さて、卓巳の願いは何人頑張れば叶うのでしょうか？(笑)

でも、それすらも幸福であると、二人は気づいていると思います。

最後に、

数ある作品の中から、本作を選んでご覧頂きまして、本当にありがとうございました。

心より、お礼申し上げます(平伏)

2010/04/13 御堂志生

番外編「未来 2」(前書き)

本編最終話の続き、宗と雪音が加わった未来です。

番外編「未来 2」

「あ、和ちゃんだ」

「藤ちゃんもいるよ！」

結人と大樹の兄弟は、車道を挟んだ遊歩道を見つめて声を上げた。エンジ色のスモックを着た二人の少女が、息を切らせながら並木の間を駆け抜けて来る。遠目には見分けの付かない二人だ。手を繋ぎ、お揃いの黄色い帽子をかぶり、靴下とシューズは女の子向けの人気アニメキャラクターが付いていた。

「ユウくん、ヒロくん、待ったあ〜」

「えつとお……こんにちは！ あの……パパとママもすぐに来ます」
「きゃあきゃあ騒いですぐに結人らと追いかけてこを始めたのは、姉の和音である。一方、卓巳と万里子の前に立ち、ピヨコンと頭を下げて挨拶をしたのが、妹の藤音だった。一卵性双生児であるのに、性格はまるで違う。」

「あら、幼稚園の帰りにそのまま来たの？ お着替えする時間がかかったかしら？」

万里子は跪き、藤音の幼稚園バッグを下ろしてやりながら問い掛けた。

「あのね。お迎えが遅かったの。それでね。ママが怒ってて……お着替えに帰らなかったの」

藤音が懸命に説明してくれるが、やはり幼稚園の年中さん。今ひとつ要領を得ない。そここうしているうちに、遊歩道の方から二人の人影が見えた。正確には三人であるのだが……。

双子の姉妹の父親は宗行臣、以前と変わらず卓巳の個人秘書を務めている。

今から六年前、結人が生まれる直前に、彼はトラブルに巻き込まれた。正しくは、宗に片想いする女性二人が事件を起こし、彼は被害者に過ぎなかったのだが……。

余程、日頃の行いが悪かったのだろう。誰も彼に同情を寄せることはなく。事件と共に宗の名前が取り沙汰されるのを避けるため、卓巳は二年間、彼を個人秘書から外さざるを得なかったのである。

「お待ちせ致しました、社長。奥様も、本日はお招き頂きありがとうございます。」

宗は抱えていた末娘・絢音あやねを芝生の上を下ろしつつ、卓巳に頭を下げる。卓巳の三男・光希みつぎと同じ歳で、二人は兄や姉たちのようには自在には動けないが、仲良く遊び始めた。

かつてのプレイボーイは、今は可愛い娘たちに囲まれてご機嫌である。そのせいだろうか？ 卓巳より四歳も年上であるのに、宗は今でも三十代半ばにしか見えない。

「どうしたの？ 藤音ちゃんがママが怒ってるって言っていたわ。また喧嘩？」

万里子の問い掛けに、

「いや、喧嘩という訳じゃ……」

「聞いてください、万里子様！」

夫の言葉を遮って万里子の前に飛び出してきたのが、宗の妻、雪音だ。

藤原邸のメイドをしていたのは五年前まで。お互いの親に挨拶を済ませ、宗が東京に戻り次第、結婚することが決まった。その直後

宗の詰めめ甘さゆえか、二人の天使が乱入したのである。

「宗さんが浮気……とか？」

「してませんっ！ 奥様、勘弁して下さい」

瞬時に卓巳の視線が険しくなるので宗も必死だ。

「あれほど言ったんです！ それなのに……」

「な、なにがあつたの？」

「外出しは避妊にならないって！ これで三回目ですよ！ 今度こそ計画的に……って言ったのに」

一瞬の沈黙の後、頭を抱える宗とは対照的に、卓巳は大笑いしている。

万里子は少し赤面しつつ、「お、おめでたいことじゃない、ね？」
そう言つて雪音にお祝いを言うが……。

「絢音を保育所に預けて仕事に復帰しようと思つてたんですよ。二年前もそうだったのに」

「でも、子供は可愛いでしょう？ それとも、本当に欲しくなかつた？」

「いえ、そういうわけじゃ。ただ、万里子様のお役に立ちたいのと同じように子供を作つてばかりで。申し訳なくて」

「いやだ、雪音さん。わたしはとっても助かつてるのよ……ほら」
万里子の視線の先には、幼稚園さながらに駆け回る子供たちがいた。

明日は、卓巳の祖母・皐月の三回忌である。

皐月は生前、内外に産まれる曾孫をとて喜んでいた。宗と雪音の子供たちが訪れるのも、皐月にとっては楽しみの一つだったのだ。
皐月の夫・高德が作り上げたこの邸は、いつも淫靡な匂いが漂い、

誰もが腐臭に侵されていた。真実の愛などともに育める環境ではなく……。それを、卓巳と万里子の強い愛情で一掃したのである。その証とも言えるのが、曇りも穢れもない子供たちの笑い声だった。亡くなる直前、いよいよ皐月は一日床に就くことが多くなる。万里子は氣遣いから、皐月の部屋近くに子供を行かせないようにしたが、皐月はそれを寂しがり……。万里子も子供たちの自由にさせたのである。

そして、二人の曾孫に贈られた桜の絵を抱き締めながら、皐月は眠るように天に召されたのだった。

万里子は皐月の命日には、出来る限りたくさんの子供を招くことにしている。皐月が寂しくないように、邸中に甲高い笑い声が響くように……。時に泣き声加わるのはご愛嬌である。

絢音にズボンの裾を踏まれ、転んで泣き始めた光希を抱き起こしながら、万里子は優しく微笑んだ。

「宗、私に合わせる必要はないんだぞ」

「いえ……。予定外です」

「まあ、いいじゃないか。四人姉妹も可愛いもんだ」

「そんな恐ろしいことを言わないで下さい。いい加減、私も味方が欲しいですよ」

宗の場合、家中がピンクやハートに埋め尽くされているのだという。彼は真剣に男の子を希望していた。

「無理だな。四人続くのが運命だ」

「ひよつとして、また男の子だったんですか？」

「……」

懸命を笑いを堪える宗を横目で見つ、卓巳は話を逸らした。

「東部日本グループの台頭が著しいな。アメリカの市場を食われんようにしろ」

「美馬は常務もそうですが……副社長も中々厄介ですよ」

「知ってる。常務のほうは同じブロックに引越してきた。上二人が同級で……嫁さんたちは子供会で仲良くやってるらしい」

かつては藤原に匹敵する勢力を誇った美馬グループだが、四年前にインサイダー取引で会長が逮捕され、グループは崩壊した。今は一族経営とは言い難いが、主力の貿易部門を東部日本グループとして立て直しつつある。

「早めに叩きますか？」

「攻める必要はない。ただ、足許は掬われるな」

今更、十五年も昔の因縁を持ち出すほど子供^{ガキ}ではない。PTAで顔を合わせた時には余裕を見せてニッコリ笑ってやる。第一、会社の規模も子供の数も卓巳の“勝ち”だ。

万里子が聞いたなら怒りそうなことを考えつつ……。

「美馬常務にお会いになられたんですか？」

「いや」

「秘書の瀬崎さんには？」

「会ってはいませんが……どうしたんだ」

「いえ、驚きますよ。瀬崎氏の奥様に会われたら……」

思わせぶりな宗の言葉に首を捻る卓巳であった。

くわくわくわくわく

七月、卓巳と万里子の四男・立志たつしが生まれ

十二月、宗は待望の味方を手に入れることに成功した。この時はさすがの卓巳もグツと我慢したが、問題は翌春である。結人の入学式で、十六年ぶりに会った旧友の腕に抱かれていたのは……。

卓巳が不屈の闘志を燃やし、“愛し合うあまりつい夢中になって”万里子を困らせた。

愛は月日を経ることにより深く強くなり、五人目の王子様へと結びつくのだが……卓巳が更なる幸福に包まれたのは、言うまでもない。

番外編「未来 2」(後書き)

御堂です。ご覧いただき、ありがとうございます。
久しぶりの番外編更新です(笑)

宗&雪音でお送りしました「背徳の秘書」が終了しましたので、この二人も未来に加わって貰いました。

R18なのでリンクは控えさせていただきますがサイトでご覧頂けますので、未読の方はお待ちしております。

(でも…宗に罵倒の嵐でしたので、覚悟してご覧下さいorz)

次はいよいよ太一郎くんの出番です。

7月に開始…予定ということ(^ ^)() (ちょっと弱気)

皆様のお越しをお待ちしておりますm () () m

番外編「露天風呂で愛を教えて（前編）」（前書き）

先日はアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました。

感謝を込めまして、番外編の第一弾 卓巳&万里子の温泉旅行編
です！

番外編「露天風呂で愛を教えて（前編）」

（まったく！　なんでこんな重要な所でミスをするんだ！）

卓巳は社長室のデスクをコンコン指で叩きながら、目の前に立つ男を眺めていた。

首を折れるほど下げ、スーツの背中を丸めて身を縮こませている。ちよつど半年目を迎える秘書・熊谷一平くまがやいっぺいであった。年齢は三十歳、卓巳より一つ下で独身だ。

実直だが、秘書としては気弱そうな見た目がマイナスポイントか言われたことだけを滞りなく行つ、という宗と似た面もあった。ただ、宗の場合は遊び心が満載だが、熊谷の場合は気が回らないだけに思える。

「私は全て貸切にしろ、と言つたはずだが」

「は、はあ……。でも、露天風呂の貸切はしておらず、温水プールの貸切なら可能と言われましたので……」

「誰が風呂を貸切にしろと言つた。全館だ！」

「しかし、すでに予約の客が」

「それを考えるのは旅館の役目だ。お前のすべきことは、その手配を含めた金額を旅館に提示させることなんだ！」

卓巳の叱責に熊谷はおどおどした様子で口を開いた。

「あの……どうやって？」

卓巳は怒鳴りつけようと思つて止めた。時間の無駄だ。どのみち、明日の予定で今からの変更は不可能だろう。こんなことなら、まだ中澤朝美に任せたほうがよかつたか……。彼女が仕事に目覚めるか、無難に結婚して職務に専念してくれれば言うことはないのだが。

会社の人間ではなく、やはり個人秘書を雇うべきかも知れない。

この熊谷では、宗が戻るまで卓巳の神経が持ちそうにない。

そんなことを考えつつ、

「もういい。私は二日間休みだ。君もしっかり休んで、せめて一を聞いたら五か六くらいは判るようになってくれ。それ以下なら……君はかなり長い休みを取るようになる」

なるべくソフトな口調で嫌味を言う。

だが、えんせきよく婉曲過ぎて伝わらなかつたらしい。

「いえっ、とんでもありませんっ！ 二日間もお休みをいただければ充分です！」

熊谷はお許しが出たと思ったのか、ホツとした表情で卓巳に向かって笑ったのである。

……卓巳が挫けそうになったのは言うまでもない。

くくくくくくくくく

箱根の小田原 都内から二時間も掛からない。

そして、露天風呂から桜が見えるという旅館の話聞いた卓巳は、ある計画を立てた。

ちょうど四月に、万里子は二十四歳の誕生日を迎える。

十一月の結婚記念日は出産直後ということもあり、何かと落ち着かなかつた。正月も遠出は出来ず……。そんな中、三月に雪音が邸を離れてしまったのだ。めでたい話なので文句も言えないが、万里子も寂しくないと言えは嘘だろう。

そんな万里子の心を少しでも和ませたかった。

卓巳は急遽宿を取り、一泊旅行に誘ったのである。

『じゃあ、忍。結人^{ゆづ}くんのことお願いね。千代子さんとも仲良くしてね。何かあったらすぐに電話ちょうだいね』

旅館に到着し、部屋に案内されて一番に万里子がしたことは家に電話を入れたことだった。

携帯で散々連絡しているだろう　なんて野暮なことは、この頃の卓巳は言わない。万里子は、生後半年の息子が可愛くて仕方がないのだ。生涯母親にはなれないと諦めていた彼女にとって、至福の存在なのだろう。

この箱根には赤ん坊連れに最適な旅館もあった。だが、卓巳はこちらを選んだ。それは……七割方奪われている万里子の視線を、独占する為の可愛いヤキモチである。

「ベビーシッターでも良かったんじゃないか？　忍さんと呼んだらお義父さんが困るだろう」

「大丈夫よ。一日だけですもの。千代子さんはお祖母様のお世話で大変だし……。若いメイドさんは新しい方ばかりで。臨時雇いのベビーシッターさんをお願いするのは嫌だから」

万里子の口から出たのはほんの小さな不満だ。それでも、卓巳は不安に駆られる。

「勝手に旅行を決めたこと……怒ってるのかい？」

「いいえ。どうして？」

「久しぶりに夫婦で、と思ったんだが……。やっぱり結人と一緒にのほうが良かったのかな？」

万里子を前にすると、卓巳は？借りてきた猫？になってしまふ。

その時、万里子がスツと立ち上がった。電話の前から彼の後方に

回る。どうしたのだろうか、と思った瞬間、万里子の腕がふわつと卓巳の首に巻かれた。万里子は負ぶさるように、卓巳に抱きついたので。柔らかい髪が卓巳の顔に掛かり……。

卓巳は一瞬で、ベビーパウダーとシャンプーの香りに包まれた。

「ま、万里子？」

「卓巳さんたら……。わたしだって、二人きりになりたい時だってあります。結くんが可愛い一番の理由は、大好きな卓巳さんの子供だから……。わたしにとって世界で一番大事なのは、卓巳さんだもの」

耳のすぐ後ろに万里子の熱い吐息が掛かる。

外はまだ明るい。カーテンを閉めても、電灯が要らないほどの明るさだ。だが、二人きりの時間は限られている。やはりこのチャンスは何が何でもモノにすべきだろう。

卓巳は万里子の手に自分の手を重ね……。

「……万里子……」

本館の離れに作られた特別室だ。

十畳と四畳半の和室に三畳程度の茶室、バルコニーのような月見台、専用の中庭まである。もちろん、檜の内風呂つきであった。

春の風に白いレースのカーテンがそよいだ。

残念なことは、中庭には桜の木がないことだろうか。だが、月見台越しに見える新芽の柔らかい緑は、まるで一枚の絵のように美しい。

「万里子、愛してるよ」

振り向いた卓巳の肩越しに、二人の唇が微かに触れた。特別室が、甘い空気で満たされようとしたその時。

「失礼致します。女将でございます。藤原様にご挨拶に参りました」
玄関口から聞こえる声に、床を叩きたくなる卓巳であった。

くわくわくわくわく

「じゃあ、結局、温水プールを貸切にしたんですか？」
「ああ、エステのコースもあるらしいが……どうする？」

卓巳の問いかけに万里子は笑って首を振った。
全身のエステは肌を見せないとダメなので、万里子は苦手らしい。
フェイスエステは付き合いで何度か行ったというが……。

（これ以上、美しくなる必要はない。いや……美しくなりようがない、か）

結人を産んでから万里子は更に美しくなった。母性を湛えて、内面から輝きが溢れ出している。だが、最大の理由は『夫に愛されている』という自信であろう。

「でも……温泉と聞いていたので水着は」
「大丈夫だ！ それは私に任せてくれ！」
「卓巳さん？」
「君に喜んでもらえるような、ピッタリの水着を用意したんだ！」

新婚当時のことが頭に浮かんだのか、万里子の頬は少し引き攣っ

ている。

「プールサイドで押し倒すのはダメですよ！ それに……キスもなしです」

おそらく……監視カメラの存在を心配したのだろう。

卓巳はそれを察すると、胸を張って万里子に答えたのだった。

「心配はいらないよ、万里子。プール内の監視カメラは全て停止させたからね」

「たっ、卓巳さん、そんなこと止めて下さいっ！ 何かしますって言ってるようなもんじゃないですかっ!？」

万里子の指摘に卓巳はハッとする。

「もうっ！ 卓巳さんのバカッ！」

「ま、まってくれ、万里子。カメラは動かすように言ってくる。本当に泳ぐだけにするから……ね、万里子」

背中を向けた万里子を、必死で追いかける卓巳であった。

【後編に続く!】

番外編「露天風呂で愛を教えて（前編）」（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

さあ、問題です（笑）

卓巳が用意した水着はなんでしょう？

（1）「プールサイド」の夢をもう一度！モノトーンフリルビキニ！
二！

（2）やっぱりこれも見てみたい！ピンクのフリル紐ビキニ！

（3）いやいや、もっとステッパアップ！豹柄のセクシービキニ！

（4）永遠の乙女は男のアコガレ？スクール水着！？

（5）今度こそ愛のレッスン？カメラはオフで何もなし！

答えは明日（明後日かも）の後編で（^^）ノ

引き続き、よろしくお願い致します！

番外編「露天風呂で愛を教えて（後編）」

（本当に……卓巳さんはわたしにコレを着ろって言うのかしら？）

万里子は卓巳から渡された包みを開け、呆然と眺めていた。

カメラの件はともかく、少し泳いでみたいな、というのが万里子の本音だ。去年は一度も泳ぎに行けなかった。マタニティスイミングの教室もあつたのだが……それだと多くの人間に肌を見せることになる。それに、生徒は全員女性とは言え、コーチや関係者には男性もいるだろう。

かなり良くなったとはいえ、ライカーの仕打ちに万里子の症状は悪化した時期もあつた。

卓巳に言えば、きっと教室そのものを貸切にしてくれるはずだ。だが、マンツーマンで指導を受けるようなものでもない。

しばらく悩んだが……。

やがて諦めたように、万里子は袋に入った水着を取り出し、身に着けた。

「卓巳さん……あの、わたし……こんなのは初めてで」

卓巳の好きなビキニスタイルだ。問題は……なんと豹柄の紐ビキニなのである。下半身はわずかな部分を隠すだけの布地しかなく、両サイドを紐で結ぶ。

トップスは三角の布が二つあるだけで……首の後ろと背中では結んだ紐が、何かの拍子に解けないかと心配でならない。

それに、子供を産んで半年。服のサイズは元に戻ったが、体型まで元通りかどうか……自信がない。

「卓巳さんは、フリルがお好きだったんじゃないですか？」
「……………」

卓巳はきらきらした瞳で万里子を見つめている。

「卓巳さん？」

「あ、ああ……もちろん、嫌いじゃない。でも、実はネットで見つけて……どうしてもやってみたくなっただんだ！」

そう言った直後、卓巳は羽織ったパーカーを脱いだ。

すると……なんと見事な豹柄のビキニパンツが！

「た、た、たくみ、さん？ あ、それ……って」

「そうだよ、万里子。お揃いなんだ！ 凄いだろう？ 『ワイルドでセクシー』なんて謳い文句でね。ほんの二年前まで、私の辞書にはないものだった。自信もなかったし……。でも、今はそうでもない。もちろん、君限定だけどね」

万里子は、ようやく思い出した。

そういえば、卓巳はペアルック大好き人間であった。携帯も時計も傘もお揃いである。そしてつい先日、万里子が結人の離乳食用にウエッジウッドから出ているピーターラビットの『洗礼シリーズ』クリスマスソングを購入した。万里子愛用の『ティータイムシリーズ』とお揃いだと言っていたら、なんと卓巳もピーターラビットを買って来たのである。

今では三人とも、食卓には仲良くウサギ柄が並んでいた。

卓巳は嬉しそうに笑っているが、万里子は目のやり場に困る。

豹柄のメンズビキニは、おそらく布地の面積は万里子が穿いている

るとそう変わらない。見事な盛り上がり、万里子は色々なことを想像してしまい……頬が火照ってしまふ。

「あ、約束通り、ちゃんとカメラは動かして貰ったから。もちろん、安全の為と言っておいた。君は何も心配しなくていい」

その言葉通り、卓巳はそそくさとプールに入り泳ぎ始める。万里子もそれに倣うが、この水着はあまり泳ぐには適さないようだ。肌にピッタリと張り付き、ちょっとでも激しく動かすと、あらゆる部分が見出でしまいそうになる。

「きゃ……ん」

サイズアップした胸元がビキニから零れ落ちそうになり、万里子は慌てて直した。卓巳はその姿がカメラに映らないよう、すぐに万里子の前に立つ。

だが、お互いの水着のせいかも知れない。妙に色っぽい万里子に、別の部分が勃起始め……。

「万里子……愛してるよ」

そのまま万里子を抱き寄せた。彼女は懸命に卓巳の胸を押して、「ダメですって……カメラが」

「じゃあ、すぐに部屋に戻ろう！」

卓巳はそのままプールから上がろうとしたのだ。

しかし、

「た、たくみさん……横から……出てます」

「え？」

元気になった時の？卓巳？が、小さな布地でカバーできるはずがなかった。

「ど、どうしよう……万里子」

「んもうつ、知らない！ 小さくなるまで、そこに居なさいっ！」
怒りながらも卓巳の前に立ち、更衣室まで一緒に付いて行く万里子であった。

くくくくくくくく

「万里子を抱けるようになったんだ。文句は言いたくないけどな……頼むから、中学生みたいに反応するのは止めてくれ。せめて、歳相応に……。いや、まあ、ダメよりマシか」

相棒の機嫌を損ねて、肝心の夜に沈黙されては洒落にならない。卓巳は独り、桜の見える露天風呂に浸かり、そんなことを呟いていた。

「判った。悪かった。息を吹き返してくれただけでも感謝してる。おかげで息子が持てたんだし……。次は頑張つて娘を頼むぞ」

ひらひら舞う桜の花びらが数枚、湯船に浮かんでいる。淡く色づいた桜は、卓巳を見つめる万里子の頬の色と同じだ。傾き始めた陽射しを受けて、桜の木に金の粉が降り注いでいた。

「……全部貸切にして、万里子と一緒に見たかったな」
ポツリと卓巳がこぼした時だった。

「ええ、本当に。とっても綺麗ですね」

背後で万里子が答えたのである。

「どうしたんだ？ 今は男湯の時間だろう！？」

万里子はバスタオルで前を隠している。水着を着ているにしても、あのビキニだ。ここにもし男たちが入ってきたら、卓巳は万里子を抱えて飛び出すことになるだろう。

だが、卓巳の問いに万里子はクスツと笑った。

「いやだ、卓巳さん。わたしが男湯に入ってくると思いますか？」

「い、いや……」

「女将さんをお願いして、三十分だけ清掃中ということ貸切にして頂いたんです。その代わり、年末の使用人の慰安旅行はここにしておいて下さいね」

万里子は茶目つ気たつぷりに、可愛く舌を出して笑顔を見せた。

(熊谷よりよっぽど機転が利くじゃないか！)

卓巳は思わず、万里子を秘書にしようかと思ったくらいだ。

しかし、その三秒後、卓巳の意識は真っ白になる。

万里子がバスタオルを外すと　なんと、全裸だ！

桜に負けないほど艶やかで華があり、そして素晴らしい曲線をしている。当然、幾度となく目にした裸体だが、今日はいつも以上に息を飲むほど神々しい。

初めての露天風呂……そこに万里子が立っているというだけで、卓巳の頬が緩んでくる。

万里子が湯船に入り、卓巳の隣に座ったとき、少し強い風が吹いた。

二人に頭上に桜吹雪が舞い散り……。まるで幸福を祈るフラワーシャワーのようであった。

「万里子……さっきのこと、許してくれるかな？」

「さつき？」

「確かに無節操だが、本当に君だけなんだ。だから」

「許すも何も、本気で怒ったりしてませんから。ただ、卓巳さんに厭きられないか不安で。結人を産む前と比べられたら」

「何を馬鹿なっ！ 私には君しかないんだ。よく知ってるじゃないか」

「それは以前の話でしょう？ 今は……あんなに立派に……」

万里子の視線を受け、卓巳の股間に再び熱いものが滾り始めた。

「これは、君がいるからだ。万里子、君の視線が私に魔法を掛けるんだ」

万里子の細い肩を抱き寄せ、髪から額、瞼、頬とキスでなぞる。

そして唇に辿り着いた時、万里子の口元が薄っすらと開き、卓巳を誘った。

もう片方の手が、万里子の胸の丸みを撫で擦る。すると、万里子は卓巳に体を預け……。その手が彼の胸に触れた瞬間、トクンと高鳴った。

湯の中で入れてしまっただろうか？

それとも立ち上がってバツクから？

初めての経験に舞い上がる卓巳に、万里子の喘ぎ声が聞こえたの

だ。

「卓巳さん……わたし……我慢出来ない」

「あ、ああ……私もだ。いくよ……万里子」

卓巳が万里子に腰を押し当てた瞬間。

「卓巳さんっ！？何を考えてるんですか？熱くて、逆上^{のほ}せそっつて言ってるのっ！」

万里子の息が上がり、真っ赤になっている理由が判り……

「ご、ごめん。じゃ、続きは洗い場で」

「こんなところで、なんて……卓巳さんのエッチ！変態！」

「万里子……万里子おおお」

露天風呂に卓巳の叫び声が響き渡り……。

満開の桜は幸せなふたりを見て、いつまでもクスクスと笑っていた。

〈 f i n 〉

番外編「露天風呂で愛を教えて（後編）」（後書き）

御堂です。

正解はなんと3番！

卓巳がペアルック目的のチョイスでした（爆笑）

正解者はいなかったかも…

でも、露天風呂のほうで念願の5番を叶えて貰いました！

結果はコレですけど（^^;）

ここでお終いだと可哀想なので（卓巳が）…

サイトでもうちちょっとラブラブシーンもお見せしようかな？なんて

（笑）

1〜2日以内にUP予定です。

良かったら、サイトまでお越し下さいませ（^^）／

（<http://book.geocities.jp/arlequinroman/pic/novel/aiwoosiete/index.html>）

ではでは…完結マークは入れず、番外編第二弾を書きたいと思いません。

ありがとうございましたm（――）m

藤原結人、十五歳　父は国内最大コンツェルン、藤原グループの総帥である。

彼は五人兄弟の長男として、周囲から過大な期待を背負って育った。その理由は、父親そっくりの容姿だろう。だが中身は、母親からそっくりそのまま受け継ぎ、慈愛に満ち溢れていた。しかも成長することに磨きが掛かり、末は神父か牧師……いつそ僧籍に入っても、などと言われ始めている。

藤原美月、同じく十五歳。

結人の又従妹にあたる少女だ。互いの父親が従兄弟同士である。生年月日はわずか一日違い。幼い頃の一時期、家庭の事情で一緒に暮らしたこともあったが……残念ながら、彼の記憶にはない。

一七〇センチ弱の結人とそう変わらない身長。並んで歩くと必ず「お姉さん？」と聞かれる大人びた容姿で、しかも美人……いや、美少女だ。更に、中学では入学から常にトップの成績を修め、教師からも一目を置かれた存在だった。

なのに……塾はおろか家庭教師も断わり、本人はピアノやバレエに精を出している。決して得意そうでも、好きでやってるようにも思えないのだが、絶対に止めようとしない。

加えて、天然パーマでふわふわの髪を、ストレートパーマできっちり伸ばしていた。軽く校則破りになるが、入学以来ずっとなので周囲はストレートだと思っ込んでいる。

結人にとって美月は、捉えどころのない、よく判らない少女だった。

その美月と二人きり、月光が射し込むだけの薄暗い一室にいる。

しかも今日はクリスマスイブ。後二時間ほどで日付が変わる 聖夜だ。

ぴったりと体を寄せ合い、身動きもせずにいると……結人の中に不思議な感情が込み上げてくる。

「イブに二人きりなんて……初めてだよね」

「……そうね」

「美月ちゃんは寒くない？」

「こんな時に何だけど、？ちゃん？付けは止めてくれない？」

「でも、昔からそう呼んでるし……父さんも母さんも」

「親はいいのよ。でも、この歳で同級生の男の子に？ちゃん？なんて……寒気がするわ」

「風邪かな？ やっぱりここは寒いよね？ 毛布とか貰えないかな？ 聞いてみようか？」

結人がそう言った時、背中合わせに縛られている美月が肩越しに振り返り……

「どこの世界に、人質に毛布を寄越す誘拐犯がいるの！？ ちよつとは危機感つてもものを持ちなさいよっ！」

押し殺した、それでいて怒気を含んだ声に「ご、ごめん」と謝る結人であった。

くわくわくわくわく

コトの起こりは今日の午後。

いつもなら一学年下の結人の弟・大樹^{ひろき}も登下校は一緒だ。しかし

この日は三年生だけ残ることになり、大樹は先に帰ってしまった。
二人は大樹を送って帰った車が戻って来るのを待っていたが……。
そこに、藤原家から緊急連絡が入る。

それにより、自力で帰る必要の出来た結人は電車を選ぶ。だが、
それがそもその間違いだった。焦った結人は美月が止めるのも聞
かず、駆け込み乗車してしまい……。二人は家から遠のいてしまっ
たのである。

次の駅で電車を下り、タクシーを選択した二人の前に一台の個人
タクシーが停まった。それに乗った結果……。二人は更に、家から離
れることになる。

そこは、都心から少し離れた場所だった。閉鎖した工場で、屋根
は所々穴が開いている。機械もすでになく、全体的にガランとして
肌寒い。二人は工場の二階にある事務所らしきスペースに閉じ込め
られた。

だが、逃げるチャンスは何度もあった。何と言っても犯人は、六
〜七十代の老人独りだ。

「黙ってついて来ないなら、ナイフを持って幼稚園に押し入り園児
たちを殺すぞ！」

と訳の判らない脅し文句を言う。

美月は、「勝手にやらせれば」と言うが、結人にはとてもそんな
ことは言えない。

それに、

「工場が潰れて、何もかも失った。全て藤原のせいだ。傘下に入る
なら悪いようにはしない、と言いなから……。うちの製造技術を盗
みたかっただけなんだ！ 技術社員と会社の特許を奪って、工場の
連中を切り捨てた。お前たちの父親は鬼だ！」

と、誘拐犯の老人は泣くように叫んだのである。

「だから何？ 藤原がどれほどあくどい商売をしているの知らないけど……。パパとは何の関係もないわ。どうして私が誘拐されなきゃいけないの？」

「それは、ゴメン。でも、美月ちゃんだって子供が殺されたりしたら嫌だろう？」

「あの老人に幼稚園児が殺せるとは思えないわ。それに、？ちゃん？は止めて」

「まあまあ……。もし、藤原が悪事に関わっているなら、他人事じゃないよ。クリスマスなんだし、のんびり行こうよ」

「ちよつとも早く家に帰りたいって言ったのは誰っ！？ こんなトコでのんびりしてて良い訳ないでしょ！」

「す、すみません」

再び謝る結人であった。

く*く*く*く*

「お前たちの父親はどうなってるんだ！？ それどころじゃない、と電話を切りおつたぞ！」

誘拐犯の老人が激怒した様子で事務所に入ってくる。

(まあ、そうだろうな)

結人はそんな感想を抱いたが、口にはしなかった。

「あの……。三浦さん、僕はいいけど、彼女のロープを解いてあげてくれませんか？ それと……。毛布を一枚彼女に」

老人は結人の言葉に怪訝そうな顔をする。

「彼女？ あんたたちは姉弟じゃないのか？」

「違います。話せば長いことながら……」

「赤の他人よ」

美月は横からスパツと言う。

「それは言い過ぎだろ？ 六親等までの血族は親戚になるんだし」

結人が法律を持ち出すと、

「ギリギリ親戚になる程度の遠い関係よ。 誘拐犯のおじいさん、

うちのパパは藤原の百分の一程度の会社に雇われてるだけのサラリ

ーマンだし、あの無駄に大きいお邸を相続する権利も持ってないの。

私を誘拐しても無意味だと思っわ」

「……………」

美月の理路整然とした台詞に、老人だけでなく結人まで声を失う。

「あ、でも、母方の資産は？ 全部受け継いだら結構な額になるん

じゃ……………」

結人に悪気はない。ただ、思いついたままを口にただけだ。

しかし、美月は呆れた様子で、「それは私のほうが金になるって

言いたいわけ？」と睨みつけた。

その直後、老人は急に二人の縄を解き始めたのだ。

結人は驚いて尋ねる。

「あの、僕らのこと、どうするんですか？」

老人は薄く笑うと首を左右に振った。

「子供を誘拐して、胆をつぶすような思いをさせてやろうと思ったんだが……。冷酷な経営者ともなると、我が子が誘拐されても何でもないようだ。悪かったな……。どんな親でも子供には罪はない。巻き込んで済まんかった」

老人はクルリと背中を向け、鉄製の階段を一段ずつ降りて行く。結人は鞆を掴み、急いで老人の後を追うのだった。

「あの、これからどうするんですか？」

「警察に行くよ。自首せんとならんだろう」

「父は冷酷な経営者かも知れませんが、卑怯者じゃありません。正々堂々と戦って叩きのめすのと、人を陥れて足蹴にすることは違います。僕が父に話しますから、だから三浦さんも早まったことは……」

結人の言葉に老人は、不思議そうな表情で顔を上げた。

「そう言えば……わしは名前を名乗ったかな？」

「あ、それは」

「三浦鉄工。事務所に社名入りの封筒やら請求書やらが落ちていたし、門柱に傾いた看板が下がっていたもの」

結人が答えるより早く、美月が説明した。

いつものことなのでそれ以上は言わず、結人は、

「さっきのタクシーで僕らを送って行ってくれますか？ ちょっと待って貰えたら、父も必ず話を聞いてくれると思いますので」

「それは……構わんが。君らは本当に中学生かね？」

階段を下まで降り切った時、老人はそんな質問をする。

それに結人が答えようとした時、工場内に爆音が轟いたのだった。

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

皆様からご希望の多いお話を書こうとしたら…すみません、十五年も未来になってしまいました(爆笑)

パパとママから良い所を貰った長男は、とっても優しい少年です。

あ…結人ちゃんと美月ちゃんのロマンスには発展しませんので、念のため(^^;)

後半はパパたちも出て参ります。

明日更新予定です。

では皆様、メリークリスマス(^^)ノ

工場正面のシャッターを開け、四台のバイクが入って来た。改造を施しているのは間違いなく、爆撃でも受けたような音が工場内に反響している。

「亨！ここに来ちゃいかん、と言っただろう！」

誘拐犯の老人　三浦は、男の名を呼びながらバイクに近づいた。

「いるのね。今でもこんな暴走族……だったかしら？」

美月が呆れたように言う。

「……そうだね。しかも、あのおじいさんと知り合いみたいだ」

結人は嫌な予感を覚えたのだった。

くわくわくわくわく

「ねえ、もう放って帰りましょう。携帯も取り上げられてないんだし、早く連絡を取ったほうが無難よ」

美月の言うことは正しい。

仮にも誘拐されたのだ。クリスマスイブの夜、しかも家で予定外のことが起こったこの日に、である。結人と美月が帰らないとなれば、どれほど心配しているか知れない。

しかも、美月はか弱い少女なのだ……とてもそうは見えないけど。きっと、別の心配もしているだろう。

「そう……だね。じゃ、外で連絡をしよう。父さん、怒ってるだろうな」

「おじ様より、おば様に知られた時のほうが大変よね、きっと」

その言葉に結人はゾツとした。

もし、今、母がこのことを知れば……。

「と、とにかく、早く連絡だけでもしようか」

「無駄に焦らないでね。また繰り返すのはごめんよ」

すでに三浦に対する警戒心は解いていた。あの老人は最初から結人らを傷つけるつもりはなく、藤原のオーナーを脅かすことが目的だった。それが判った以上、父が動く前にこの茶番を終わりにして、誤解を解く必要がある。

「きゃっ!」

その時、結人のすぐ後ろを歩いていたはずの美月が悲鳴を上げた。ハツとして振り返ると、バイクに乗っていた一人が美月に抱きついている!

「亨、やめんかつ!」

どうやら美月の動きを封じている男が亨というらしい。おそらく十代か二十代前半、血縁者なら老人の孫だろう。

「お前ら、あの藤原グループの子供だつて?」

亨と呼ばれた男が偉そうに質問するが……。

「あなたって馬鹿? 藤原グループは総称よ。社名ですらないわ。」

第一、私たちが子会社に見えるの?」

「み、美月ちゃん、もうちょっと友好的に話したほうが」

羽交い絞めにされながらも、口の減らない美月に結人のほうが心配になる。

「どっちでもいいんだよ! すげえ金持ちで、ジジイの工場潰した悪党なんだってな。ジジイが誘拐したってんなら、オレが後を引き

「継いでやるよ」

「亨……」

叫び声が途切れ、ガツと言う音が聞こえた。三浦老人は工場の床にうづくまる。残った三人にうちの一人が、老人の肩口を殴って動きを封じたのだ。

「三浦さんっ！」

結人は老人の名を呼び駆け寄ろうとしたが、

「動くな！ ほら坊や、いい子にしてこの女と一緒に上に戻るんだ」

男同士には殴り合いも必要だと思う。でも、女性と子供とお年寄りには絶対に手を上げるべきじゃない。

しかも、亨という男は美月の胸元を覗きこみ、「お前、中坊なのか？ 発育いいじゃん」などと言ったのだ。女性に対するその手の発言が、結人は何より嫌いだった。

結人は廃工場の床に鞆を下ろした。制服の上着を脱ぎ、ネクタイを解く。

「お前……何やってんだ？」

「彼女を放して下さい。さもないと、痛い目をみますよ」

そう言いながら結人はスタスタと美月に近づく。

男は呆気を取られつつも、嘲るような笑いを顔の端に浮かべる。

直後、ローファーの踵かかとが男の向う脛すねにヒットした。美月は自力で男の拘束から抜け出す。

「借りは作りたくないの。でも、後は任せるわ。時間を稼いでね」

男は悪態を吐きながら、美月の長い髪を掴もつと手を伸ばすが。

その手首を結人は捕らえた。肘を極めると同時に、男の体が宙に

舞う。護身用に習ってきた合気道だ。幸か不幸か実戦経験は多い。

「結人、来るわよ！」

美月の声に顔を上げると、三浦老人を囲んでいた三人がこちらに向かって来た。全員がナイフを手にしている。

なるべく美月から離れなければ。あまり好きではないが、骨をへし折る必要が出て来るかも。もし拳銃を向けられたら、出来る限り時間を稼いで……結人がそんなことを計算していた時だった。

建物全体が小刻みに震え始める。それは次第に大きくなり、地響きと轟音が聞こえ始めた。

刹那　工場の全ての窓から、落雷の如き閃光が射し込んだのである！

くくくくくくくく

結人はこれまでに四度、誘拐事件に巻き込まれた経験があった。今回で五度目となる。

当初、父は息子たち、特に標的になり易い結人には大人数のボディガードを付けた。だが、目立ち過ぎる点が問題となり、人海戦術は取り止めとなった経緯がある。

代わって取り入れたのがGPSと護身術。特にGPSは最新式の物を使い、ピンポイントで位置を割り出す。しかも、結人自身も何処に幾つ所持しているのか不明なほどであった。

護身術も戦い方だけではない。駆け引きを含めた交渉術も学んでいる。金が目的でない、今回のようなケースではそれが有効に働い

たといえよう。四人の男たちさえ現れなければ……。

男たちは馬鹿な考えを起こしたばかりに、警察用の装甲車両に囲まれ、あっという間に逮捕されていった。三浦老人も同様に逮捕されてしまったのが心残りではあるが……。

「美月！ 美月ーっ！」

入れ替わるように飛び込んで来たのが美月の父、藤原太郎だ。結人にとっては従叔父^{いとこおじ}。なぜか、結人の母の実家・千早物産の重役をしている。家族思いで娘に死ぬほど甘い父親、というのが彼の印象だ。

「パパ！」

美月の顔にパツと灯りが点った。そのまま、父親に飛びつき……。

「大丈夫か？ 怪我はないか？ 酷いことはされなかったか？」

「ええ、大丈夫よ。結人くんが守ってくれたから」

結人に対する口調とは百八十度方向転換した、見事な化けっぷりだ。

太一郎は娘を下ろすと、今度は思いっきり結人の手を握り、

「ありがとう！ さすが結人だ。おじさんは信じてたぞ！ ホントにありがとうなっ」

まさに、泣かんばかりに感激している。

「は、はあ……」

「あ、表でへりを止めて卓巳が待ってるぞ。早く行け」

「え？ へ、へり？」

「万里子さんがお前がいけないことに気付いて、自分はいいから結人を助けてくれて。とにかく、お前を連れて病院に戻らないと」

卓巳は父、万里子は母の名だ。

「はいっ！ あの、あとお願いしますっ！」

結人は外に向かって走り出した。

くくくくくくくく

「美月ちゃんに怪我はないんだな？」

「ないよ。もちろん」

「だったらいい。早く乗れ」

母には甘い父だが、息子には厳しい。というか、長男に一番厳しいと思うのは、結人の癖ちよつなんみひがだろうか。それでも、父親参観や運動会などには全部出席してくれた。長期休暇ごとの家族旅行も必ず計画してくれる。厳しくても、嫌われていると思っただことは一度もない。

母は決して人の悪口を言わない人だ。結人はそんな母が大好きだった。

その母を、大切に大切にする父を見て彼は育った。？女性を大切にすること？それは結人の中で、不変のルールとなっている。

「あの……母さんは、まだ？」

「ああ、まだ、だ」

「僕のせい？」

「心配するな、多分もうすぐ……」

その時、へりの無線に一報が入る。

『おめでとつございます、社長。二十五日の零時一分にご誕生しま

した。予定より三週間早かったですが、母子ともに問題なしだそうです」

長年父の個人秘書を務める宗の声だった。

「それは良かった。二人が無事なら言うことはない。だが、報告はそれだけか？」

『ああ、そうでした。残念ながら……男子バレーボールチームの結成は無理なようです』

「え？ 女の子？ 妹なわけ？」

父より先に結人が叫んでいた。これまで「弟か妹が出来る」と四回言われたのだ。でも今回は、「弟が増える」と、父に聞こえないように兄弟は言い合った。

『はい。結人様もご無事で何よりです。十五歳離れた妹様のご誕生ですよ』

宗に言われ、結人はくすぐったい感動を感じる。まるで、娘が産まれたと言われたような……。いや、作るような真似もしたことはないが。

そして隣の父を見上げた瞬間、結人は声を失う。

「……良かった……。万里子に娘を持たせてやれて……。本当に……良かった」

父の肩は小刻みに震えていた。ずっと、父自身が女の子を欲しがっている、と思っていた。でも、本当は……。

「父さん！」

「結人！」

感極まった二人は、ひしと抱き合い、飛び跳ねて喜びを表現しようとして……。

「へりで暴れないで下さい！」

……パイロットに叱られたのだった。これは、母や弟たちには永遠に内緒である。

後日、三浦老人は不起訴で釈放され、工場は再建に向けて動き始めたという。

妹の寝顔を見ながら、安堵の息を吐く結人であった。

f i n }

}

next generation「聖夜の奇跡（後編）」（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

苦節（？）十五年、六人目にしてお姫様を授かることが出来ました。
さぞや甘いパパでお兄ちゃんたちになることでしょう（笑）

またいつか、番外編を書いた時はよろしくお願い致します（^^）

/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1881i/>

愛を教えて

2011年5月18日07時56分発行